古代學研究所研究報告 第5輯

青森県石亀遺跡における
亀ヶ岡文化の研究

渡辺　誠・南　博史　共編

平成9年

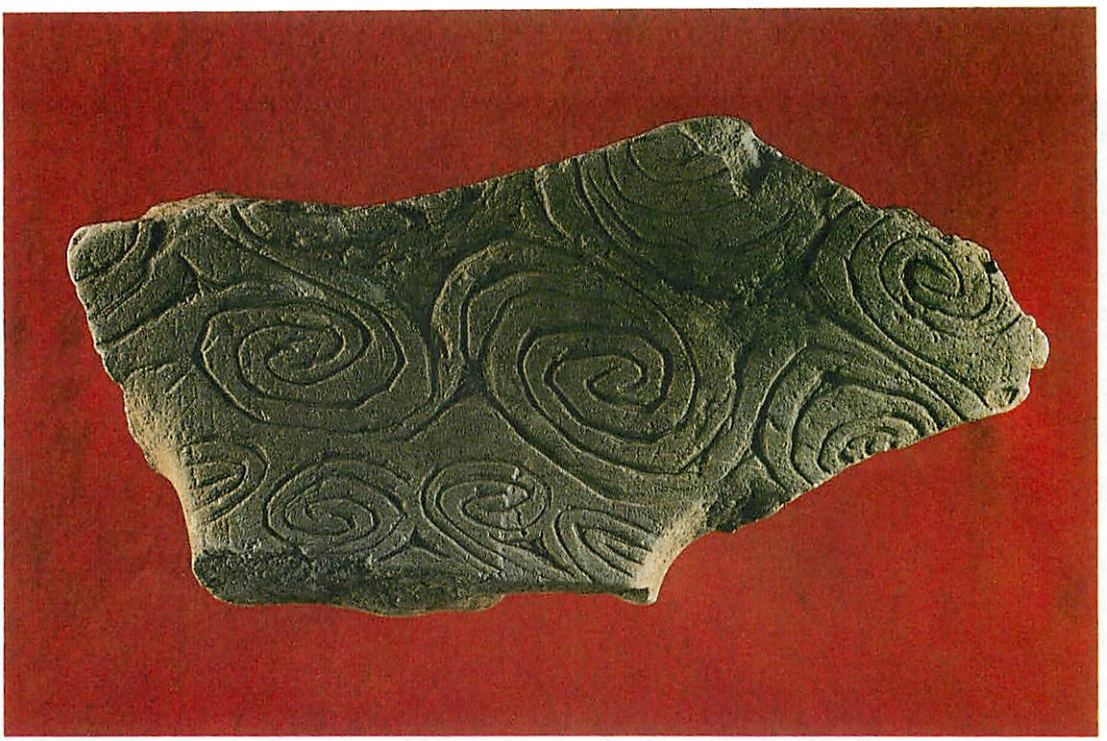
財團法人 古代學協會

発　行　(財)古代學協會・古代學研究所
〒604 京都市中京区三条高倉
TEL 075(252)3000

発行日　平成9年10月1日

編　集　名古屋大学　渡辺　誠
京都文化博物館　南　博史

印　刷　(有)平電子印刷所



大岩偶胸部正面(上)・背面(下)

上：大岩偶右脚部正面(左)・背面(右)
下：パレットに使われた石皿

序

本書は，財団法人古代学協会の経営にかかる旧平安博物館考古第二研究室が，『日本文化の源流の研究』と稿する主題のもとに遂行した研究調査の成果の一環である。本研究は，所謂『縄文農耕』の存した可能性を多面的，かつ總合に，然も広い視野に立って研究することを目的としていた。

考古学第二研究室は，右の指針に基づいて京都府下の桑飼下遺跡，大分県下の宮地前遺跡等を発掘調査し，それぞれの報告書に見る通り，相當な研究成果を擧げることが出来た。本書で報告する青森県下の石亀遺跡の発掘調査も叙上の研究課題の下に遂行されたものである。

石亀遺跡は，東日本の縄文時代(大森時代)晩期の文化を代表する極めて良好な遺跡である。考古第二研究室は，慶応義塾大学の江坂輝弥博士の慫慂もあって本遺跡を発掘調査の対象に選び，その経済的基盤はどのようであったかを究明することを眼目として昭和四十六年，四十九年に亘って三回調査を実施した。ソバの花粉を検出するなど植物栽培に貴重な資料が得られたが，望外の欣びであったのは，亀ヶ岡式に属する完形土器が夥しく出土した上に，岩偶，岩版を初めとする各種の遺物が少なからず発見されたことである。

本遺跡が亀ヶ岡文化の研究に著しく役立つことは発掘の途上において夙に分かったが，あまりにも多い出土遺物を整理している間に益々その感を深くした。従って一日も早く報告書を刊行したいと思うのは，関係者一同の切実な念願であったが，様々な理由から遅延して今日に至ったのは，慙愧に堪えぬところである。

本遺跡の発掘を担當した渡辺誠博士は，その後請われて名古屋大学文学部に轉じたが，博士は京都府京都文化博物館学芸員(もと平安博物館助手)南博史氏の協力をえて逐一尨大な出土物を整理し，遂に発掘報告書の作成を成就された。学界にとって洵に慶賀の至りであって，向後の縄文(大森)文化の研究に大きく寄与することは，強調するまでもない。また渡辺博士は，東北地方に出土する岩偶にも注意を向け，その總括的研究も遂行された。それは石亀遺跡と関係の密な遺物であるため，博士の貴重な集成的研究を本書に併載させていただくこととした。

石亀遺跡の発掘調査は，前記のように三回に亘って実施されたが，その間，財界より寄せられた経済的援助は甚大なものがあった。ここに感謝の念を籠めて芳名を録することとしたい。

㈶高梨学術奨励基金，㈶佐伯記念財団，旭硝子株式会社，株式会社大和銀行，株式会社高島屋，株式会社日本興業銀行，株式会社日立製作所，株式会社富士銀行，三菱信託銀行株式会社，三菱電機株式会社。

中でも㈶高梨学術奨励基金の前理事長，故高梨仁三郎氏は，本発掘に力強い支援を惜しまれなかったばかりでなく，第三次発掘調査に際しては親しく現場に臨み，作業を仔細に視察すると共に，調査員等を激勵された。それにつけても本報告書を生前の高梨理事長に謹呈できなかったことは，我々の衷心より遺憾とするところである。

こうしたたゆたいはあったものの，ともかく報告書を公刊できたことに當協会は安堵する一方，これが縄文文化研究の進運に役立つことを冀ってやまないのである。

平成九年十月

財団法人 古代学協会
理事長　角　田　文　衞

例　言

1．本書は，昭和46年から49年にかけ３次にわたって財団法人古代学協会平安博物館考古学第二研究室が実施した青森県三戸郡田子町石亀遺跡発掘調査報告書である。

2．出土遺物については，完形品または重要遺物を中心に，できるだけ実測図や写真を掲載するようにつとめた。とくにこの時期の文化を特徴づける土器群については，写真図版と実測図を対向頁にレイアウトし，縮尺もできるだけ大きくして見やすいように配慮した。したがって，図版集の性格ももつ。なお，一部の整理・分析作業が未了の遺物については別の機会を持ちたい。

3．さらに，亀ヶ岡文化の研究として，渡辺誠が岩偶の集成を行い，その成果を巻末にまとめた。

4．本書の作成は，渡辺誠の指導のもと，主として南博史が担当したが，発掘調査参加者をはじめ，名古屋大学考古学研究室や京都文化博物館のスタッフの協力をいただいた。

また，種々の事情で報告書刊行までかなりの年数を経たこともあって，大変多くの方々の協力を得た。一々氏名を挙げて謝意を表さなければならないところであるが，行き届いていないところも多い。お許しいただきたい。

なお，執筆は，第１～３章，第７～９章は渡辺誠が担当。第４～６章と第７章の一部は，南博史をはじめとして分担執筆した(下記７参照)。

また，第８章第２節の花粉分析については，大阪市立自然史博物館の那須孝悌氏の分析によるものであり，第２・３次発掘調査概報に既に掲載されたものの転載である。調査からかなりの年数を経過していることもあって，筆者の了解を得たうえで掲載した。

5．石材の同定は，青森県埋蔵文化財センター調査員の松山力氏の鑑定を参考に，南が行った。

6．発掘調査の参加者は，以下のとおりである。なお，カッコ内の所属名は，左は発掘当時，右は現職である。

〔平安博物館〕

渡辺　誠(平安博物館考古学第二研究室，名古屋大学教授)

片岡　肇(平安博物館考古学第二研究室，京都文化博物館学芸第二課長)

長谷部学(平安博物館考古学第一研究室，故人)

鈴木忠司(平安博物館考古学第一研究室，京都文化博物館主任学芸員)

寺島孝一(平安博物館考古学第三研究室，東京大学助教授)

小沢一弘(平安博物館事務局，愛知県埋蔵文化財センター)

〔その他(あいうえお順)〕

阿部祥人(慶応義塾大学文学部，慶応義塾大学助教授)

上羽明美(関西大学文学部，同卒)

梅咲直照(慶応義塾大学商学部，住友林業)

春日信興(八戸市立三条中学教諭，田子中学校長)

加藤裕教(慶応義塾大学文学部，名古屋市役所)

柏瀬充子(慶応義塾大学文学部，同卒)

川端敏史(同志社大学文学部，同卒)

木村幾多郎(九州大学文学部，大分県歴史民俗資料館館長)

桐野克則(立命館大学文学部，作家)

工藤竹久(立生大学文学部，八戸市教育委員会)

小池史哲(別府大学文学部，福岡県教育委員会)

佐藤　洋(駒沢大学文学部，仙台市教育委員会)

塩谷隆正(青森市教育委員会，同)

鈴木克彦(国学院大学大学院，青森県埋蔵文化財センター)

鈴木美千子(慶応義塾大学文学部，同卒)

坪多正裕(明治大学文学部，兵庫県香住町教育委員会)

中村善則(大阪市立大学文学部，神戸市立博物館)

中村良幸(明治大学文学部，岩手県大迫町教育委員会)

西田正規(近畿大学医学部助手，筑波大学教授)

長谷川豊(同志社大学法学部，静岡銀行)

弘田善子(高知女子大学卒)

宮内克己(九州大学文学部，九州大学助教授)

三宅徹也(青森県立郷土館，同)

山岸良二(慶応義塾大学文学部，東邦高校)

山本暉久(早稲田大学大学院，神奈川県埋蔵文化財センター)

淀川協子(立命館大学文学部，同卒)

7．整理作業・実測・写真・図版作成については，下記の方々をはじめ実に多くの方々の協力を得た。実際，こうした方々の協力がなければ本書の刊行は不可能であった。以下に名前を記して謝意を表する(いずれも括弧内，左・参加当時の肩書，右・現職：あいうえお順)。

太田原有美子(関西大学文学部，浜松市教育委員会)，加藤つむぎ(京都外国語大学卒，京都造形芸術大学大学院)，嘉幡茂(関西大学学生)，神戸佳文(関西大学文学部，兵庫県立歴史博物館)，中村善則(大阪市立大学卒，神戸市立博物館)，中村健二(関西大学文学部，滋賀県文化財保護協会)，奈良崎和則(同志社大学法学部，福岡シティー銀行)，新田(旧姓 田中)智子(京都女子大学卒，同)，長谷川豊(同志社大学法学部，静岡銀行)，秦光次郎(京都外国語大学卒，青森県埋蔵文化財センター)，羽生由貴子(京都外国語大学卒，滋賀県立大学研究生)，南口敬司(京都外国語大学卒，奈良女子大学事務職)，山田喜代子

また，一部の方々には原稿の執筆もお願いした(同上)。

竹内(旧姓 井上)千津(京都女子大学卒，第5章)，川端博明(京都外国語大学卒，名神遺跡調査会，第5章)，中森祥(関西大学文学部，鳥取県埋蔵文化財センター，第4章)，浜田竜彦(関西大学文学部，鳥取県埋蔵文化財センター，第4章)，渡辺直哉(京都外国語大学卒，名古屋大学研究生，第4章)

目　　次

カラー図版
序
例　言
目　次・付表目次・挿図目次・写真目次・図版目次

はじめに …… 1

第1章　遺跡の位置と環境 …… 3
第1節　遺跡の位置と自然環境 …… 3
第2節　文化的環境 …… 6

第2章　発掘調査 …… 9
第1節　調査の経過概要 …… 9
第2節　東地区の調査 …… 9
第3節　西地区第1次調査 …… 12
第4節　西地区第2・3次調査 …… 14

第3章　層序と遺構の分布 …… 19
第1節　第1次調査の層序 …… 19
第2節　第2・3次調査の層序と遺構 …… 19

第4章　出土遺物・1　縄文土器 …… 27
第1節　土器出土状態 …… 27
第2節　土器の分類 …… 29
第3節　深鉢形土器 …… 33
第4節　鉢形土器 …… 46
第5節　浅鉢形土器 …… 62
第6節　台付土器 …… 74
第7節　壺形土器 …… 90
第8節　注口土器 …… 104

第5章　出土遺物・2　石器 …… 113
第1節　出土状態と石器組成 …… 113
第2節　打製石斧 …… 114
第3節　石皿 …… 114
第4節　磨石 …… 115
第5節　敲石 …… 118
第6節　雨だれ石 …… 118
第7節　石鏃 …… 123
第8節　石槍様石器 …… 130
第9節　礫石錘 …… 131
第10節　磨製石斧 …… 131
第11節　石製円盤 …… 133
第12節　篦状石器 …… 139
第13節　石匙 …… 139
第14節　削器 …… 142
第15節　石錐 …… 143
第16節　異形石器 …… 144
第17節　石剣 …… 145
第18節　独鈷石 …… 145

第6章　出土遺物・3　土製品 …… 153
第1節　土偶 …… 153
第2節　土製円盤 …… 155
第3節　装身具 …… 155

第7章　出土遺物・4　石製品 …… 159
第1節　岩偶 …… 159
第2節　岩版 …… 165
第3節　玉類 …… 168
第4節　その他 …… 168

第8章　出土遺物・5　自然遺物 …… 171
第1節　植物遺体 …… 171
第2節　花粉分析 …… 173

第9章　考察 …… 181
第1節　縄文晩期におけるソバ栽培の可能性 …… 181
第2節　縄文晩期における岩偶の研究 …… 182
第3節　今後の課題 …… 190

引用文献目録 …… 191
あとがき …… 192
英文サマリー …… 194
英文目次 …… 196

付表目次

第1表　土器器種組成表 … … … … … … … 27
第2表　大洞各型式別集計表 … … … … … … 29
第3表　深鉢形土器分類別集計表 … … … … … 33
第4表　深鉢形土器型式別集計表 … … … … … 34
第5表　鉢形土器型式別集計表 … … … … … … 47
第6表　浅鉢形土器型式別集計表 … … … … … 62
第7表　台付鉢形土器型式別集計表 … … … … 74
第8表　壺形土器分類別集計表 … … … … … … 91
第9表　壺形土器型式別集計表 … … … … … … 92
第10表　注口土器型式別集計表 … … … … … … 105
第11表　石器組成表 … … … … … … … … … … 113
第12表　石皿一覧表 … … … … … … … … … … 115
第13表　磨石一覧表 … … … … … … … … … … 117
第14表　敲石一覧表 … … … … … … … … … … 119
第15表　石鏃一覧表 … … … … … … … … … … 128
第16表　石槍様石器・箆状石器一覧表 … … … … 130
第17表　礫石錘・磨製石斧一覧表 … … … … … 132
第18表　石製円盤一覧表 … … … … … … … … 134
第19表　石匙一覧表 … … … … … … … … … … 142
第20表　削器一覧表 … … … … … … … … … … 144
第21表　石錐一覧表 … … … … … … … … … … 148
第22表　石剣・独鈷石・異形石器・打製石斧・礫器一覧表 … … … … … … … … … … 150
第23表　土製品一覧表 … … … … … … … … … 153
第24表　石製品一覧表 … … … … … … … … … 160
第25表　植物遺体数量表 … … … … … … … … 171
第26表　第1回採取試料の花粉構成 … … … … 173
第27表　産出のまれな花粉 … … … … … … … 174
第28表　縄文晩期岩偶一覧表 … … … … … … 184
第29表　地域別岩偶出土遺跡・数量表 … … … 189

挿図目次

第1図　石亀遺跡の位置図 … … … … … … … 4
第2図　石亀遺跡付近の地形と周辺の主要遺跡の分布図 … … … … … … … … … … … 5
第3図　石亀遺跡と主要縄文晩期遺跡の分布図 … … … … … … … … … … … … … 7
第4図　遺跡周辺地形図 … … … … … … … 10
第5図　大岩偶実測図 … … … … … … … … 11
第6図　東地区区画図 … … … … … … … … 12
第7図　東地区土層断面図 … … … … … … 13
第8図　東地区第2黒色土層出土土器拓影 … … 12
第9図　西区調査年次別グリッド配置図 … … 14
第10図　遺物出土状況実測図 … … … … … … 15
第11図　岩偶出土状態実測図 … … … … … … 17
第12図　西区土層断面図・1 … … … … … … 20
第13図　西区土層断面図・2 … … … … … … 21
第14図　西区土層断面図・3 … … … … … … 22
第15図　西区56，58区大土坑実測図 … … … 23
第16図　西区W29焼土及び関連遺物実測図 … … 24
第17図　西区W29ｐｉｔ1実測図 … … … … 24
第18図　西区W56ｐｉｔ1実測図 … … … … 24
第19図　西区遺構分布図 … … … … … … … 25
第20図　土器出土分布図 … … … … … … … 28
第21図　大洞各型式別出土分布図 … … … … 29
第22図　各部位および文様帯名称模式図 … … 30
第23図　文様分類図・区画文 … … … … … … 31
第24図　文様分類図・配置文 … … … … … … 32
第25図　文様分類図・充填文 … … … … … … 32
第26図　深鉢形土器出土分布図 … … … … … 35
第27図　鉢形土器出土分布図 … … … … … … 49
第28図　浅鉢形土器出土分布図 … … … … … 63
第29図　台付深鉢形土器出土分布図 … … … 75
第30図　台付鉢形土器出土分布図 … … … … 76
第31図　台付浅鉢形土器出土分布図 … … … 77
第32図　壺形土器出土分布図・1 … … … … 93
第33図　壺形土器出土分布図・2 … … … … 94
第34図　注口土器出土分布図 … … … … … … 106
第35図　グリッド別石器総点数分布図 … … … 113
第36図　打製石斧実測図 … … … … … … … 114
第37図　石皿・磨石・敲石・雨だれ石出土分布図 … … … … … … … … … … … … 115
第38図　石皿実測図 … … … … … … … … … 116
第39図　磨石実測図 … … … … … … … … … 117

第40図　敲石実測図・1　…… 120
第41図　敲石実測図・2　…… 121
第42図　敲石実測図・3　…… 122
第43図　磨石・敲石重量分布図 …… 123
第44図　雨だれ石実測図　…… 123
第45図　石鏃・石槍様石器・篦状石器出土分布図 …… 124
第46図　石鏃実測図・1　…… 125
第47図　石鏃実測図・2　…… 126
第48図　石鏃実測図・3　…… 127
第49図　石鏃の長さと巾の相関図　…… 130
第50図　石槍様石器・篦状石器実測図 …… 131
第51図　礫石錘・磨製石斧出土分布図 …… 132
第52図　礫石錘・磨製石斧実測図　…… 132
第53図　石製円盤出土分布図　…… 133
第54図　石製円盤実測図・1　…… 136
第55図　石製円盤実測図・2　…… 137
第56図　石製円盤実測図・3　…… 138
第57図　石匙出土分布図　…… 139
第58図　石匙実測図・1　…… 140
第59図　石匙実測図・2　…… 141
第60図　石匙実測図・3　…… 143
第61図　削器出土分布図　…… 145
第62図　削器実測図・1　…… 146
第63図　削器実測図・2　…… 147
第64図　石錐出土分布図　…… 148
第65図　石錐実測図 …… 149
第66図　異形石器実測図　…… 150
第67図　石剣出土分布図　…… 150
第68図　石剣実測図 …… 151
第69図　独鈷石実測図　…… 151
第70図　西地区における土製品分布図 …… 154
第71図　土偶実測図・1　…… 155
第72図　土偶実測図・2　…… 156
第73図　土製円盤・装身具実測図　…… 157
第74図　西地区における石製品分布図 …… 162
第75図　岩偶実測図・1　…… 163
第76図　岩偶実測図・2　…… 164
第77図　岩偶実測図・3　…… 165
第78図　岩版実測図 …… 166
第79図　岩版・石製品実測図　…… 167
第80図　その他石製品実測図　…… 169
第81図　東地区の地層断面と試料採取層準 …… 173
第82図　西地区の地層断面と試料採取層準 …… 173
第83図　花粉ダイアグラム　…… 175
第84図　イネ科花粉の粒径分布 …… 179
第85図　縄文晩期における岩偶出土遺跡分布図 …… 183
第86図　岩偶推定サイズ比較図 …… 186
第87図　縄文晩期の岩偶実測図 …… 188
第88図　円筒土器に伴う岩偶の分布　…… 189
第89図　土版・岩版の展開 …… 189

写　真　目　次

写真1　木本花粉の顕微鏡写真
写真2　草木花粉の顕微鏡写真
写真3　ソバ花粉の顕微鏡写真
写真4　円筒土器に伴う岩偶

図　版　目　次

カラー図版第1　大岩偶胸部
カラー図版第2
　上：大岩偶右脚部
　下：パレットに使われた石皿
図版第1　遺跡遠景(南より)
図版第2　大岩偶胸部
図版第3
　上：大岩偶脚部
　下：東地区(西南より)
図版第4
　上：東地区　G46北壁
　下：東地区　土器群出土状態

図版第 5
右：西地区(南より)
左：Ⅴ層上面柱穴状ピット群全景(北より)
図版第 6
上：西地区　西壁断面(全景)
下：西地区　西壁断面(西南隅アップ)
図版第 7
上：西地区　遺物出土状態全景(西より)
下：西地区　G17遺物出土状態
図版第 8
上：西地区　G17遺物出土状態
下：西地区　G17遺物出土状態
図版第 9
上：西地区　G 4
下：西地区　G 4
図版第10
上：西地区　G 8 土器出土状態
下：西地区　G 8 敲石入り土器
図版第11
上：西地区　G17岩偶出土状態
下：西地区　G17岩偶出土状態
図版第12
上：W63　岩偶出土状態
下：W63　岩偶出土状態
図版第13
上：大土坑内断面(北側より)
下：大土坑全景(西側より)
図版第14
上：W29　ピット 1 完掘状況
下：W56　ピット 1 完掘状況
図版第15
上：発掘終了後全景(西側より)
下：柱穴状ピット群(東側より)
図版第16　土器　深鉢Ⅰ類－1
図版第17　土器実測図　深鉢Ⅰ類－1
図版第18　土器　深鉢Ⅰ類－1
図版第19　土器実測図　深鉢Ⅰ類－1
図版第20　土器　深鉢Ⅰ類－1
図版第21　土器実測図　深鉢Ⅰ類－1
図版第22　土器　深鉢Ⅰ類－2
図版第23　土器実測図　深鉢Ⅰ類－2
図版第24　土器　深鉢Ⅰ類－2
図版第25　土器実測図　深鉢Ⅰ類－2
図版第26　土器　深鉢Ⅰ類－2，深鉢Ⅱ類－1
図版第27　土器実測図　深鉢Ⅰ類－2，深鉢Ⅱ類－1
図版第28　土器　深鉢Ⅱ類－1
図版第29　土器実測図　深鉢Ⅱ類－1
図版第30　土器　深鉢Ⅱ類－1
図版第31　土器実測図　深鉢Ⅱ類－1
図版第32　土器　深鉢Ⅱ類－1
図版第33　土器実測図　深鉢Ⅱ類－1
図版第34　土器　深鉢Ⅱ類－1
図版第35　土器実測図　深鉢Ⅱ類－1
図版第36　土器　深鉢Ⅱ類－2
図版第37　土器実測図　深鉢Ⅱ類－2
図版第38　土器　深鉢Ⅱ類－2
図版第39　土器実測図　深鉢Ⅱ類－2
図版第40　土器　深鉢Ⅱ類－2
図版第41　土器実測図　深鉢Ⅱ類－2
図版第42　土器　深鉢Ⅱ類－2
図版第43　土器実測図　深鉢Ⅱ類－2，Ⅱ類－3
図版第44　土器　鉢Ⅰ類－1
図版第45　土器実測図　鉢Ⅰ類－1
図版第46　土器　鉢Ⅰ類－1
図版第47　土器実測図　鉢Ⅰ類－1
図版第48　土器　鉢Ⅰ類－1，2
図版第49　土器実測図　鉢Ⅰ類－1，2
図版第50　土器　鉢Ⅰ類－2
図版第51　土器実測図　鉢Ⅰ類－2
図版第52　土器　鉢Ⅰ類－2
図版第53　土器実測図　鉢Ⅰ類－2
図版第54　土器　鉢Ⅰ類－4
図版第55　土器実測図　鉢Ⅰ類－4
図版第56　土器　鉢Ⅱ類－1
図版第57　土器実測図　鉢Ⅱ類－1
図版第58　土器　鉢Ⅱ類－1
図版第59　土器実測図　鉢Ⅱ類－1
図版第60　土器　鉢Ⅱ類－1
図版第61　土器実測図　鉢Ⅱ類－1
図版第62　土器　鉢Ⅱ類－1
図版第63　土器実測図　鉢Ⅱ類－1
図版第64　土器　鉢Ⅱ類－2
図版第65　土器実測図　鉢Ⅱ類－2
図版第66　土器　鉢Ⅱ類－2
図版第67　土器実測図　鉢Ⅱ類－2
図版第68　土器　鉢Ⅱ類－2

図版第69　土器実測図　鉢Ⅱ類－2
図版第70　土器　鉢Ⅱ類－3
図版第71　土器実測図　鉢Ⅱ類－3
図版第72　土器実測図　浅鉢Ⅰ類－1
図版第73　土器　浅鉢Ⅰ類－1
図版第74　土器　浅鉢Ⅰ類－1
図版第75　土器実測図　浅鉢Ⅰ類－1
図版第76　土器　浅鉢Ⅰ類－1
図版第77　土器実測図　浅鉢Ⅰ類－1
図版第78　土器　浅鉢Ⅱ類－1
図版第79　土器実測図　浅鉢Ⅱ類－1
図版第80　土器　浅鉢Ⅱ類－1
図版第81　土器実測図　浅鉢Ⅱ類－1
図版第82　土器　浅鉢Ⅱ類－1
図版第83　土器実測図　浅鉢Ⅱ類－1
図版第84　土器　浅鉢Ⅱ類－1
図版第85　土器実測図　浅鉢Ⅱ類－1
図版第86　土器　浅鉢Ⅱ類－2
図版第87　土器実測図　浅鉢Ⅱ類－2
図版第88　土器　浅鉢Ⅱ類－1
図版第89　土器実測図　浅鉢Ⅱ類－1
図版第90　土器　浅鉢Ⅱ類－1，2
図版第91　土器実測図　浅鉢Ⅱ類－1，2
図版第92　土器　浅鉢Ⅱ類－2
図版第93　土器実測図　浅鉢Ⅱ類－2
図版第94　土器　浅鉢Ⅱ類－2
図版第95　土器実測図　浅鉢Ⅱ類－2
図版第96　土器　浅鉢Ⅱ類　異形
図版第97　土器実測図　浅鉢Ⅱ類　異形
図版第98　土器　台付深鉢Ⅰ類－1
図版第99　土器実測図　台付深鉢Ⅰ類－1
図版第100　土器　台付鉢Ⅰ類－1
図版第101　土器実測図　台付鉢Ⅰ類－1
図版第102　土器　台付鉢Ⅰ類－1
図版第103　土器実測図　台付鉢Ⅰ類－1
図版第104　土器　台付鉢Ⅰ類－1
図版第105　土器実測図　台付鉢Ⅰ類－1
図版第106　土器　台付鉢Ⅰ類－1
図版第107　土器実測図　台付鉢Ⅰ類－1
図版第108　土器　台付鉢Ⅰ類－2
図版第109　土器実測図　台付鉢Ⅰ類－2
図版第110　土器　台付鉢Ⅰ類－2
図版第111　土器実測図　台付鉢Ⅰ類－2
図版第112　土器　台付鉢Ⅰ類－2
図版第113　土器実測図　台付鉢Ⅰ類－2
図版第114　土器　台付鉢Ⅰ類－2
図版第115　土器実測図　台付鉢Ⅰ類－2
図版第116　土器　台付鉢Ⅰ類－2
図版第117　土器実測図　台付鉢Ⅰ類－2
図版第118　土器　台付鉢Ⅰ類－2
図版第119　土器実測図　台付鉢Ⅰ類－2
図版第120　土器　台付鉢Ⅱ類－1
図版第121　土器実測図　台付鉢Ⅱ類－1
図版第122　土器　台付鉢Ⅱ類－1
図版第123　土器実測図　台付鉢Ⅱ類－1
図版第124　土器　台付鉢Ⅱ類－1
図版第125　土器実測図　台付鉢Ⅱ類－1
図版第126　土器　台付鉢Ⅱ類－2，3
図版第127　土器実測図　台付鉢Ⅱ類－2，3
図版第128　土器　台付浅鉢Ⅰ類－1
図版第129　土器実測図　台付浅鉢Ⅰ類－1
図版第130　土器　壺ⅠA類
図版第131　土器実測図　壺ⅠA類
図版第132　土器　壺ⅠA類
図版第133　土器実測図　壺ⅠA類
図版第134　土器　壺ⅠA類
図版第135　土器実測図　壺ⅠA類
図版第136　土器　壺ⅠA類
図版第137　土器実測図　壺ⅠA類
図版第138　土器　壺ⅠA類
図版第139　土器実測図　壺ⅠA類
図版第140　土器　壺ⅠA類
図版第141　土器実測図　壺ⅠA類
図版第142　土器　壺ⅠB類，ⅡA・B類
図版第143　土器実測図　壺ⅠB類，ⅡA・B類
図版第144　土器　壺ⅡA類
図版第145　土器実測図　壺ⅡA類
図版第146　土器　壺ⅡA・B類，ⅢB類
図版第147　土器　実測図　壺ⅡA・B類，ⅢB類
図版第148　土器　壺Ⅳ，Ⅴ類
図版第149　土器実測図　壺Ⅳ，Ⅴ類
図版第150　土器　壺ⅥA類
図版第151　土器実測図　壺ⅥA類
図版第152　土器　壺ⅥA・B類
図版第153　土器実測図　壺ⅥA・B類
図版第154　土器　壺ⅥB類

図版第155　土器実測図　壺ⅥB類
図版第156　土器　壺Ⅶ類
図版第157　土器実測図　壺Ⅶ類
図版第158　土器　注口土器　Ⅰ類－2
図版第159　土器実測図　注口土器　Ⅰ類－2
図版第160　土器　注口土器　Ⅰ類－2
図版第161　土器実測図　注口土器　Ⅰ類－2
図版第162　土器　注口土器　Ⅰ類－2
図版第163　土器実測図　注口土器　Ⅰ類－2
図版第164　土器　注口土器　Ⅰ類－3，Ⅱ類－2
図版第165　土器実測図　注口土器　Ⅰ類－3，Ⅱ類－2
図版第166　石皿・雨だれ石・打製石斧・石剣
図版第167　敲石
図版第168　敲石・磨石
図版第169　石鏃
図版第170　石鏃・石槍様石器・石錐
図版第171　石製円盤・1
図版第172　石製円盤・2
図版第173　石匙
図版第174　削器・磨製石斧・礫石錘・異形石器・独鈷石
図版第175　土偶
図版第176　土偶・土製耳栓・土製円盤
図版第177　岩偶・1
図版第178　岩偶・2
図版第179　岩版
図版第180　岩版未成品・石製装身具・円盤状石製品・不明品
図版第181　植物遺体
図版第182　縄文晩期の岩偶・1
図版第183　縄文晩期の岩偶・2
図版第184　縄文晩期の岩偶・3
図版第185　縄文晩期の岩偶・4
図版第186　縄文晩期の岩偶・5
図版第187　縄文晩期の岩偶・6
図版第188　縄文晩期の岩偶・7
図版第189　縄文晩期の岩偶・8
図版第190　縄文晩期の岩偶・9
図版第191　縄文晩期の岩偶・10
図版第192　角田文衞先生を囲み記念撮影

はじめに

青森県三戸郡田子(たっこ)町大字石亀字石亀に存在する本遺跡は，縄文時代晩期前半大洞ＢＣ式期を主体とする時期の遺跡であり，その発掘調査は，旧平安博物館が考古学第二研究室を担当として実施したところの，『日本文化の源流の研究』に基づくものであった。

本研究の趣旨は，縄文時代に農耕が存在したのではないかという仮説の重要性，特に日本文化の源流を縄文時代に遡り得る可能性を明確に指摘した点に認め，さらに問題の深化をはかるために，単にその仮説の可否を論じるに止どめず，多面的かつ総合的な視野からの検討に寄与し得る資料を整備することにあった。水稲栽培の開始された弥生時代直前の縄文晩期には，一般的に大まかにみて西日本の黒色磨研土器文化と東日本の亀ヶ岡文化が併存していたとされているが，特に後者は経済基盤の問題のほかに，工芸的・呪術的性格の濃厚なことが従来より注目されてきている。亀ヶ岡文化を彩る多種多様な遺物には確かに注目すべきものが多い。しかしその出土状態や量的構成を，特に村落内での位置づけと関連させた資料はない。

このためにまず，縄文晩期の東日本を代表する亀ヶ岡文化の解明を行うべく計画され，亀ヶ岡文化の主要文化センターの１つである馬淵川流域内から選択されたのが，本遺跡の発掘調査である。昭和46年４月にまず第１次発掘を実施し，同年８～９月に第２次発掘，昭和49年10月に第３次発掘を実施した。なお本遺跡の選択は，慶応義塾大学名誉教授である江坂輝弥博士のお勧めによるものである。後に記すように復元すると最大の大きさを持つ岩偶の破片が出土していることが，主要の理由であった。西日本の黒色磨研土器文化については，昭和48年３月～４月に大分県大野郡大野町宮地前遺跡の第１次発掘を実施した。

また昭和48年１～３月には，両者の中間に位置する京都府舞鶴市桑飼下遺跡の第１次調査，同年４～７月には第２次調査を実施した。この遺跡は縄文時代後期に属し，縄文晩期ではないもうひとつの縄文農耕論，すなわち中部地方の縄文中期農耕論と西日本晩期農耕論との関係について，大きな成果を挙げることができた。

この桑飼下遺跡については報告書(渡辺　誠編1975)，宮地前遺跡については概報(渡辺　誠1963)を刊行済である。石亀遺跡についても概報(渡辺　誠・片岡　肇1971，渡辺　誠編75)は刊行しているが，本報告書はその正報告書であり，『日本文化の源流の研究』の成果報告は本書をもって完結することになる。

なお，本研究の趣旨に賛同され寄附金を寄せられた，㈶高梨学術奨励基金を始めとする諸団体に対し，芳名を銘記して謝意表する次第である。

㈶高梨学術奨励基金，㈶佐伯記念財団，㈱日立製作所，㈱日本興業銀行，㈱高島屋，㈱富士銀行，三菱電機株式会社，三菱信託銀行株式会社，旭硝子株式会社。

第1章　遺跡の位置と環境

第1節　遺跡の位置と自然環境(第1・2図，図版第1)

本遺跡の位置する青森県三戸郡田子(たっこ)町は青森県最南端の町であり，西は秋田県鹿角市，南は岩手県二戸郡浄法寺町に境を接している。町域の西部は，東北地方の脊梁である奥羽山脈の北部を形成しているところの田子山地と，十和田火山地南部であり，東部は丘陵と台地が広く展開している(第1図)。これらには一次林としての落葉広葉樹林，および杉などの植林地，耕作地，放牧地が展開している。

これらを馬淵川の支流である猿辺川と熊原川，さらに後者の支流である種子川，細野川，相米川，杉倉川などが東北東に向かって開析して，谷底平野を形成している。町内の縄文時代遺跡の大部分は，それらの河川沿いの河岸段丘上に立地している。

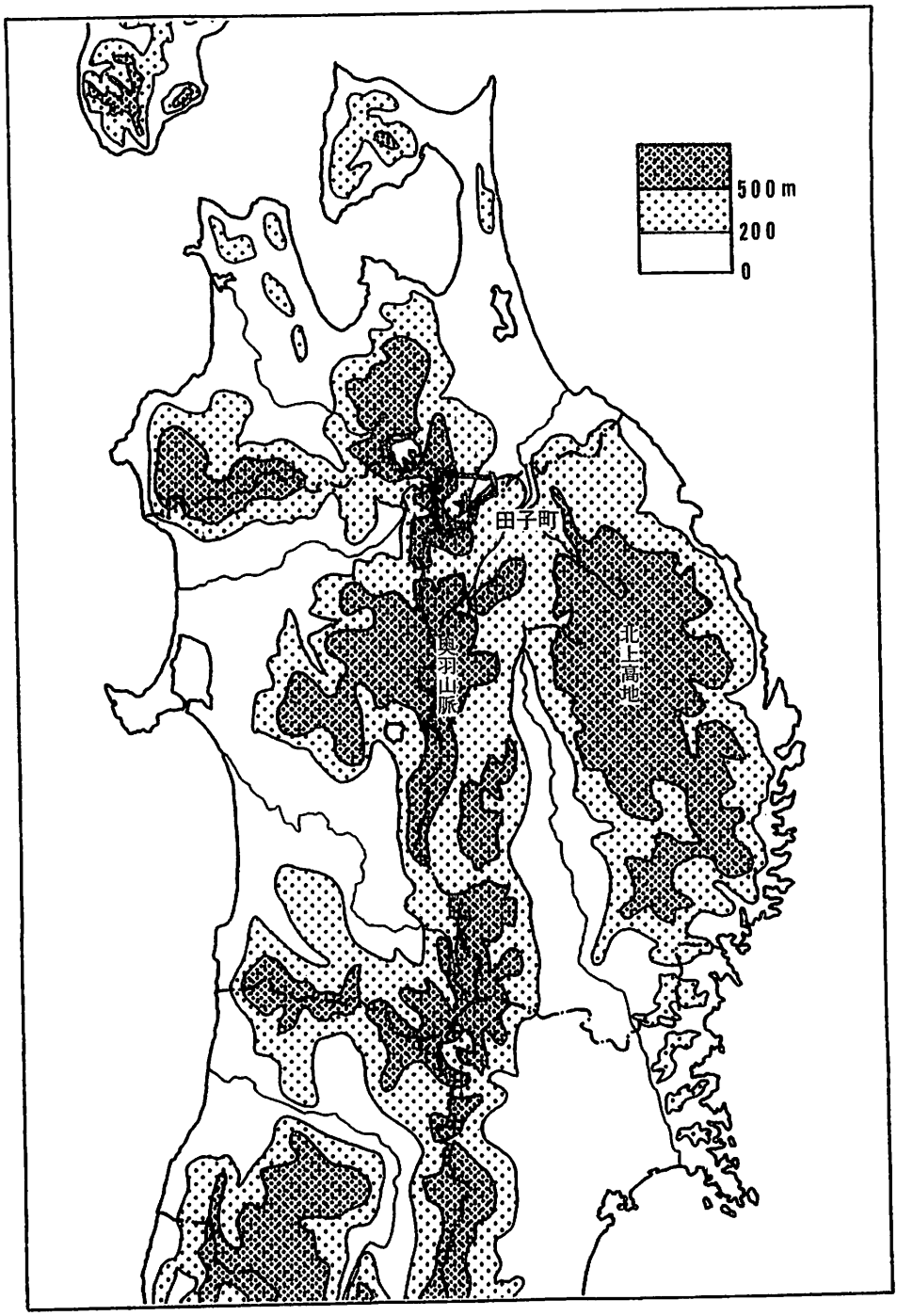
町内には縄文遺跡が51遺跡ある。それらは前期を上限として草創期・早期の遺跡は未発見である。そして後期がもっとも多く37，晩期が15，前期が10でこれに次ぎ，中期は3で少ない。これらの遺跡数は総数より多いが，これは重複する遺跡があるためである。

このうち本遺跡は，熊原川上流域北岸の低位河岸段丘上に立地している(図版1)。そして相米川の合流する地点より上流域の遺跡は，本遺跡を含めて9遺跡みられる(第2図)。このうちもっとも古い遺跡は前期の遠瀬遺跡であるが，発掘は行われておらず，詳細は不明である。また後期の道前遺跡でも前期の土器片は採集されている。その一方で岩偶も採集されていて，晩期も複合しているらしい。

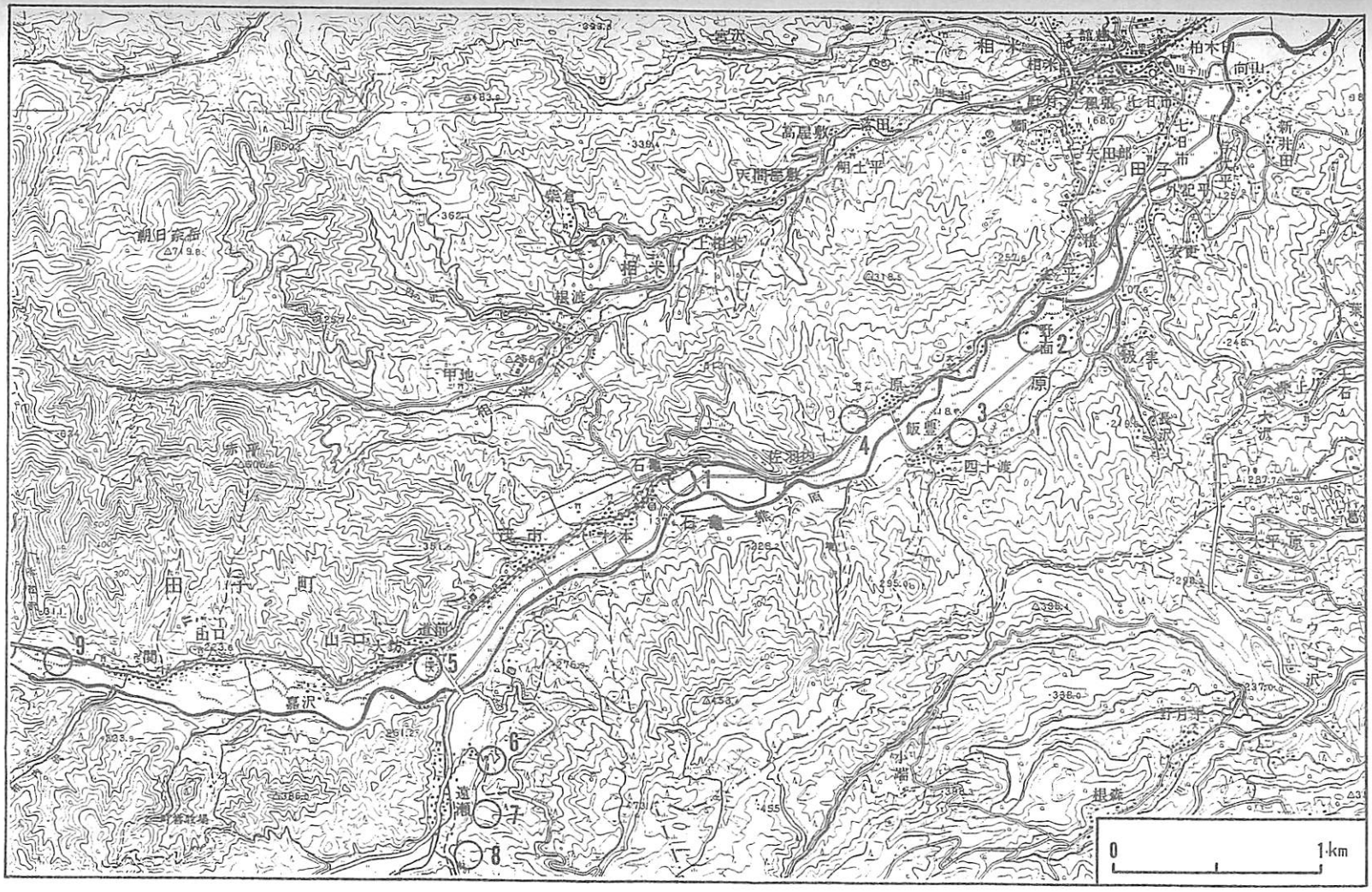
本遺跡東地区でも後述するように，十和田火山灰層の下層より前期の土器片が数点出土している。この所見から，十和田火山灰層によって深く埋没している，さらに古い時期の遺跡の存在が十分に推定することができる。しかし現時点においては，熊原川上流域の最古の遺跡は縄文前期であり，中期を欠き，後期から晩期に遺跡数が増加する。

後期の遺跡としては，原・滝の上・滝の下・関遺跡などがみられるが，このうち関遺跡は1962年に江坂輝弥・村越　潔氏によって配石遺構が発掘されている(江坂1967a)。晩期の遺跡としては，本遺跡の他に野面平・滝の上，そして飯豊・道前遺跡などがみられる。後二者の詳細は不明であるが，岩偶が採集されていて注目に値する。野面平遺跡は1962年に江坂輝弥・音喜多富寿氏によって発掘されている(江坂1967b)。筆者も学部学生の時に参加させて頂き，はじめて田子町を訪れた。現田子中学校校長の春日信興氏(当時八戸高校学生)も参加していた。

以上にみてきたように，相米川流域にある田子町の中心部から国道104線で丘陵を越え熊原川上流域にはいると，岩偶を出土した野面平・飯豊・石亀・道前遺跡が目白押しに並んで見えてくる。発掘期間中この流域平野に差しかかる度に，いよいよ岩偶の谷だ，と言いあっていたことがなつかしい。本遺跡はそのなかでも中核的な遺跡であるが，江坂輝弥氏によってしばしば述べられているように，当時の熊原川上流域には岩偶の石材である白凝灰岩の良好な路頭が見られたのであろう。



第1図　石亀遺跡（★印）の位置図



第2図　石亀遺跡付近の地形と周辺の主要遺跡の分布図

1：石亀　2：野面平　3：飯豊　4：原　5：道前　6：遠瀬　7：滝の上　8：滝の下　9：関

第2節　文化的環境(第3図)

亀ヶ岡文化の特色に関する一般的な理解は，主としてそのバラエティー豊かな工芸的あるいは呪術的な遺物群に基づくものである。それらを列挙すると，

a．まず文化名の基となった亀ヶ岡式土器についてみてみれば，壺・注口土器・香炉型土器・台付土器等々の各種の優れた器形や半浮き彫り・透かし彫りを含む文様の発達，そして丹塗り・漆塗りなどの装飾技術の発達が指摘される。

b．次に，櫛・弓・藍胎漆器等々の漆工芸が発達していること，

c．土偶・岩偶・土版・岩版，石剣・石刀・独鈷石等々の呪術的遺物が発達していること，

d．それに骨角製品が発達していること，などを指摘できる。

しかしそれらは，時代的に縄文晩期にのみ限定されるものばかりではない。また地理的分布においても，東北地方の亀ヶ岡文化に限定されるものではないし，東北地方内の特定地域に限定されるものはきわめて少ない。すなわち，亀ヶ岡文化の内容と構造については未だに十分な研究が行われていないのであり，土器編年偏重や珍品主義的な体質から脱却し切れていないのが現在の状況であるということができる。

そうした状況を前提として，本遺跡の占める位置を明らかにするために，共通理解になっているとみられる点を整理すると次のとおりである。

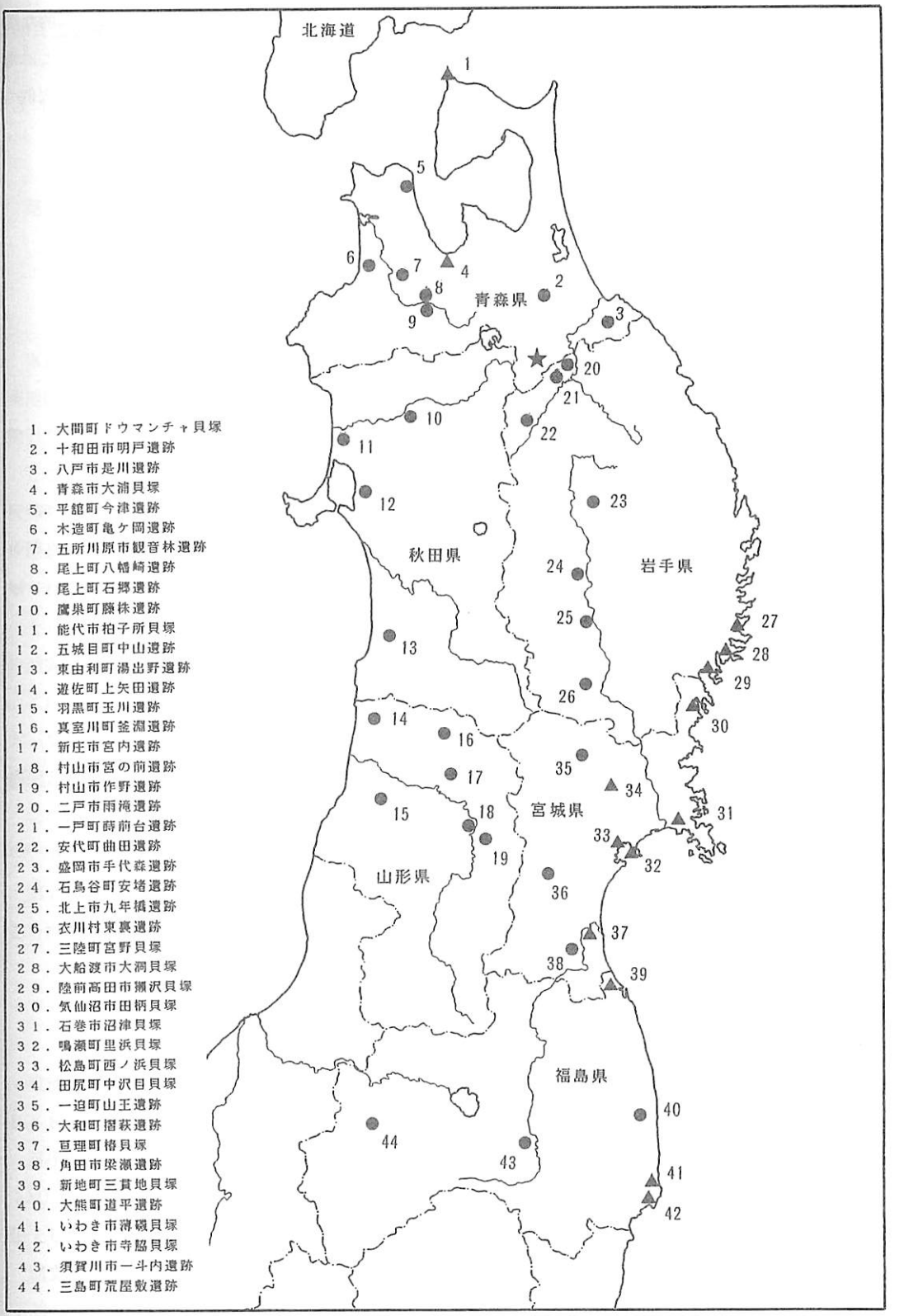
まずはじめに，亀ヶ岡式土器は東北地方においては北部・中部・南部に3大別される地域性をもっていて，青森県などの北部に上記のような典型的な亀ヶ岡式土器が発達している。それらは青森県西部の亀ヶ岡(第3図6)・八幡崎(8)・石郷遺跡(9)，同東部の是川(3)・明戸遺跡(2)，秋田県北部の藤株(10)・中山遺跡(12)，柏子所貝塚(11)，岩手県北部の雨滝(20)・蒔前台遺跡(21)などによって代表され，本遺跡(★印)はそれらのなかでも是川遺跡にもっとも近い。

そして是川遺跡に代表される青森県東部に岩偶・岩版の分布密度が高く，本遺跡は後に詳しく述べるように，岩偶についてはそのなかでも中核的な位置を占めているのである。

これらのことと対象的なのは，骨角製漁具の分布である。そのなかでもっとも顕著なのは，燕形の回転式離頭銛である。これは岩手県北部以北の寒流域より伝播した一王寺型が三陸地方から仙台湾にかけての地域で南境型に変化し，さらに沼津型を経て出現したものである。岩手県宮野(27)・大洞(28)・獺沢貝塚(29)，宮城県沼津(31)・里浜貝塚(32)，福島県薄磯(41)・寺脇貝塚(42)などが燕型離頭銛の主な出土遺跡であり，中・南部の太平洋岸に位置している。これに対し寒流域の青森県では大浦貝塚(4)のように，一王寺型離頭銛が分布している。

本遺跡は内陸部に位置し，回転式離頭銛を使用する外洋型漁業の地域ではないが，生態学的には寒流域の内陸部である。そして中・南部の太平洋岸の上記の貝塚群における亀ヶ岡式土器は，北部のそれよりも工芸的には劣っているし，岩偶・岩版などの分布密度はきわめて低い。言い換えるならば，外洋型漁業は呪術的遺物の発達に関係が薄いのである。

いわゆるサケ・マス類を含めた諸生業もまた時期的・地理的分布において，大地域・小地域とを問わ



第３図　石亀遺跡（★印）と主要縄文晩期遺跡の分布図（▲印は貝塚）

ず特定地域との生態学的な密接な関係を見いだすことはできない。したがって呪術的遺物や工芸的な遺物の発達は，経済基盤よりも地域集団の社会的要因が大きく影響しているとみるべきであり，そこに亀ヶ岡文化の構造的理解の方法が示唆されていると考えられるのである。本報告書において，特に岩偶の研究に力点の一つを設定していることは，このような観点に基づいている。

第2章　発　掘　調　査

第1節　調査の経過概要(第4・5図，図版第2・3)

発掘調査は3次にわたって実施された。その年次・期間は次のとおりである。

第1次調査　1971年4月5～19日

第2次調査　1971年8月21日～9月5日

第3次調査　1974年10月1～15日

本遺跡は水田を挟んで東西に位置する畑地および水田に立地しているが(第4図)，第1次調査はまず東地区から着手した。ここは木根定夫氏の所有地で，行政区画上は大字石亀字石亀48番地である。北を除いた三方を水田で囲まれている。

ここではかつて最大級の岩偶の胸部と右脚部の破片とが出土しており，その続きを狙ってはという江坂輝弥博士(現慶応義塾大学名誉教授)のお勧めが発掘調査の直接的な契機であった。なおこの岩偶は当時佐藤嘉悦氏所蔵で三戸町立歴史民俗資料館(温故館)に保管されていたが，現在は田子町教育委員会に寄贈されている(第5図)。

そして岩版未製品や小土偶などの注目される遺物の出土はみられたが，遺物包含層は攪乱が多く目的の達成は困難であると判断されることになった。

このような状況下，水田を挟んで東地区の西南約100ｍに位置する畑地を開田したやや高位の水田において児童の乱掘が行われ，放置すると遺跡全体の把握を行う上に障害となる恐れが生じたので，関係機関と協議の上調査期間の後半に，この西地区の発掘も並行して実施することにした。

この西地区は西から北にかけて低い台地状を呈し，その東斜面が遺跡である。ここは故簗田実氏(現：進氏)の所有地で，行政区画上は字石亀38番地である。

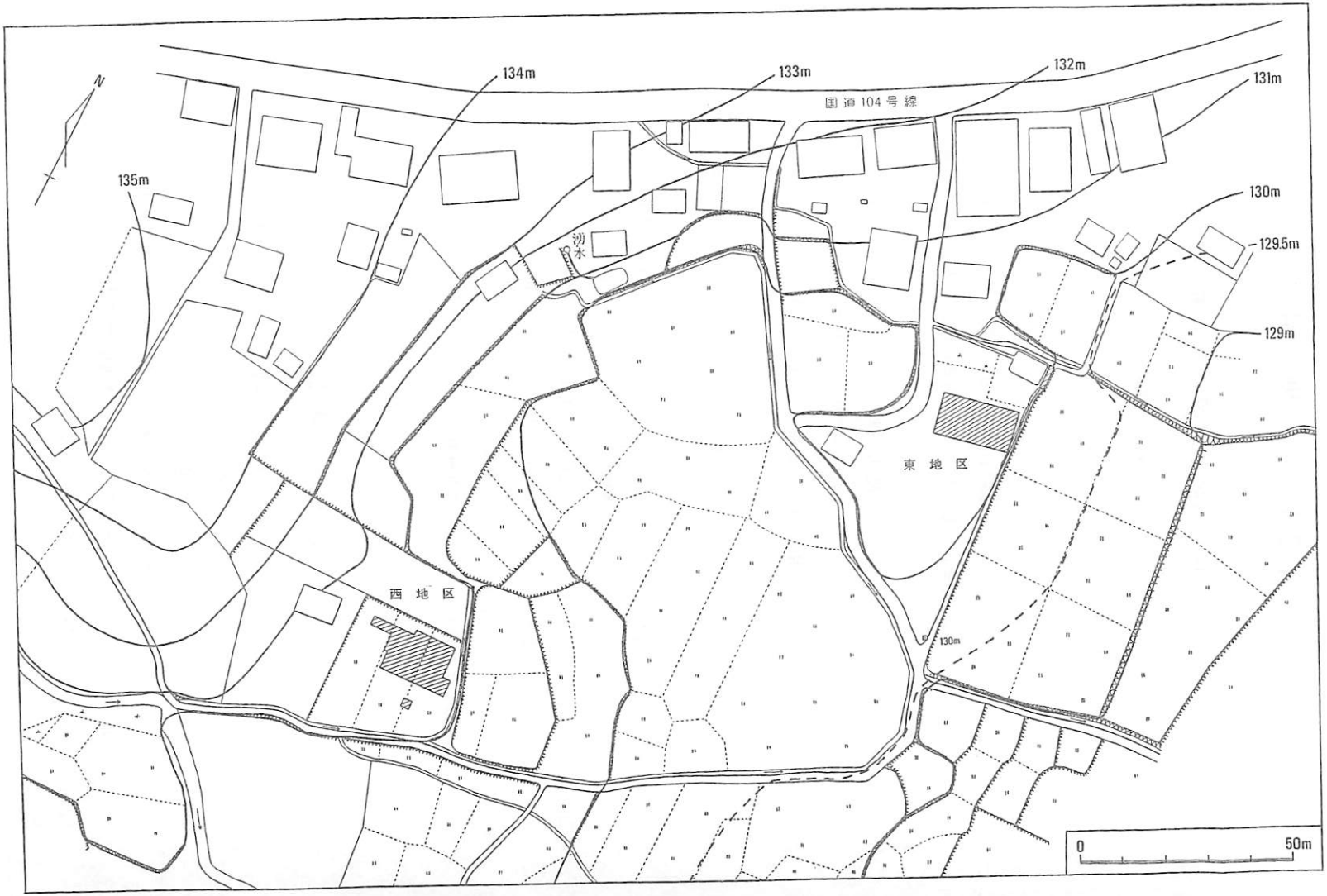
第2・3次調査はこの西地区においてのみ継続された。次に地区・年次別に層序・遺構について記すことにする。

第2節　東地区の調査(第6～8図，図版第4)

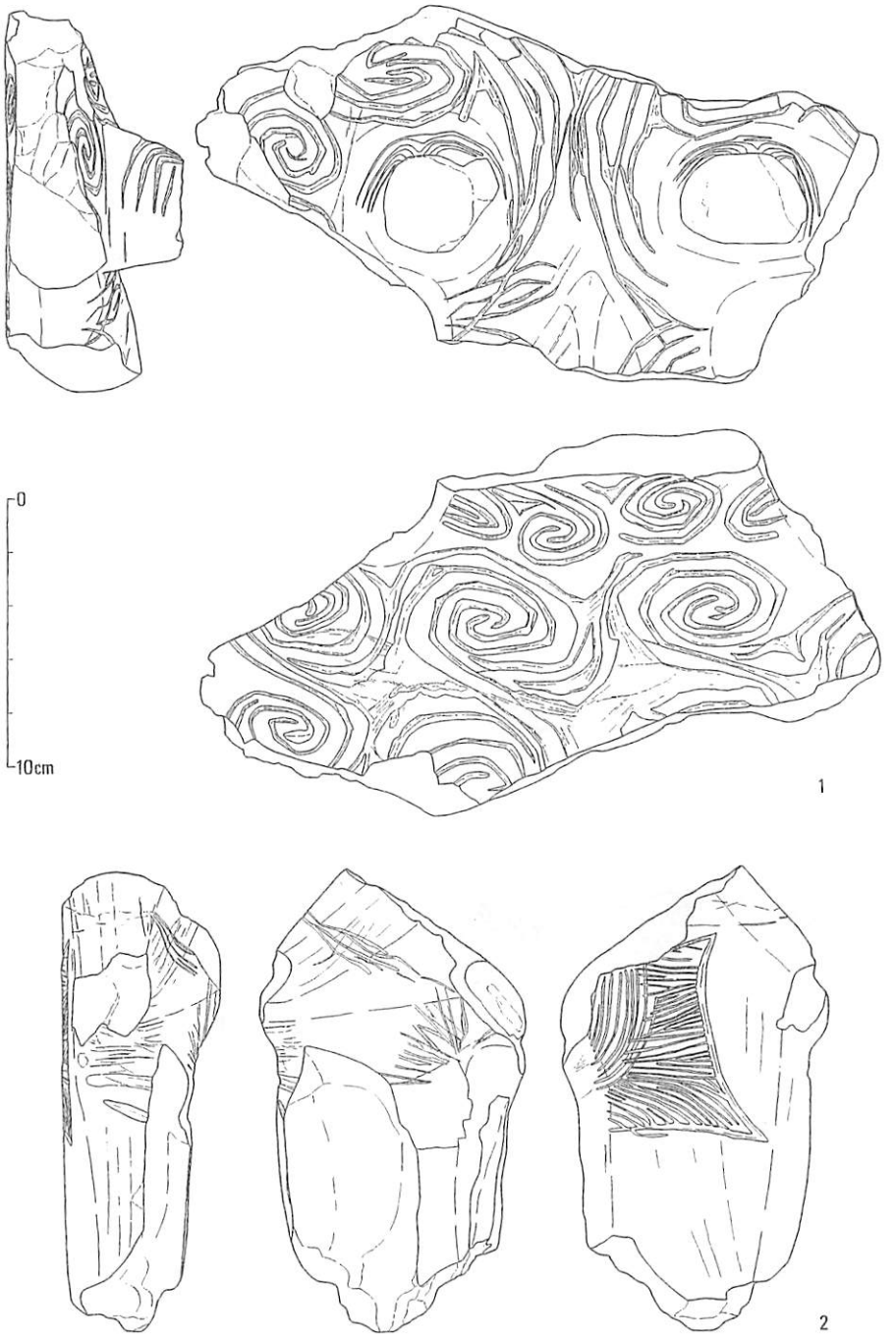
東地区は北を除いた三方を水田でかこまれている畑地であるが，その中央部に10×10ｍのＡ地区，10×8ｍのＢ地区，1×6ｍのＣ地区を設定して発掘を実施した(第6図)。

層序は，約20cmの表土下は約20cmの遺物包含層である黒色土層であるが，非常に攪乱が多かった(第7図)。Ａ・Ｂ両地区の境界には不整形な土壙2基が検出されたが，その上部には土器片がまとまって出土した。これらの土器を含め，出土土器はほとんど晩期前葉の大洞ＢＣ式土器である。

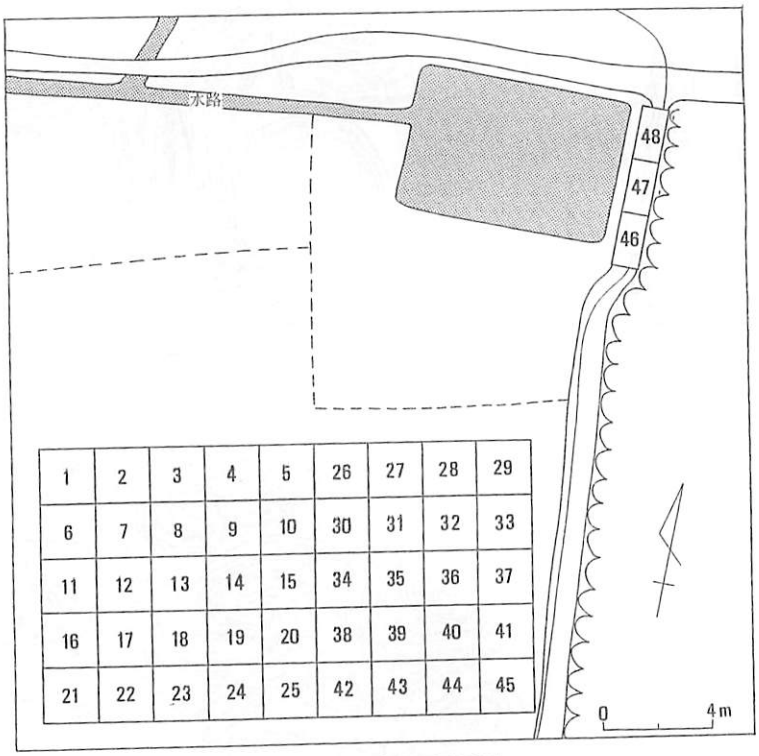
縄文晩期遺物包含層下は約50cmの黄色砂質火山灰層であり，まったく遺物は含まれていないが，その下部の約40cmの第2黒色土層には，きわめて少量の縄文前期の円筒下層式土器片が出土しており(第8


N
134m
133m
132m
131m
国道104号線
135m
130m
129.5m
129m
湧水
東地区
西地区
130m
0
50m

第4図　遺跡周辺地形図



第5図　大岩偶実測図



第6図　東地区区画図

第8図　東地区第2黒色土層出土土器拓影

図），火山灰の堆積が縄文前期と晩期との間にあったことを明示している。この火山灰の供給源は十和田火山である。

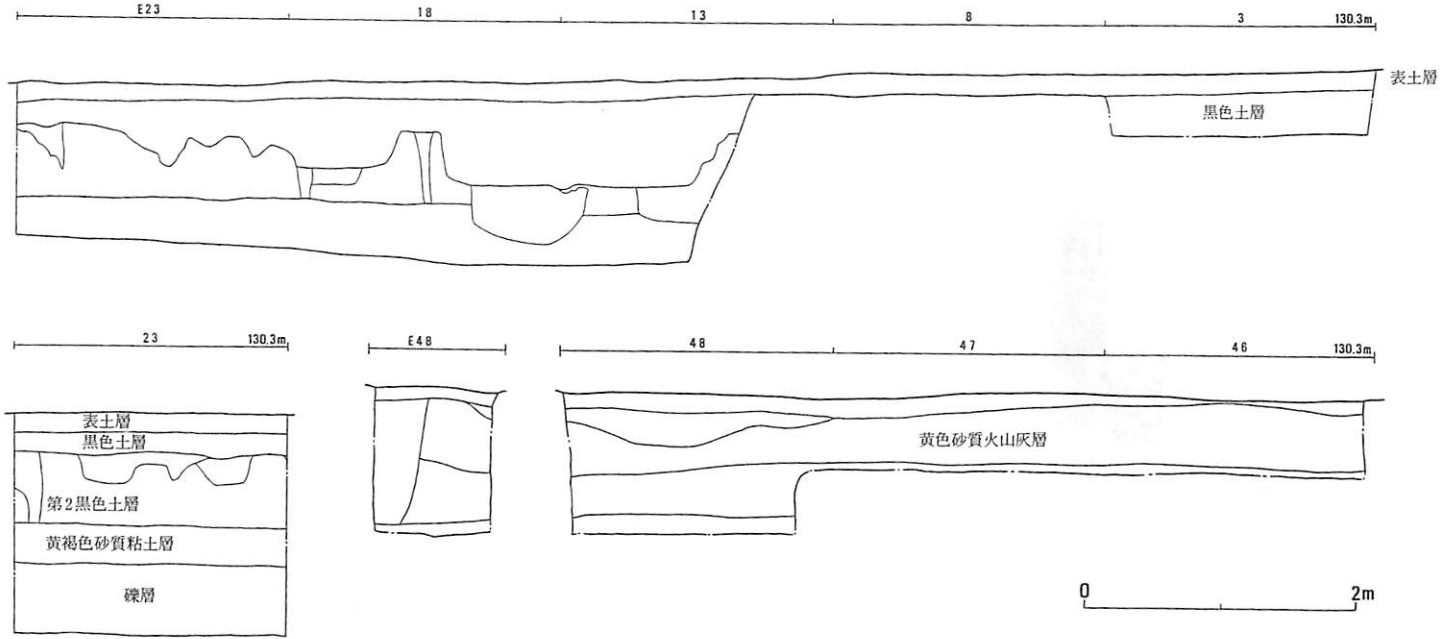
これらの下部には，基盤層としての黄褐色砂質粘土層・礫層がある。

第3節　西地区第1次調査（第9図，図版第5）

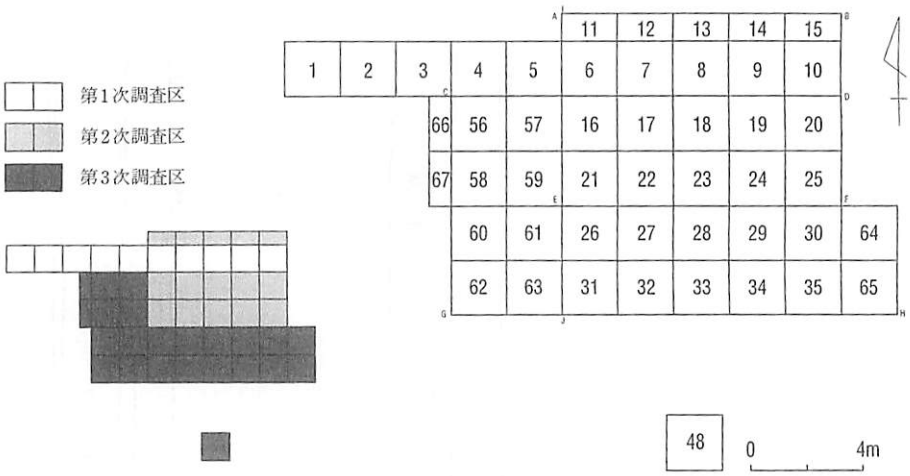
西地区の調査は，上記のような乱掘を直接的な契機として，乱掘の多かった水田の北半に，東西方向の2×20mのトレンチを設定して実施した。

層序は東地区と同様に，表土下に遺物包含層がある。そして8区を中心に夥しい遺物が出土した。出土した土器の大部分は大洞BC式であるが，東端の10区では層を分けて下層より大洞B式が出土し，逆に西寄りの区では大洞C1式が若干混在している。この層の下には約30cmの遺物の少ない層があり，さらにその下に東地区と同様の火山灰層がある。

上記2層は黒色土層で柱穴などの判別は困難であったが，火山灰層上面では8区を中心に柱穴上のピットが数個みられ注目された。



第7図　東地区土層断面図



第９図　西区調査年次別グリッド配置図
（Ａ～Ｊは断面図の位置を示す）

第４節　西地区第２・３次調査（第10・11図，図版第６～12）

第２次調査は，第１次調査区の１～10区を中心に，11～25区を設定して発掘した。１区２ｍ四方であるが，11～15区は隣接する畑地との関係で２×１ｍとなった。

第３次調査は，第１・２次調査区の南側全域に26～54区を設定し，全掘する予定であった。しかし48区の発掘の結果ほとんど遺物がみられず，すでに主要部分から大きく外れていることが判明したため，第２次調査区隣接区を集中的に発掘することにした。

そしてこれらの西端に当たる56・58区において大型土壙の東半分が検出されたため，田の畦ぎりぎりに66・67区を設定し発掘した。

第１次の成果を含め，第２・３次調査の層序は次のとおりである。

Ⅰ層：水田耕作層。厚さ約15cm。

Ⅱ層：水田床土層。約５cm。

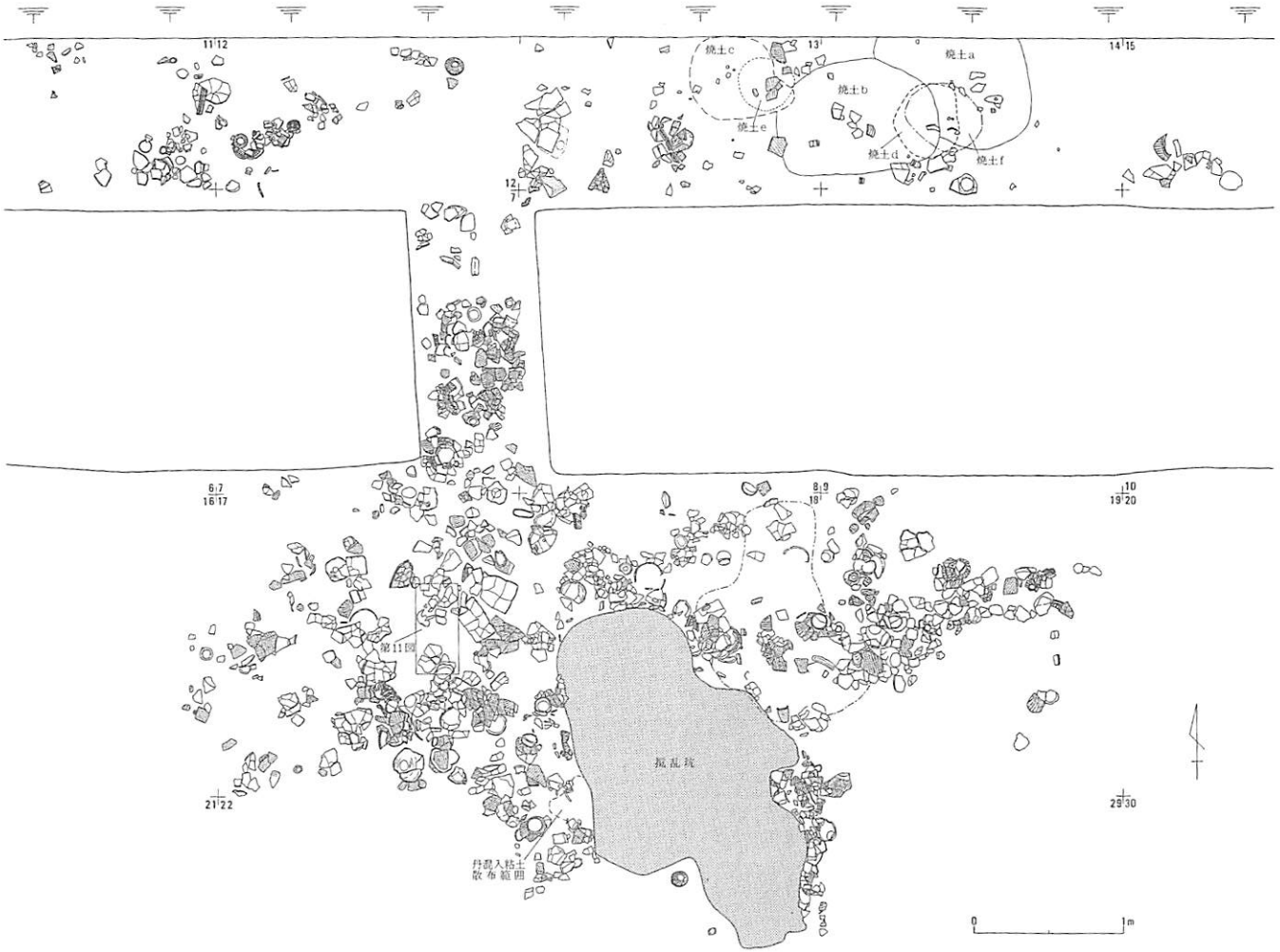
Ⅲ層：遺物包含層である黒色土層。約30cm。

Ⅳ層：Ⅲ層類似の黒色土層。ただし若干茶色味を帯び，パミスの小塊を含む。遺物はきわめて少なく，わずかに土器の小破片を出土するのみ。約30cm。

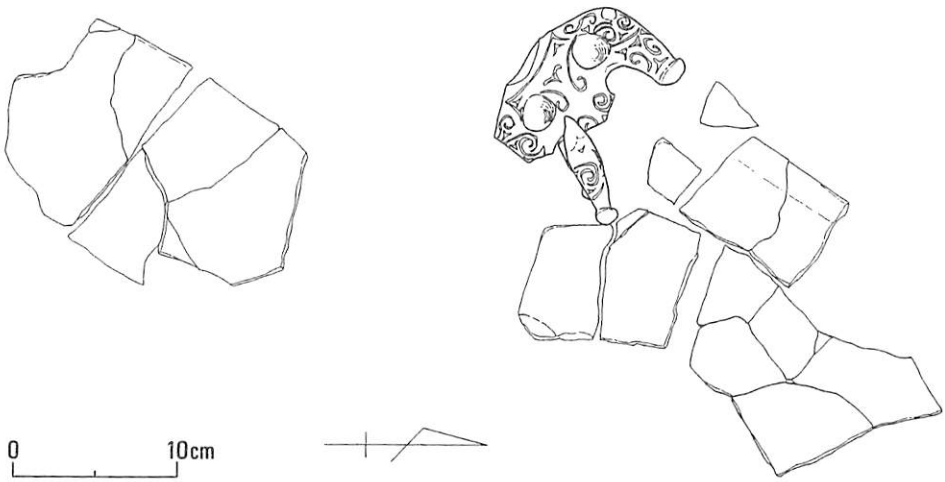
Ⅴ層：パミスの小塊を含むローム質黄褐色土層。約50cm。遺物をまったく含まない。

Ⅲ層の下面は，第１・２次調査区ともに遺物が明確に一つの面を形成していたが，南側に接する第３次調査区においては，両層の区別はやや不明確になった。Ⅲ層出土土器は大洞ＢＣ式を主体とするが，東寄りの区では大洞Ｂ式，西および南寄りの区では大洞Ｃ１式も出土している。

Ⅲ層における遺物の出土量は実に夥しいものであり，完形土器も多数含まれている。遺物の種類は土器を主にしているが，その他に岩偶・岩版とその加工途上品などの，きわめて亀ヶ岡文化的な遺物も多数含まれている。特に17区で出土した岩偶胸部（第11図）は，出土状態の明確な唯一の例であるし，60区



第10図　遺物出土状況実測図



第11図　岩偶出土状態実測図

で出土した岩偶左腕部には多数の切断などのための傷が無数にみられ，岩偶ばかりではなく土偶の用途についても重要な示唆を与えてくれる希有な資料である(図版11・12)。

西地区において検出された遺構は，大土坑と発掘区のほぼ全域にわたって多数検出された柱穴状ピットである。いずれもⅤ層上面においてはじめて検出できたのであり，竪穴住居址の形跡などは確認できなかった。

また第2次調査においては，花粉分析のための資料の採取を実施した。ソバの花粉が検出されるなど，重要な資料を得ることになった。

第3章　層序と遺構の分布

第1節　第1次調査の層序

1)東　　地　　区

縄文晩期の遺物包含層下の火山灰層は，約50cmの厚さをもち，何らの遺物も含まないが，この層の下の漆黒の黒色土層を発掘したところ，きわめて少量ではあるが，縄文前期の円筒下層式系の土器片が出土した。

このことから，縄文時代の前期と晩期の間に火山灰の堆積が行われたことがわかるが，地質学の成果によれば，この供給源は十和田火山の噴火であり，縄文時代の環境を考える上で興味深い。

2)西　　地　　区

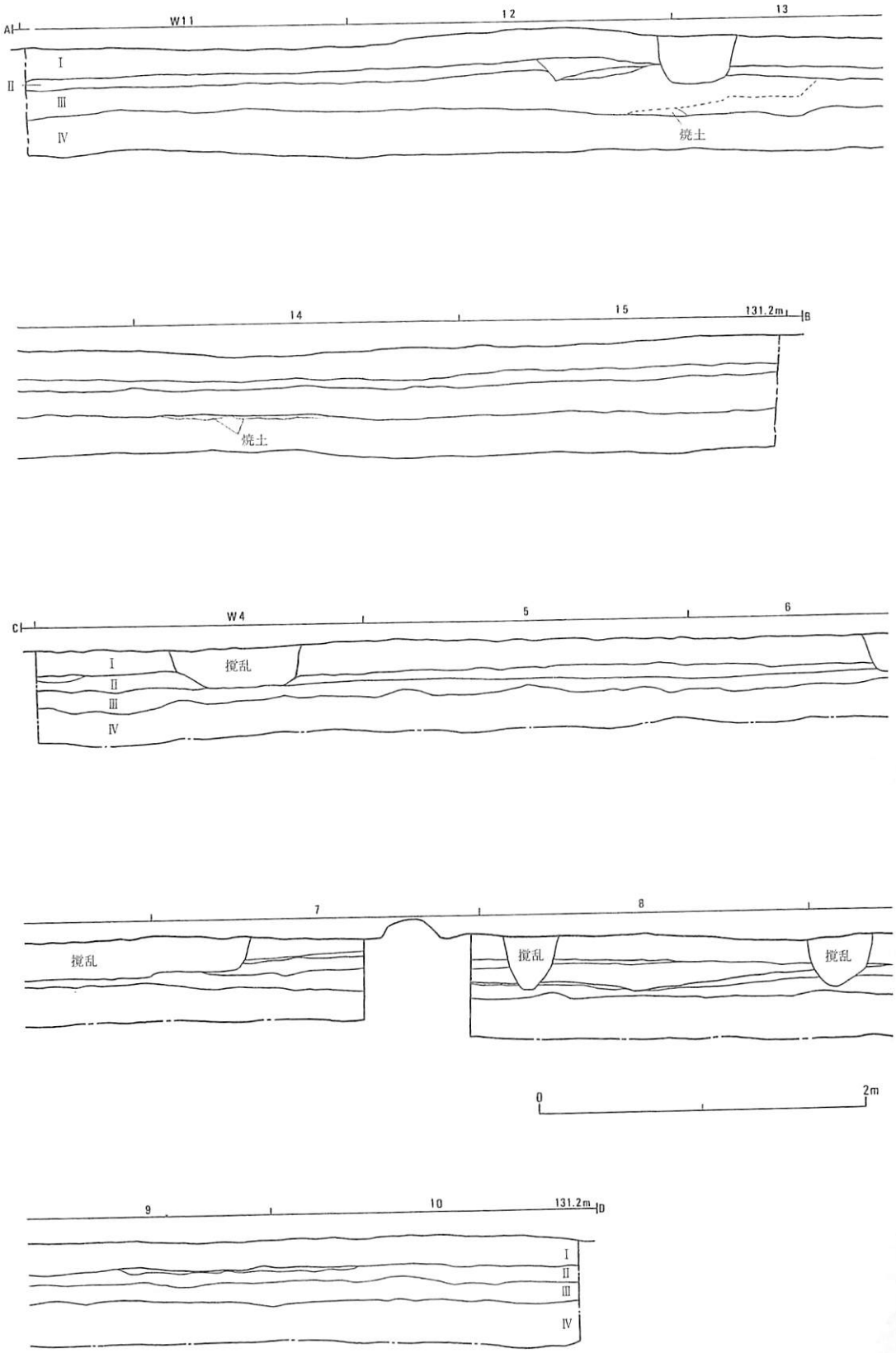
層位は，約20cmの表土下に約20cmの遺物包含層があり，その下面は截然としていた。とくに8区を中心としたところでは夥しい遺物がみられた。出土土器の型式は大部分が大洞ＢＣ式であるが，東端の10区では層をわけて下層より大洞Ｂ式出土し，西よりの区では大洞Ｃ１式も若干混じえる。この層の下に約30cmの遺物の少ない層があり，この下に火山灰層がある。上記2層は黒色を呈し柱穴などの判別は困難であったが，火山灰層上面では8区を中心に柱穴様のピットが数個認められ，遺物包含層との関係が注目される。

第2節　第2・3次調査の層序と遺構

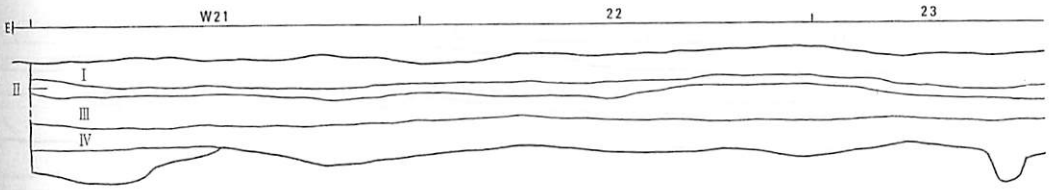
層序はⅠ層，Ⅱ層が水田の耕作土，床土で，Ⅲ層の有機質の黒色土層が縄文時代晩期の包含層である。Ⅳ層もⅢ層によく似た黒色土層であるが，若干茶色味を帯びて締っており，パミスの小塊を含んでいる。僅かに土器の小片を出土するのみである。Ⅲ層の下面で遺物が一つの面を成して出土して両層を明確に分けている。第3次調査では第2次調査区の南側を発掘したが，そこでは両層の区別はやや不明瞭となった。Ⅴ層はローム質の黄褐色土層でパミス小塊を含み，Ⅳ層の黄色パミス層とともに全く遺物を含んでいない。Ⅲ層出土の土器は大洞ＢＣ式土器を主体とする。東寄りの区でＢ式が，西および南寄りの区ではＣ１式も出土したが，いずれも量的には少ない。

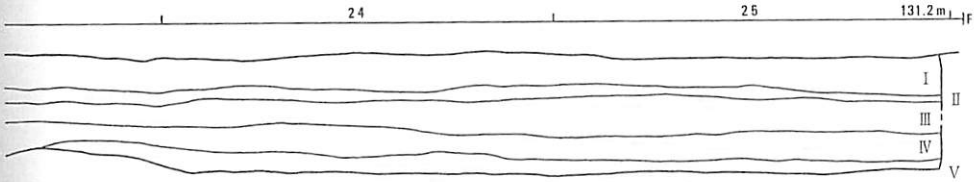
遺構は土坑と柱穴状のピットが検出された。大土坑は56・58・66・67の4区にまたがってほぼ円形を成しており，径約2ｍ，深さ1ｍほどのものである(第15図，図版13)。土壙内からは土器片のほかに石器時代勾玉が1点出土し，また小片ではあるが骨片と木炭片も認められた。その性格は不明である。一方，柱穴状のピットは，発掘区のほぼ全域にわたって数多く検出された。いずれもⅤ層上面で初めて検出できるもので，竪穴住居址の形跡などは認められなかった。

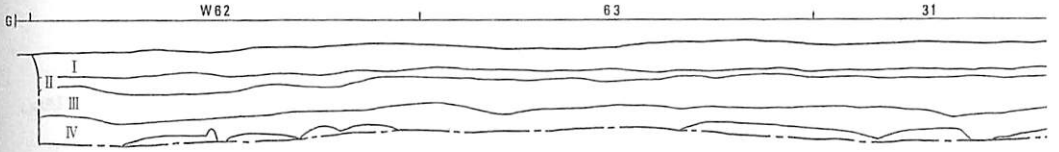
第2次調査の際に採取した花粉分析の試料には，出土した土器の中につまっていた土壌と各層から採取した土壌とがある。中の土壌を試料とした土器はいずれも完形で，倒立またはそれに近い出土状態の

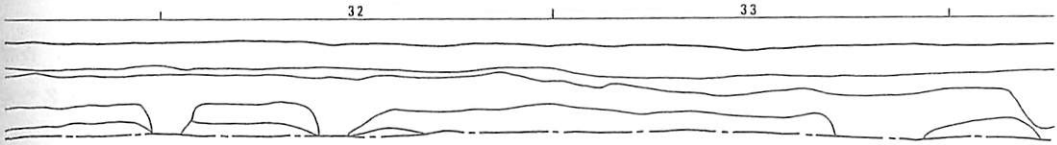


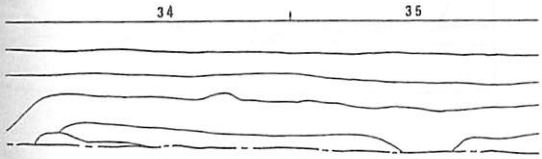
第12図　西区土層断面図・1

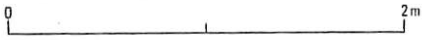


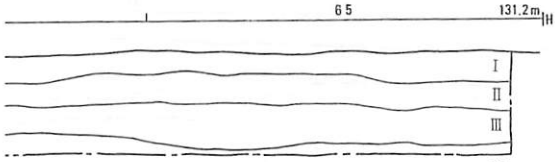




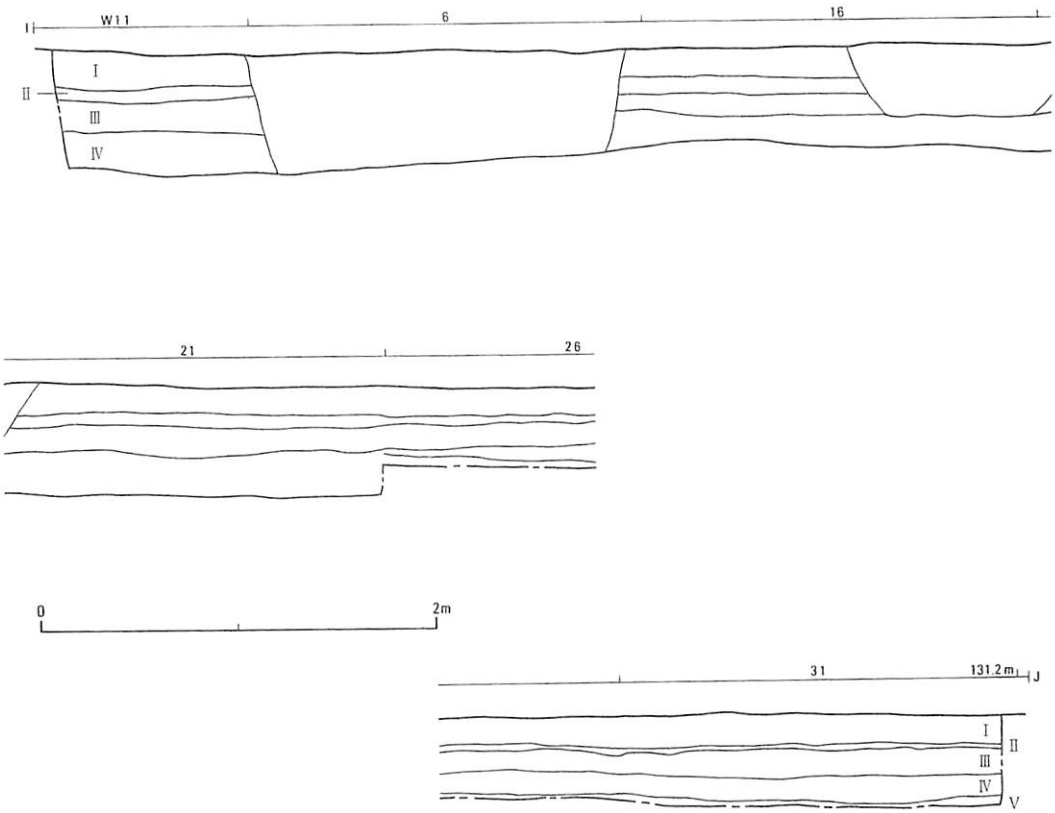






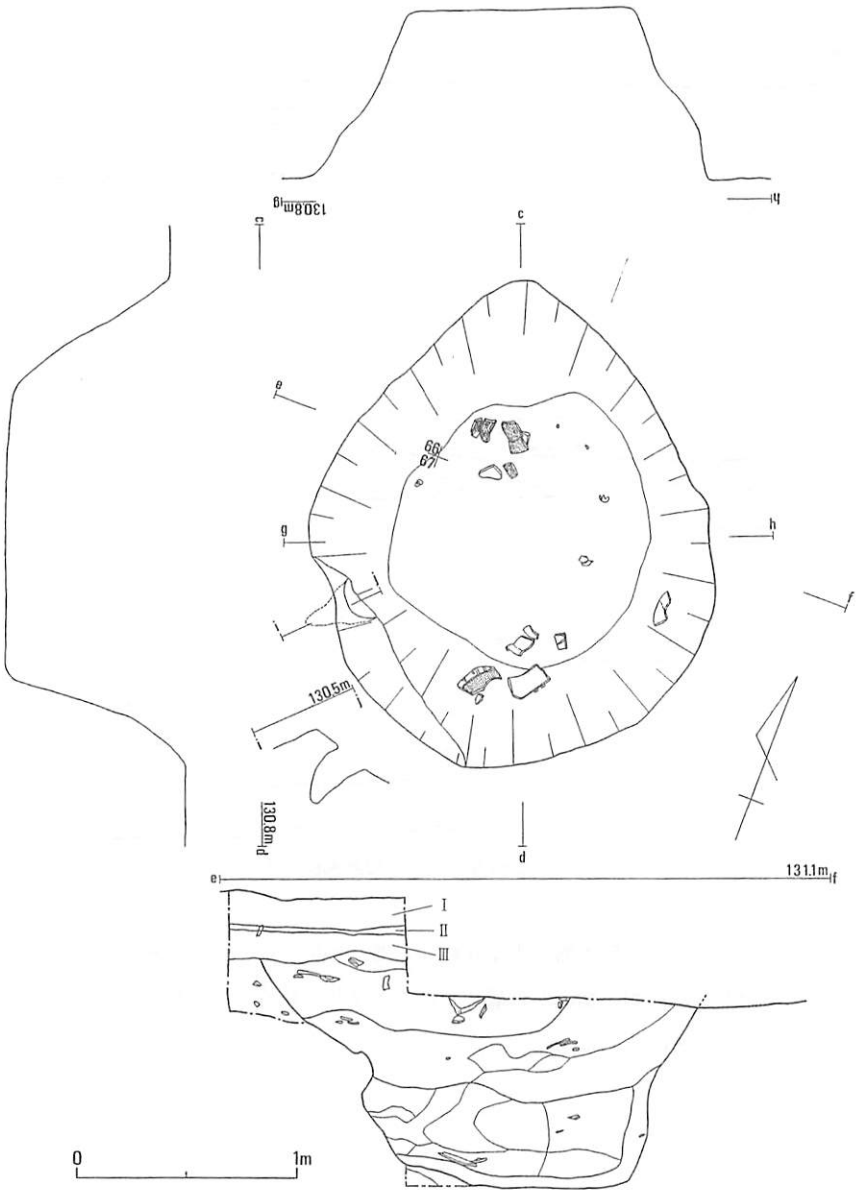


第13図　西区土層断面図・２

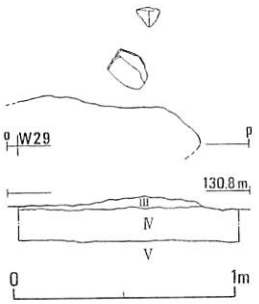


第14図　西区土層断面図・3

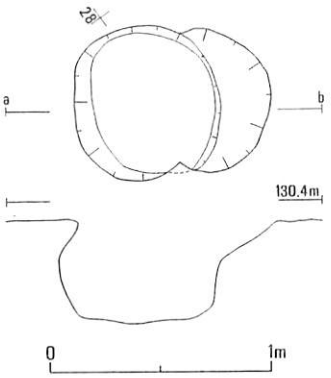
ものを選んだ。その器形には壺形土器，小型深鉢形土器，鉢形土器，注口土器などがある。また，各層の試料には第2次調査区の南側の壁面から層ごとに立方体状に採取した土壌で，第3次調査の区名で表すと，26・27・28・30の各区にあたる。



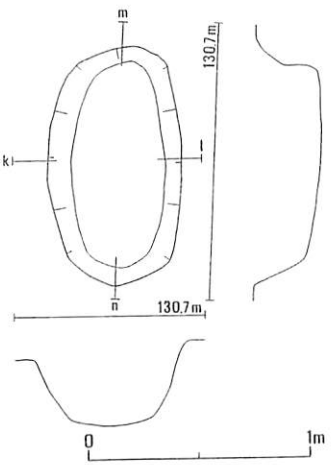
第15図　西区56，58区大土坑実測図



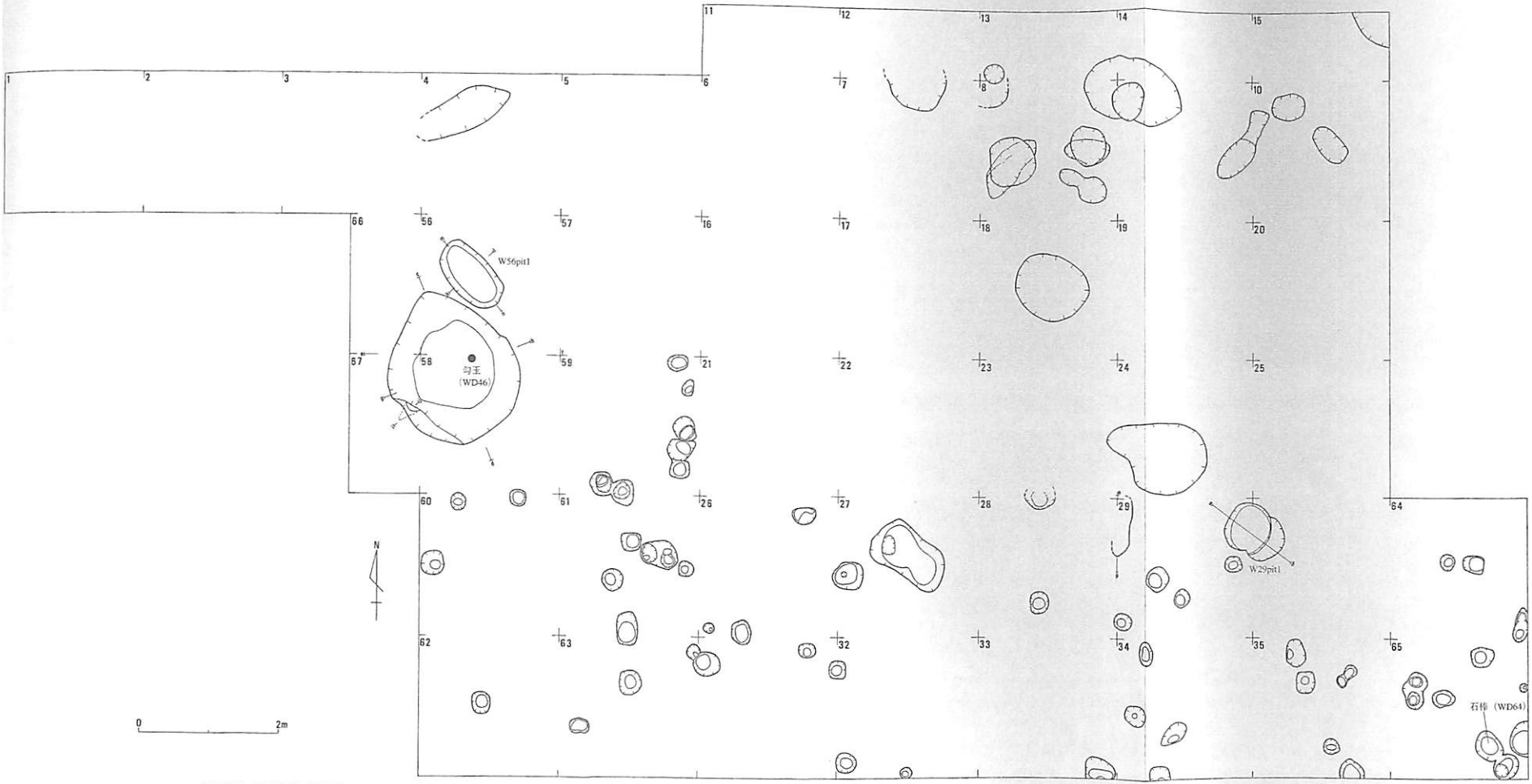
第16図　西区Ｗ29焼土及び関連遺物実測図



第17図　西区Ｗ29ｐｉｔ１実測図



第18図　西区Ｗ56ｐｉｔ１実測図



第19図　西区遺構 分布図

第4章　出土遺物・1　縄文土器

はじめに

3次にわたる発掘調査の結果，西地区・東地区から，多量の縄文土器・土製品・石器・石製品などが出土した。その総量は，遺物収納パットで約500箱におよぶ。もっとも，多量に出土したのは縄文土器で，約400箱。土製品は，土偶・耳飾りなど約24点，石器約300点，石製品は，岩偶・岩版など約56点である。

第4～8章では，このうち西地区から出土した遺物を中心に，各種類の遺物を出土状態なども含めながら順に解説する。

第1節　土器出土状態(第20・21図，第1・2表)

1．出土状態と遺物の抽出

第2章において記したように，今回の調査において出土した土器は，Ⅲ層を中心に密集すると言ってよいほど大量にかつ折り重なるような状態にあった。とくに，W7～10区，12～15区，17～20区にかけては，もっとも集中しており，土器がびっしりと埋もれた状況は，この遺跡の特殊性を表しているようにも思える。

現段階において，遺物の粗密を破片数などの正確な数字で表すことはできないが，幸運にも完形品を含め，器形がほぼ復元できるもの258点を抽出することができた(第1表)。口縁部破片の点数算出の個体数による分析に変わるものではないが，同一個体探しなど接合関係の作業を終了した上で抽出できたものであり，器種構成や出土分布，さらには時期別の検討など基本的な分析は可能であると考えている。

第1表　土器器種組成表

器種＼グループ		Ⅰ		Ⅱ		Ⅲ		その他		全体	
深鉢	粗製	28	17％	5	10％	0	0％	3	11％	36	14％
	有文	12	7	4	8	1	8	3	11	20	8
	台付	3	2	1	2	0	0	0	0	4	2
鉢	鉢	34	20	6	12	2	15	1	4	43	17
	台付	18	11	8	16	2	15	7	25	35	14
浅鉢	浅鉢	18	11	10	20	1	8	5	18	34	13
	台付	6	4	1	2	1	8	1	4	9	3
壺		27	16	4	8	3	23	2	7	36	14
注口土器		9	5	0	0	1	8	1	4	11	4
異形土器		7	4	3	6	1	8	3	11	14	5
ミニチュア		4	2	9	18	1	8	2	7	16	6
小計		166	64％	51	20％	13	5％	28	11％	258	100％

2．分布の検討

第20図は，抽出した258点を出土区ごとにまとめ，ドットの大きさで出土分布の集中度を表したものである。これらの分布から，3つの集中域を見て取れる。

Ⅰグループは，W7から10区，12から15区，17から20区および24区を中心とする地域で，全点の64％，166点が集中する。

Ⅱグループは，W4・5，56区から59，66・67区にかけてのもので，20％，51点が含まれる。

Ⅲグループは，W30・35・64・65区にあたる。5％，13点ある。

3．器種構成

第1表は，各グループの器種別組成表である。

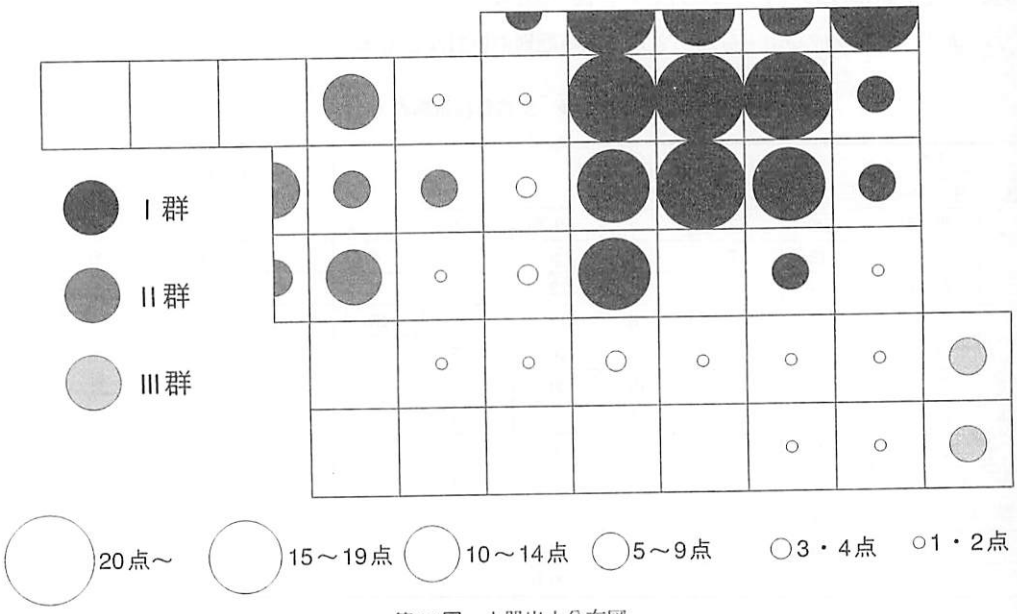
全点の器種組成を見ると，鉢形土器が約30％，粗製の深鉢形土器が14％，有文の深鉢形土器が10％と鉢系の土器群がほぼ5割を越える。

Ⅰグループの器種組成の割合が，全点のものとほぼ同様であるのに対して，Ⅱグループは，ミニチュアと異形土器が，18％，6％と全体の約4分の1を占めており，遺構が比較的多く確認されたことと何らかの関係を指摘できる。

いっぽう，Ⅲグループは，壺形土器が23％と他のグループと比較しても，もっとも多い。また，粗製の深鉢形土器の完形品は一点も出土していない。

4．時期別の分布

こうした各グループについて(第2表)，それぞれの土器の型式を重ねた(第21図)。あくまで時期が比



第20図　土器出土分布図

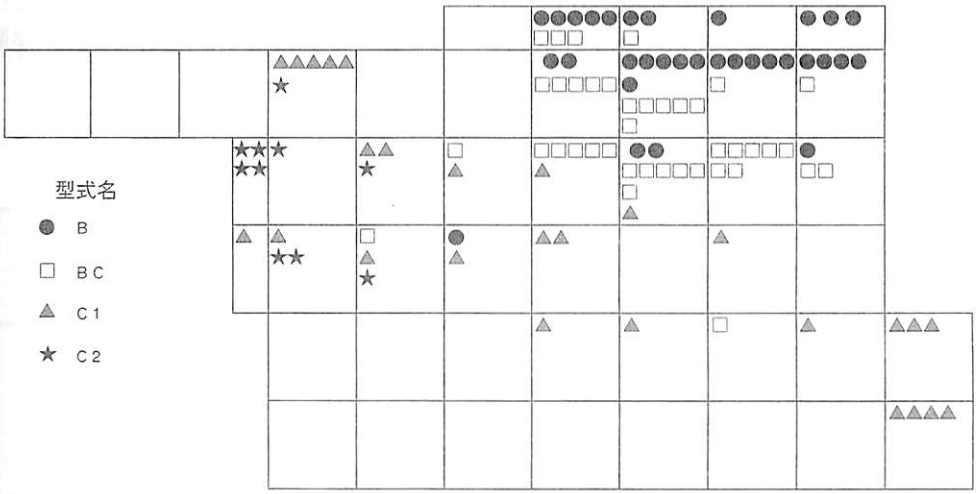
第２表　大洞各型式別集計表（型式の判定できるものに限定）

型式＼グループ	Ⅰ		Ⅱ		Ⅲ		その他		全体	
B	30	41.7％		％		％	1	9.1％	31	29.2％
BC	37	51.4					3	27.3	40	37.7
C１	5	6.9	10	50.0	3	100	6	54.5	24	22.6
C２	0		10	50.0			1	9.1	11	10.4
小計	72	67.9％	20	18.9％	3	2.8％	11	10.4％	106	100％

較的明瞭なものに限っているが，あきらかに，Ⅰグループは，大洞B・BCがほとんどである。また，北側が大洞Bが目立つのに対して，南側は大洞BCが多い。

Ⅱグループは，大洞C１ないしC２が目立つ。Ⅲグループは，すべて大洞C１である。

また，Ⅰグループに含めたが，さらにこの分布域の南縁部に接するように大洞C１に含まれる土器が出土しており，Ⅲグループとの関係も含めると，Ⅰグループも北から南への方向で，時期が新しくなっていく傾向が読み取れる。



第21図　大洞各型式別出土分布図

第２節　土器の分類（第22～25図）

１．分類の方針

今回，土器の報告は，完形もしくは準完形品を対象とすることもあって，器形と文様の関係を明確にするという方向で分析を行った。とくに，器形については，従来さまざまな分類の方法が提示されているが，この時期の土器の器形の豊かさから，器形分類に固執すると文様の複雑さもあいまって，ややもすると一個体一分類になる可能性が高い。したがって，今回はできるだけ単純な分類に留めることによって，文様との関係を大枠で捉えられるように配慮した。

各器種・各分類での記述はできるだけ簡単に止めたが，それぞれに属する個体については，大きさや器形・文様のほか，胎土・色調・焼成，また器面調整などの技法についてもできるだけ観察を記載した。

また，文様の分類については，できるだけ客観的な記述のため，藤沼氏の文様の分類(藤沼1983および1988)と高橋氏の口縁部突起・刻みの分類(高橋1981)を利用し，従来の文様の分類の範疇で記述するように努めた。

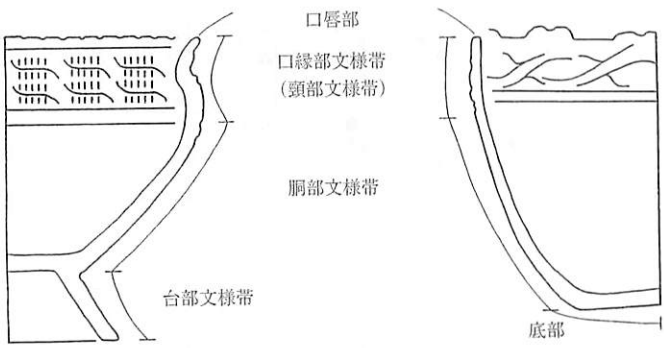
今回解説する資料について，以下に分類の基本的方法をまとめておく。

2．器　種　分　類

深鉢形土器・鉢形土器・浅鉢形土器と各々の台付のもの，壺形土器・注口土器に分ける。一部，異形土器が含まれる。それぞれの分類の詳細は，各器種の項目を参照。

3．器　形　分　類

器形分類については，前記したように文様との対応を検証する方向から，細かい分類は避けた。まず，各器種ごとで，口頸部がくびれるものと，くびれず直立ないし内湾するものの2大別し，それぞれ口縁部形態や胴部形態から細分した(第22図)。なお，それぞれの分類の詳細は，各器種の項目を参照。



第22図　各部位および文様帯名称模式図

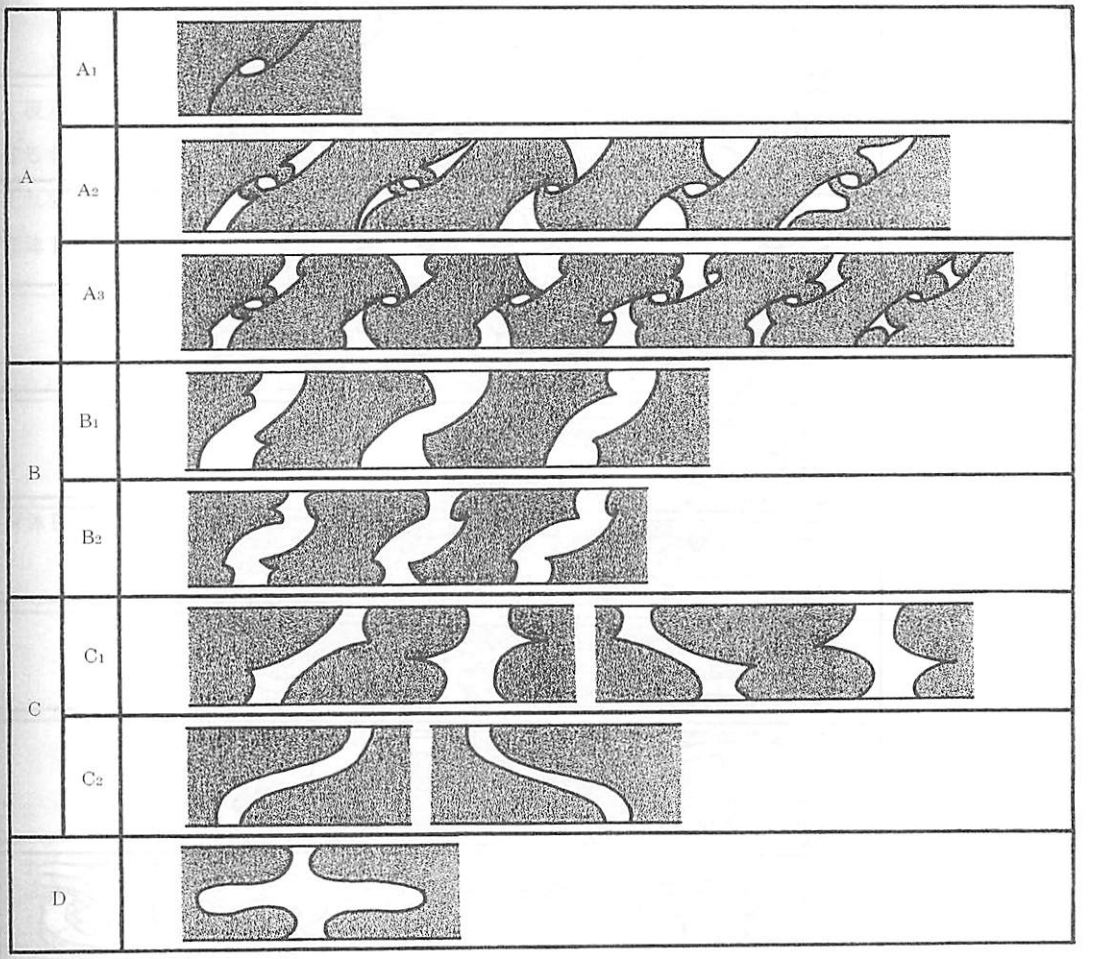
4．文　様　分　類

該期の土器群は，文様と技法から大きく，粗製縄文系，半・精製有文系，無文系に分けられる。各器種の分類を理解するために，器形分類に優先させる場合もあるが，器形と文様の組み合わせを意識した解説を心掛け，将来の破片の分析に備えた。

なお，個体の文様の説明は，個々の文様を口縁部，口頸部，胴部の各文様帯ごとに解説することにとどめる。

なお，具体的な文様の記述のルールは下記のとおりである。

・三叉文については，玉抱き・入り組み・連結に大別し，さらに斜めか平行か，右下がり左下がりに分ける。



第23図　文様分類図・区画文（藤沼1983より作図）

・羊歯状文については，ネガ・ポジに大別し説明を加える。ポジ文様を基本とする羊歯状文に関しては，斜め・平行，そして右・左下がりに分ける。

・雲形文については，藤沼論文を参考にして，区画文・配置文を大別し，さらに区画・配置の種類によって細分する(第23～25図)。

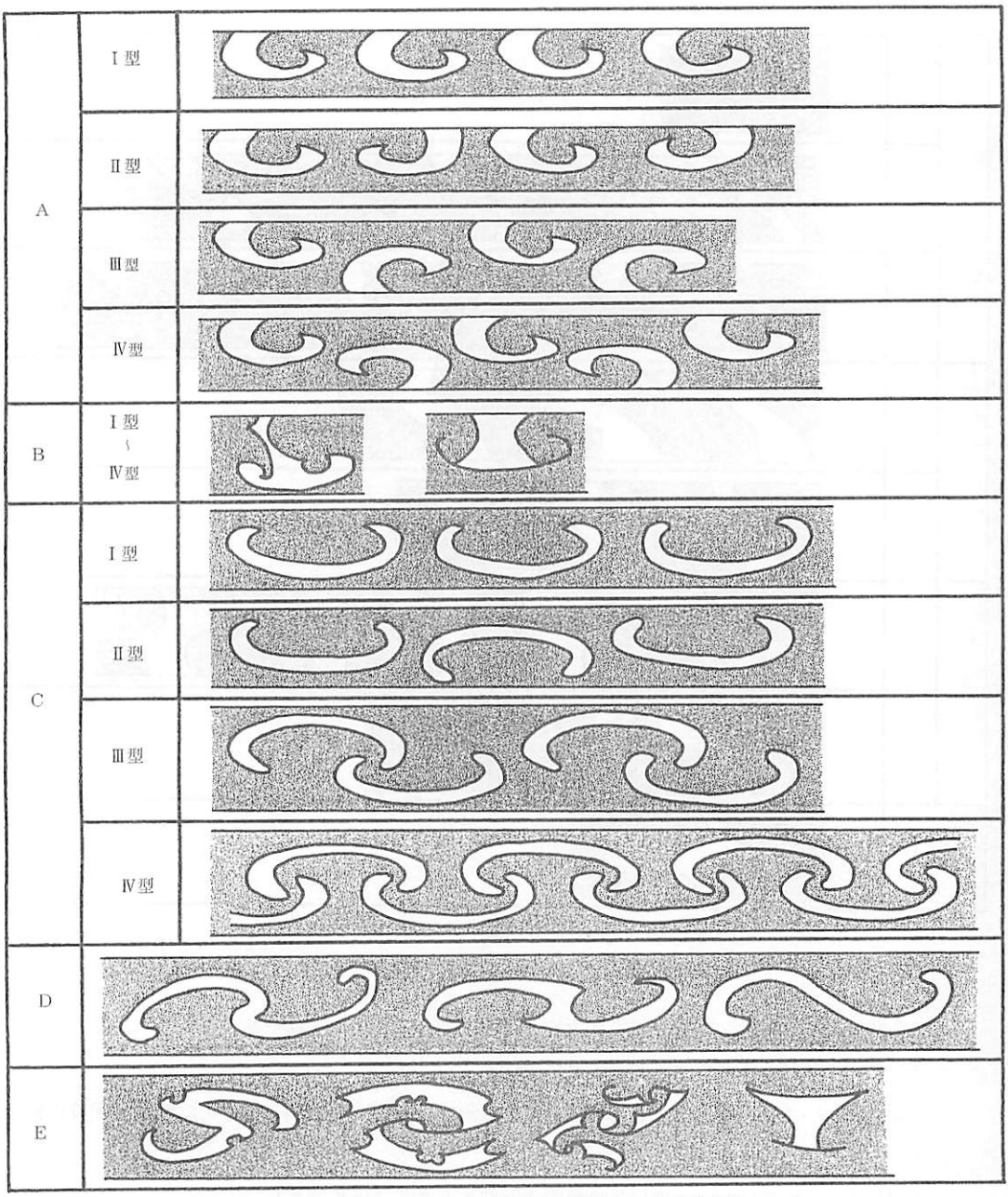
・大洞B式については，三叉文以外に配置文を基本とする文様や磨消状文が認められるため，これに関しては個別に解説を加える。

・若干，磨消による工字文が展開する大洞A式が含まれているが，これに関しては適時解説する。

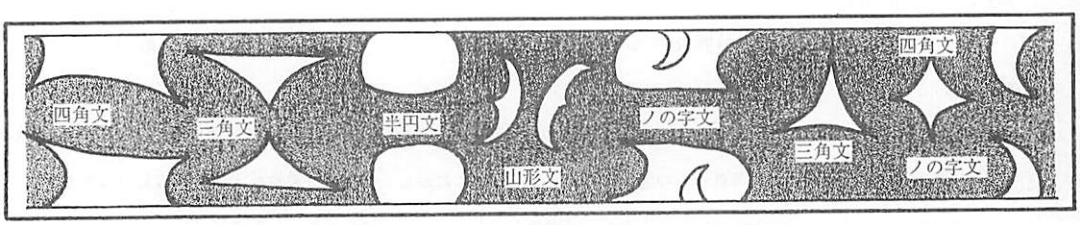
個体解説について

各器種ごとに個体解説を行ったが，基本的には実測図図版の番号を見出しとしている。対向頁の写真図版には実測図を掲載したもの全てを載せたが，必要に応じて写真のみの個体も掲載している。したがって両頁中で番号がずれているものもある。

また，写真図版について縮尺は1/2または1/3であるが，不同のものもある。実測図のスケールを参照されたい。



第24図　文様分類図・配置文（藤沼1983より作図）



第25図　文様分類図・充填文（藤沼1983より作図）

第3節　深鉢形土器(第26図，図版第16～43，第3・4表)

1．分　　類

復元個体のうち，口径1に対して，器高がそれを上回るものを深鉢形土器とした。そのうち頸部を有するものをⅠ類，口縁部まで真っ直ぐ立ち上がる砲弾形のものをⅡ類とし，さらにその形態から，それぞれを下記のように3分類した。

深鉢Ⅰ類－1：　明瞭な肩部と長く外反もしくは内湾する口縁部をもつもの。

2：　明瞭な肩部と短く立ち上がる口縁部をもつもの。

3：　深鉢Ⅰ類のうち明瞭な肩部を形成しないものや，頸部の屈曲が弱く口縁部への立ち上がりが認められない断面逆く字形を呈するもの。

深鉢Ⅱ類－1：　口縁部が内湾するもの。

2：　口縁部が直立するもの。

3：　底部から口縁部にむかって比較的直線的に広がるもの。

また，深鉢形土器は，他の器種に比べて，大きさにばらつきがある。したがって，口径・器高の分布から，大型(口径・器高が25cm以上のもの)，中型(同18～25cm程度)，小型(同10～18cm程度)に分けた。

さらに，文様の在り方から4分類した。

A：　文様をもつ土器。

B：　沈線文だけが器面に施される土器。

C：　文様帯をもたず，器面に縄文が施されるだけの，いわゆる粗製土器。

第3表　深鉢形土器分類別集計表

		大	中	小	不明	小計	計	
Ⅰ 1	A	1	2	1		4	4	
	B						28.6 %	
	C							
	D							
2	A		1	1		2	10	
	B		1	4	1	6	71.4	
	C	1		1		2		14
	D							26.9 %
3	A							
	B							
	C							
	D							
計		2	4	7	1		14	
		14.3	28.6	50.0	7.1		100 %	
		大	中	小	不明	小計	計	
Ⅱ 1	A		1	2		3	25	
	B						65.8 %	
	C	8	10	4		22		
	D							
2	A		2			2	11	
	B						28.9	
	C	4	2	3		9		38
	D							73.1 %
3	A						2	
	B						5.3	
	C	2				2		
	D							
計		14	15	9			38	
		36.9	39.5	23.7			100.1%	
総　計		16	19	16	1			52
		30.8	36.5	30.8	1.9			100.0%

D：　文様帯の有無に関わらず，器面に全く縄文が施されていない土器。

なお，石亀遺跡出土土器の大半は，晩期前半の土器であるが，若干，後期の土器が出土している。図版17－1は，波状口縁をもち，波状部直下に瘤が施される。口縁部文様帯には，後期後葉に典型的な入組文で，磨消縄文が施されている。縄文の撚りはＬＲである。後期後葉の瘤付土器である。図版19－1については，類例が少なく，時間的位置づけは困難であるが，波状口縁と，沈線と刻みによる文様構成から，これも後期後葉の土器と考えておきたい。

2．分布と組成

今回の分析では晩期に含まれる52個体を対象に行い，各類の構成は，第3表に示した。

これによれば，Ⅰ類が30％弱で，文様を持つ小型品が主体を占めるのに対して，Ⅱ類は中・大型品を中心に，いわゆる粗製土器がこの類の9割近くと多くを占める。

時期については，粗製土器を中心に時期を明確にできるものは少なかった(第4表)。

第4表　深鉢形土器型式別集計表（ただし、有文系のみ）

分類＼型式		B	BC	C1	C2	計
Ⅰ 1	A	4	－	－	－	4
	B	－	－	－	－	
2	A	－	2	－	－	2
	B	－	2	3	1	6
計		4	4	3	1	12
		33.3	33.3	25.0	8.3	99.9％
		B	BC	C1	C2	計
Ⅱ 1	A	－	3	－	－	3
	B	－	－	－	－	
2	A	2	－	－	－	2
	B	－	－	－	－	
計		2	3	－	－	5
		40.0	60.0	－	－	100.0％
合計		6	7	3	1	17
		35.3	41.2	17.6	5.9	100.0％

3．各類の解説

1）深鉢Ⅰ－1類

復元固体のうち，当類は全てＡ類である。いずれも，頸部の屈曲が明瞭で大きい。頸部および頸部下に施される二・三条の沈線によって文様帯と胴部縄文帯が分けられ，文様帯には，三叉文の類が施される。

2）深鉢Ⅰ－2類・粗製Ⅰ－2類

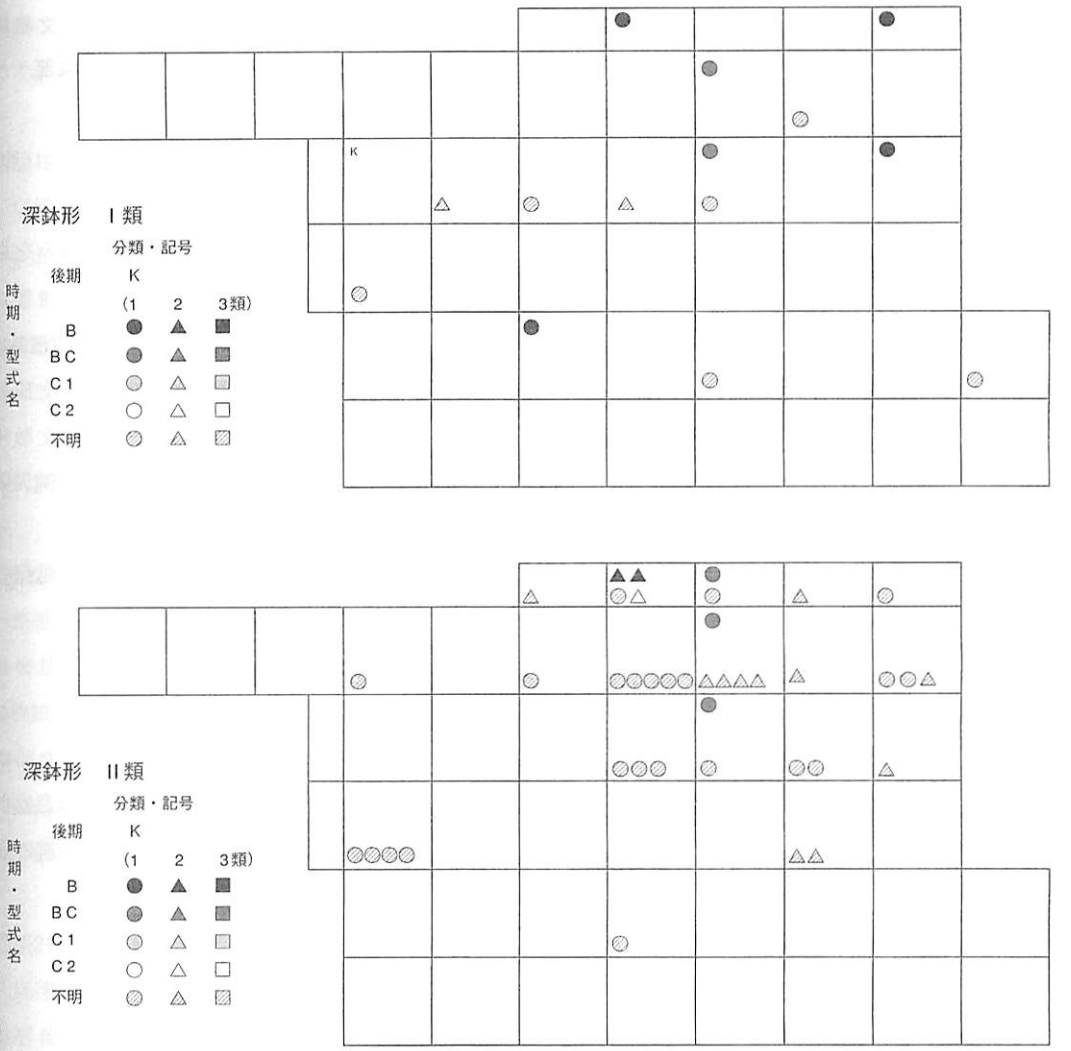
10点のうち，粗製土器の2点（2Ｃ類）が粗製Ⅰ－2類に含まれる。

2Ａ類は2点，頸部直下に羊歯状文が，2Ｂ類は6点で，沈線文のみが描かれる。中・小型品の両類であるが，短く屈曲する口頸部をもち，底部にむかってすぼまるａ形態のものと，寸胴形の胴部をもつｂ形態のものとがある。2Ｂ類には両者が見られ，寸胴形（ｂ形態）のものには突起をもつもの（図版25－2・3），口縁部が外方向に開く（同3）などの口頸部の形の違いなど，個体差が顕著である。

3）深鉢Ⅱ－1類

Ⅱ類のうち口縁部が内湾するもので25点ある。しかし，実際は小型の有文精製品の2点と中型の有文精製品1点の3点を除くと，すべてＣ類の粗製縄文土器である。

粗製の縄文土器は，今回の調査においても出土土器の器種構成の約14％を占めている（第1表）。中・



第26図　深鉢形土器出土分布図

大型品が約７割である。大半がⅡ－１類とⅡ－２類に属し，Ⅱ－３類に２点見られる。これらはあわせて後述する。

４)深鉢Ⅱ－２類

文様をもつＡ類が２点，粗製縄文深鉢Ⅱ－２Ｃ類が９点ある。

文様をもつものは，口縁部文様帯に三叉文が施される中型品である。どちらも口唇部に三叉文に対応すＢ字状突起をもつ(図版37)。

５)深鉢Ⅱ－３類

大型の粗製縄文深鉢Ⅱ－３Ｃ類の２点のみである。

4．粗製縄文深鉢形土器の分析

ここで，粗製縄文深鉢形土器について，まとめてみる。

器形から分類できたⅡ－１Ｃの22点，Ⅱ－２Ｃの９点，Ⅱ－３Ｃの２点，計33点のうち，口縁部，とくに口唇部の調整と形態から３つに細分できた32点について検討を進めた。

a類：口唇部を面取り状にナデて平坦にするもの。

b類：口唇部をナデて丸く調整するもの。

c類：口唇部外面直下を強くヨコナデする結果，口縁部が軽く屈曲するもの。あるいは内面が厚みをもって膨らむもの。

Ⅱ－１Ｃａ類は，11点と全体の半数で主体をなす。口唇部の平坦面が内側に傾くもの(図版29－１，２，３，図版31－４，６，図版33－５，図版35－１)と，平坦面が水平なもの(図版29－５，６，図版31－１，３)がある。縄文はすべてＬＲである。

Ⅱ－１Ｃｂ類は，８点ある。口唇部に刻みのあるもの(図版35－２，３)，Ｂ字状突起をもつもの(図版31－５，７)がある。縄文はすべてＬＲである。

Ⅱ－１Ｃｃ類は，３点である(図版33－４，６，７)。３点とも外面がヨコナデされ口縁が軽く屈曲する。

Ⅱ－２Ｃａ類は，７点である。このうち口唇部が内傾するものは２点(図版39－３，４)である。

Ⅱ－２Ｃｂ類は，２点。Ⅱ－２Ｃｃ類はない。

Ⅱ－３Ｃ類は，２点とも口唇部は丸く調整される。

いずれにしても，各々は形態差が少なく，所属時期については不明なものが多い。ただし，出土分布から相対的に見た時期差が求められる可能性が有るが，完形品だけの検討であるので，今後の破片の分析を待ちたい。

5．個 体 の 解 説

1)有文・無文系

ａ．深鉢Ⅰ－１Ａ

図版17－２(W26区出土)

底部を欠損している。口唇部断面形状は丸状である。

口唇部装飾　口唇端部から派生する右下がりの沈線によって装飾の単位が区画されているようである。実測図にみるように，口唇部右半には区画され一単位にさらに刻みによる連続するＢ字突起が形成される。一方で左半には刻みは施されていない。しかし，口唇部の大部分を破損しており，全体を伺うことはできない。

口縁部文様帯　二段の構成になっている。上段は口縁部文様帯には縄文が施され，三叉文が描かれる。この三叉文は，上下の組み合わせとみるか，左下がりの斜めで組み合わされているとみるか判断は難しいが，文様帯中位に沈線による楕円形文があることから，左下がりに組み合わせれる玉抱き三叉文と考えるのが妥当と思われる。下段には刻目文が施されている。

頸部文様帯　列点文が施されている。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲである。

大洞Ｂ式に相当する。

図版19－２（W12区出土　口径15.2　高さ16.2：単位cm，以下略）

口縁部が緩やかに内湾する。口唇部断面形状は丸状である。底部無文帯をもたない。底部は平底を呈す。

口唇部装飾　浅い刻みが施されている。

口縁部文様帯　左下がり，平行，右下がりの入組三叉文が施される。文様の構成に規則性がみられない。

頸部文様帯　一条の沈線が施されるにとどまる。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲが施されている。

大洞Ｂ式である。この土器の器形は石亀遺跡の同時期のものと比べ，やや特異なものである。

図版21－１（W20区出土　口径12.5　高さ10.0）

底部を欠損する。頸部文様帯をもたない。口唇部断面形状は丸状を呈す。

口唇部装飾　口唇部には，二個一対のＢ字状突起が一箇所に施されている。

口縁部文様帯　文様は，不規則な沈線と烈点で構成される。

胴部文様帯　縦走する縄文が施されている。

器形から大洞Ｂ式に相当すると思われる。また，雑な文様構成をとるが，口縁部文様帯の沈線が途切れる箇所は，口唇部の突起と符合している。

図版21－２（W15区出土　口径17.1　高さ19.7）

底部無文帯をもたない。口唇部断面形状は面取りに近い丸状。

口唇部装飾　口唇部にＢ字状突起が連続して施されている。

口縁部文様帯　文様帯には，左下がりの入組三叉文が描かれる。

頸部文様帯　頸部直下に烈点文が施されている。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲ。

大洞Ｂ式である。

ｂ．深鉢Ｉ－２Ａ

図版23－１（Ｗ８区出土　口径19.4　高さ20.1）

口唇部断面形状は丸状を呈し，先端部はやや厚くなる。底部は平底を呈す。

口唇部装飾　Ｂ字状突起が連続して配置され，口縁部文様帯の直上に刻みが施される。

口縁部文様帯　刻目文が施される。

頸部文様帯　２段の文様帯が構成されている。上段は左下がりに斜行する羊歯状文，下段には区画文による

磨消縄文が施されている。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲが施される。

底部無文帯　二条の沈線により胴部と区画される。

大洞ＢＣ式である。

図版25－1（W18区出土　口径11.6　高さ13.4）

口唇部断面形状はやや先細りする丸状を呈する。口唇部内面には１条の沈線が施される。底部無文帯をもたない。底部は，平底を呈す。

口唇部装飾　Ｂ字状突起が連続して施される。口唇部装飾と口縁部文様帯とを区画する沈線が施されているが，雑な施文で口縁を一周しない。

口縁部文様帯　刻目文が施される。

頸部文様帯　右下がりの並列する羊歯状文が施される。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲが施される。

大洞ＢＣ式である。

ｃ．深鉢Ｉ－２Ｂ

図版23－2（W64区出土　口径14.3　高さ18.2）

口唇部断面形状は丸状である。底部は平底を呈す。

口唇部装飾　Ｂ字状突起が配され，突起間に10前後の刻みが施される。

口　縁　部　ナデが施される。

頸部文様帯　３条の沈線が施されている。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲが施されている。

底部無文帯　底部の立ち上がり部分に２条の沈線が施され，無文帯は形成されていない。

形態，口唇部装飾より大洞ＢＣ式に相当すると思われる。

図版25－2（W16区出土　口径10.6　高さ12.3）

口唇部断面形状は丸状である。頸部文様帯をもたない。底部は丸みをもつ平底を呈す。

口唇部装飾　Ｂ字状突起が配され，突起間に10前後の刻みが施される。

口縁部文様帯　２条の沈線が施され，縦位のＢ字状突起が一箇所に貼りつけられている。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲが施される。

Ｉ－２Ａ類において，他の５点が頸部以下に沈線が引かれるのに対して，これは，頸部より上位に沈線が施されている。また，沈線の位置にともない，突起も頸部より上に張りつけられているのに加えて，口径・胴部最大径・底径の差があまり無い寸胴なプロポーションを呈し，他の５点と比べて特異な器形である。

口唇部装飾から大洞ＢＣ式と考えておきたい。

図版25－３（W58区出土　口径10.3）

底部を欠損している。口唇部断面形状は丸状である。

口唇部装飾　Ｂ字状突起が配され，突起間に10前後の刻みが施される。

口　縁　部　ナデが施される。

頸部文様帯　頸部に１条，頸部直下に１条の２条沈線が，口縁部無文帯と胴部縄文帯を区画していると思われるが，沈線がうまく終結されておらず，不規則なものとなっている。また，頸部に施されている沈線は，施文後，ナデ消され，不明瞭である。沈線上には，図版25－２と同様に縦位のＢ字状突起が貼りつけられている。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲが施されている。

口縁部が他に比べると長く外に開き気味に立ち上がる。時期については特定しかねるが，頸部の突起が長くのびていることから大洞Ｃ１～Ｃ２式と考えておきたい。

図版25－４（W28区出土）

底部を欠損している。口唇部断面形状は丸状である。

口唇部装飾　連続する刻みが施されている。

口　縁　部　ナデが施される。

頸部文様帯　３条の沈線が施されている。

胴部文様帯　斜行縄文ＲＬが施されている。

時期については特定しがたいが，大洞Ｃ１式と考えておきたい。

図版25－５（Ｗ９区出土　口径7.5）

底部を欠損している。口唇部断面形状は丸状である。

口唇部装飾　連続する刻みが施されている。

口　縁　部　ナデが施される。

頸部文様帯　３条の沈線が施されているように見えるが，１段目は，接合痕が消しきれてないことによるもののようである。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲが施されている。

器面に赤色顔料が塗布されている。時期については特定しがたいが，大洞Ｃ１式と考えておきたい。

図版25－６（W18区出土　口径7.6　高さ9.9）

口唇部形状は丸状である，底部は平底を呈する。

口唇部装飾　Ｂ字状突起が連続して配される。

口　縁　部　ナデが施される。

頸部文様帯　３条の沈線が施されている。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲが施されている。

底部無文帯　1条の沈線によって胴部と区画されているが，沈線はナデ消されている。

時期については特定しがたいが，大洞C1式と考えておきたい。

d．粗製深鉢Ⅰ類－2C

図版27－1（W17区出土　口径23.2　高さ26.8）

口唇部断面形状は丸状，底部は平底を呈す。

口唇部装飾　刻みが施される。

口縁・胴部　斜行縄文LRが施される。

時期については特定しがたい。

図版27－2（W57区出土）

口唇部断面形状は，ナデによるゆるい面取りが行われている。

口唇部装飾　口縁部の残存率が少ないが，おそらく，肩部の突起を中心とし，口縁部に，二個一対のB字状が二組配置されていたと考えられる。

口縁部　ナデが施されている。

胴部文様帯　頸部を境に，口縁部無文帯と胴部縄文帯に区画される。肩部に，縦位のB字状突起が張りつけられている。肩部直下は工具によると思われるケズリ状のナデが施されている。斜行縄文LR。

時期については特定しがたいが，大洞BC式と考えておきたい。

e．深鉢Ⅱ－1A

図版27－3（W8区出土　口径9.5　高さ11.7）

口唇部断面形状は，丸状である。底部は平底を呈す。

口唇部装飾　連続する刻みが施されている。刻みは6～7で一単位を形成し，口縁部文様の単位に組み込まれている。

口縁部文様帯　右下がりの並列する羊歯状文が施されている。口唇部と口縁部文様帯を区画する沈線が省略されており，羊歯の葉自体が口唇部装飾を兼ねている。

胴部文様帯　底部無文帯はなく，斜行縄文LRが施される。

時期については特定しがたいが，大洞BC式と考えておきたい。

図版27－4（W13区出土　口径10.8　高さ10.9）

口唇部形状は，ゆるい面取りが施されている。底部は平底を呈す。

胴部文様帯　口唇部，口縁部ともに装飾・文様は施されていない。口縁部と胴部無文帯を沈線で区画し，胴部文様帯には入組文様が多段に描かれている。施文後，丁寧にミガキが施され，浮線化している。

底部無文帯　一条の沈線によって胴部と区画される。また，最下部にも沈線が施される。無文部は横方向の

丁寧なミガキが施されている。

時期については特定しがたいが，大洞ＢＣ式と考えておきたい。

図版29－４（W18区出土　口径22.4　高さ27.9）

口唇部断面形状は，丸状である。底部は平底を呈す。

口唇部装飾　Ｂ字状突起が７～８個有り，口縁部の文様の単位に組み込まれている。

口縁部文様帯　右下がりの並列する羊歯状文が施されている。口唇部と口縁部文様帯を区画する沈線が省略されており，羊歯の葉自体が口唇部装飾を兼ねている。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲが施される。

底部無文帯　胴部縄文帯との境界に沈線はない。

時期については特定しがたいが，大洞ＢＣ式と考えておきたい。

ｆ．深鉢Ⅱ－２Ａ

図版37－１（W12区出土　口径18.6）

口唇部にはゆるい面取りが施される。底部は欠損している。

口唇部装飾　連続するＢ字突起が施されている。口縁部文様帯の三叉文に対応する位置にＢ字突起が貼りつけられている。

口縁部文様帯　三叉文が施されている。口縁部文様帯に描かれた三叉文は，入組三叉文の類であるが，斜行・並列のいずれの配列でもなく三叉文の配置に規則性がみられない。

胴部文様帯　３条の沈線で口縁部文様帯と区画される。斜行縄文ＬＲが施されている。

図版37－２（W12区　口径15.2　高さ15.0）

口唇部にはゆるい面取りが施される。底部は平底を呈す。

口唇部装飾　連続するＢ字突起が施されている。口縁部文様帯の三叉文に対応する位置にＢ字突起が貼りつけられている。

口縁部文様帯　左下がりに斜行する連結三叉文が施される。

胴部文様帯　２条の沈線によって口縁部文様帯と区画される。斜行縄文ＬＲが施されている。

底部無文帯　胴部文様帯と区画する沈線は施されていない。横方向にミガキが施されている。

２）粗製縄文系

ａ．粗製深鉢Ⅱ－１Ｃ

図版29－１（Ｗ７区出土　口径6.0　高さ17.2）

口唇部形状は，ゆるい面取りが施されている。口唇端部はやや内傾する。底部は平底を呈す。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲが施される。

図版29－2（W7区出土　口径17.0　高さ19.5）

口唇部形状は，ゆるい面取りが施されている。口唇端部はやや内傾する。底部は平底を呈す。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲが施される。

図版29－3（W13区出土　口径16.9　高さ24.0）

口唇部形状は，ゆるい面取りが施されている。口唇端部はやや内傾する。底部は平底を呈す。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲが施される。

図版31－5（W13区出土　口径28.4　高さ33.2）

口唇部形状は，ゆるい面取りが施されている。底部はやや出っ張る。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲが施される。

図版29－6（W15区出土　口径26.8　高さ32.7）

口唇部形状は，面取りが施されている。口唇端部はやや内傾する。底部は平底を呈す。補修孔が見られる。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲが施される。

図版31－1（W19区出土　口径23.6　高さ30.5）

口唇部形状は，ゆるい面取りが施されている。底部は凹底を呈す。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲが施される。

図版31－2（W7区出土　口径28.6）

口唇部形状は丸状を呈す。底部は欠損しているため不明である。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲが施される。

図版31－3（W7区出土　口径25.7　高さ34.7）

口唇部形状は，ゆるい面取りが施されている。口唇部は調整のさいナデにより内面に粘土が張り出している。底部は平底を呈す。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲが施される。

図版31－4（W13区出土　口径28.4　高さ33.2）

口唇部形状は，ゆるい面取りが施されている。口唇端部はやや内傾する。底部は平底を呈す。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲが施される。

図版31－５（W58区出土　口径11.0　高さ12.6）

口唇部形状は丸状を呈す。底部は欠損しているが，平底を呈すと思われる。

口唇部装飾　Ｂ字状突起が貼りつけられている。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲが施される。

図版31－６（W18区出土　口径13.2）

口唇部形状は，ゆるい面取りが施されている。口唇端部はやや内傾する。底部は欠損しているため不明である。

胴部文様帯　不規則に縄文ＬＲが施される。

図版31－７（Ｗ６区出土　口径21.5）

口唇部形状は丸状を呈す。底部は欠損しているため不明である。

口唇部装飾　２個一対のＢ字状突起が貼りつけられている。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲが施される。

図版33－１（W10区出土　口径21.2　高さ21.7）

口唇部形状は丸状で，底部があさい凹底を呈す。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲが施される。

図版33－２（Ｗ４区出土　口径18.0）

口唇部形状は丸状を呈す。底部は欠損しているため不明である。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲが施される。

図版33－３（W58区出土　口径20.1）

口唇部形状は丸状を呈す。底部は欠損しているため不明である。

胴部文様帯　縦位に縄文ＬＲが施される。

図版33－４（W58区出土　口径20.6）

口唇部形状は，口唇部直下の外面を強くナデることで，断面形状が軽く屈曲し，口唇部直下の内面が少し膨らみをもつ。底部は欠損しているため不明である。

胴部文様帯　縦位に縄文ＬＲが施される。

図版33－５（W17区出土　口径33.2）

口唇部形状は，ゆるい面取りが施されている。口唇端部はやや内傾する。底部は欠損しているため不明である。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲが施される。

図版33－6（W27区出土　口径12.0　高さ13.6）

口唇部形状は，口唇部直下の外面を強くナデることで，断面形状が軽く屈曲し，口唇部直下の内面が少し膨らみをもつ。底部は平底を呈す。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲが施される。

図版33－7（W58区出土　口径23.6）

口唇部形状は，口唇部直下の外面を強くナデることで，断面形状が軽く屈曲し，口唇部直下の内面が少し膨らみをもつ。底部は欠損しているため不明である。

胴部文様帯　縦位に縄文ＬＲが施される。

図版35－1（W17区出土　口径25.8）

口唇部形状は，ゆるい面取りが施されている。口唇端部はやや内傾する。底部は欠損しているため不明である。

口唇部装飾　連続する刻みが施される。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲが施される。

図版35－2（W10区出土　口径21.5　高さ22.3）

口唇部形状は，丸状を呈す。底部は平底である。

口唇部装飾　連続する刻みが施される。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲが施される。

図版35－3（W19区出土　口径22.0）

口唇部形状は，丸状を呈す。底部は平底である。

口唇部装飾　連続する刻みが施される。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲが施される。

図版35－4（W17区出土）

口縁部を欠損している。底部はあさい凹底を呈す。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲが施される。

b．粗製深鉢Ⅱ－２Ｃ

図版39－1（W14区出土　口径25.2）

口唇部は面取りが施されている。また，端部に縄文が施文されている。胴部下半は欠損しているた

め，底部は不明である。

胴部文様帯　　斜行縄文ＬＲが施されている。

図版39－２（Ｗ８区出土　口径12.8）

口唇部に面取りが施されている。胴部下半は欠損しているため，底部は不明である。

胴部文様帯　　斜行縄文ＬＲが施されている。

図版39－３（W24区出土　口径31.4　高さ24.7）

口唇部は面取りが施されている。口唇部端部はやや内傾する。底部が欠損している。

胴部文様帯　　斜行縄文ＬＲが施されている。

図版39－４（Ｗ８区出土　口径17.8　高さ17.5）

口唇部は面取りが施されている。口唇部端部はやや内傾する。底部は平底を呈す。

胴部文様帯　　斜行縄文ＬＲが施されている。

図版39－５（W24区出土　口径28.6）

口唇部は面取りが施されている。底部は平底を呈す。

口唇部装飾　　Ｂ字状突起が施される。

胴部文様帯　　斜行縄文ＬＲが施されている。

図版39－６（W11区出土　口径13.5　高さ13.5）

口唇部は丸状である。底部は平底を呈す。

胴部文様帯　　斜行縄文ＲＬが施されている。

図版39－７（Ｗ８区出土　口径14.0　高さ16.3）

口唇部は丸状である。底部は平底を呈す。

口唇部装飾　　連続する刻みが施されている。

胴部文様帯　　斜行縄文ＬＲが施されている。

図版41－１（Ｗ８区出土　口径27.4　高さ30.1）

口唇部はゆるい面取りが施されている。底部は平底を呈す。

胴部文様帯　　斜行縄文ＬＲが施されている。

図版41－２（W12区出土）

口縁部を欠損している。底部は平底を呈す。

胴部文様帯　不規則に縄文ＬＲが施されている。

図版43－1（W20区出土　口径19.4）

口唇部はゆるい面取りが施されている。底部は欠損している。

胴部文様帯　縦位に縄文ＬＲが施されている。

ｃ．粗製深鉢Ⅱ－３Ｃ

図版43－2（Ｗ９区出土　口径28.7）

口唇部は丸状である。底部は欠損している。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲが施されている。

図版43－3（W10区出土　高さ34.6）

口唇部は丸状である。底部は欠損している。

胴部文様帯　羽状縄文が施されている。口縁部に３ヶ所に補修孔が穿たれている。

第４節　鉢　形　土　器（第27図，図版第44～71，第５表）

１．分　　類

口径１に対して，器高が１以下で1/2を上回るものを鉢とした。そのうち口縁部が屈曲し頸部を有するものをⅠ類，口縁部まで真っ直ぐ立ち上がるものをⅡ類とした。また，Ⅰ類，Ⅱ類をそれぞれ以下のように３分類する。

鉢Ⅰ類－１：　明瞭な肩部と長く外反もしくは内湾する口縁部をもつもの。

２：　明瞭な肩部と短く立ち上がる口縁部をもつもの。

３：　鉢Ⅰ類のうち明瞭な肩部を形成しないものや，頸部の屈曲が弱く口縁部の立ち上がりが認められない断面逆く字形を呈するものを３類とした。

４：　特殊形態・ミニチュア

鉢Ⅱ類－１：　口縁部が内湾するもの。

２：　口縁部が直立するもの。

３：　底部から口縁部にむかって比較的直線的に広がるもの。

さらに，文様の在り方から４分類した。

Ａ：　文様帯をもつ土器。

Ｂ：　沈線文だけが器面に施される土器。

Ｃ：　文様帯をもたず，器面に縄文が施されるだけの，所謂粗製土器。

Ｄ：　文様帯の有無はではなく，器面に全く縄文が施されていない土器。

２．各類の解説

個々についての説明は後述しており，ここでは，鉢形土器における各類と文様との関係について検討を試みたい。ただし，復元個体を対象にしており，破片資料を含めた場合に比べて資料的に偏りがあるかもしれない。しかし，ある程度，全体のプロポーションを復元できる資料を対象とすることで，各類と文様の組み合わせの他に，各類における文様帯の構成についても検討できると思われる。以下，各類の傾向を概観していく(第５表)。また，ここでは，４類とした特殊な形態を呈す土器やミニチュア土器は取り上げない。

第５表　鉢形土器型式別集計表

分類＼型式		B	BC	C１	C２	不明	小計	総計
Ⅰ	1	1	3	2	−	−	6	21
	2	−	3	2	−	−	5	38.2％
	3	−	−	−	1	−	1	
	4	−	−	−	−	9	9	
計		1	6	4	1	9		
		4.8	28.6	19.0	4.8	42.9		
		B	BC	C１	C２	不明	小計	総計
Ⅱ	1	−	5	2	−	9	16	34
	2	7	3	4	−	2	16	61.8％
	3	−	−	−	−	2	2	
計		7	8	6	−	13		
		20.6	23.5	17.6		38.2		
合計		8	14	10	1	22		55
		14.5	25.5	18.2	1.8	40.0		100.0％

１)鉢Ⅰ類－１

復元できた鉢Ⅰ類－１は全てＡ類で，６点である。ただし，口唇部から底部文様帯のうちのいずれかの文様帯が欠けるものがある。この類には，三叉文と入り組み文とが組み合わされた大洞Ｂ式に並行する土器と，羊歯状文を主体とする刻目文が施される大洞ＢＣ式並行の土器がある。

２)鉢Ⅰ類－２

復元できたのは全てＡ類で，５点である。文様帯の構成からみると，口縁部文様帯を欠くものと，頸部文様帯を欠くものに分けられる。本類には，刻目文，羊歯状文等が口縁部文様帯や頸部文様帯に認められる。基本的には大洞ＢＣ式に並行する段階が主体を占める。

しかし，鉢Ⅰ類－２に相当する復元個体のなかには，沈線文で頸部以上と胴部を区画するだけのＤ類や文様をもたない広義の粗製土器Ｃ類はみられないが，特に前者は相当数存在すると思われる。

３)鉢Ⅰ類－３

復元できたのは１点で，Ｂ類である。文様帯は沈線文で構成される。大洞Ｃ２式に並行する。

４)鉢Ⅱ類－１

鉢Ⅱ類のなかでは当類が卓越し，16点を数える。内訳は，Ａ類７点，Ｂ類３点，Ｃ類１点，Ｄ類５点である。

Ａ類は基本的に，羊歯状文等を含む，沈線間の刻目が文様の主体をなし，大洞ＢＣ式が大半を占める。文様帯は，沈線によって口唇部，口縁部，胴部，底部に区画され，それぞれに文様帯，縄文帯，無文帯を構成する。場合によっては底部の無文帯が省略されているものも認められる。

Ｂ類は口縁部に２，３条の沈線文が施される。Ａ類にみられる底部無文帯は認められない。

C類は，いわゆる，粗製土器である。深鉢形土器では多く認められる類であるが，鉢形土器には少ない。また，本類に相当する図版61－3はⅡ類－1の中でも特異な形態をとる。

D類は，ミニチュア土器等が主体を占める。口縁部に2条の沈線が施された図版63－7は赤色顔料が塗布されている。

5)鉢Ⅱ類－2

鉢Ⅱ類－2には，A類13点，D類3点である。

A類の口縁部文様帯には三叉文，羊歯状文，沈線間刻目文等が施されている。大洞B式が主体を占め，次いで大洞BC式が認められる。基本的には，沈線により口唇部，口縁部，底部に区画されているが，底部無文帯が省略されているものもある。復元個体に限る傾向であるが，大洞B式に比定される土器には，底部無文帯が形成されるものが多い。一方，大洞BC式には，底部無文帯が省略されているものが多い。

D類には，無文で単純な鉢形を呈するものと，口縁部に沈線間刻目文が施されるものがある。後者には，赤色顔料が塗布されている。

6)鉢Ⅱ類－3

2点あり，内1点はⅡ－2類とも考えられる。

3．分　　析

以上，鉢形土器を各類ごとに概観した。特に，鉢形土器の形態と文様および文様構成にについてみてきたが，縄文が施文されるだけのC類は別にして，A類，B類には形態，文様，文様構成に何らかの規則性が認められそうである。一方，D類についてはバリエーションが多く，ミニチュア土器等に規格性を見いだすことはできない。

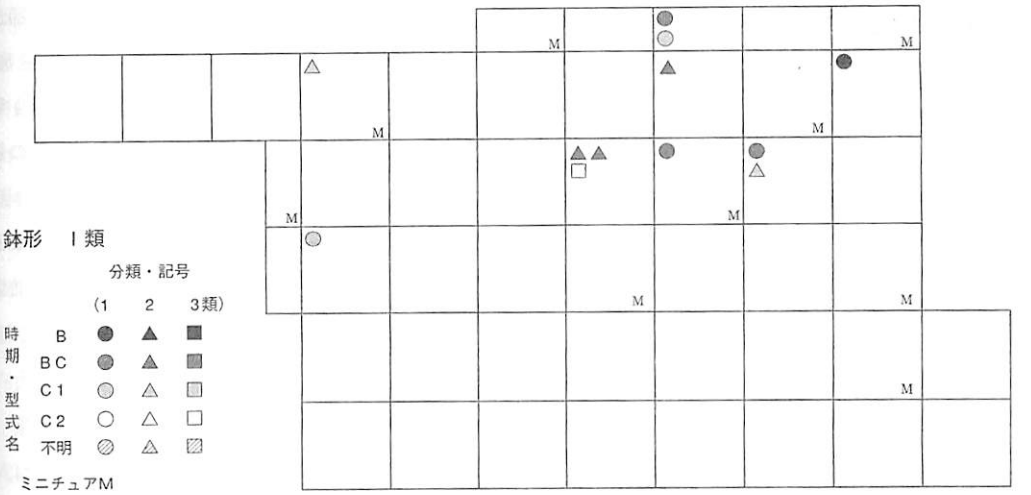
例えば，形態，文様，文様帯構成の組み合わせという点で最も顕著な規則性を示すのは，鉢Ⅱ類－2Aであろう。この類においては，口縁部文様帯，胴部縄文帯，底部無文帯という構成をとり，口縁部文様帯に三叉文が施されるものが主体を占める。また，この類で口縁部文様帯に羊歯状文や沈線間刻目文が施されるものには底部無文帯がないものが多い。また，鉢Ⅱ類－1Aでは，羊歯状文や沈線間刻目文が施されるものが多く認められる。

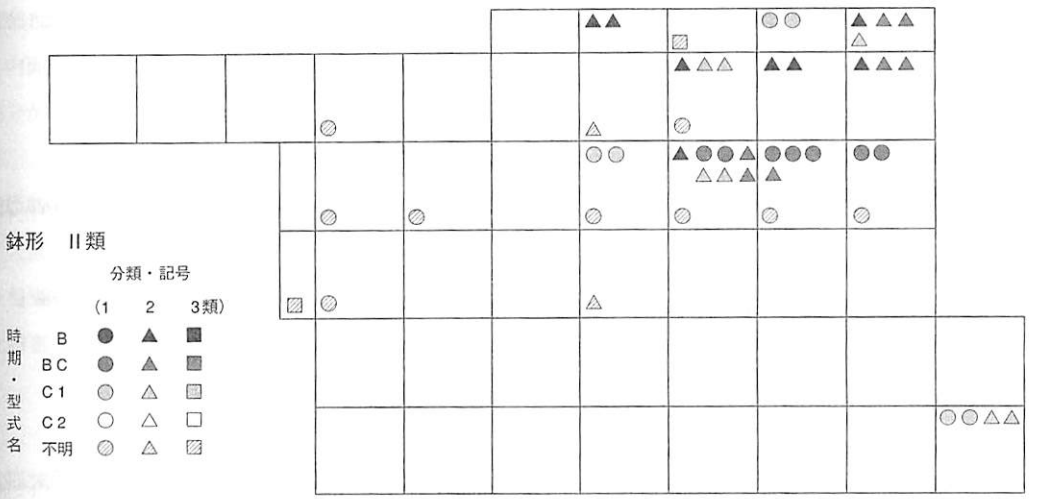
岩手県曲田Ⅰ遺跡EⅢ011住居跡出土の資料(嶋・鈴木1984)でも，鉢Ⅱ類－2Aには三叉文，鉢Ⅱ類－1Aには羊歯状文や沈線間刻目文が施されるものが多いように思われる。また，羊歯状文や沈線間刻目文が施されるものには底部無文帯のないものが多いようである。

つまり，大洞B式から大洞BC式への変化は，文様の変遷に止まらず，文様帯構成にも変化が現れているということであろうか。また，破片資料も考慮すべき問題であるが，鉢Ⅱ類－2(口縁部直立)から鉢Ⅱ類－1(口縁部内湾)という若干の変化を窺うことができるのではなかろうか。

以上のことから，鉢Ⅰ類で見るかぎり，ある型式(文様にメルクマールを求める場合)において主体となる形態，文様構成があるようである。

三叉文には鉢Ⅱ類－2が特徴的である。復元個体のなかでは，鉢Ⅰ類に典型的な三叉文が施された土





第27図　鉢形土器出土分布図

器を見いだすことができなかったが，図版49－1のように肩部が張り，鉢Ⅰ類－1の中でも口縁部が長く延びるものが大洞B式にみられる形態である。

羊歯状文や沈線間刻目文が施されるものには鉢Ⅰ類－1・2，鉢Ⅱ類－1が多い。中でも，鉢Ⅰ類－2・3には大洞B式が含まれていない。このことから，鉢Ⅰ類においては，文様の変化が口縁部の短小化に伴っている可能性がある。

調査区内における鉢形土器の型式別の分布傾向(第27図)は，他器種と同様である。7～15Gに大洞B式，7～10，17～20Gに大洞BC・C1式が分布する。

4．個体の解説

a．鉢Ⅰ類－1

図版45－1(W19区出土　口径20.4　高さ12.2)

底部を欠損しており台付鉢の可能性もあるが本類に含めた。口唇部断面形は丸状。

口唇部装飾　口唇部には連続してB突起を付し，突起の中心から派生する右下がりの入組文と刻みによって飾られる。

口縁部文様帯　左下がりの斜行する羊歯状文である。

頸部文様帯　烈点文，頸部直下文様帯は刻目文が二段にわたって施されている。

胴部文様帯　斜行縄文LRである。

口唇部装飾，口縁部・頸部文様帯は陰刻後，丁寧に磨かれている。内面調整は，口縁部内面にミガキによる仕上げがされているが，頸部以下の最終調整はナデである。BC式に相当する。

図版45－2(W18区出土　口径24.7)

口唇部，頸部に文様・装飾はされていない。底部は欠損する。口唇部断面形はナデにより平坦に仕上げられている。

口唇部装飾　口唇部にはB突起が削りだされ，突起左端から右下がりの沈線文が施される。その沈線と，口唇部装飾帯と口縁部文様帯を区画する沈線の間にO字状の刻みを施している。

口縁部文様帯　二段に分けられる。上段は縦長もしくはO字状，下段は横長の列点文である。

胴部文様帯　斜行縄文LRである。

内面は全体的に横方向にミガキが施されている。外面は列点文が施されていることからBC式に並行すると思われる。

図版47－1(W13区出土　口径14.6　高さ12.9)

頸部に文様は施文されていない。口唇部断面形は丸状である。底部は平底。

口唇部装飾　B突起が付される。突起の中心から縦に沈線が施され，横方向の沈線と交わる。B突起と三叉文の組み合わせと考えられる。

口縁部文様帯　二段に分けられる。上段は横位で右下がりの羊歯状文，下段は列点文である。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲである。

底部無文帯　二条の沈線によって胴部と区画され，下段の沈線はミガキ消されている。

内面は全体的に斜め方向のミガキが施されている。外面にミガキは施されていないように思われる。

図版47－２（W13区出土　口径20.4　高さ17.1）

口唇部装飾，頸部文様帯，底部無文帯をもたない。口唇部断面形は丸状で，底部は平底である。

口縁部文様帯　３段の刻目文が施される。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲである。

内面上半部の調整は横方向のミガキである。下半はナデと思われる。外面にミガキは行われておらず，最終調整はナデと思われる。全体的に淡い褐色を呈し，胎土がＢＣ式のものと異なることから，Ｃ１式に並行すると考えられる。

図版49－１（W10区出土　口径32.6）

底部を欠損する。頸部文様帯をもたない。口唇部断面形はナデにより平坦に仕上げられている。

口唇部装飾　Ｂ突起が連続して付される。その下には左下がりの入組三叉文が施される。

口縁部文様帯　二段に分けられる。上段は幅広の文様帯を形成しており，磨消縄文による入組文が描かれている。下段は列点文である。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲである。

内面は全体的にミガキがされているように思われる。外面は口唇部・口縁部の縄文が施されていない部分が，丁寧に磨かれている。大洞Ｂ式に相当する。

図版49－２（W58区出土　口径25.0）

底部を欠損している。頸部文様帯をもたない。口唇部断面形はナデにより丸状である。

口唇部装飾　口唇部上に二個一対のＢ突起が付される。この位置がほぼ正面を示すと思われる。

口縁部文様　区画文Ｃ１類によって区画され，四角文を充填することで偏平なＸ字状を呈す単位文様が描かれている。また，Ｘ字状文の上側部分は５～６のＯ字状の刻みが施されている。また，口唇部の突起と同位置に縦位のＢ突起が付される。

胴部文様帯　磨消縄文による雲形文が施されている。区画文Ａ３類によって区画された中に，四角文・半円文等が充填されることで単位文様が描かれる。また，単位文様内に施される縄文は斜行縄文ＬＲである。

底部文様帯　三条の沈線で胴部文様帯と区画され，無文帯が斜行縄文ＬＲが施文されている。

内面調整は肩部以上は横方向のミガキ，肩部以下は縦方向に磨かれている。大洞Ｃ１式に相当する。

b．鉢Ⅰ類－2

図版51－1（W19区出土　口径13.4　高さ8.9）

底部を欠損する。胴部から底部にかけての内湾する形態から台がつく可能性もあるが本類に含めた。頸部文様帯・底部文様帯をもたない。

口唇部装飾　B突起が連続して付され，短い烈点文が施文される。

口縁部文様帯　三段に分けられる。上下段に無文帯が形成され，中段に間延びしたD字状の刻みが施される。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲが施されている。

文様の施文は粗雑である。内面は基本的に横方向のナデであるが，部分的にミガキもみられる。大洞ＢＣ式に相当すると思われる。

図版51－2（W17区出土　口径14.0　高さ13.5）

ほぼ完形に復元できた。口縁部文様帯をもたない。口唇部はやや先鋭化する丸状で底部は平底である。

口唇部装飾　B突起が等間隔に施され，突起間に５～７の刻みが施されている。

頸部文様帯　二段に分けられる。上段はO字状の刻み，下段は斜行する左下がりの羊歯状文である。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲが施されている。

底部文様帯　幅の狭い無文帯が，１条の沈線で胴部と区画されている。横方向の丁寧なミガキが施されている。

内面は全体的に丁寧に磨かれる。大洞ＢＣ式に相当する。

図版51－3（Ｗ４区出土　口径22.8　高さ18.7）

底部を欠損する。口唇部断面形はやや内傾する平坦な口唇部である。頸部文様帯，底部文様帯をもたない。

口唇部装飾　B突起もしくは瘤状の突起が等間隔に付される。

口縁部文様帯　三段に分けられる。上下段はO字状の刻目文，中段は無文帯である。また，下段の刻目文帯には縦位のB突起が付される。正面を示すものであろうか。

胴部文様帯　斜行縄文ＲＬが施される。

内面は全体的に横方向のナデ仕上げがされている。大洞Ｃ１式に相当すると思われる。

図版53－1（W17区出土　口径13.6　高さ11.2）

ほぼ完形である。口縁部文様帯をもたない。底面は沈線によって底部と区画され，やや丸底を呈す。

口唇部装飾　刻みが施され，小波状を呈す。また，刻み４～６単位で右下に向かって沈線が引かれ，刻みにほぼ対応するように刺突が施される。

口縁部文様帯　横位で右下がりの羊歯状文が施されている。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲが施されている。

底部文様帯　1条の沈線によって胴部と区画されるが，ミガキにより沈線は消えている。ミガキは横方向。

内面口縁部は横方向のナデ，胴部は縦方向のミガキが施されている。

図版53－2（W8区出土　口径15.4）

胴部下半を欠損する。頸部文様帯をもたない。

口唇部装飾　B突起が等間隔に施され，突起間に8～10の刻みがある。

口縁部文様帯　O字状の刻目が施される。

内面調整は横方向のナデである。大洞C1式に相当する。

c．鉢Ⅰ類－3

図版53－3

底部を欠損している。口縁部の立ち上がりが形成されないことから本類は口縁部文様帯をもたない。

口唇部装飾　B突起が4～6を位置単位として付されている。

口縁部文様帯　文様は沈線のみである。

胴部文様帯　斜行縄文LRが施される。

内面口縁部は横方向のミガキ，胴部は縦方向のミガキが施されている。C2式に相当する。

d．鉢Ⅰ類－4

鉢Ⅰ類のうち特殊な形態の土器やミニチュア土器を一括して4類とした。それぞれ異なる特徴をもつため，ここでは細分せず，一点ずつ説明を加えたい。

図版55－1（W30区出土）

無文のミニチュア土器でキャリパー形を呈す。作りは粗雑で，輪積みの跡を明瞭に残す。調整も，内外面ともケズリが主体である。底部は凹底を呈す。時期は不明。

図版55－2（W66区出土　口径6.3　高さ6.0）

ミニチュア土器である。外面に赤色顔料が塗布される。口唇部には刻みが施され，正面と思われる位置に一段高い突起が認められる。胴部には縦走する縄文RLである。底部は平底。突起の形態等から大洞C2式に相当すると考えられる。

図版55－3（W11区出土　口径3.3　高さ3.1）

極めて小型の無文のミニチュア土器で作りは粗雑である。内面の頸部から底部にかけて赤色顔料の付着がみられる。調整は一部にケズリ痕を残すが，主体はナデ調整である。底部は平底。時期は不明である。

図版55－4（W22区出土　口径8.4　高さ6.7）

無文の小型土器である。壺とすべきかもしれないが，口径・頸部径・胴部最大径の比率から鉢形土器とした。内外面ともに横方向のミガキが施される。底部は凹底を呈す。時期は不明。

図版55－5（W22区出土　口径13.0　高さ7.1）

小型無文土器で，一部赤色顔料が残る。口唇部にはB字状突起が付される。外面には粗雑な横方向のミガキが施される。内面口縁部は横方向のミガキ，胴部から底面にかけてはヘラ状の工具を使用したと思われるナデ調整である。底部は丸底。時期は不明。

図版55－6（W４区出土　口径11.2　高さ7.0）

小型の土器で口縁部内面に１条，頸部直下に２条の沈線が施文されている。外面口縁部は丁寧な横方向のミガキ，胴部はやや粗雑な横方向のミガキが施されている。内面はナデ調整である。底部は平底で，底面は施文後ナデ消された１条の沈線によって区画されている。

図版55－7（W18区出土　口径10.7　高さ10.2）

特殊な形態の小型鉢型土器である。口唇部にB字状突起が２個若しくは３個貼りつけられていた考えられる。器面には口縁部から底部にかけて全面に斜行するＬＲ縄文が施文される。内面調整は粗雑な横ナデ，底部はほとんど未調整である。底部は平底で底面には沈線により巴文状の文様が描かれている。

図版55－8（W９区出土　口径11.4　高さ8.5）

頸部に不明瞭な沈線が２条施されるが，口縁部に施された横方向のミガキによって明瞭さを欠く。胴部には斜行するLR縄文が施されている。底部は平底を呈すと思われる。

図版55－9（W25区出土　口径12.8　高さ7.7）

小型の無文土器である。口縁部に強くナデられることでゆるく屈曲し，内面の同位置も屈曲するため鉢Ⅰ類とした。底部はゆるい丸底である。成形は粗雑であるが，最終調整は横方向にミガキが施されている。形態と共に，胎土も他の土器と比べて異なり別系統である可能性が考えられる。

ｅ．鉢Ⅱ類－１Ａ

図版57－1（W19区出土　口径19.0　高さ10.4）

ほぼ完形である。底面は１条の沈線によって区画されるが，調整によって沈線は明瞭ではない。

口唇部装飾　口唇部には土器を４分割する位置に２個１組のB字状突起が付される。

口縁部文様帯　文様帯は三段に分けられる。上下段はO字状の刻みによる刻目文である。中段には三叉文状の入組文が施されている。また，下段には口唇部の突起と同位置に縦位のB字状突起が付されていたものと思われる。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲが施される。

底部文様帯　幅の狭い無文帯が，２条の沈線によって胴部と区画される。横方向のミガキが施されている。

内面上半には横方向のミガキが施されている。下半は調整は不明瞭であるが，ミガキと思われる。大洞Ｂ式に相当する。

図版57－２（W19区出土）

底部は欠損している。

口唇部装飾　小さいＢ突起が連続して付される。

口縁部文様帯　文様帯に並行する右下がりの羊歯状文が描かれる。

胴部文様帯　斜行ＬＲ縄文が施されている。

底部文様帯　２条の沈線によって区画され，無文帯が形成されている。

内面調整は不明瞭であるが，口縁部が横方向のミガキ，胴部が縦方向のミガキと思われる。大洞ＢＣ式に相当。

図版59－１（W14区出土　口径13.6　高さ10.1）

完形である。底部は丸底である。底面が沈線によって区画されているが，調整によって不明瞭である。

口唇部装飾　刻みにより小波状を呈す。口唇部の刻みは内面に沈線状に達するものもある。口唇部直下の外面には，口唇部の刻みにほぼ対応する位置に刻みが施される。

口縁部文様帯　二段に分けることができる。上下段ともに，縦長のＤ字状の刻みが施される刻目文である。

胴部文様帯　羽状を呈すわけではないが，多方向に縄文が回転している。縄文はＬＲである。

底部文様帯　無文帯が形成される。１条の沈線によって胴部と区画されるが，ミガキによって消されている。

内面の調整は不明瞭で特定できないが，ナデが施されているように思われる。大洞Ｃ１式に相当。

図版59－２（W20区出土　口径15.5　高さ11.5）

完形である。底部文様帯をもたない。底部は平底である。

口唇部装飾　刻みにより小波状を呈す。

口縁部文様帯　三段に分けられる。上下段は縦長のＤ字状の刻みが施される刻目文である。中段は沈線と刻みによる羊歯状文状の文様が描かれている。一単位を特定することはできるが，不規則である。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲが施される。

内面調整は，丁寧なナデ調整である。大洞ＢＣ式に相当。

図版59－３（W18区出土　高さ9.4）

完形である。底部は平底で，底面はに２条の沈線で区画される。

口唇部装飾　等間隔に二個一組のＢ突起が施される。Ｂ突起の中心から沈線が派生し，沈線上端にはＤ字状

の刻みが施される。

口縁部文様帯　沈線施文後，ミガキが施され浮線化するX字状の文様が描かれる。

胴部文様帯　縄文が施文されるが磨滅により不明瞭である。条は深いものと浅いものが交互に斜行している。節は微かであるが観察することができるが規則性が認められない。以上のことから，反撚縄文ＬＬｒと思われる。

底部文様帯　無文帯が形成される。２条の沈線で胴部と区画されるが，この沈線間には刻みが施される。

内面調整は，口縁部に横方向のミガキ，胴部にはヘラ状工具によるナデが施されている。大洞ＢＣ式に相当。

図版61－１（W65区出土　口径17.2）

底部を欠損する。底部の内面は中心にむかってかなり厚さを増す。おそらく平底を呈すと思われる。

口唇部装飾　刻みにより小波状を呈す。

口縁部文様帯　３～５個の刻みで一単位とする刻目文が施される。

胴部文様帯　斜行縄文ＲＬが施される。

底部文様帯　無文帯が形成され，２条の沈線により胴部と区画される。横方向のミガキが施されている。大洞Ｃ１式。

図版61－２（W17区出土　口径11.2）

底部を欠損する。

口唇部装飾　刻みにより小波状を呈す。

口縁部文様帯　三段に分けられる。上中下段ともに３～４個を一単位とする刻目文が施されている。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲが施される。

底部文様帯　沈線が残存していることから底部文様帯として無文帯ががあったことが伺われる。大洞Ｃ１式に相当する。

ｆ．鉢Ⅱ類－１Ｂ

図版61－３（Ｗ４区出土　口径10.5　高さ8.0）

ほぼ完形である。口縁部がくの字状に屈曲し，鉢Ⅱ類－１の中でも特異な形態である。底部文様帯をもたない。底部は平底を呈す。

口唇部装飾　刻みにより小波状を呈す。

口縁部文様帯　２条の沈線が施されている。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲが施される。

図版63－１（W58区出土　口径10.4）

底部を欠損する。底部文様帯はないと思われる。

口唇部装飾　等間隔に瘤状突起が付される。

口縁部文様帯　2条の沈線が施される。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲが施される。

図版63－2（W17区出土）

底部を欠損する。底部文様帯はないと思われる。

口唇部装飾　平坦な口唇部であるが，等間隔に刻みが施されている。

口縁部文様帯　3条の沈線が施される。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲが施される。

g．鉢Ⅱ類－1Ｃ

図版61－4

底部を欠損する。口縁部がくの字状に屈曲し，鉢Ⅱ類－1の中でも特異な形態である。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲが施される。

h．鉢Ⅱ類－1Ｄ

図版63－3（W56区出土　高さ2.2）

極めて小型のミニチュア土器である。口唇部は丸く仕上げられ，底部は丸底を呈す。成形は手づくねによると思われ，器面全体にナデ調整が施されている。

図版63－4（W18区出土　高さ4.0）

小型のミニチュア土器である。口唇部は丸く仕上げられている。底部は平底を呈す。調整は内外ともにナデ調整である。

図版63－5（W8区出土　口径5.0　高さ5.9）

小型のミニチュア土器である。口唇部は丸く仕上げられている。底部は平底を呈す。器形は底部が平底であることを除けば，図版63－3に近似する。調整は，外面胴部に縦方向のナデ，底部付近は横方向のナデが施されている。底面は棒状工具によるミガキ状の調整が成されている。内面はナデ調整と思われる。

図版63－6（W20区出土　口径13.4　高さ7.3）

底部を欠損している。鉢というよりも椀形を呈す。口唇部はナデにより平坦に仕上げられている。外面は磨かれており，一部に赤色顔料が残る。内面調整もミガキである。

図版63－7（W19区出土　口径18.0　高さ9.1）

鉢というよりも椀形を呈す。口唇部丸く仕上げられており，口縁部に2条の沈線が施されている。調整は内外面ともに横方向のミガキである。底部は浅い沈線により区画されているが，調整により不明瞭な浅い窪みとなっている。

i．鉢Ⅱ類－2A

図版65－1（W18区出土　口径11.9　高さ8.7）

ほぼ完形である。口唇部の断面形は丸状で，底部は平底を呈す。底部文様帯をもたない。

口唇部装飾　B突起が連続して付される。

口縁部文様帯　左下がりの三叉文が施される。

胴部文様帯　斜行縄文LRである。

内面調整は，底部の立ち上がりのところにケズリの痕跡を止めている以外は，丁寧に横方向と思われるナデ調整がされている。大洞B式である。

図版65－2

ほぼ完形である。口唇部の断面形は丸状で，底部は平底を呈す。

口唇部装飾　B突起が連続して付される。

口縁部文様帯　簡略化した三叉文と思われる沈線文が施されている。

胴部文様帯　斜行縄文LRである。

底部文様帯　1条の沈線によって区画される無文帯が形成される。沈線は横方向に施されたミガキによって消されている。

内面調整は，粗雑な横方向のミガキである。大洞B式に相当する。

図版65－3（W15区出土　高さ10.1）

ほぼ完形である。口唇部の断面形は丸状で，底部は平底を呈す。

口唇部装飾　B突起が連続して付される。

口縁部文様帯　左下がりの連結する三叉文が施される。

胴部文様帯　斜行縄文LRである。

底部文様帯　1条の沈線によって胴部と区画される無文帯である。

内面は丁寧に横方向のナデが施されている。大洞B式に相当する。

図版65－4（W9区出土　口径10.3　高さ7.5）

ほぼ完形である。口唇部の断面形は丸状で，底部は平底を呈す。

口唇部装飾　不規則な間隔で刻みが施されている。

口縁部文様帯　左下がりの三叉文が施されている。三叉文は幅をもって向かい合っており，かみあっていない。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲである。

底部文様帯　１条の沈線によって区画される無文帯が形成される。沈線は横方向に施されたミガキによって消されている。

内面上半は横方向のミガキ，下半は斜め方向にミガキが施される。大洞Ｂ式に相当する。

図版65－５（Ｗ８区出土　口径15.6　高さ10.5）

ほぼ完形である。口唇部の断面形は丸状で，底部は平底である。

口唇部装飾　二個一対のＢ突起が等間隔に付される。また，Ｂ突起には彫刻的な手法も加えられている。

口縁部文様帯　左下がりの入組三叉文が施されている。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲである。

底部文様帯　１条の沈線によって区画される無文帯が形成される。

内面調整は口縁部が横方向のミガキ，胴部は斜め方向のミガキが施されている。大洞Ｂ式に相当する。

図版65－６（W10区出土　口径12.0　高さ7.0）

底部の一部を欠損する。口唇部の断面形は丸状で，底部は平底である。

口唇部装飾　二個一対のＢ突起が等間隔に付される。また，Ｂ突起には彫刻的な手法も加えられている。

口縁部文様帯　左下がりの入組三叉文が施されている。部分的に，実測図の正面に位置する彫刻的手法の加えられていないＢ突起から派生する三叉文もある。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲである。

底部文様帯　１条の沈線によって区画される無文帯が形成される。

内面調整は横方向のミガキである。大洞Ｂ式に相当する。

図版67－１（W18区出土　口径10.0　高さ7.9）

ほぼ完形である。口唇部の断面形はほぼ丸状を呈す。底部は平底である。底部文様帯をもたない。

口唇部装飾　刻みにより小波状を呈す。また，刻みに対応するように刺突が施されている。

口縁部文様帯　粗雑な羊歯状文が描かれている。羊歯状文は左下がりに斜行する。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲである。

内面調整は丁寧なナデが施される。大洞ＢＣ式に相当する。

図版67－２（W18区出土　口径17.6　高さ12.4）

ほぼ完形である。口唇部の断面形はほぼ丸状を呈す。底部は平底である。底部文様帯をもたない。

口唇部装飾　刻みにより小波状を呈す。また，刻みに対応するように刺突が施されている。

口縁部文様帯　Ｄ字状の刻みによる刻目文が施されている。

胴部文様帯　斜行縄文ＲＬである。

内面調整は，口縁部に横方向のナデ，胴部下半は斜め方向のナデが施される。また胴部の一部に条痕が残っている。大洞C１式に相当する。

図版67－３（W12区出土　口径20.5　高さ11.4）

ほぼ完形である。口唇部の断面形はほぼ丸状を呈す。底部は平底である。底部文様帯をもたない。

口唇部装飾　二個一対のB突起が等間隔に付される。

口縁部文様帯　藤村分類における配置文A類Ⅰ型と充填文の組み合わせによる文様が描かれる。結果的にボジ文様はX字状文を形づくる。

胴部文様帯　縄文帯のなかに配置文が配される。縄文は斜行縄文LR，配置文はD１類のバリエーションの一つと考えられる。また，充填文になかは縄文が磨り消されている。縄文は斜行縄文LRである。

底部文様帯　２条の沈線により胴部と区別することはできるが，文様帯としての幅をもたない。

内面調整は丁寧なナデである。大洞B式に相当する。

図版69－１（W65区出土　口径9.2　高さ6.8）

ほぼ完形である。口唇部の断面形は平坦である。底部は平底を呈し，底部文様帯をもたない。

口唇部装飾　刻みにより小波状を呈す。また，刻みに対応するように刺突が施されている。

口縁部文様帯　D字状の刻みによる刻目文が施されている。

胴部文様帯　斜行縄文LRである。

内面調整は横方向のナデである。大洞C１式に相当する。

図版69－２（W10区出土　口径11.0　高さ6.4）

底部の一部を欠損する。口唇部の断面形は丸状である。底部は平底を呈す。

口唇部装飾　二個一対のB突起が等間隔に付される。

口縁部文様帯　横位で右下がりの羊歯状文が施されている。羊歯状文はかなり平行線化が進んでおり，一見，３段構成の刻目文である。

胴部文様帯　斜行縄文LRである。

内面調整は横方向にミガキが施されている。大洞BC式に相当する。

図版69－３（W８区出土　口径12.4　高さ7.8）

ほぼ完形である。口唇部の断面形は丸状である。底部は平底を呈す。

口唇部装飾　刻みにより小波状を呈す。

口縁部文様帯　D字状の刻みによる刻目文が施されている。

胴部文様帯　斜行縄文LRである。

底部文様帯　１条の沈線による幅の狭い無文帯が形成されている。

内面調整は横方向にミガキが施されている。大洞Ｃ１式に相当する。

図版69－４（W15区出土　口径15.4）

口縁部等一部を欠損する。口唇部の断面形は平坦である。底部は平底を呈す。

口唇部装飾　瘤状突起が付されている。

口縁部文様帯　一見，３段構成の刻目文であるが，実測図正面にある縦にひかれた沈線により，平行線化した羊歯状文であることが判る。羊歯状文は横位の左下がりである。

胴部文様帯　ほぼ縦走する縄文ＬＲである。

内面調整は横方向のミガキである。大洞ＢＣ式に相当。

ｊ．鉢Ⅱ類－２Ｄ

図版71－１（Ｗ７区出土　口径9.9　高さ5.6）

口唇部の断面形は平坦で，正面を示すかのように瘤状突起が二個付される。底部は平底である。内外面ともにナデを施したのちに，多方向に雑なミガキが成される。

図版71－２（W22区出土　口径8.0　高さ5.1）

口唇部の断面形は平坦で，底部はやや凹底を呈す。外面はミガキ調整，内面は不明瞭で特定できない。

図版71－４（W15区出土）

底部は欠損しているが，丸みをもつ平底と考えられる。口唇部端部は丸く仕上げられている。口縁部には刻目文が施される。外面調整は丁寧なミガキ，内面調整もミガキである。内外面には赤色顔料が塗布されている。大洞ＢＣ式に相当する。

ｋ．鉢Ⅱ類－３Ｄ

図版71－３（W67区出土　口径10.6　高さ7.7）

口唇部の断面形はやや先鋭化する丸状で，底部は平底を呈す。口唇部には正面を示すかのように瘤突起が一個付されている。胴部には縦走する縄文ＬＲが施されている。

図版71－５

器形的には鉢Ⅱ類－２としても差し支えない。底部は欠損しているが，おそらく平底を呈すと考えられる。口唇部端部は平坦である。胴部は斜行縄文ＬＲが施されている。

第5節　浅鉢形土器(第28図，図版第72～97，第6表)

1．分　　類

今回出土した浅鉢形土器についても，他器種同様に，頸部・胴部でくびれるものと，くびれないもので2大別し，さらに口頸部の形態により以下のように分類した(第6表)。

第6表　浅鉢形土器型式別集計表

分類＼型式	B	BC	C1	C2	不明	小計	総計
Ⅰ 1 a	4	－	－	－	－	6	8
b	－	－	2	－	－		19.5％
2	－	1	1	－	－	2	
計	4	1	3	－	－		
	50.0	12.5	37.5				
	B	BC	C1	C2	不明	小計	総計
Ⅱ 1 a	1	－	－	－	－	24	32
b	－	－	5	2	1		78.0％
c	－	1	1	2	11		
2	－	1	2	1	4	8	
計	1	2	8	5	16		
	3.1	6.3	25.0	15.6	50.0		
	B	BC	C1	C2	不明	小計	総計
Ⅲ	－	－	1	－	－	1	1
							2.5％
合計	5	3	12	5	16		41
	12.2	7.3	29.3	12.2	39.0		100.0％

Ⅰ類－1：　口縁部はくびれ，明瞭な肩部と長く外反・内湾する形態を有する。

－2：　口縁部はくびれ，明瞭な肩部と短く立ち上がる形態を有する。

Ⅱ類－1：　口縁部はくびれず，内湾あるいは直立する形態を有する。

－2：　口縁部はくびれず，比較的広い底部から口縁部にむかって直線的もしくは外反する形態を有する。

－3：　平面洋梨形で，側面形は船形を呈する。

2．各類の解説

1）Ⅰ類－1(図版73，75，77－1・2)

長く外側に開くもの(1a)と，やや短めのもの(1b)とがある。(1a)の口縁部はいずれも平縁でなく，装飾される。図版73の1・2(1a)は口縁部と胴部文様帯の間に，列点文をもち，とくに1は，頸部文様帯として区分される口縁部には三叉状文，胴部文様帯には連結の三叉状文が発展し，上下の沈線の間に，連結する三叉が組合う。大洞B式。また，図版75の1・2(1a)は，口縁部・胴部文様帯にいずれも三叉文ないし連結の三叉文をもつ。とくに2は，口縁部に透かしの玉を抱いた三叉文を配した装飾をつけている。大洞B式。

やや短めにくの字状に外反する口縁を持つ図版77の1・2(1b)は，胴部が無文で，口縁部は沈線と刻みで飾られる。2は，B字形突起一対とコブが一個が貼りつけられる。

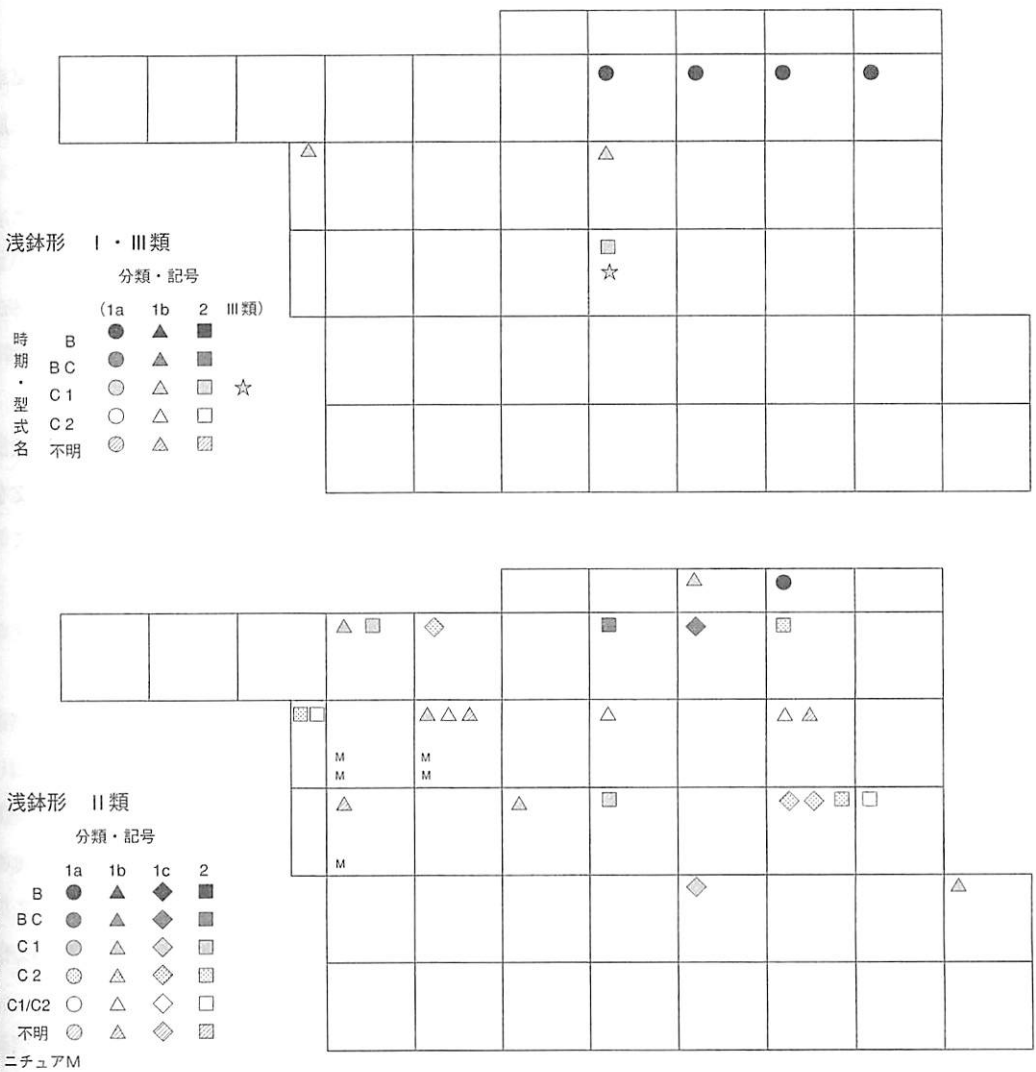
２）Ⅰ類－２（図版75－１，77－３）

右上がりの羊歯状文を肩部にもつものと，胴部に区画文（Ｂ類）をもつものがある。双方とも口縁部は刻み目をもつ沈線文で飾られる。大洞ＢＣ式およびＣ１式。

３）Ⅱ類－１（図版79～89－１～６）

口縁部が内湾するもの（１ａ・ｂ）と直立するもの（１ｃ）とがある。１ａ類は，広い底部と内湾する胴部で，楕円形の形態をもつ（図版79－１）。胴部に縄文ＬＲが，口頸部文様帯に連結三叉文が施される。大洞Ｂ式。

１ｂ類は，丸底あるいは小さい底部から外方に内湾しながら立ち上がるものである。ほとんどすべてに文様帯が配されるが，無文のものも１点ある（図版87－７）。胴部文様帯に区画文が配されるもの（図版79－３，図版81，図版83－２，図版85－１・２）は，大洞Ｃ１式に属する。配置文が配されるもののうち，



第28図　浅鉢形土器出土分布図

図版79－2は大洞C2式の典型である。

図版83－1は，口縁部に左上がりの羊歯状文をもつ。1c類の有文のものには，胴部文様帯に配置文らしき磨消縄文が配されるもの(図版87－8)と胴部縄文で口頸部に右上がりの羊歯状文がめぐるもの(同図－9)の2点がある。大洞C1とBC式に比定できる。

無文のものと縄文が施文されるものにはミニチュア土器(図版87－1～4・6)を含む。ミニチュア以外の無文の土器すべてに赤色顔料が塗布され，図版87－5以外すべての口唇部外面に1・2条の沈線が施される。

また，図版89－5・6はB字形突起で装飾される。図版91－2は，丹塗りのX字文が描かれていたものと思われる。

縄文が施文されるもの(図版87－4，89－1・2)は，すべての口唇部外面に1・2条の沈線がめぐり，沈線以下に縄文が施文される。

4)Ⅱ類－2(図版89―7・8～95)

無文のもの2点は(図版89－7・8)全面に赤色顔料が塗布され，口唇部外面に1・2条の沈線がめぐる。しかし，8は，口縁内側に明瞭な段をもっており，外面の沈線とあわせて見ると，くの字状に屈曲するように見える。つまり，Ⅰ類－2の延長上に位置するものとも考えられる。大洞C2式。

有文のうち，図版95－2は，広く平らな底部から角度のある器壁が直線的に立ち上がる。胴部に右上がりと左上がりの羊歯状文が同時に施される。大洞BC式。丹塗り。

他は，いずれも小形のごく浅い鉢で，胴部文様帯に区画文(図版93－1・2)と配置文(図版95－1)が施される。また，口唇部は小波状縁である。いずれも大洞C1式に比定できる。

5)Ⅲ　類(図版97)

1点だけである。口唇部にB字形突起がめぐり，突起の中央から外面にむけて右下がりの羊歯状文がのびる。胴部文様帯は，3本の沈線で楕円の底部と区切り，区画文・充填文を中心とした磨消縄文を施す。大洞C1式である。丹塗り。

3．個体の解説

a．Ⅰ―1類

図版73－1(W8区出土　口径18.6　高さ8.6)

口縁部は屈曲し，長く外側に開く形態である。

口唇部装飾帯　口唇部装飾帯には，B字形突起が配される。2個1対のものが2単位めぐると思われる。

頸部文様帯　1条の沈線がめぐり，沈線の上には連結した三叉状文が，下には列点文が1条めぐる。また，中央に瘤が1つ貼りつけられる。

胴部文様帯　沈線で区画された胴部文様帯には，C字状文が入り組み，ノの字文が充填される。単位は不明。胴部下半には，縄文LRが施文される。

胎土は精選され，色調は暗褐色である。大洞B式。

図版73―１（W10区出土　口径21.4　高さ9.1）

口縁部は屈曲し，長く外側に開く形態である。

口唇部装飾帯　連続した小波状の突起が口唇部装飾帯をめぐる。

頸部文様帯　中央に１条の列点文がめぐり，その上下に２～３条の沈線が配される。

胴部文様帯　沈線下の胴部文様帯前面には，縄文ＬＲが施文される。

胎土はやや砂粒を含む。色調は淡灰褐色である。大洞Ｂ式。

図版75―１（Ｗ９区出土　口径6.8　高さ7.0）

口縁部は屈曲し，やや直立ぎみに長く外側に開く形態である。胴部形態は，やや張る。

口唇部装飾帯　口唇部装飾帯には，Ｂ字形突起が配される。

頸部文様帯　上下端を１条の沈線で区画する。文様帯には，入り組んだＣ字文を主体に，ノの字文が充填される。

胴部文様帯　胴部上半に１条，中央に２条の沈線が配される。区画された文様帯には，玉抱き三叉状文が施文される。また，胴部下半には，縄文ＬＲが施文される。

胎土は精選され，焼成も良好である。色調は淡黒褐色である。大洞Ｂ式。

図版75―２（Ｗ７区出土　口径18.3　高さ9.1）

口縁部は屈曲し，長く外側に開く形態である。

口唇部装飾帯　口唇部装飾帯は，中央に肥大した装飾突起が配され，他は連続した刻み目をもつ小突起群が配される。

頸部文様帯　上端に１条の沈線が，下端に刻み目をもつ沈線が施される。頸部文様帯には，入り組んだＣ字文を主体に，ノの字文が施される。

胴部文様帯　主文様の構成は，頸部文様帯と同様であるが，さらに沈線以下の胴部下端に縄文ＬＲが施文される。

胎土は精選され，色調は暗褐色である。大洞Ｂ式。

図版77―１（W66区出土　復元口径14.8　復元高さ4.8）

口縁部は屈曲するが，やや短めにくの字状に外反する形態である。

口唇部装飾帯　平縁を呈するが，口唇部外面には刻み目が施され，内面には１条の沈線がめぐる。

頸部文様帯　丁寧なヨコ方向のミガキが施される。

胴部文様帯　部分的にタテ方向のミガキが施されるが，基本的には丁寧なヨコ方向のミガキが施される。

胎土は精選され，赤色顔料が塗布される。大洞Ｃ１式。

図版77―２（W17区出土　口径15.0　高さ8.5）

口縁部は屈曲するが，やや短めにくの字状に外反する形態である。

口唇部装飾帯　2個1対のB字形突起が1単位配される。内面には沈線状の凹みが1条めぐる。

頸部文様帯　口唇部直下に瘤が1つ貼りつけられ，1条の刻み目をもつ沈線と2条の沈線がめぐる。また，内外面ともに丁寧なヨコ方向のミガキが施される。

胴部文様帯　沈線以下には丁寧なヨコ方向のミガキが施される。

胎土は精選され，色調は淡褐色を呈する。大洞C1式。

b．Ⅰ－2類

図版74—1（W0区出土　口径7.3　高さ9.0）

口縁部は屈曲し，短く立ち上がる形態である。

口唇部装飾帯　平縁を呈する。

頸部文様帯　2条の刻み目をもつ沈線がめぐる。明瞭な肩部には右上がりの羊歯状文が展開する。

胴部文様帯　2条の刻み目をもつ沈線がめぐる。沈線下には縄文LRが施文される。

胎土は精選され，色調は暗褐色である。大洞BC式。

図版77—3（W22区出土　復元口径9.8　高さ5.9）

口縁部は屈曲し，短く立ち上がる形態である。

口唇部装飾帯　全体的に破損。一部突起と思われる装飾がみられる。

頸部文様帯　ヨコ方向のミガキが施される。肩部には1条の刻み目をもつ沈線がめぐる。

胴部文様帯　上下端をそれぞれ2条の沈線で区画し，縄文LRの地文上に区画文Bが展開する。4単位めぐると思われる。

胎土は精選され，色調は黒褐色である。大洞C1式。

c．Ⅱ—1類

図版79—1（W14区出土　口径9.5　高さ6.0）

口縁部は屈曲せず内湾する形態である。底部から内湾ぎみに立ち上がり，楕円形の形態を呈す。

口唇部装飾帯　口唇部装飾帯は平縁である。

頸部文様帯　上端に1条，下端に2条の沈線がめぐる。区画された頸部文様帯には，連結三叉状文が8単位展開する。

胴部文様帯　沈線以下には，縄文LRが施文される。

胎土は精選され，色調は灰褐色である。大洞B式。

図版79—2（W57区出土　口径12.3）

口縁部は屈曲せず，底部より外方に内湾しながら立ち上がる形態である。

口唇部装飾帯　口唇部装飾帯は平縁である。

頸部文様帯　2条の沈線がめぐる。

胴部文様帯　沈線以下は，縄文ＲＬの地文上に配置文ＣⅡ型を主体として，ノの字文・三角文を充填し，文様帯を形成する。

胎土は精選され，色調は黒褐色である。大洞Ｃ２式。

図版79―３（W64区出土　口径13.0　高さ6.0）

口縁部は屈曲せず，底部より外方に内湾しながら立ち上がる形態である。

口唇部装飾帯　口唇部装飾帯は平縁である。

頸部文様帯　１条の刻み目をもつ沈線がめぐる。

胴部文様帯　上下端を沈線により区画された胴部文様帯は，区画文Ｂ１を主体に，三角文・四角文・半円文を充填し，文様帯を形成する。

胎土は精選され，色調は黒褐色である。大洞Ｃ１式。

図版81（W57区出土　復元口径18.7　高さ7.7）

口縁部は屈曲せず，底部より外方に内湾しながら立ち上がる形態である。

口唇部装飾帯　口唇部装飾帯は平縁である。

頸部文様帯　上端に羊歯状文が平行線化したような文様が展開する。

胴部文様帯　上下端をそれぞれ２条の沈線により区画された胴部文様帯は，区画文Ａ３を主体に，ノの字文・四角文・半円文を充填し，文様帯を形成する。

胎土は精選され，色調は黄褐色である。大洞Ｃ１式。

図版83―１（W19区出土　口径18.6　高さ6.0）

口縁部は屈曲せず，底部より外方に内湾しながら立ち上がる形態である。

口唇部装飾帯　口唇部装飾帯は平縁である。

頸部文様帯　上下端にそれぞれ１条の沈線がめぐり，左上がりの羊歯状文が展開する。

胴部文様帯　上端を1条の，中央を２条の沈線により区画された胴部文様帯は，配置文Ｄを主体に，四角文を充填し，文様帯を形成する。胴部下半には，縄文ＬＲが施文される。

胎土はやや砂粒を含み，色調は黒褐色である。大洞Ｃ２式。

図版83―２（Ｗ４区出土　復元口径16.5　復元高さ5.1）

口縁部は屈曲せず，底部より外方に内湾しながら立ち上がる形態である。

口唇部装飾帯　口唇部装飾帯は平縁である。

頸部文様帯　１条の刻み目をもつ沈線がめぐる。

胴部文様帯　上端を２条の沈線により区画された胴部文様帯は，区画文Ａを主体に，三角文・四角文・ノの字文を充填し，文様帯を形成する。

胎土は精選され，色調は黄褐色である。部分的に赤色顔料が認められる。大洞Ｃ１式。

図版85―1（W17区出土　口径17.1　高さ6.8）

口縁部は屈曲せず，底部より外方に内湾しながら立ち上がる形態である。

口唇部装飾帯　口唇部装飾帯は平縁である。

頸部文様帯　上端に沈線が，沈線直下に刻み目をもつ沈線がそれぞれ1条めぐる。

胴部文様帯　上下端をそれぞれ2条の沈線により区画された胴部文様帯は，区画文を主体に，四角文・半円文を充填し，文様帯を形成する。外面にはヨコ方向のミガキが施される。

胎土はやや砂粒を含み，色調は淡暗褐色である。大洞C1式。

図版85―2（W21区出土　口径20.4　高さ8.3）

口縁部は屈曲せず，底部より内湾しながら立ち上がる形態である。

口唇部装飾帯　口唇部装飾帯は平縁である。

頸部文様帯　上端を1条の刻み目をもつ沈線が，その直下を1条の沈線がめぐる。

胴部文様帯　上下端をそれぞれ2条の沈線により区画された胴部文様帯は，区画文を主体に，四角文などが充填されると思われるが，不明。

胎土は精選され，色調は褐色を基調として，口縁部付近は黒褐色である。大洞C1式。

図版87―7（W13区出土　復元口径11.2　高さ5.4）

口縁部は屈曲せず，底部より内湾しながら立ち上がる形態である。

口唇部装飾帯　口唇部装飾帯は平縁である。

頸部文様帯　内外面にナデが施され，さらに外面はミガキも施される。

胴部文様帯　内外面にナデ・ミガキが施される。

胎土は精選され，色調は黄灰褐色である。大洞C1式。

図版87―1（W57区出土　口径4.7　高さ1.9）

口縁部は屈曲せず，直立する形態である。

口唇部装飾帯　口唇部装飾帯は平縁であるが，凹凸が著しい。

頸部文様帯　内面上端に2㎜ほどのケズリがみられる。内外面は粗いナデが施される。

胴部文様帯　内外面に粗いナデが施される。

胎土は砂粒を微量含み，色調は外面赤褐色，内面褐色である。

図版87―2（W57区出土　復元口径6.1　復元高さ2.8）

口縁部は屈曲せず，直立する形態である。

口唇部装飾帯　口唇部装飾帯は平縁であるが，内面に1条の沈線がめぐる。

頸部文様帯　内外面全体にナデが施され，外面は一部ミガキの痕跡も認められる。

胴部文様帯　内外面にタテ・ヨコ方向のナデ・ミガキが施される。

胎土はあまり砂粒を含まず，色調は黄灰色である。

図版87—3（W56区出土　口径5.1　高さ2.6）

口縁部は屈曲せず，直立する形態である。

口唇部装飾帯　口唇部装飾帯は平縁であるが，ユビオサエによる凹凸が著しい。

頸部文様帯　内外面にナデが施される。

胴部文様帯　外面にナデが施される。

胎土はやや精選され，色調は外面明褐色，内面褐色である。

図版87—4（W56区出土　口径4.1　高さ3.2）

口縁部は屈曲せず，直立する形態である。

口唇部装飾帯　口唇部装飾帯は平縁である。

頸部文様帯　内外面に，それぞれ1条の沈線がめぐる。内面にはユビオサエとナデが認められる。

胴部文様帯　内面はナデが施され，外面は縄文が施文される。

胎土はやや精選され，色調は明灰褐色である。

図版87—5（W58区出土　口径10.0　高さ4.5）

口縁部は屈曲せず，直立する形態である。口端部はやや肥厚し，明瞭な面をもたない。

口唇部装飾帯　口唇部装飾帯は平縁である。

頸部文様帯　内面に1条の沈線状の凹みがめぐる。内外面はナデ・ミガキが施され，ユビオサエも認められる。

胴部文様帯　内外面にナデが施され，さらにヨコ方向にミガキが施される。

胎土はやや精選され，色調は暗褐色である。

図版87—6（W58区出土　口径6.8　高さ2.6）

口縁部は屈曲せず，直立する形態である。

口唇部装飾帯　口唇部装飾帯は平縁であるが，凹凸が著しい。

頸部文様帯　内面はヨコ方向のナデが施され，さらに粗いミガキが施される。外面はＬＲとＲＬの羽状縄文が施文される。

胴部文様帯　内面は多方向にナデが施される。外面はＬＲとＲＬの羽状縄文が施文される。

胎土はかなり砂粒を含み，色調は暗赤褐色である。

図版87—8（W28区出土　復元口径13.5　復元高さ4.7）

口縁部は屈曲せず，直立する形態である。

口唇部装飾帯　口唇部装飾帯はＢ字形突起が配されるが，単位は不明である。

頸部文様帯　2条の沈線がめぐる。

胴部文様帯　内面に丁寧なミガキが施される。外面は配置文を主体に文様が展開すると思われるが，単位数は不明である。

胎土は精選され，焼成も良好である。大洞C１式。

図版87―９（W８区出土　口径17.4　高さ6.7）

口縁部は屈曲せず，直立する形態である。

口唇部装飾帯　口唇部装飾帯は平縁である。

頸部文様帯　上下端を１条の沈線がめぐり，文様帯には右上がりの羊歯状文が展開する。

胴部文様帯　上端を１条，下端を２条の沈線で区画し，文様帯には縄文ＬＲが施文される。内面はヨコ方向のミガキが施される。

胎土は精選され，焼成は良好である。色調は淡暗褐色である。大洞ＢＣ式。

図版87―10（W24区出土　口径18.0　高さ7.7）

口縁部は屈曲せず，直立する形態である。

口唇部装飾帯　口唇部装飾帯は平縁である。

頸部文様帯　内面はヨコ方向のナデ・ミガキが施される。外面は２条の沈線文がめぐる。

胴部文様帯　内外面にヨコ方向のナデ・ミガキが施される。

胎土はかなり精選され，焼成は良好である。赤色顔料が塗布されるが，地の色調は暗褐色である。大洞Ｃ１あるいは Ｃ２式。

図版89―１（W19区出土　口径17.6　高さ6.8）

口縁部は屈曲せず，直立する形態である。

口唇部装飾帯　口唇部装飾帯は平縁であるが，歪みが著しい。

頸部文様帯　内面は粗いヨコ方向のナデが施され，ミガキも認められる。外面は２条の沈線文がめぐる。

胴部文様帯　内面は粗いヨコ方向のナデが施され，ミガキも一部みられる。外面は縄文ＬＲの斜行縄文が施文される。

胎土はやや砂粒を含むが，焼成は良好である。色調は黒褐色である。

図版89―２（W57区出土　復元口径9.8　高さ4.2）

口縁部は屈曲せず，直立する形態である。口縁端部は肥厚し，面をもたない。

口唇部装飾帯　口唇部装飾帯は平縁である。

頸部文様帯　内面１条の沈線がめぐる。外面は２条の沈線がめぐり，ヨコ方向のミガキがみられる。

胴部文様帯　内面は２㎜ほどのヨコ方向のミガキがみられる。外面は縄文ＲＬの斜行縄文が施される。

胎土はやや精選され，焼成は良好である。色調は外面黄褐色，内面黒褐色である。

図版89―３（W24区出土　口径12.6　高さ4.6）

口縁部は屈曲せず，直立する形態である。

口唇部装飾帯　口唇部装飾帯は平縁である。

頸部文様帯　内面は1.5㎜ほどのミガキが施される。外面は２条の沈線文がめぐる。

胴部文様帯　内外面にミガキが施される。

胎土は精選され，焼成は良好である。赤色顔料が塗布されるが，地の色調は黒褐色である。大洞Ｃ１あるいはＣ２式。

図版89―４（Ｗ４区出土　口径9.3　高さ3.4）

口縁部は屈曲せず，直立する形態である。

口唇部装飾帯　口唇部装飾帯は平縁である。

頸部文様帯　外面は１条の沈線文がめぐる。

胴部文様帯　内外面にミガキが施される。下端には１条の沈線がみられる。

胎土は精選され，焼成は良好である。赤色顔料が塗布されるが，地の色調は黒褐色である。大洞Ｃ１あるいはＣ２式。

図版89―５（Ｗ７区出土　復元口径13.0　高さ4.7）

口縁部は屈曲せず，直立する形態である。

口唇部装飾帯　口唇部装飾帯は，１対のＢ字形突起がみられる。

頸部文様帯　内外面は丁寧なミガキが施される。内面に１条，外面に２条の沈線文がめぐる。

胴部文様帯　内外面に丁寧なミガキが施される。２ヶ所穿孔される。

胎土は精選され，焼成は良好である。赤色顔料が塗布される。大洞Ｃ１あるいはＣ２式。

図版89―６（Ｗ５区出土　復元口径10.7　高さ3.8）

口縁部は屈曲せず，直立する形態である。

口唇部装飾帯　口唇部装飾帯にはＢ字形突起が１個みられる。

頸部文様帯　外面は２条の沈線文がめぐるが，下の沈線はあまり明瞭でない。

胴部文様帯　内外面にミガキが施される。

胎土は精選され，焼成は良好である。赤色顔料が塗布される。大洞Ｃ１あるいはＣ２式。

ｄ．Ⅱ―２類

図版89―７（W66区出土　口径14.3　高さ5.1）

口縁部は屈曲せず，比較的広い底部から口縁部に向かって直線的に開く形態である。

口唇部装飾帯　口唇部装飾帯は平縁である。

頸部文様帯　内面はミガキが施される。外面は２条の沈線文がめぐる。

胴部文様帯　内外面に丁寧なミガキが施される。

胎土は精選され，焼成は良好である。赤色顔料が塗布されるが，地の色調は褐色である。大洞C１あるいはC２式。

図版89―８（W66区出土　口径18.8　高さ5.0）

口縁部は屈曲せず，比較的広い底部から口縁部に向かって直線的に開く形態である。

口唇部装飾帯　口唇部装飾帯は中央にB字形突起とA字形突起がそれぞれ２個みられる。

頸部文様帯　内面はミガキがみられる。内外面にはそれぞれ１条の沈線文がめぐる。

胴部文様帯　内面にミガキが施され，外面はヨコ方向にミガキが施される。

胎土は精選され，焼成は良好である。赤色顔料が塗布されるが，地の色調は褐色である。大洞C２式。

図版91―１（W７区出土　復元口径21.7　高さ7.6）

口縁部は屈曲せず，底部から口縁部に向かって直線的に開く形態である。

口唇部装飾帯　口唇部装飾帯は平縁である。

頸部文様帯　内面はミガキが施され，１条の沈線がめぐる。外面は２条の沈線文がめぐる。

胴部文様帯　内外面に丁寧なミガキが施される。

胎土は精選され，焼成は良好である。赤色顔料が塗布される。大洞C１あるいはC２式。

図版91―２（W24区出土　復元口径18.6　高さ4.7）

口縁部は屈曲せず，底部から口縁部に向かって直線的に開く形態である。

口唇部装飾帯　口唇部装飾帯は平縁である。

頸部文様帯　内面はミガキが施される。外面は１条の沈線文がめぐる。

胴部文様帯　内面に赤色顔料で文様が描かれる。文様は，配置文Bのような単位を主体に，半円文が充填されると思われる。また，赤色顔料の部分をみれば，X字文とも認識できる。

胎土は精選され，焼成は良好である。内外面に赤色顔料が塗布されるが，地の色調は褐色である。大洞C１あるいはC２式。

図版93―１（W22区出土　口径19.4　高さ4.2）

口縁部は屈曲せず，比較的広い底部から口縁部に向かって外反して開く形態である。

口唇部装飾帯　口唇部装飾帯は連続する小波状口縁である。

頸部文様帯　内面１条の沈線文がめぐる。

胴部文様帯　内面はタテ方向のミガキが施される。外面は上下端をそれぞれ２条の沈線で区画する。文様帯は，区画文C２を主体として，四角文・ノの字文を充填し，連続文様を展開。また，底面にも四角文が充填される。

胎土は精選され，焼成は良好である。色調は褐色である。大洞Ｃ１式。

図版93―２（Ｗ４区出土　口径18.6　高さ5.4）

口縁部は屈曲せず，比較的広い底部から口縁部に向かって直線的に開く形態である。口端部で内側に屈曲する。

口唇部装飾帯　口唇部装飾帯は連続する小波状口縁である。

頸部文様帯　内面にミガキが施される。

胴部文様帯　内面はミガキが施される。外面は上下端をそれぞれ２条の沈線で区画する。文様帯は，区画文を主体として，四角文・ノの字文などを充填する連続文様がみられる。

胎土は精選され，焼成は良好である。赤色顔料が塗布される。大洞Ｃ１式。

図版95―１（W25区出土　口径10.7，高さ3.4）

口縁部は屈曲せず，比較的広い底部から口縁部に向かって直線的に開く形態である。口端部で内側に屈曲する。底部はやや丸底の形態である。

口唇部装飾帯　口唇部装飾帯は連続する小波状口縁である。

頸部文様帯　内面に１条の沈線文がめぐる。

胴部文様帯　外面は上端が１条，下端が２条の沈線により区画される。文様帯は，配置文ＣⅡを主体として，三角文・四角文・ノの字文が充填され，連続文様が展開する。

胎土は精選され，焼成は良好である。大洞Ｃ２式。

図版95―２（Ｗ７区出土　復元口径20.8　高さ9.2）

口縁部は屈曲せず，広い底部から口縁部に向かって直線的に開く形態である。

口唇部装飾帯　口唇部装飾帯は１対のＢ字形突起が配される。

頸部文様帯　内面は１条の沈線がめぐり，外面は１条の刻み目をもつ沈線がめぐる。

胴部文様帯　内面はヨコ方向のミガキが施される。外面はそれぞれ１条の沈線で，文様帯が４つに区画される。１段目は，末端部が噛み合う右上がりの羊歯状文が展開する。２段目は，末端部が噛み合わない左上がりの羊歯状文が展開する。３段目は，連結した三叉状文を主体に，ノの字文を充填した文様帯が展開する。３段目と４段目の間に瘤が１個貼り付けられ，４段目には縄文ＬＲの斜行縄文が施文される。

胎土は精選され，焼成は良好である。部分的に赤色顔料がみられる。地の色調は黒褐色である。大洞ＢＣ式。

ｅ．Ⅲ　類

図版97（W17区出土　口径長軸26.4　短軸14.6　高さ5.4）

口縁部は屈曲しない。平面形は洋梨形を呈し，側面形は船形を呈する。底部は丸底状を呈し，口縁部

に向かってやや直線的に開く形態である。

口唇部装飾帯　口唇部装飾帯はB字形突起が配され，連続する小波状口縁を成す。

頸部文様帯　突起の中央から外面に向けて，右下がりの羊歯状文がのびる。内面にミガキが施される。

胴部文様帯　外面は上端を2条，下端を3条の沈線で区画する。文様帯は，区画文C1を主体として，四角文・ノの字文を充填して，連続文様が展開する。

胎土は精選され，焼成は良好である。赤色顔料が塗布される。大洞C1式。

第6節　台付土器(第29～31図，図版第98～129，第7表)

1．分　　類

台付土器の器形は先の器形ごとの分類に従うこととし，さらに台部の分類を以下のように設定する。

1)台部形

a．　台中央部で膨らむもの。

b．　「ハ」字状に拡がるもの。

2)台部文様

イ．　文様帯をもつもの。

ロ．　沈線を2条以上巡らせるもの。

ハ．　沈線が1条巡るもの。

ニ．　無文。

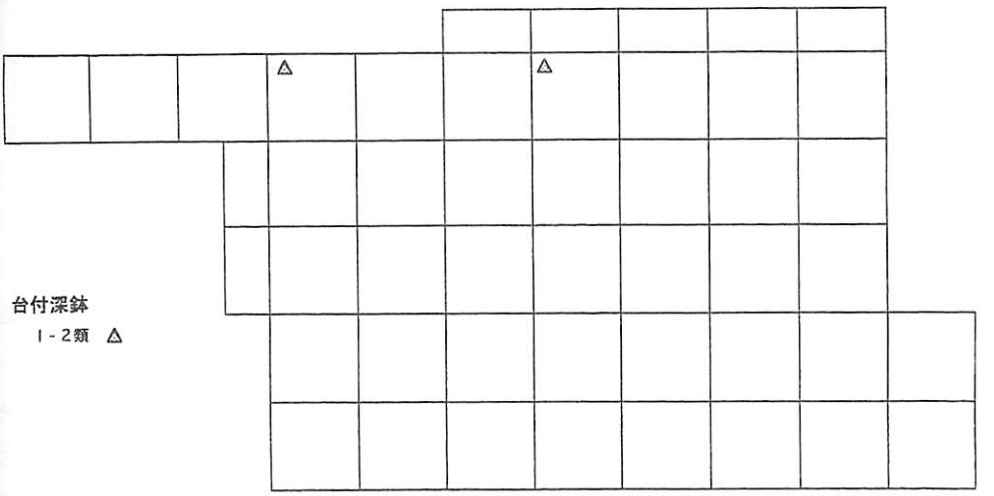
2．各類の分析(第7表，第29～31図)

第7表　台付鉢形土器型式別集計表

分類＼型式		B	BC	C1	C2	不明	小計	総計
I	1	4	1	4	2	－	11	29
	2	－	5	13	－	－	18	67.4％
	3	－	－	－	－	－		
	4	－	－	－	－	－		
計		4	6	17	2	－		
		13.8	20.7	58.6	6.9			
		B	BC	C1	C2	不明	小計	総計
II	1	－	1	7	3	－	11	14
	2	－	－	2	－	－	2	32.6％
	3	－	－	1	－	－	1	
計		－	1	10	3	－		
			7.1	71.4	21.4			
合計		4	7	27	5	－		43
		9.3	16.3	62.8	11.6			100.0％

台付の深鉢と浅鉢はそれぞれ数点なのに対し，鉢は図示したものが44点と，復元し得た台付土器内で占める割合は非常に高い。そこで鉢は器形分類ごとに検討する。

深鉢の2点(図版99－1・2)は共にI類に属する。I類－1，2が1点ずつあり，前者は文様がB類で，台部分類はb類。後者はA類で，b類に属する。いずれもC1式に相当すると思われる。調査区北側の4，7区から出土。浅鉢は調査区北側の7，10区から出土した。どちらもI類－1で，文様



第29図　台付深鉢形土器出土分布図

はA類。台部はａニ類とａイ類に属し，Ｂ式に相当する。

1)台付鉢Ｉ類－１

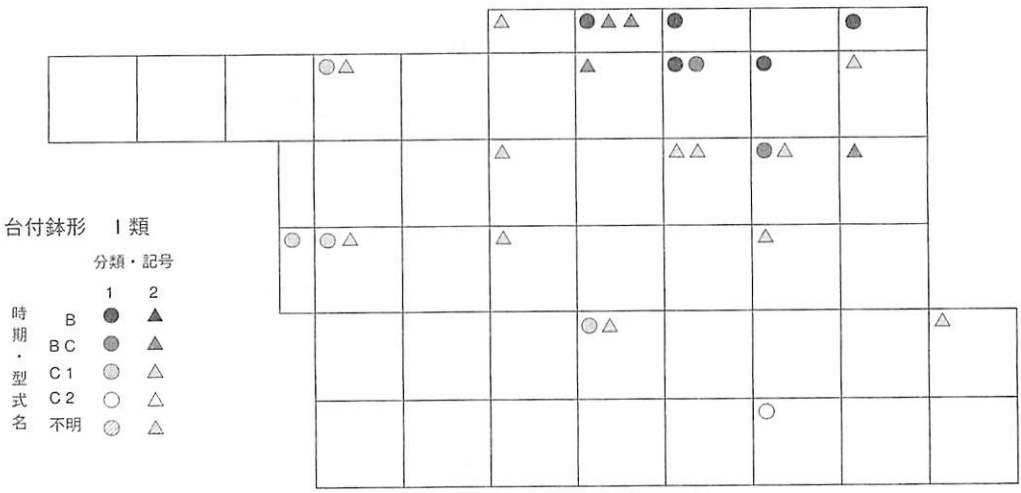
復元できたのは11点で，Ｂ式からＣ２式まで４時期にわたっている。そのうちA類が８点で，Ｂ類２点，D類が１点ある。台部形態のわかるものは７点しかなく，ａ類が３点，ｂ類は４点であるが，他遺跡出土の類例から台部のないものもその形態を推定した。ａ類のうちイ類が１点ある。図版101－２は台部のみであるが，図版101－１と同様の器形のものに付けられたと思われる。残る２点は残存する上半部に縄文が施される。図版103－３もおそらく同じタイプのものと思われ，これらはいずれもＢ式に相当する。ｂ類ではイ，ハ類が１点，ニ類は２点あった。

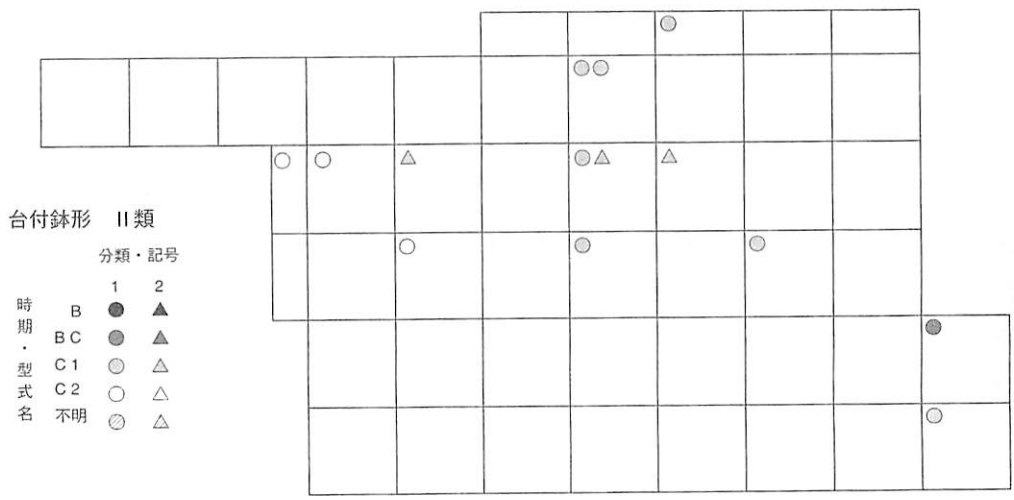
2)台付鉢Ｉ－２類

復元できたものが18点あるがＣ２式のものはなく，Ｃ１式が13点(72.2%)と多い。A類が17点，Ｂ類は１点のみであった。台部の残存するものは11点あり，すべてｂ類に属す。ロ類が２点あり，沈線間に列点文が施されている。ともにＣ１式である。ハ類は４点で，図版119－２だけは沈線下無文。ニ類は３点ある。また底部と台部の境界に隆帯を巡らせたものが８点ある。これは他の類に比べその割合が多く，本類の特徴といえようか。これらはＢＣ式，Ｃ１式に併行するものに限る。

3)台付鉢Ⅱ－１類

復元できたものは11点で，ＢＣ式からＣ２式のものがある。ここでもＣ１式が７点(63.6%)と多数を占める。A類５点，Ｂ類は６点であった。台部の残存する７点はすべてｂ類で，イ，ニ類が１点ずつ，ハ類は５点ある。なお台部のない４点もｂ類に属する。





第30図　台付鉢形土器出土分布図

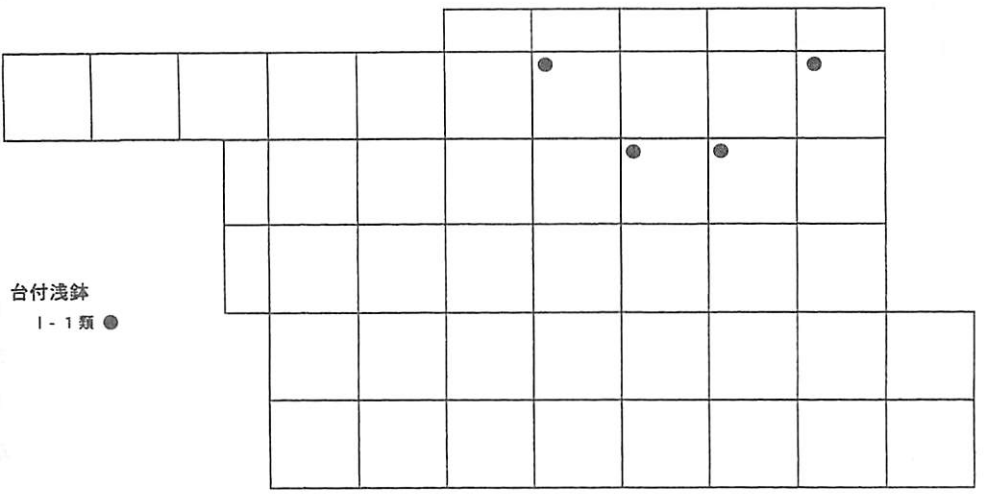
4)台付鉢Ⅱ－2類

復元できたものは2点で，いずれもC1式に属する。文様はA，B類がそれぞれ1点，台部はb＝類である。

5)台付鉢Ⅱ－3類

復元できたものは1点のみで，A類である。台部はbハ類に属し，沈線より下は縄文が施されている。C1式に併行するものと思われる。

これら台付鉢の時期ごとの分布状況をみると，大洞B式が調査区北東のみ(9，12，13，15区に一点ず



第31図　台付浅鉢形土器出土分布図

つ)に，続くＢＣ式が12区から20区へグリッドラインに対し斜め方向の分布を示す。Ｃ１式は出土点数が多く調査区を斜めに横切り幅ひろい拡がりを見せている。Ｃ２式は調査区西側に密に分布するが，南(27，34区)にも点在する。こうしてみると各時期が平行して，それぞれ分布域を混じらせながら拡がっていることが分かる。

3．個　別　解　説

1)台付深鉢

a．深鉢Ⅰ類－1

図版99－2(Ｗ４区出土　口径18.0　高さ22.0)

台脚部が欠損している。

口唇部装飾　等間隔に刻み，浅い波状を呈す。

口縁部文様帯　二条の沈線により胴部と区画し，無文帯を形成。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲである。

台　　部　底部と台部との接合部はナデとミガキにより，無文帯を作り出す。

粗製の土器であり，やや粗いナデ調整がされる。大洞Ｃ１式に相当。

b．深鉢Ⅰ類－2

図版99－1(Ｗ７区出土　口径8.5　高さ11.5)

台脚部外面は接合部から剥離し，欠損している。台部は短く真っ直ぐに拡がる。口縁部文様帯を持たない。

口唇部装飾　等間隔に上から刻み，刻み部から内面に逆ノ字状に施文する。またその下に一条の沈線を巡らせる。

頸部文様帯　三条の沈線が巡り，一段目に6個を一単位とした列点を施す。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲ。

底部文様帯　一条の沈線によって胴部と区画され，無文帯を形成する。

台　　部　底部と台部との接合部に隆帯を巡らせ，Ｄ字状の列点文を施し，さらのその下に沈線が走る。

内面を丁寧に磨く。大洞Ｃ１式に相当する。

２）台付鉢

ａ．鉢Ⅰ類－１Ａ

図版101－１（W12区出土　高さ11.4）

口縁部を欠くが，頸部から真っ直ぐに長く外反するタイプのものである。

頸部文様帯　沈線により二段に区画される。上段は横長な列点が施され，下段は左下がりの入組み三叉文である。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲである。

台　　部　ａイ類。ほぼ等間隔に三本の沈線があり，上段は胴部からの縄文が続く。その下の台部が膨れた部分には左下がりの入組み三叉文が描かれる。

半精製の土器で，丁寧には磨かれない。大洞Ｂ式に当たる。

図版101－２（Ｗ８区出土　口径19.0）

ａイ類の台部のみであるが，台中央部が丸く膨れる形状から図版102－１と同類とした。

台　　部　胴部との境に沈線を入れる。その下は三叉文の尻尾がぐるりと入組む文様が描かれる。さらに三条の沈線が施され，下段には横長な列点文がある。

やや粗製の土器である。これも丁寧には磨かれない。大洞Ｂ式に当たる。

図版103－１（W13区出土　口径16.8　高さ12.8）

ａ類の台部下半を欠く。

口唇部装飾　二つ一組のＢ字状突起が６単位巡る。

口縁部文様帯　左下がりの入組三叉文を施す。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲである。

台　　部　下半を欠くが，残存部まで縄文が施される。

大洞Ｂ式に相当。

図版103－２（Ｗ９区出土）

ａ類の台部下半を欠く。１，３に比べ口縁部がかなり開くものである。

口唇部装飾　二つ一組のＢ字状突起が６単位巡る。

口縁部文様帯　右下がりの入組三叉文を施す。入組三叉文の間には三角文が描かれる。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲである。

台　　部　下半を欠くが，残存部まで縄文が施される。

大洞Ｂ式に相当する。

図版103－3（W15区出土　口径13.0）

底部から下を欠く。ａ類の台部が付くものと思われる。口縁，胴部との境界である沈線が雑に引かれており不明瞭。

口唇部装飾　二つ一組のＢ字状突起が巡るものであろう。

口縁部文様帯　左下がりの入組三叉文を施す。１，２より直線的に描かれている。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲ。

大洞Ｂ式に相当する。

図版105－1（W19区出土　高さ12.9）

台部を欠くがｂ類のものである。口縁と頸部を区画する沈線が不明瞭である。

口唇部装飾　連続した刻みを施し，Ｂ字状突起を配す。

口縁部文様帯　不規則な列点文。

頸部文様帯　左下がりの羊歯状文であるが，沈線や列点の数などが不規則。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲである。

底部と台の接合部には，指頭圧痕がみられる。大洞ＢＣ式に相当する。

図版105－2（Ｗ８区出土　口径12.6　高さ12.0）

ほぼ完形の土器である。

口唇部装飾　連続した刻みを施し，ほぼ等間隔にＢ字状突起を付ける。そしてその突起中央の刻み部から沈線が派生している。

口縁部文様帯　Ｏ字状の列点文。

頸部文様帯　左下がりの羊歯状文。

胴部文様帯　沈線で二段に区画され，上段はさらに上部が左下がりの羊歯状文と下部が横方向に間延びしたＸ字状ないしＣ字状文。下段は斜行縄文ＬＲである。

底部文様帯　無文で丁寧な横方向ミガキ。

台　　部　Ｘ字状の文様を透かし彫りする。脚部には縄文ＬＲが施されている。ミガキが良くなされ，丁寧なつくりである。ｂイ類に属する。

大洞ＢＣ式あるいはＣ１式か。

図版107－1（W67区出土　口径12.7　高さ9.2）

底部以下を欠くが，台部はｂ類が付くものであろう。

口唇部装飾　口唇外面を連続して陰刻し，一対の突起を付す。内面には一条の沈線が巡る。

口縁部文様帯　頸部と区画する沈線直上に細かい楕円形の列点文が施される。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲを磨消して雲形文を描く。また縦にＢ字状突起を付ける。おそらく土器の正面を表すものであろう。

底部文様帯　斜行縄文ＬＲ。

胴部から底部にかけて丸みを持つものである。内面も良く磨かれた精製土器。大洞Ｃ１式に相当する。

図版107－５（W34区出土　高さ7.9）

ほぼ完形である。

口唇部装飾　口唇は肥厚し，山形を呈する。外面は連続して陰刻される。

口縁部文様帯　無文である。

頸部文様帯　三条の沈線があり，その真ん中のものには列点が施される。そして突起がひとつ付く。

胴部文様帯　文様帯の上方は波状の沈線によって，下方は二連の山形状文によって斜行縄文ＬＲをすり消す。

底部文様帯　斜行縄文ＬＲ。

台　　部　短い脚で，端部に斜行縄文ＬＲを施す。

内面は横方向の丁寧なミガキ。大洞Ｃ２式に相当する。

ｂ．鉢Ⅰ類－１Ｂ

図版107－２（W58区出土　口径10.7）

底部以下を欠くが，ｂ類の台部が付くもの。

口唇部装飾　口唇外面を連続して陰刻。内面には一条の沈線を巡らせる。

口縁部文様帯　無文。

頸部文様帯　三条の沈線が施され，張り出しの長い突起がひとつ付される。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲである。

頸部から底部にかけて直線的なプロポーションを持つ。内面は横位のミガキが施される。大洞Ｃ１式に相当。

図版107－３（Ｗ４区出土　口径9.2　高さ8.4）

完形の粗製土器である。

口唇部装飾　口唇外面を連続して陰刻する。

口縁部文様帯　無文。

頸部文様帯　二条の沈線が施され，突起がひとつ付される。

胴部文様帯　無文であるが，磨かれない。

台　　部　ｂ＝類。短脚で，端部を肥厚させる。

大洞Ｃ１式に相当する。

図版107－４（W27区出土　口径16.9　高さ16.1）

やや大型の粗製土器である。

口唇部装飾　口唇外面を連続して陰刻する。

口縁部文様帯　無文。

頸部文様帯　二条の沈線が施され，突起がひとつ付される。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲである。

台　　部　ｂニ類。脚は短い。

大洞Ｃ１式に相当する。

ｃ．鉢Ｉ類－２Ａ

図版109－１（W17区出土　口径27.6　高さ22.2）

ほぼ完形の大型品である。

口唇部装飾　小刻みに連続して刻まれる。

口縁部文様帯　口唇の刻みの下に不規則ではあるが列点が施される。

頸部文様帯　五条の沈線からなり，真ん中のものには連続した列点がある。そして剥離しているが，突起が付されていた。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲ。

台　　部　ｂハ類。底部との境には隆帯が巡り，その上には不明瞭な刺突，沈線文がみられる。脚は長く無文で，端部にのみ斜行縄文ＬＲを施す。

内面は横方向のミガキ。大洞Ｃ１式に相当する。

図版111－１（W21区出土　口径13.2　高さ13.5）

ほぼ完形の土器である。

口唇部装飾　連続した刻みを施し，Ｂ字状突起を付す。

口縁部文様帯　不正確な沈線で区画される。

頸部文様帯　沈線間に，縦に細い刺突文が巡る。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲである。

台　　部　ｂニ類。底部は厚い。外面の台部との接合部は強くなでられたため括れ，そこからやや丸みを帯びた脚が付く。脚端部は内面からなで付けられて三角形を呈する。

内面は横方向のミガキ。大洞Ｃ１式に相当する。

図版111－２（W10区出土　口径12.2　高さ12.8）

台部を除き全体的に丸みを帯びた器形で，口唇部はやや肥厚している。

口唇部装飾　連続した刻みを施し，ほぼ等間隔にB字状突起を付ける。そしてその突起中央の刻み部から沈線が派生している。

口縁部文様帯　丸，あるいは楕円の刺突を施す。

頸部文様帯　口縁部文様帯に同じ。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲである。

底部文様帯　無文。

台　　部　ｂハ類。底部との接合部分に列点が巡る。台部上半は無文，下半は斜行縄文ＬＲ。

内面は横方向のミガキ。大洞Ｃ１式に相当する。

図版111－３（Ｗ７区出土　口径14.8）

底部以下を欠くが，台部はｂ類に属す。頸部はあまり括れず，内面は肥厚している。

口唇部装飾　連続したB字状突起が巡る。

口縁部文様帯　沈線間に刺突文が施される。

頸部文様帯　左下がりの羊歯状文。突起をひとつ付す。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲ。

内面は横方向のミガキ。大洞Ｃ１式に相当?。

図版111－４（W11区出土　口径8.4　高さ9.5）

ほぼ完形である。

口唇部装飾　細かく刻む。内面に一条の沈線がはしる。

口縁部文様帯　沈線内に連続した刺突文。

頸部文様帯　沈線間に連続した刺突文を施し，突起をひとつつける。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲ。

台　　部　裾が広がらず，長い脚である。底部との境に刺突文。脚部の上半分は無文帯を形成し，下半一段目に刺突文，その下は斜行縄文ＬＲ。ｂロ類に属す。

内面は横方向に磨く。大洞Ｃ１式に相当する。

図版113－１（W18区出土　口径11.3　高さ10.8）

ほぼ完形である。頸部はほとんど括れず，口縁断面は三角形を呈する。

口唇部装飾　連続した刻みを施し，ほぼ等間隔にB字状突起を付ける。そしてその突起中央の刻み部から沈線が派生している。

口縁部文様帯　沈線間に連続した刺突文。

頸部文様帯　沈線間に連続した刺突文。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲ。

底部文様帯　幅の狭い無文帯をつくる。

台　　部　やや裾広がりな脚部を持つ。中央部の沈線によって，上は無文帯，下は斜行縄文ＬＲにわかれる。ｂハ類。

内面を横方向に丁寧に磨く。大洞Ｃ１式に相当する。

図版113－2（W19区出土　口径11.1　高さ9.6）

やや器壁の厚いもので，口縁部を三分の一ほど欠く。

口唇部装飾　口唇を上から刻み，ひとつがやや長い波状を呈する。

口縁部文様帯　列点が施される。

頸部文様帯　左下がりの羊歯状文。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲ。

台　　部　ｂニ類。直線的に外へ開く形を成す。また底部との接合部には沈線が巡る。

横方向に丁寧に磨かれている。大洞ＢＣ式。

図版113－3（W24区出土　口径15.8　高さ16.0）

大型の台付鉢で，ほぼ完形である。

口唇部装飾　口唇を細かく刻み，２個一対のＢ字状突起を付す。

口縁部文様帯　藤村分類による配置文Ａ類Ｉ型と充填文の組み合わせによって文様を描く。

胴部文様帯　斜行縄文ＲＬである。

底部文様帯　無文。

台　　部　底部との接合部に列点文。脚中央部は上下に一条ずつの沈線を巡らせ区画としている。下半部は二分され上は列点文，下は斜行縄文ＲＬである。ｂロ類。

内面を横方向に丁寧に磨く。大洞Ｃ１式に相当する。

図版113－4（W16区出土　口径10.7）

底部以下を欠く。台部はｂ類。胴部は丸く，頸部に向かってかなり内傾する。

口唇部装飾　口唇を細かく刻み，Ｂ字状突起を等間隔に配置する。

頸部文様帯　左下がりの羊歯状文が並行化している。

胴部文様帯　斜行縄文ＲＬである。

内面を横方向に丁寧に磨く。大洞Ｃ１式に相当する。

図版115－1（W12区出土　口径12.7）

ｂ類の台脚部下半を欠くのみである。

口唇部装飾　陰刻を施し，連続したＢ字状突起がつけられる。

口縁部文様帯　刺突文が施される。

頸部文様帯　右下がりの三叉文。その下には連続した刺突文。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲ。

底部文様帯　無文。胴部との境界には，列点文が巡る。

台　　部　底部との境界には，隆帯を貼り，その上に列点文を巡らせる。

大洞Ｂ式あるいはＢＣ式。

図版115－２（Ｗ７区出土　口径11.8）

ｂ類の台脚部を欠く。

口唇部装飾　連続したＢ字状突起がつく。

口縁部文様帯　刺突文。

頸部文様帯　左下がりの羊歯状文。口縁部とに跨がって，横長な突起が付く。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲである。

底部文様帯　無文。

台　　部　底部との境に隆帯を貼り，その上に列点文を巡らせる。

大洞ＢＣ式に相当する。

図版115－３（W20区出土　口径11.9　高さ7.5）

底部以下がないもの。ｂ類の台部が付くもの。

口唇部装飾　口唇を刻み，Ｂ字状突起を等間隔に配置する。

頸部文様帯　左下がりの羊歯状文。縦長な突起が付く。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲである。

底部文様帯　無文。

内面を良く磨く。大洞ＢＣ式に相当。

図版117－１（W18区出土　口径12.8　高さ7.3）

ｂ類の台脚部を欠く。頸部内面が鋭く「逆く字」状に屈曲する。

口唇部装飾　連続した刻みを施し，ほぼ等間隔にＢ字状突起を付ける。そしてその突起中央の刻み部から沈線が派生している。

口縁部文様帯　２条の沈線が巡る。

頸部文様帯　左下がりの羊歯状文が平行化したもの。突起をひとつつける。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲ。

底部文様帯　部との境界に段を作り出す。無文で丁寧なヨコミガキが施される。台との接合部に頸部文様帯と同様の文様が巡る。

大洞Ｃ１式に相当。

図版117－２（W12区出土　口径14.4　高さ9.5）

ｂ類の台脚部の下半を欠く。

口唇部装飾　刻みを施し，連続したＢ字状突起を作り出す。

口縁部文様帯　左下がりの入り組み羊歯状文。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲ。

台　　部　底部との接合部には刺突文が施される。

大洞ＢＣ式に相当する。

図版119－１（W27区出土　高さ11.4）

丸みを帯びた器形に，短い台が付く。

口唇部装飾　陰刻が施される。

口縁部文様帯　無文。

胴部文様帯　区画文Ｃ２型と配置文，充填文の組み合わせによる文様。

底部文様帯　斜行縄文ＬＲ。

台　　部　ｂニ類。脚端部がやや肥厚し，断面が三角形を呈する。

内面を横方向に丁寧に磨く。大洞Ｃ１式に相当する。

図版119－２（W64区出土　高さ9.4）

頸部がほとんど無く，短い口縁が屈曲して外反する。

口唇部装飾　連続して刻む。

口縁部文様帯　刺突文が巡る。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲを磨り消して，Ｃ１型区画文と充填文により文様を描く。

底部文様帯　無文。

台　　部　上半は無文，脚端部やや上に一条の沈線を巡らせる。ｂハ類。

内面を横方向に丁寧に磨く。大洞Ｃ１式に相当する。

図版119－３（Ｗ４区出土　口径11.0）

ｂ類の台部を欠く。頸部がほとんど無く，短い口縁が屈曲して外反する。

口唇部装飾　陰刻する。

口縁部文様帯　刺突文が巡る。また縦長の突起がひとつ付される。

胴部文様帯　区画文Ｃ２型と配置文，充填文の組み合わせによる文様が描かれる。

底部文様帯　無文。

内面を横方向に丁寧に磨く。大洞Ｃ１式に相当する。

d．鉢Ⅰ類－２Ｂ

図版117－３（W58区出土　口径12.8　高さ9.1）

底部以下を欠く。ｂ類の台部が付くもの。肩が張り出し内側への屈曲が強く，口唇は短く真っ直ぐに立ち上がる。

口唇部装飾　細かな刻み目が入る。

口縁部文様帯　２条の沈線。突起は一つで，上方へ突き出すようにつけられている。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲである。

内面を横方向に丁寧に磨く。大洞Ｃ１式に相当する。

e．鉢Ⅱ類－１Ａ

図版121－２（W17区出土　口径8.0　高さ8.5）

頸部の屈曲がややきつい。

口唇部装飾　Ｂ字状突起がつけられる。

口縁部文様帯　刺突文が二段に施文される。剥離しているが，瘤が付いていたものと思われる。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲ。

台　　部　外面の脚端部直上には一条の沈線が巡り，端部断面は三角形を呈す。底部との境界にも沈線が巡り，脚部は無文。ｂハ類に属する。

横方向のミガキが成される。大洞Ｃ１式に相当。

図版123－１（W56区出土）

ｂ類の台部以下を欠く。

口唇部装飾　口唇外面に刺突を施す。

口縁部文様帯　三条の沈線が巡る。

胴部文様帯　縄文を磨り消して文様が描かれる。「エ字状文」を下から「Ｕ字状文」が巻くような文様を一単位とし，その間に三角文を配す。また二個一組の小瘤が沈線から垂れ下がるように付される。

底部文様帯　斜行縄文ＲＬ。

内面は横方向に磨かれている。大洞Ｃ２式に相当する。

図版123－２（W59区出土　口径11.4）

ｂ類の台脚部を欠く。また胴部も残りが少ない。

口唇部装飾　斜行縄文ＲＬが施され，Ｂ字状突起が付く。

口縁部文様帯　沈線を三条巡らせる。

頸部文様帯　縄文を磨り消して文様が描かれる。平行する沈線間に「Ｃ字状文」が絡むように描かれている。

胴部文様帯　斜行縄文ＲＬ。

底部文様帯　無文。

横方向に磨く。大洞Ｃ２式に相当する。

図版125－１（W13区出土）

ｂ類の台脚部を欠く。

口唇部装飾　Ｂ字状突起が等間隔につけられる。

口縁部文様帯　Ｂ字状突起の刻み部から口縁と平行に走る沈線が派生する。沈線の上に刺突文が連続して施される。

頸部文様帯　４条の沈線が巡り，そのうち１・２本目間に連続した刺突，３・４本目間に二個を一単位とした刺突をする。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲである。

底部文様帯　無文。

台　　部　接合部に刺突文を施す。

横方向の丁寧なミガキ。大洞Ｃ１式に相当。

図版125－２（W64区出土　高さ6.1）

口唇部装飾　口唇端部を上から刻み，口唇のやや下に一条の沈線を巡らした後，刻み部から縦に沈線を入れ，小さな瘤を作り出す。

口縁部文様帯　沈線によってポジティブな「Ｃ字状文」を作る。

胴部文様帯　やや縦位の斜行縄文ＬＲである。

底部文様帯　無文。

台　　部　脚中央部できつく外反する。「Ｃ字状文」を透かし彫りにて描く。ｂイ類。

横方向の丁寧なミガキ。大洞ＢＣ式に相当。

図版125－４（W22区出土　口径9.2）

縦に長い器形で，底部以下が欠損している。台部はｂ類のものが付く。

口唇部装飾　口唇を細かく刻み，Ｂ字状突起を等間隔に配す。

口縁部文様帯　沈線間に刻み。

頸部文様帯　横長の突起を付す。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲ。

半精製土器である。大洞Ｃ１式に相当する。

ｆ．鉢Ⅱ類－１Ｂ

図版121－１（W24区出土　口径6.8　高さ7.2）

ほぼ完形である。

口唇部装飾　口唇部を上から細かく刻む。

口縁部文様帯　口唇，胴部との境界となる沈線は明瞭であるが，その間の２本は不明瞭なものである。

胴部文様帯　斜行縄文ＲＬ。

台　　部　脚は他と比べ外反の度合いが高い。外面の脚端部直上には一条の沈線が巡り，端部断面は三角形を呈す。底部との境には隆帯があり，そこに細いとぎれとぎれの沈線が描かれる。ｂハ類に属する。

横方向のミガキが施される。大洞Ｃ１式に相当。

図版121－３（W65区出土　口径9.6　高さ11.4）

口唇部装飾　横長のＢ字状突起がつけられる。

口縁部文様帯　３条の沈線が施され，瘤が付される。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲである。

台　　部　外面の脚端部直上には一条の沈線が巡り，その下に斜行縄文ＬＲがつく。底部との接合部には隆帯が巡り，充填文が描かれる。ｂハ類に属する。

大洞Ｃ１式に相当する。

図版123－３（W66区出土　口径13.6　高さ12.2）

ほぼ完形の土器である。

口唇部装飾　正面から見ると三角形状に飛び出る突起をひとつ持つ。そして口唇には細かい刻み目を入れる。

口縁部文様帯　二条の沈線が巡り，二個一組の小瘤が下の沈線から垂れ下がるように，突起の両脇にのみ付される。

胴部文様帯　縦位の縄文ＲＬである。

台　　部　脚の端部に斜行縄文ＲＬが残る。ｂハ類に属する。

内・外面とも横方向に磨く。大洞Ｃ２式に相当する。

図版125－３（Ｗ７区出土　口径7.5　高さ10.5）

ほぼ完形である。

口唇部装飾　内外面共に，陰刻によってＢ字状突起状の装飾を作り出す。

口縁部文様帯　三条の沈線。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲ。

底部文様帯　無文。

台　　部　ｂハ類に属する。脚端部やや上に一条の沈線が巡る。調整が悪く，端部はゆがんでいる。

やや粗製の土器で，調整もあまり良くない。大洞Ｃ１式に相当する。

図版125－５（Ｗ７区出土　口径11.4　高さ11.4）

ほぼ完形の土器である。

口唇部装飾　口唇を刻み，Ｂ字状突起をほぼ等間隔に配す。

口縁部文様帯　Ｂ字状突起の刻み部分と隣の突起の刻み部を繋ぐような沈線が描かれる。

頸部文様帯　三条の沈線が巡る。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲである。

底部文様帯　胴部との境界を意識しているか不明瞭で，故意に縄文をつけなかったのかどうかは分からない。

台　　部　ｂハ類に属する。脚端部やや上に一条の沈線が巡り，端部が上にやや反るような形状をとる。

大洞Ｃ１式に相当する。

ｇ．鉢Ⅱ類－２Ａ

図版127－１（W18区出土　口径11.8　高さ12.8）

口唇部装飾　Ｂ字状突起の刻み部分から沈線が派生する。

口縁部文様帯　四条の沈線が巡り，２・３本目間に列点文。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲである。

台　　部　ｂニ類。強く撫で付けられて，脚端部がやや外に反る。

やや粗製の土器であまり調整も良くない。大洞Ｃ１式に相当する。

ｈ．鉢Ⅱ類－２Ｂ

図版127－２（W17区出土　口径13.0　高さ13.9）

台脚端部が欠損している。

口唇部装飾　Ｂ字状突起を等間隔に配する。

口縁部文様帯　三条の沈線があり，縦長の突起がひとつ付く。

胴部文様帯　斜行縄文ＬＲである。

台　　部　ｂニ類。

やや粗製の土器である。大洞Ｃ１式に相当。

ｉ．鉢Ⅱ類－３

図版127－３（W57区出土　口径11.8　高さ10.6）

ほぼ完形である。底部がかなり厚みを持つ。

口唇部装飾　Ｂ字状突起が不規則につく。

口縁部文様帯　横長な列点文が描かれる。

頸部文様帯　三条の若干不正確な沈線を描き，１・２本目の間に連続した刺突文を施す。

胴部文様帯　斜行縄文ＲＬ。

台　　部　ｂハ類。台上半は無文，下には斜行縄文ＲＬが施される。

大洞Ｃ１式に相当する。

3)台付浅鉢

図示したのは2点のみで，いずれもⅠ類－1Aに属する。

a．浅鉢Ⅰ類－1

図版129－1(W10区出土　口径10.4　高さ8.0)

口縁部を僅かに欠損するが，ほぼ完形の小型品である。

口唇部装飾　B字状突起が等間隔につけられる。

口縁部文様帯　左下がりの入り組み三叉文である。

頸部文様帯　2本の沈線間に横に長い楕円形の列点文が連続する。

胴部文様帯　斜行縄文LR。

台　　部　aハ類。脚は長く，上半部が膨れる。そこから中央部で括れ直線的に外反する。文様は施されず無文。

整形がやや粗く，歪な形となっている。調整も粗い。大洞B式に相当する。

図版129－2(W7区出土　口径19.9　高さ11.8)

ほぼ完形である。

口縁部文様帯　ほぼ真横の三叉文。

胴部文様帯　配置文A類Ⅳ型と充填文の組み合わせによって文様が構成されている。

底部文様帯　斜行縄文LR。

台　　部　幅の広い脚で，上半部が膨れる。そこから中央部で括れやや丸みを帯びながら外反する。上半部には左下がりの三叉文があり，その中心部を穿孔する。また脚部最下段にも真横にはしる三叉文があり，それぞれ三叉間には小円を穿孔している。aイ類。

横方向に丁寧に磨く。大洞B式に相当する。

第7節　壺形土器(第32・33図，図版第130～157，第8・9表)

縄文時代晩期の大洞系土器群のうち，壺形土器については，その形態差・文様差がもっとも大きく，その合理的な分類については，現段階においても議論されている。今回の調査において出土した壺形土器の分類についても，他の器種のような口頸部の屈曲の有無による形態的共通性だけでは難しいといわざるをえなかった。

したがって，今回は，壺形土器の分類にあたって，壺形土器の形態をもっとも特徴づける胴部と口縁部の形態による大別を意識しつつ，さらに有文・無文・縄文という文様的要素を加えて分類を進める。

なお，解説については，有文・無文系壺形土器と縄文系壺形土器にわけて行うこととする(第9表)。

1．分　　類

1)有文・無文系壺型土器(図版131～149－4)

有文・無文系壺型土器とは，文様帯・磨消縄文帯をもつもの，および，黒色磨研系の壺型土器を指

す。両者には形態的共通性が見られ，まとめて解説する。

Ⅰ類：胴部が球状あるいは，それに近い形状である。口縁部形態は肩部・頸部・口部がくの字状に屈曲するものをⅠA，肩部・口頸部が明瞭に分かれず，肩部から外反・外傾するものⅠBとする。ただし，有文系にはⅠBは見られない。

Ⅱ類：胴部が長胴形である。Ⅰ類同様，口縁部形態が肩部・頸部・口部と明瞭にくの字に屈曲するものをⅡA，肩部・口頸部が明瞭に分かれず，屈曲しないものⅡBとする。また，口唇部に沈線をもつものもⅡAに含む。

第8表　壺形土器分類別集計表

	分類＼大きさ		大	中₁	中₂	小	不明	類計	小計	
有文系	Ⅰ	A	2	2	4	4	2	14 60.9%	23	37
		B	0	0	2	6	1	9 39.1%	62.2 %	
	Ⅱ	A	0	0	4	0	0	4 80.0%	5	
		B	0	0	1	0	0	1 20.0%	13.5%	
	Ⅲ	A	0	1	1	1	1	4 80.0%	5	
		B	0	0	0	1	0	1 20.0%	13.5%	
	Ⅳ		0	0	0	2	2	4 100.0%	4 10.8%	
	小計		2 5.4%	3 8.1%	12 32.4%	14 37.8%	6 16.2%	－	37	74.0%
縄文系	Ⅰ	A	0	0	0	1	1	2 15.4%	2 15.4%	13
	Ⅱ	A	1	1	2	1	1	6 46.2%	10	
		B	0	2	0	1	1	4 30.8%	76.9%	
	Ⅲ		0	1	0	0	0	1 7.7%	1 7.7%	
	小計		1 7.7%	4 30.8%	2 15.4%	3 23.1%	3 23.1%	－	13	26.0%
総計			3 6%	7 14%	14 28%	17 34%	9 185	－	－	50

Ⅲ類：胴部は長胴形だが，胴部最大径が胴部下半に位置する。口縁部が屈曲するⅢAと屈曲しないⅢBがある。

Ⅳ類：特殊形態とする。胴部は扁球状・扁平状を呈し，底部から胴部にかけて丸みをもつ。口縁部は肩部から直立ないし外傾し，口部が開く形態である。

2)縄文系土器(図版149－5～157)

縄文系土器とは胴部外面や一部口縁部に縄文が施文される壺型土器の一群を指す。形態的な差異が大きいが，以下のように分類した。

Ⅴ類：胴部は球状を呈する。口縁部は肩部・頸部・口部と明瞭に三段にわかれるものをⅤA，肩部・口頸部と明瞭に分かれないものⅤBとしたが，ⅤAに該当するものはない。

Ⅵ類：胴部が長胴形である。口縁部形態は，肩部・頸部・口部と明瞭に三段にわかれるものⅥA(沈線をもつものも含む)と肩部・口頸部と明瞭にわかれないものⅥBがある。

Ⅶ類：胴部形態が長胴形でなく，菱形状を呈する。口縁部形態は，肩部から明瞭にくの字状に屈曲する。

第9表　壺形土器型式別集計表

分類＼型式	B	BC	C1	C2	不明	小計	総計
Ⅰ A	2	6	−	−	6	14	23
B	−	−	1	−	8	9	45.1 %
計	2	6	1	−	14		
	8.7	26.1	4.3		60.9		
分類＼型式	**B**	**BC**	**C1**	**C2**	**不明**	**小計**	**総計**
Ⅱ A	−	1	2	−	1	4	5
B	−	1	−	−	−	1	9.8 %
計	−	2	2	−	1		
		40.0	40.0		20.0		
分類＼型式	**B**	**BC**	**C1**	**C2**	**不明**	**小計**	**総計**
Ⅲ A	−	−	2	−	2	4	5
B	−	−	−	−	1	1	9.8 %
計	−	−	2	−	3		
			40.0		60.0		
分類＼型式	**B**	**BC**	**C1**	**C2**	**不明**	**小計**	**総計**
Ⅳ	−	−	−	1	3	4	4
							7.8 %
分類＼型式	**B**	**BC**	**C1**	**C2**	**不明**	**小計**	**総計**
Ⅴ A	−	−	1	−	1	2	2
							3.9 %
分類＼型式	**B**	**BC**	**C1**	**C2**	**不明**	**小計**	**総計**
Ⅵ A	1	−	−	−	5	6	11
B	−	−	−	−	5	5	21.6 %
計	1	−	−	−	10		
	9.0				91.0		
分類＼型式	**B**	**BC**	**C1**	**C2**	**不明**	**小計**	**総計**
Ⅶ	−	−	−	−	1	1	1
							2.0 %
合計	3	8	6	1	33		51
	5.9	15.7	11.8	2.0	64.7		100.0 %

2．有文系・無文系土器

1）ⅠA類(図版131～141)

有文系のⅠA類は，胴部文様帯が沈線で区画され，そこに約2～12単位の連続文様が展開する。単位文様は，菱形を基本としてS字状にのびる配置文・区画文が多く，三角文・四角文・山形文などの充填文で構成される。また，口縁部および胴部下半に縄文が施文されるものが大半を占め，肩部・頸部文様帯には連結する三叉文や配置文が施されたり，刻み目をもつ隆起帯がめぐるものが多い。口唇部装飾帯は，ほとんど平縁であるが，135のようにB字形突起がめぐる場合もある。大きさは大小様々。胎土は精選され，焼成は良好。色調はほとんどが暗褐色系である。

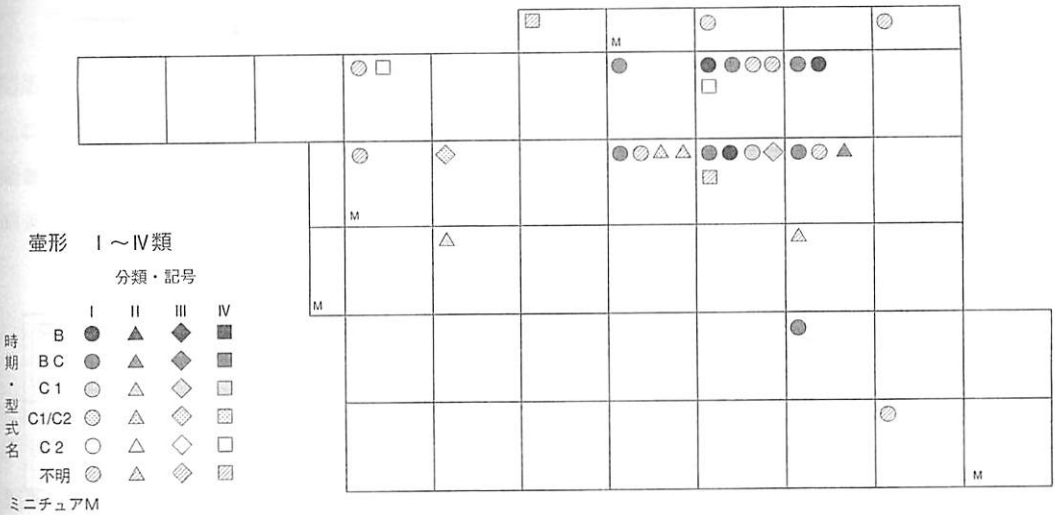
無文系のⅠA類は，口縁部・胴部内外面ともにヨコ方向に丁寧に磨かれ，とくに132―3・5・7は，幅2～3㎜の工具で丹念に研磨され，光沢を帯びる。器高はすべて15cmに満たない。焼成はすべて良好で，色調も暗褐色系を呈するものが多い。

2）ⅠB類(図版143－1～8)

ⅠB類は，ⅠA類の無文系より全体的な器高が約10cm未満と低く，全体的にもやや小さめである。また，底部は平底状と丸底状の2形態がみられる。調整は内外面全体にヨコ方向の丁寧なミガキが施され，光沢をもつ。143－5の口縁部装飾帯には一対のB字形突起が配され，肩部には瘤が1つ貼り付けられるが，ほとんどが平縁である。

3）ⅡA類(図版143－10～145)

有文系ⅡA類は，胴部上半に磨消縄文の連続文様が展開するものと胴部全面に陰刻文が施されるもの



第32図　壺形土器出土分布図・１

がみられる。前者の単位文様は，区画文を中心に充填文で構成される。それに対して後者の方は，沈線により３段に文様帯が区画され，上・下段に半円文が，中段にＫ字状文が刻まれる。また，口縁部および胴部文様帯以下には縄文ＬＲが施文される。肩部・口唇部装飾帯に，瘤とＢ字形突起が装飾される場合もある。

無文系ⅡＡ類は１点だけである。口唇部には沈線が施され，明らかに口部と頸部を区別している。口頸部外面にはタテ方向の，胴部外面にはヨコ方向の丁寧なミガキが施され，光沢を帯びる。ⅡＡ類の焼成はすべて良好で，一部光沢も帯びる。大きさについてもほぼ平均的である。

４）ⅡＢ類（図版143－９）

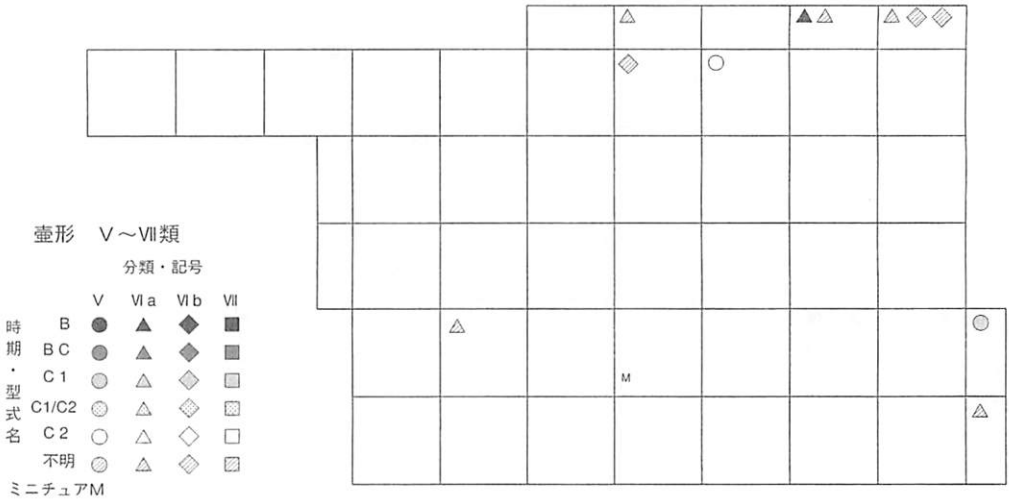
１点だけである。沈線で区画された胴部上半に連続文様が展開する。単位文様は末端のかみ合わない右下がりの羊歯状文が５単位めぐる。口唇部装飾帯には５単位のＢ字形突起がめぐるが，正面には一対，その他は単独で１つずつである。胴部下半には縄文ＬＲが施文される。

５）ⅢＡ類（図版147－１・２・４）

Ⅲ類は，すべて焼成が良好で，胎土も精選されている。器面は光沢を帯び，暗褐色系の色調を呈する。器高も様々見受けられる。文様系のものは，胴部文様帯に磨消縄文の連続文様が展開する。単位文様は，不明である。肩部には瘤が１つ貼り付けられる。無文系のものは，ともに頸部にはタテ方向の，胴部にはヨコ方向の丁寧なミガキが施される。肩部には２条の隆起帯がめぐり，２～４単位の瘤が貼り付けられる。また，赤色顔料が塗布され，底部は４足の形態を呈する場合もある。

６）ⅢＢ類（図版147－３）

ミニチュア土器１点だけである。底部は丸底を呈する。全体的にナデにより成形され，口縁部周辺には指頭圧痕が顕著にみられる。



第33図　壺形土器出土分布図・2

7）Ⅳ類(図版148－1～4)

壺形土器の特殊形態とした。すべて文様をともない，胴部ないし口頸部に文様帯が展開する。単位文様は区画文・配置文を主体に，充填文で構成されると思われるが，欠損が著しく不明なものが多い。全体的に焼成は良好で，胎土は精選されている。

2．縄文系土器

1）ⅤB類(図版148－5・6)

2点みられる。沈線で口頸部と胴部を区画し，胴部外面は縄文LRの斜行縄文が施され，内面はヨコ方向のナデ・ミガキにより整形される。肩部には瘤や隆起帯がめぐり，口唇部装飾帯にはB字形突起がめぐる。

2）ⅥA類(図版151～153－5)

ⅥA類は口頸部にミガキが施され，胴部外面には縄文LRの斜縄文が施されるが，1点のみ縄文RLが施される。大きさは様々である。胎土は砂粒を含み粗雑であるが，焼成は比較的良好なものが多い。

3）ⅥB類(図版153－6，155)

ⅥA類同様に口頸部にミガキが施され，胴部外面には縄文LRの斜縄文が施文される。また，胎土や焼成も類似する。

4）Ⅶ類(図版157)

1点だけである。頸部外面にはタテ方向のミガキが施され，口部・胴部外面には縄文LRの斜縄文が施文される。ⅥA・B類と比べて，器厚が厚い。

3．個体の解説

a．ＩＡ類(図版131～141)

図版131－1(W18区出土)

口唇部装飾帯・口縁部文様帯は口縁部欠損のため不明である。

頸部文様帯　口唇部直下には3条の沈線が施され，沈線直下にはヨコ方向のミガキが施される。

胴部文様帯　頸部と胴部をそれぞれ2条の沈線で区画した文様帯には，配置文らしき文様を主体として，四角文が充填される。配置文は平行する菱形からＳ字状の沈線がのびる単位文様である。磨消縄文の手法は用いられない。文様の単位は不明であるが，2～3単位であろう。また，沈線以下の胴部下半はヨコ方向のミガキが施される。胎土は密で，焼成は良好である。色調は黄褐色を呈する。大洞Ｂ式あるいは大洞ＢＣ式に比定すると思われる。

図版131－2(W29区出土　高さ8.3)

口唇部装飾帯　口唇部に装飾は施されず，平縁を呈する。

口頸部文様帯　内外面にはヨコ方向の丁寧なミガキが施される。

胴部文様帯　胴部上端と下端を1条の沈線で区画し胴部文様帯を形成している。胴部文様帯には配置文Ｅを主文様とし，三角文・四角文が充填され，全部で4単位の文様が割り付けられている。しかし，配置文は純粋な点対称にはならず，上の弧線の先端が磨消されて収束するのに対し，下の弧線の先端は2本に分かれ，内1本は上の弧線につながる。縄文は非常に細くて密なＬＲが施文されている。内外面には丁寧なミガキ調整が施され，赤色顔料も施されている。胴部に赤色顔料が塗布されるが，地の色は淡黄褐色を呈する。胎土は密で，焼成は良好である。大洞ＢＣ式であると思われる。

図版131－3(Ｗ8区出土　口径7.7　高さ13.9)

口唇部装飾帯　口唇部に装飾は施されず，平縁を呈する。

口縁部文様帯　外面にはＬＲの斜行縄文が施文される。内面にはヨコ方向の丁寧なミガキが施される。

頸部文様帯　右上がりの連結三叉文が施される。

胴部文様帯　2条の沈線で頸部と胴部，胴部中央がそれぞれ区画される。沈線以下の胴部下半にはＬＲの斜縄文が施文される。胴部文様帯には配置文を主体に，半円文・三角文・やや大きめな四角文が充填され，文様は4単位で割り付けられていると思われる。配置文については，点対称にはならない。また，弧線の先端部とかみ合う部分は磨消されているが，全体的には連結三叉文が変形したようにも捉えることができる。胴部には2ヵ所の穿孔が残る。胎土は密で，焼成はやや良好である。色調は黒灰褐色を呈する。大洞Ｂ式に比定すると思われる。

図版131－4(Ｗ9区出土)

口唇部装飾帯・口縁部文様帯・頸部文様帯は口縁部欠損のため，不明である。

胴部文様帯　頸部と胴部の間，胴部上半は2条の沈線でそれぞれ区画され，沈線以下の胴部にはＬＲの斜行縄文が施される。単位文様は不明であるが，胴部上半の文様帯には配置文らしき文様を主体に，半円文・三角文が充填され，3単位ほどで構成される連続文様であると思われる。主体の文様は，平行する菱形にＳ字条の沈線がのびる単位文様である。胎土は密で，焼成は良好である。色調は褐色を呈する。大洞Ｂ式あるいは大洞ＢＣ式に比定すると思われる。

図版133（W19区出土　口径10.6）

口唇部装飾帯　口唇部に装飾は施されず，平縁を呈する。

口縁部文様帯　外面にはＬＲの斜行縄文が施文される。内面には丁寧なミガキが施される。

頸部文様帯　ヨコ方向に1・2㎜の丁寧なミガキが施される。

肩部文様帯　2条の刻み目をもつ隆起帯がめぐり，6単位の瘤が貼付けられるようである。

胴部文様帯　頸部と胴部，胴部中央は2条の沈線でそれぞれ区画される。沈線で区画された胴部文様帯には区画文Ａ2と四角文が充填される。連続文様は11・12単位ほどで構成されていると思われる。沈線以下の胴部下半にはＬＲの斜行縄文が施される。胎土は密で，焼成は良好である。色調は暗褐色を呈する。大洞ＢＣ式に比定すると思われる。

図版135（W7区出土　口径14.6　高さ22.3）

口唇部装飾帯　口唇部には2個1対のＢ突起が5単位めぐると思われる。口唇部内面には1条の沈線が施される。

口頸部文様帯　内外面に丁寧なヨコ方向のミガキが施される。

肩部文様帯　頸部直下を2条の沈線で区画し，配置文Ｂが7単位施される。

胴部文様帯　3条の沈線で胴部中央を区画し，胴部文様帯には区画文Ａ2を主体に，三角文・四角文を充填する。連続文様は8単位で構成される。沈線以下の胴部中央に縄文が施文されないが，ヨコ方向の丁寧なミガキが施される。胎土はやや密で，焼成はやや軟質である。色調は淡黄褐色を呈する。大洞ＢＣ式であると思われる。

図版137（W17区出土　口径15.1）

口唇部装飾帯　口唇部に装飾は施されず，平縁である。

口縁部文様帯　外面にはＬＲの斜行縄文が施文され，内面には丁寧なヨコ方向のミガキが施される。

頸部文様帯　丁寧なヨコ方向のミガキが施される。

肩部文様帯　刻み目をもつ隆起帯が2条めぐり，その直上にさらに隆起帯が1条めぐる。その隆起帯には5つの瘤が貼付けられる。瘤と瘤の間には三叉状文とも羊歯状文とも思われる陰刻文が左右に配置され，その中央にノの字文が充填されている。

胴部文様帯　胴部中央は2条の沈線で区画され，その上半に文様帯が展開する。胴部文様帯は配置文ＡⅣを主体に，山形文を充填して8単位の連続文様を構成する。沈線以下の胴部下半には縄文ＬＲが

施される。胎土は密で，焼成は良好である。色調は暗褐色を呈する。大洞ＢＣ式に比定すると思われる。

図版139（Ｗ８区出土）

口唇部装飾帯・口縁部文様帯・頸部文様帯は口縁部が欠損しているため不明である。

胴部文様帯　胴部文様帯には区画文Ａ２とＡ３が交互に施文され，そこに四角文が充填され，６単位の連続文様を構成する。胴部を区画する２条の沈線以下は縄文が施される。縄文は胴上半部にはＬＲの斜行縄文が，胴下半部にはＲとＲＬの斜行縄文が施文される。胎土はやや密で，焼成はやや軟質である。色調は淡黄褐色を呈する。大洞ＢＣ式に比定すると思われる。

図版141－１（W56区出土）

口唇部装飾帯・口縁部文様帯・頸部文様帯は口縁部が欠損しているため，不明である。

胴部文様帯　ヨコ方向に丁寧なミガキが施される。胎土は密で，焼成は良好である。赤色顔料が塗布される。地の色は淡褐色を呈する。

図版141－２（Ｗ８区出土　口径4.8　高さ7.6）

口唇部装飾帯　口唇部に装飾は施されず，平縁を呈する。

口縁部文様帯・頸部文様帯・胴部文様帯にはヨコ方向に丁寧なミガキが施される。胎土は密で，焼成は良好である。赤色顔料が塗布されるが，地の色は暗褐色を呈する。

図版141－３（W19区出土　口径9.9　高さ10.4）

口唇部装飾帯　口唇部に装飾は施されず，平縁を呈する。

口縁部文様帯・頸部文様帯・胴部文様帯には，ヨコ方向のミガキが施される。胎土はやや密であり，焼成はやや良である。色調は黄褐色を呈する。

図版141－４（Ｗ４区出土　口径8.0　高さ9.5）

口唇部装飾帯　口唇部に装飾は施されず，平縁を呈する。

口縁部文様帯・頸部文様帯・胴部文様帯は，２㎜ほどの工具によりヨコ方向に丁寧に磨かれている。器面は光沢を帯びている。胎土は密で，焼成は良好である。色調は黒褐色を呈する。

図版141－５（Ｗ８区出土　口径7.2　高さ13.7）

口唇部装飾帯　口唇部に装飾は施されず，平縁を呈する。

口縁部文様帯・頸部文様帯には１～２㎜の，胴部文様帯は２～３㎜の丁寧なミガキがヨコ方向に施される。器面は光沢に富み，器厚がやや薄い。胎土は密で，焼成は非常に良好である。色調は暗褐色を呈する。

図版141－6（W８区出土　口径8.3　高さ12.5）

口唇部装飾帯　口唇部に装飾は施されず，平縁を呈する。

口縁部文様帯・頸部文様帯・胴部文様帯は，２～３㎜ほどの工具によりヨコ方向に丁寧に磨かれ，器面は光沢に富む。胎土はかなり密で，焼成は良好である。色調は暗褐色を呈する。

b．ＩＢ類(図版143－１～８)

図版143－1（W56区出土　口径2.3　高さ2.5）

ミニチュア土器である。

外面全体にナデが施される。胎土は密で，焼成は良好である。色調は淡黒褐色を呈する。

図版143－2（W67区出土　口径2.6　高さ3.3）

ミニチュア土器である。

外面全体にヨコ方向のナデが施される。胎土はやや密で，焼成は良好である。色調は淡橙褐色を呈する。

図版143－3（W65区出土　口径3.6　高さ4.0）

ミニチュア土器である。

外面全体にヨコ方向のナデが施される。胎土はやや粗で，焼成は良好である。色調は淡灰褐色を呈する。内面には赤色顔料の塗布がみとめられる。

図版143－4（W35区出土　口径3.2　高さ6.6）

口唇部装飾帯　口唇部に装飾は施されず，平縁を呈する。

口縁部・頸部・胴部文様帯にはヨコ方向のナデが施される。胎土は密で，焼成は良好である。色調は赤褐色を呈する。

図版143－5（W18区出土　口径6.1　高さ6.6）

口唇部装飾帯　口唇部には２個１対のＢ字形突起が配される。

口頸部文様帯　内外面にヨコ方向の丁寧なミガキが施される。

肩部文様帯　沈線が１条施文され，瘤が１つ貼付けられる。

胴部文様帯　沈線以下の胴部はヨコ方向に１㎜幅で丁寧にミガキが施される。器面は光沢に富んでいる。胎土はやや密で，焼成は良好である。色調は暗褐色を呈する。大洞Ｃ１式であろう。

図版143－6（W13区出土　口径9.1　高さ9.4）

口唇部装飾帯　口唇部に装飾は施されず，平縁を呈する。

口頸部文様帯　外面にはヨコ方向のミガキが施される。

胴部文様帯　胴部はヨコ方向に２～2.5㎜幅で丁寧にミガキが施される。器面は光沢を帯びる。胎土は密で，焼成は良好である。色調は茶褐色を呈する。

図版143－７（W15区出土　口径10.3　高さ10.4）

口唇部装飾帯　口唇部に装飾は施されず，平縁を呈する。

口頸部文様帯　内外面にはヨコ方向のミガキが施される。

胴部文様帯　胴部はヨコ方向に丁寧なミガキが施される。胎土は密で，焼成は良好である。色調は淡褐色を呈する。

図版143－８（W17区出土　口径9.1　高さ11.3）

口唇部装飾帯　口唇部に装飾は施されず，平縁を呈する。

口頸部文様帯　外面はヨコ方向に２㎜ほどの幅で丁寧なミガキが施される。内面は外面より粗いミガキが施される。

胴部文様帯　胴部はヨコ方向に２㎜ほどの幅で丁寧なミガキが施され，内面はヨコ方向にナデが施される。胎土は密で，焼成は良好である。色調は淡灰褐色を呈する。

c．ⅡＢ類（図版143－９）

図版143－９（W17区出土　口径5.4　高さ10.6）

口唇部装飾帯　口唇部には５単位のＢ字形突起がめぐるが，正面には２個１対，その他は１つずつ単独で配される。

口頸部文様帯　ヨコ方向のミガキが施される。

胴部文様帯　頸部に１条，胴部中央に２条の沈線が施される。区画された胴部文様帯には右下がりの羊歯状文が陰刻される。羊歯状文は上下平行なものを１単位として，５単位胴部にめぐる。羊歯状文の切れ目の位置と突起の位置とは一致する。沈線以下の胴部下半にはＬＲの斜行縄文が施される。胎土は密で，焼成は良好である。色調は灰褐色を呈する。大洞ＢＣ式に比定すると思われる。

d．ⅡＡ類（図版143－10～145）

図版143－10（W24区出土　口径5.3　高さ12.0）

口唇部装飾帯　口唇部に装飾は施されず，平縁であるが，外面に１条の沈線が施される。

口頸部文様帯　外面にはタテ方向のミガキが，内面にはヨコ方向のナデが施される。

胴部文様帯　肩部に１条の沈線が施され，沈線以下の胴部にはタテ方向の丁寧なミガキが施される。器面はやや光沢を帯びる。胎土は密で，焼成は良好である。色調は黒褐色を呈する。

図版145－1（W17区出土　高さ13.7）

口唇部装飾帯・口縁部文様帯は欠損しているため不明である。

頸部文様帯　比較的丁寧なミガキが施される。

胴部文様帯　頸部に2条の，胴部に3条の沈線が施される。胴部文様帯には区画文C2を主体として，三角文・四角文・幅の広いノの字文が充填され，3単位の連続文様を構成する。また，文様帯には細くて密な縄文LRが施されている。底部の厚さが最大1.5cmと厚いのが特徴的である。胎土はやや密で，焼成は良である。色調は黒灰褐色を呈する。大洞C1式に比定すると思われる。

図版145－2（W19区出土　口径5.3　高さ14.6）

口唇部装飾帯　口唇部にB字形突起が1対配される。

口縁部文様帯　外面にはLRの斜行縄文が施文される。

頸部文様帯　ヨコ方向に丁寧なミガキが施される。

肩部文様帯　瘤が1つ貼付けられる。

胴部文様帯　胴部文様帯は沈線により三段に区画され，陰刻文が施される。その中で，上段と下段は二重の半円文が上向きと下向きの方向で交互にめぐり，中段はK字状の文様が刻まれる。底部付近にはLRの斜行縄文が施文される。胎土は密で，焼成は良好である。色調は黒褐色を呈する。大洞BC式に比定すると思われる。

図版145－3（W59区出土　口径5.8　高さ14.3）

口唇部装飾帯　口唇部にB字形突起が1対配されるが，口縁部の欠損が著しいために不明である。口唇部内面には1条の沈線がめぐる。

口頸部文様帯　内外面に丁寧なミガキが施される。

肩部文様帯　瘤が1つ貼付けられる。

胴部文様帯　胴部文様帯に配置文を主体として，四角文・ノの字文を充填し連続文様を構成する。いわゆる雲形文である。単位は不明であるが，2～4単位ほどであろう。沈線以下の胴部中央は丁寧に研磨されている。胎土はやや密で，焼成はやや良である。色調は黄褐色を呈する。大洞C1式であろう。

e．ⅢA類（図版147－1・2・4）

図版147－1（W57区出土　口径4.8　高さ11.5）

口唇部装飾帯　口唇部に装飾は施されず，平縁である。内外面に1条の沈線が施される。

口頸部文様帯　外面は丁寧なタテ方向のミガキが施され，内面は丁寧なヨコ方向のミガキが施される。

肩部文様帯　瘤が1つ貼付けられる。

胴部文様帯　胴部文様帯は配置文を主体に，三角文・幅の広いノの字文が充填されていると思われるが，胴部の欠損により不明である。胎土は密で，焼成は良好である。色調は暗褐色を呈する。大洞C

1式か大洞C 2式であろう。

図版147－2（不明　口径3.2　高さ7.6）

口唇部装飾帯　口唇部に装飾は施されず，平縁である。内外面に1条の沈線が施される。

口頸部文様帯　丁寧なタテ方向のミガキが施される。

肩部文様帯　2条の隆起帯がめぐり，隆起帯上には4単位の瘤が貼付けられていれる。

胴部文様帯　隆起帯直下に3条の沈線が施され，沈線以下はヨコ方向に丁寧なミガキが施される。また，底部は4足の形態を呈し，足と瘤はほぼ同じところに位置する。胎土は密で，焼成は良好である。外面全体と口縁部内面に赤色顔料が塗布されるが，地の色は暗褐色を呈する。大洞C 1式であろう。

図版147－4（W18区出土　口径4.6　高さ16.2）

口唇部装飾帯　口唇部に装飾は施されず，平縁である。内面には1条の沈線が施される。

口縁部文様帯　内外面にはヨコ方向のミガキが施される。

頸部文様帯　丁寧なタテ方向のミガキが施される。

肩部文様帯　2条の隆起帯がめぐり，貼付けられた瘤は2単位現存する。しかし，瘤は5単位ほどめぐっていたと思われる。

胴部文様帯　ヨコ方向のミガキが施される。胎土は密で，焼成は良好である。2と異なり，赤色顔料の塗布は認められない。暗褐色を呈する。大洞C 1式であろう。

f．ⅢB類（図版147－3）

図版147－3（W12区出土　口径3.0　高さ7.2）

ミニチュア土器である。

口縁部にはナデが施され，胴部にはタテ・ヨコ方向のミガキが施される。胎土はやや密で，焼成は良好である。色調は淡橙褐色を呈する。

g．Ⅳ類（図版148－1～4）

図版148－1（W 4区出土　口径7.4　高さ5.5）

口唇部装飾帯　口縁部はかなり欠損しているが，B字形の突起が3個配される。突起は中央のものが突き出るのに対し，左右のものはやや内側に傾く。また内外面には1条の沈線がめぐる。

口頸部文様帯　ヨコ方向に丁寧なミガキが施される。全体的に口頸部は器厚が薄い。

胴部文様帯　頸部と胴部を3条の沈線で，胴部下半を2条の沈線で区画する。胴部文様帯には配置文CⅡを主体に，ノの字文が充填されると思われる。単位は不明である。胎土は密で，焼成は良好である。全面に赤色顔料が塗布される。大洞C 2式に比定すると思われる。

図版148－2（W８区出土　高さ6.1）

口唇部装飾帯　口縁部はほとんど欠損するが，Ｂ字形の突起が１つみられる。内面には１条の沈線がめぐる。

口頸部文様帯　口頸部には磨消縄文の手法により文様帯が描かれる。肩部に１条，口唇部に１条の沈線を施し区画する。口縁部文様帯には区画文と充填文が施されると思われるが不明である。

肩部文様帯　沈線直下に瘤が１つ貼付けられる。

胴部文様帯　胴部にはＬＲの斜行縄文が施文される。胎土はやや粗で，焼成は良である。色調は暗褐色を呈する。

図版148－3（W18区出土）

口唇部装飾帯・口頸部文様帯は欠損しているため不明である。

肩部文様帯　２条の沈線がめぐり，瘤が１つ貼付けられる。

胴部文様帯　沈線以下の胴部にはＬＲの斜行縄文が施文される。胎土は密で，焼成は良好である。色調は暗褐色を呈する。

図版148－4（W11区出土）

口唇部装飾帯は欠損しているため不明である。

口頸部文様帯　磨消縄文の手法により文様帯が展開するが，欠損しているため文様の単位は不明である。

胴部文様帯　肩部と胴部中央にそれぞれ２条の沈線がめぐり，沈線で区画された間にはＬＲの斜行縄文が施文される。胎土は密で，焼成は良好である。色調は黄褐色を呈する。

ｈ．ＶＡ類(図版148－５・６)

図版148－5（W64区出土　口径7.8　高さ10.2）

口唇部装飾帯　口唇部には２個１対のＢ字形突起配される。

口頸部文様帯　外面にヨコ方向のミガキが施される。

肩部文様帯　沈線が１条施文され，瘤が１つ貼付けられる。

胴部文様帯　胴部にはＬＲの斜行縄文が施される。胎土はやや粗で，焼成は良である。色調は暗褐色を呈する。大洞Ｃ１式であると思われる。

図版149－1（W８区出土）

口唇部装飾帯　口縁部文様帯は口縁部欠損のため，不明である。

頸部文様帯　頸部文様帯には１条の隆起帯がめぐる。隆起帯には瘤が貼付けられ，瘤と瘤の間には１条の沈線が施される。瘤は隆起帯上に５・６単位ほどめぐると思われる。

胴部文様帯　残存する胴部にはＬＲの斜行縄文が施文される。胎土は粗で，焼成はやや軟質である。暗褐色を呈する。

i．ⅥA類(図版151～153－5)

図版151－1(W14区出土　口径8.7　高さ18.6)

口唇部装飾帯　口唇部に装飾は施されず，平縁であるが，外面にはＬＲの縄文が施文される。

口頸部文様帯　内外面にはヨコ方向のミガキが施される。

胴部文様帯　胴部にはＬＲの縄文が施される。胎土はやや粗で，焼成は軟質である。色調は暗褐色を呈する。大洞Ｂ式に比定すると思われる。

図版151－2(W14区出土　口径10.2)

口唇部装飾帯　口唇部に装飾は施されず，平縁である。外面に1条の沈線が施される。

口頸部文様帯　外面にはタテ・ヨコ方向のミガキが，内面にはヨコ方向のミガキが施される。

胴部文様帯　胴部にはＬＲの斜行縄文が施される。胎土は粗で，焼成はやや軟質である。色調は茶褐色を呈する。

図版153－1(W61区出土　口径6.8)

口唇部装飾帯　口唇部に装飾は施されず，平縁であるが，口唇部内面に1条の沈線がめぐる。

口頸部文様帯　内外面にはヨコ方向のミガキが施される。

胴部文様帯　残存する胴部にはＬＲの斜行縄文が施される。胎土はやや密で，焼成はやや良である。色調は淡灰褐色を呈する。

図版153－2(W12区出土　口径6.6)

口唇部装飾帯　口唇部に装飾は施されず，平縁であるが，外面に1条の沈線が施される。

口頸部文様帯　外面にはヨコ方向のミガキが，内面にはヨコ方向のナデが施される。

胴部文様帯　肩部に1条の沈線が施され，沈線以下の胴部にはＬＲの斜行縄文が施される。胎土は粗で，焼成は良である。色調は茶褐色を呈する。

図版153－3(W27区出土)

ミニチュア土器である。口縁部を欠損する。

胴部外面にはＬＲの縄文が施文され，内面はヨコ方向のナデが施される。胎土は密で，焼成は良である。色調は淡褐色を呈する。

図版153－4(W15区出土)

口唇部装飾帯　口縁部文様帯は口縁部が欠損しているので不明である。

頸部文様帯　残存する頸部にはヨコ方向のミガキが施される。

胴部文様帯　胴部にはＬＲの斜行縄文が施される。内面は全体的にヨコ方向のナデが施される。胎土は粗で，焼成はやや良である。色調は黄褐色を呈する。

図版153－5（W65区出土）

口唇部装飾帯　口縁部文様帯・頸部文様帯は口縁部が欠損しているので不明である。

胴部文様帯　胴部にはＲＬの斜行縄文が施される。胎土は粗で，焼成は良である。色調は灰褐色を呈する。

ｊ．Ⅵ Ｂ類（図版153－6～155）

図版153－6（W15区出土　口径9.4　高さ23.3）

口唇部装飾帯　口唇部に装飾は施されず，平縁を呈する。

口頸部文様帯　内外面はヨコ方向にミガキが施される。

胴部文様帯　胴部にはＬＲの斜行縄文が施文される。胎土は粗で，焼成はやや軟質である。色調は暗褐色を呈する。

図版155－1（W15区出土　口径8.9　高さ9.5）

口唇部装飾帯　口唇部に装飾は施されず，平縁を呈する。

口頸部文様帯　内外面はヨコ方向にミガキが施される。

胴部文様帯　胴部にはＬＲの斜行縄文が施文される。胎土はやや粗で，焼成は良好である。色調は暗褐色を呈する。

図版155－2（Ｗ７区出土　口径10.7　高さ20.1）

口唇部装飾帯　口唇部に装飾は施されず，平縁を呈する。

口頸部文様帯　外面はヨコ方向にミガキが施され，内面にはヨコ方向にナデが施される。

胴部文様帯　胴部にはＬＲの斜行縄文が施文される。胎土はやや粗で，焼成は良である。色調は灰白色を呈する。

ｋ．Ⅶ類（図版157）

図版157（Ｗ７区出土　口径10.4）

口唇部装飾帯　口唇部に装飾は施されず，平縁を呈する。

口縁部文様帯　ＬＲの斜行縄文が施される。

頸部文様帯　タテ方向の丁寧なミガキが施される。

胴部文様帯　ＬＲの斜行縄文が施される。胎土は密で，焼成は良好である。色調は淡黄褐色を呈する。大洞Ｂ式であろう。

第８節　注　口　土　器（第34図，図版第158～165，第10表）

１．注口土器の分類について

今回解説する注口土器は，図版159－１以外は，すべて丸底である。これらを，形態から分類すると，

ゆるやかな底部から明瞭な肩部・胴部をもって頸部につながり，内傾する頸部から外方向に屈曲する口縁部をもつもの(Ⅰ類)と，内傾しながら口縁部に達するもの(Ⅱ類)とに2大別できる。さらに注口土器の胴部形態により3類に分けた。

第10表　注口土器型式別集計表

分類＼型式	B	BC	C1	C2	不明	小計	総計
Ⅰ 1	1	−	−	−	−	1	10 76.9 %
2 a	−	6	1	−	1	9	
b	1	−	−	−	−		
計	2 20.0	6 60.0	1 10.0	−	1 10.0		
	B	BC	C1	C2	不明	小計	総計
Ⅱ 2 a	−	2	1	−	−	3	3 23.1 %
合計	2 15.4	8 61.5	2 15.4	0	1 7.7		13 100.0 %

Ⅰ－1類：平底のもの。

Ⅰ－2類：丸底。

2a類：明瞭な肩部から内傾する頸部をもち，全体にそろばん玉状の形態を有する。

2b類：底部にかぶさるようにつながる肩部(胴部上半部)を持ち，文様帯が設けられる。胴部全体が円盤状の形態を有する。

2c類：胴部が丸形(球状)の形態を有する(今回の資料では該当するものはない)。

Ⅱ－1類：平底のもの(今回の資料では該当するものはない)。

Ⅱ－2類：丸底。

2a類：明瞭な肩部から内傾する頸部をもち，全体にそろばん玉状の形態を有する。

2b類：底部にかぶさるようにつながる肩部(胴部上半部)を持ち，文様帯が設けられる。胴部全体が円盤状の形態を有する。

2c類：胴部が丸形(球状)の形態を有する。ただし，2b・c類は，今回の資料中には含まれない。

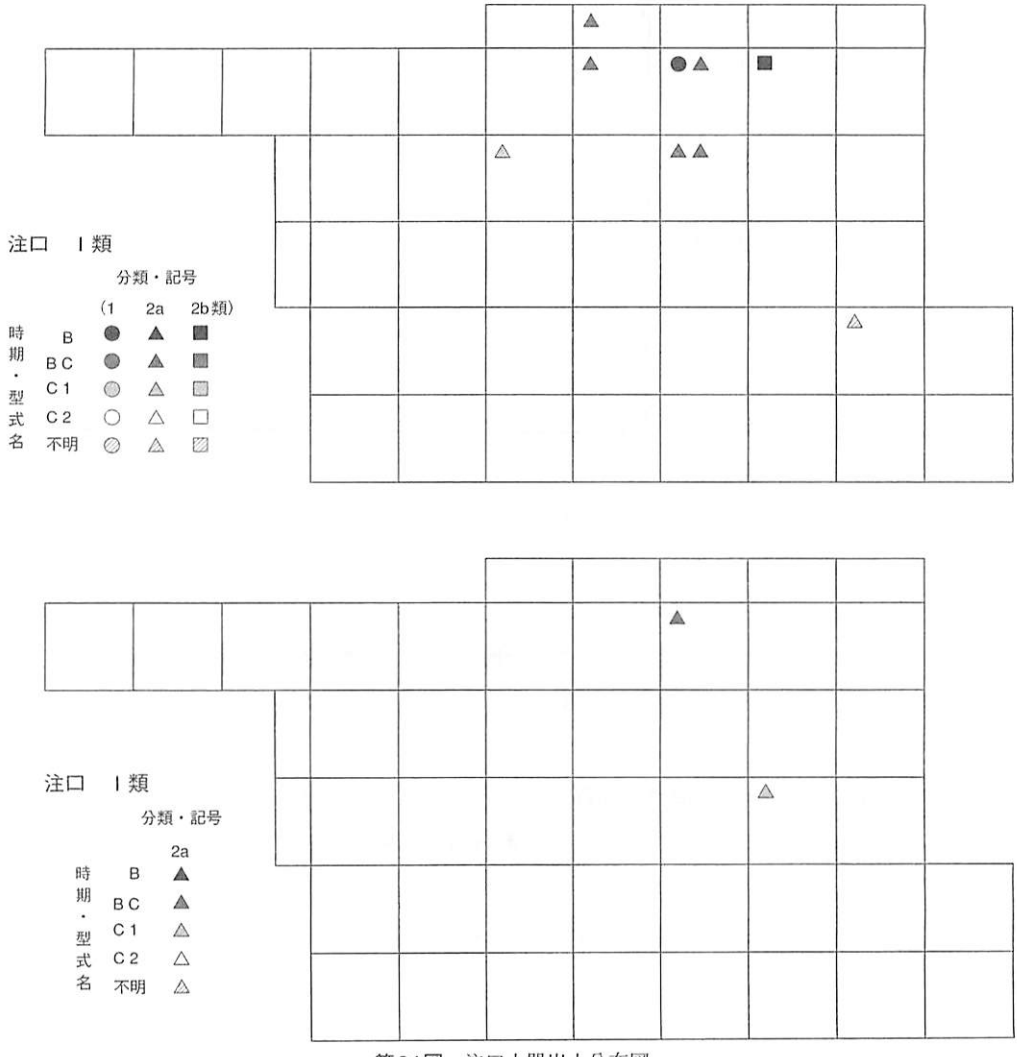
2．各類の解説

1)Ⅰ－1類(図版159－1)

1点のみ。平底の形態を有し，胴部下端に1条の沈線がめぐる。沈線直上には縄文が施文される。口唇部には中央に山の字形突起が1つ，その左右にB字形突起が一対配される。口縁部と胴最大部に文様帯が展開し，単位文様は菱形からS字状にのびる文様や三叉状の沈線文がみられる。また，頸部には1条の列点文がめぐる。大洞B式。

2)Ⅰ－2a類(図版159－2・3，図版161－1～3，図版163－1～3)

Ⅰ－2a類は，ほとんどの口縁部・頸部・胴最大部・注口部には三叉状の沈線文が陰刻され，口縁部・頸部・胴部には1～3条の刻み目をもつ沈線文がめぐる。注口部には1条の刻み目をもつ沈線もしくは沈線をもつ。また，口唇部中央に大型のB字形突起が1つ，その左右に小型のB字形突起が一対配される。大洞BC式。



第34図　注口土器出土分布図

図版163－1は他のものと比べ小型で，口頸部は刻み目をもつ沈線のみ施文される。

図版163－4の口唇部中央には複雑な突起が配され，周囲は小波状縁となる。口頸部には三叉状の沈線文が平行沈線化したような文様帯が展開する。注口部は突出し，突出部の左右は瘤が1つずつ貼付けられる。また，注口部の付け根には4つの瘤が上下左右に配される。他のものにくらべ胎土が粗く，焼成もやや軟い。色調は淡黄褐色を呈する。大洞C1式。

3）Ⅰ－2b類(図版165－1)

口縁・頸部は不明。肩部(胴部上半)には沈線で文様帯が形成されるが，単位文様は一部S字状文・三叉状文がみられ，注口部には玉抱き三叉状文がみられる。大洞B式。

4)Ⅱ－2ａ類(図版165－2・3)

図版165－2の羊歯状文系と図版165－3の磨消縄文系の2点のみである。前者は口唇部に左上がりの羊歯状文が，口頸部上半と下半にそれぞれ右上がりの羊歯状文が展開する。下半の羊歯状文の刻み目は肩部までかかる。注口部は欠損し不明である。大洞ＢＣ式。後者は口唇部中央にＡ字形突起と周辺にＢ字形突起がめぐる。頸部文様帯は，区画文Ｃ２を主体に平行線化した刻み目をもつ沈線文，そして充填文で構成される。注口部は突出し，突出部の左右に瘤が１つずつ貼付けられる。注口部の付け根に４つの瘤が上下左右に配される。大洞Ｃ１式。

3．個体の解説

ａ．Ⅰ―１類

図版159―1(Ｗ８区出土　口径12.8　高さ12.3)

平底の形態である。頸部は明瞭な胴部から内傾しながら立ち上がり，口縁部は頸部から屈曲する。

口唇部装飾帯　中央に山の字形の突起が１個，その左右にＢ字形突起が１対配される。

口縁部文様帯　上端は口唇部の突起と突起間から沈線が，下端も２条の沈線が口縁部をめぐり，文様帯を形成。文様は明瞭ではないが，三叉状文が施文される。

頸部文様帯　列点文が１条めぐる。

胴部文様帯　同最大部に菱形状と三叉状の沈線文が施文される。胴部および胴部下半には１条の沈線がめぐり，縄文が施文される。１条の沈線を注口先端部に施す。外面全体に丁寧なミガキが施される。

胎土は精選され，焼成は良好である。色調は暗褐色を呈する。大洞Ｂ式。

ｂ．Ⅰ―２類

図版159―2(Ｗ７区出土)

丸底の底部から明瞭な胴部・肩部を経て頸部につながる。全体的に胴部はそろばん玉状の形態である。

口唇部装飾帯　口縁部文様帯は口縁部欠損のため不明である。

頸部文様帯　上下端にそれぞれ１条の刻み目をもつ沈線文がめぐる。沈線文の間は三叉状文を主体に，ノの字文が充填され，文様帯を形成する。

胴部文様帯　同最大部には三叉状とも羊歯状とも思われる沈線文が施される。胴部には沈線と刻み目をもつ沈線がそれぞれ１条めぐる。注口部には三叉状文が施文され，注口先端部には１条の沈線がめぐる。外面全体に丁寧なミガキが施され，光沢を帯びる。

胎土は精選され，焼成は良好である。色調は暗褐色を呈する。大洞ＢＣ式。

図版159―3(Ｗ８区出土)

丸底の底部から明瞭な胴部・肩部を経て頸部につながる。全体的に胴部はそろばん玉状の形態である。

口唇部装飾帯　口縁部文様帯は口縁部欠損のため不明である。

頸部文様帯　上下端にそれぞれ1条の刻み目をもつ沈線文がめぐる。沈線文の間は三叉状文を主体に，ノの字文が充填され，文様帯を形成する。

胴部文様帯　同最大部には三叉状とも羊歯状とも思われる沈線文が施される。胴部には1条の沈線がめぐる。注口部には連結する三叉状文が施文され，注口先端部には1条の沈線がめぐる。外面全体に丁寧なミガキが施される。

胎土は精選され，焼成は良好である。色調は暗褐色を呈する。大洞ＢＣ式。

図版161―1（W12区出土　口径12.8　高さ12.6）

丸底の底部から明瞭な胴部・肩部を経て頸部につながり，内傾する頸部から外方に屈曲する口縁部をもつ。全体的に胴部はそろばん玉状の形態である。

口唇部装飾帯　中央に大型の装飾突起が1個，その左右にＢ字形突起が1対配される。さらにＢ字形突起は口唇部全体に単独で配される。

口縁部文様帯　上端は刻み目をもつ沈線と沈線が，下端は1条の沈線が口縁部をめぐり，文様帯を形成。文様帯には三叉状文を主体にノの字文が充填される。

頸部文様帯　口縁部と頸部は1条の沈線で区画され，頸部上端に1条の刻み目をもつ沈線が，下端に2条の刻み目をもつ沈線がめぐり，文様帯を形成する。文様帯は口縁部同様三叉状文を主体にノの字文が充填される。

胴部文様帯　同最大部には三叉状とも羊歯状とも思われる沈線文が施される。胴部にはそれぞれ1条の刻み目をもつ沈線と沈線がめぐる。注口部には玉抱き三叉状文が施文され，注口先端部には1条の沈線がめぐる。外面全体に丁寧なミガキが施され，光沢を帯びる。

胎土は精選され，焼成は良好である。色調は暗赤褐色を呈する。大洞ＢＣ式。

図版161―2（W18区出土　口径13.0　高さ11.3）

丸底の底部から明瞭な胴部・肩部を経て頸部につながり，内傾する頸部から外方に屈曲する口縁部をもつ。全体的に胴部はそろばん玉状の形態である。

口唇部装飾帯　中央に大型の装飾突起が1個，その左右にＢ字形突起が1対配される。さらにＢ字形突起は口唇部全体に単独で配される。

口縁部文様帯　上下端は刻み目をもつ沈線と沈線がそれぞれ1条めぐり，文様帯を形成する。文様帯には三叉状文を主体にノの字文が充填される。

頸部文様帯　口縁部と頸部は1条の沈線で区画され，頸部上端と下端に1条の刻み目をもつ沈線と沈線がめぐり，文様帯を形成する。文様帯は口縁部同様三叉状文を主体にノの字文が充填される。

胴部文様帯　同最大部には三叉状とも羊歯状とも思われる沈線文が施される。胴部には1条の刻み目をもつ沈線がめぐる。注口部には連結する三叉状文が施文され，注口先端部には1条の沈線がめぐる。外面全体に丁寧なミガキが施され，やや光沢を帯びる。

胎土は精選され，焼成は良好である。色調は暗褐色を呈する。大洞ＢＣ式。

図版161―３（W18区出土　復元口径13.5　高さ11.0）

丸底の底部から明瞭な胴部・肩部を経て頸部につながり，内傾する頸部から外方に屈曲する口縁部をもつ。全体的に胴部はそろばん玉状の形態である。

口唇部装飾帯　中央に大型の装飾突起が１個，その左右にＢ字形突起が１対配される。さらにＢ字形突起は口唇部全体に単独で左右・後にも配されるとおもわれるが，口縁部欠損のため不明である。

口縁部文様帯　上下端は刻み目をもつ沈線と沈線がそれぞれ１条めぐり，文様帯を形成する。文様帯は本来充填されるノの字文が連結して縦方向に文様帯を区画。そこに三叉状文が施文される。

頸部文様帯　口縁部と頸部は１条の沈線で区画され，頸部上下端に１条の刻み目をもつ沈線が，さらに下端には１条の沈線がめぐり，文様帯を形成する。文様帯は口縁部同様の文様が展開する。

胴部文様帯　同最大部には三叉状とも羊歯状とも思われる沈線文が施される。胴部には１条の刻み目をもつ沈線がめぐる。注口部には連結した三叉状文が施文され，注口先端部には１条の沈線がめぐる。外面全体に丁寧なミガキが施され，やや光沢を帯びる。

胎土は精選され，焼成は良好である。色調は暗褐色を呈する。大洞ＢＣ式。

図版163―２（W30区出土　復元口径10.0　高さ8.3）

丸底の底部から明瞭な胴部・肩部を経て頸部につながり，内傾する頸部から外方に屈曲する口縁部をもつ。全体的に胴部はそろばん玉状の形態である。

口唇部装飾帯　口唇部破損のためＢ字形突起が1つみられるだけである。単位数は不明。

口縁部文様帯　２条の刻み目をもつ沈線が口縁部をめぐる。

頸部文様帯　頸部中央に１条の刻み目をもつ沈線がめぐる。

胴部文様帯　同最大部には三叉状とも羊歯状とも思われる沈線文が施される。胴部には注口部直下でかみ合う三叉状文らしき沈線文が施文される。外面全体に丁寧なミガキが施され，やや光沢を帯びる。

胎土は精選され，焼成は良好である。色調は黒褐色を呈する。大洞Ｃ１式。

図版163―３（撹乱坑出土）

丸底の底部から明瞭な胴部・肩部を経て頸部につながる。全体的に胴部はそろばん玉状の形態である。

口唇部装飾帯　口縁部文様帯は口縁部欠損のため不明である。

頸部文様帯　上下端にそれぞれ１条の刻み目をもつ沈線文がめぐり，さらに下端には１条の沈線がめぐり，文様帯を形成する。文様帯は本来充填されるノの字文が連結して縦方向に文様帯を区切り，そこに三叉状文が施文される。

胴部文様帯　同最大部には三叉状とも羊歯状とも思われる沈線文が施される。胴部には１条の刻み目をもつ沈線がめぐる。注口部には連結した三叉状文が施文され，注口先端部には１条の沈線がめぐる。

外面全体に丁寧なミガキが施され，光沢を帯びる。

胎土は精選され，焼成は良好である。色調は暗褐色を呈する。大洞ＢＣ式。

図版163―4（W16区出土　高さ10.1）

丸底の底部から明瞭な胴部・肩部を経て頸部につながり，内傾する頸部から外方に屈曲する口縁部をもつ。全体的に胴部はそろばん玉状の形態である。

口唇部装飾帯　一部欠損する。口唇部には刻み目が施され，中央に大型の装飾突起が配される。突起の単位数は不明である。

口縁部文様帯　上端に２条の沈線が，下端に１条の刻み目をもつ沈線が口縁部をめぐる。文様帯には三叉状文が施文されるが，単位は不明。

頸部文様帯　口縁部と頸部は１条の沈線で区画され，頸部上端に１条の沈線が，下端に２条の刻み目をもつ沈線がめぐり，文様帯を形成する。文様帯は三叉状文連結し，平行線化したと思われる沈線文がみられる。沈線が施された文様は磨消されていないものの，文様の形は配置文Ｂと捉えることもできる。文様帯は５単位頸部をめぐる。

胴部文様帯　同最大部は全体的に突起が作り出され，突起間には三叉状の沈線文が施文される。胴部には１条の刻み目をもつ沈線と沈線がめぐる。注口部は突出し，その突出部の左右に瘤が１つずつ貼り付けられ，注口部の付け根にも瘤が上下左右に貼り付けられる。外面全体的に，ヨコ方向のミガキがみられるが，光沢は帯びない。

胎土はやや砂粒を含み，焼成はやや軟質である。色調は淡黄褐色を呈する。大洞Ｃ１式。

図版165―1（Ｗ９区出土）

丸底の底部から明瞭な胴部・肩部を経て頸部につながり，内傾する頸部をもつ。全体的に胴部は円盤状の形態である。

口唇部装飾帯　口縁部文様帯は欠損しているため不明である。

頸部文様帯　下端に２条の沈線が施されるが，その他は不明である。

胴部文様帯　胴部は全体的に沈線で文様が施される。文様は不明であるが，菱形からＳ字状に沈線がのびる単位文様や三叉状文がみられる。注口部には玉抱き三叉状文が施される。外面全体的は丁寧に研磨され，やや光沢を帯びる。

胎土は精選され，焼成は良好である。色調は暗褐色を呈する。大洞Ｂ式。

ｃ．Ⅱ－２類

図版165―2（Ｗ８区出土　口径7.0　高さ7.7）

丸底の底部から明瞭な胴部・肩部を経て頸部につながり，内傾しながら口縁部に達する形態である。全体的に胴部はそろばん玉状を呈する。

口唇部装飾帯　左上がりの羊歯状文が施される。

口頸部文様帯　胴部中央を１条の沈線で区画し，胴部上半には７単位の末端のかみ合わない右上がりの羊歯状文が施文される。胴部下半から胴最大部にかけても末端のかみ合う右上がりの羊歯状文が10単位ほど胴部をめぐる。

胴部文様帯　羊歯状文の直下には２条の沈線がめぐる。注口部は欠損しているため不明である。外面全体に丁寧なミガキが施される。

胎土は精選され，焼成は良好である。色調は淡灰褐色を呈する。大洞ＢＣ式。

図版165―３（W24区出土　口径8.2）

丸底の底部から明瞭な胴部・肩部を経て頸部につながり，内傾しながら口縁部に達する形態である。全体的に胴部はそろばん玉状を呈する。

口唇部装飾帯　中央にＡ字形突起が，その他はＢ字形突起が配される。

口頸部文様帯　縄文ＬＲの地文上に磨消縄文の手法が用いられる。上下端を２条の沈線で区画する。文様帯には区画文Ｃ２を主体に，刻み目をもつ沈線文と変形した四角文を充填し，連続文様が展開。

胴部文様帯　胴最大部には三叉状文とも羊歯状文とも思われる沈線文が施される。胴部には１条の沈線がめぐる。注口部は突出し，その突出部の左右に瘤が１つずつ貼り付けられ，注口部付根にも瘤が上下左右に貼り付けられる。

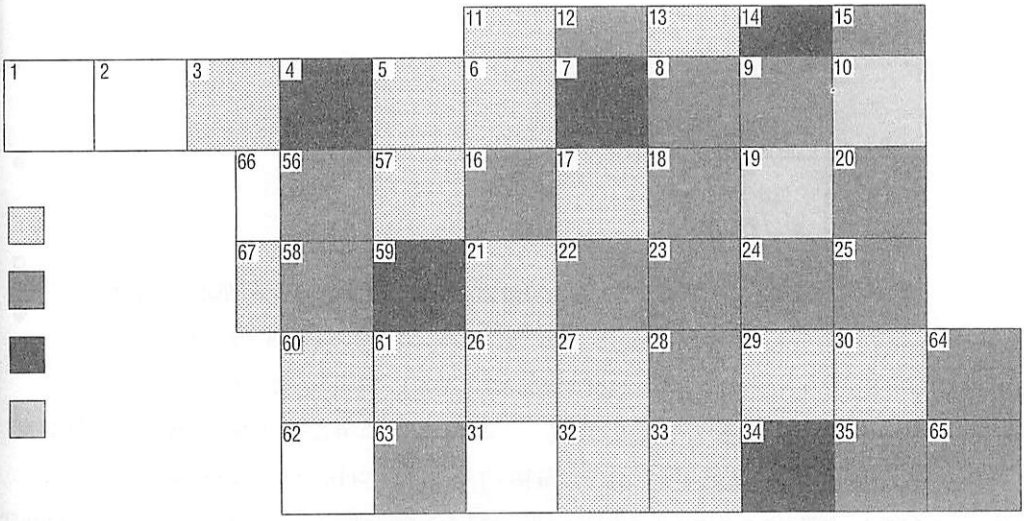
胎土は精選され，焼成は良好である。色調は暗褐色を呈する。大洞Ｃ１式。

第5章　出土遺物・2　石　器

第1節　出土状態と石器組成

第11表にあげたように，本遺跡からは約300点の縄文時代の石器が出土した。ほとんどが縄文時代晩期に属するものと思われる。これらの石器の出土分布を見ると，第35図に示すように，若干の粗密が認められる。

一つはW4・56・67・58・59周辺，二つ目はW7～10・18～20を中心とする一帯，三つ目はW34・35周辺である。各器種の分布を見ても，この傾向にほぼ整合しており，器種による分布の偏りは見られない。



第35図　グリッド別石器総点数分布図

第11表　石器組成表

器種	打製石斧	石　皿	磨　石	敲　石	雨だれ石	石　鏃	石　槍	礫石錘
点数	1	8	12	45	1	101	5	1
%	0.3	2.5	3.8	14.2	0.3	31.8	1.6	0.3
器種	磨製石斧	石製石盤	箆状石器	石　匙	削　器	石　錐	その他	合　計
点数	7	46	3	22	31	20	15	318
%	2.2	14.5	0.9	6.9	9.7	6.3	4.7	100

石器の組成をみると(第11表)，石鏃がもっとも多く，全体の31.8%を占める。一方，石皿や敲石・磨石は全体の2.5%・14.2%・3.8%に止まる。石皿は破片がほとんどであるが一点は，丹が全体に付着している。また，磨製石斧は大型のものが1点と少なく，石錘も1点だけである。

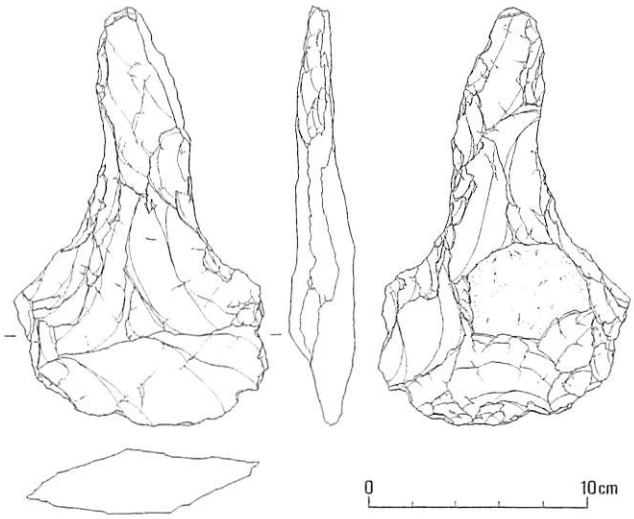
とくに，この中で，石製円盤が46点14.5%を占めるのが目立つ。

この他，雨だれ石や独鈷石，石剣がわずかではあるが出土している。

第2節　打　製　石　斧(第36図，図版第166)

W24区より，1点だけ出土した。長さ19.2cm，幅11.5cm，厚さ3.1cmと大型の打製石斧である。平面撥形。柄の幅が約4cmに対し刃部の幅が約11cmもある。

成形は雑で，裏面の一部に自然面を残す。砂質頁岩製。



第36図　打製石斧実測図

第3節　石　　皿(第37・38図，図版第166，第12表)

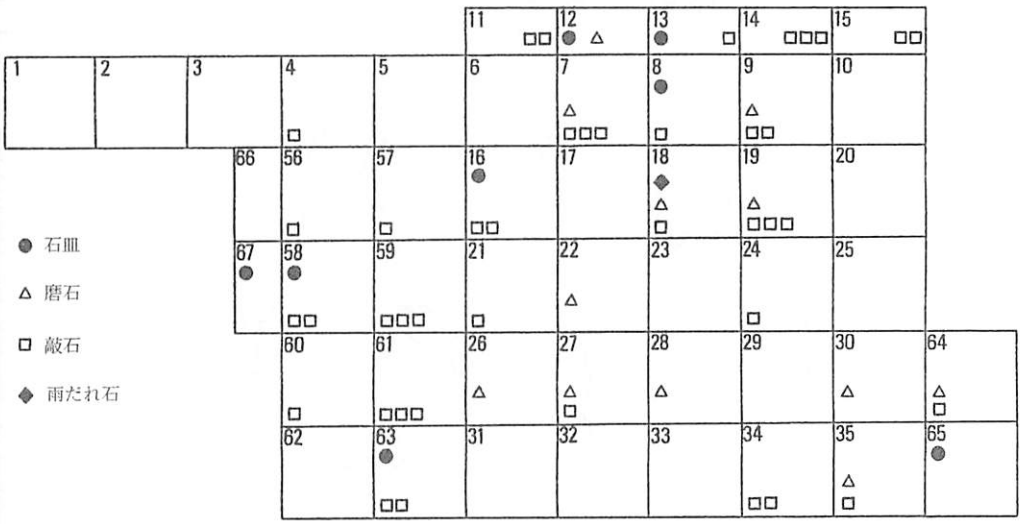
石皿は第12表に示したとおり，8点出土している。調査区内の中央部にはなく，縁辺に分布する傾向がみられる(第37図)。この内の4点を図示した(第38図)が，3がほぼ完形であったのみで破片が多い。

本遺跡の石皿は大型で厚みのあるもの(1，2)と，小型で薄いもの(3，4)に分けられる。前者は平面形がおそらく方形を呈し，後者は楕円形となる。石材は1，3，4が安山岩，2が砂岩である。断面形態を見ても，1は縁を残しやや深いものとなっているが，他のものは浅い。

なお，3には多くの赤色顔料が付着しており，顔料を擂り潰すのに利用されたものと考えられる(カラー図版・下)。

第12表　石 皿 一 覧 表

遺物番号	地区	層位	分類	遺存状態	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	挿図番号
WC 35	8	3	Ⅱ	一部欠損	安山岩	22.4	(17.7)	5.2		38－3
98	12	3	Ⅲ	一部残	安山岩	(15.6)	(8.5)	10.5	(1490)	
105	13	3	Ⅰ	一部残	安山岩	(17.1)	(12.2)	(8.3)	(1715)	38－1
124	16	3	Ⅲ	一部残	安山岩	(10.0)	(9.4)	(2.5)	(600)	
271	58	3	Ⅱ	1/2欠損	安山岩	16.6	(8.3)	4.2	(720.5)	38－4
295	63	3	Ⅲ	－	－	－	－	－	－	
307	65	3	Ⅰ	一部残	砂岩	(11.2)	(9.8)	(4.8)	(500)	38－2
313	67	3	Ⅲ	一部残	安山岩	(5.25)	(4.8)	3.4	(130.5)	



第37図　石皿・磨石・敲石・雨だれ石出土分布図

第4節　磨　　石(第37・39図，図版第168，第13表)

礫の表面中央部に敲打による凹みがなく，磨耗痕及び周辺部の敲打痕が見られるものを磨石としてあつかった。発掘地域の東半域より12点出土しており(第37図)，とくに集中して出土した地区はない。これら磨石も磨耗痕と周辺部敲打痕の組合せにより，次のように分類を試みた。

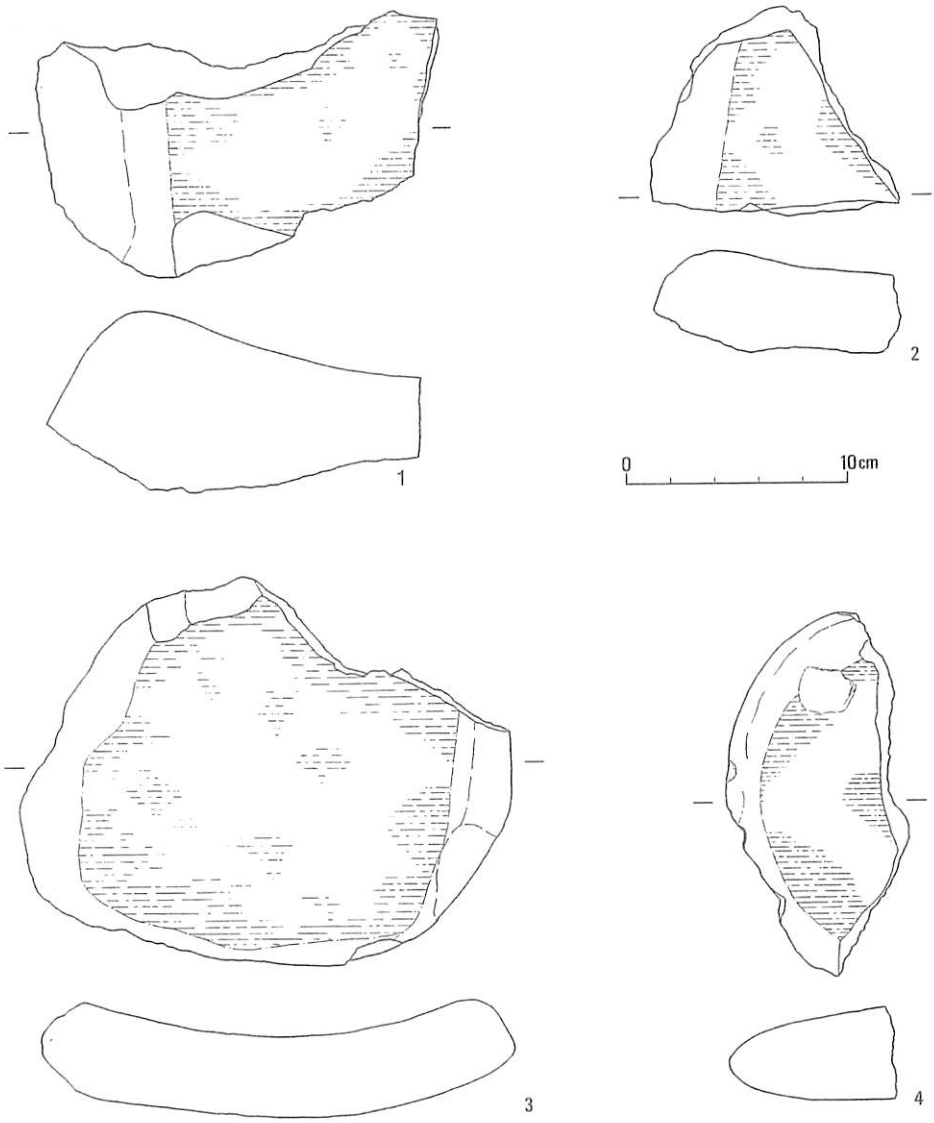
Ⅰ類　礫の表面に磨耗痕がみられるもの。(第39図1～5)

Ⅱ類　磨耗痕以外に，周辺部において敲打痕がみられるもの。(第39図8)

Ⅲ類　磨耗痕はみられず，周辺部で部分的に敲打痕がみられるもの。(第39図9・10図)

Ⅳ類　磨製石斧の転用品，長軸の上・下端部に激しい磨耗痕がみられるもの。(第60図)

Ⅰ類は3点あり，完形品は1点のみである。2分の1以上欠損した分類の困難なものも当類に含めている。ただし，残存状況から礫の形状はすべて楕円形を呈するものと推定される。



第38図　石皿実測図

Ⅱ類は4点。周辺部全周に激しい敲打痕と磨耗痕が混在する。

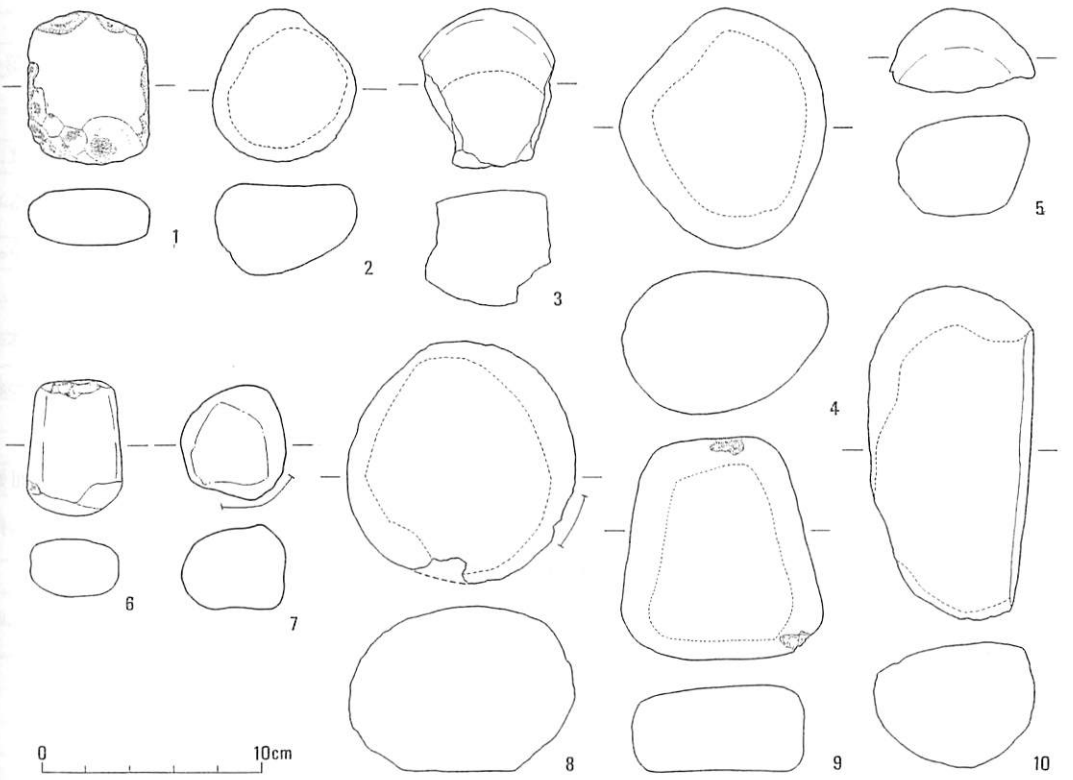
Ⅲ類は2点ある。

Ⅳ類は1点のみみられる。磨製石斧の転用品である。

出土点数10点という状況で，何らかの傾向を見いだすことは困難であるが，使用目的に応じた礫の規格性は認められないであろう。礫の表面中央部の凹みの痕跡の有無で敲石と区別はしたが，敲石同様，任意の川原石を使用していることを見ても，使用者が敲石と磨石を使い分けていたような状況は見いだせない。

第13表　磨石一覧表

遺物番号	地区	層位	分類	遺存状態	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	挿図番号
WC 44	9	不明	−	−	−	−	−	−	−	−
85	7	3	Ⅱ	完形	砂岩	5.3	4.8	3.9	170	39−7
99	12	3	Ⅰ	完形	砂岩	11.0	9.5	6.5	940	4
134	18	3	Ⅲ	完形	安山岩	15.2	7.5	5.7	1010	10
151	19	3	Ⅰ	1/2欠損	砂岩	(3.9)	(6.6)	4.5	(90)	5
179	22	3	Ⅱ	完形	安山岩	7.0	6.5	4.2	290	2
203	26	3	Ⅲ	完形	砂岩	10.1	7.9	3.9	650	9
211	27	3	−	−	−	−	−	−	−	−
213	28	2	Ⅱ	完形	頁岩	7.0	5.5	2.6	185	1
229	30	3	Ⅳ	完形	砂岩	6.2	4.3	2.7	140	6
252	35	P1	Ⅰ	2/3欠損	砂岩	(7.3)	(6.4)	5.2	(280)	3
302	64	3	Ⅱ	完形	安山岩	11.2	10.5	7.6	1030	8



第39図　磨石実測図
（平面図に付された実線は，敲打痕の範囲を示している。）

第5節　敲　　石(第37・40～43図，図版第167・168，第14表)

円形または楕円形を呈する礫の上・下面の中央部に，敲打痕のある凹みが認められるものを敲石としてあつかった。発掘地域のほぼ全域から合計45点出土している。(第14表)なかでも7区から19区，56区から63区において比較的集中して出土している。これらの敲石には表面中央部に残存する敲打痕のほかに，周辺部にも敲打痕が認められるものもある。また，磨耗痕との組合せなどもみとめられるので，次のように分類を試みた。

Ⅰ類　表面の中央部にのみ凹みが残存するもの。(第40図1～11)

Ⅱ類　凹みの周辺部に磨耗痕がみられるもの。(第40図12・13，第41図1～3)

Ⅲ類　上・下の凹みだけでなく，周辺部にも敲打痕がみられるもの。(第41図4～16，第42図1～6)

Ⅳ類　Ⅰ類からⅢ類の要素をすべてもつもの。(第42図7～16)

Ⅰ類は11点ある。礫の形状は，円礫を用いたものは1点のみで，楕円形または長楕円形のものがほとんどであり，規格性はない。凹みの深さは約2～4㎜を測る。凹みの範囲は，円形・楕円形を呈するものが，長楕円形のものと比して広い傾向にある。

Ⅱ類は5点ある。礫の形状は，円礫を用いたものは磨耗痕跡の範囲に赤色顔料の付着する1点(第41図3)のみであり，他は楕円形を呈する。凹みの深さは約2～5㎜を測る。

Ⅲ類は19点。礫の形状は長楕円形のものが主体を占める。上・下面中央部にみられる凹みの深さは，約2～5㎜を測る。周辺部の敲打痕も，そのほとんどが部分的で，全周におよんで敲打痕がみられるものは1点(第41図6)のみである。周辺部の敲打痕の凹みは，(第42図4)を除いて比較的浅い傾向にある。

Ⅳ類は10点ある。礫の形状は，円形を呈するものが多い。凹みの深さは約2～5㎜を測る。

以上4類の分類を試みた。使用目的から生じる各類の形状の明確な規格性は見いだせないが，全体の傾向としては，円礫よりも，楕円または長楕円を使用する傾向が見受けられる。そして，これは使われ方の違いを表わしているようにも見える。

用いられている礫と形状と分類をあわせて考えてみると，楕円ないし長楕円形のものではⅠからⅢ類への使用過程を示している。一方，Ⅳ類に集中する円礫のものは，ⅠからⅢ類の使用痕を残すような作業を一定の期間の中で行なっていると考えられる。

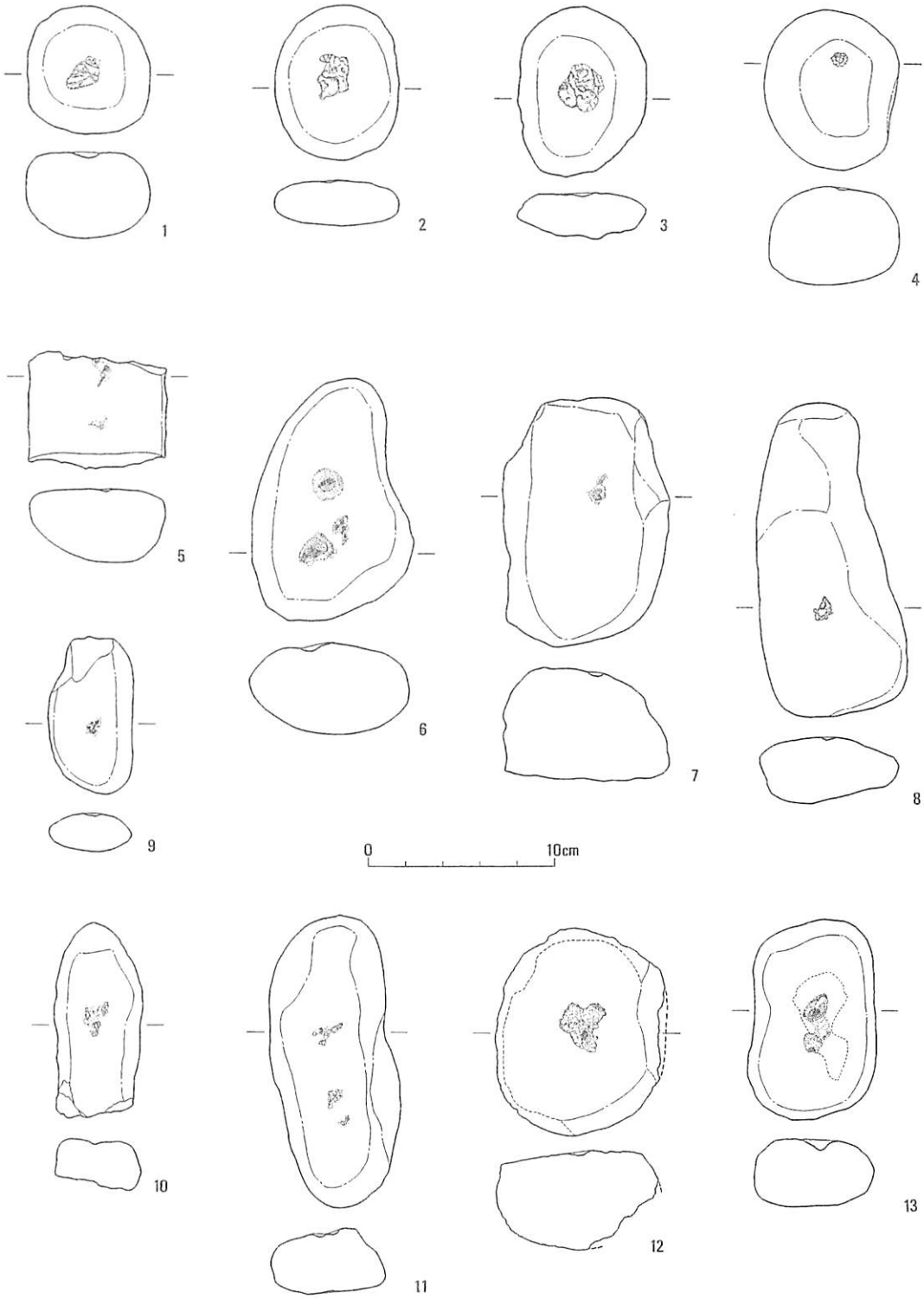
また，重量分布を見ると(第43図)，300g前後，600g前後にまとまりがあるとともに，1000g以上のものも数点であるが存在する。これらは明らかに使われ方の違いを表わしていると思われる。

第6節　雨　だ　れ　石(第37・44図，図版第166)

1点のみ18区から出土(第44図)。石材は花崗岩であるが，風化が激しい。両面に敲打痕をもつ。

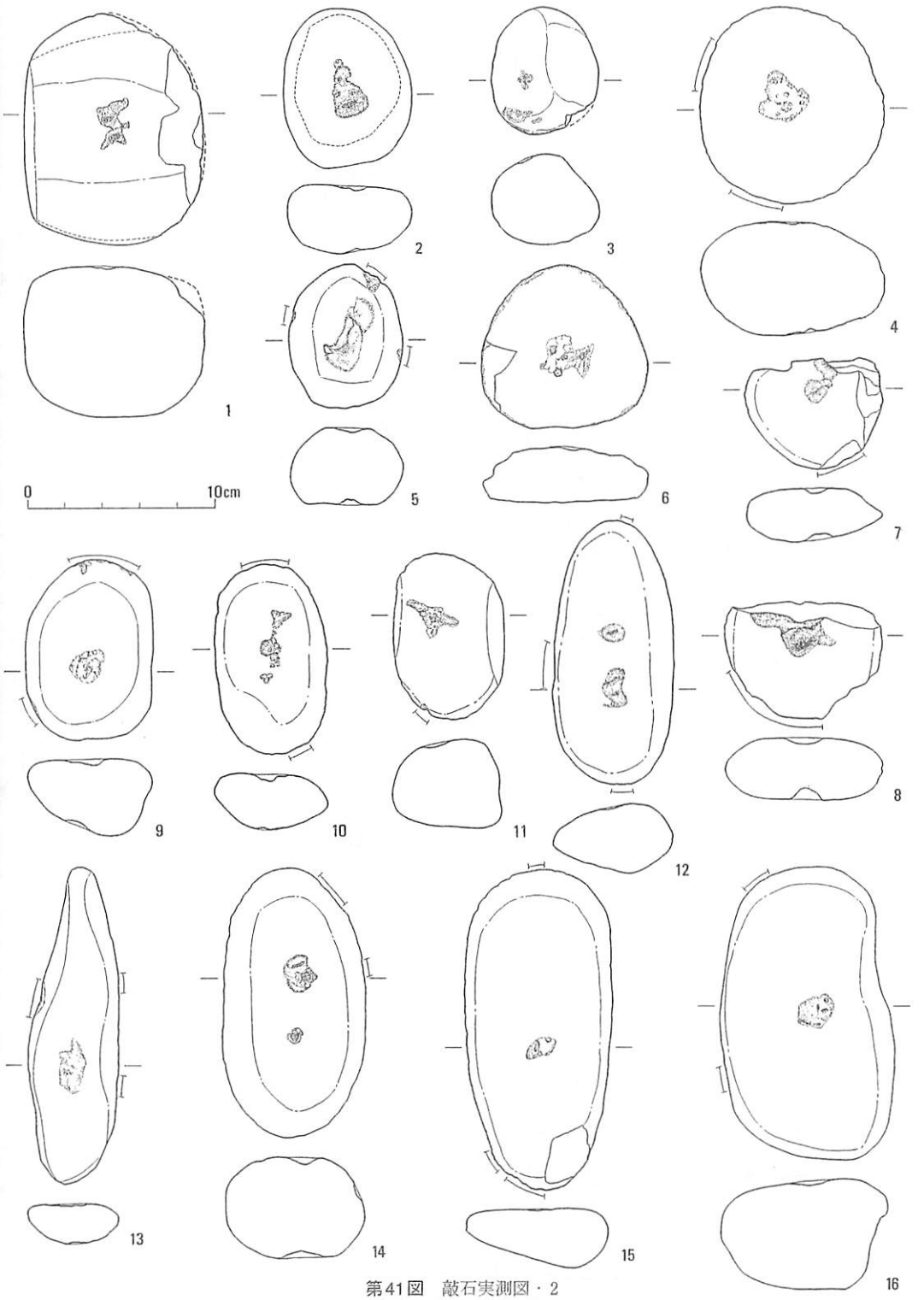
第14表　敲石一覧表

遺物番号	地区	層位	分類	遺存状態	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	挿図番号
WC 8	4	3	Ⅲ	完形	砂岩	17.2	7.9	3.2	630	41－15
34	8	3	Ⅱ	1/5欠損	砂岩	12.5	(9.6)	8.0	(1460)	1
42	9	3	Ⅲ	1/2欠損	凝灰岩	(5.8)	7.2	2.8	(155)	7
43	9	3	Ⅳ	完形	砂岩	9.0	7.8	6.6	640	42－9
64	表採		Ⅲ	完形	凝灰岩	8.6	9.6	2.9	275	41－6
66	表採		Ⅳ	完形	流紋岩	9.4	8.3	5.4	600	42－14
76	表採		Ⅱ	完形	凝灰岩	10.5	6.7	3.6	375	40－13
78	表採		Ⅱ	完形	安山岩	6.9	5.7	4.9	300	41－3
87	7	3	Ⅰ	完形	砂岩	8.6	7.0	5.1	480	40－4
88	7	3	Ⅳ	1/2欠損	流紋岩	(14.8)	(12.5)	(6.6)	(1440)	42－16
89	7	3	Ⅲ	完形	砂岩	8.8	6.0	4.6	350	41－11
91	11	3	Ⅲ	完形	砂岩	12.8	7.3	4.1	630	42－2
92	11	3	Ⅰ	完形	砂岩	15.5	6.9	3.4	530	40－11
104	13	2	Ⅲ	完形	砂岩	17.0	4.8	2.1	280	41－13
107	14	2	Ⅱ	完形	砂岩	8.7	6.6	3.7	305	2
113	14	3	Ⅲ	完形	砂岩	13.4	5.5	3.2	350	42－1
119	15	3	Ⅲ	完形	安山岩	10.6	9.8	6.0	850	41－4
120	15	4	Ⅲ	完形	安山岩	9.7	6.8	4.0	370	9
121	16	2	Ⅰ	完形	砂岩	12.8	8.6	4.9	650	40－6
125	16	3	Ⅲ	1/3欠損	砂岩	(7.1)	6.3	3.7	(290)	42－5
133	14	3	Ⅳ	完形	砂岩	10.5	9.5	5.9	810	15
139	18	4	Ⅲ	完形	安山岩	14.4	7.6	5.4	790	41－14
141	19	1	Ⅳ	3/4欠損	安山岩	(6.5)	(8.2)	(1.7)	(105)	42－12
150	19	3	Ⅰ	完形	安山岩	16.6	8.0	3.5	640	40－8
152	19	3	Ⅳ	完形	凝灰岩	4.7	4.2	3.4	80	42－7
169	21	3	Ⅲ	完形	安山岩	15.8	9.3	6.0	1200	41－16
190	24	3	Ⅳ	完形	安山岩	9.8	9.1	5.7	700	42－10
208	27	3	Ⅲ	完形	砂岩	8.8	6.3	5.0	330	4
237	34	3	Ⅰ	完形	砂岩	6.9	6.4	4.6	330	40－1
240	34	1	Ⅲ	完形	砂岩	14.0	6.5	3.6	410	41－12
248	35	3	Ⅲ	完形	安山岩	10.1	5.9	3.0	265	10
257	36	3	Ⅲ	完形	球顕流紋岩	7.6	6.0	4.0	250	5
264	57	3	Ⅳ	完形	安山岩	6.8	6.4	3.5	200	42－11
268	58	3	Ⅳ	完形	球顕流紋岩	8.6	7.9	5.0	550	8
272	58	3	Ⅲ	1/3欠損	砂岩	(11.0)	(5.6)	(2.5)	(165)	3
281	59	2	Ⅲ	1/2欠損	砂岩	(6.2)	5.1	3.1	(150)	6
282	59	3	Ⅰ	1/3欠損	砂岩	(8.2)	4.4	2.0	(120)	40－9
284	59	3	Ⅱ	1/6欠損	安山岩	11.0	8.9	5.3	610	12
288	60	3	Ⅳ	完形	流紋岩	11.4	7.9	4.7	640	42－13
289	61	3	Ⅰ	完形	凝灰岩	8.3	6.5	2.5	170	40－2
290	61	3	Ⅰ	完形	砂岩	9.2	6.8	2.5	205	3
291	61	3	Ⅰ	完形	安山岩	13.2	8.8	6.1	1120	7
294	63	3	Ⅰ	1/3欠損	安山岩	(10.3)	4.6	2.6	(210)	10
297	63	3	Ⅲ	1/2欠損	凝灰岩	(6.2)	(8.4)	3.3	(200)	41－8
300	64	3	Ⅰ	2/3欠損	安山岩	(6.2)	7.1	3.9	(290)	40－5

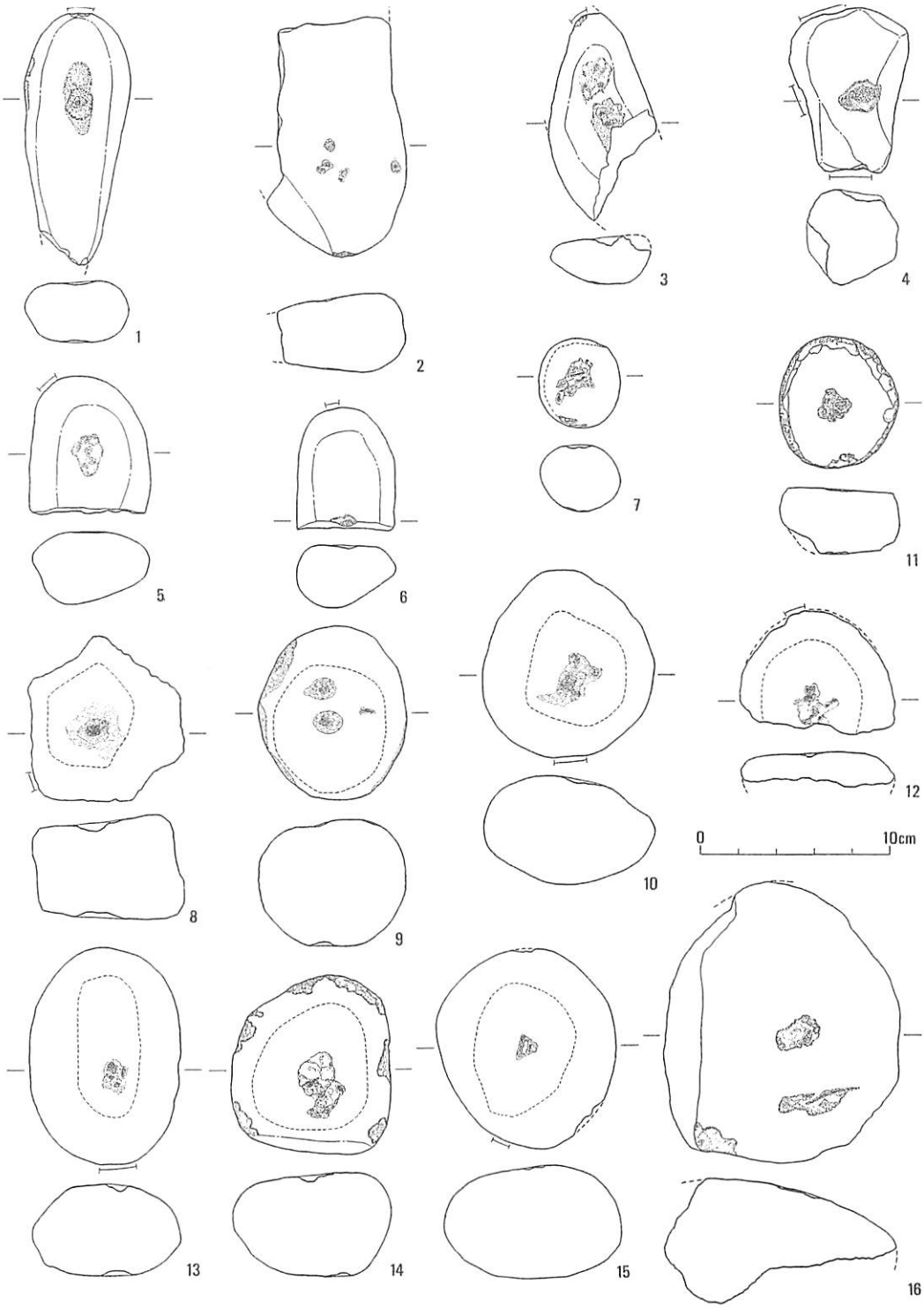


第40図　敲石実測図・1

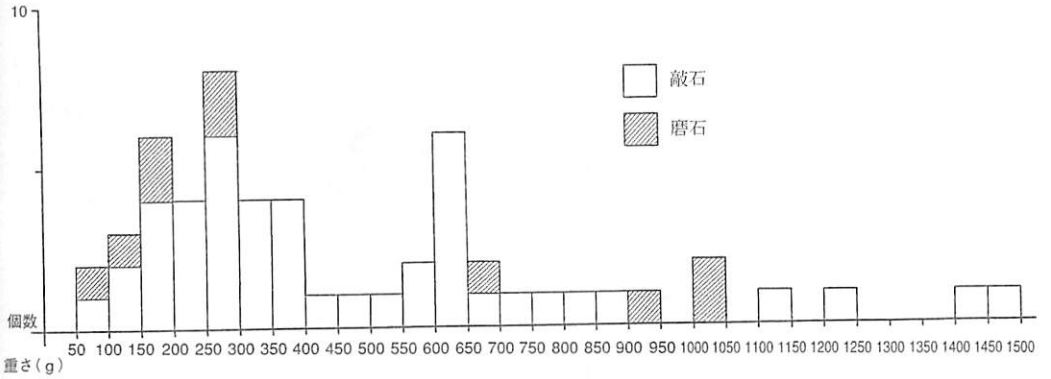
（平面図・断面図に付された実線・破線は，実線が敲打痕，破線が磨痕の範囲を示している。以下，同じ。）



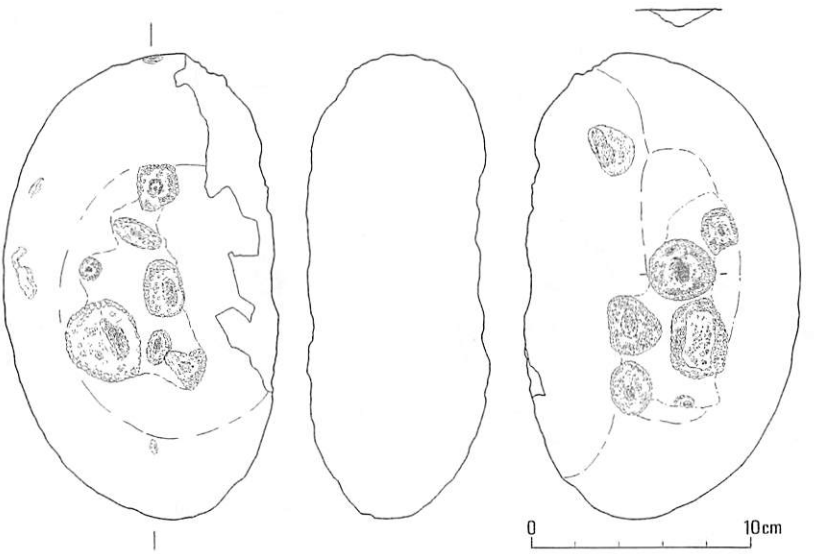
第41図　敲石実測図・2



第42図　敲石実測図・3



第43図　磨石・敲石重量分布図



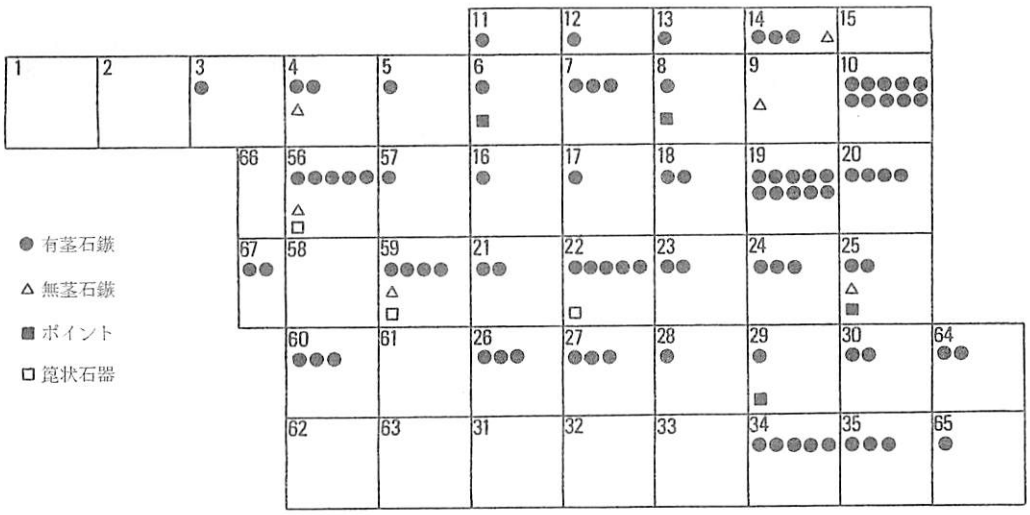
第44図　雨だれ石実測図

第7節　石　　鏃(第45～49図，図版第169・170，第15表)

101点出土している。有茎石鏃がほとんどで，無茎石鏃は8点にとどまる。調査区全体から出土しているが，10・19区周辺がもっとも多く，56・59区，34・35区あたりにもまとまる。また，22・23，26・27区周辺も比較的多く出土している(第45図)。

ここではほぼ完形に近い83点のみあつかう。石材はほとんどが頁岩で，中に数点玉髄・メノウなどが混じる程度である。

無茎鏃(Ⅰ類)と有茎鏃(Ⅱ類)に大別でき，有茎鏃はさらに茎部と身部の境界が不明瞭なもの(a類)と境界が明瞭なもの(b類)に分けられる。またb類は，最大幅と身部の長さの比を分類基準とし，1～3まで細分を設定した。



第45図　石鏃・石槍様石器・篦状石器出土分布図

1．Ⅰ類(第46図1～4)

4点ある。1は非常に丁寧に作られた石鏃で，きれいな二等辺三角形を呈す。2は下辺に大きな剥離面を残していることから，1タイプの石鏃の未成品とも考えられる。3・4は少々いびつであるが，基部にごく浅い抉りをもつ。

2．Ⅱ類(第46図5～28，第47・48図)

1)Ⅱa類(第46図5～25)

21点あり，全て両面加工である。幅広で細かい剥離をもつものや，細身で比較的厚みのあるものなどがある。21～25は加工が荒く，かなり厚みもあるなど他と違う特徴をもつ。石鏃の未成品又は全く別の器種と分類するべきなのかもしれないが，一応ここではⅡa類に入れる。

2)Ⅱb1類(第46図26～28，第47図29～45)

最大幅と身部が1：2以上のものである。20点ある。丁寧な剥離が施され，37を除く全てが両面加工である。中には26・27のように剥離の順序をはっきりとおうことができる資料もある。46は未成品とも考えられる。

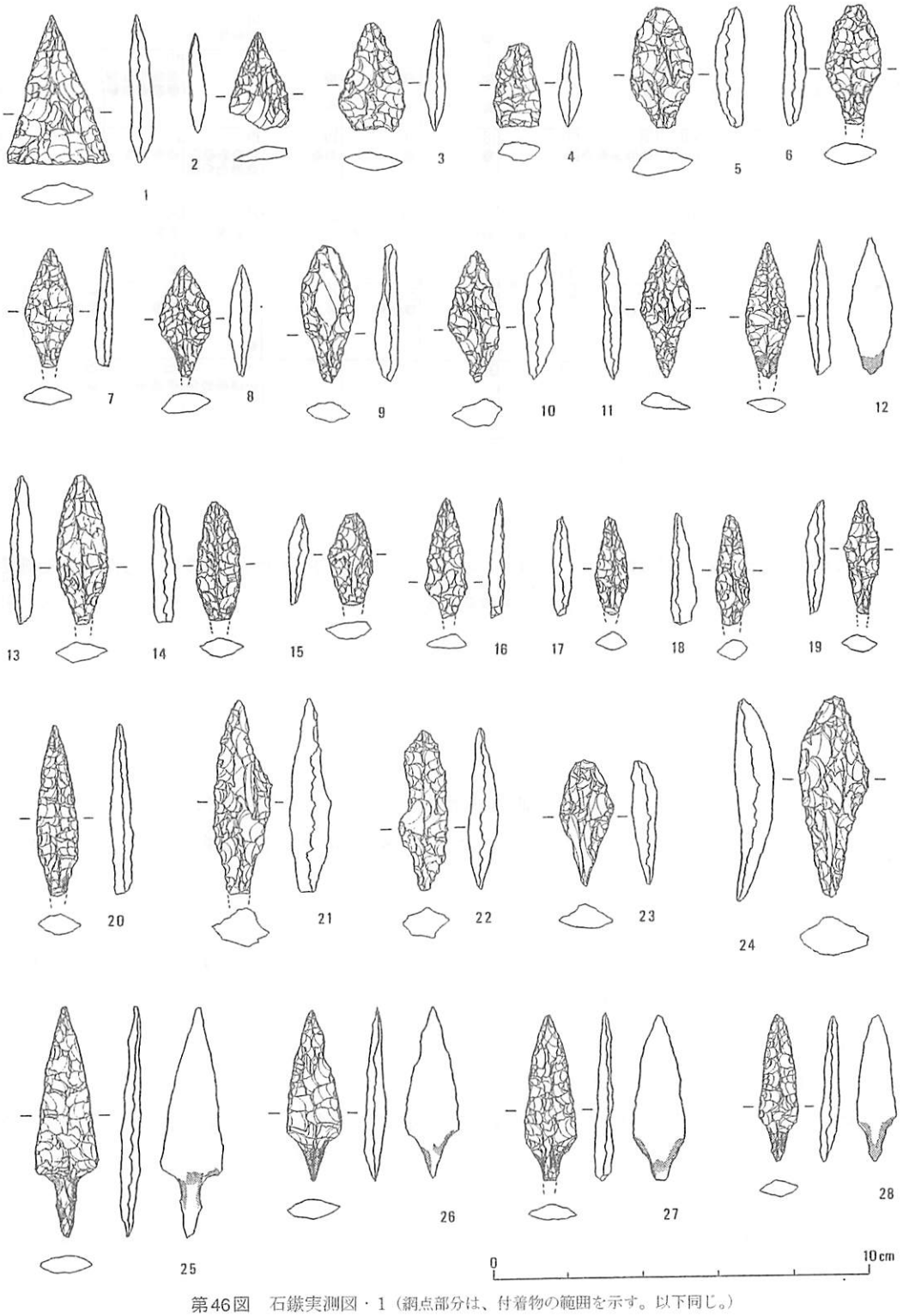
3)Ⅱb2類(第47図46～55，第48図56～72)

最大幅と身部が1：1～2のもの。29点ある。全て両面加工だが，71・72は周辺部のみの加工である。

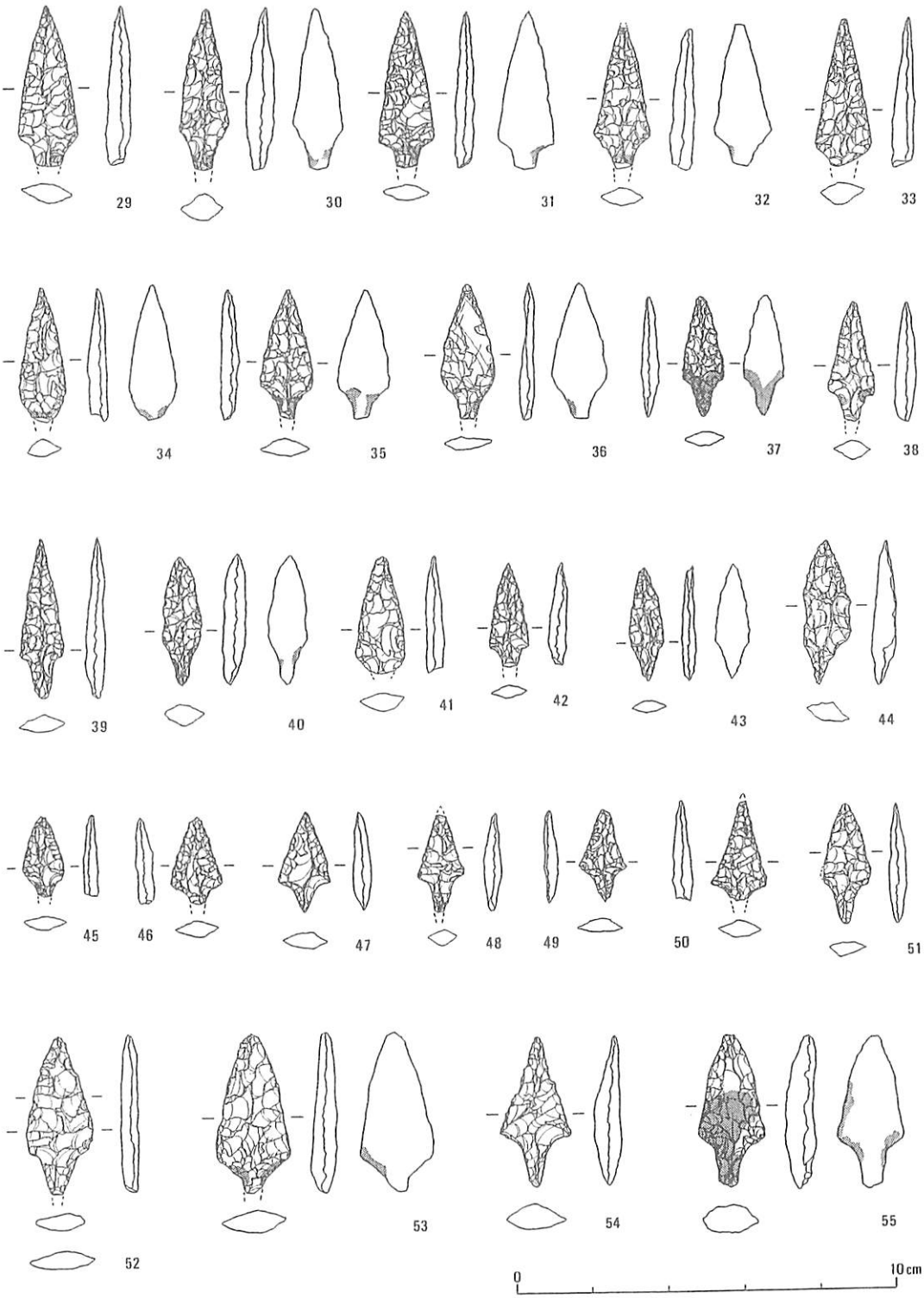
4)Ⅱb3類(第48図73～80)

最大幅と身部が1：1以下のもの。6点ある。比較的小型の一群である。また大きさの割りには厚みがある。全て両面加工である。

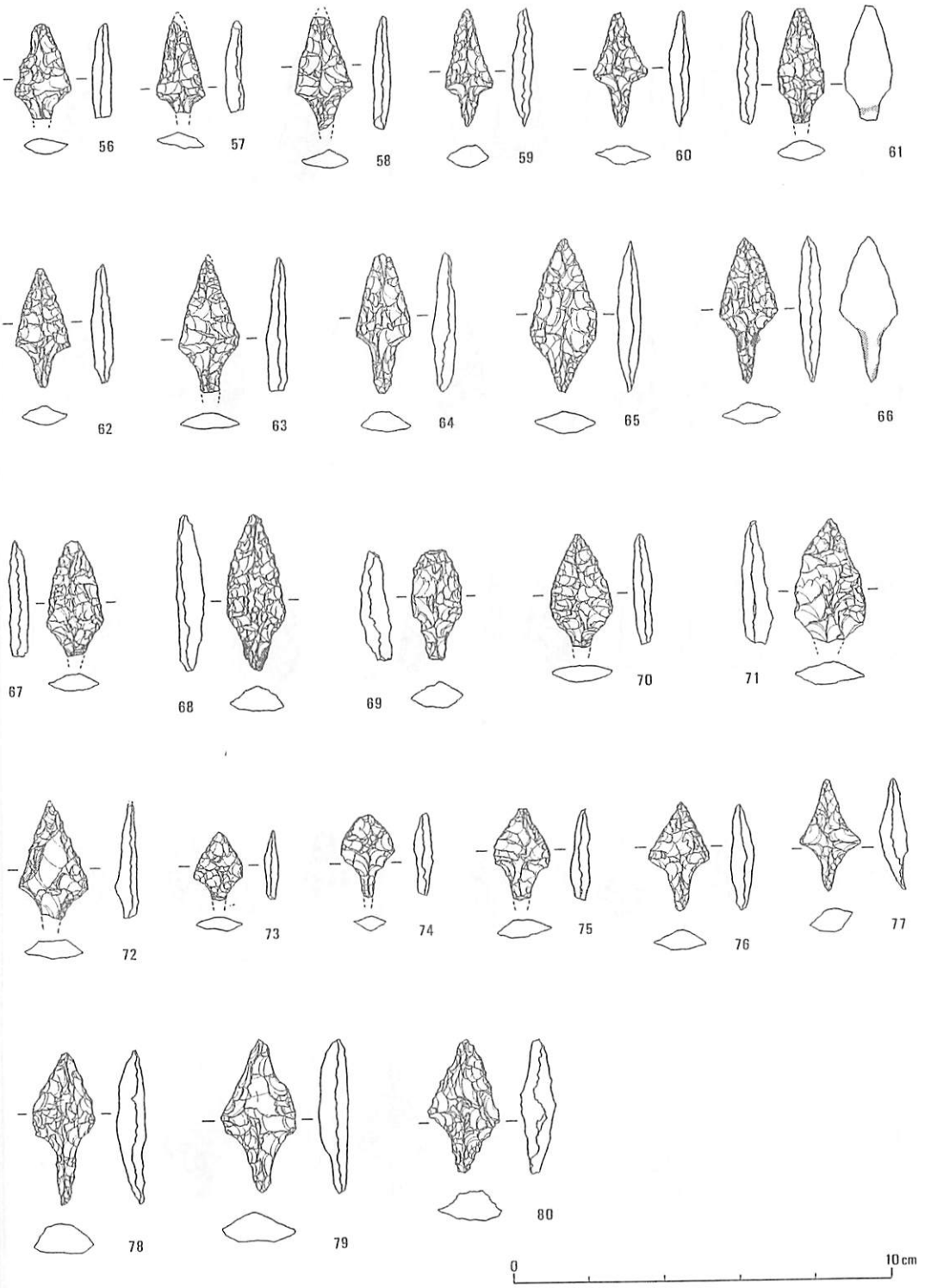
以上，本遺跡出土の83点の石鏃を5つの型に分類したが，ここでは付着物と茎部の折れについて考え



第46図　石鏃実測図・1（網点部分は、付着物の範囲を示す。以下同じ。）


29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
0
10cm

第47図　石鏃実測図・2


56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
0
10cm

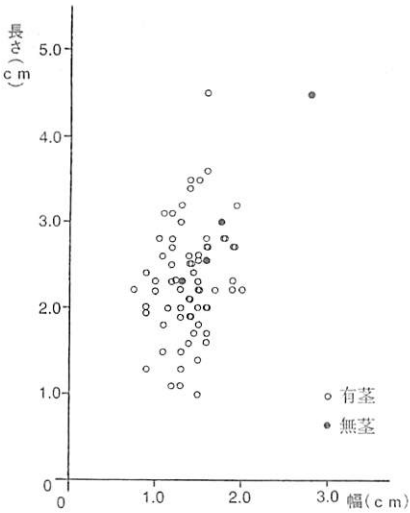
第48図　石鏃実測図・3

第15表　石鏃一覧表（表採＊＝攪乱坑：以下同じ）

遺物番号	地区	層位	分類	遺存状態	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	挿図番号
WC　1	4	2		先端部欠損	頁岩	(2.6)	1.4	0.65	(1.5)	
2	4	2	Ⅱb1	一部欠損	頁岩	(3.5)	1.4	0.5	(1.7)	47－35
13	3	5	Ⅱb2	一部欠損	石英	(3.7)	1.5	0.55	(2.2)	48－64
17	6	2		約1／2欠損	頁岩	(2.6)	2.1	0.45	(2.2)	
22	7	不明	Ⅱb2	完形	頁岩	3.2	1.45	0.5	1.3	60
23	7	3	Ⅱb2	完形	頁岩	3.2	1.5	0.5	1.7	62
28	8	1	Ⅱa	一部欠損	頁岩	(3.2)	1.5	0.6	(2.4)	46－6
46	10	1	Ⅱa	完形	頁岩	3.7	1.45	0.6	2.6	9
47	10	1	Ⅱa	完形	頁岩	3.3	1.1	0.7	4.1	5
48	10	3	Ⅱa	一部欠損	頁岩	(5.2)	1.6	1.1	(6.3)	21
49	10	3	Ⅱa	完形	頁岩	4.3	1.3	0.8	3.3	22
54	10	3	Ⅱb2	一部欠損	頁岩	(3.2)	1.5	0.5	(2.0)	48－67
57	10	不明	Ⅱb1	一部欠損	頁岩	4.7	(1.5)	0.5	(2.5)	46－26
58	10	不明	Ⅱa	一部欠損	頁岩	(3.2)	1.3	0.5	(0.6)	7
59	10	1	Ⅱa	一部欠損	頁岩	(3.6)	1.2	0.4	(0.6)	12
60	10	5	Ⅱb1	一部欠損	頁岩	(4.5)	1.4	0.4	(1.9)	27
61	10	4	Ⅱb2	完形	頁岩	3.9	1.6	0.55	2.2	48－66
67	表採＊		Ⅱb2	一部欠損	頁岩	(2.6)	1.5	0.4	(1.5)	56
68	表採＊		Ⅱb2	一部欠損	頁岩	(2.2)	1.5	0.4	(1.0)	64
77	表採		Ⅱb2	一部欠損	頁岩	(2.5)	1.3	0.4	(1.1)	57
81	7	2		一部欠損	頁岩	(3.0)	1.5	0.7	(2.1)	
90	11	3	Ⅱb2	完形	頁岩	4.1	1.4	0.6	3.0	65
95	12	3	Ⅱb1	一部欠損	頁岩	(3.5)	1.2	0.4	(0.7)	47－34
109	14	2	Ⅱb3	一部欠損	頁岩	(2.5)	1.5	0.5	(1.3)	48－75
111	14	3	Ⅱa	完形	頁岩	3.5	1.4	0.75	3.1	46－10
112	14	3	Ⅱb2	一部欠損	めのう質	(3.0)	1.6	0.5	(1.5)	48－58
123	16	3	Ⅱb2	完形	珪質頁岩	3.2	1.3	0.6	1.7	59
130	17	3	Ⅱa	一部欠損	頁岩	(4.6)	1.1	0.55	(2.0)	46－20
137	18	3	Ⅱa	一部欠損	頁岩	(3.1)	0.9	0.45	(1.2)	19
138	18	3	Ⅱb2	一部欠損	頁岩	(3.1)	1.6	0.45	(1.8)	48－63
142	19	2		完形	頁岩	4.5	1.2	0.9	3.1	
143	19	2		先端部欠損	頁岩	(2.0)	1.3	0.4	(0.6)	
144	19	2		一部欠損	頁岩	(3.3)	1.5	0.5	(2.2)	
145	19	2		先端・基部の一部欠損	玉髄	(2.1)	1.7	0.4	(1.1)	
147	19	3	Ⅱb1	完形	頁岩	3.4	1.0	0.6	0.8	47－40
154	19	3	Ⅱb1	完形	頁岩	4.2	1.2	0.5	1.1	39
155	19	3	Ⅱb1	一部欠損	頁岩	3.3	(1.3)	0.5	2.5	44
156	19	3		完形	頁岩	3.25	1.5	0.8	2.9	
157	19	3	Ⅱa	完形	珪質頁岩	3.2	1.3	0.5	1.7	46－11
158	19	3	Ⅱb1	一部欠損	頁岩	(3.8)	1.5	0.5	(2.3)	47－32
160	20	3	Ⅱb3	完形	頁岩	4.1	2.0	0.8	4.5	48－80
161	20	3	Ⅱb1	一部欠損	頁岩	4.3	1.3	0.8	3.0	47－30
163	20	3	Ⅱb1	一部欠損	頁岩	(2.2)	1.1	0.4	(0.7)	45
166	21	2		先端部欠損	頁岩	(2.4)	1.3	0.4	(1.0)	
167	21	3	Ⅱb2	一部欠損	頁岩の一種	(3.1)	1.9	0.5	(1.7)	48－72
172	22	3	Ⅱb1	一部欠損	頁岩	(4.0)	1.5	0.6	(2.4)	45－33

遺物番号	地区	層位	分類	遺存状態	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	挿図番号
WC 174	22	3		先端部欠損	珪質頁岩	(3.2)	2.0	0.8	(4.0)	
175	22	3	Ⅱb3	完形	頁岩	3.6	1.9	0.8	4.0	48－79
176	22	3	Ⅱb2	一部欠損	頁岩	(3.0)	1.15	0.45	(1.9)	70
177	22	3	Ⅱb2	一部欠損	頁岩	(3.4)	1.9	0.6	(3.8)	71
182	23	3	Ⅱb2	完形	頁岩	4.1	1.8	0.8	3.3	47－55
183	23	3	Ⅱa	一部欠損	頁岩	(3.2)	1.7	0.5	(2.3)	46－14
187	24	3	Ⅱb2	一部欠損	頁岩	3.2	(1.3)	0.4	(1.4)	47－51
188	24	3	Ⅱb1	完形	頁岩	4.0	1.05	0.45	1.7	46－28
192	24	3		一部欠損	頁岩	(2.6)	1.2	0.4	(1.1)	
193	25	3	Ⅱb2	完形	頁岩	4.0	1.9	0.7	3.0	47－54
195	25	3	Ⅱb1	完形	頁岩	3.0	0.9	0.3	0.9	43
202	26	3	Ⅱb2	一部欠損	頁岩	(4.8)	1.8	0.45	(3.1)	52
204	26	3	Ⅱa	完形	頁岩	5.4	1.9	1.05	8.4	46－24
205	26	3	Ⅱb2	一部欠損	珪質頁岩	(3.1)	1.25	0.5	(1.7)	48－61
206	27	3	Ⅱa	完形	頁岩	6.2	1.6	0.45	3.1	46－25
207	27	3	Ⅱb1	一部欠損	頁岩	(4.2)	1.4	0.4	(2.2)	47－31
209	27	3	Ⅱa	一部欠損	頁岩	(2.7)	0.9	0.5	(1.0)	46－17
218	28	3	Ⅱb1	基部欠損	頁岩	(3.1)	1.5	0.5	(1.8)	47－41
224	29	3	Ⅱb3	完形	頁岩	2.9	1.6	0.55	1.4	48－76
226	30	2		一部欠損	頁岩	(2.3)	1.2	0.6	(1.3)	
230	30	4	Ⅱb1	完形	頁岩	3.2	1.0	0.4	1.0	47－37
234	34	2	Ⅱa	一部欠損	頁岩	(3.0)	0.9	0.5	(1.4)	46－18
236	34	3	Ⅱb1	一部欠損	頁岩	(4.3)	1.6	0.5	(3.2)	29
238	34	3	Ⅱa	完形	頁岩	3.0	1.3	0.5	1.9	8
241	34	3	Ⅱb3	完形	頁岩	4.1	1.6	0.8	3.7	48－78
245	34	4	Ⅱa	一部欠損	頁岩	(3.2)	1.1	0.4	(1.1)	46－16
246	35	1	Ⅱb2	一部欠損	頁岩	2.3	1.4	0.4	1.1	47－46
249	35	3		先端部欠損	頁岩	(3.2)	1.2	0.5	(1.7)	
251	35	3	Ⅱb2	一部欠損	頁岩	(4.3)	1.95	0.6	(3.1)	53
253	56	2	Ⅱb2	一部欠損	珪質頁岩	(2.6)	1.2	0.4	(0.9)	48
254	56	3	Ⅱb3	一部欠損	頁岩	(1.8)	1.3	0.4	(0.6)	48－73
256	56	3	Ⅱb1	一部欠損	頁岩	(3.2)	1.2	0.5	(1.4)	47－38
258	56	3	Ⅱb2	一部欠損	頁岩	(2.5)	1.3	0.4	(0.7)	49
259	56	3	Ⅱb3	完形	頁岩	2.9	1.6	0.65	1.7	48－77
263	57	3		完形	頁岩	2.3	1.4	0.3	1.1	
274	59	1	Ⅱb2	完形	頁岩	4.3	1.6	0.6	3.7	68
275	59	1	Ⅱa	完形	珪質頁岩	3.4	1.4	0.7	2.5	46－23
276	59	1		一部欠損	頁岩	(3.3)	1.3	1.0	(2.4)	
280	59	2		一部欠損	頁岩	(2.5)	(1.0)	0.5	(1.0)	
285	60	1	Ⅱb1	完形	頁岩	2.6	1.4	0.4	1.1	47－42
286	60	3	Ⅱb2	一部欠損	珪質頁岩	(2.2)	1.0	0.3	(1.1)	47
287	60	3	Ⅱb2	先端部欠損	頁岩	(3.0)	1.4	0.7	(2.5)	48－69
299	64	2		一部欠損	頁岩	(2.7)	1.3	0.35	(1.6)	
301	64	3	Ⅱb1	一部欠損	めのう質	(3.6)	1.4	0.3	(1.6)	47－36
306	65	3	Ⅱa	一部欠損	頁岩	(4.0)	1.4	0.5	(1.8)	46－13
310	67	3	Ⅱb2	一部欠損	頁岩	(2.7)	1.5	0.5	(1.3)	47－50
311	67	3	Ⅱa	一部欠損	頁岩	(2.5)	1.2	0.5	(1.2)	46－15

遺物番号	地区	層位	分類	遺存状態	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	挿図番号
WC 6	4	3	I	完形	頁岩	4.0	2.8	0.6	4.3	44－1
41	9	3	I	一部欠損	頁岩	(2.55)	1.6	0.4	(1.2)	2
110	14	3	I	完形	頁岩	3.0	1.8	0.5	2.0	3
196	25	3	I	1/2欠損	珪質頁岩	2.0	(1.2)	0.3	(0.5)	
261	56	4	I	完形	頁岩	2.3	1.3	0.5	1.4	44－4
279	59	2	I	未成品	頁岩	(3.2)	(1.8)	1.1	(6.1)	
40	9	3	I	一部欠損	頁岩	(2.0)	1.3	0.3	(0.7)	
260	56	3	I	一部欠損	頁岩	(2.0)	1.25	0.3	(0.5)	



第49図　石鏃の長さと巾の相関図

たい。

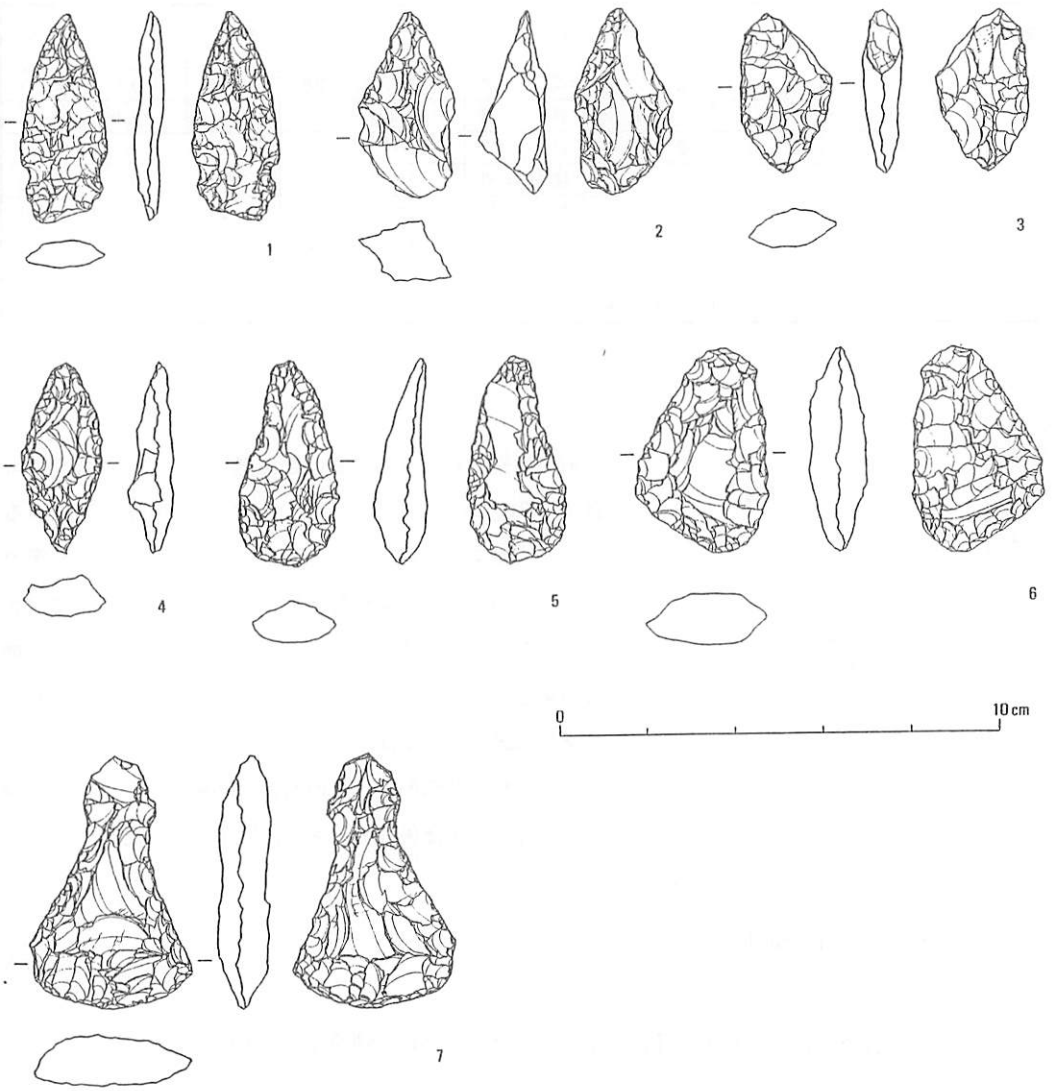
有茎石鏃79点のうち，茎部を欠損しているのは45点で全体の67％占める。ここで扱っていない欠損品は14点あるが，全て身部の欠損であり，茎部の欠損は本遺跡の石鏃の大きな特徴である。また付着物のある石鏃は31点全体の40％である。付着部分は茎部付近を中心としており，付着物は石鏃と矢との接着材であるとみてまちがいない。付着物のある石鏃のうち茎部が欠損しているのは22点，70％もあり，付着物と茎部の折れとの密接な関係がうかがえる。つまり茎部の欠損は矢に装着され，使用された結果のものと考えられる。

第8節　石槍様石器(第45・50図，図版第170，第16表)

5点出土しており，全て頁岩製。1のみが完成品であとは未成品となっている。1は両面とも細かい加工が施されており，下部には柄への着装のためであろうか，両側縁から浅い抉れが入っている。

第16表　石槍様石器・篦状石器一覧表

遺物番号	地区	層位	器種	遺存状態	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	挿図番号
WC 18	6	3	石槍様石器	完形	頁岩	4.3	2.2	1.4	10.2	50－2
30	8	3	石槍様石器	完形	頁岩	4.7	2.0	0.6	6.1	1
162	20	3	石槍様石器	完形	頁岩	4.35	1.9	1.0	7.2	4
198	25	3	石槍様石器	完形	頁岩	4.5	2.0	1.1	7.8	
225	29	3	石槍様石器	完形	頁岩	3.2	2.1	0.9	5.7	3
173	22	3	篦状石器	完形	頁岩	4.7	3.1	1.2	16.2	6
255	56	1	篦状石器	完形	めのう質	5.3	3.8	1.2	11.4	7
283	59	3	篦状石器	完形	頁岩	4.3	2.2	0.95	9.8	5



第50図　石槍様石器・箆状石器実測図

第9節　礫　石　錘(第51・52図，図版第174，第17表)

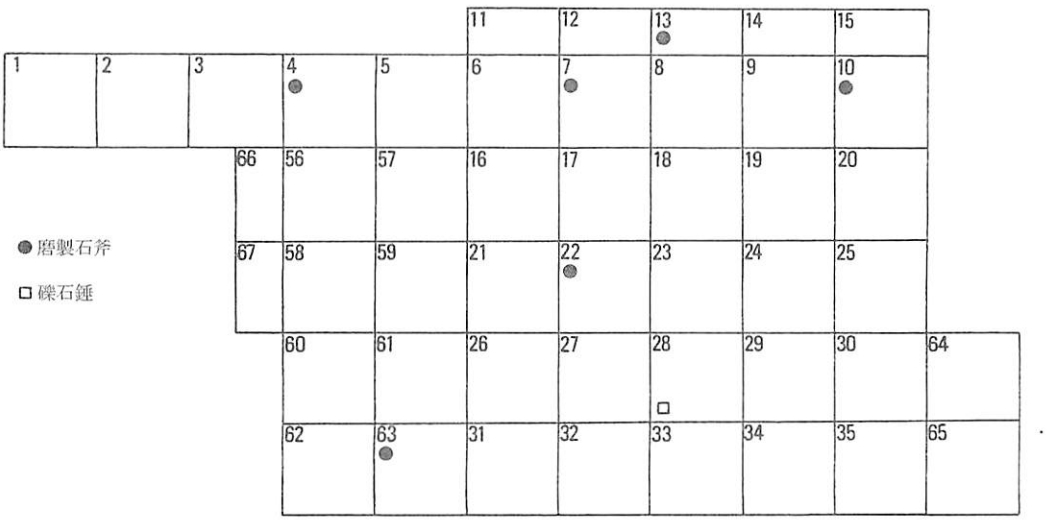
W28区より，1点のみ出土した(第51図)。長さ4.6cm，厚さ1.9cm。上端に切り目状の抉りがあるが，下端は不明瞭である(第52図1)。

第10節　磨　製　石　斧(第51・52図，図版第174，第17表)

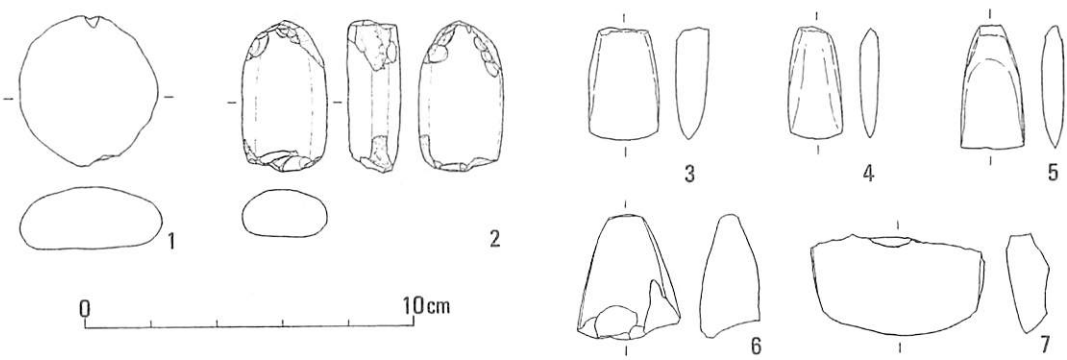
6点出土した(第51図)。第52図3～5は小型の定角式の磨製石斧。3は，刃部幅2.1cm，長さ3.4cm，厚さ0.9cmを測り，刃部に細かい刃こぼれがある。4は刃部幅1.6cm，長さ3.4cm，厚さ0.6cm。5は刃部

第17表　礫石錘・磨製石斧一覧表

遺物番号	地区	層位	分類	遺存状態	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	挿図番号
WC 221	28	3	礫石錘	完形	安山岩	4.5	4.3	1.9	47.7	52－1
3	4	2	定角式	完形	輝緑凝灰岩	3.4	2.1	1.0	12.1	3
53	10	3	定角式	刃部片	輝緑岩	(3.1)	4.7	1.3	(30.3)	7
83	7	3	定角式	完形	隠微晶質輝緑凝灰岩	3.75	1.95	0.8	9.7	5
100	13	2	定角式	完形	緑色凝灰岩	3.4	1.6	0.55	5.1	4
136	18		乳棒式?	破片	頁岩	4.6	2.6	1.45	27.1	2
178	22	3	－	約1／3残	砂岩	(5.7)	(4.3)	(2.7)	(93.7)	
293	63	3	定角式	頭部片	緑色凝灰岩	(3.8)	3.2	1.8	(28.5)	6



第51図　礫石錘・磨製石斧出土分布図



第52図　礫石錘・磨製石斧実測図

幅1.9cm，長さ3.8cm，厚さ0.5cmを測る。

6は定角式磨製石斧の頭部の破片である。

7は，刃部幅4.7cmの大型の定角式磨製石斧の破片である。

この他，乳棒式磨製石斧の胴部の破片と思われるものが一点出土している(同2)。両端は一部敲打されており，転用されていたのかもしれない。

第11節　石　製　円　盤(第53～56図，図版第171・172，第18表)

偏平な礫の周辺に角度の大きい剥離を加え，平面円形に調整し円盤状を呈する石器を，石製円盤とした。ほとんどが周辺に敲打痕や磨痕などの使用痕を残す。また，偏平な上下面にも敲打痕や磨痕が残るものもある。

今回の調査では，46点の円盤状石器が出土した(第18表)。これらの分布をみると(第53図)，ほぼ全域から出土しており，その粗密は石器の全体の出土分布とほぼ整合するが，4区周辺にややまとまるところに違いが見られる。

この円盤状石器を，大きさと周辺の剥離の角度，および使用痕の違いから以下のよう分類した。

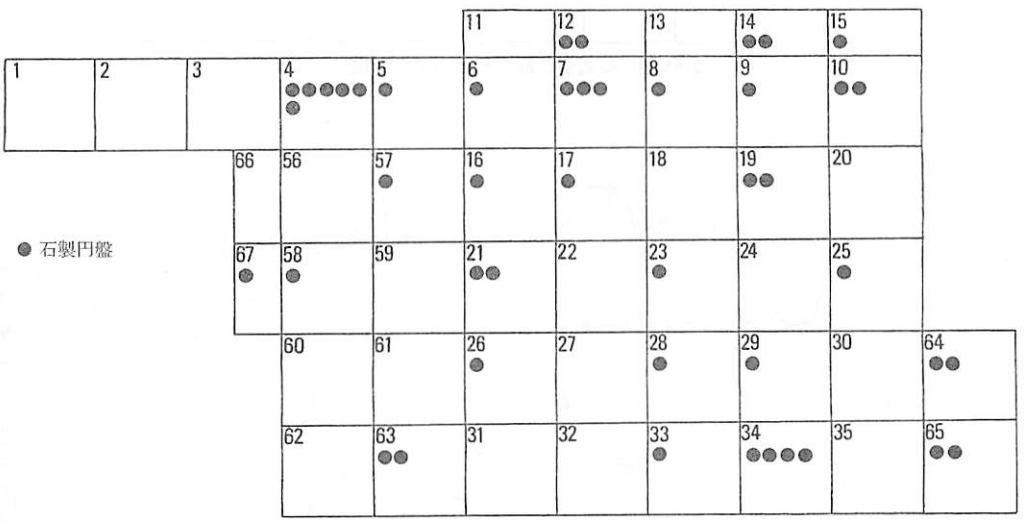
1．分　　類

1)大きさによる分類

直径6cmまでを小型(A)，直径6～8cmを中型(B)，直径8cm以上を大型(C)とした。

2)周辺の剥離による分類

周辺の剥離は，大きく2つに分けられる。一つは，角度の強いもので，上下面に対して直角に近いものも多い(Ⅰ類)。もう一つは，上下面から角度の緩い剥離を行うもので，したがって稜線が明瞭である(Ⅱ類)。両者を断面から見ると，前者が長方形を呈するのに対して，後者はレンズ状になる。また，こ



第53図　石製円盤出土分布図

第18表　石製円盤一覧表

遺物番号	出土地区	層位	分類	遺存状態	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	挿図番号
WC　5	4	3	AⅠc	完形	安山岩	5.3	4.7	2.0	87.5	54－1
7	4	3	AⅠab	完形	砂岩	5.9	5.9	2.2	119.3	9
9	4	3	AⅠbd	完形	砂岩	5.9	5.7	2.1	98.5	10
10	4	3	AⅠc	完形	安山岩	5.8	5.0	2.3	106.5	2
11	4	3	AⅢ	完形	安山岩	6.5	5.7	2.1	145.0	55－7
12	4	3	BⅡ	完形	安山岩	7.0	6.6	3.0	183.3	16
14	5	3	BⅡ	完形	安山岩	7.2	6.8	3.1	99.9	56－1
20	6	3	CⅢ	完形	砂岩	8.2	8.0	2.6	99.9	6
27	7	3	AⅡ	完形	凝灰岩	5.3	4.6	2.1	45.8	54－17
36	8	3	CⅡ	完形	砂質凝灰岩	9.2	8.6	2.5	99.9	56－7
45	9	3	AⅡ	完形	砂岩	5.3	5.1	1.4	60.4	54－18
50	10	3	AⅢ	完形	砂岩	5.9	5.5	2.1	107.7	55－8
56	10	3	BⅡ	完形	砂岩	7.2	6.5	3.6	99.9	56－2
65	－	－	CⅡ	完形	凝灰岩	9.3	8.0	3.1	99.9	9
74	－	P	CⅡ	完形	砂岩	9.6	8.5	2.5	99.9	8
84	7	3	BⅡ	完形	砂岩	7.1	6.9	3.2	99.9	3
96	12	3	AⅠe	完形	安山岩	4.7	4.7	2.2	62.1	54－3
97	12	3	AⅡ	完形	安山岩	5.5	5.3	1.1	56.1	19
106	14	2	BⅢ	完形	砂岩	6.5	6.5	2.9	99.9	56－4
115	14	3	AⅡ	完形	安山岩	4.6	4.6	1.8	52.9	54－20
117	15	3	AⅠb	一部欠	砂岩	5.8	(5.6)	2.0	(84.1)	11
126	16	3	AⅡ	完形	砂岩	5.8	6.0	1.8	99.9	55－1
129	17	3	BⅢ	完形	安山岩	7.2	6.8	3.2	75.1	56－5
146	19	3	AⅠde	完形	砂岩	4.6	4.9	2.2	99.9	54－4
153	19	3	BⅠ	完形	輝緑岩	7.2	6.5	2.0	130.7	55－13
168	21	3	AⅠc	完形	安山岩	6.3	5.0	2.3	99.9	54－12
170	21	3	AⅢ	完形	安山岩	5.9	6.5	2.3	148.5	55－9
181	23	3	BⅠ	完形	安山岩	6.9	6.5	2.2	99.9	14
194	25	3	CⅡ	完形	安山岩	10.4	9.3	4.2	67.8	56－10
199	－	－	AⅠd	完形	砂岩	5.3	4.7	1.8	99.9	54－13
201	26	3	AⅠa	完形	安山岩	6.0	5.6	2.5	99.9	7
220	28	3	AⅠc	完形	安山岩	5.3	4.9	1.7	99.9	8
223	29	2	AⅡ	完形	石英安山岩	5.6	4.9	1.8	60.5	55－2
233	33	3	AⅢ	完形	安山岩	5.9	5.1	2.1	104.1	10
235	34	3	AⅡ	完形	安山岩	6.0	5.3	1.8	87.7	3
242	34	3	AⅠac	完形	砂岩	5.4	5.0	1.5	70.5	54－5
243	34	3	AⅢ	完形	砂岩	6.0	5.5	2.3	108.5	55－11
266	57	3	AⅡ	完形	凝灰岩	4.8	4.4	1.9	99.9	4
273	58	3	AⅠd	裏面欠	安山岩	5.6	5.5	(1.3)	(60.4)	54－6
292	63	3	AⅡ	完形	砂岩	5.6	5.2	2.0	55.9	55－5
296	63	3	BⅠ	完形	凝灰岩	6.8	6.8	1.8	99.9	15
303	64	3	AⅡ	完形	輝緑岩	5.7	5.7	1.8	82.7	6
304	64	1	AⅢ	完形	安山岩	6.3	5.2	2.9	121.7	12
308	65	3	AⅠe	完形	安山岩	6.1	5.5	1.8	100.5	54－14
309	65	4	AⅠec	完形	閃緑岩	5.7	6.1	2.0	109.3	15
312	67	3	AⅠec	完形	凝灰岩	5.1	4.8	2.4	99.9	16

の他に，周辺の敲打によって，断面が楕円形になるもの(Ⅲ類)や自然面を残すもの，また，これらを組合わせたものがある。

3)使用痕による分類

剥離によって整えられた石器の周囲は，その後使用によるものと思われる痕跡が残る。この使用痕の違いからａ～ｅに分類した。

ａ：剥離面全体に敲打がおよび，面状になるもの。

ｂ：部分的に面状になるもの。

ｃ：平坦面に敲打痕が残るもの。

ｄ：剥離の稜線上に使用痕が残るもの。

ｅ：わずかに使用痕が残るもの。

なお，ａはⅢ類の断面形の分類の，断面楕円形のものと関連する。

以上をもとに分類を行った。個々の分類の表記は，断面形状に周囲の使用痕の分類を付記するが，多くが2種類以上の使用痕を残すため，Ⅰａｃのように，使用痕のなかでもっとも主たるものを記し，さらに目立つ使用痕があればその分類名を付記した。また，周囲に自然面が残るものは，ｚを加える。

2．分　　析

小型品は，32点ある。このうち，Ⅰ類が16点，Ⅱ類が10点，Ⅲ類が6点である。

1)Ａ：小型品

ａ．Ⅰ類(第54図1～16)

ほぼ偏平な礫の周囲を，ほぼ直角の剥離を加えて直径5～6㎝の円盤状にする。このうち，周辺の一部に自然面を残すものが8点ある(第54図5～12)。いずれも，使用痕はｃ・ｂ類が多く，同3や4，13，6，また，14～16に見られる使用痕ｄ・ｅは，使用の頻度が低い結果によるものと思われる。

このうち7と9は，使用痕ａがめだっており，Ⅲ類にちかいものである。

ｂ．Ⅱ類(第54図17～20，第55図1～6)

Ⅰ類と同様に，ほぼ偏平な礫を用いるが，周辺の剥離はⅠ類に比べ浅く，断面がレンズ状を呈するものが多い。この稜線上に使用痕が残る。使用痕は結果的にｄ類が多いが，一方でａ類も目立っており，45のように片面ａ類，反対面ｄ類によって，断面長三角形状になるものもある。

ｃ．Ⅲ類(第55図7～12)

周辺から加えられた剥離が，後の敲打によって稜線がほとんどなくなり，側面は丸い。とくに第55図12は，片面が面状に擦り減っている。

2)Ｂ：中型品

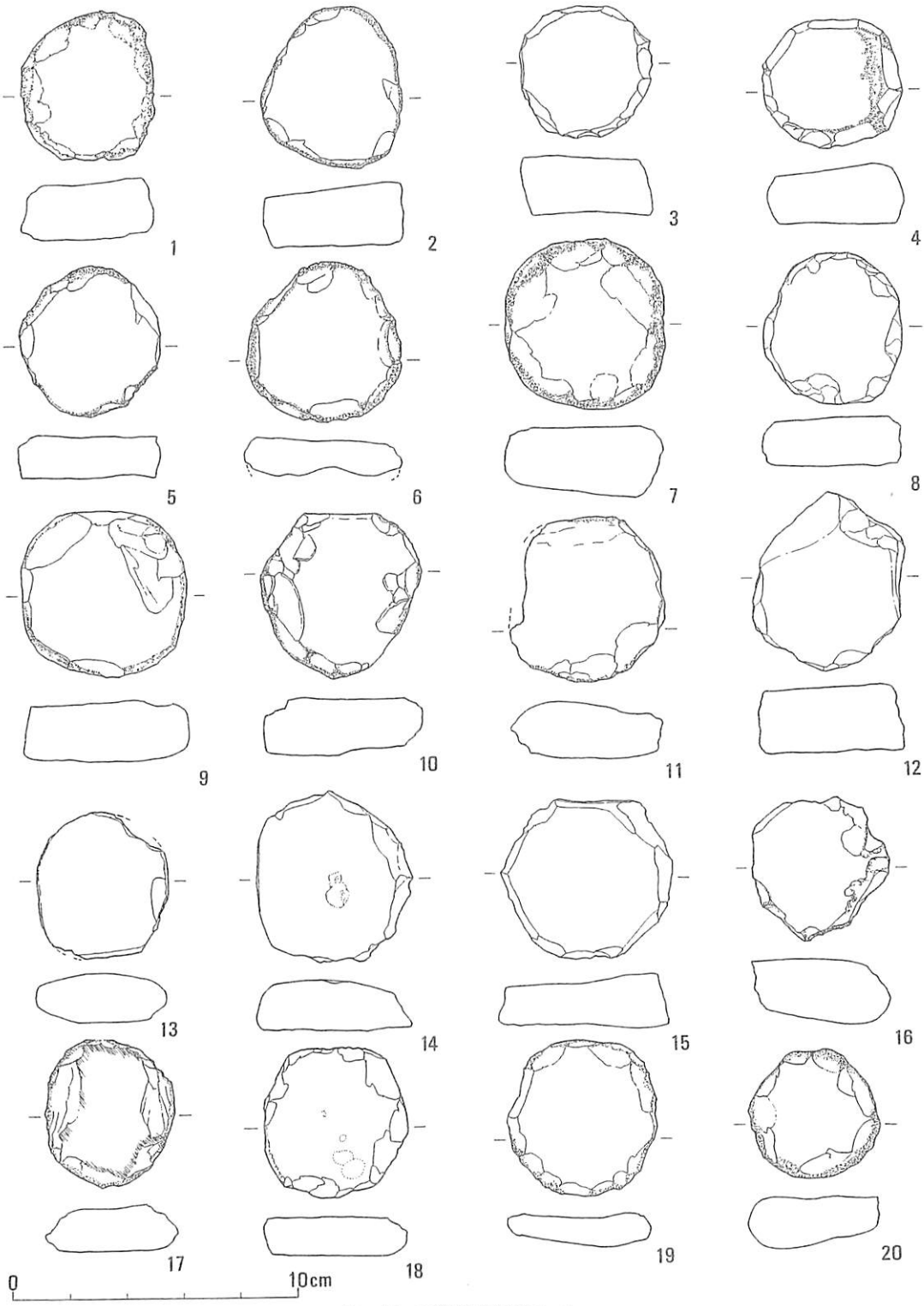
中型品は，9点ある。Ⅰ類が3点。Ⅱ類が4点，Ⅲ類が2点ある。

ａ．Ⅰ類(第55図13～15)

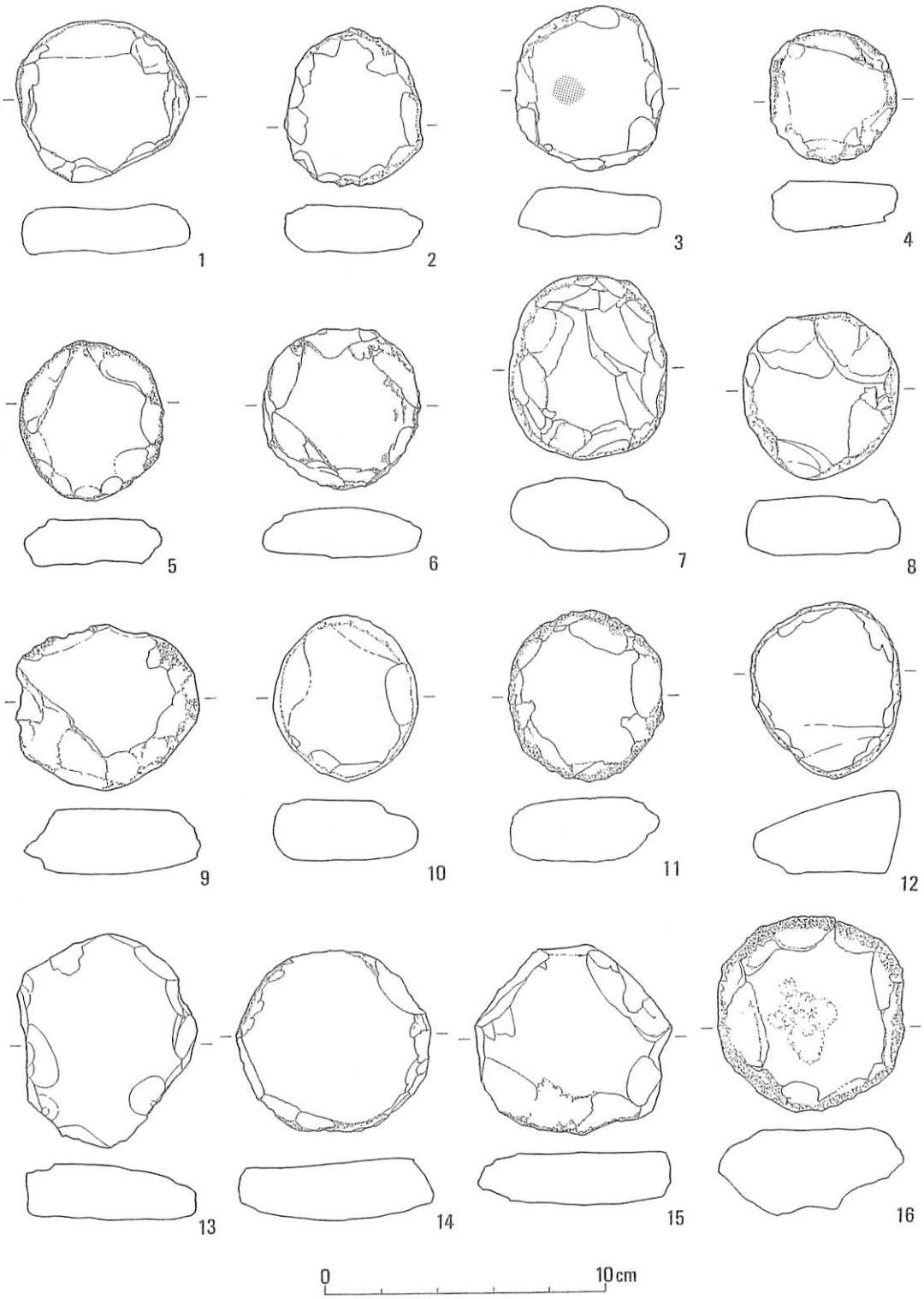
全体に薄い石材を周辺から荒く敲打する。一部に自然面を残す。

ｂ．Ⅱ類(第55図16，第56図1～3)

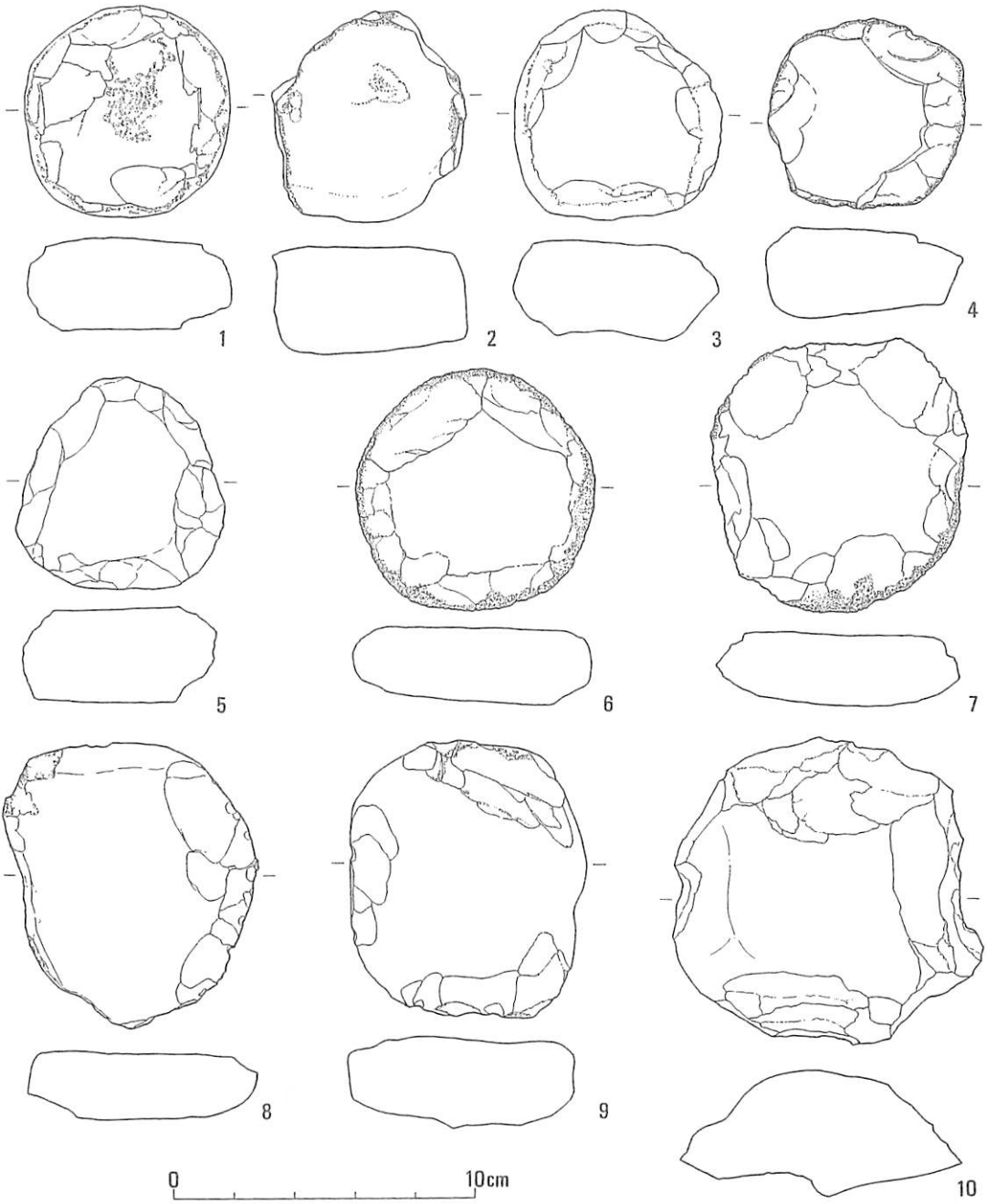
Ⅰ類にくらべかなり厚い石材を用いている。表裏面に擦痕や敲打痕を残すものが3点ある(第55図16，



第54図　石製円盤実測図・1



第55図　石製円盤実測図・2



第56図　石製円盤実測図・3

第56図1・2)。

c．Ⅲ類(第56図4・5)

3点ある。4は周囲がかなり敲打され，丸く擦り減っているのに対して，5は稜線が面状を呈している。

3）C：大型品(第56図6～10)

大型品は，5点である。Ⅲ類が1点(第56図6)の他は，Ⅱ類である。自然面を残すものが多く，とくに10は，他に比べかなり形態も異なる。

3．ま　と　め

以上の分析をふまえると，今回出土した石製円盤はその出土点数の多さという特徴もあわせて，何らかの特殊な機能をもった石器と見ることができる。とくに大きさに規格性が見られることと使用痕の類型化が可能なことは，この遺跡を形成した人々の何らかの製作活動と密接に関係した道具の存在の可能性を指摘できる。今のところ，出土した様々な遺物の中に明らかな関係のあるものは見つけられないが，岩版・岩偶の豊かさを考えると，こうした遺物の製作に関わる道具の可能性も無視できないと考える。

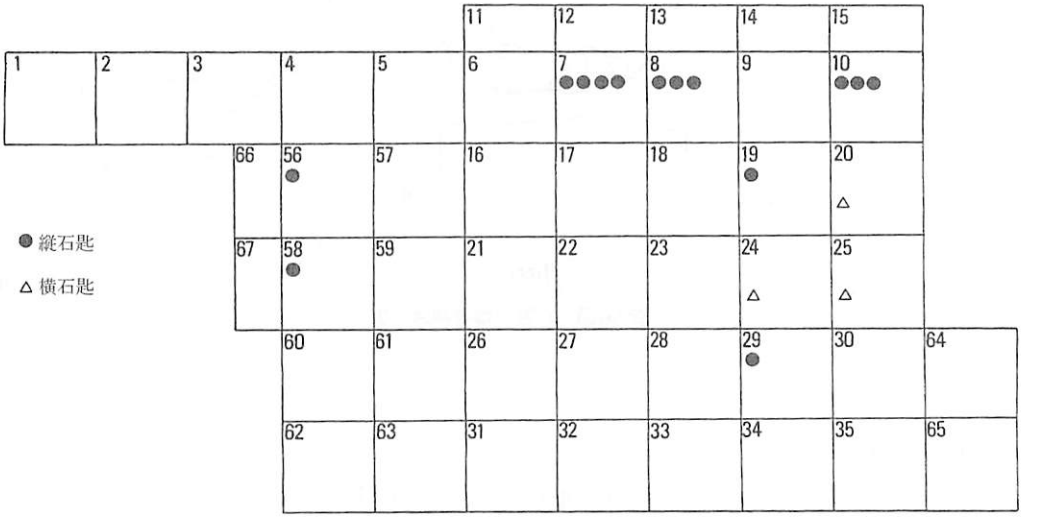
第12節　篦状石製品(石篦)(第45・50図，図版第170，第16表)

3点出土している。7のみがめのう質で，残り2点は頁岩製。厚手の剥片を用い，両面に加工が施され，刃部が形成されている。7は，両縁からの加工によって，上部につまみ状のものを作り出している。

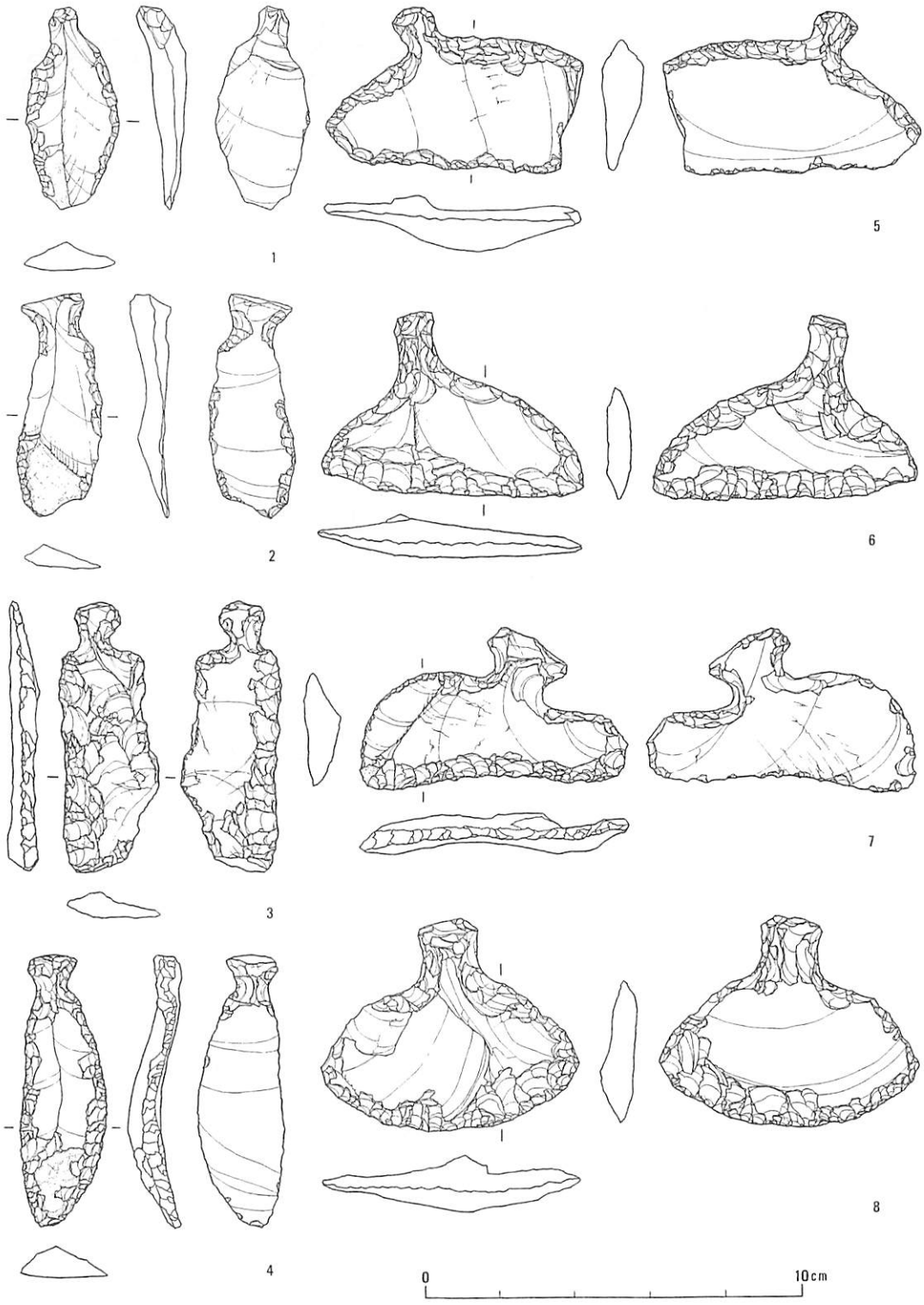
第13節　石　　匙(第57～60図，図版第173，第19表)

全部で24点出土しているが，ここでは内22点のみ扱う。7～10区に大半が集中する。また横形の石匙は調査区の東側にまとまる。

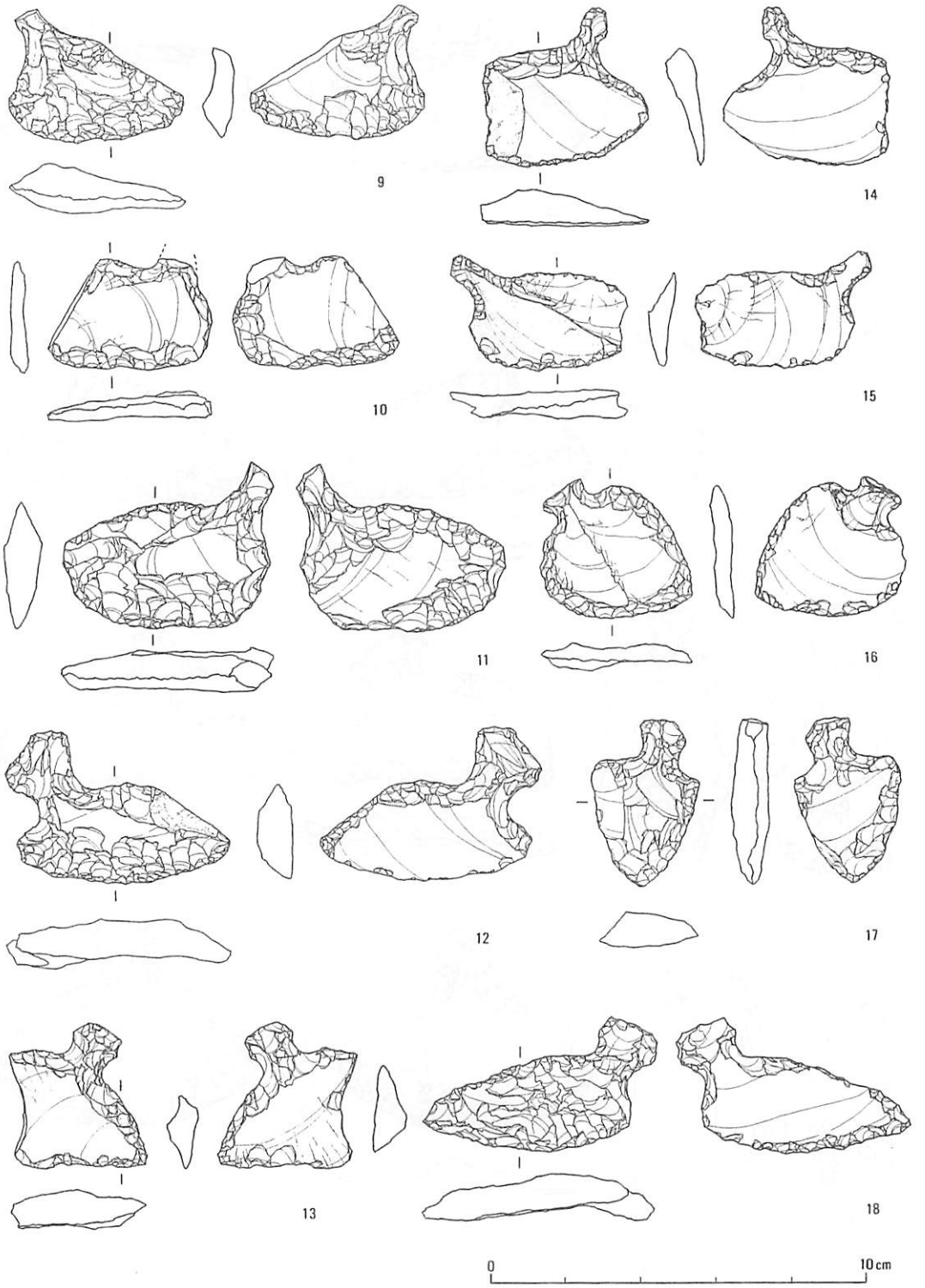
石材は全て頁岩である。持ち手と刃部との位置関係から3類に大別し，以下各類について述べる。



第57図　石匙出土分布図



第58図　石匙実測図・1



第59図　石匙実測図・2

第19表　石匙一覧表

遺物番号	地区	層位	分類	遺存状態	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	挿図番号
WC 24	7	3	A	完形	頁岩	7.2	2.1	0.6	12.3	58－3
25	7	3	B	完形	頁岩	4.4	7.2	1.0	19.4	7
26	7	3	C	一部欠損	頁岩	3.7	(4.0)	0.85	(10.5)	59－13
29	8	2	A	完形	頁岩	5.5	2.5	0.7	9.1	58－1
31	8	3	C	完形	頁岩	3.1	4.8	0.8	6.8	59－15
32	8	3	B	完形	頁岩	4.1	6.0	1.2	21.7	60－3
55	10	3	B	完形	頁岩	6.9	5.5	1.0	32.9	58－8
62	10	2	B	完形	頁岩	5.4	5.3	1.0	21.5	60－1
69	表採＊	－	C	完形	頁岩	5.5	4.5	1.1	25.6	59－11
70	表採＊	－	C	完形	頁岩	3.7	4.7	0.9	17.6	59－9
71	表採＊	－	C	つまみ部欠損	頁岩	(3.0)	4.3	0.5	(9.1)	10
82	7	2	A	完形	頁岩	7.3	2.3	0.9	13.2	58－4
94	12	2	－	－	－	8.7	2.7	1.6	23.8	－
148	19	3	C	完形	頁岩	4.4	2.8	0.95	10.3	59－17
164	20	3	C	完形	頁岩	3.7	6.3	0.9	14.5	18
185	24	3	B	完形	頁岩	4.9	6.8	1.0	26.1	58－5
197	25	3	C	完形	頁岩	4.1	5.7	0.9	18.7	59－12
217	28	3	B	完形	頁岩	4.9	7.0	0.7	23.3	58－6
227	30	3	C	完形	頁岩	4.3	4.4	1.0	10.1	59－14
262	56	PA	A	完形	頁岩	5.4	2.2	0.6	8.4	58－2
270	58	3	B	完形	頁岩	4.9	5.1	1.2	22.1	60－2
－	表採	－	C	完形	－	3.2	4.1	0.6	8.8	59－16

A類は持ち手が刃部と平行をなすもので，4点含まれる(第58図1～4)。縦長の素材のかたちをそのまま生かしており，2～4は打面及び打点を残している。3を除き，腹面にはほとんど加工は加えられていない。4は一部に礫表を残している。3点が完形品である。

B類は持ち手が刃部と直角なもので，8点含まれる。(第58図5～8，第60図1～3)厚みのある素材を用いたしっかりしたものが多い。刃部がほぼ一直線をなすもの(5～7，第60図3)と曲線を描くもの(8，1・2)の2種類がある。C類はA類とB類の中間形で10点ある(第59図9～18)。10のみが欠損品である。9・13は製作途上での割れと考えられる。12・18は両者に平面的な共通点があるが，ほかには認められない。

第14節　削　　器(第61～63図，図版第174，第20表)

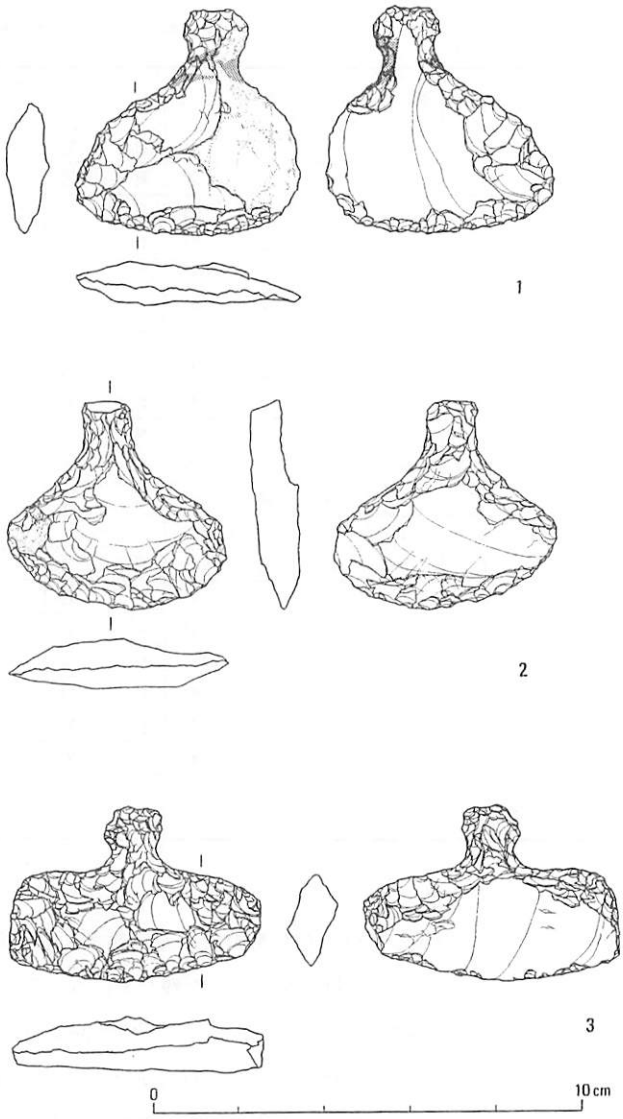
19点出土している。出土分布は，ほぼ調査区全体に広がっている。

玉ズイ1点(16)を除き，素材は全て頁岩。

ほとんどが不定形の剥片を用いており，各スクレイパーに共通の明瞭な特徴はない。以下，2種に分類し記述する。

A類(1～10)：一側縁のみを刃部として加工している。8～10は当遺跡出土の石器としては珍しく，明らかに縦長志向を持った剥片である。

B類(11～20)：剥片の複数縁に加工を施しているもの。11は柄などへの着装のためであろうか，上部にアスファルトの付着が認められる。15は加工が荒く，上半分が折れており，縦長の剥片であったと思われる。



第60図　石匙実測図・3

第15節　石　　錐

(第64・65図，図版第170，第21表)

当遺跡では16点出土している。調査区の中央部に広がるうち14点が頁岩製。10・14のみが，めのう質となっている。形態により以下のように5種に分類した。

A類(1～9)：明瞭なつまみ状の頭部を持つもの。1～5は頭部に主剥離面の一部を残している。6～8は頭部の全面に加工が施されているが，8は錐部が極端に短く，左右からの抉りも浅い。9は8とは対照的に非常に長い錐部を持ち，その断面は平行四辺形を呈する。

A′類(10，11)：錐部のみだが，9のような形状のもののつまみ状の頭部が欠損したものと思われる。

B類(12～14)：棒状の錐で，つまみ部は形成しない。12，13は全面に細かい加工が施され，両端に使用痕が認められる。

C類(15)：錐部の作り出しが直線的で，つまみと錐部の境は明瞭ではない。上部は素材の剥片の形状をよく残している。

D類(16)：明瞭なつまみ状の頭部を持つが，頭部の大きさに較べ錐部の大きさは著しく小さい。頭部主剥離面を残し，素材の形状をよく残している。当遺跡では1点のみの出土であり，錐部の先は折れて

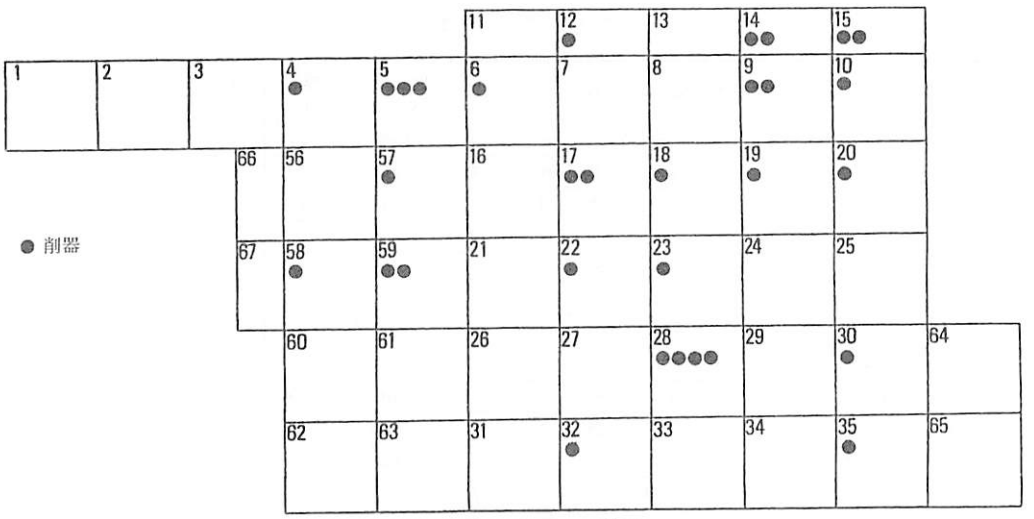
第20表　削器一覧表

遺物番号	地区	層位	分類	遺存状態	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	挿図番号
WC　4	4	2	−	一部欠損	頁岩	(6.3)	4.1	1.1	(27.6)	−
15	5	3	A	完形	頁岩	2.8	3.3	0.7	5.3	62−3
16	5	3	−	一部欠損	頁岩	(3.1)	(5.1)	1.5	(21.6)	−
19	6	3	−	−	頁岩	−	−	−	−	−
38	9	1	A	完形	頁岩	8.8	5.2	0.95	57.4	9
39	9	1	−	−	頁岩	−	−	−	−	−
52	10	3	A	一部欠損	頁岩	(6.2)	(3.1)	1.4	(24.4)	8
72	表採＊	−	−	−	頁岩	−	−	−	−	−
73	表採＊	−	−	完形	頁岩	5.0	2.9	1.4	19.9	−
79	5	3	A	一部欠損	頁岩	(3.7)	3.6	1.1	−	2
93	12	1	A	一部欠損	頁岩	(4.1)	2.7	1.0	(9.2)	5
108	14	2	A	一部欠損	頁岩	(5.2)	(3.6)	0.6	(8.4)	6
114	14	3	B	一部残	頁岩	(2.1)	1.7	0.4	(1.1)	63−14
116	15	3	−	一部欠損	頁岩	(5.1)	(3.6)	1.0	(18.7)	−
118	15	3	−	−	頁岩	−	−	−	−	−
127	17	3	A	一部欠損	珪質凝灰岩	(6.0)	2.2	0.8	(12.5)	62−10
131	17	3	B	完形	頁岩	3.2	3.7	0.7	10.0	63−19
132	18	3	−	一部残	頁岩	(2.2)	(1.5)	0.6	(1.8)	−
140	19	1	B	完形	頁岩	3.3	2.6	0.6	4.4	17
171	22	2	B	完形	珪質頁岩	3.8	4.8	0.9	16.6	16
184	23	3	A	完形	頁岩	4.15	4.4	0.8	17.5	62−4
214	28	2	A	完形	頁岩	3.2	3.9	1.15	13.2	1
215	28	2	B	約1／2欠損	頁岩	(3.5)	(3.0)	0.9	(9.9)	63−13
219	28	3	B	完形	頁岩	4.0	2.5	0.8	6.3	11
228	30	3	A	一部欠損	頁岩	(4.5)	2.3	0.5	(5.5)	62−7
231	32	3	−	完形	頁岩	3.4	1.9	0.8	5.7	−
247	35	3	−	−	頁岩	−	−	−	−	−
265	57	3	B	一部残	頁岩	(3.1)	(2.15)	0.6	(3.6)	63−15
269	58	3	B	一部欠損	頁岩	4.5	4.5	1.2	(20.4)	18
277	59	1	B	一部欠損	頁岩	4.25	3.4	0.9	(10.5)	12
278	59	1	−	一部欠損	頁岩	(4.7)	4.0	1.0	(20.9)	−

いる。

第16節　異形石器（第66図，図版第174，第22表）

1は，両頭の石鏃であろうか。2は，縦長の剥片の周囲から比較的ていねいな剥離を施すことによって，長さ3.8cm，幅2.4cmの楕円形を呈する石器である。裏面の一部に主剥離面を残す。



第61図　削器出土分布図

第17節　石　　剣(第67・68図，図版第166，第22表)

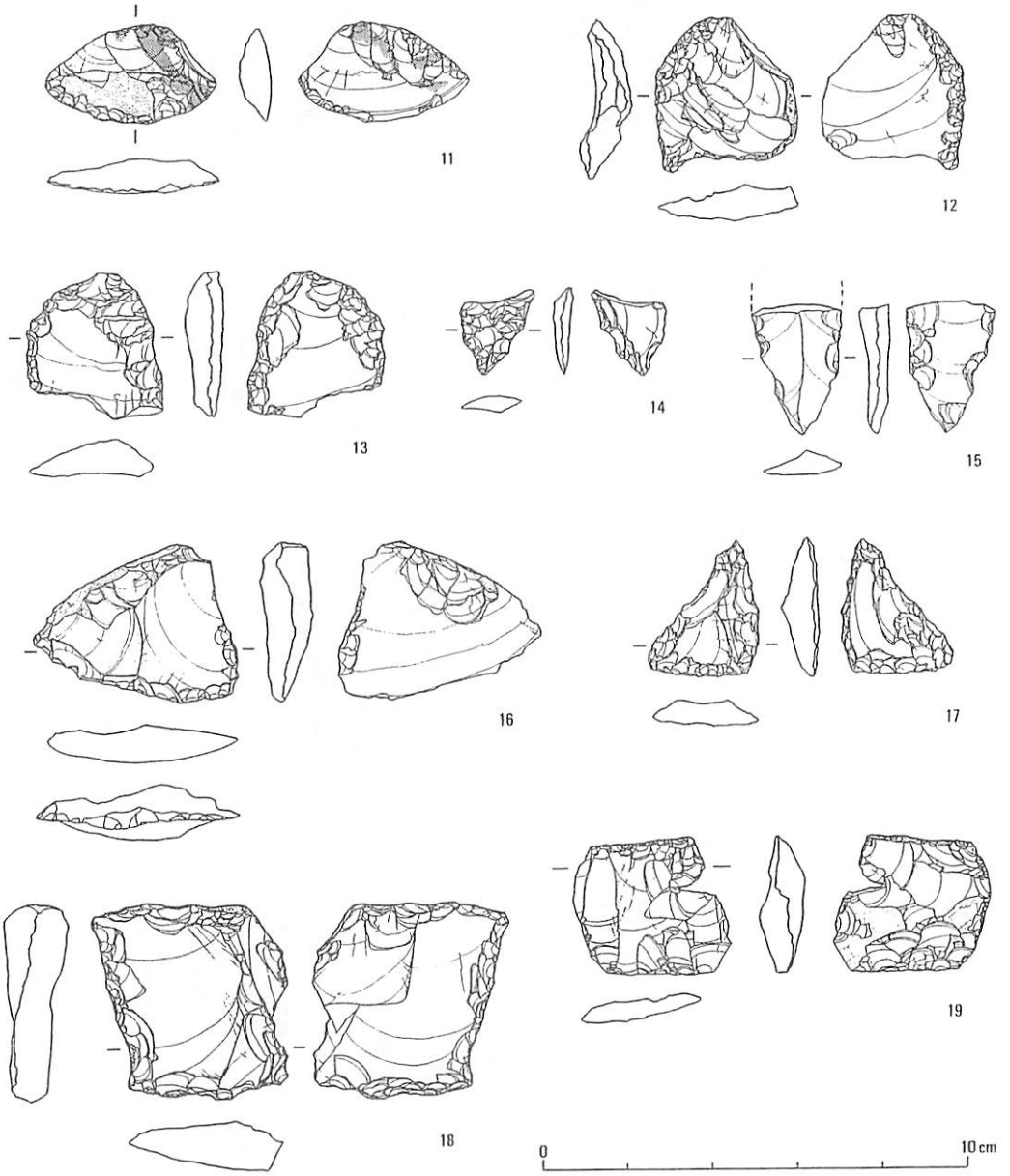
9点出土している。そのうち3点が実測できた(第68図)。

1，2は粘板岩製で良く研磨されている。あまり明瞭な刃部はつくられていないため，石棒である可能性もある。3は柄で，突端をきれいに成型している。2本の沈線は刃部との境を示すものであろう。石材は粘板岩でやや風化している。

第18節　独　　鈷　　石(第69図，図版第174，第22表)

1点出土した。片腕を欠くが，約2分の1，9.6cmが残る。断面には，打ちたたかれたと思われる痕がほぼ全面におよんでいる。また，表面も敲打痕や磨痕が各部に見られる。磨石として転用されたものだろうか。

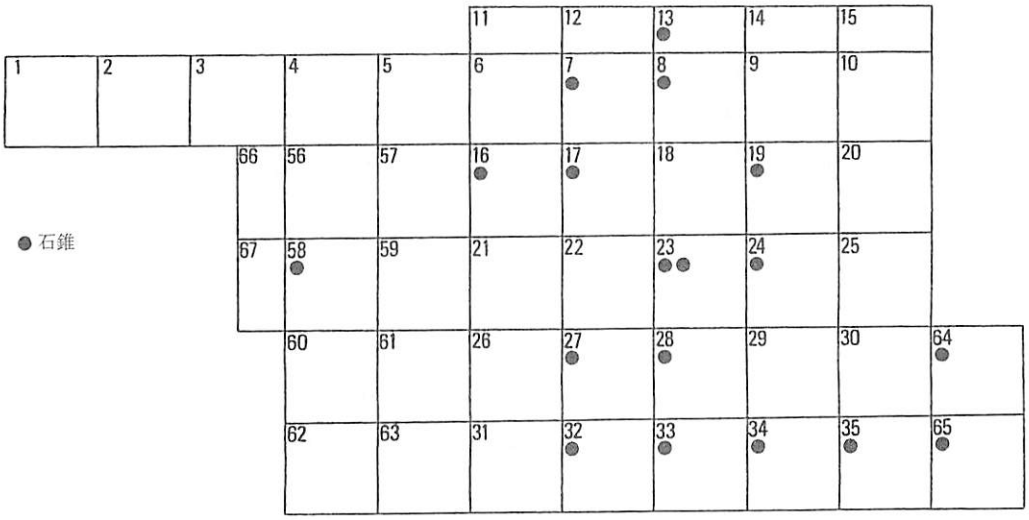
第62図　削器実測図・1



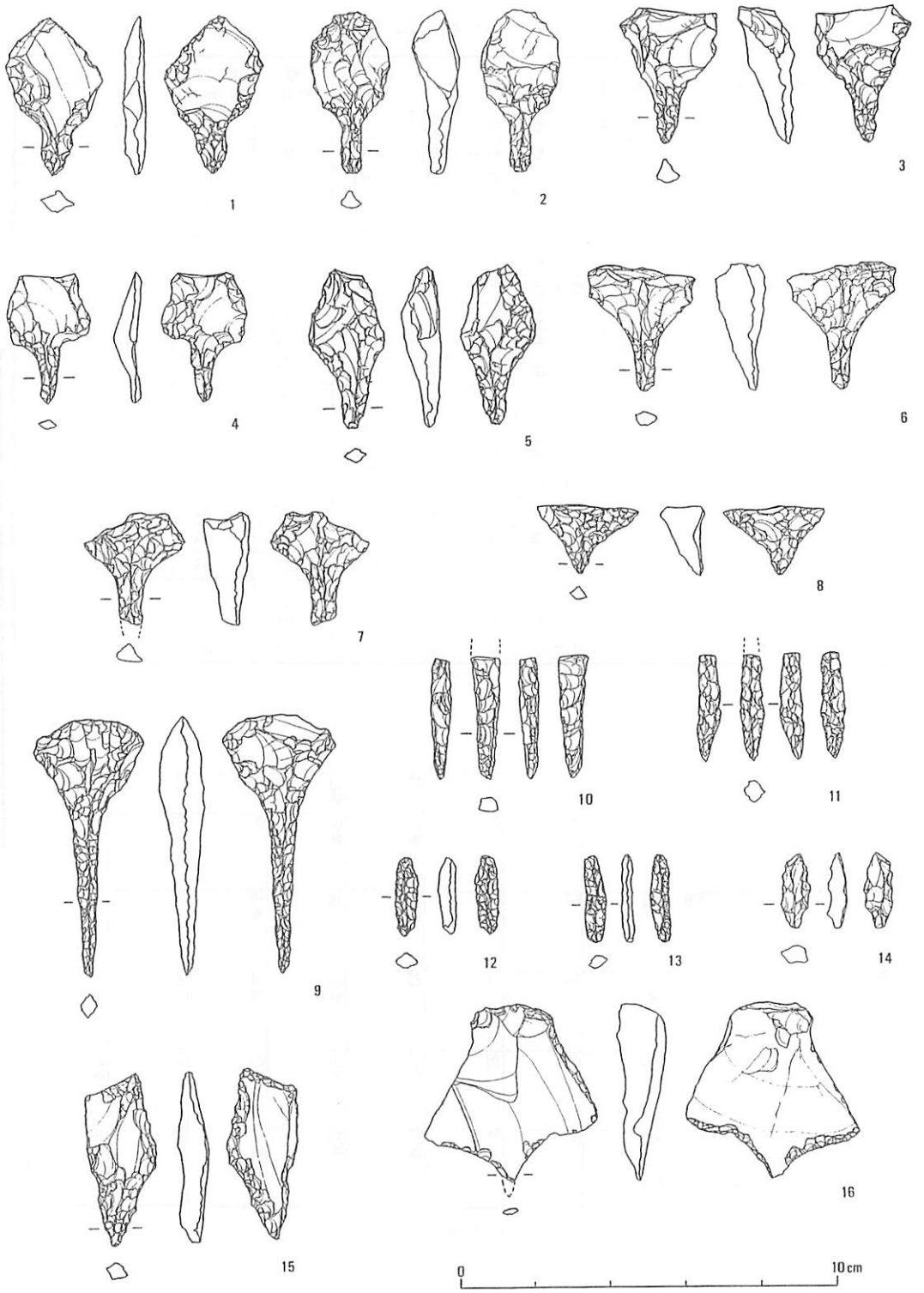
第63図　削器実測図・2

第21表　石錐一覧表

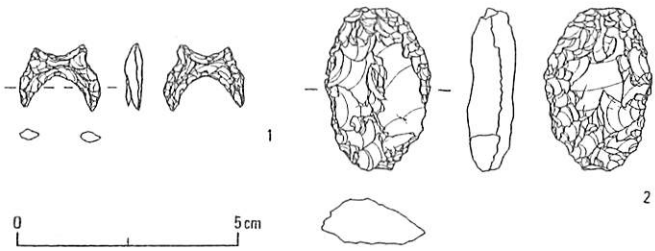
遺物番号	地区	層位	分類	遺存状態	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	挿図番号
WC 33	8	3	−	完形	頁岩	4.8	2.4	1.0	11.6	−
51	10	3	B	完形	めのう質	2.0	0.7	0.5	0.7	65−14
86	7	3	A	完形	頁岩	3.4	2.7	0.35	7.0	6
101	13	2	A	完形	頁岩	3.5	2.3	0.25	2.8	4
102	13	3	−	つまみ部欠損	頁岩	(2.3)	0.7	0.6	(5.2)	−
103	13	3	B	完形	頁岩	2.0	0.6	0.4	0.7	12
122	16	3	C	一部欠損	頁岩	(4.6)	1.7	0.4	(9.7)	15
128	17	3	A	完形	頁岩	6.9	3.0	0.6	8.5	9
149	19	3	A	完形	頁岩	3.7	2.6	0.6	8.9	3
159	20	3	D	一部欠損	頁岩	(4.3)	4.7	0.2	(16.7)	16
180	23	2	B	完形	頁岩	2.3	0.55	0.35	0.5	13
186	24	3	A	完形	頁岩	4.3	2.6	0.6	4.7	1
210	27	3	A	一部欠損	頁岩	(4.3)	2.1	0.4	(7.0)	2
216	28	3	A′	一部残	めのう質	(3.3)	0.7	0.4	(1.5)	10
232	33	3	−	つまみ部欠損	頁岩	(2.3)	0.8	0.3	(1.1)	−
239	34	3	A	一部欠損	頁岩	(4.2)	2.0	0.4	(6.5)	5
250	35	3	A	一部欠損	頁岩	(3.0)	(2.7)	0.5	(6.0)	7
267	58	2	−	−	−	−	−	−	−	−
298	64	2	A′	完形	頁岩	2.9	0.65	0.6	1.0	11
305	65	2	A	頭部欠損	頁岩	(1.8)	2.8	0.3	(3.0)	8



第64図　石錐出土分布図



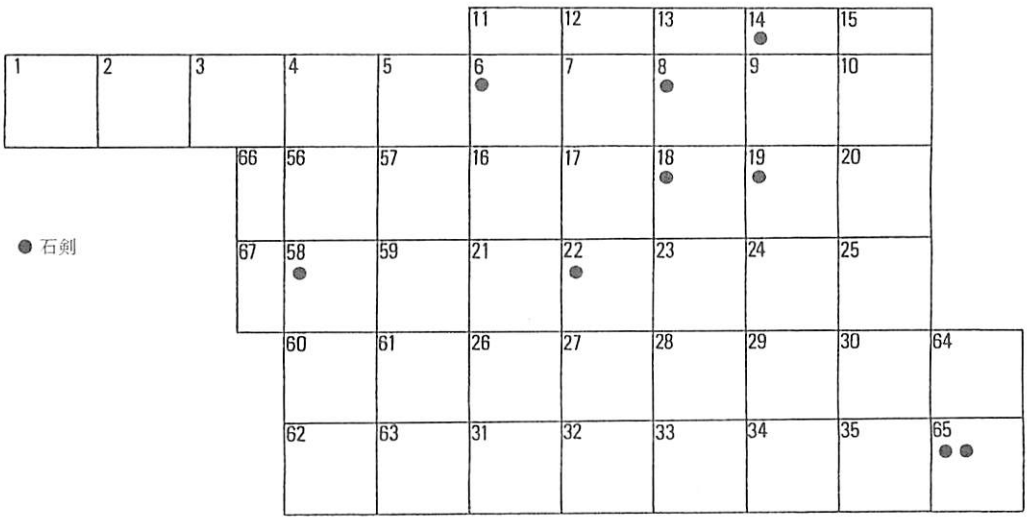
第65図　石錐実測図



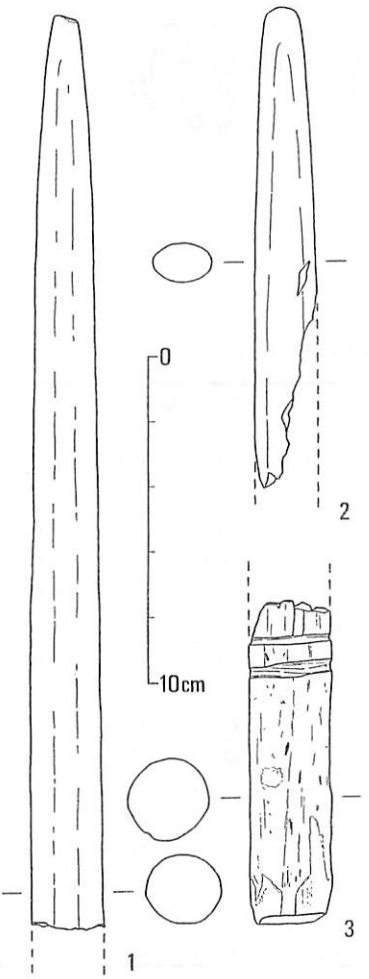
第66図　異形石器実測図

第22表　石剣・独鈷石・異形石器・打製石斧・礫器一覧表

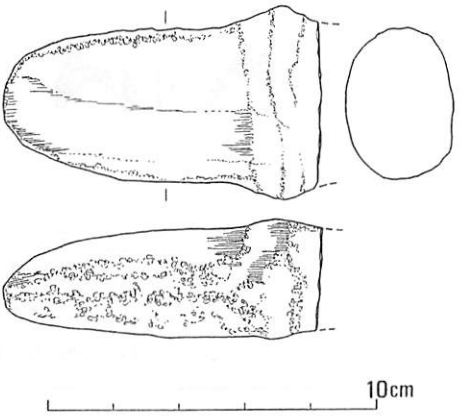
遺物番号	地区	層位	器種	遺存状態	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	挿図番号
WC 21	6	2	石剣	一部残	千板岩	(6.3)	(2.0)	(1.2)	(15.0)	−
37	8	3	石剣	一部残	千板岩	(6.0)	2.4	0.9	(30.0)	−
WD 25	14	2	石剣	一部残	千板岩	(3.8)	(2.3)	(1.0)	(20.0)	−
26	18	3	石剣	一部残	千板岩	(5.9)	(2.05)	(0.55)	(10.0)	−
27	19	2	石剣	一部残	頁岩	(2.8)	(1.6)	(0.7)	(15.0)	−
28	22	1	石剣	一部残	千板岩	(14.9)	(1.8)	1.2	(50.0)	67−2
52	58	3	石剣	柄のみ残	千板岩	(9.9)	2.5	2.4	(110.0)	3
63	65	4	石剣	頭部欠損	千板岩	(28.2)	2.2	2.1	(190.0)	1
64	65	土坑内	石剣	一部残	千板岩	(14.1)	(4.3)	(1.9)	(155.0)	−
WC 75	表採＊		独鈷石	1／2欠損	花崗岩	(9.7)	6.0	3.7	(295.0)	67
63	10	不明	異形	完形	頁岩	1.6	1.8	0.3	0.6	66−1
189	24	3	異形	一部欠損	めのう質	2.3	1.0	0.7	1.4	−
222	29	2	異形	完形	頁岩	3.3	2.4	1.0	10.3	2
135	18	3	雨だれ石	一部欠損	凝灰岩質砂岩	21.2	12.5	8.5	−	44
191	24	3	打製石斧	完形	凝灰岩	19.1	10.6	3.0	460.0	36
165	20	3	礫器	完形	砂岩	11.5	6.5	2.1	195.0	−



第67図　石剣出土分布図



第68図　石剣実測図



第69図　独鈷石実測図

第6章　出土遺物・3　土製品

本遺跡から土製品は32点出土した。その内訳は，土偶21点，土製円盤7点，装身具である耳飾りが3，玉が1点であった(第23表)。

これらの土製品は調査区の東側から出土している(第70図)。

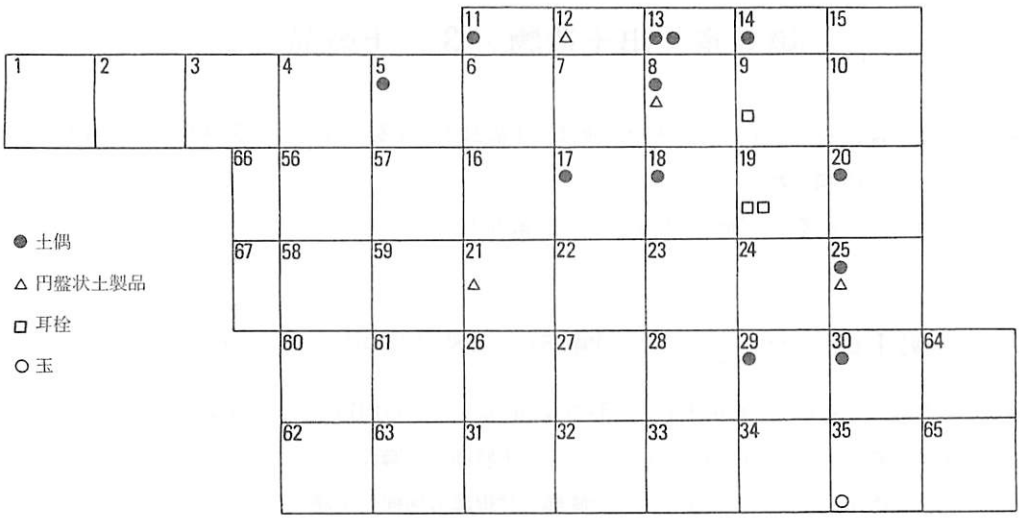
第1節　土　　偶(第71・72図，図版第175・176，第23表)

土偶は東，西地区合わせて21点出土し，完形のものはない。この内14点を図示した。

第71図は中空土偶である。1は胸部から上を欠く。下腹部から胸部にかけて，たすき状に2本の沈線とその間を刻む文様が巡っている。また，両大腿部の付根にも同様の文様がみられる。これらの文様帯に区画された腰部はLの磨消縄文が施され，その上から沈線による区画文と三角形の配置文が施される。腰部中央には臍と思われる深い孔(刺突)が見られるが，この孔は内部まで貫通していない。下腹部

第23表　土製品一覧表

名称・番号		区	遺物番号	層位	遺存状態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	挿図番号	図版番号
土偶	1	W18	WB－20	3	脚部破片	(10.6)	10.0	5.8	71－1	175－1
	2	W13	WB－14	3	左脚部破片	(5.1)	3.6	3.3	2	2
	3	W8	WB－2	?	脚部破片	(6.2)	(2.9)	2.6	3	3
	4	W17	WB－19	3	胴部破片	(5.1)	(4.0)	2.7	72－1	7
	5	W5	WB－1	?	一部欠損	(5.4)	(2.0)	1.2	2	5
	6	W13	WB－16	3	胴部破片	(3.8)	(3.1)	2.4	3	176－2
	7	E10	EB－1	2	左腕・頭部破片	(3.9)	(2.5)	1.5	4	175－4
	8	W14	WB－17	3	脚部破片	(3.5)	(4.5)	1.3	5	176－1
	9	E表採	EB－10	－	一部欠損	(3.6)	(3.7)	1.1	6	175－6
	10	W30	WB－32	1	脚部破片	(3.5)	(2.7)	1.5	7	176－3
	11	W11	WB－12	3	脚部？腕部？破片	(3.0)	(1.7)	1.7	8	4
	12	W25	WB－28	3	脚部？腕部？破片	(3.3)	(1.5)	1.2	9	5
	13	W29	WB－31	3	土偶破片	(5.7)	(3.1)	2.4	10	7
	14	W20	EB－7	2	土偶破片	(2.9)	(1.8)	1.1	11	6
土製円盤	1	E28	EB－8	2	完形	3.3	3.1	0.5	73－1	176－12
	2	W25	WB－29	3	完形	4.2	4.4	0.7	2	13
	3	W12	WB－13	3	完形	3.8	3.6	0.9	3	14
	4	E11	EB－6	2	完形	5.1	5.0	1.7	4	15
	5	W21	WB－25	3	完形	5.7	5.0	0.7	5	16
	6	W8	WB－3	?	完形	5.9	5.8	0.7	6	17
耳栓	1	W19	WB－21	3	完形	1.0	1.3	0.8	7	10
	2	W19	WB－22	3	完形	1.1	1.7	1.1	8	8
	3	W9	WB－4	?	完形	1.2	1.1	0.6	9	9
土製玉		W35	WB－33	3	完形	0.9	0.8	0.8	10	11



第70図　西地区における土製品分布図

には，左右対称のX状の透かし文様が施される。尻部に穿孔が見られ，性器か肛門の表現と思われる。脚部は縦方向のミガキによる調整が施され，ふくらはぎと足首は沈線により区画される。胎土は密，焼成は良好である。

2は左脚部である。ふくらはぎと足首が沈線により区画される。大体部から足首にかけて，縦方向のミガキの跡が見られるが，雑であるため表面に凹凸が残る。

3は，爪先中央部に爪の表現と思われる縦方向の刻みがある。大腿部には沈線による渦巻状の文様が見られる。磨滅が著しいが，渦巻部に縄文が施されているのが確認できる。

第72図には中実土偶を示している。2は本遺跡出土品で唯一頭部が残存するものである。頸部には刺突文が一周して施されている。また，乳房と思われる部分は欠損しているが，胸部中心から腹部にかけて刺突による生命線の表現が見られる。

4は頭部と左腕部を欠損しているが，比較的残りのよい小型土偶である。乳房が表され，胸部中央から下腹部にかけて平行する2本の沈線とその間に細かい刺突文が見られる。腰部には衣服を表すと思われる帯状の表現が見られ，縄文が施されている。腰部中央には臍と思われる突起が見られる。全体に赤色顔料が施されている。

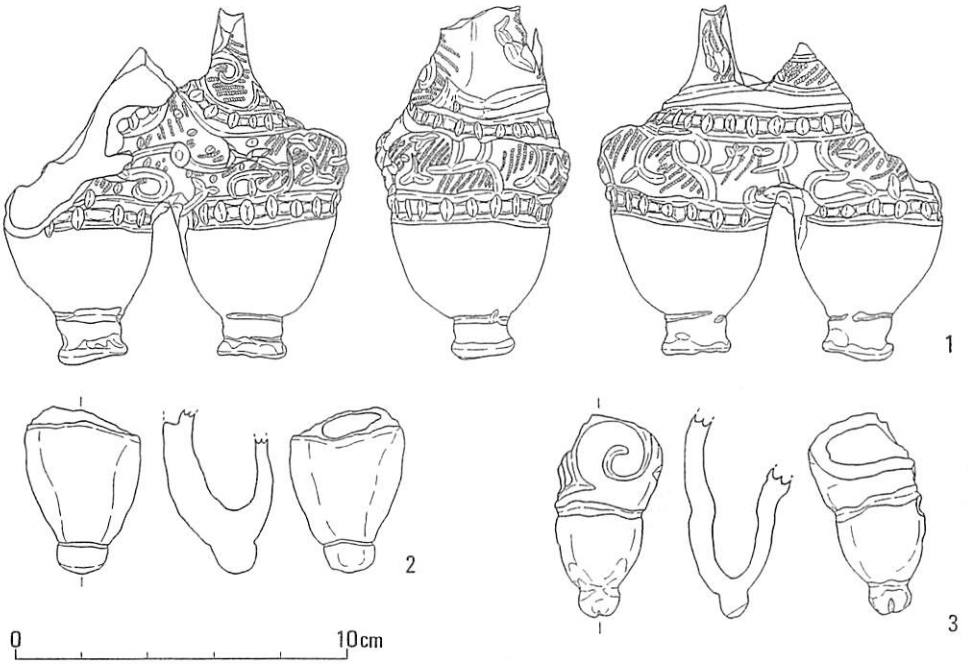
胴部を表したものは3点出土している。6は赤色塗料が塗布されている。胸部にX状の沈線が見られる。背面左肩部に3箇所刻みが施されるが，前面からは見えない。

1は胴部片である。沈線により胸部に渦巻き状文が描かれるが，これは乳房を表したものか。生命線が，隆帯を張り付けて表現される。

3は腰部である。斜行縄文LRを磨り消して，三叉文などの沈線文が描かれる。

9は腕部である。赤色塗料が施されている。沈線は見られない。

5は板状土偶の腰部から脚部である。押さえによる調整痕が残る。



第71図　土偶実測図・1

8は右脚部と思われる。胴部との接合部分にアスファルトが残る。7はいわゆる「大股開き」の土偶脚部であると考えられる。

10は頭部，11は胴部とも考えられるが欠損が著しく，部位不明とした。

第2節　土　製　円　盤(第73図，図版第176，第23表)

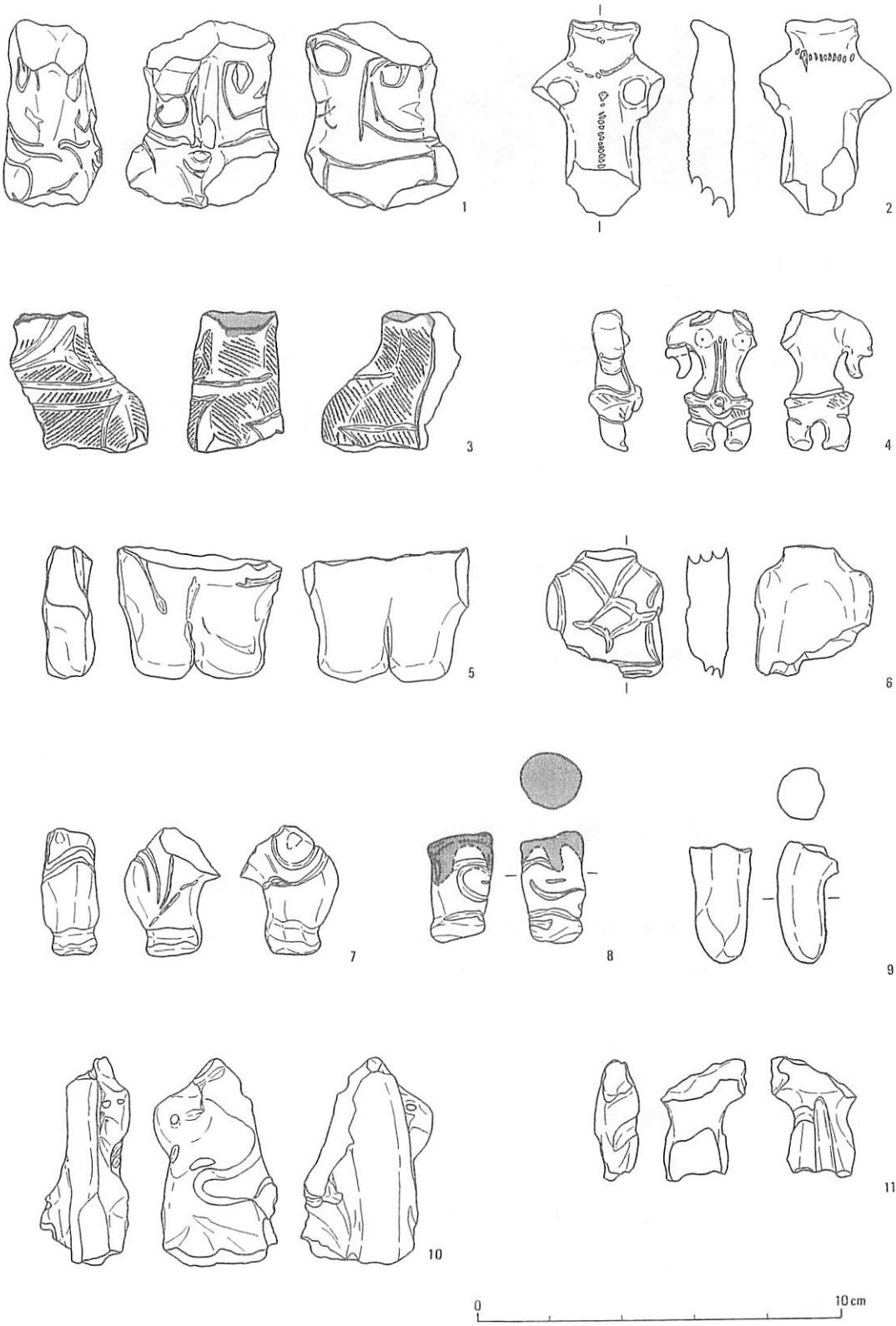
円盤状土製品は7点出土している。そのうち図示できたものは6点である(第73図)。これらは東・西地区から出土しており，特定箇所に集中して分布してはいない。

1～3，5，6は半精製鉢あるいは深鉢形土器の胴部片を打ち欠いて整形したものであり，いずれも片面に縄文がある。厚さはほぼ同じで，1が0.5cm，3が0.9cm，その他は0.7cmであった。また1～3がほぼ円形なやや小型なものでその直径も1は3.3cm，2は4.2cm，3が3.8cmであるのに対し，5は楕円形で長径が5.7cmである。また6は不定形で長径は5.9cmであった。

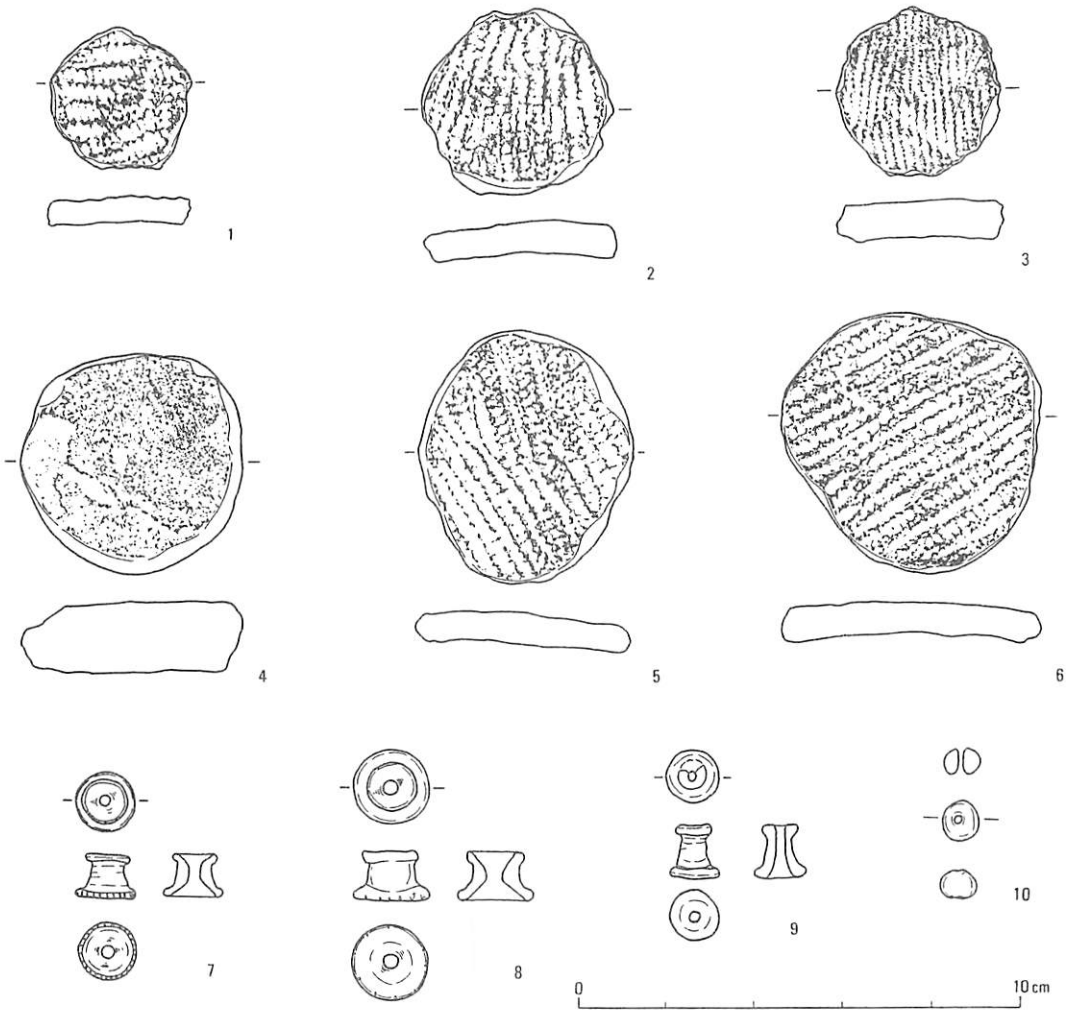
4は底部を利用している。円形に整形され，直径は5.1cm，厚さは1.7cmを測る。

第3節　装　　身　　具(第73図，図版第176，第23表)

耳栓3点，土製玉1点が出土している。耳栓は3点ともほぼ完形で，いわゆる臼型と呼ばれるものである。赤色塗料が塗布されている。うち2点は一面にのみ外周に沿って刻みが施されている。



第72図　土偶実測図・2



第73図　土製円盤・装身具実測図

土製玉は長軸9㎜，短軸8㎜，中央に直径1㎜の貫通孔が施されている。底部はやや偏平になっている。胎土は密，焼成は軟である。

第7章　出土遺物・4　石製品

石製品は53点出土した。その内容は，岩偶12点，岩板28点，玉類6点，球状石製品2点，双孔石製品1点，円盤状石製品6点である。大多数は西地区より出土している。しかし東地区においても，岩版3点とかつて大岩偶の破片2点が出土しており，攪乱の原因である諸般の事情によって失われたものと考えられる。

第1節　岩　　偶(第24表，第5・74～77図，図版第2・3・11・12・177・178)

西地区より10点出土した。また東地区よりは上記のように，調査の契機となった2点が採集されており，これを含めると合計12点となる。いずれも破片で，完形品はない。石質は，すべて白色凝灰岩である。

1)第1例・東地区(第5図1，図版2)

胸部の大破片で，右腕はやや残ってるのに対し，左腕を欠く。残存高さ14.3cm，同幅25.2cm，厚さ6.6cm，推定される高さは49cmで，最大の大きさである。胴は欠損しているが，腹部の高まりを示す三角形の頂点がわずかに残存している。胸部の厚さは直径約6cmある両乳房の中間点で測り3.0cm，残存する乳房の高さは6.6cmで，西地区1例から推定すると5.5cmの高さとなり，その大きさに驚かされる。乳房の基部を含めて腹背全体にS字状渦巻文が沈刻されている。また両乳房の下部に，きわめて薄く丹塗りの痕跡がみられる。

2)第2例・東地区(第5図2，図版3上)

右脚部の大破片で，残存高17.2cm，同幅9.2cm，同厚さ5.8cm，推定される高さは44cmであり，上記第1例と同一個体であった可能性が高い。正面の腰部に若干の沈線文が残存する程度であるが，背面には土偶と共通する四隅の尖った長方形の区画の半分がみられ，多数の沈線で充塡されている。全体にわたり，ところどころにきわめて薄く丹塗りの痕跡がみられる。

3)第3例・西地区(第75図1，図版11・177－1)

W17区において，上を向いて出土した胸・腕部破片で，右腕は二つに割れ，右腕部に接して検出されている。腹部の欠損部位は東地区第1例と同じである。発掘による出土状態の明確に記された岩偶のはじめての例である。残存高7.6cm，同幅12.8cm，同高さ4.0cm，推定される高さは44cmである。胸部の厚さは両乳房の中間点で2.0cmであるから，乳房の高さは1.9cmとなり，きわめて突出している。正面には三叉文を伴う類X字状渦巻文，背面にはそれに加えて連続S字状文が沈刻されている。丹塗りの痕跡はみられない。

4)第4例・西地区(第75図2，図版12上・177－2)

W60区において，下を向いて出土した左腕部破片で，切断の痕跡が明瞭であるため，出土状態が明確に記録されていることは，切断痕の信憑性に関わるきわめて重要なことである。残存高7.1cm，同幅8.8

第24表　石製品一覧表

（カッコ内は現存値を示す）

名称・番号	区	遺物番号	層位	遺存状態	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	挿図番号	図版番号
岩　偶　1	E	－	?	腕部大破片	(14.3)	(25.2)	(6.6)	5－1	2
2	E	－	?	右脚部破片	(17.2)	(9.2)	(5.8)	同　2	3上
3	W17	WD－17	3	胸・腕部破片	(7.6)	12.8	4.0	75－1	11・177－1
4	W60	WD－54	3	左腕部破片	(7.1)	(8.8)	(3.1)	同　2	12上・177－2
5	W16	WD－16	3	右腕部破片	(11.0)	(7.4)	(3.5)	76－1	178－1
6	W63	WD－58	3	右脚部破片	(10.2)	(5.8)	(2.7)	同　2	12下・178－2
7	W 5	WD－1	3	胸部破片	(2.9)	(4.9)	(1.8)	77－1	177－3
8	W 6	WD－2	3	腹・脚部破片	(4.3)	(4.9)	(1.3)	同　2	178－3
9	W58	WD－50	3	右腹・脚部破片	(4.8)	(5.2)	(1.7)	同　3	同　4
10	W34	WD－39	3	腹部破片	(5.1)	(9.2)	(1.7)	同　4	同　5
11	W11	WD－11	3	右脚部破片	(6.9)	(4.4)	(2.2)	同　5	177－5
12	W19	WD－18	2	右脚部破片	(2.3)	(1.9)	(1.1)	同　6	同　4
岩　版　1	E 5	ED－1	2	破片	(5.1)	(3.3)	0.9	78－1	179－3
2	E38	ED－2	2	完形・未成品	6.1	5.8	0.9	同　2	同　1
3	E34	ED－3	2	破片・未成品					
4	W21	WD－20	3	破片	(3.5)	(5.4)	0.8	同　3	同　4
5	W56	WD－44	3	破片	(5.1)	(5.1)	0.9	同　4	同　5
6	W58	WD－65	3	破片	(6.6)	(6.9)	3.0	同　5	同　2
7	W32	WD－36	?	破片	(3.6)	(2.8)	1.1	同　6	同　6
8	W66	WD－62	3	破片	(3.5)	(2.2)	0.9	同　7	同　7
9	W15	WD－15	3	破片	(4.5)	(7.5)	1.7	同　8	同　8
10	W62	WD－57	1	破片	(4.8)	(3.5)	(0.8)	同　9	同　9
11	W	WD－24	表採	破片	(2.8)	(5.2)	1.2	79－1	同　10
12	W 8	WD－4	3	破片	(2.8)	(4.1)	1.4	同　2	同　11
13	W25	WD－22	3	破片・未成品	(3.5)	(3.2)	1.0	同　3	180－1
14	W35	WD－41	3	破片・未成品	(3.0)	(3.6)	0.8	同　4	同　2
15	W57	WD－49	3	破片・未成品	(2.7)	(5.2)	1.2	同　5	同　3
16	W	WD－23	3	破片・未成品	(3.6)	(3.3)	1.0	同　6	同　4
17	W10	WD－3	3	破片・未成品	(5.9)	(3.4)	(1.0)	同　7	同　5
18	W28	WD－34	3	破片・未成品	(4.7)	4.3	0.8	同　8	同　6
19	W24	WD－21	3	破片・未成品	(6.1)	(6.5)	1.0	同　9	同　7
20	W27	WD－32	3	破片・未成品	(7.1)	6.2	1.1	同　10	同　8
21	W64	WD－59	3	破片					
22	W 8	WD－5	3	破片・未成品					
23	W27	WD－31	3	破片・未成品					
24	W32	WD－37	3	破片・未成品					
25	W56	WD－47	3	破片・未成品					
26	W58	WD－51	3	破片・未成品					
27	W65	WD－60	3	破片・未成品					
28	W65	WD－61	3	破片・未成品					
勾　玉	W56	WD－46	土壙内	完形	2.5	1.6	0.4	80－9	180－9
小　玉　1	W61	WD－55	3	完形	0.6	0.6	0.4	同　4	同　10
2	W61	WD－56	3	半欠	1.0	(0.6)	0.7	同　5	同　11
3	W12	WD－12	3	完形	1.4	1.4	1.1	同　1	同　12
4	W13	WD－14	3	完形	1.3	1.4	1.1	同　3	同　14
5	W13	WD－13	3	完形	1.4	1.4	0.8	同　2	同　13

名称・番号	区	遺物番号	層位	遺存状態	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	挿図番号	図版番号
球状石製品 1	W28	WD－33	3	完形	1.4	1.4	1.2	80－6	180－15
2	W33	WD－38	3	完形	3.1	3.5	2.5	同 7	同 16
双孔石製品	W19	WD－19	3	完形	2.0	3.7	0.7	同 8	同 17
円盤状石製品 1	W30	WD－35	3	完形	4.2	3.8	0.5	同 10	同 18
2	W56	WD－42	3	破片	(5.1)	(3.8)	0.6	同 11	同 19
3	W56	WD－48	3	破片	(3.4)	(2.4)	0.4	同 12	同 20
4	W59	WD－45	3	破片	(5.0)	(2.5)	0.5	同 13	同 21
5	W56	WD－43	3	破片	(3.0)	(2.8)	0.4	同 14	同 22
6	W56	WD－53	3	未成品	5.1	4.4	1.2	同 15	同 23

cm，同厚さ3.0cm。切断痕は全面に及び，腕の先も失われているばかりではなく，乳房も掻きとられている。厚さ3.0cmから胸部の厚さ2.3cmを引くと0.7cmにすぎず，西地区第1例では胸の厚さと乳房の高さがほぼ同じであることと比べれば，掻きとりの顕著さが一段と明確に理解することができる。正面に三叉文を伴うS字状渦巻文，背面に連続S字状文が沈刻されている点は，西地区第1例にきわめて類似している。丹塗りの痕跡はみられない。

5)第5例・西地区(第76図1，図版178－1)

右腕部破片で，残存高11.0cm，同幅7.4cm，同厚さ3.5cm，推定される高さは44cmである。全体に渦巻文が沈刻され，正面の沈線の中には一部にかすかな丹塗りの痕跡はみられる。

6)第6例・西地区(第76図2，図版12下・178－2)

右腕部破片で，残存高10.2cm，同幅5.8cm，同厚さ2.7cm，推定される高さは44cmである。全体に渦巻文と入組文が沈刻され，背面には四隅の尖った長方形の区画文がみられる。丹塗りの痕跡はみられない。

7)第7例・西地区(第77図1，図版177－3)

小型の胸部破片で，無文である。残存高2.9cm，推定高44cmである。丹塗りの痕跡はみられない。

8)第8例・西地区(第77図2，図版178－3)

小型の腹部と両脚の破片で，無文である。残存高4.3cm，推定高44cmである。丹塗りの痕跡はみられない。

9)第9例・西地区(第77図3，図版178－4)

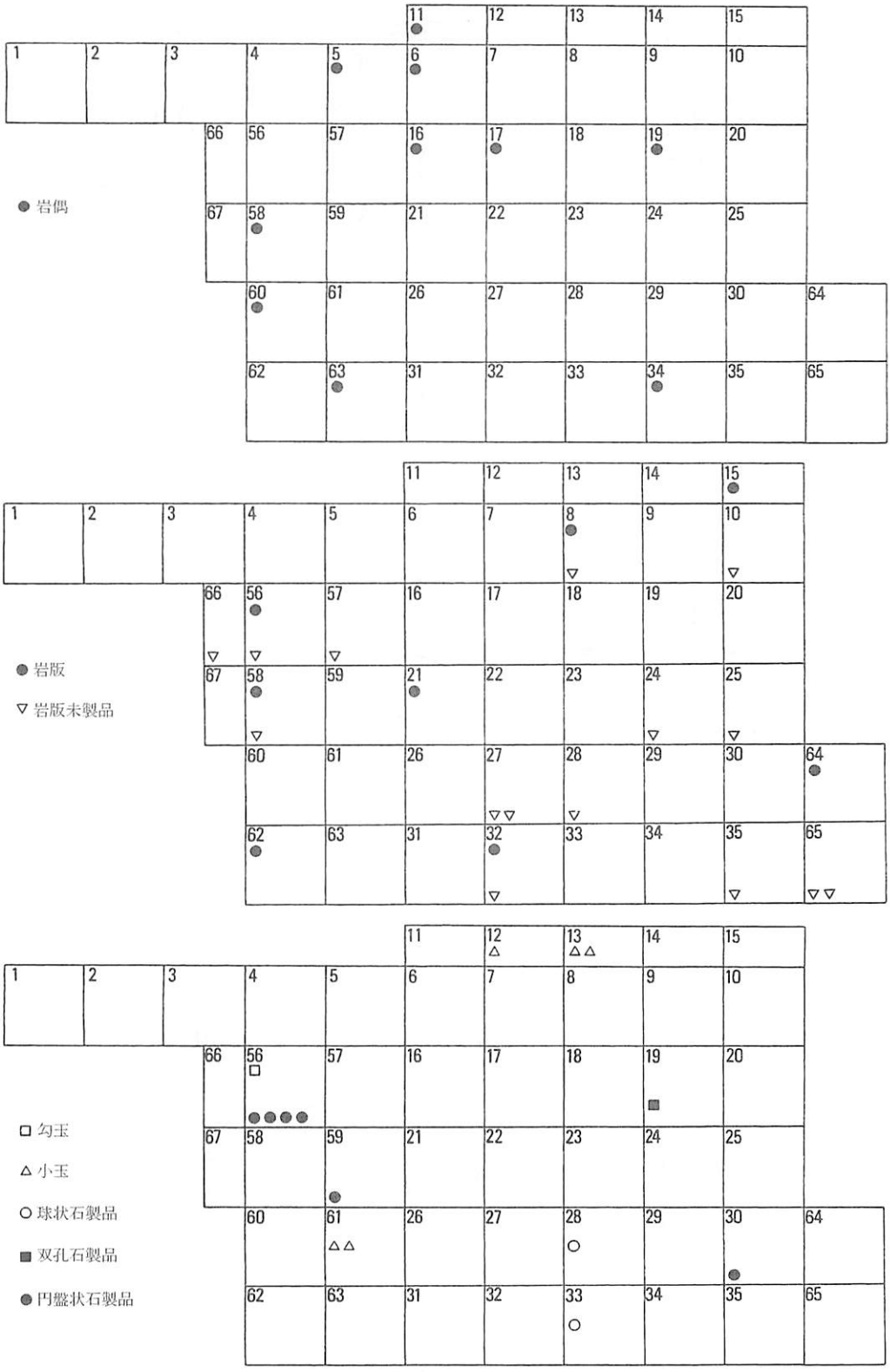
右腹部から脚部にかけての破片で，背面は欠失している。右腹部から下部にかけての，斜位の沈線がみられる。丹塗りの痕跡はみられない。

10)第10例・西地区(第77図4，図版178－5)

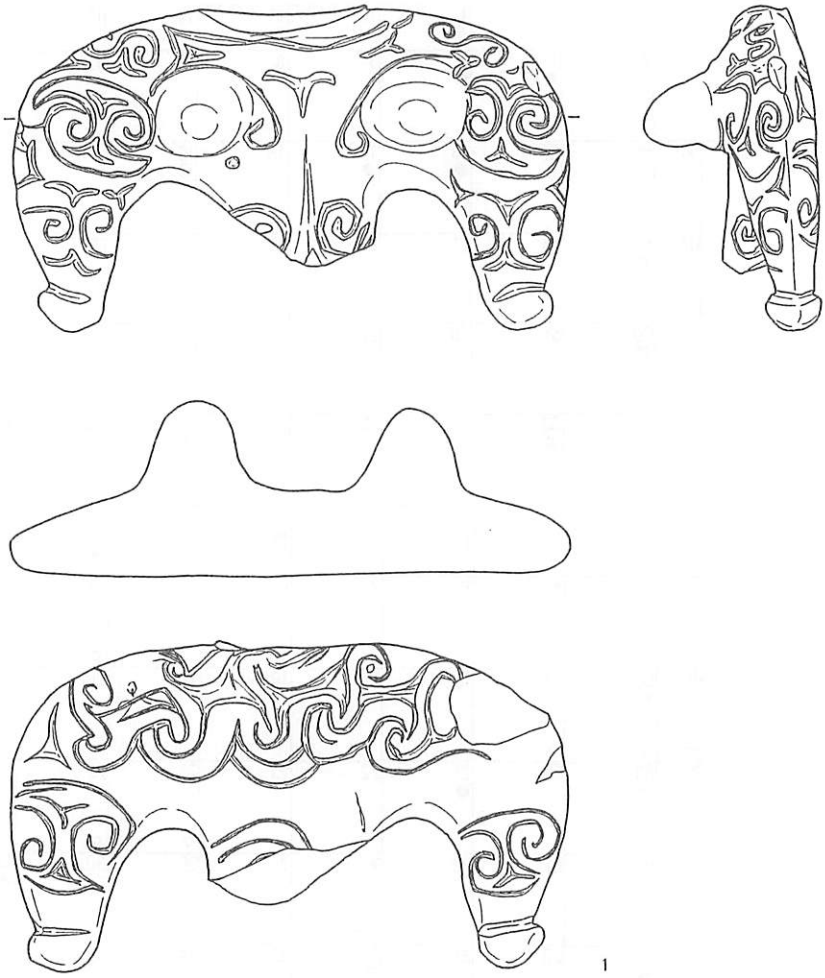
腹部破片であるが，腹部の膨らみと背面は欠失していて，文様も不明である。

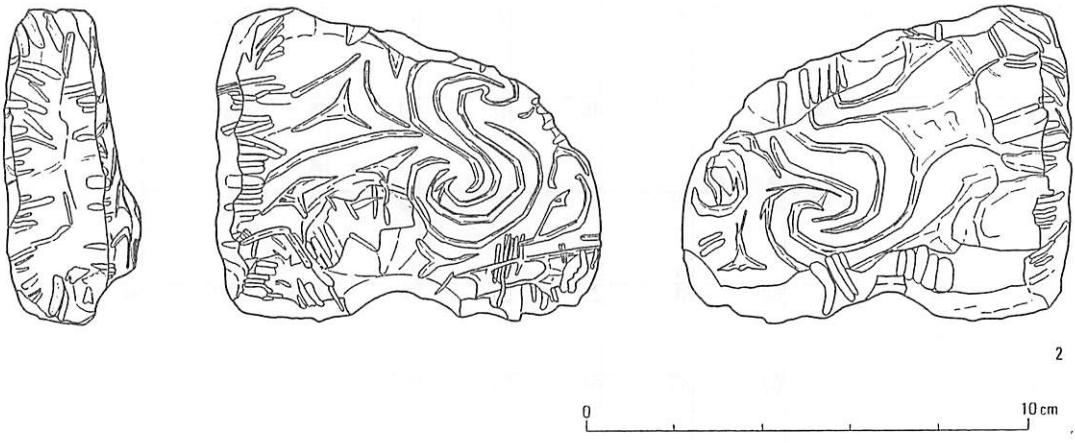
11)第11例・西地区(第77図5，図版177－5)

右脚部破片で，残存高6.9cm，推定高44cmである。全体に双頭渦文と渦巻文が沈刻され，背面には四隅の尖った長方形の区画文がみられる。丹塗りの痕跡はみられない。

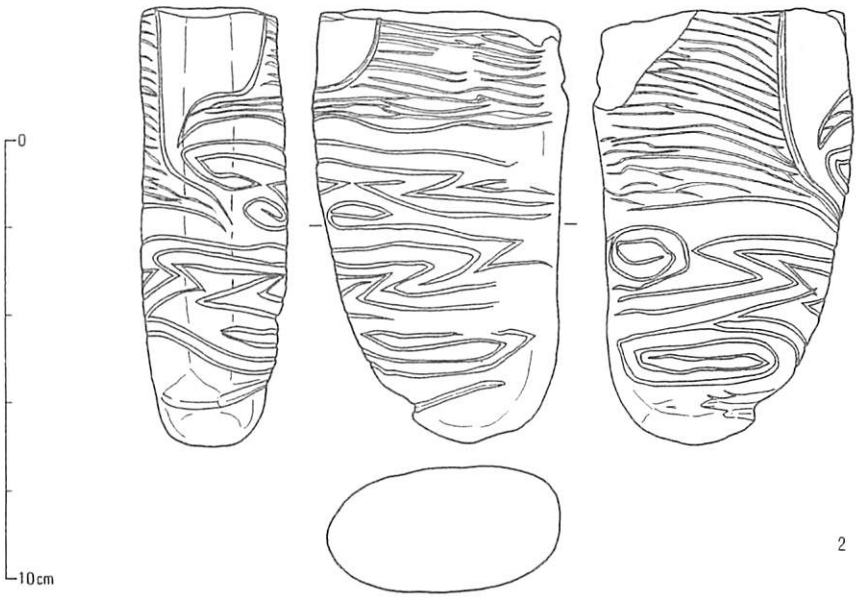


第74図　西地区における石製品分布図

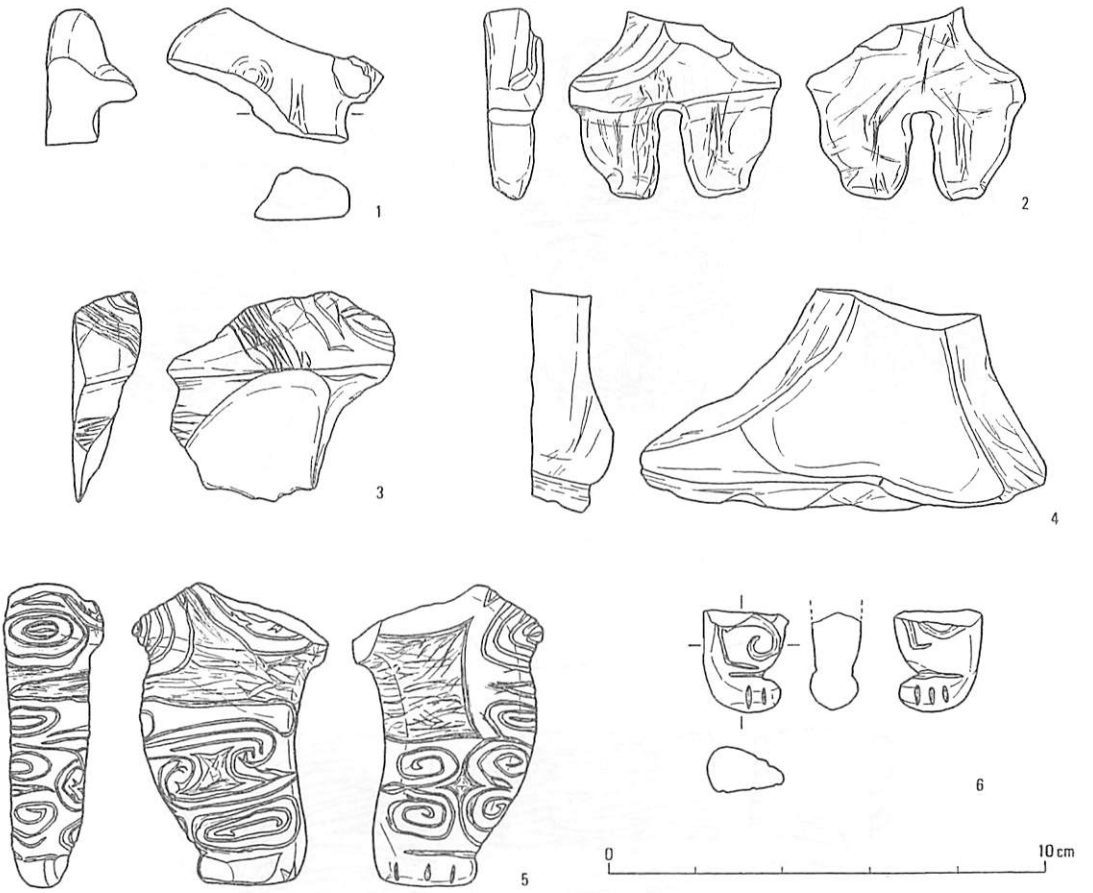




第75図　岩偶実測図・１



第76図　岩偶実測図・2



第77図　岩偶実測図・３

12)第12例・西地区(第77図６，図版177－４)

小型の右脚部破片で，渦巻文がみられる。丹塗りの痕跡はみられない。

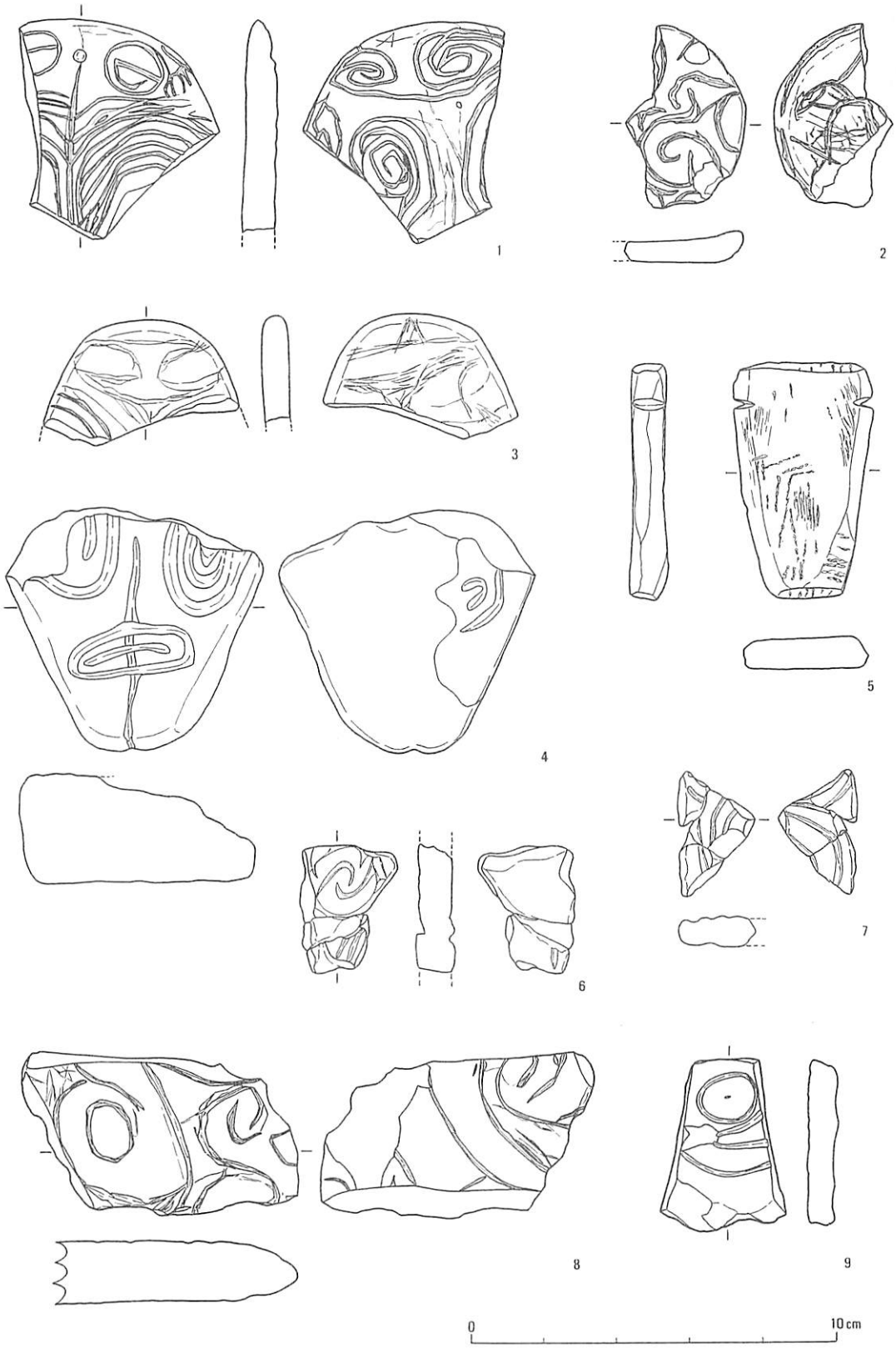
第２節　岩　　版(第24表，第78・79図，図版第179・180)

28点出土した。東地区より３点，西地区より25点である。石質は，岩偶と同様にすべて白色凝灰岩である。

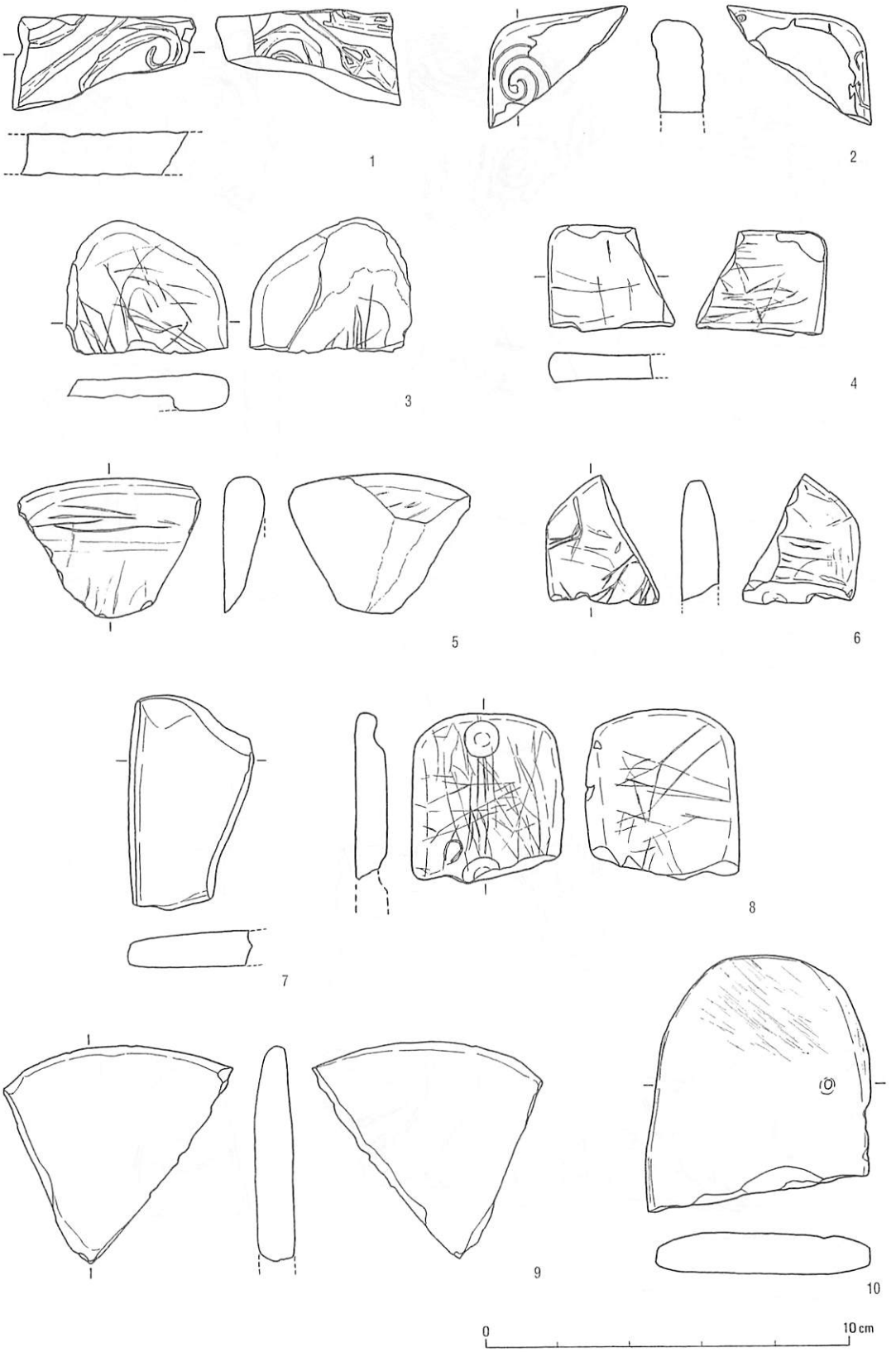
これらを形態と文様によって，完成品・未成品，完形・破片とに分類すると，完成品の完形はみられないので，次の３類に分類される。

A類：完成品の破片，11点。

これらには，目と正中線および双頭渦文のみられる第78図１(図版179－３)，目のみられる同３(同４)，正中線と渦巻文および腹部を示す楕円文のみられる同４(同５)，渦巻文部分のみられる同２・６～９(同179－１・６～９)，第79図１・２(同10・11)などがある。



第78図　岩版実測図



第79図　岩版・石製品実測図

B類：未完成の完形品，1点。

下部がやや細くなり，上部には腕部を区画するように両側面から切り込みがみられる。形態状は完成し研磨されているが，文様はまったく施文されていない(第78図5，同5)。

C類：未完成の破片，16点。

これらには，研磨の顕著な第79図10(図版180－8)や不完全な同3～6・9例(同1～4・7)，および不完全な正中線とその両端に円形の凹みのみられる同8(同6)などがある。

第3節　玉　　類(第24表，第80図，図版第180)

西地区より6点出土した。勾玉1点と2種類の小玉である。

勾玉：コの字の中央部も突出していることに特徴がある。高さ2.5cm，幅1.60cm，厚さ0.4cmで小型である(第80図9，図版180－9)。W46区を中心とする土壙内より出土。石質は白色凝灰岩である。

小玉：直径1cm以下の2点(同4・5，同10・11)と，直径1.3～1.4cmの3点(同1～3，同12～14)とがみられる。サイズ以外にも，前者は西地区北部のW56・56区，後者は同西部のW12～14区に集中していて注目される。石質は，前者は緑色凝灰岩，後者は白色凝灰岩である。

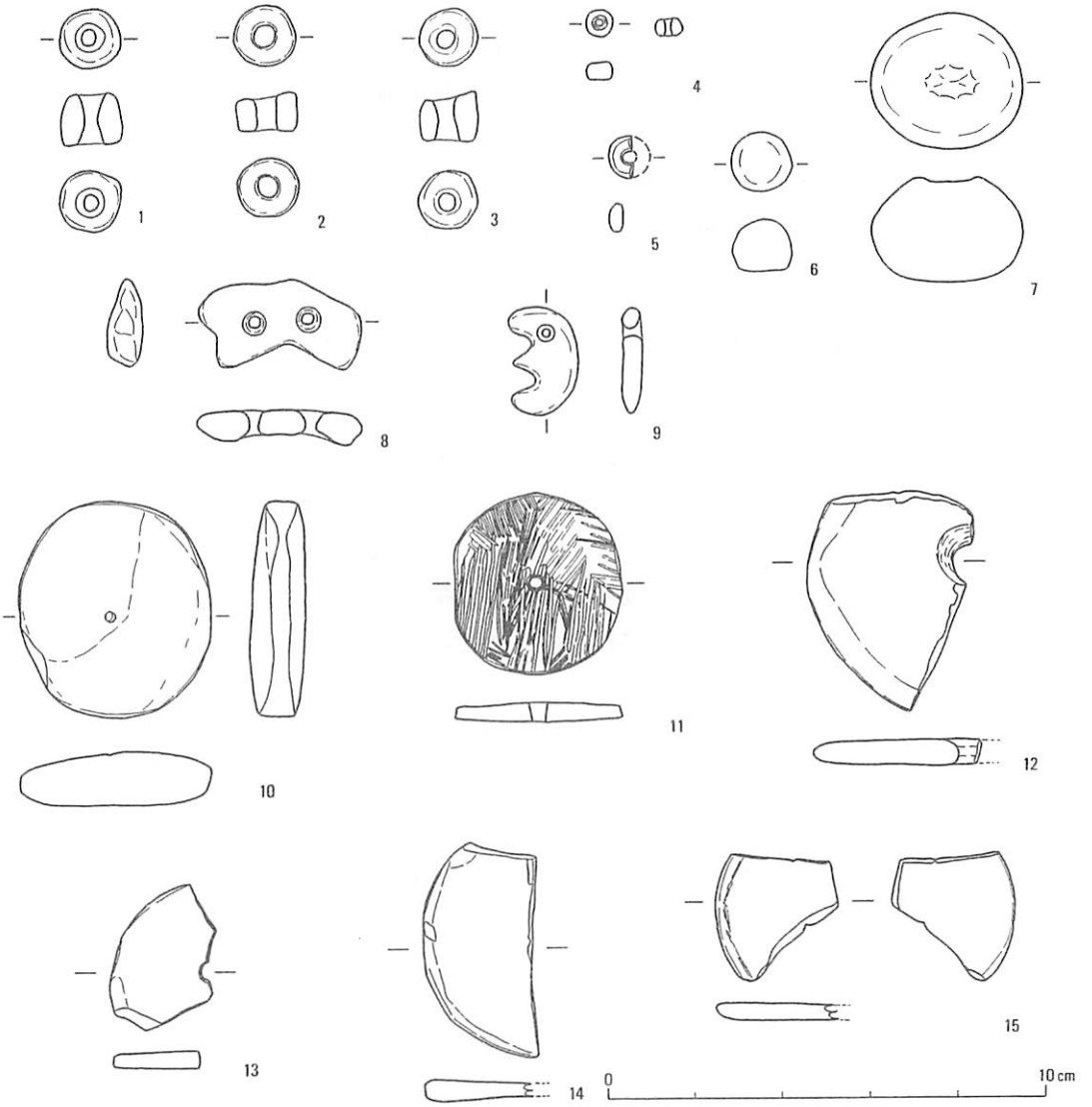
第4節　そ　の　他(第24表，第80図，図版第180)

用途不明の石製品を一括した。

球状石製品：西地区より2点出土した。直径1.4cmの小型品と3.5cmの大型品とがあり，後者の上部には凹みがみられる。石質はともに白色凝灰岩である(第80図6・7，図版180－15・16)。

双孔石製品：西地区より1点出土した。幅(長さ)3.7cmで，長軸にそって裏面がやや湾曲し，2個の孔があけられている。石質は流紋岩である(同8，同17)。髪を束ねて紐で結ぶ時につかわれるものかもしれない。

円盤状石製品：西地区より6点出土した。中央に穿孔された直径4.2cmの完成品1点(同11，同19)，その破片2点(同12・13，同20・21)，孔の有無不明の破片2点(同14・15，同22・23)，および未完成品1点(同10，同18)で，石質はすべて白色凝灰岩である。



第80図　その他石製品実測図

第8章　出土遺物・5　自然遺物

第1節　植　物　遺　体(第25表，図版181)

検出された植物遺体は，次の3種である。

1．くるみ科オニグルミ　Juglans mandshurica subsp. Sieboldiana Maxim.

2．ぶな科クリ　Castanea crenata Sieb. et Zucc.

3．とちのき科トチノキ　Aesclus trubinata Blume.

いずれも野生の堅果類であり，縄文時代の重要な食料資源であった。ただし同様に重要ないわゆるドングリ類は，検出されていない。また次章に報告されているソバ花粉に対応する種子，あるいは種皮は検出されていない。

すべて西地区の出土で，区・層位と数量は第25表に示すとおりである。その数量は少ない。

第25表　植物遺体数量表

区	層位	遺物番号 ＼ 種名・部位	オニグルミ	クリ	トチ		図版番号
			核	子葉	子葉	種皮	
W28	3	W28－F1		1.05			181－6
W28	3	W29－F4	1.98		0.30	0.81	同1・8
W28	3	W29－F6	1.73	0.04		8.39	同2・7・9
W28	3	W30－F1	0.23			0.63	同3
W28	3	W59－F2	0.39				同4
W28	3	W64－F2	0.99				同5
		計	5.42	1.09	0.30	9.83	

次にそれらの食料資源としての意義について略述する。

a．オニグルミ(図版181－1～5)

オニグルミは川沿いや適湿の地に群生する落葉高木で，東北日本の落葉樹林帯の代表的な樹木である。その核内の種子は脂肪に富み美味であり，9～10月に熟す。材も有用である。核の破片が検出されている。

b．クリ(同6・7)

山野に普通にある落葉高木で，東北日本の落葉樹林帯の代表的な樹木である。その種子は甘く美味であり，9～10月に熟す。材も有用である。

種子1点とその破片1点が検出されている。そのサイズは，高さ・幅・厚さがそれぞれ2.07，2.14，1.10cmで，重量は1.11gである。

c．トチ(同8・9)

トチは北海道西南部から九州にかけて分布する落葉高木で，東北日本の落葉樹林帯の代表的な樹木である。その種子は9月に熟す。材も有用である。

子葉と種皮が検出されている。その実にはサポニンやアロインなどの非水溶性のアクが含まれていて，アルカリ(灰)で中和してアク抜きをしないと，食用はできない。

このアク抜きの技術は縄文時代中期初頭に東北地方北部で習得され，中期後半には中部地方にも伝わり，後期になると西日本へも伝播することが近年明確になってきているが，本遺跡資料はそのことをさらに一段と補強する重要な資料とみなされる。

第2節　花　粉　分　析(第81～84図，第26・27表，写真1～3)

那　須　孝　悌(大阪市立自然史博物館，現・同学芸課長)
飯　田　祥　子(京都大学理学部地質学鉱物学教室)

本稿は，第2・3次概報(1975)に寄せられた報告を原著者の御了解を得てそのまま再録させて頂いたことを明記する。(編者)

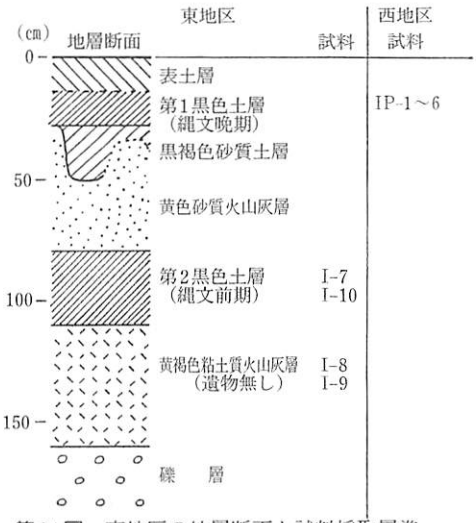
1．試　　料

この研究で取り扱った試料は，青森県三戸郡田子町石亀において，平安博物館が行った縄文時代晩期遺跡の発掘に際して得られたものである。試料は2回にわたって採取されたが，筆者らは発掘および現地での試料採取には直接参加することができなかった。

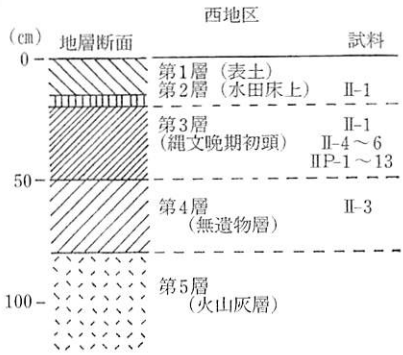
第1回目(1971年4月)に得られた試料は合計10個であった(第81図)。そのうち東地区の黄褐色粘土質火山灰層にはほとんど花粉が含まれておらず，第2黒色土層および土器(縄文晩期)中の試料には花粉が非常に少なかった(第26表)。そのため西地区で行われた第2回目の試料採取

第26表　第1回採取試料の花粉構成

Pollen taxa ＼ Sample No.	1P－4	1P－6	1－7	1－10
Pinus	＋＋＋	＋＋	＋＋	＋＋
Cryptomeria	＋	＋	＋＋	＋＋
Cupressaceae-Taxaceae	＋＋		＋	＋
Alnus			＋	＋
Lepidobalanus			＋	
Ulmus-Zelkova	＋	＋		＋
Cichorioideae	＋			
Artemisia	＋		＋	
Other Carduoideae	＋		＋＋	＋
Umbelliferae	＋			
Fagopyrum	＋＋			
Chenopodium	＋	＋		
Caryophyllaceae	＋			
Thalictrum	＋			
Adenophora	＋			
Gramineae	＋＋＋	＋＋＋	＋＋	＋＋



第81図　東地区の地層断面と試料採取層準



第82図　西地区の地層断面と試料採取層準

のときには(1971年9月)，軽石や火山砂などの粗粒砕屑物や火山灰の少ない層準を選んで，35cm×18cm×10cmの試料約7kgをブロック状に採取した(第82図)。

2．処　理　方　法

土器中に充填された試料は，ビニールをかぶせて土器ごと持ち帰られたものを，口部付近の土を除去してのち，contaminationを起こさないように取り出した。また，ブロック状のまま持ち帰られた試料は，contamination防止のため表面付近を除去したのち，試料約2kgを21ポリビーカーにとり，分析に供した。処理は10％KOH(室温；48時間)→水洗10回(同時に粗粒物除去)→混酸処理(HCl：HNO_3：H_2O　等量根液；湯煎3分)→水洗10％KOH処理(湯煮5分)→水洗→蒸発皿処理→重液分離($ZnCl_2$；800～1000rpm；90分)→水洗→ＨＦ処理(室温；48時間)→水洗→アセトリシス処理(湯煎1分)→水洗の順に行なった。分離された花粉はグリセリンゼリーで封入したのち，カバーグラスの周囲をネイルエナメルでシールして，各試料10枚前後のプレパラートを作成した。

なお，第1回目に採取された試料では混酸処理を行なわなかったが，フミン酸含有量が多く，また，正体不明の褐色柱状物質(この物質は混酸処理によってわずかに少なくなる)が多かったため，第2回目に採取された試料については上記のように混酸処理を行なった。

検鏡は400倍および1000倍で，また，粒径等の計測は測微接眼レンズを用いて1000倍で行なった。

3．結　　果

花粉構成は花粉総数もとずく各タクサの百分率によって表わし，第83図に示した。また，産出のまれなタクサについては別に表示した(第27表)。

第Ⅱ層：*Pinus*およびGramineaeが優先し*Cryptomeria*と*Lepidobalanus*を伴う。*Pinus*は*Haploxylon*も含まれているが，ほとんどは*Diploxylon*である。

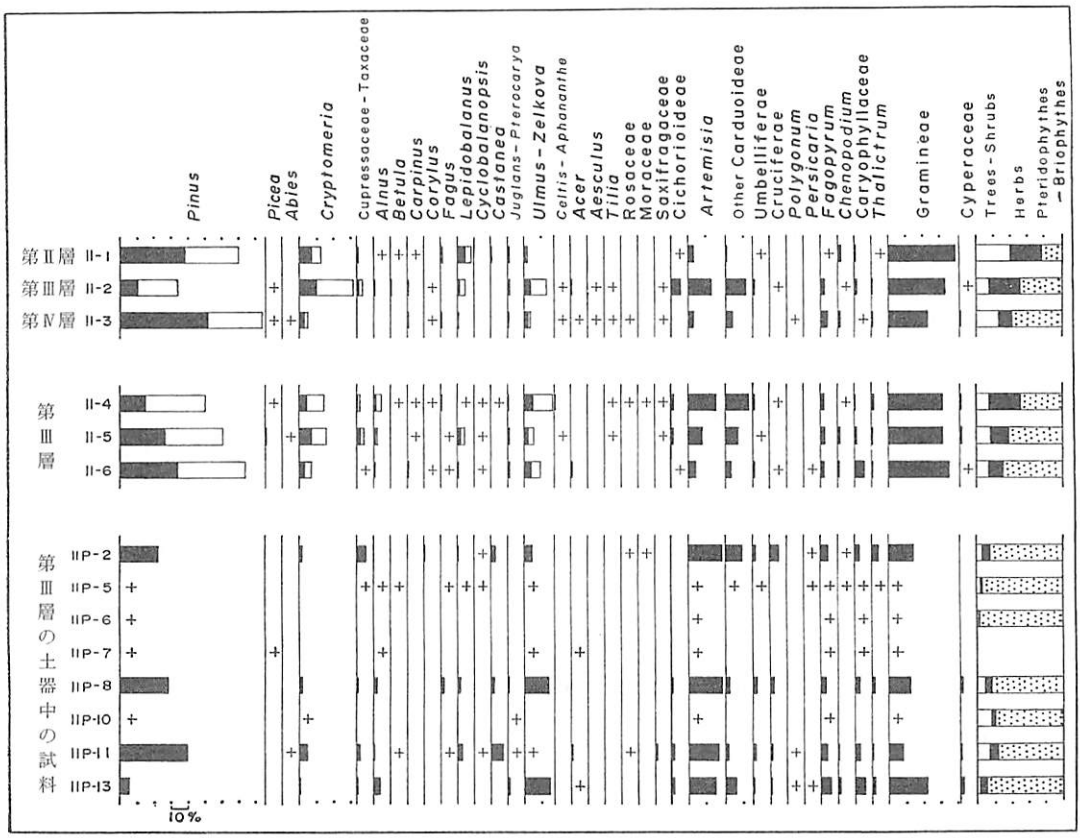
第Ⅲ層：上位の第Ⅱ層と同様に*Diploxylon*とGramineaeが優先するが，この層においては，木本類では*Cryptomeria*と*Ulmus－Zelkova*を，また，草本類では*Artemisia*を含むCarduoideaeおよびCichorioideaeを多く伴う。

この層に包含される土器中に充填された試料では胞子がとりわけ多い。上述した地層中の花粉構成に比べてGramineaeとCichorioideaeが少なく，また，*Cryptomeria*と*Artemisia*以外のCarduoideaeもやや少ない。それに対して，*Ulumus－Zelkova*，*Castanea*，*Artemisia*は多い。

第Ⅳ層：*Diploxylon*およびGramineaeが優先するが，Gramineaeは

第27表　産出のまれな花粉

Pollen taxa ＼ Sample No	Ⅱ－2	Ⅱ－3	Ⅱ－4	ⅡP－2	ⅡP－5	ⅡP－8	ⅡP－11
Ilex	0.4						
Viburnum		0.3					
Lonicera					+	0.7	
Ericaceae		0.3					
Oleaceae					+		0.6
Ranunculus				0.5			
Leguminosae			0.6				
Geranium			0.2				0.3
Liliaceae	0.1						
Sparganium		0.3					



第83図　花粉ダイアグラム（黒ヌリは木本および草本花粉総数にもとづく百分率，白ヌキは木本花粉総数にもとづく百分率）

上位の層準に比べて低率になっている。*Artemisia*などのCompositaeや*Cryptomeria*，*Lepidobalanus*も同様に低率になる。

なお，軽石などの火山砕屑物を多量に含む第Ⅲ層および第Ⅳ層の花粉含有量は，第Ⅱ層に比べて非常に少ない。

西地区の第Ⅲ層から出土した小形深鉢形土器（花粉分析試料№ⅡP－7）からは*Aesculus turbinata* BLUME（トチノキ）の種皮片を産出したが，*Aesculus*の花粉は試料№Ⅱ－2およびⅡ－3に1粒ずつ確認されたのみであった。

4．古植生について

今回扱った試料のうち，縄文晩期初頭の遺物包含層（第Ⅲ層）およびその直下の地層（第Ⅳ層）の花粉構成から当時の古植生を推定する。

木本類の花粉がいずれの試料においてもきわめて低率であることから，当時の植生は森林密度の低いものであったと考えられる。まばらに存在する林は*Diploxylon*（たとえばアカマツ）や*Cryptomeria*，*Ulmus－Zelkova*，*Castanea*などによって構成され，林の間に続く草地にはGramineaeやCompositae，

Caryophyllaceaeなどが生育していた。これらの植物が生育していた土地は，土壌が乾燥しているやせ地であったようである。

現在の遺跡周辺の山地はミズナラ林およびコナラ－クリ林によっておおわれ，ミズナラ，コナラ，クリ，ケヤキ，クマシデ，イタヤカエデ，シナノキ，ハリギリ，アカマツ，等が生育している。また，スギなどの植林もみられる。

岩手県北部および青森県の低地湿原の堆積物を扱った山中三男氏の報告によると，*Pinus*，Gramineae，*Haloragis*などによって特徴づけられる*Pinus* stage(現在を含む時代)の直前は，*Pinus*の少ない*Fagus*－*Quercus*－*Cryptomeria* stageであったとのことである。(Yamanaka, 1971－a；－b)。

いっぽう，今回扱った縄文晩期初頭の地層(第Ⅲ層および第Ⅳ層)にみられる花粉構成はこれらいずれの植生または花粉構成とも一致しない。これらの地層に含まれる花粉のうち，*Diploxylon*，*Artemisia*およびGramineaeの花粉の総数が58から81％にも達することから考えると，第Ⅲ層および第Ⅳ層の堆積直前に本来の植生が破壊されたため，その後侵入した先駆植物による植生をあらわしているものと思われる。しかし，遺跡所在地のすぐ西側には1000ｍにおよぶ山々があるにもかかわらず*Fagus*や*Lepidobalanus*の花粉がきわめて低率であるため，この植生破壊が人為的に引き起こされたものとは思えない。第Ⅲ層および第Ⅳ層の資料には多量の火山砕屑物が含まれるため，この破壊の原因として火山活動が想起されるが，当地域における既知の火山灰層序(大池ほか，1966：東北地方第四期研究グループ，1969)との直接的な関係はわからない。いずれにせよ，上述の先駆植物による植生は，その後，第Ⅱ層(現在の水田床土)の花粉構成にみられるように*Lepidobalanus*が増加する方向へと進んだものと思われる。ただし，第Ⅱ層に示される*Pinus*－Gramineae－*Cryptomeria*－*Lepidobalanus*植生は，前述した自然営力による植生破壊とは異なった人為的植生破壊の影響下で成立したものであろう。

5．*Fagopyrum*(ソバ属)の花粉について

今回扱った試料のうち，西地区の第Ⅱ層から第Ⅳ層までのほとんどの試料および東地区の縄文晩期の土器中より採取した試料から，*Fagopyrum*の花粉を検出した。

第Ⅲ層およびその直下の第Ⅳ層では，各試料に1.8％から7.1％の割合で含まれている。第Ⅱ層ではむしろ少なく，0.2％にすぎない。

*Fagopyrum*と同定した花粉は，長球状の３溝孔粒で，極軸長は41.5μから71.5μである。花粉膜外層は厚く，intrabaculaの発達がいちじるしい。膜表面のbaculaは３ないし４個くらいずつかたまっているため，少しピントをずらせて観察すると網目状に見える。また，場合によってはbaculaの集合状態が不明瞭なものや，baculateというよりはむしろverrucate状に見えるものもある。

これらの特徴は比較のために用いた長野県上水内郡信濃町，大阪市，および鹿児島県薩摩郡田平で栽培されていたソバ(*F. esculentum* Moench)の現生花粉のそれと一致する。現生花粉標本では，溝の中の膜面上には極軸方向にやや伸長したverrucaが散在し，溝内の赤道部に溝の幅と等しい直径の発芽孔が存在するのが観察できるが，地層中から得た花粉粒は溝の部分で内側に陥入しているため観察しにくかった。

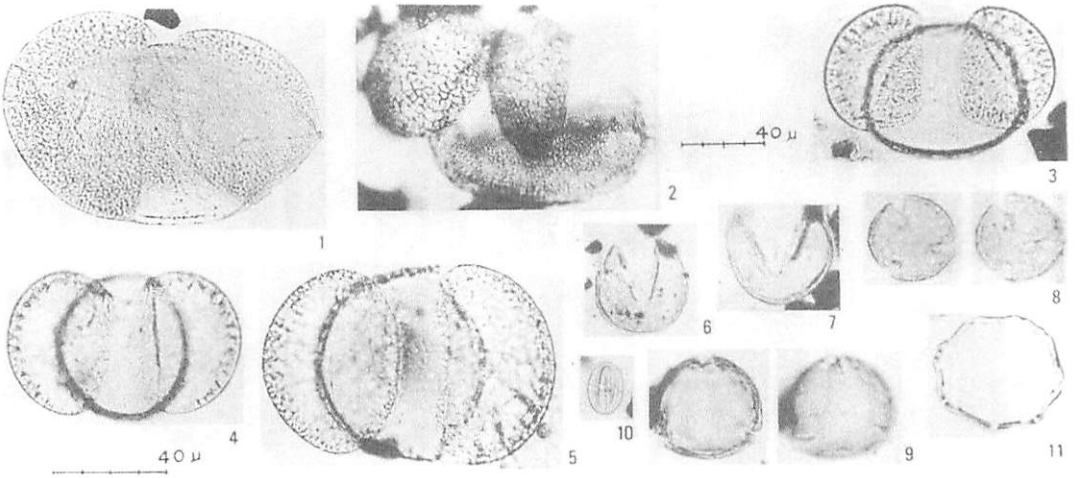


写真1　木本花粉の顕微鏡写真（1および2は上段のスケール，他は左下のスケール）

1．*Picea*(Sample №Ⅱ P－7)　2．*Abies*(Ⅱ－6)　3．*Diploxylon*(Ⅱ－3)　4．*Diploxylon*(Ⅱ－4)
5．*Haploxylon*(Ⅱ P－2)　6．*Cryptomeria*(Ⅱ－2)　7．*Cryptomeria*(Ⅱ P－8)
8．*Lepidobalanus*(Ⅱ－4)　9．*Fagus*(Ⅱ P－8)　10．*Castanea*(Ⅱ P－11)　11．*Pterocarya*(Ⅱ P－10)

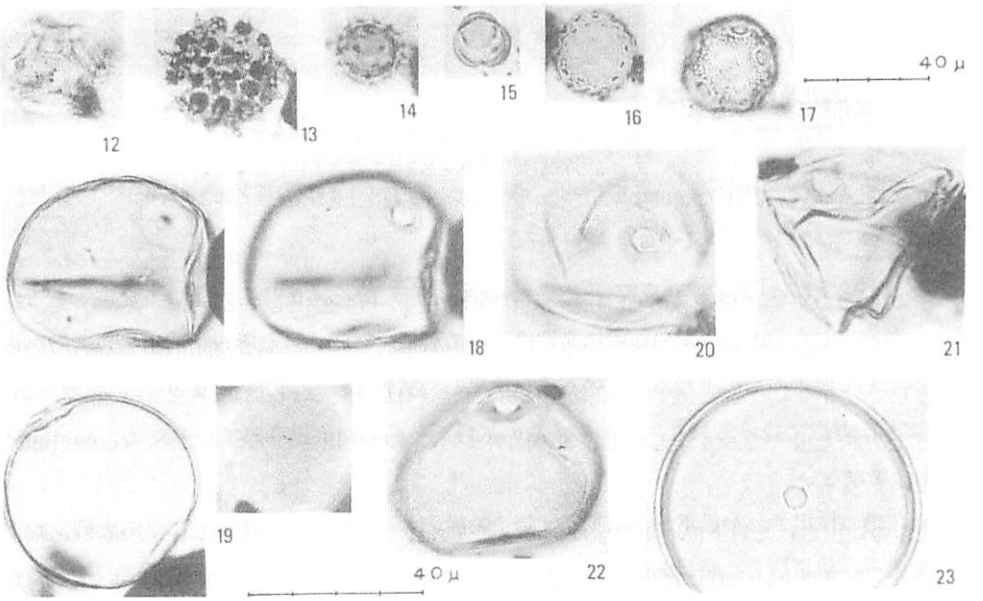


写真2　草木花粉の顕微鏡写真（12から17は右上のスケール，他は左下のスケール）

12．Cichorioideae(Ⅱ－2)　13．Carduoideae(Ⅱ－5)　14．Carduoideae(Ⅱ－2)
15．*Artemisia*(Ⅱ－2)　16．*Chenopodium*(Ⅱ－3)　17．Caryophyllaceae(Ⅱ－2)
18．Gramineae(Ⅱ－2)　19．Gramineae(Ⅱ－3)　20．Gramineae(Ⅱ－3)
21．Gramineae(Ⅱ－2)　22．Gramineae(Ⅱ－3)　23．*Oryza sativa* LINN.（現生：長野県北安曇郡池田町）

*Fagopyrum*の花粉は湿原や湖沼，水田の堆積物からの検出例がNAKAMURA(1970，1971)，中村(1972)，YAMANAKA(1971－a，－b)およびTSUKADA(1972)に記されており，それらの年代は^{14}C年代を手がかりとした堆積速度から求められている。また，古墳時代以後の遺跡から検出されたことが島倉(1974)に記

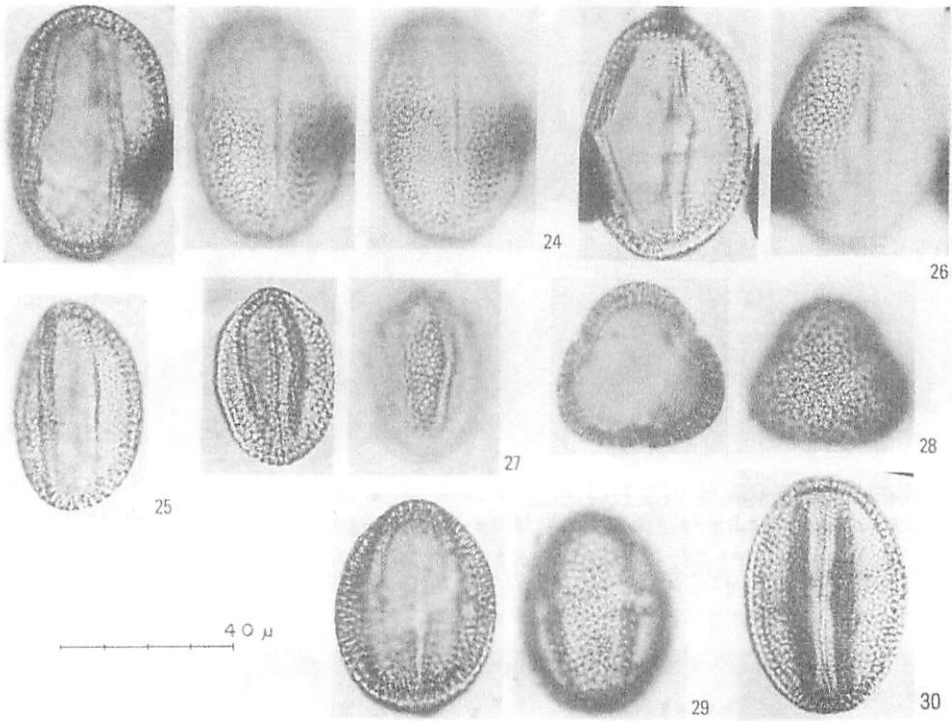


写真3　ソバ属花粉の顕微鏡写真

24. *Fagopyrum*(Ⅱ－3)　25. *Fagopyrum*(Ⅱ－3)　26. *Fagopyrum*(Ⅱ－2)
27. *Fagopyrum*(Ⅱ－3)　28. *F. esculentum*(現生：鹿児島県薩摩郡田平)
29. *F. esculentum*(現生：大阪市帝塚山)　30. *F. esculentum*(現生：長野県上水内郡信濃町)

されている。この論文には「岩手県花泉町(花泉層＝洪積世末期)？」からも産出したという記載もある。

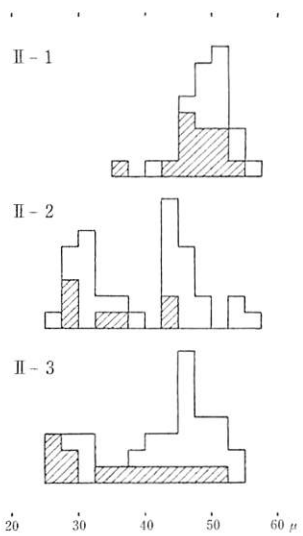
今回筆者らが検出した*Fagopyrum*の花粉は発掘によって層位の確認された考古学的遺物包含層から検出されたものとして最古のものとなる。この花粉を検出した試料は「1．試料」および「2．処理方法」の項で述べたような方法で扱っており，しかも多数の試料から高率に検出されているため，contamination によるものではない。

*Fagopyrum*花粉の検出された最下位の第Ⅳ層は無遺物層とされているが，発掘者によると縄文晩期初頭の土器片を含み，第Ⅲ層とは時代的にあまり差異のないものと思われるとのことである。このことは第Ⅲ層と第Ⅳ層との花粉構成や*Fagopyrum*花粉の検出率があまり違わないことと矛盾しない。従って，石亀遺跡における*Fagopyrum*の栽培は縄文晩期初頭にすでに始まっていたといえよう。

6．Gramineae(イネ科)の花粉について

当遺跡の土壌試料ではGramineae花粉の含有率が一般的に高く，木本および草本花粉全体のなかで占める割合は，第Ⅱ層では39.5%，第Ⅲ層では35.5%(平均32.2%)，第Ⅳ層では22.9%である。ただし第Ⅲ層に包含されていた土器中の試料ではあまり多くない。しかもそれらの中には粒径が45μを越えるものが多い。(第84図)

第Ⅲ層および第Ⅳ層では粒径30μ前後のグループと45μ前後のグループとに別れるが，45μ前後のものは一般的に花粉膜が薄く，しわくちゃになってつぶれている例が多い。花粉膜の厚さや表面模様，光学断面で見たmargoの構造・形態などからすると，イネ(*Oryza sativa* LINN.)の花粉と思われるものは存在しないようであるが，他の栽培イネ科植物のそれについてはよくわからない。ただし，第Ⅱ層のイネ科花粉の多くは*Oryza*の花粉ではないかと思われる。



第84図　イネ科花粉の粒径分布
(斜線部は完形の花粉粒，白ヌキ部分は変形した花粉粒)

文　献

NAKAMURA, J. (1970) Annual Rept. JIBP－CT(P), 165～171
－(1971) *ibid*, 90～95
中村　純　(1972)　高知大学学術研究報告，21巻，自然科学，11号，170～213
大池昭二・中川久夫・七崎　修・松山　力・米倉伸之(1966)第四期研究，5巻29～35
島倉巳三郎(1974)古代学研究，第72号，34
東北地方第四期研究グループ(1969)地団研専報，15(日本の第四系)，37～83
TSUKADA, M (1972) Conn. Acad. Art. Sci., vol. 44 339～365
YAMANAKA, M (1971－a) Ecological Review, vol. 17, 273～278
－(1971－b) Annual Rept. JIBP－CT(P), 96～99

第9章　考　　察

第1節　縄文晩期におけるソバ栽培の可能性

はじめに述べたように本遺跡の発掘調査には，縄文時代における農耕存否問題に寄与することに主要な目的が設定されていた。そして栽培植物の種子・農耕具などは検出できなかったが，サンプリングした土壌からソバの花粉が検出されたことは，那須孝悌氏等によって第2・3次調査概報に報告されたとおりである。(那須等1975，第8章第2節に再録)。

そしてこのことが契機となり，縄文時代のソバ花粉の検出例がみられるようになってきた。山田悟郎氏(1992)によれば，本遺跡の他に次の9遺跡より検出されている。

富山県氷見市十二町潟遺跡(縄文前期)
新潟県巻町大沢遺跡(縄文前期末～中期前葉)
北海道小樽市忍路土場遺跡(縄文後期)
北海道千歳市ママチ遺跡(縄文晩期)
北海道奥尻町東風泊遺跡(縄文晩期)
青森県木造町亀ヶ岡遺跡(縄文晩期)
岩手県北上市九年橋遺跡(縄文晩期)
福井県福井市浜島遺跡(縄文晩期)
福岡県福岡市板付遺跡(縄文晩期)

また，種子は，次の2遺跡より検出されている。

北海道南茅部町ハマナス野遺跡(縄文前期末)
埼玉県岩槻市真福寺遺跡(縄文晩期)

したがって本遺跡の発掘は，縄文農耕問題に一定の貢献を果たしたことになるが，ソバの栽培を認めるには多くの問題点がある。

その第1は，多量に結実する植物でありながら，種子の検出例があまりにも少ないことが指摘できる。ハマナスの遺跡例はわずかに1粒のみであり，真福寺遺跡については攪乱の可能性がある。

第2は，花粉が検出されながら種子が検出されていないことは，多量に結実する植物としては不自然な感じを否めない。第8章第1節に述べたように本遺跡でも水洗選別は実施しているし，クルミ・クリ・トチなどの殻や種皮などが検出されていながら，ソバはまったく検出されていない。他の多くの縄文遺跡についても同様な問題を指摘できる。旧平安博物館は水洗選別を諸研究機関に先がけて積極的に実施し，かつ普及させてきたことも付言しておきたい。

第3は，混入の可能性を否定しきれないことである。微細なものほど混入の可能性が高いのであり，もっと議論に慎重であるべきであろう。旱魃による地割れなどを考慮していないような議論は，農耕問題にとっては建設的ではない。

したがって本遺跡の場合は結論を保留し，隣接地に小規模な発掘を行い結論を出すことにしたい。本報告書の刊行を前提として，土地所有者はかねてより承諾の意を表しておられるので，ようやく再検討の機会が到来したということができる。

第2節　縄文晩期における岩偶の研究（第85～89図，図版第182～191，第28・29表，写真4）

1．分布，形態とサイズの検討

本遺跡の発掘調査には，縄文農耕問題への寄与という目的の他に，亀ヶ岡文化の総合的な理解を深めるための資料整備という重要な目的があった。その重要性は，近年縄文時代の農耕が狩猟・漁撈・植物質食料採集活動の一部に繰り入れられる程度のものだ，というところまで後退していることにみられるように，それだけでは亀ヶ岡文化さらに縄文文化を理解する上で，大きな役割を果たせないことからも明らかである。

そしてある程度明らかになってきた漁撈文化的要素よりも，工芸的・呪術的な要素に比重を置いて研究することにしたのであるが，その第1は，亀ヶ岡式土器の器形のセットを明らかにすることであり，その成果は第3章に述べられているとおりである。第2は，呪術的な要素を代表する遺物の研究であるが，そのために第2章において述べたように，江坂輝弥博士（慶応義塾大学名誉教授）のお勧めに従い，かつて巨大な岩偶の出土した本遺跡を発掘することに決したのである。

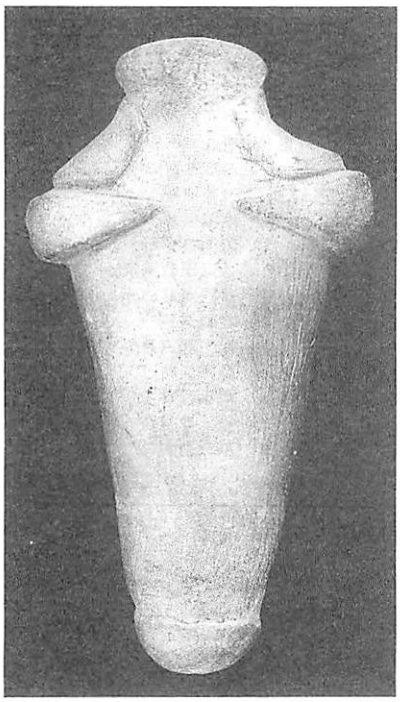


写真4　円筒土器に伴う岩偶（秋田県北秋田郡小坂町内岱遺跡，慶応義塾大学民族学考古学研究室蔵，高さ14.7cm）

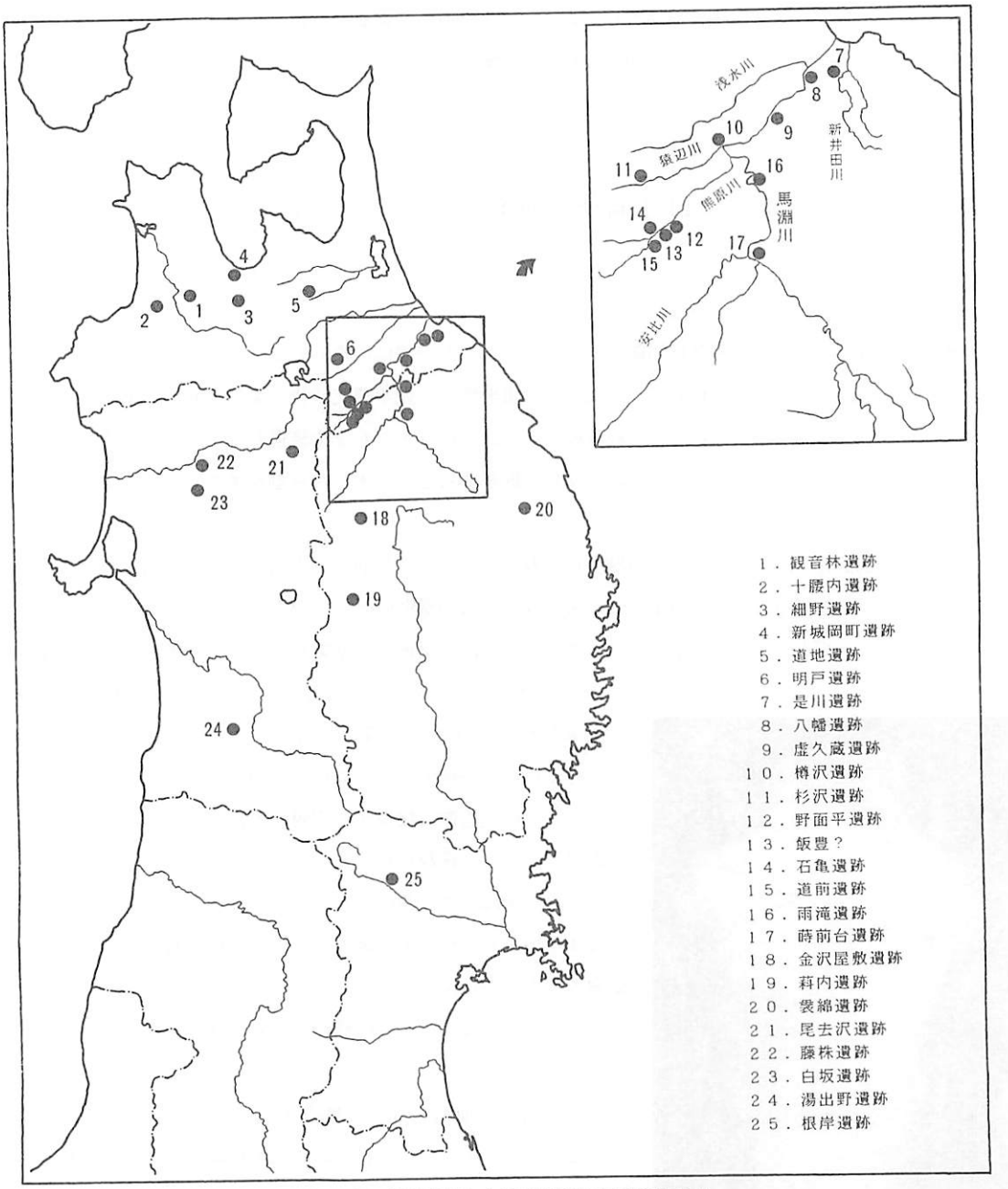
そしてその大岩偶に接続する資料こそ出土しなかったが10点の岩偶が出土し，総数12点となった。その数は突出しており，これに次ぐ南部町鱒沢遺跡でも5点にすぎない。しかも同町内には4点出土した野面平遺跡などがあり，縄文晩期における岩偶発達の中心地の様相を示している。

本節においては，それらの様相をさらに詳細に検討することとする。

なお，岩偶は前期以来東北地方を中心に全国的に分布するが，ここではすでに述べた目的にしたがい晩期のそれに主体を置くことにする。

縄文晩期の岩偶は，現在までのところ第28・29表に示すように，東北地方から53点出土している。前・中期の場合は北海道にも分布するが，晩期の場合は東北地方に限定され，さらにそのなかでも青森県東部に集中していて，分布傾向に違いがある。

53点のうち3点は出土地不明であるが，出土25遺跡のうち11



第85図　縄文晩期における岩偶出土遺跡分布図

遺跡(44.00%)は青森県東部に位置し，数量も全体の61.11%に相当する33点を出土している。これに対して青森県西部では4遺跡4点，岩手県では5遺跡5点，秋田県では4遺跡8点，そして宮城県では1遺跡1点にすぎず，山形・福島県下には出土していない。

従来工芸的・呪術的性格をもつ遺物が東北地方北部に特に発達していることはよく知られていたが，これによって岩偶はその中心ともいうべき青森県下においても明確に東部に片寄っていることが明らか

第28表　縄文晩期岩偶一覧表

（カッコ内は残存値を示す）

番号	遺跡名	形態	遺存状態	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	推定高 (cm)	図版番号 (挿図番号)	文献	所蔵者・機関名
1	青森県五所川原市観音林遺跡	Ⅰa	完形	11.8	7.3	2.5	11.8	182－1	新谷 1975	五所川原市歴史民俗資料館
2	同　弘前市十腰内遺跡	Ⅰa	右腕欠	15.9	(9.6)	4.1	15.9	182－2	江坂 1960	東京大学総合博物館
3	同　南津軽郡浪岡町細野遺跡	Ⅰ	頭部破片	－	－	－	－	－	サントリー 1969	早稲田大学考古学研究室
4	同　青森市新城岡町遺跡	Ⅰb	脚部欠	(6.9)	8.0	2.8	10.5	182－3	江坂 1960	慶応大学民族学考古学研究室
5	同　上北郡七戸町道地遺跡	Ⅰ	頭部破片	(6.8)	6.8	3.9	25.0	183－1	－	盛田稔氏（青森県郷土館）
6	同　十和田市明戸遺跡	Ⅰ	頭部破片	(4.8)	(4.7)	(2.3)	17.5	183－2	誉田他 1984	十和田市郷土館
7	同　八戸市是川遺跡 1	Ⅰ	頭部破片	(3.9)	(4.8)	(2.0)	17.5	183－3	－	是川考古館 1
	2	Ⅰ	左脚部破片	(7.5)	(4.5)	(2.1)	20.0	183－4	－	同　2
	3	Ⅰb	左胸部大破片	(17.3)	(16.6)	(4.2)	40.0	184－1	稲野 1983	同　3
8	同　同　八幡遺跡	Ⅰa	左胸部破片	(6.4)	(6.7)	(2.9)	19.0	184－2	小笠原 1988	八戸市立博物館
9	同　三戸郡名川町虚久蔵遺跡	Ⅰa	左胸部破片	(11.4)	(12.5)	4.6	32.0	183－5	工藤他 1993	青森県郷土館
10	同　同　南部村曽沢									
	（旧名小向）遺跡 1	Ⅰa	胴部以下欠	(9.8)	11.9	3.1	18.0	186－1	－	東京国立博物館
	2	Ⅰa	胴部以下欠	18.1	24.0	4.5	36.0	185	江坂 1960	南山大学人類学博物館
	3	Ⅰa	頭・右胸部破片	(8.0)	(7.2)	2.3	16.0	186－2	春日他 1995	馬場　隆氏 1
	4	Ⅰa	胴下部破片	(5.6)	(6.1)	(2.7)	14.5	186－3	同	同　2
	5	Ⅰ	左胸部破片	(5.8)	(5.6)	2.9	11.0	184－3	同	同　3
11	同　同　三戸町杉沢遺跡	Ⅰa	右胸部破片	(5.9)	(4.1)	2.7	13.0	186－4	工藤大他 1997	青森県郷土館
12	同　同　田子町野面平									
	遺跡 1	Ⅰa	頭・右脚欠	(6.5)	5.4	1.4	8.5	186－5	江坂他 1983	田子町教育委員会 1
	2	Ⅰa	右体部・脚部欠	(10.2)	(9.1)	(3.5)	17.5	187－1	同	同　2
	3	Ⅰa	胸部破片	(9.2)	(16.3)	(2.8)	21.5	187－2	同	同　3
	4	Ⅰ	胴下部破片	(11.3)	(8.6)	(3.8)	19.5	187－3	同	同　4
13	同　同　同　飯豊 1	Ⅰa	右胸部・腕破片	(7.7)	(10.6)	4.2	20.0	188－1	浜田他 1995	岩手県立博物館（小田島コレクション 1）
	2	Ⅰ	頭部破片	(7.2)	(6.0)	(4.1)	22.5	188－2	同	同（　同　2）
14	同　同　同　石亀遺跡 1	Ⅰa	胸部大破片	(14.3)	(25.2)	(6.6)	45.0	カラー. 2 (5－1)	江坂他 1983	田子町教育委員会 1
	同　2	Ⅰ	右脚部破片	(17.2)	(9.2)	(5.8)	45.0	カラー. 3上 (5－2)	同	同　2
	同　3	Ⅰa	胸・腕部破片	(7.6)	12.8	4.0	19.0	177－1 (75－1)	本報告書	古代学協会 1
	同　4	Ⅰa	左胸部破片	(7.1)	(8.8)	(3.1)	26.0	177－2 (75－2)	同	同　2
	同　5	Ⅰ	右腕部破片	(11.5)	(7.4)	(3.5)	43.0	178－1 (76－1)	同	同　3
	同　6	Ⅰ	右脚部破片	(10.2)	(5.8)	(2.7)	34.0	178－2 (76－2)	同	同　4
	同　7	Ⅰa	胸部破片	(2.9)	(4.9)	(1.8)	9.0	177－3 (77－1)	同	同　5
	同　8	Ⅰ	腹・脚部破片	(4.3)	(4.9)	(1.3)	9.5	178－3 (77－2)	同	同　6
	同　9	Ⅰ	右腹・脚部破片	(4.8)	(5.2)	(1.7)	22.5	178－4 (77－3)	同	同　7
	同　10	Ⅰ	腹部破片	(5.1)	(9.2)	(1.7)	22.5	178－5 (77－4)	同	同　8
	同　11	Ⅰ	右脚部破片	(6.9)	(4.4)	(2.2)	21.0	177－5 (77－5)	同	同　9
	同　12	Ⅰ	右脚部破片	(2.3)	(1.9)	(1.1)	17.0	177－4 (77－6)	同	同　10
15	同　同　同　道前遺跡	Ⅰa	頭・胸部破片	(7.1)	(7.0)	(2.7)	15.0	188－3	大高 1969	青森県郷土館（風韻堂コレクション）
16	岩手県二戸郡雨滝遺跡	Ⅰ	頭部破片	(2.8)	(3.2)	(1.3)	12.0	188－4	－	明治大学発掘未公表資料
17	同　同　一戸町蒔前遺跡	Ⅰ	頭部破片	(6.4)	(6.3)	3.7	24.0	188－5	高田他 1986	国立歴史民俗博物館

番号	遺跡名	形態	遺存状態	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	推定高 (cm)	図版番号 (挿図番号)	文献	所蔵者・機関名
18	岩手県岩手郡松尾村金沢屋敷遺跡	Ⅰ	胴下部破片	(11.2)	8.7	3.8	17.5	189－1	稲野 1983	佐藤進蔵氏
19	同　盛岡市若内遺跡	Ⅰ	左脚部破片	(5.2)	(4.8)	(2.6)	10.5	189－2	工藤他 1982	岩手県埋文センター
20	同　下閉伊郡岩泉町袈裟綿遺跡	Ⅰa	胴部以下欠	(17.3)	19.4	5.0	29.0	190－1	江坂 1960	日本民芸館
21	秋田県鹿角市尾去沢遺跡1	Ⅰ	頸部破片	(6.4)	(6.6)	(2.9)	23.0	189－3	稲野 1983	海沼寿世氏1
	同　同　2	Ⅰ	頸部破片	(6.2)	(6.6)	(2.7)	24.0	189－4	同	同　2
22	同　北秋田郡鷹巣町藤株遺跡	Ⅱ	頸部破片	(9.6)	(9.7)	(4.6)	40.0	191－1	富樫他 1981	鷹巣町教育委員会
23	同　同　森吉町									
	白坂遺跡1	Ⅱ	頸部破片	(6.4)	(8.4)	(4.1)	24.0	(87－1)	高橋他 1984	秋田県埋文センター
	同　2	Ⅱ	完形	7.6	4.0	2.2	7.6	(87－2)	同	同
	同　3	Ⅱ	肩一部欠	6.6	(8.1)	1.8	6.6	(87－3)	同	同
	同　4	Ⅱ	肩部破片	(4.3)	(3.5)	1.3	4.5	－	同	同
24	同　由利郡東由利町									
	湯出野遺跡	Ⅱ	基部欠	(9.7)	4.0	4.0	10.0	(87－4)	富樫他 1978	東由利町教育委員会
25	宮城県玉造郡岩出山町									
	根岸遺跡	Ⅰb	左脚部欠	15.8	5.8	2.7	15.8	191－2	東北歴史 1996	東北歴史資料館
	不明1（青森県三戸郡内）	Ⅰ	腹・脚部破片	(9.6)	(8.7)	－	11.5	－	江坂 1960	芹沢圭介氏
	同 2	Ⅰa	胴部以下欠	(4.6)	5.6	1.8	8.0	190－2	－	東京国立博物館
	同 3	Ⅰ	腹部破片	(4.7)	(6.5)	(2.7)	12.5	191－3	－	慶応大学（梅原末治氏寄贈）

になった。その地域は馬淵川流域であるが，特に中流域西岸支流の猿辺川・熊原川流域に集中していて，晩期を代表する八戸市是川遺跡は中心部には位置していないのである（第85図）。岩手県北部の雨滝遺跡も，同様に周辺地域として理解することができる。

それらの地域差は，形態別分布をみると一層明確になる。

53点の岩偶は，２類に大別される。

Ⅰ類：土偶型　同時期の遮光器土偶などに類似して，立体的で大字型を呈している。これらは胸部も土偶と同様に突出しているⅠａ類と，平坦なⅠｂ類とに分類される。

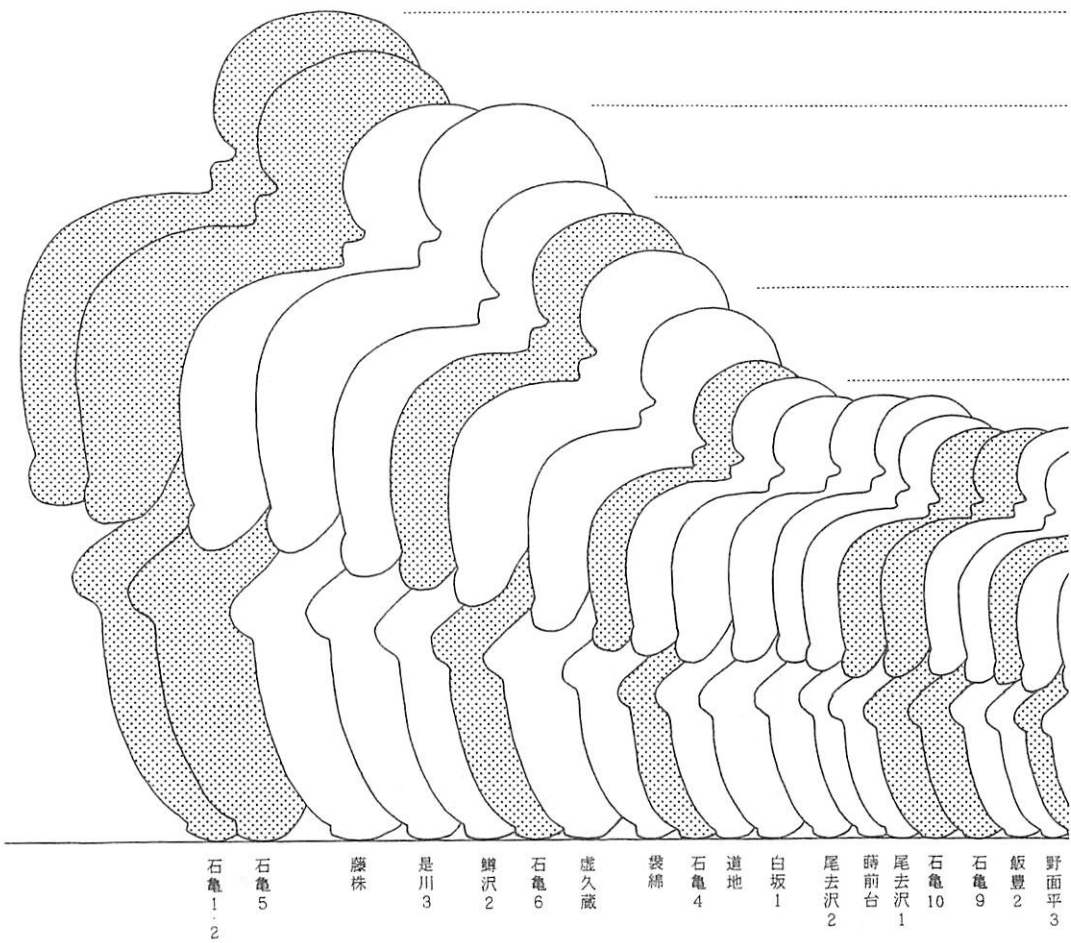
Ⅱ類：Ⅰ類以外として一括する。個々に形態差が顕著であり，すでに述べた目的からは細分に意味は認められない。

そして分布を検討すると，Ⅱ類は秋田県下に集中し，藤株遺跡・白坂遺跡・湯出野遺跡などにのみみられる。またⅠｂ類も，八戸市是川遺跡の他に宮城県根岸遺跡にみられるが，これらの諸遺跡を除くと典型例の分布範囲は，青森県東部を中心に同西部，隣接する岩手県北部・秋田県東北部であることが明確になる。

時期的にみても，彫刻された文様で見るかぎりほとんどが晩期前葉大洞Ｂ・ＢＣ式期であり，是川第３例のみ同中葉大洞Ｃ１式期とみることができる。そして退化も顕著で，胸と腹部の膨らみはまったくみられない。中軸線のみで，同様に胸・腹部の膨らみのまったくみられない，最南端に位置する宮城県根岸遺跡例もほぼ同時期とみることができる。

このことは，サイズの面からも明確である。

岩偶は土偶と同様に完形品がみられない。しかし高さにおいては，わずかに２点のみ確認することができる。第１は五所川原市観音林遺跡例（図版182－１）で，第２は弘前市十腰内遺跡例（同２）である。これらのうち細部の特徴がより典型的な後者をモデルとして，各例について高さの推定を行った（第28表・



第86図　岩偶推定サイズ比較図

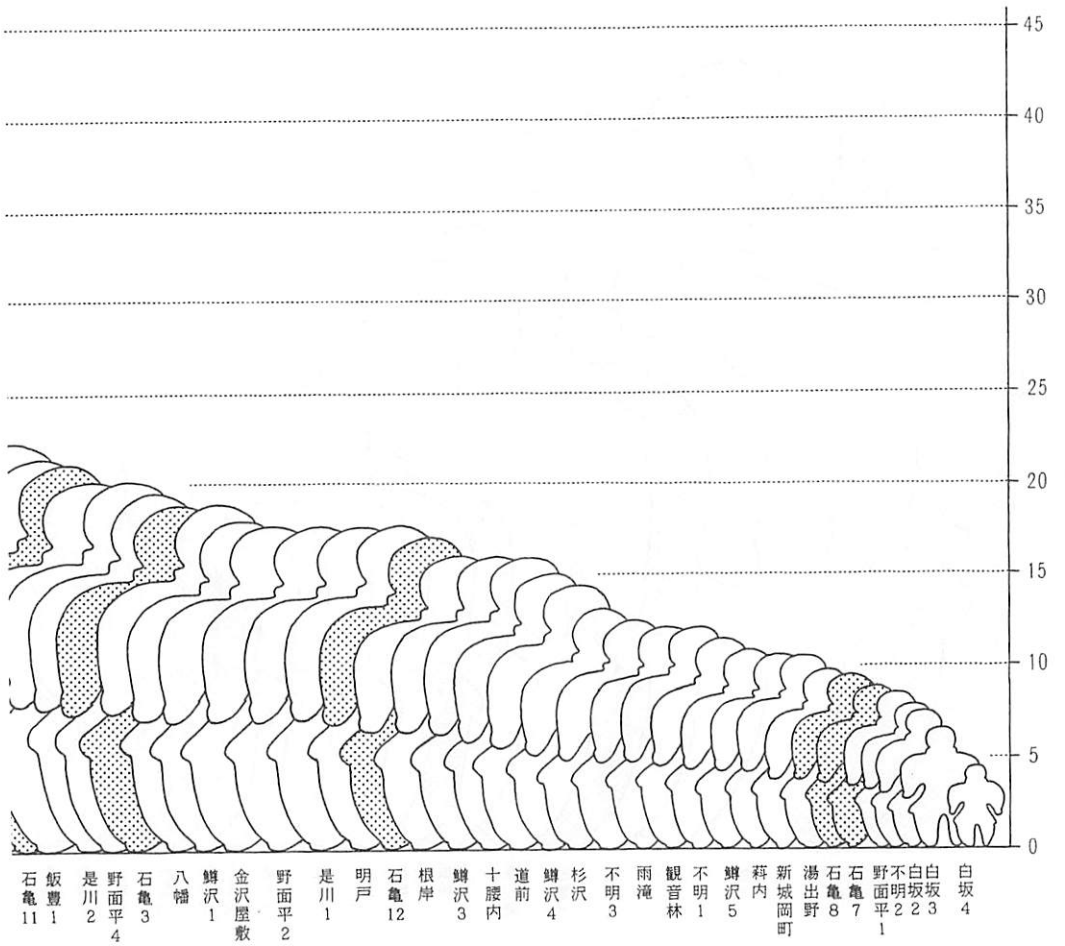
第86図)。

その結果15cmと25cm付近にやや差異がみられ，15cm以下を小型，15cm～25cmを中型，そして25cmを大型と分類することができる。そして最大は本遺跡第1・2例で45cmと推定される。また第2位も本遺跡第5例で43cmと推定される。これら大型品は10点あるが，このうち本遺跡4点，是川遺跡・鱒沢遺跡・虚空蔵遺跡・道地遺跡各1点の8点80%を青森県東部が占めており，他に岩手県袋錦遺跡・秋田県藤株遺跡の各1点がみられるにすぎない。

2．土偶との関係

岩偶は前期以来東北地方を中心に全国的に分布するが，特に前期の円筒土器と晩期の亀ヶ丘式土器に伴うものが際立っている。そしてそれぞれの時期の土偶と岩偶とはほぼ同一形態であり，素材を異にしてもその機能に関して基本的に同じであると理解される。

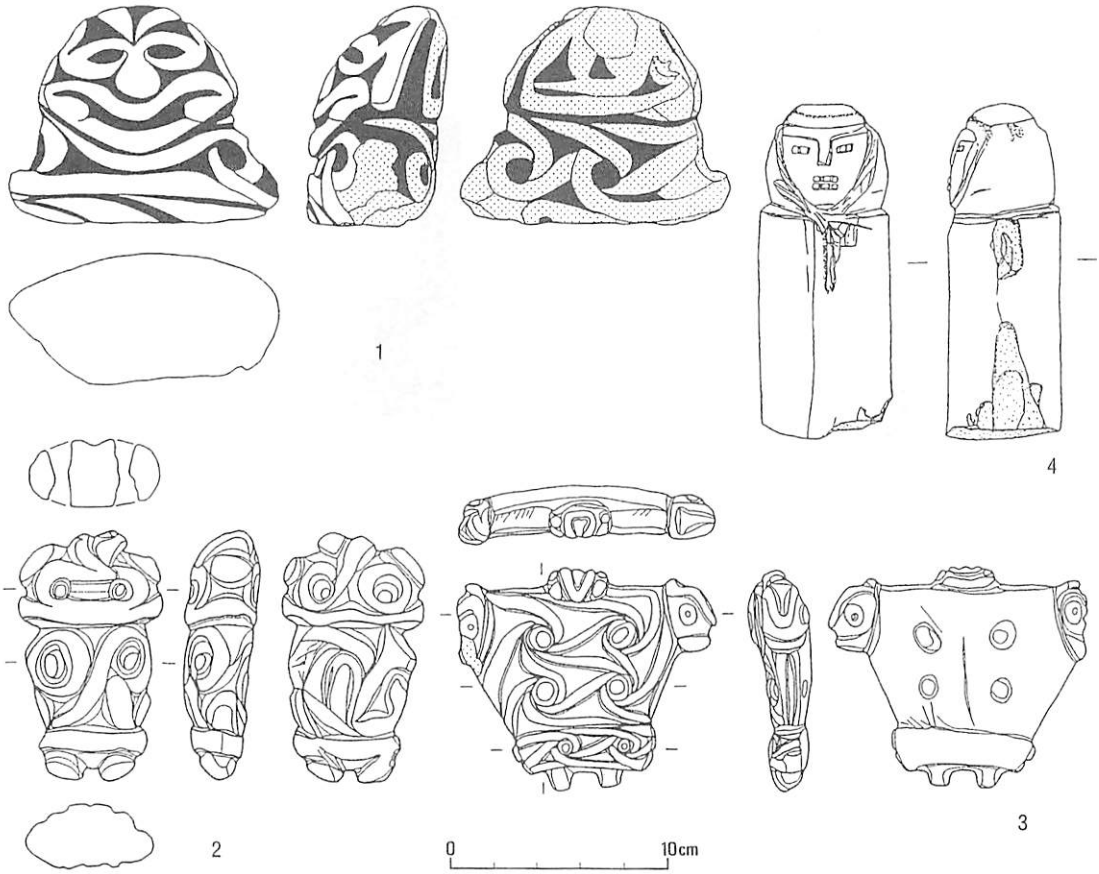
円筒土器に伴う土偶は板状で，まだ立体化していない。人面の表現がみられないなどの違いはある



が，逆三角形の形態はよく類似している(写真4)。しかしその分布範囲は晩期の岩偶と大きく異なり，青森県西部・秋田県，および北海道南部に顕著であることを，稲野裕介氏(1997)が明らかにしている(第88図)。

これに対して晩期の岩偶は，同時期の遮光器土偶にきわめて類似していることはいうまでもない。大きく異なるのは，内部が空洞ではないことである。焼成の必要がないこと，内部のえぐりが難しいことなどがその理由であろう。これを受けて頭部が空洞でない同時期の土偶を岩偶型という研究者もいるが，それらの指摘されている例はいずれも小型であって空洞化の必然性に弱いものであり，特別視されるほどのものとは考えられない。

しかし岩偶と土偶とは，単に素材の違いとは見做しがたい問題があると推定される。その一つとして色の違いが指摘される。褐色あるいは黒褐色などを呈する土偶と異なり，白色凝灰岩で作られた岩偶は白い。それは雪国の女性の表現として実にふさわしいといえよう。そして赤色顔料が塗られるか掛けられるかした場合，その白さは実に効果的である。

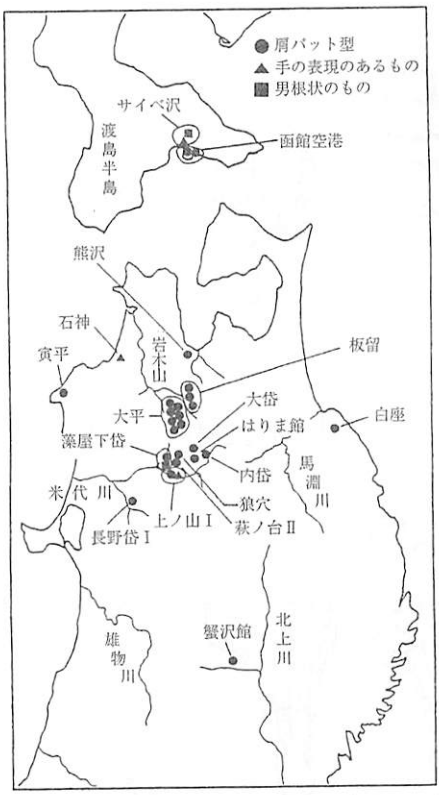


第87図　縄文晩期の岩偶実測図
1：秋田県白坂遺跡第1例，2：同第2例，3：同第2例，4：同湯出野遺跡（各報告書より）

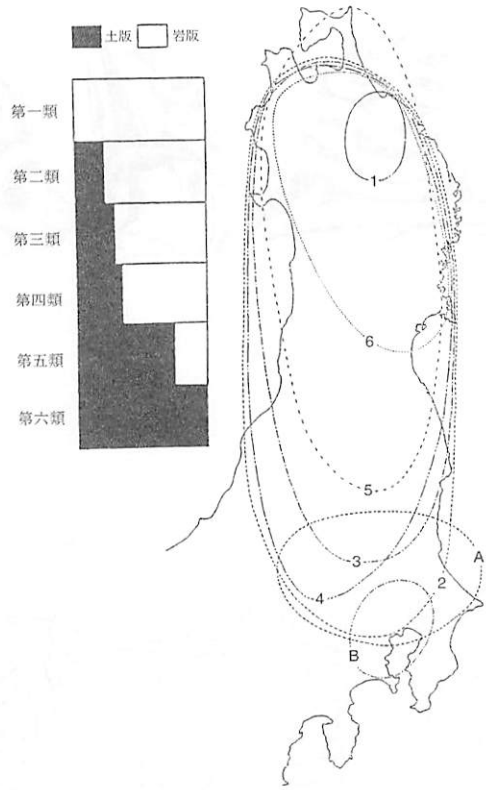
典型的な例は観音林遺跡例や道地遺跡例で，全面に赤色塗採が顕著である。部分的にその痕跡を留めるものもある。本遺跡例においても，第1・2・5例などにわずかにその痕跡が認められる。土偶を含めた他の多くの例において，不用意に洗い流された場合もあったかもしれない。しかし実際にはしっかりと塗採された場合ばかりでなく，液に浸すか掛けられたことも考えられる。そのように想定すれば，しっかりと残らないことが理解し易くなる。すなわち白い肌に赤い血が広がり，女神の死をシンボリックに表現していると考えられるのである。

水野正好氏の指摘以来，土偶は死して再生する女神を表しているとする考え方はほぼ定着しているとみられるが，岩偶は素材に恵まれた地域において，土偶の機能をより効果的に表現しているとみることができる。

再生する女神の有力な根拠として，土偶の大部分は壊れた状態で出土することが指摘されている。そして近年は壊れやすく作られているという考え方が一般的になってきている。しかし冷静にみれば，壊れていることは事実としても，それらが壊れたのか壊されたのかは区別不可能である。その問題を解決する唯一の資料として，本遺跡第4例はきわめて重要である。



第88図　円筒土器に伴う岩偶の分布（稲野1997）



第89図　土版・岩版の展開（天羽1965）

素材が石であるために，切断や破損の痕跡がきわめて顕著に残っている(図版177－2)。これによって土偶の破壊を認めることができるようになったのであり，その学史的役割は高く評価されるに違いない。

第29表　地域別岩偶出土遺跡・数量表

地　域	遺跡数	(%)	数　量	(%)
青森県西部	4	(14.3)	4	(7.5)
青森県東部	11	(39.3)	32	(60.4)
岩手県	5	(17.9)	5	(9.4)
秋田県	4	(14.3)	8	(15.1)
宮城県	1	(3.6)	1	(1.9)
不明	3	(10.7)	3	(5.7)
計	28	(100.1)	53	(100.0)

さてそうした素材の選択を可能にした背景もまた問題になる。ここでその明解な解答を提示することはできないが，翡翠や黒曜石などのように特別な産出地をもたない白色凝灰岩の場合，山崩れなどによる大きな路頭に恵まれたことが推定されてくる。大型で胸の突出した岩偶を作るにはそれを上回る良質の石が前提になり，岩版のような小型で平面的なものとは同一視することはできない。前期と晩期との対象的な分布も，このような考え方を支持していると思われる。

その岩版もまた馬淵川流域において晩期初頭に出現したものであることを，天羽利夫氏(1965)が明らかにしている。同氏の第1～6類は大洞B～A'式に対応し，はじめはすべて岩版で，第2類以降土版に変化しながら分布範囲を拡大しているのである(第89図)。

岩版もまた土偶・岩偶と類似した機能が想定され，人面の表現や赤色塗採もみられる。

したがって素材に恵まれることによって，本来の機能がより強く表現されるようになったことが考えられるのである。しかし大型品や分布の片寄りは，これらに加えて集団間の行動パターンも大きな要因であることを示唆しており，問題は単純ではないと考えられる。

第3節　今後の課題

はじめに記したように，本遺跡の調査研究は単に縄文農耕問題のみを目指したのではなく，縄文文化，特に亀ヶ岡文化を多面的かつ総合的に理解することを目的としていた。

そしてまず東北地方全体からみると，漁撈文化に特徴的な中・南部と，工芸的・呪術的な要素に比重の高い北部とがあり，亀ヶ岡式土器と異なり亀ヶ岡文化という概念の内容はきわめて不明確であることを第1章第2節において指摘した。

次に北部とした青森県においても，岩偶に代表されるようにその東部と西部においては明確な地域差があり，さらにその東部地域にあっても，本遺跡に代表される馬淵川中流域と，是川遺跡に代表される下流域，雨滝遺跡に代表される上流域とでは顕著な違いが認められるのである。そしてそのもっとも下位に，個々の遺跡が個性的に位置しているのであり，それらの構造的な理解を深めるためには，単純に農耕問題のみ論じてもなんらの解決にもならない。

もちろん農耕問題の重要性は明らかである。それを含めたうえで亀ヶ岡文化，さらには縄文文化の総合的な研究を深めていくことが，今後の重要な研究課題なのである。

引用文献目録

【ア】
天羽　利夫，　1965：亀ヶ岡文化における土版・岩版の研究。史学．37－4，77～93頁。東京。
新谷　雄蔵，　1975：観音林遺跡。五所川原。
【イ】
稲野　裕介，　1983：岩偶。縄文文化の研究．9，86～94頁。雄山閣・東京。
――　，　1997：円筒土器に伴う岩偶・2。土偶研究の地平．401～409頁。勉誠社・東京。
【エ】
江坂　輝弥，　1960：土偶。校倉書房・東京。
――　，　1967a：青森県三戸郡在家平の環状列石。日本考古学年報，15・昭和37年度．86～87頁。東京。
――　，　1967b：青森県三戸郡野面平遺跡。同．86頁。東京。
――　他，1983：田子町誌．上巻。青森県田子町。
【オ】
大高　　興，　1969：風韻堂収蔵庫縄文文化遺物集成。青森。
小笠原善範，　1988：八幡遺跡発掘調査報告書。八戸市埋蔵文化財調査報告書，26。八戸。
【カ】
春日　信興他，1995：南部町誌．上巻。青森県南部町。
【ク】
工藤　　大，　1997：馬淵川流域の遺跡調査報告書。青森県立郷土館調査報告書．40。青森。
工藤　竹久他，1993：名川町誌．1・本編Ⅰ。青森県名川町。
工藤　利幸他，1982：萪内。岩手県埋文センター文化財調査報告書．32。盛岡。
【サ】
サントリー美術館，1969：土偶と土面。東京。
【シ】
嶋　　千秋・鈴木　隆英，　1984：曲田Ⅰ遺跡発掘調査報告書。岩手県埋文センター文化財調査報告書．87。盛岡。
【タ】
高田　和徳他，1986：蒔前－岩手県蒔前遺跡出土資料の図録－。一戸町文化財調査報告書．17。岩手県一戸町。
高橋　　学他，1994：白坂遺跡発掘調査報告書。秋田県文化財調査報告書，244。秋田。
高橋龍三郎，　1981：亀ヶ岡式土器の研究－青森県南津軽郡浪岡町細野遺跡の土器について－。北奥古代文化，12．1～51頁。北奥古代文化研究会・東京。
【ト】
東北歴史資料館，1996：東北の土偶。多賀城。
富樫　泰時他，1978：湯出野遺跡発掘調査概報。秋田県文化財調査報告書，53。秋田。
――　他，1981：藤株遺跡発掘調査報告書。秋田県文化財調査報告書，85。秋田。
【ナ】
那須　孝悌・飯田　祥子，　1975：青森県石亀遺跡(縄文晩期)の花粉分析。青森県田子町石亀遺跡第2・3次発掘調査概報．平安博物館・京都。
【ハ】
浜田　　宏他，1995：小田島コレクション・その2。岩手県立博物館収蔵資料目録．11。盛岡。
【フ】
藤沼　邦彦，　1983：文様の描き方－亀ヶ岡式土器の雲形文の場合－。縄文文化の研究．5，151～168頁。雄山閣・東京。
――　，　1988：亀ヶ岡式土器の文様の描き方。考古学論叢，Ⅱ．129～175頁。芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会・仙台。
【ホ】
誉田　　実他，1984：明戸遺跡発掘調査報告書。十和田市埋蔵文化財発掘調査報告書，3。十和田。
【ヤ】
山田　悟郎，　1992：古代のソバ。考古学ジャーナル，355．23～28頁。東京。
【ワ】
渡辺　　誠編，1975：青森県田子町石亀遺跡第2・3次発掘調査概報。平安博物館・京都。
――　・片岡　　肇編，1971：青森県田子町石亀遺跡第1次発掘調査概報。平安博物館・京都。

あ と が き

昭和49年10月に約2週間にわたって実施した石亀遺跡第3次発掘調査から，ちょうど23年が経過した平成9年10月，ようやく石亀遺跡の発掘調査報告書を刊行できる運びとなった。

はじめに記したように，この研究は，㈶古代学協会平安博物館考古学第二研究室が中心となって押し進めていた『日本文化の源流の研究』のひとつであり，縄文農耕の可能性を多面的かつ総合的視野から行おうとするものであった。当時は，筆者を中心として，館内外のさまざまな専門の方々の協力を得て，学際的な調査を精力的に進めていた時期でもあった。そして，その結果縄文晩期の良好な資料を調査することができた。

この遺跡から出土し，まずなんといっても注目されるのは，亀ヶ岡文化の多量の土器であった。それらはいずれも完成度の大変高いものであり，器形と文様の美しさは，亀ヶ岡文化の土器を代表するといっても過言ではない。

さらに，岩偶・岩版の豊かさは，出土状況の確実性とあわせて他に例を見なかった。とくに岩偶は，日本一の大きさの大岩偶の出土地であるだけあって，多様な資料を見つけることができ，本報告書に掲載した岩偶集成を行う大きなきっかけともなった。

また，ソバ花粉の発見は，縄文農耕の可能性を追求するうえでまさに一大発見であり，その重要性は今もなお変わらない。

しかし，あまりにも多種多様で多量の遺物は，その整理作業における遅延をもたらした。また，この遺跡が包含する縄文文化に関する様々な問題は，従来の整理・報告書作成作業に関わる時間では到底解決は難しいと感じさせるものであった。結局，報告書の刊行に多くの歳月が経過する結果となった。その間，筆者をはじめ関係者の離職や組織変更などがあり，ますます整理作業が滞ってしまった。

そして，今ようやく報告書を刊行できることになったわけであるが，未だに未分析の資料があり，提起すべき問題が残っていることについては，忸怩たるものがある。しかし，これ以上の報告書刊行の時期を遅らせることはできず，残る問題は別の機会をもって解決していきたいと考えている。なぜならば，20余年を経過しても，この遺跡の持つ情報が『日本文化の源流』の研究とか，『縄文農耕』という今なお論議が盛んである問題を考えていくうえで決して色褪せたものではないからである。

このように，20年を越える作業になってしまったが，この間には，例言やはじめにのところで氏名を挙げた方々以外にも，実に多くの方々多くの機関のご協力を得た。とくに，土地所有者の築田実(故人)・築田進・木根定夫の各氏，青森県教育委員会・田子町教育委員会に対しては，重ねて御礼申し上げる。さらにあらたに岩偶の研究については下記の方々・機関の協力を得たことを明記しておきたい。

福田友之　盛田　稔　小林和彦　春日信輿　馬場　隆　熊谷常治　佐藤連蔵
冨樫泰時　海沼寿世　藤沼邦彦

東京国立博物館　国立歴史民俗博物館　青森県郷土館　五所川原市歴史民俗資料館
八戸市立博物館　是川考古館　十和田市郷土館　岩手県埋文センター　岩手県立博物館

秋田県埋文センター　鷹巣町教育委員会　東北歴史資料館　日本民芸館
東京大学総合博物館　慶応大学民族学考古学研究室　早稲田大学考古学研究室
明治大学博物館　南山大学人類学博物館
この他にも氏名を挙げて深謝の意を表すべき方々がたくさんおられるが，お許しいただきたい。

最後になったが，発掘調査以来，さまざまな形でご支援・ご援助を賜りながら，成果をお見せ出来ていなかった角田文衛先生には，心よりお詫び申し上げるとともに，温かく見守っていただいた先生のご厚情に衷心より感謝申し上げる次第である。

（渡辺）

English Summary

1. The present report concerns the Ishigame(石亀) Site in the Aomori Prefecture, Japan, which was excavated by the Heian Museum in 1971 and 1974. The site is dated in the Latest Jomon Period, viz. 1000–500 B.C.

2. The site is represented of Kamegaoka(亀ケ岡) Culture in the Latest Jomon of the Tohoku District. As the site is location on the inland, there are a few fishing gear, but on the other hand, there found many hunting implements and artistic or magical remains which show the characteristic of the Kamegaoka Culture.

3. The earthenware unearthed in abandance belongs to the Kamegaoka Style which assumes the forms of 1)deep bowl, 2)ordinary bowl, 3)shallow bowl, 4)pedestaled vase, 5)vessel with attached rims, and 6)odd–looking vessel and so on. Their designe are highly delicate consisting of patterns of zoned–cord marking and relief.

It is possible to devide 258 intact potteries into several types by their shapes and patterns. And also they are analized precisely by the shapes. In addition, it can be described clearly the relation between each forms and the patterns. The figures of potteries are equivalent for plates in the present report.

Also it is passible devide into 3 groupes based on their distribution. The composition of in tact pottery is crude deep bowl 14%, designed deep ordinary bowl about 40%, and vase and shallow bowl 14–17%. Compared with each shapes, in the third group, there is a few deep bowls, but 23% of them are vase at the heads of list, miniature vessels and vessels with attached rims form large number. On the other hand, the type occupied mainly in each groupe is the Obora B/BC Type in the group Ⅰ, the Obora C 1 Type in group Ⅱ and Ⅲ. This fact shows clearly the relation with the distribution.

4. There were found 292 stone implements and number of different types is as follows: 1 is chipped stone axe, 8 grinding srabs, 12 polishing stones, 45 hammerstones, 1 of them dimpled stone, 7 of them polished stone axes, 46 stone disks, 3 of them stone spatulas, 22 tanged stone scrapers, 31 side scrapers, 20 stone awls, and 15 others.

5. Through the excavations there found 32 cray objects, of which 21 were cray figurines, 7 cray disks, 3 cray ear–rings, and one bead. Almost all were unproductive artifacts, in particularly cray figurines showed us strongly the magical characteristic.

6 . There unearthed 55 stone-made object, of which 12 are stone figurines,28 are stone imitation of the cray tablet, 6 are beads, 2 are ball shaped stone-made objects, 1 is stone-made object with two holes, and 6 are stone-made disks. Almost all were unproductive artifacts, in particularly stone figurines showed remarkably their magical characteristic.

7 . It must be emphasized that, 61% of stone figurines belonging to the Final Jomon are found from the East area of the Aomori Prefecture. And 22% (12) of them were from this site and it is the largest number of all figurines hitherto found. It is different characteristic from them found from the West area of Aomori Prefecture in the Early Jomon period to them inthis site. In addition, the largest figurines were found at this site, for example, numbers 3 rd, 6 th ,and 9 th of the Plate. For the reasons mentioned above, it must be regarded that this site was the center of the development of stone figurines.

8 . The most important one is the forth example of the stone figurines which shows the characteristic of a goddess who is killed and then comes to life again. From this fact, we can understand clearly traditional thinking of the way about cray figurines which is the wish for coming to life again after destruction.

9 . It is important for us to discover the buckweat pollens in thinking about the possibility of the cultivation in Jomon Period. However, the problem to ascertain the exsistence of the cultivation must be investigated hereafter, as no cereal seeds and farming tools were not discovered at the Ishigame site.

CONTENTS

Opening Photograph
Aknowledgement
Contents
List of Tables
List of Figures
List of Photographs
List of Plates
Introduction

Introduction ··· 1

Chapter 1 The Location and the Environment around the Site ··· 3
1 The location and the environment around the site ··· 3
2 The histrical environment of the site ··· 6

Chapter 2 Excavation ··· 9
1 The summary of the excavation ··· 9
2 The east side ··· 9
3 The first excavation at the west side ··· 12
4 The second and the third excavation at the west side ··· 14

Chapter 3 Distribution of the stratigraphy and the archaeological features ··· 19
1 The stratgraphic position of the first excavation ··· 19
2 The stratgraphic position of the second and the third excavation ··· 19

Chapter 4 Archaeological Remains · 1 Jomon Pottery ··· 27
1 The conditions in discovering potteries ··· 27
2 Pottery classification ··· 29
3 Deep bowl ··· 33
4 Bowl ··· 46
5 Shallow bowl ··· 62
6 Pedestaled potteries ··· 74
7 Vase ··· 90

8 Spouted vessel ··· 104

Chapter 5 Archaeological Remains · 2 Stone Tools ··· 113

1 The conditions in discovering stone tools and Composition of Stone materials ··· 113

2 Chipped stone axe ··· 114

3 Grinding slab ··· 114

4 Polishing stone ··· 115

5 Hammerstone ··· 118

6 Dimpled stone ··· 118

7 Stone arrowhead ··· 123

8 Point ··· 130

9 Spatular stone tools ··· 131

10 Stone weight ··· 131

11 Polished stone axe ··· 133

12 Discoidal stone tools ··· 139

13 Tanged stone scraper ··· 139

14 Side scraper ··· 142

15 Stone awe ··· 143

16 Others ··· 144

17 Double-edged stone club with one handle knob ··· 145

18 Double-edged grooved stone bar with constricted middle section ··· 145

Chapter 6 Archaeological Remains · 3 Cray Objects ··· 153

1 Earthen figurine ··· 153

2 Cray-made disk ··· 155

3 Accessories ··· 155

Chapter 7 Archaeological Remains · 4 Stone-made Objects ··· 159

1 Stone figurine ··· 159

2 Stone imitation of cray tablet ··· 165

3 Beads ··· 168

4 Other object ··· 168

Chapter 8 Non-artifactual Remains ··· 171
1 Plant remains ··· 171
2 Pollen analysis ··· 173

Chapter 9 Consideration ··· 181
1 Possibility of growing buckweat in the Final Jomon Phase ··· 181
2 A study of the stone figurines in the Final Jomon Phase ··· 182
3 Subjects ··· 190

Literature ··· 191

Conclusion ··· 192

English summary ··· 194

Contents for English ··· 196

List of Tables

Table 1 Total number of the Obora each types pottery ··· 27
2 Total number of Deep bowl ··· 29
3 Total number of Bowl ··· 33
4 Total number of Shallow bowl ··· 34
5 Total number of Pedestaled deep bowl ··· 47
6 Total number of Pedestaled bowl ··· 62
7 Total number of Pedestaled shallow bowl ··· 74
8 Total number of Vase ··· 91
9 Total number of Vase ··· 92
10 Total number of Spouted vessel ··· 105
11 Stone tools composition ··· 113
12 Grinding slab ··· 115
13 Polishing stone ··· 117
14 Hammerstone ··· 119
15 Stone arrowhead ··· 128
16 Point and Stone spatura ··· 130

17 Stone weight and Polished stone axe ··· 132
18 Discoidal stone tools ··· 134
19 Tanged stone scraper ··· 142
20 Side scraper ··· 144
21 Stone awl ··· 148
22 Double-edged stone club with one handle knob and Double-edged grooved stone par with constricted middle section and other stone tools ··· 150
23 Cray objects ··· 153
24 Stone-made objects ··· 160
25 The number of plants remains ··· 171
26 The first pollen data composition ··· 172
27 Rarely pollen ··· 174
28 Stone figurine in the Final Jomon Phase ··· 184
29 Stone figures in the Tohoku area ··· 189

List of Figure

Figure 1 The location of Ishigame site 1 ··· 4
2 The map of arround the site and other mainly sites ··· 5
3 Distribution map of Ishigame site and the other Final Jomon sites ··· 7
4 Topographical map arround the site ··· 10
5 Large stone figurine ··· 11
6 The section : East area ··· 12
7 Stratigraphic position figure at East area ··· 13
8 Rubbing of pottery unearthed from the second black strata, East area ··· 12
9 Grid of an annual excavation at west side ··· 14
10 The condition of the unearthened remains, potteries. ··· 15
11 The condition of the unearthened the stone figurines ··· 17
12 Stratigraphic plofile, West area · 1 ··· 20
13 Stratigraphic plofile, West area · 2 ··· 21
14 Stratigraphic plofile, West area · 3 ··· 22
15 Earthen pit at 56, 58 grid in East area ··· 23
16 West area W29 Burnt soil and related remains ··· 24
17 West area W29 pit 1 ··· 24
18 West area W56 pit 1 ··· 24
19 Distribution map of pits in the west area ··· 25

20 Distribution map of potteries … 28
21 Distribution map of each Obora(大洞) types pottery … 29
22 Model of each parts and design series … 30
23 Classificated figure of design pattern · Section pattern … 31
24 Classificated figure of design pattern · Arrenge pattern … 32
25 Classificated figure of design pattern · Filler pattern … 32
26 Distribution map of deep bowl … 35
27 Distribution map of bowl … 49
28 Distribution map of shallow bowl … 63
29 Distribution map of pedestaled deep bowl … 75
30 Distribution map of pedestaled bowl … 76
31 Distribution map of pedestaled shallow bowm … 77
32 Distribution map of vase … 93
33 Distribution map of odd-looking pottery … 94
34 Distribution map of spouted vessel … 106
35 Distribution map of a total number of the stone materials unearthed from each grid … 113
36 Chipped stone axe … 114
37 Distribution of grinding srab · polishing stone · hammerstone … 115
38 Grinding srab … 116
39 Polishing stone … 117
40 Hammerstone 1 … 120
41 Hammerstone 2 … 121
42 Hammerstone 3 … 122
43 Distribution of the weight of hammerstone and polishing stone … 123
44 Dimple Stone … 123
45 Distribution of stone arrowhead, point, and spatula … 124
46 Stone arrowhead 1 … 125
47 Stone arrowhead 2 … 126
48 Stone arrowhead 3 … 127
49 The relation between length and width of stone arrowhead … 130
50 Distribution of Point and Stone spatura … 131
51 Distribution of Stone weight and Polished stone axe … 132
52 Stone weight · Polished stone axe … 132
53 Distribution of discoidal stone tools … 133

54 Discoidal stone tools 1 … 136
55 Discoidal stone tools 2 … 137
56 Discoidal stone tools 3 … 138
57 Distribution of Tanged stone scraper … 139
58 Tanged stone scraper · 1 … 140
59 Tanged stone scraper · 2 … 141
60 Tanged stone scraper · 3 … 143
61 Distribution of side scraper … 145
62 Side scraper · 1 … 146
63 Side scraper · 2 … 147
64 Distribution of stone awl … 148
65 Stone awl … 149
66 Others … 150
67 Distribution of double-edged stone whith one handle knob … 150
68 Double-edged stone with one handle knob … 151
69 Double-edged groove stone bar with constricted middle section … 151
70 Distribution of cray objects unearthened from the west area … 154
71 Cray figurine … 155
72 Cray figurine … 156
73 Cray objects … 157
74 Distribution of stone-made objects unearthened from west area … 162
75 Stone figurine 1 … 163
76 Stone figurine 2 … 164
77 Stone figurine 3 … 165
78 Stone imitation of cray tablets … 166
79 Distribution of Stone imitation of cray tablets and stone-made objects … 167
80 Other stone-made objects … 169
81 The cross section of the strata at East area and the stratigraphic position extracting dates … 173
82 The cross section of the strata at West area and the stratigraphic position extracting dates … 173
83 Pollen diagram … 175
84 Distribution of a diameter of pollen of rice family … 179
85 Distribution of the final Jomon phase sites unearthed stone figurines … 183
86 Comparison the estemated size of stone figurines … 186

87 Stone figure in the final Jomon phase … … … … … … … … … … … … … 188
88 Distribution of Stone figures unearthed with Ento(円筒) type pottery … … … … 189
89 Progress of the study about Stone and Cray tablets … … … … … … … … … … 189

List of Photograph

1 The micrograph of woody plants
2 The micrograph of plant pollen
3 The micrograph of buckweat pollen
4 Stone figure unearthed with Ento type pottery

List of Plate

Opening photograph
1 Large stone figurine's breath
2 Upper : Large stone figurine's legs
Lower : Grinding srab used as a pallette
Plate 1 The view of the site
2 Large stone figurine's breath
3 Upper : Large stone figurine's legs
Lower : East area (From South east)
4 Upper : East area G46 North wall
Lower : East area Distribution of the Gathering pottery
5 Right : West area (From South)
Left : The whole view of Post holes from the north
6 Upper : West area Cross section (Whole view)
Lower : West area Cross section (South – west corner)
7 Upper : West area Condition of discovering remains (West)
Lower : West area Conditions of discovering remains from G17
8 Upper : West area Conditions of discovering remains from G17
Lower : West area Conditions of discovering remains from G17
9 Upper : West area G 4
Lower : West area G 4
10 Upper : West area G 8
Lower : West area G 8 A pottery containing a hammerstone
11 Upper : West area G17 Stone figurine
Lower : West area G17 Stone figurine

12 Upper : W63 Unearthed condition of Stone figurine

Lower : W63 Unearthed condition of Stone figurine

13 Upper : Large earthen pit cross section (North)

Lower : The whole view of the Large earthen pit (West)

14 Upper : W29 Pit 1

Lower : W56 Pit 1

15 Upper : The whole view after finished the excavation (West)

Lower : Post holes (East)

16 Deep bowl Ⅰ－1 (Photo)

17 Deep bowl Ⅰ－1

18 Deep bowl Ⅰ－1 (Photo)

19 Deep bowl Ⅰ－1

20 Deep bowl Ⅰ－1 (Photo)

21 Deep bowl Ⅰ－1

22 Deep bowl Ⅰ－2 (Photo)

23 Deep bowl Ⅰ－2

24 Deep bowl Ⅰ－2 (Photo)

25 Deep bowl Ⅰ－2

26 Deep bowl Ⅰ－2，Ⅱ－1 (Photo)

27 Deep bowl Ⅰ－2，Ⅱ－1

28 Deep bowl Ⅱ－1 (Photo)

29 Deep bowl Ⅱ－1

30 Deep bowl Ⅱ－1 (Photo)

31 Deep bowl Ⅱ－1

32 Deep bowl Ⅱ－1 (Photo)

33 Deep bowl Ⅱ－1

34 Deep bowl Ⅱ－1 (Photo)

35 Deep bowl Ⅱ－1

36 Deep bowl Ⅱ－2 (Photo)

37 Deep bowl Ⅱ－2

38 Deep bowl Ⅱ－2 (Photo)

39 Deep bowl Ⅱ－2

40 Deep bowl Ⅱ－2 (Photo)

41 Deep bowl Ⅱ－2

42 Deep bowl Ⅱ－2 (Photo)

43 Deep bowl Ⅱ－2

44 Bowl Ⅰ－1 (Photo)

45 Bowl Ⅰ－1

46 Bowl Ⅰ－1 (Photo)

47 Bowl Ⅰ－1

48 Bowl Ⅰ－1，2 (Photo)

49 Bowl Ⅰ－1，2

50 Bowl Ⅰ－2 (Photo)

51 Bowl Ⅰ－2

52 Bowl Ⅰ－2 (Photo)

53 Bowl Ⅰ－2

54 Bowl Ⅰ－4 (Photo)

55 Bowl Ⅰ－4

56 Bowl Ⅱ－1 (Photo)

57 Bowl Ⅱ－1

58 Bowl Ⅱ－1 (Photo)

59 Bowl Ⅱ－1

60 Bowl Ⅱ－1 (Photo)

61 Bowl Ⅱ－1

62 Bowl Ⅱ－1 (Photo)

63 Bowl Ⅱ－1

64 Bowl Ⅱ－2 (Photo)

65 Bowl Ⅱ－2

66 Bowl Ⅱ－2 (Photo)

67 Bowl Ⅱ－2

68 Bowl Ⅱ－2 (Photo)

69 Bowl Ⅱ－2

70 Bowl Ⅱ－3 (Photo)

71 Bowl Ⅱ－3

72 Shallow bowl Ⅰ－1 (Photo)

73 Shallow bowl Ⅰ－1

74 Shallow bowl Ⅰ－1 (Photo)

75 Shallow bowl Ⅰ－1

76 Shallow bowl Ⅰ－1 (Photo)

77 Shallow bowl Ⅰ－1

78 Shallow bowl Ⅱ－1 (Photo)

79 Shallow bowl Ⅱ－1

80 Shallow bowl Ⅱ－1 (Photo)

81 Shallow bowl Ⅱ－1

82 Shallow bowl Ⅱ－1 (Photo)

83 Shallow bowl Ⅱ－1

84 Shallow bowl Ⅱ－1 (Photo)

85 Shallow bowl Ⅱ－1

86 Shallow bowl Ⅱ－2 (Photo)

87 Shallow bowl Ⅱ－2

88 Shallow bowl Ⅱ－1 (Photo)

89 Shallow bowl Ⅱ－1

90 Shallow bowl Ⅱ－1，2 (Photo)

91 Shallow bowl Ⅱ－1，2

92 Shallow bowl Ⅱ－2 (Photo)

93 Shallow bowl Ⅱ－2

94 Shallow bowl Ⅱ－2 (Photo)

95 Shallow bowl Ⅱ－2

96 Shallow bowl Ⅱ－3 (Photo)

97 Shallow bowl Ⅱ－3

98 Pedestaled deep bowl Ⅰ－1 (Photo)

99 Pedestaled deep bowl Ⅰ－1

100 Pedestaled bowl Ⅰ－1 (Photo)

101 Pedestaled bowl Ⅰ－1

102 Pedestaled bowl Ⅰ－1 (Photo)

103 Pedestaled bowl Ⅰ－1

104 Pedestaled bowl Ⅰ－1 (Photo)

105 Pedestaled bowl Ⅰ－1

106 Pedestaled bowl Ⅰ－1 (Photo)

107 Pedestaled bowl Ⅰ－1

108 Pedestaled bowl Ⅰ－2 (Photo)

109 Pedestaled bowl Ⅰ－2

110 Pedestaled bowl Ⅰ－2 (Photo)

111 Pedestaled bowl Ⅰ－2

112 Pedestaled bowl Ⅰ－2 (Photo)

113 Pedestaled bowl Ⅰ－2

114 Pedestaled bowl Ⅰ－2 (Photo)

115 Pedestaled bowl Ⅰ－2

116 Pedestaled bowl Ⅰ－2 (Photo)

117 Pedestaled bowl Ⅰ－2

118 Pedestaled bowl Ⅰ－2 (Photo)

119 Pedestaled bowl Ⅰ－2

120 Pedestaled bowl Ⅱ－1 (Photo)

121 Pedestaled bowl Ⅱ－1

122 Pedestaled bowl Ⅱ－1 (Photo)

123 Pedestaled bowl Ⅱ－1

124 Pedestaled bowl Ⅱ－1 (Photo)

125 Pedestaled bowl Ⅱ－1

126 Pedestaled bowl Ⅱ－2，3 (Photo)

127 Pedestaled bowl Ⅱ－2，3

128 Pedestaled shallow bowl Ⅰ－1 (Photo)

129 Pedestaled shallow bowl Ⅰ－1

130 Vase ⅠA (Photo)

131 Vase ⅠA

132 Vase ⅠA (Photo)

133 Vase ⅠA

134 Vase ⅠA (Photo)

135 Vase ⅠA

136 Vase ⅠA (Photo)

137 Vase ⅠA

138 Vase ⅠA (Photo)

139 Vase ⅠA

140 Vase ⅠA (Photo)

141 Vase ⅠA

142 Vase ⅠB, ⅡA/B (Photo)

143 Vase ⅠB, ⅡA/B

144 Vase ⅡA (Photo)

145 Vase ⅡA

146 Vase ⅡA/B, ⅢB (Photo)

147 Vase ⅡA/B, ⅢB

148 Vase Ⅳ/V (Photo)

149 Vase Ⅳ/V

150 Vase ⅥA (Photo)

151 Vase ⅥA

152 Vase ⅥA/B (Photo)

153 Vase ⅥA/B

154 Vase ⅥB (Photo)

155 Vase ⅥB

156 Vase Ⅶ (Photo)

157 Vase Ⅶ

158 Spouted vessel Ⅰ－2 (Photo)

159 Spouted vessel Ⅰ－2

160 Spouted vessel Ⅰ－2 (Photo)

161 Spouted vessel Ⅰ－2

162 Spouted vessel Ⅰ－2 (Photo)

163 Spouted vessel Ⅰ－2

164 Spouted vessel Ⅰ－3，Ⅱ－2 (Photo)

165 Spouted vessel Ⅰ－3，Ⅱ－2

166 Grinding srab, Dimpled stone, Chipped stone adze and Double－edged stone club with one handle knob

167 Hammerstone

168 Hammerstone, Polishing stone

169 Stone arrowhead

170 Stone arrowhead, Point, and Stone awl

171 Stone disk 1

172 Stone disk 2

173 Tanged stone scraper

174 Side scraper, Polished stone adze, Stone weight, Odd－looking stone materials and Double－edged grooved stone bar with constricted middle section.

175 Cray figurine

176 Cray figurine, Cray ear－ring and Cray disk

177 Stone figurine 1

178 Stone figurine 2

179 Stone imitation of the cray tablet

180 Stone imitation of the cray tablet and not finished one, Stone-made accessary, and Stone-made disk

181 Plant remains

182 Stone figurine in the Final Jomon 1

183 Stone figurine in the Final Jomon 2

184 Stone figurine in the Final Jomon 3

185 Stone figurine in the Final Jomon 4

186 Stone figurine in the Final Jomon 5

187 Stone figurine in the Final Jomon 6

188 Stone figurine in the Final Jomon 7

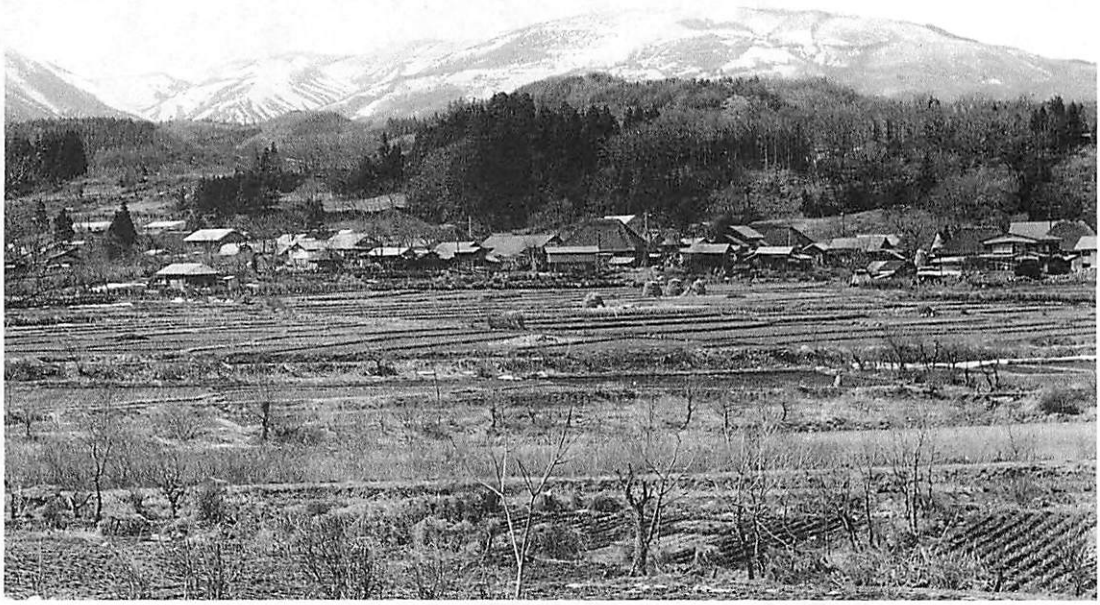
189 Stone figurine in the Final Jomon 8

190 Stone figurine in the Final Jomon 9

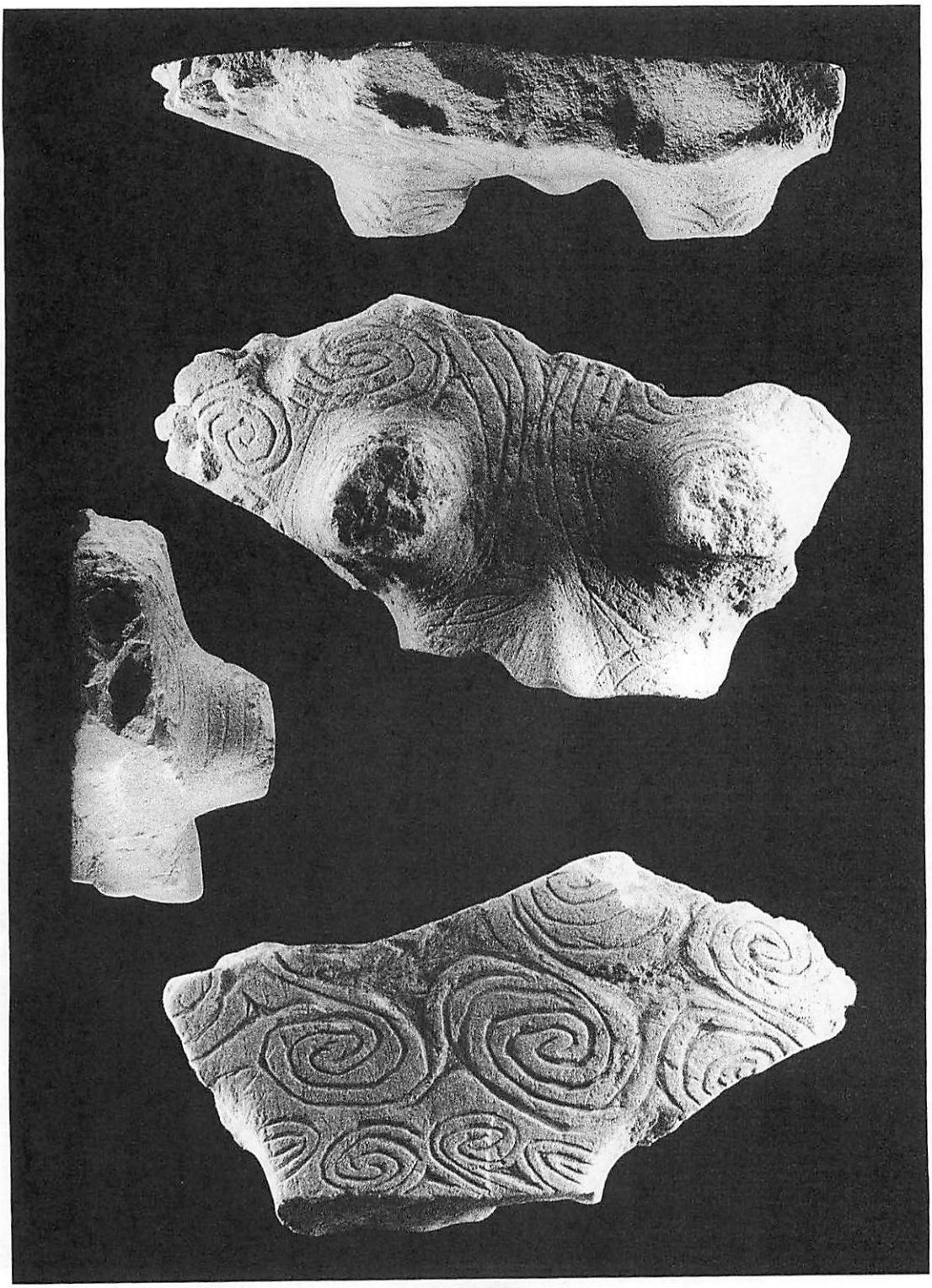
191 Stone figurine in the Final Jomon 10

192 Commemorative photograph

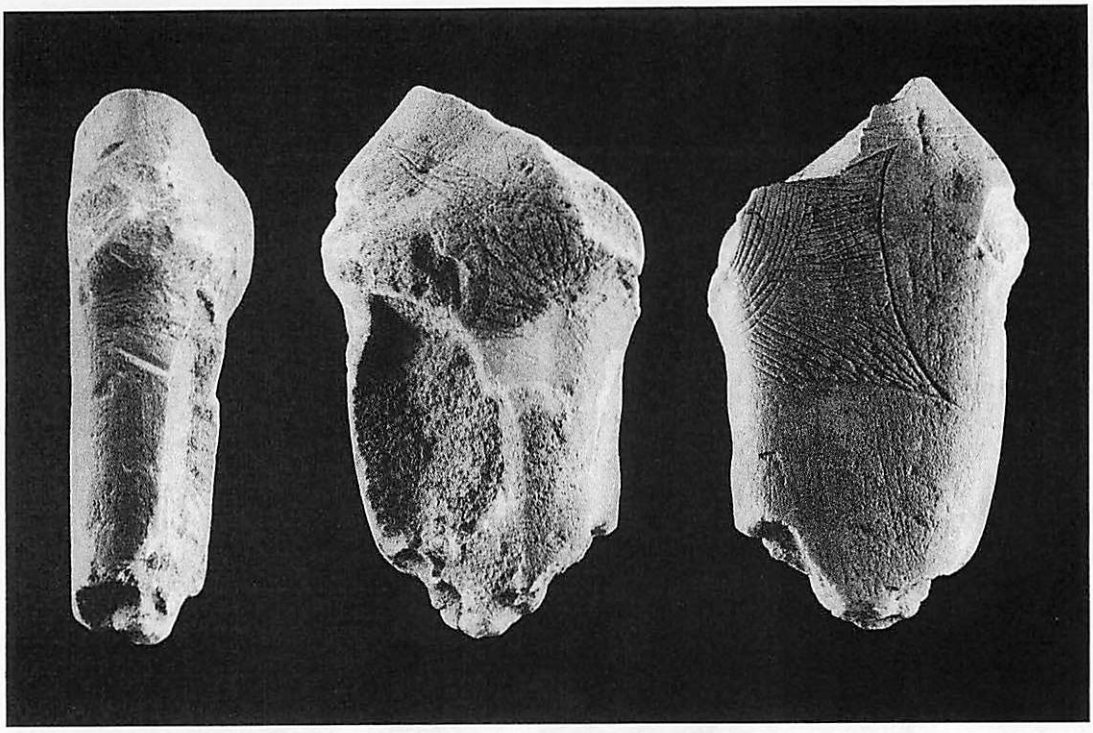
図　　版

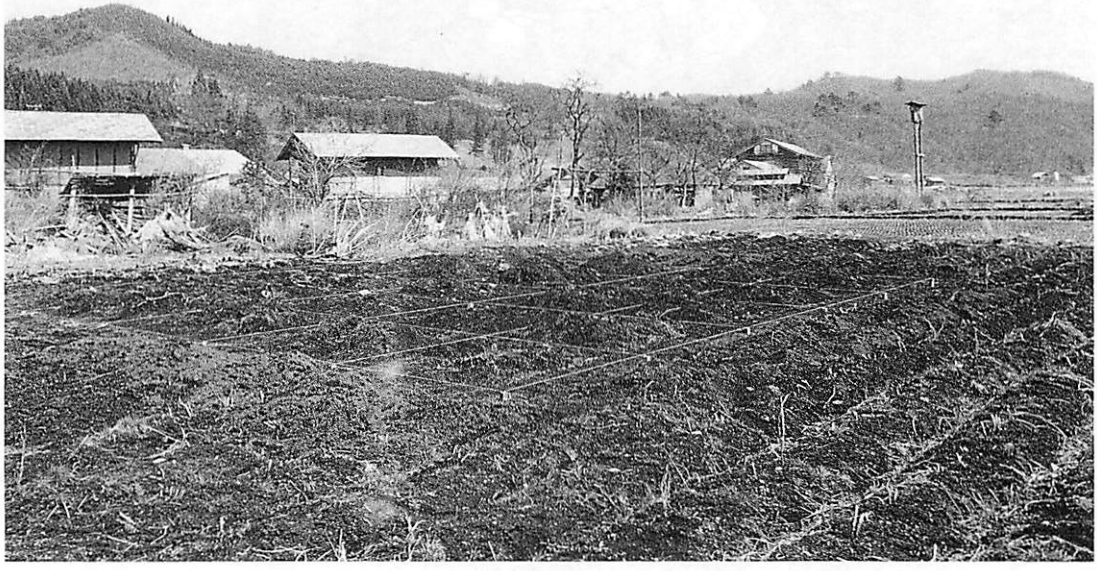


遺跡遠景(南より)



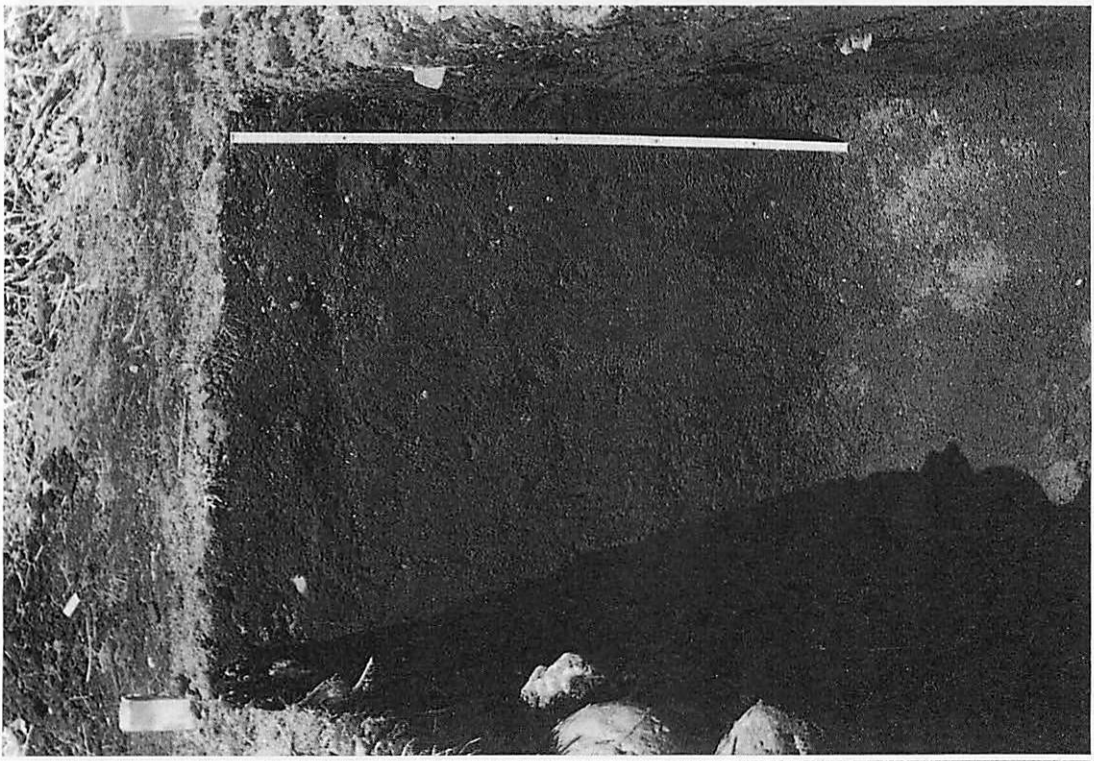
大岩偶胸部



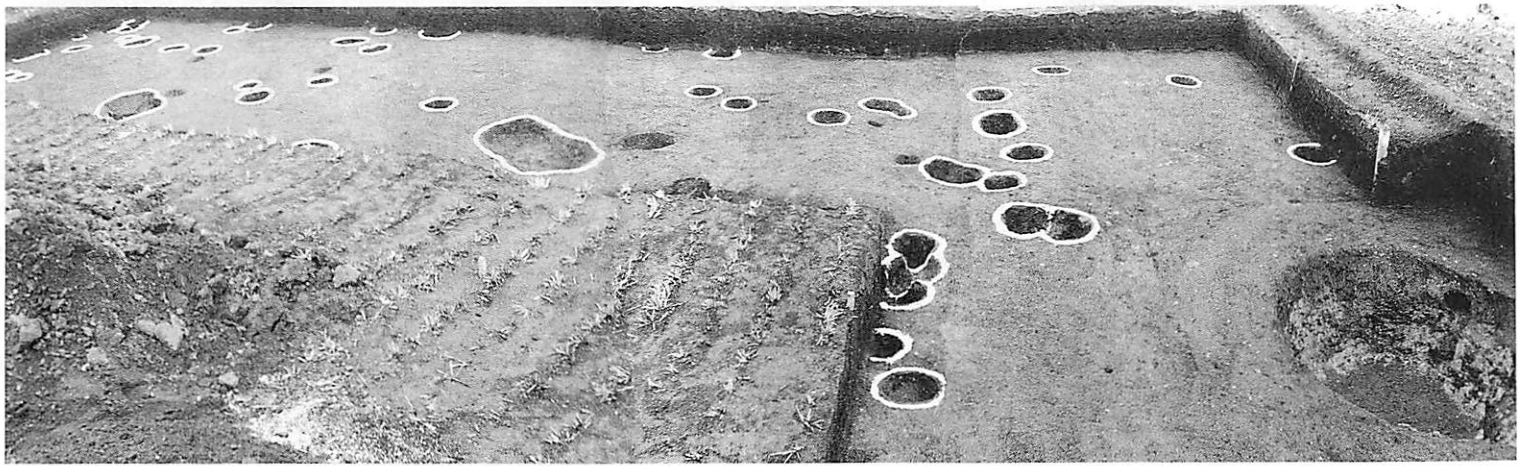


上：大岩偶脚部
下：東地区(西南より)

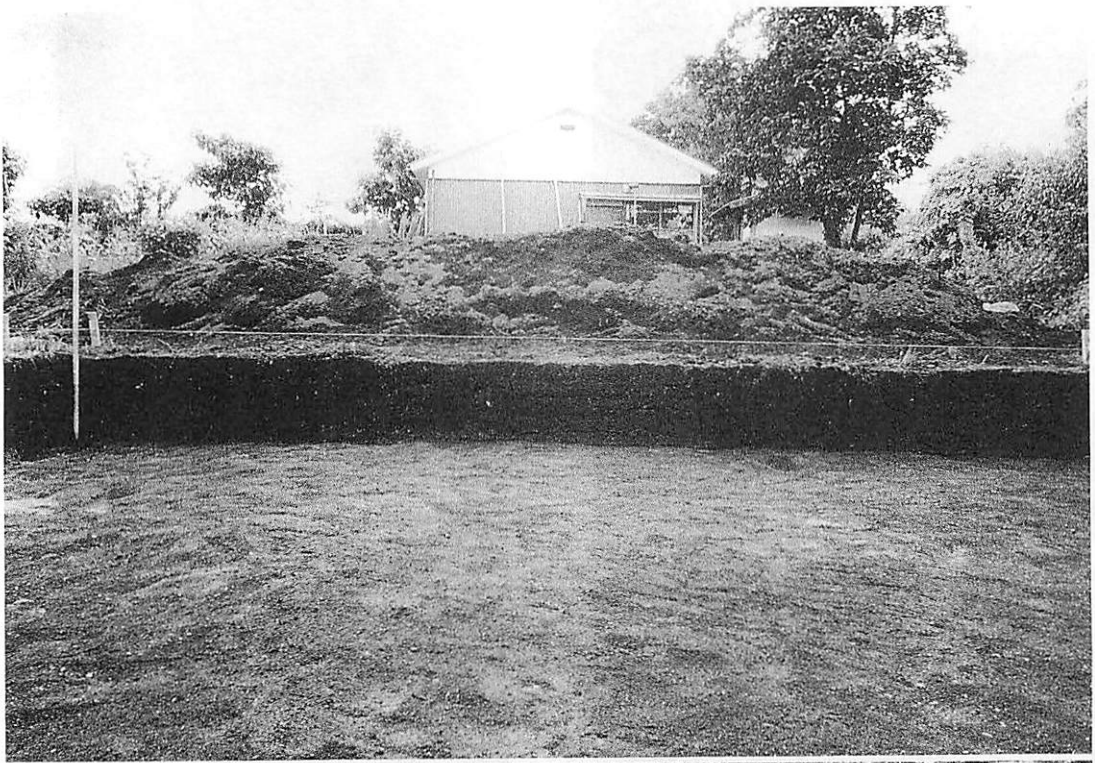
図版第四

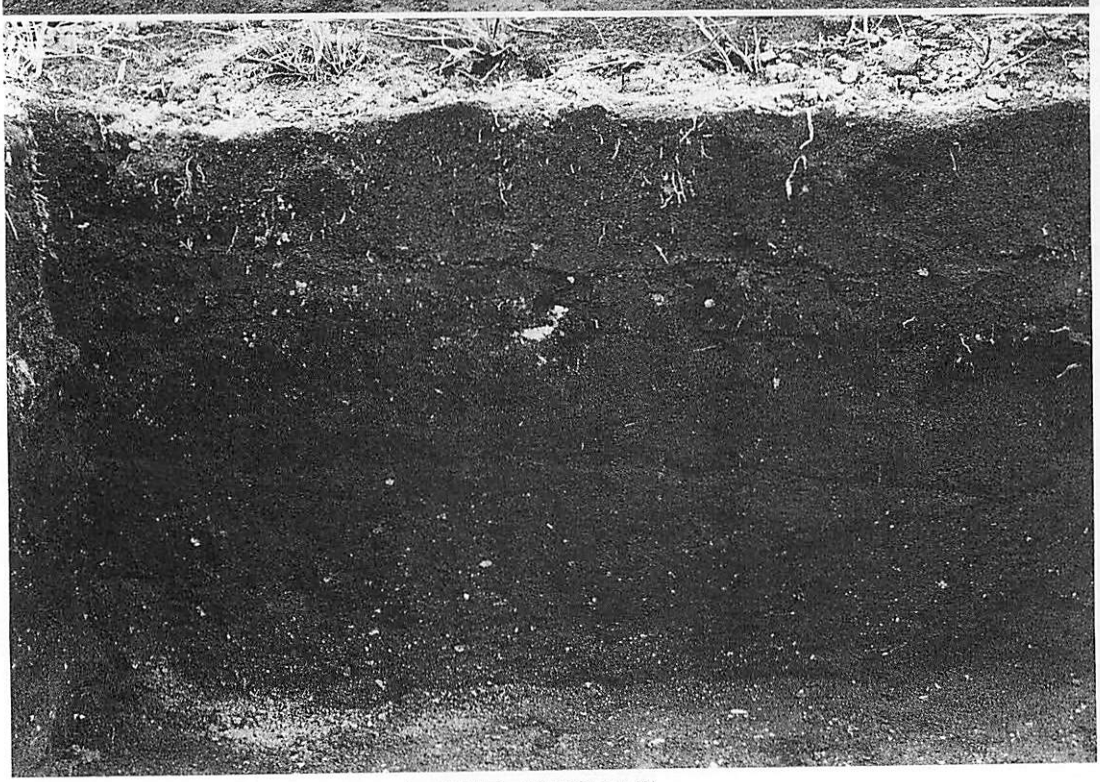


上：東地区　G46北壁
下：東地区　土器群出土状態



上 ： 西地区（南より）　下 ： Ⅴ層上面柱穴状ピット群全景（北より）





上：西地区　西壁断面(全景)
下：西地区　西壁断面(西南隅アップ)

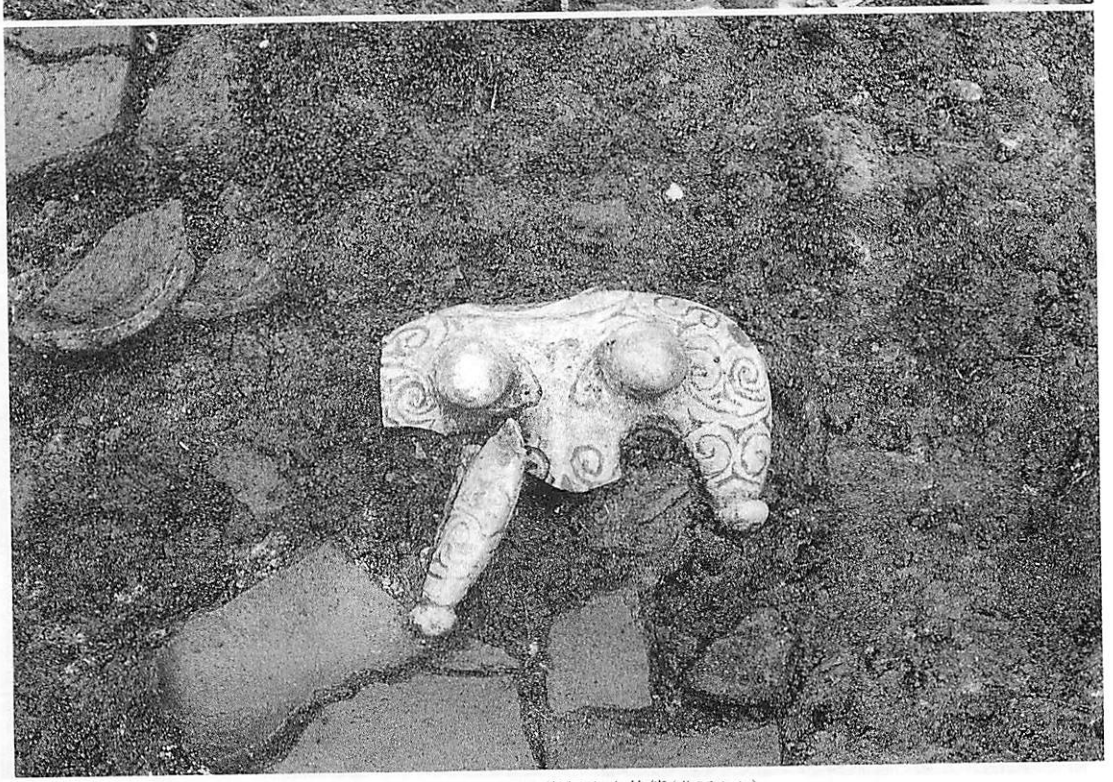
上：西地区　遺物出土状態全景(西より)
下：西地区　G17遺物出土状態

図版第八

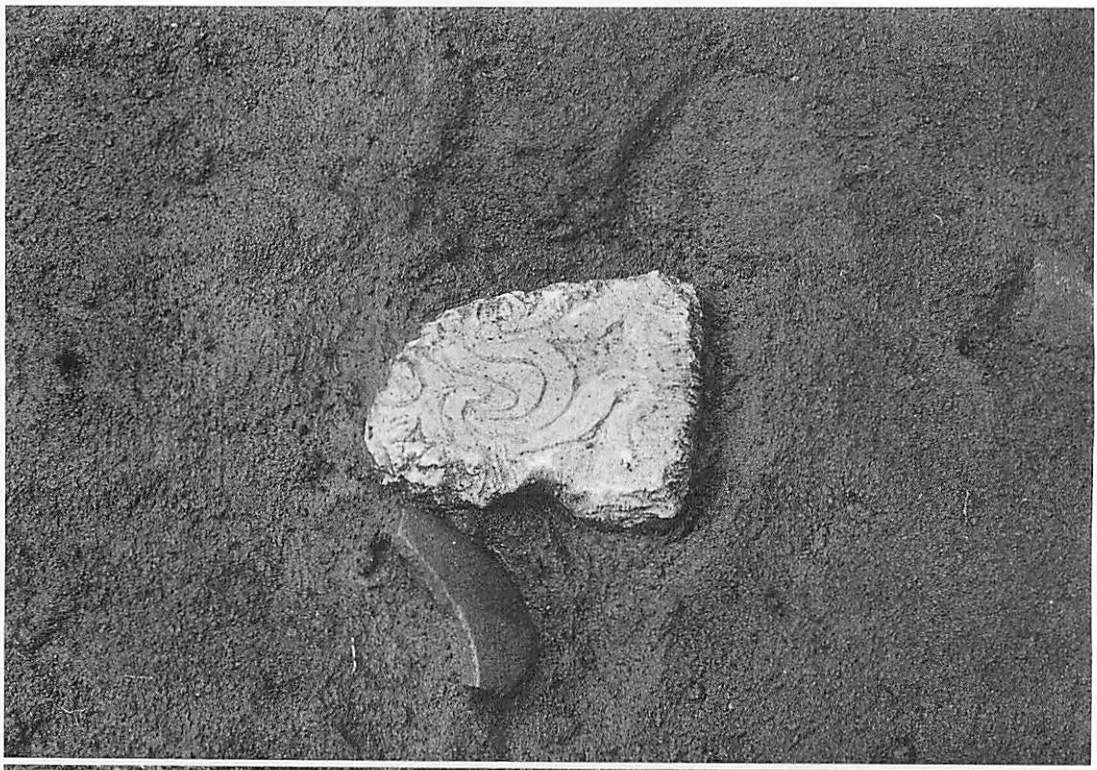
上：西地区　G17遺物出土状態
下：西地区　G17遺物出土状態

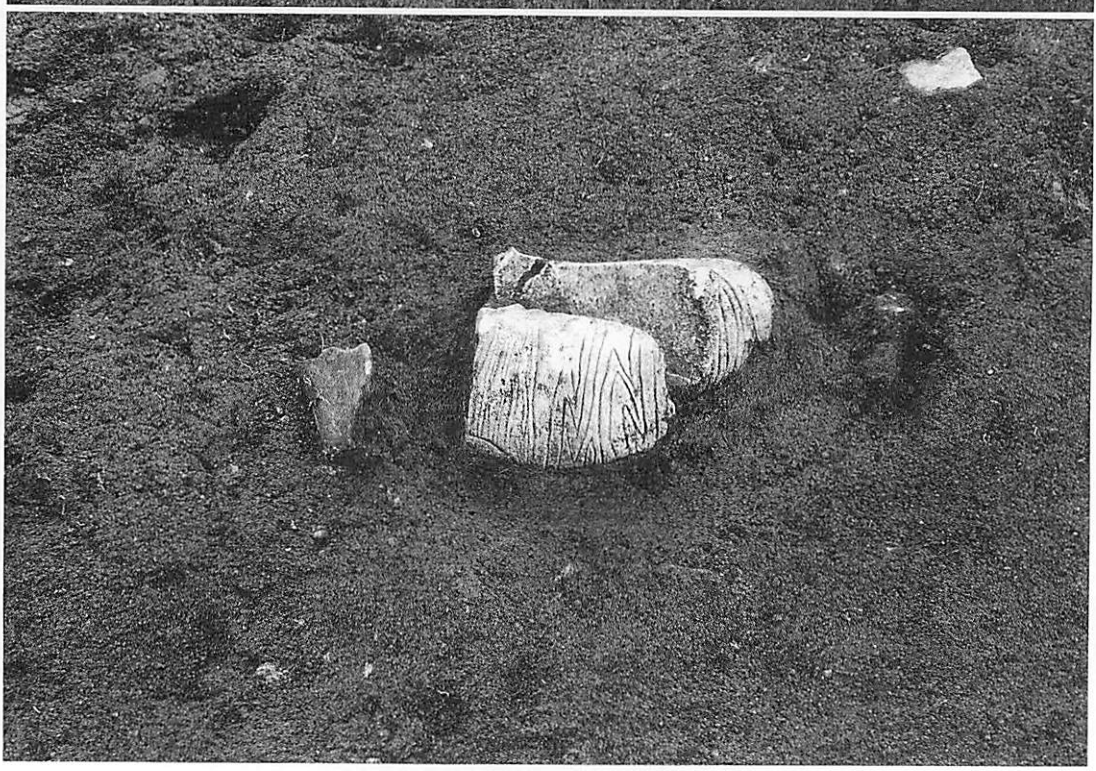
上：西地区　G 4
下：西地区　G 4

上：西地区　G８土器出土状態
下：西地区　G８敲石入り土器



上：西地区　G17岩偶出土状態(北西より)
下：西地区　G17岩偶出土状態(北東より)

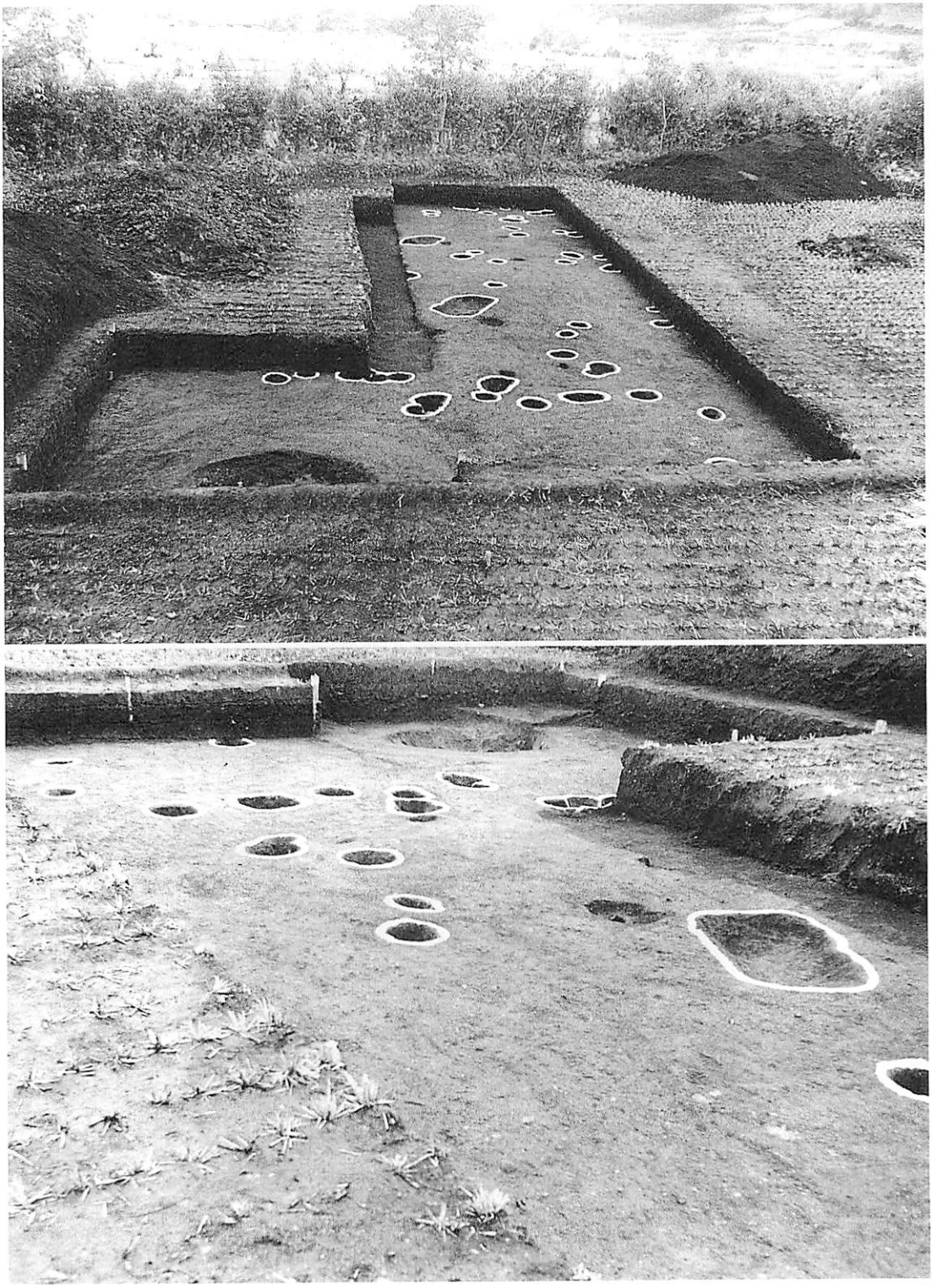




上：W63　岩偶出土状態
下：W63　岩偶出土状態

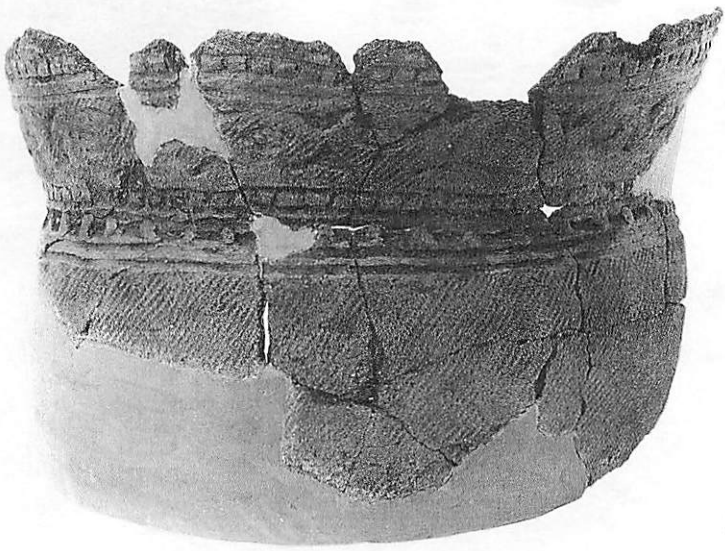
上：大土坑内断面(北側より)
下：大土坑全景(西側より)

上：W29　ピット1完掘状況
下：W56　ピット1完掘状況



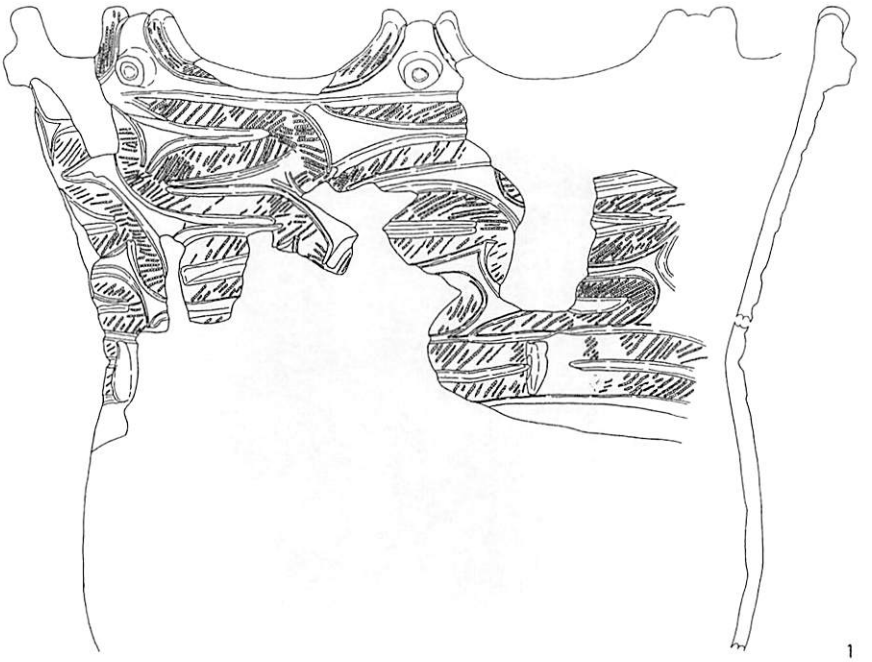
上：発掘終了後全景（西側より）
下：柱穴状ピット群（東側より）

1

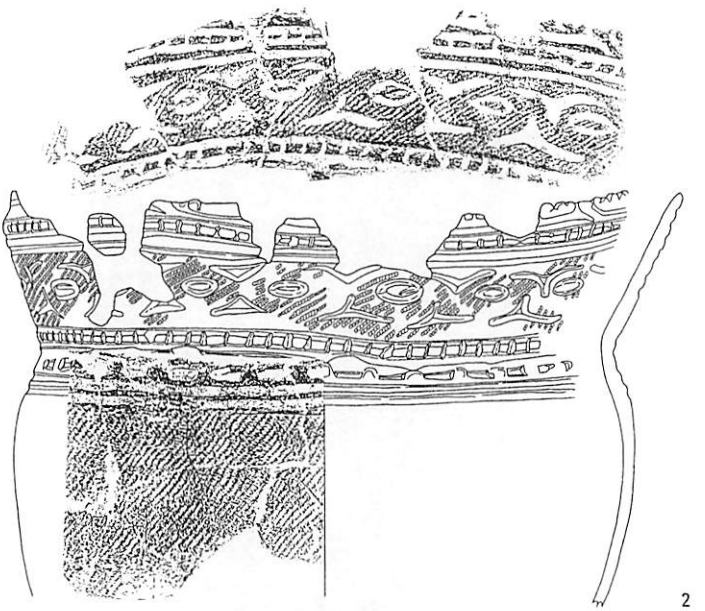


2

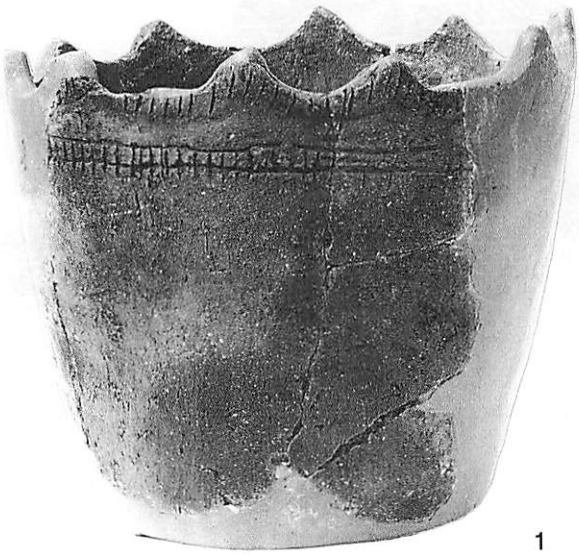
土器　深鉢Ⅰ類－1



0 10cm



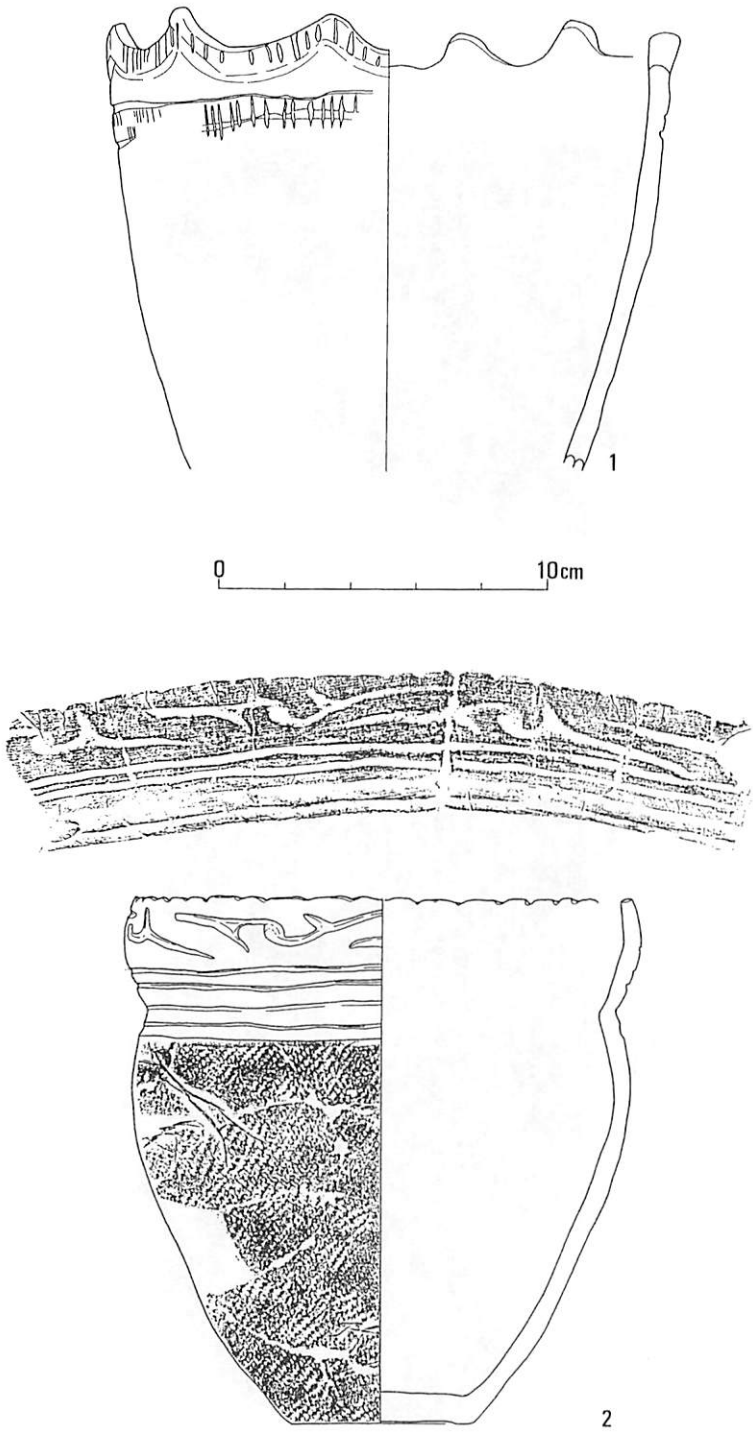
土器実測図　深鉢Ⅰ類－1



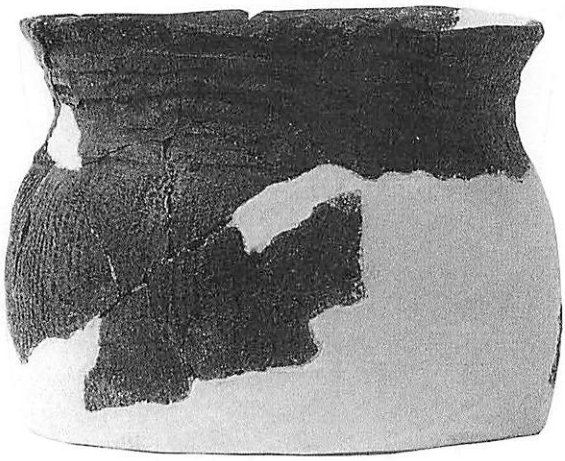
1

2

土器　深鉢Ⅰ類－1



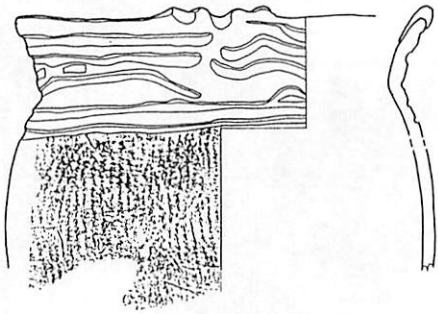
土器実測図　深鉢Ⅰ類－1

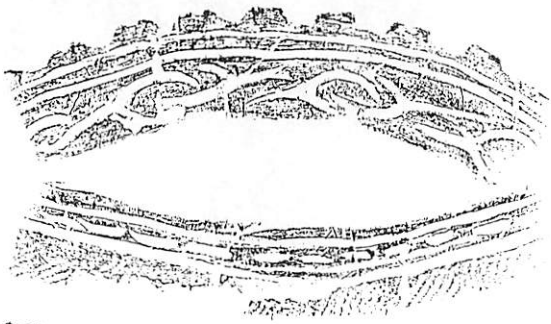


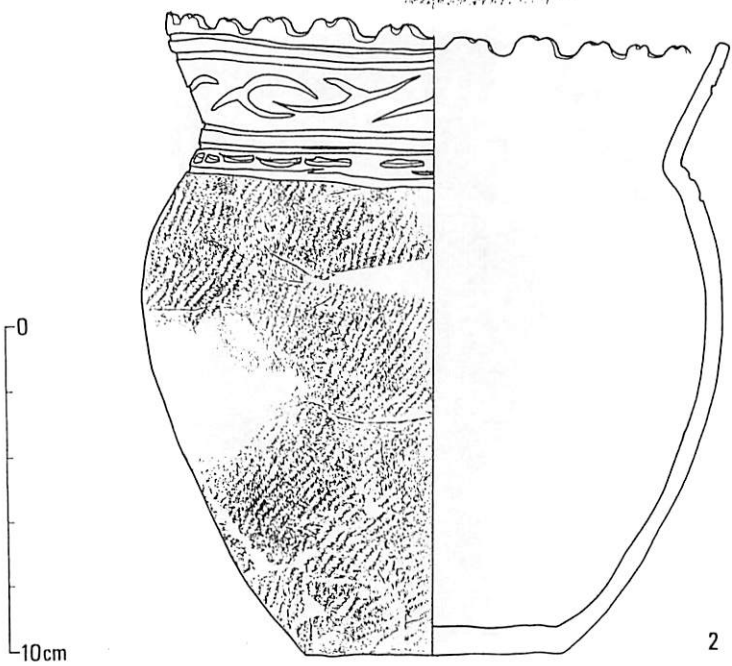
1

2

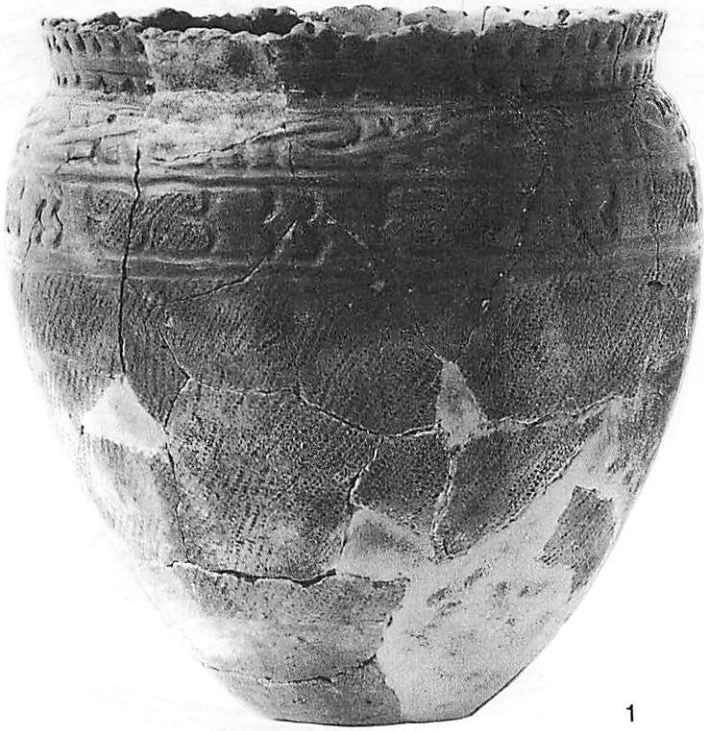
土器　深鉢Ⅰ類－1







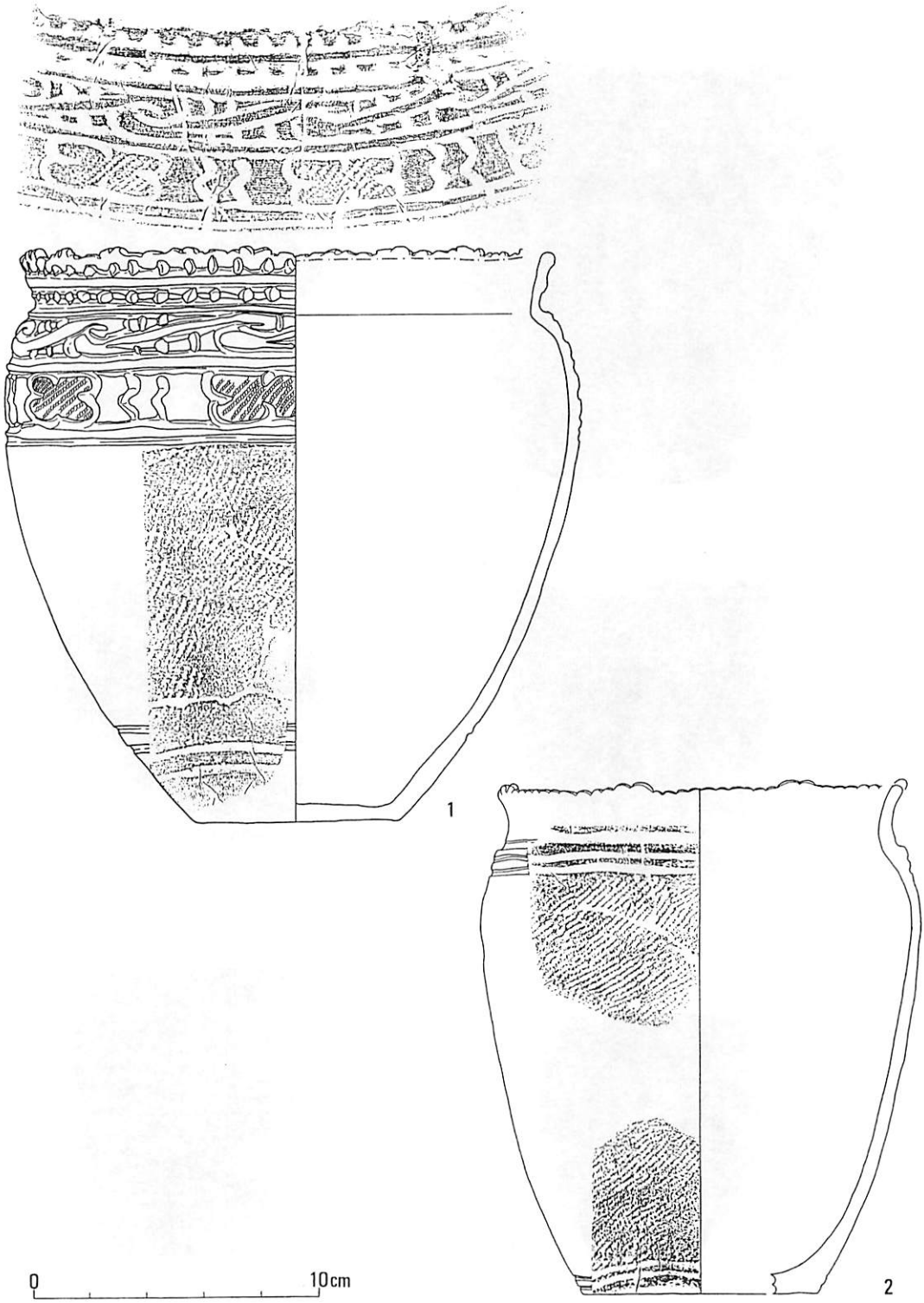
土器実測図　深鉢Ⅰ類－1



1

2

土器　深鉢Ⅰ類－2



土器実測図　深鉢Ⅰ類－2

1

2

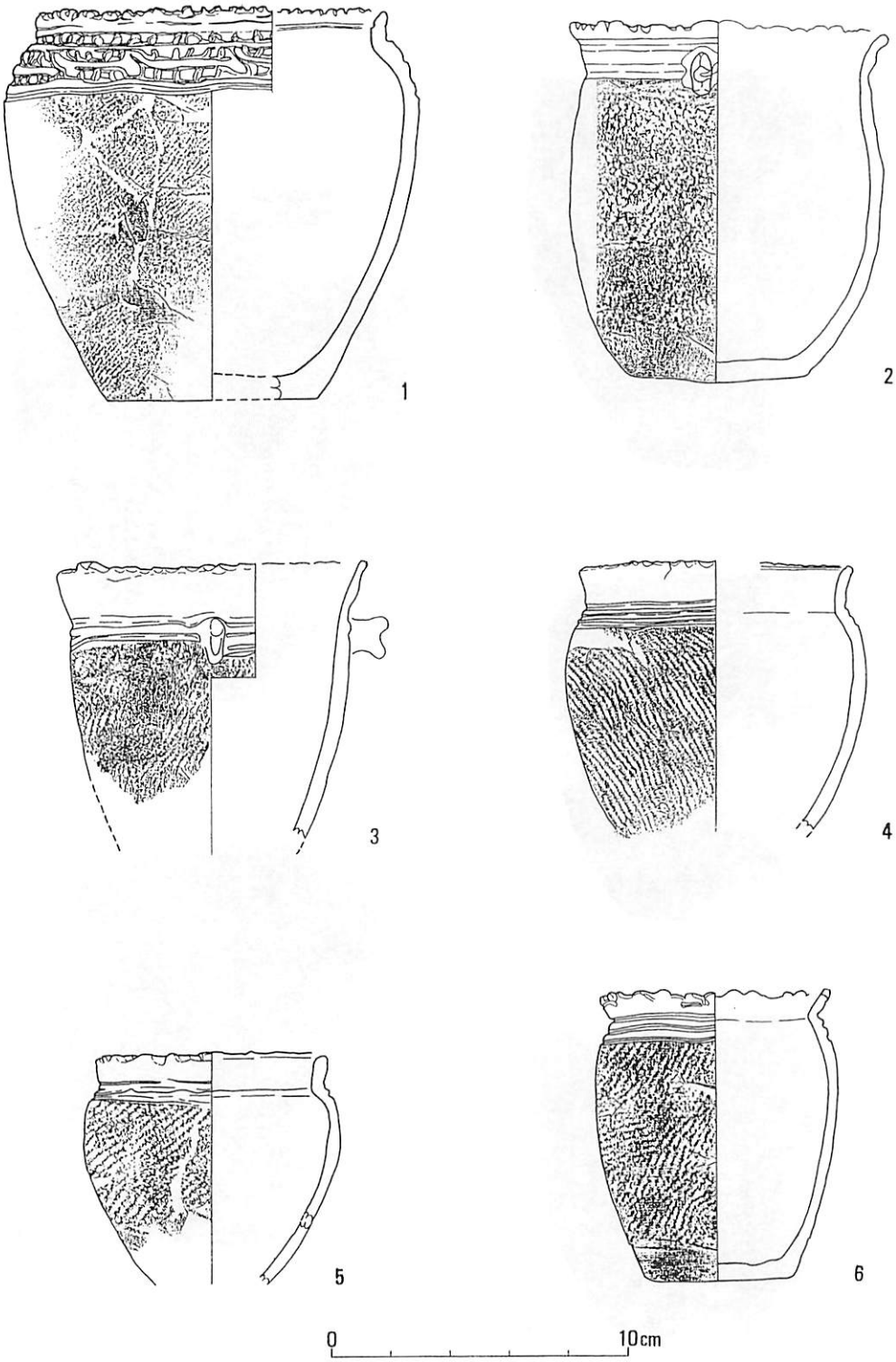
3

4

5

6

土器　深鉢Ⅰ類－2



土器実測図　深鉢Ⅰ類－2

1

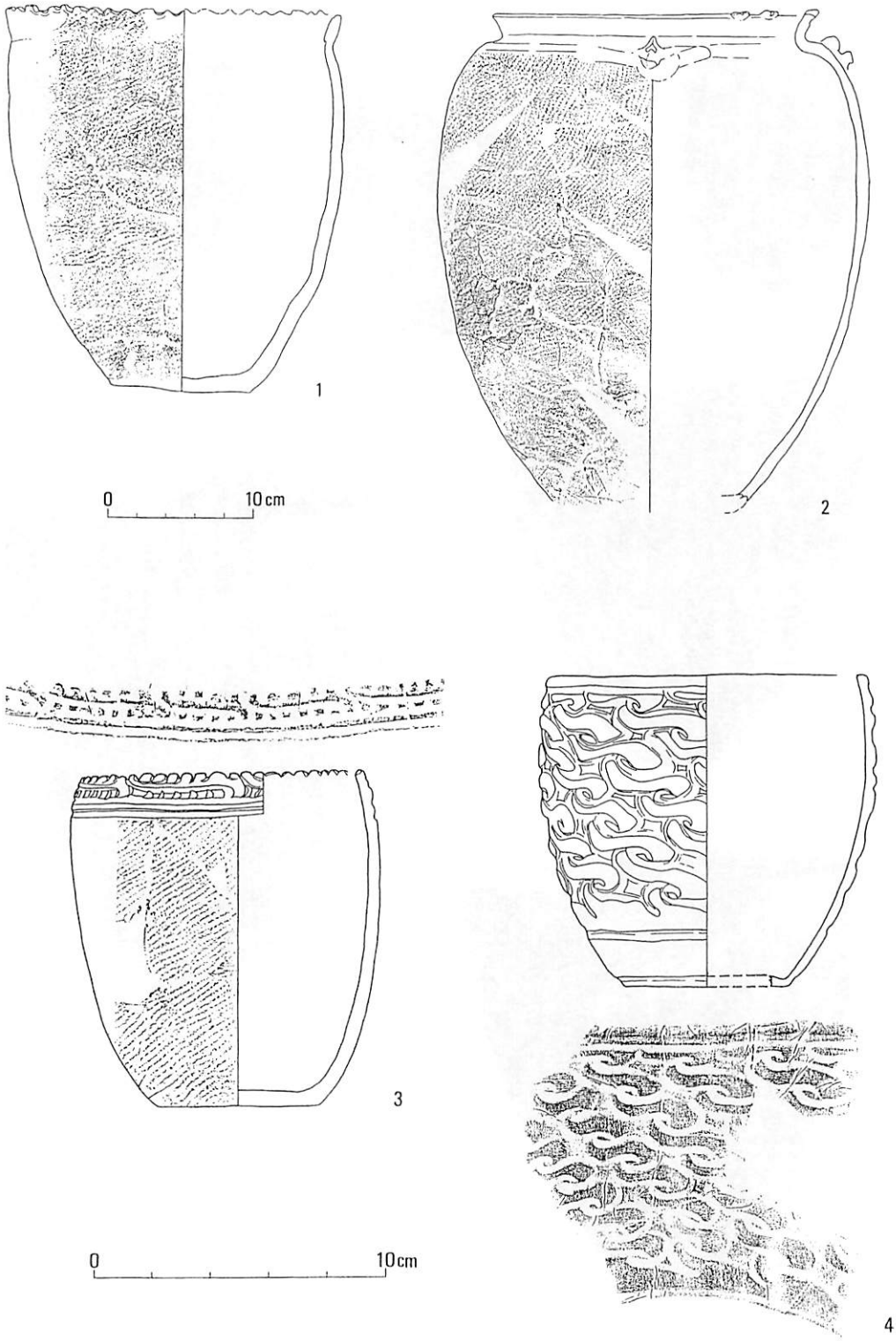
2

3

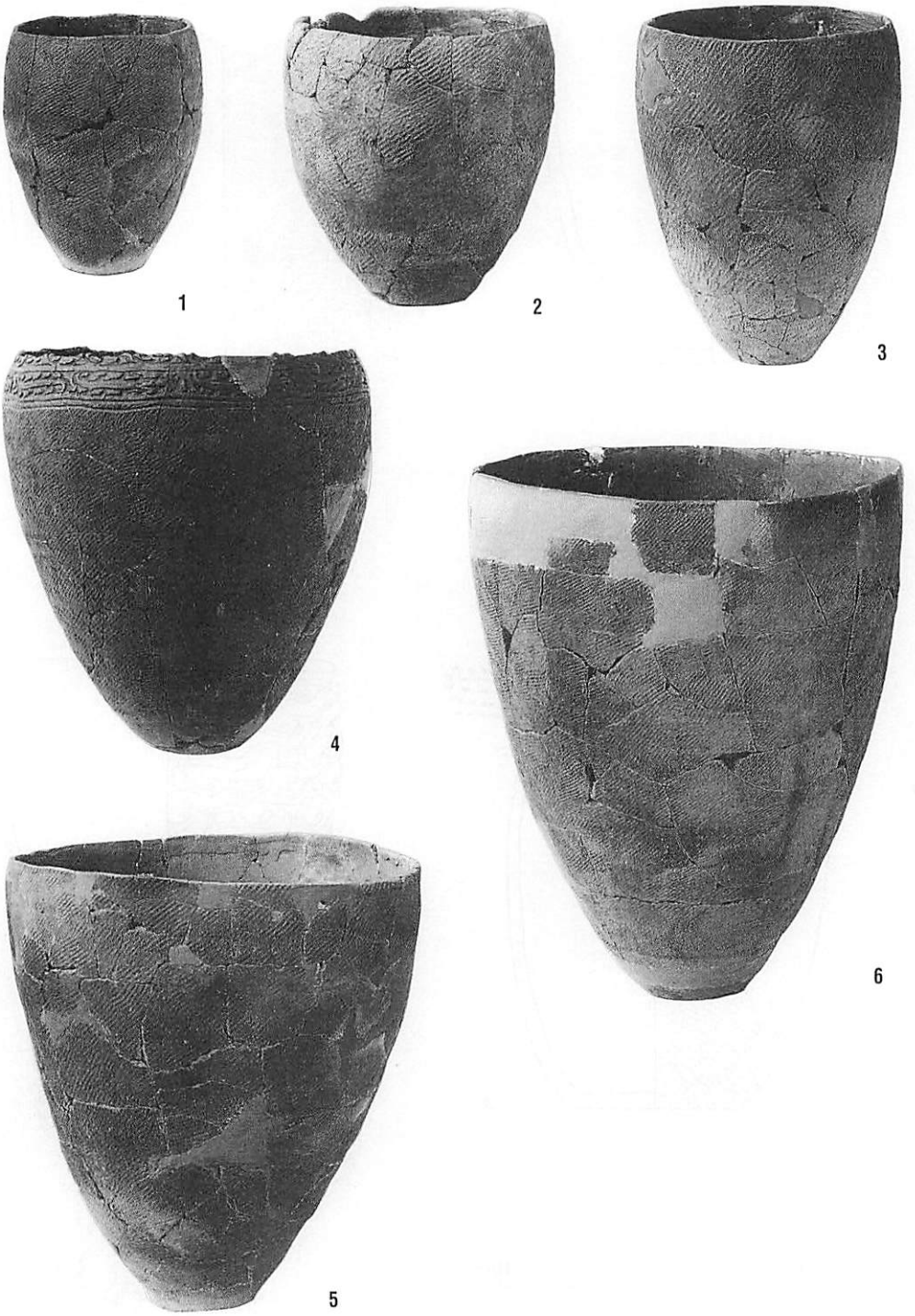
5

4

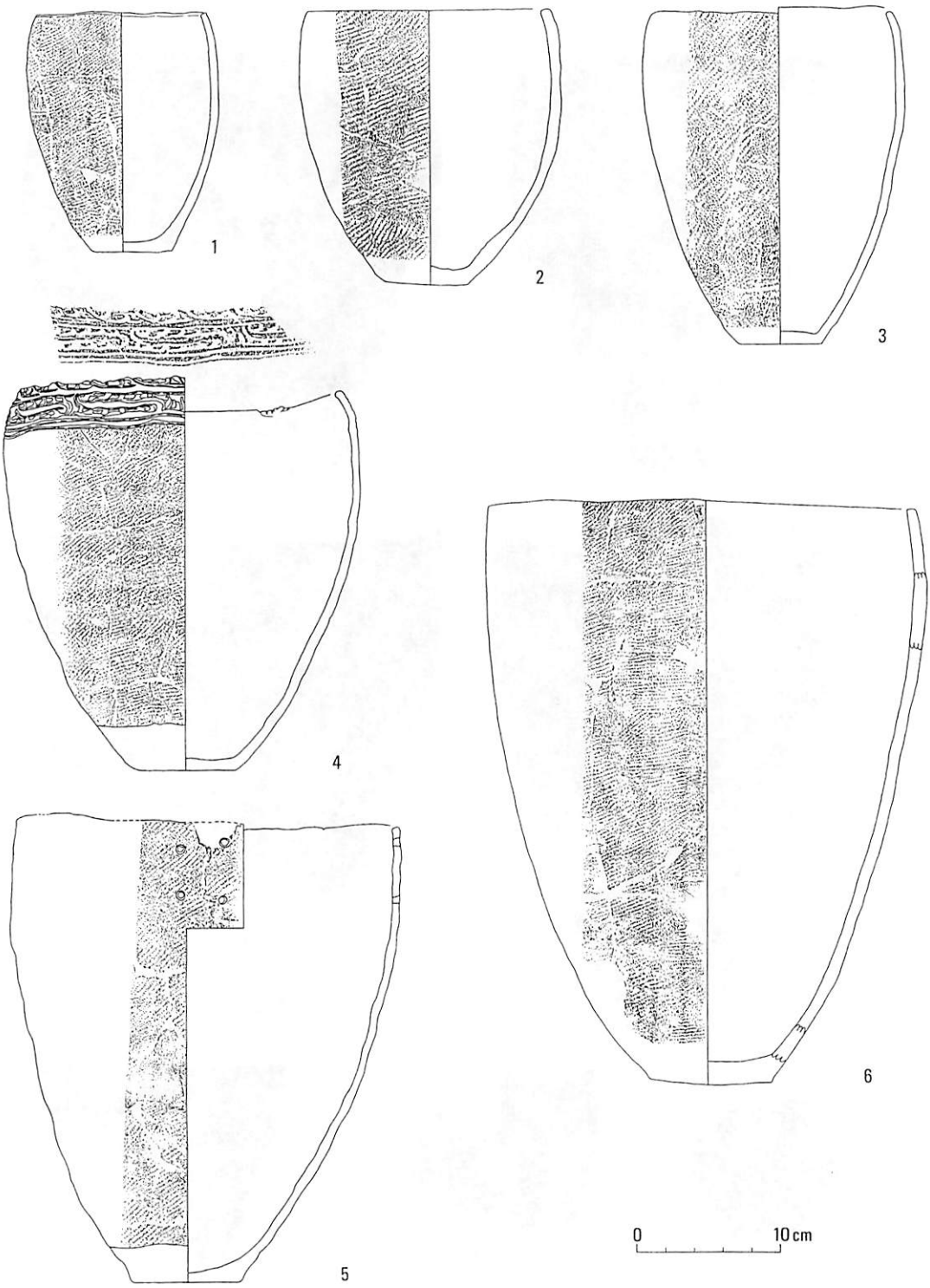
土器　深鉢Ⅰ類－2，深鉢Ⅱ類－1



土器実測図　深鉢Ⅰ類－2　深鉢Ⅱ類－1

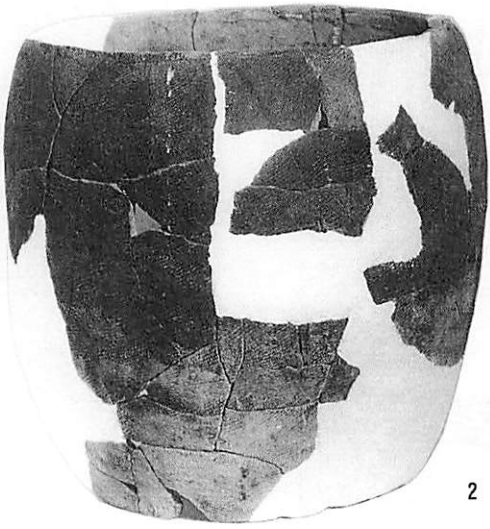


土器　深鉢Ⅱ類－1

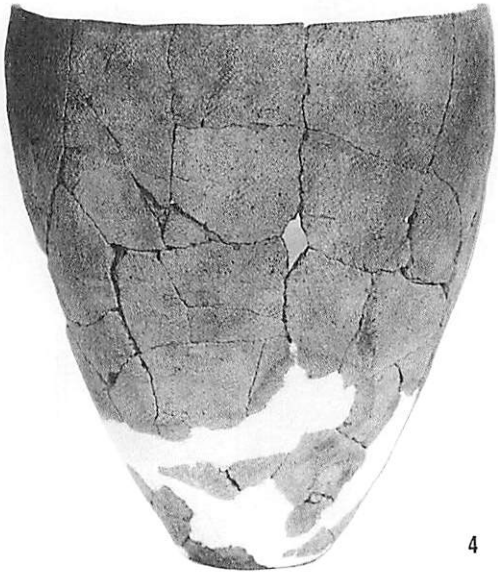


土器実測図　深鉢Ⅱ類－1

1


2

3

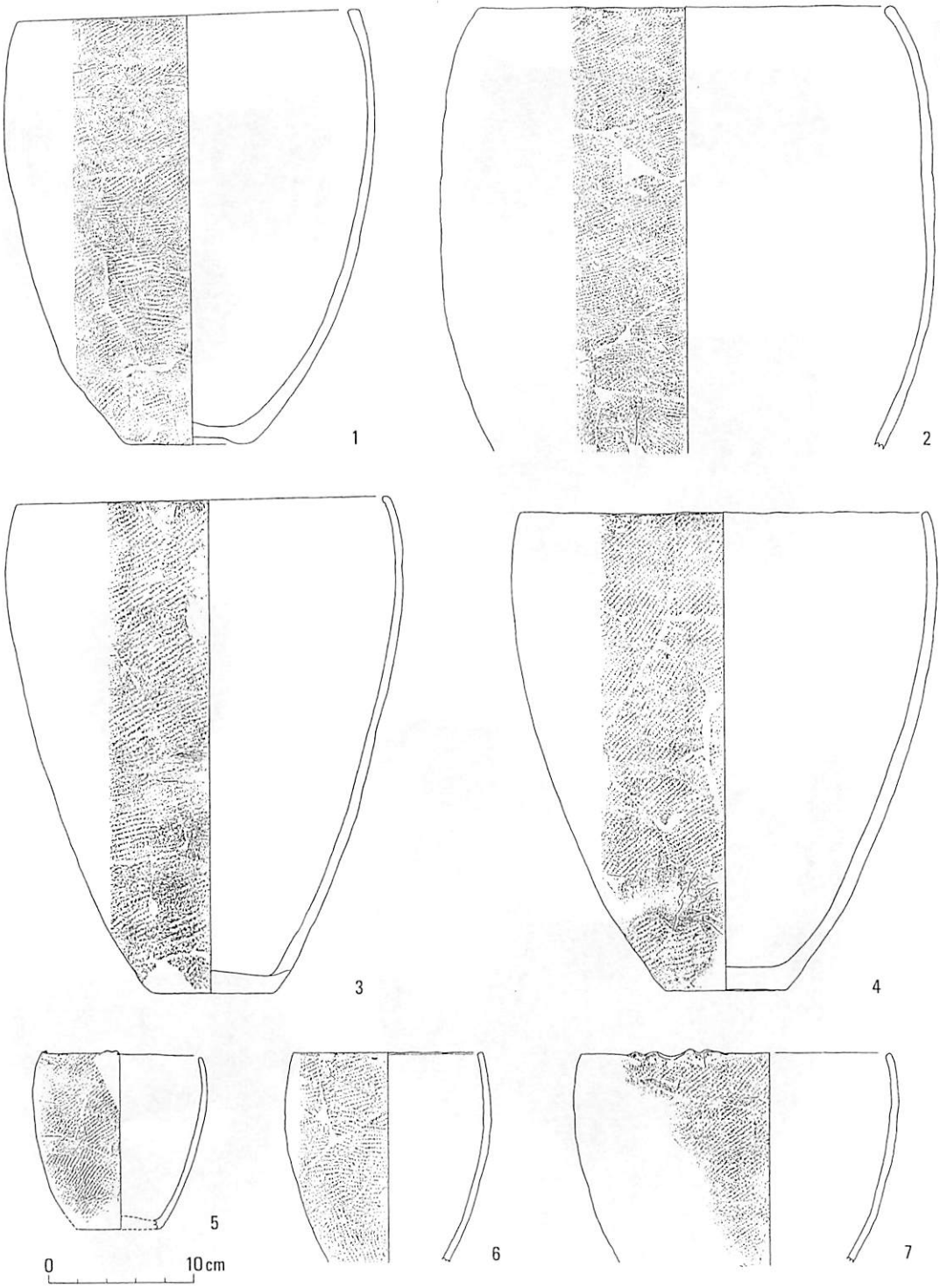

4

5

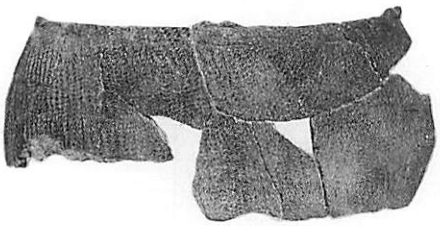
6

7

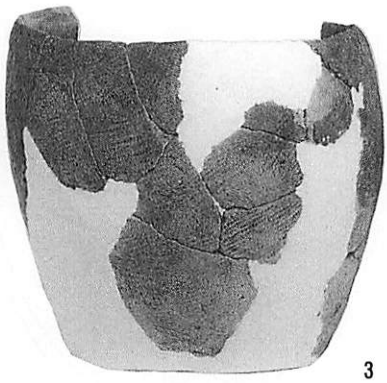
土器　深鉢Ⅱ類－1



土器実測図　深鉢Ⅱ類－1



1



3

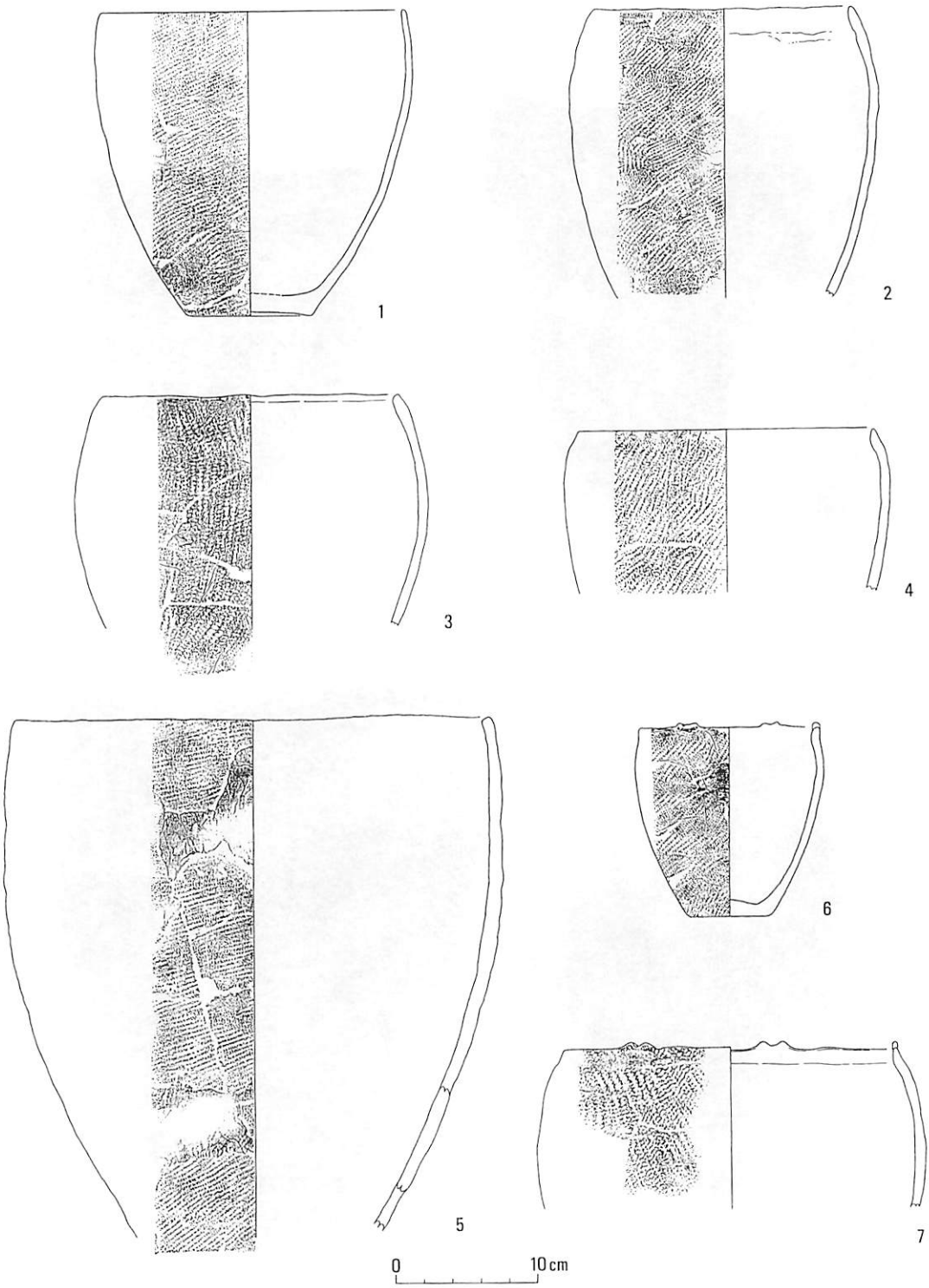
2

4

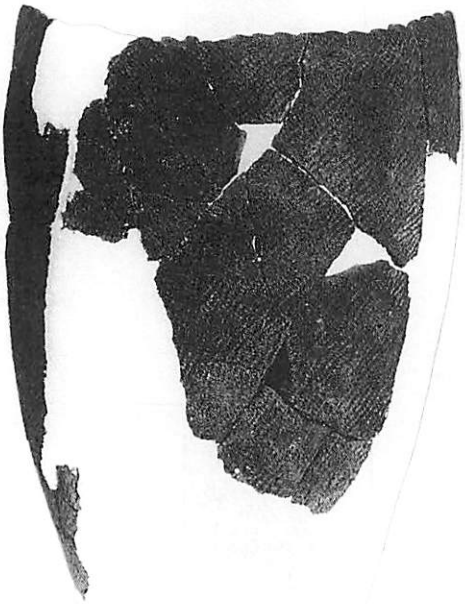
5

6

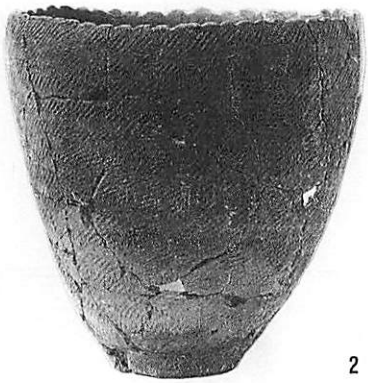
土器　深鉢Ⅱ類－1



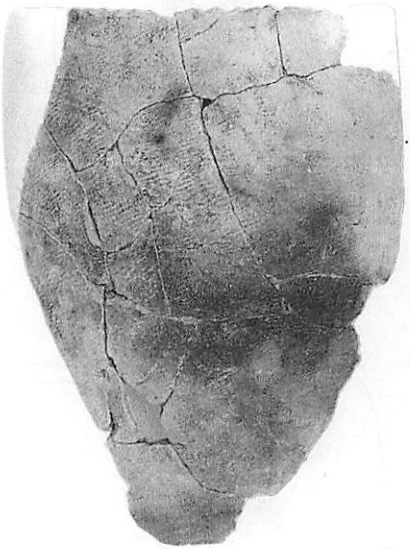
土器実測図　深鉢Ⅱ類－1



1



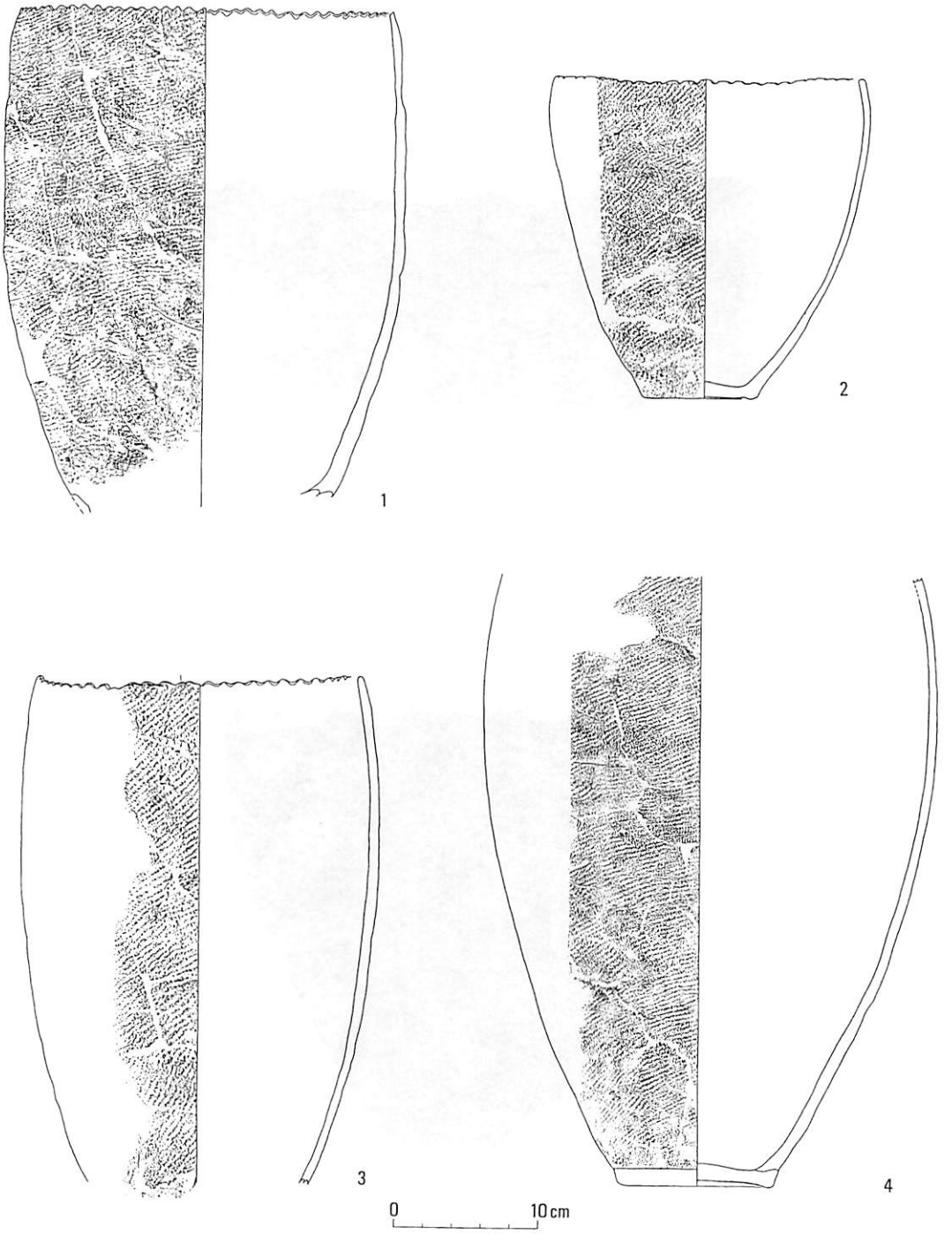
2



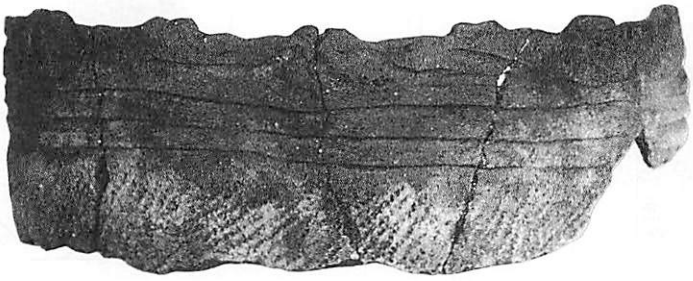
3

4

土器　深鉢Ⅱ類－1



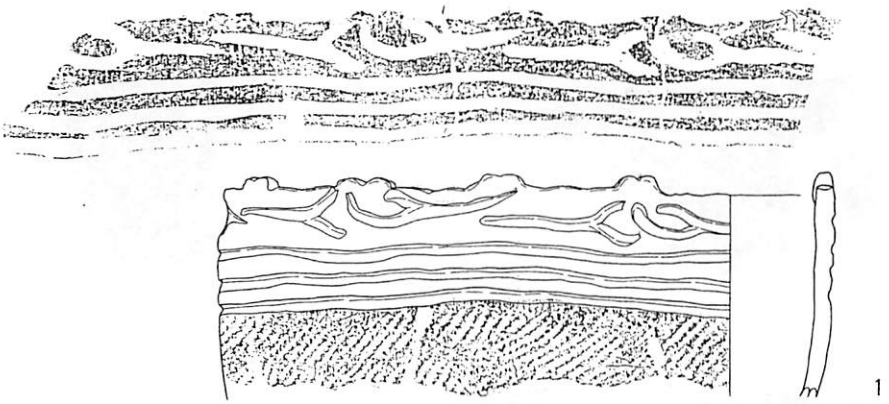
土器実測図　深鉢Ⅱ類－1

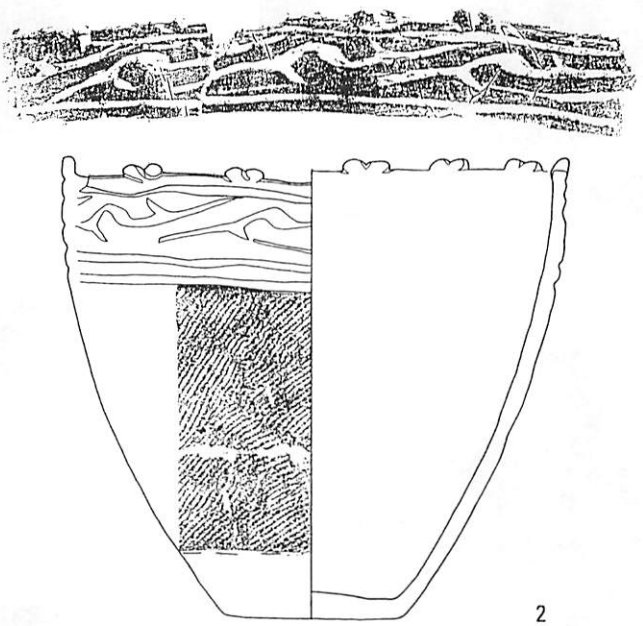


1

2

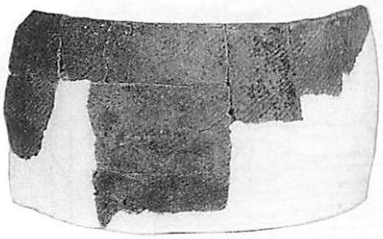
土器　深鉢Ⅱ類－2





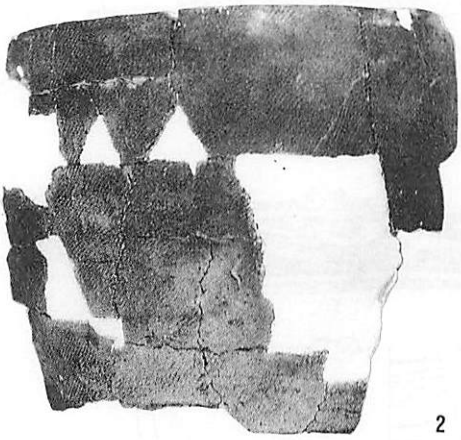
0　　10cm

土器実測図　深鉢Ⅱ類－2

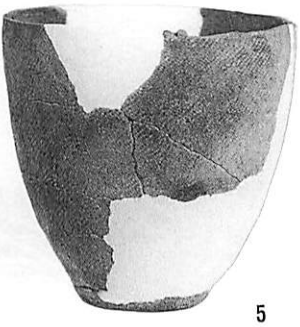


1

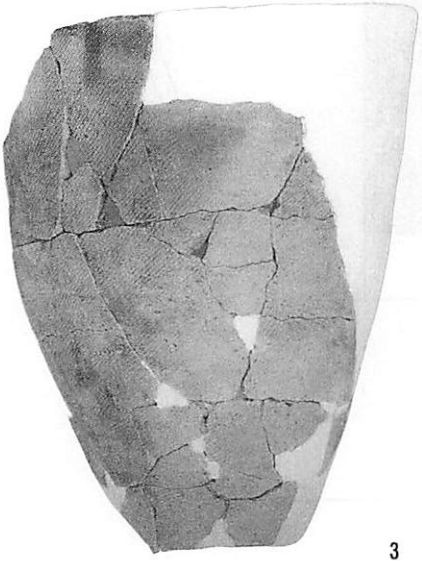
4



2



5

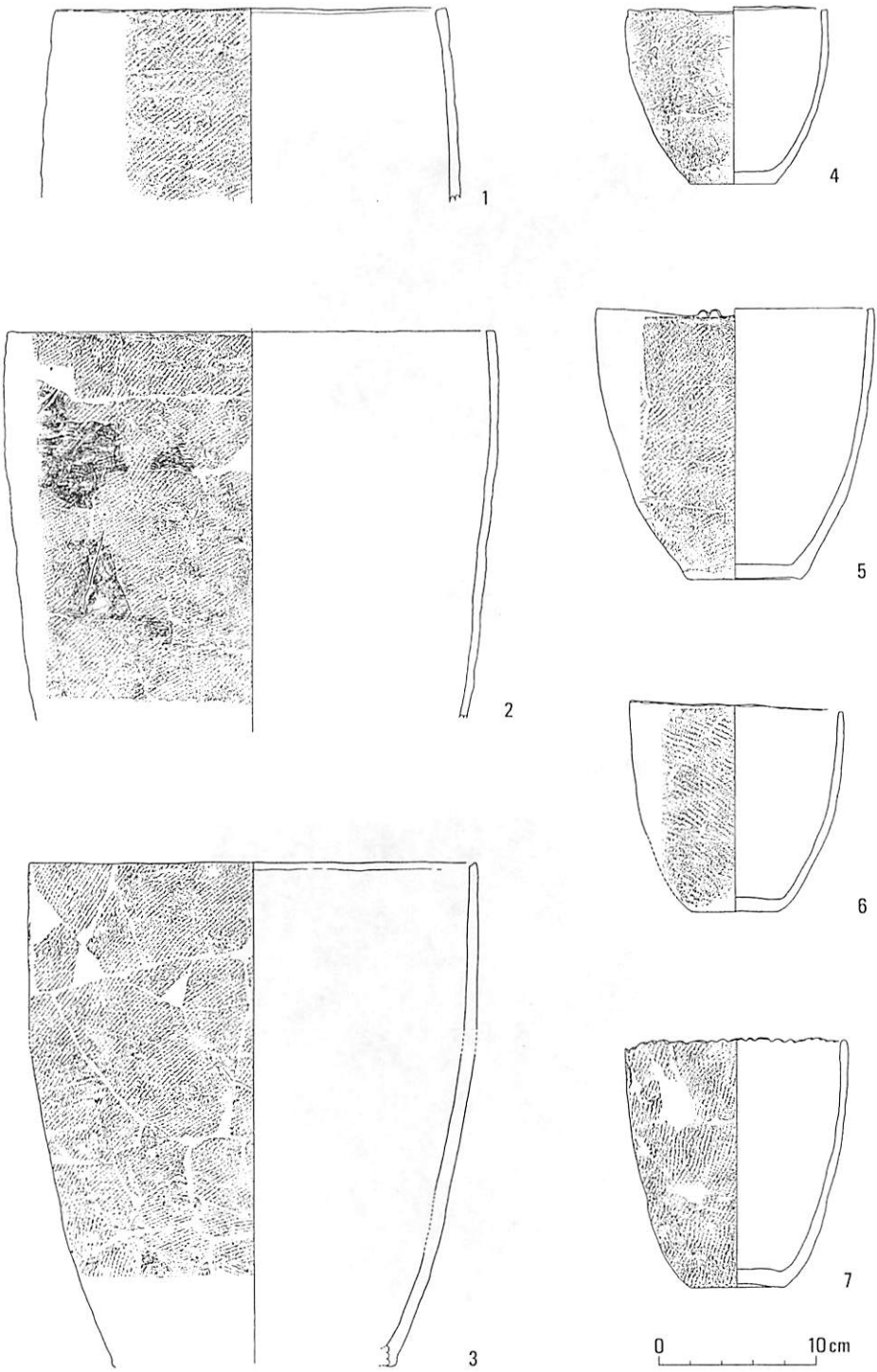


3

6

7

土器　深鉢Ⅱ類－2

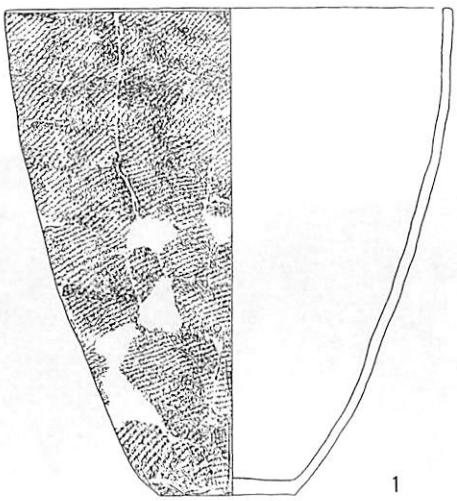


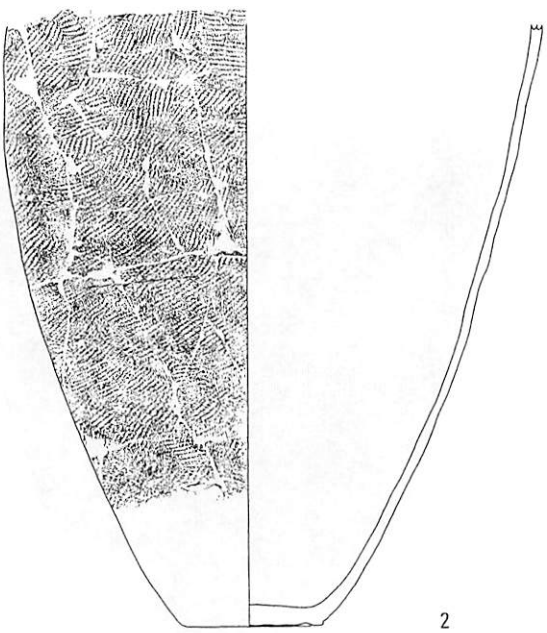
土器実測図　深鉢Ⅱ類－2

1

2

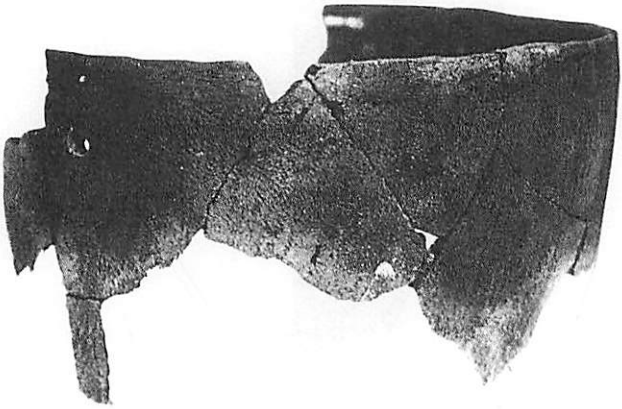
土器　深鉢Ⅱ類－2





0 10cm

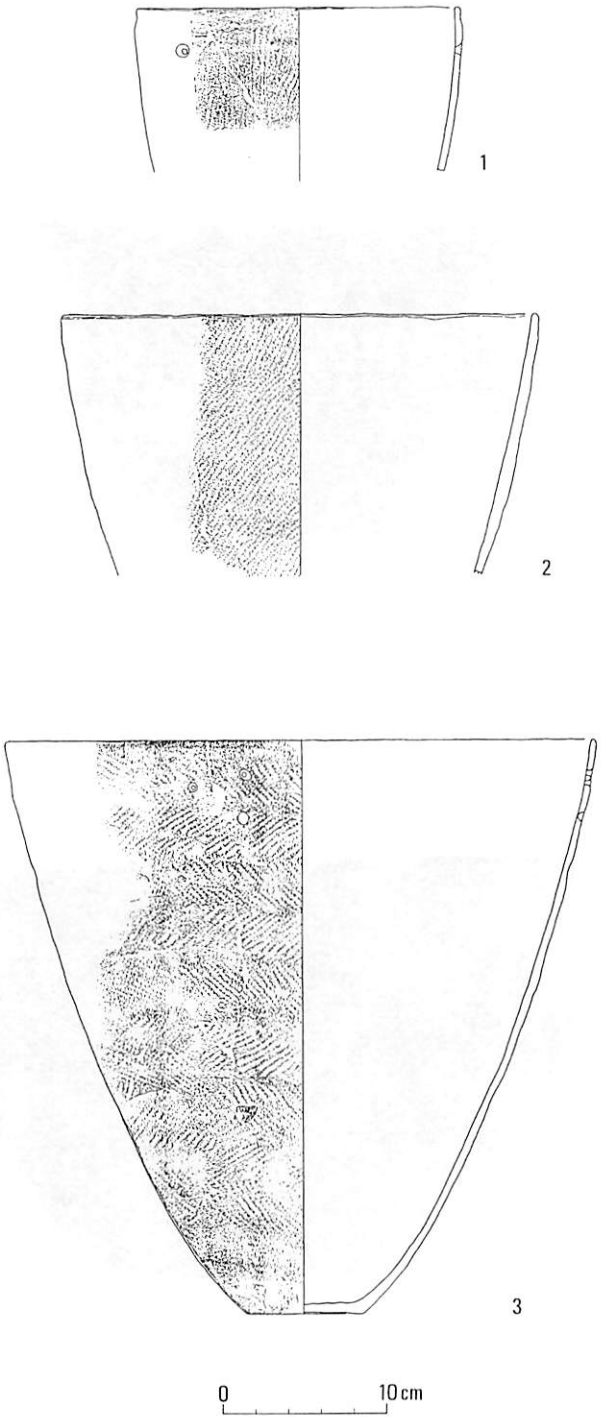
土器実測図　深鉢Ⅱ類－2



1

2

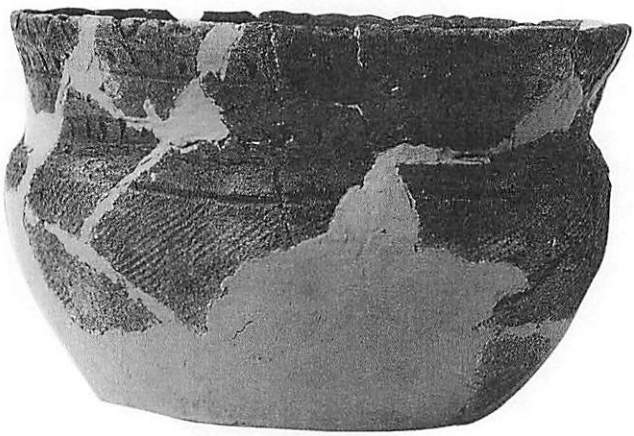
土器　深鉢Ⅱ類－2



土器実測図　深鉢Ⅱ類－2，Ⅱ類－3

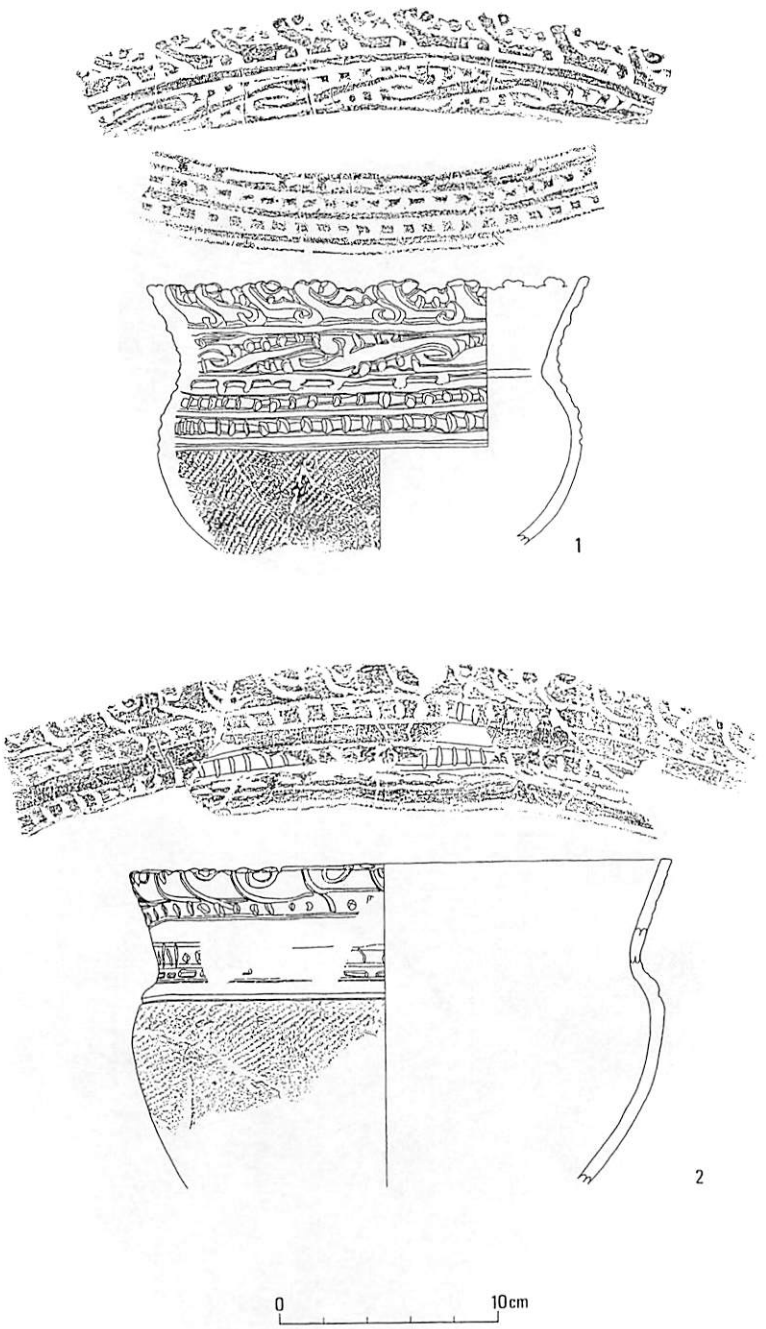
図版第四四

1



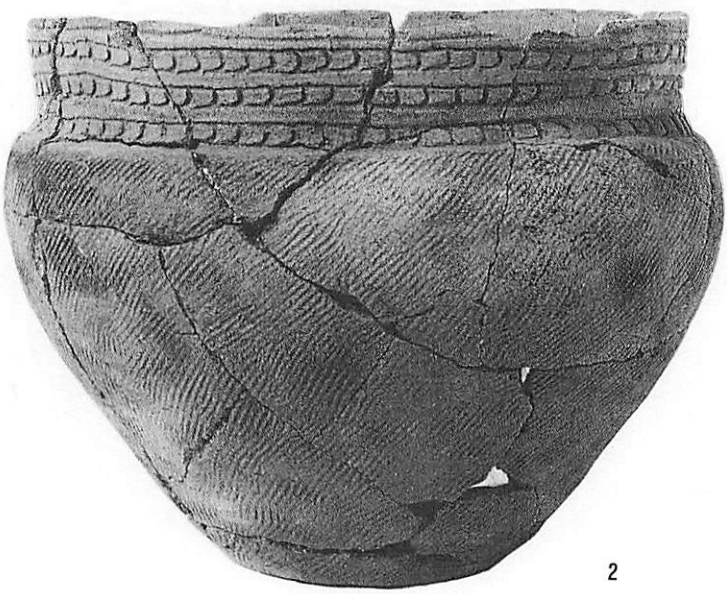
2

土器　鉢Ⅰ類－1



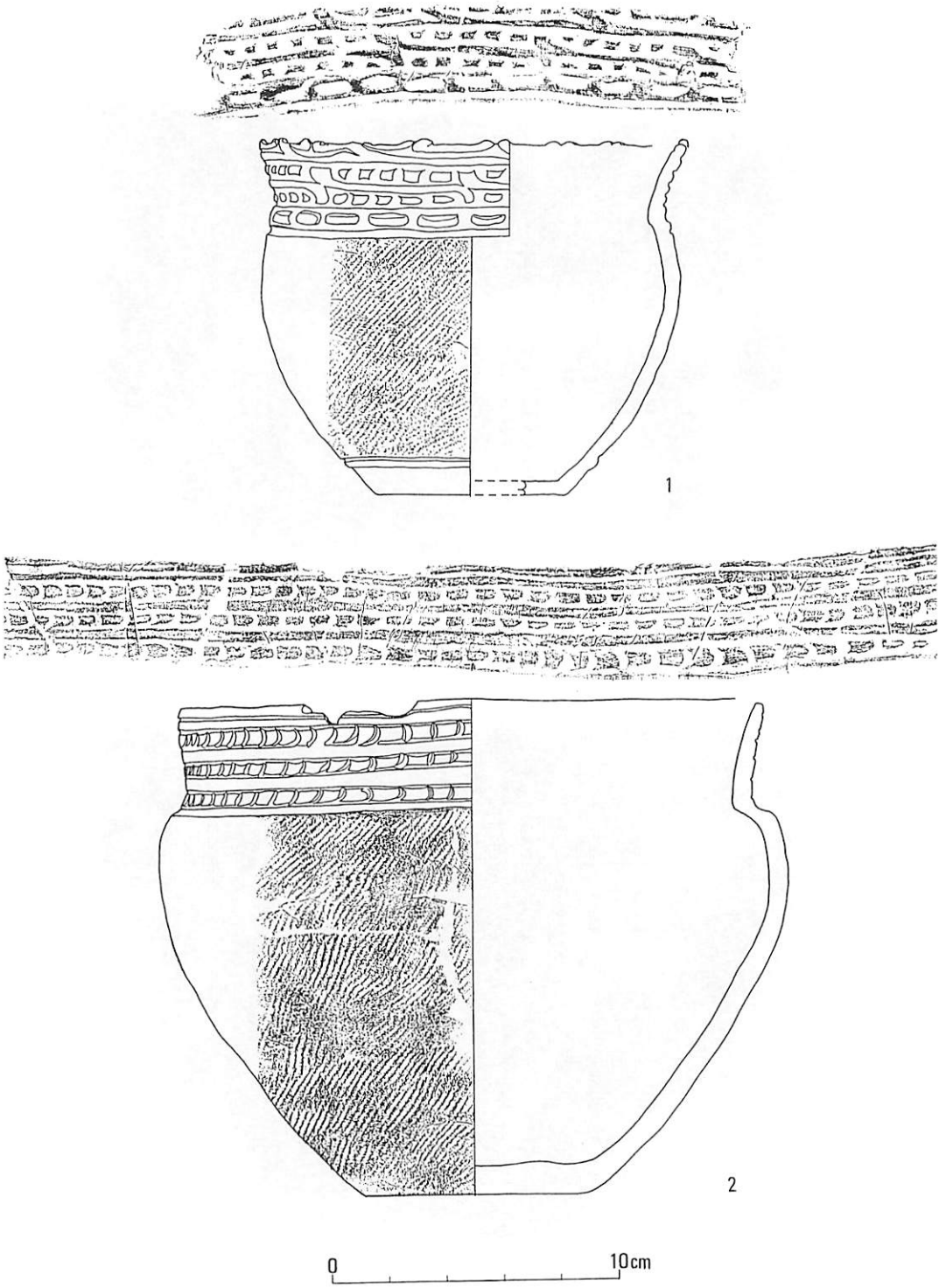
土器実測図　鉢Ⅰ類－1

1

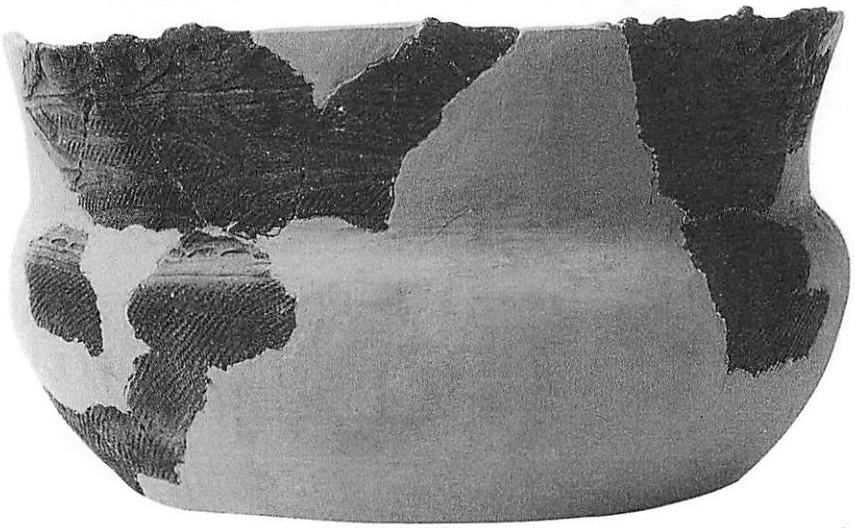


2

土器　鉢Ⅰ類－1



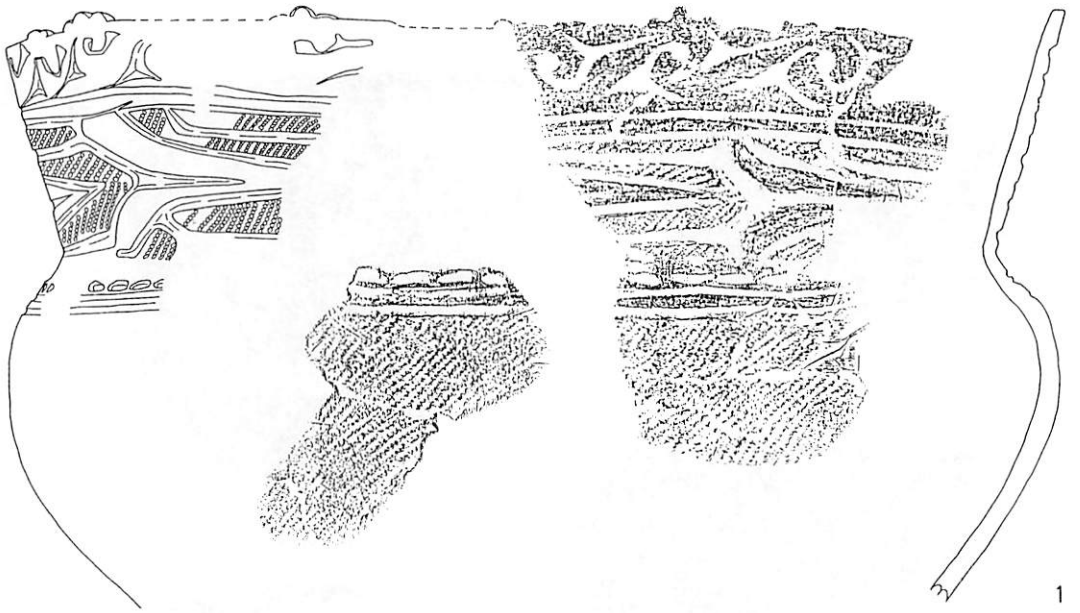
土器実測図　鉢Ⅰ類－1

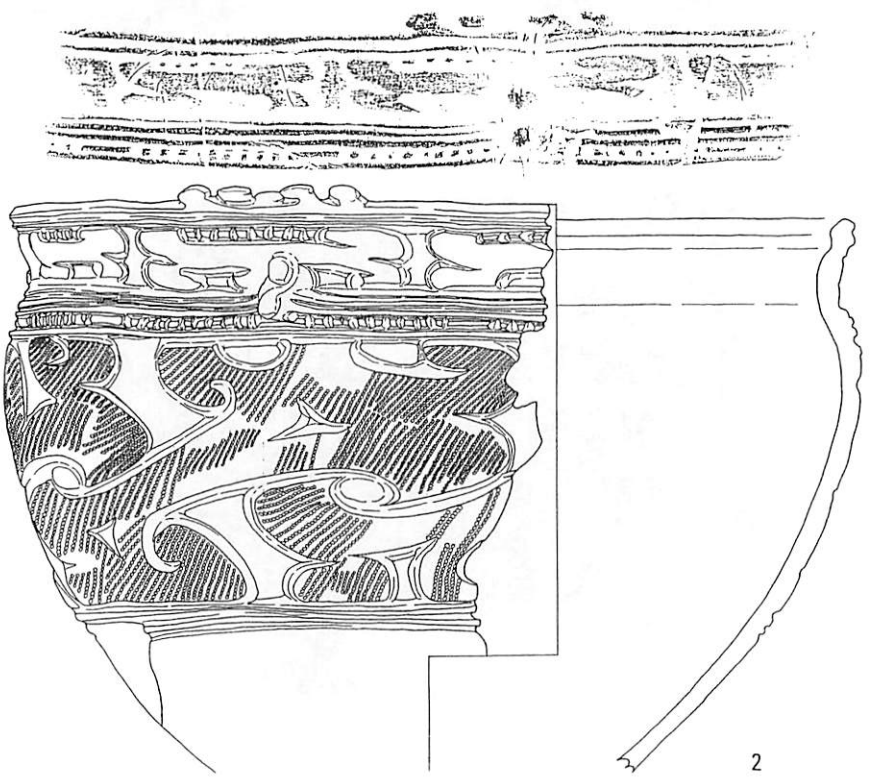


1

2

土器　鉢Ⅰ類－1，2

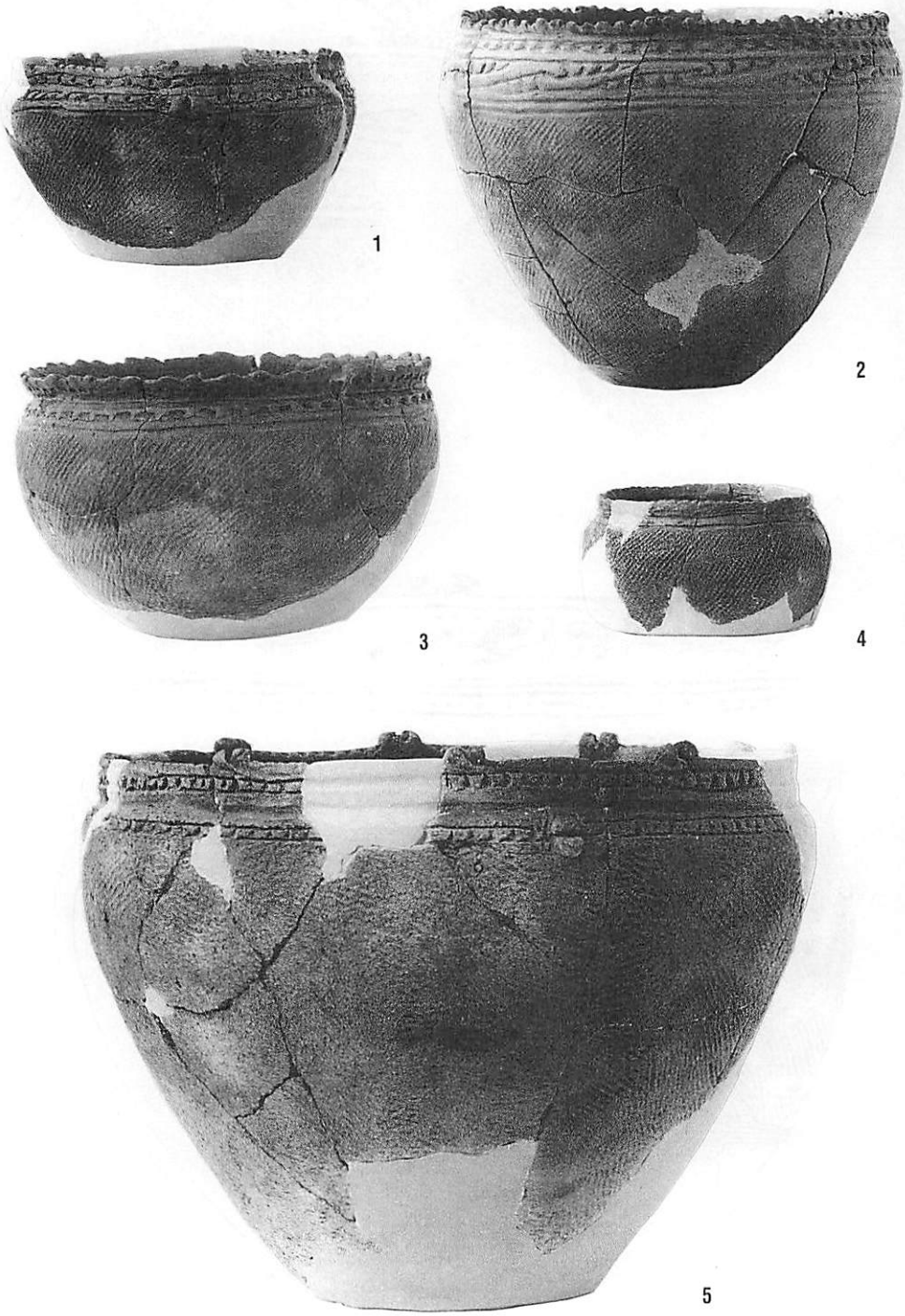




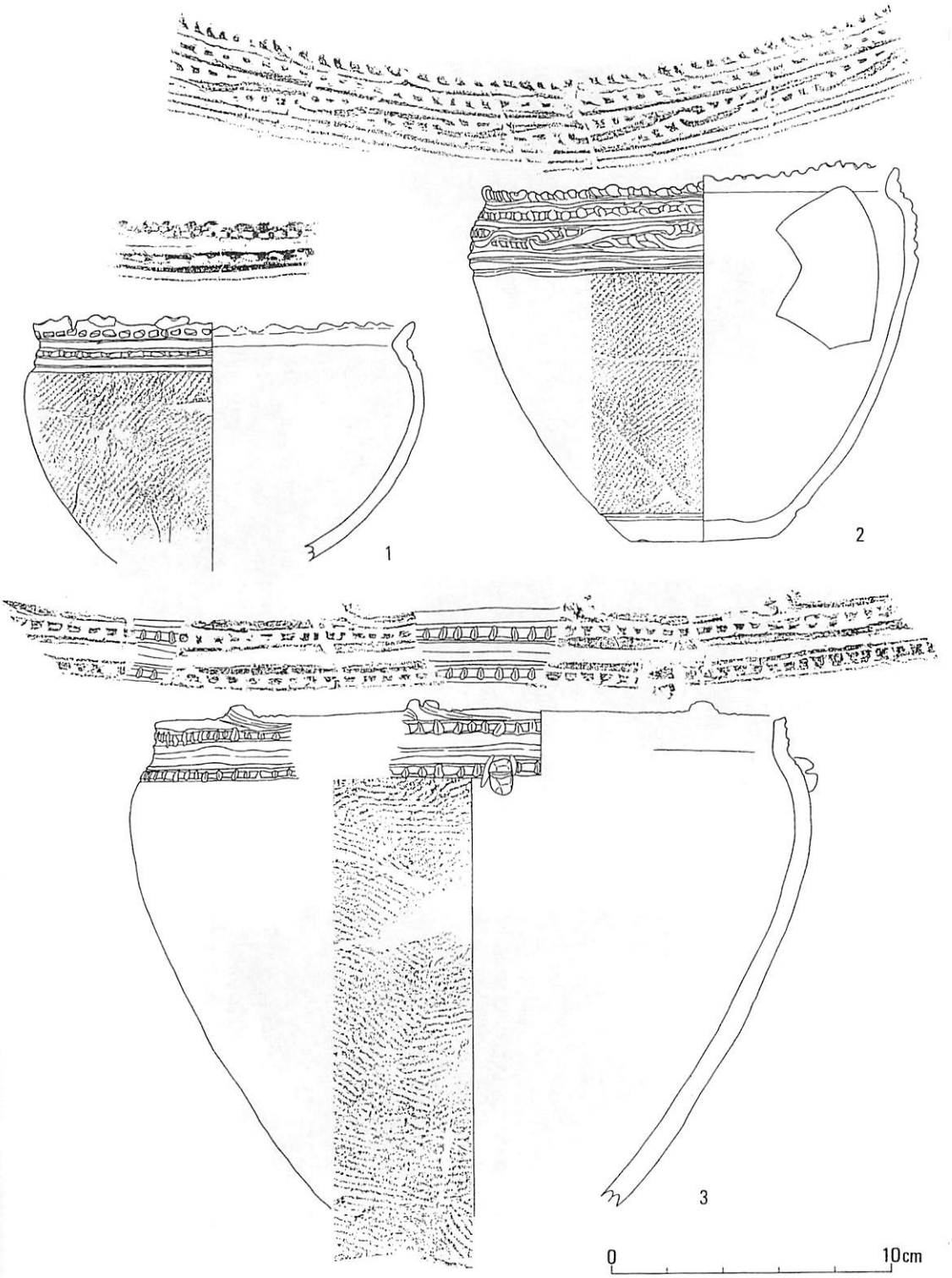
0　10cm

土器実測図　鉢Ⅰ類－1，2

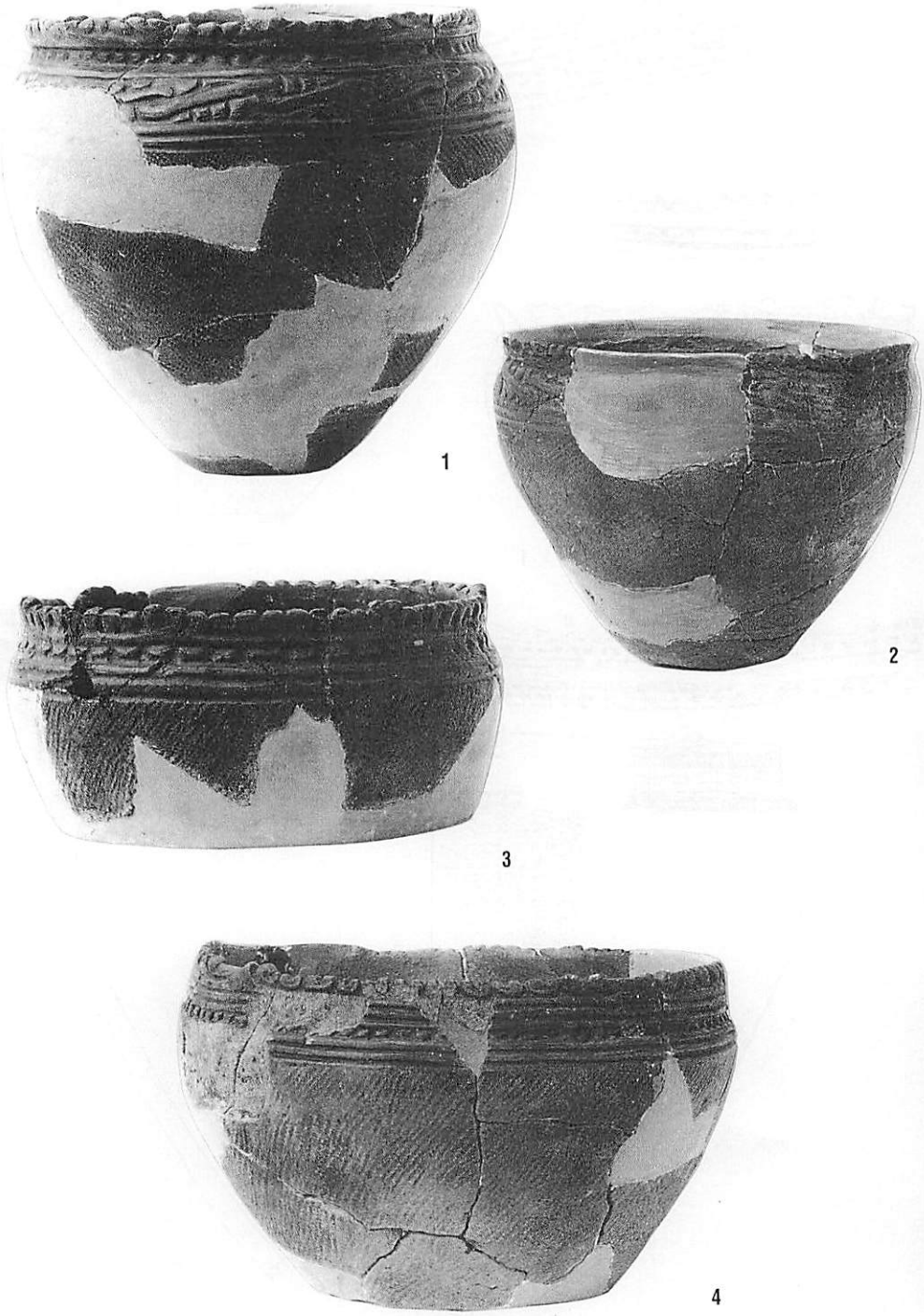
図版第五〇



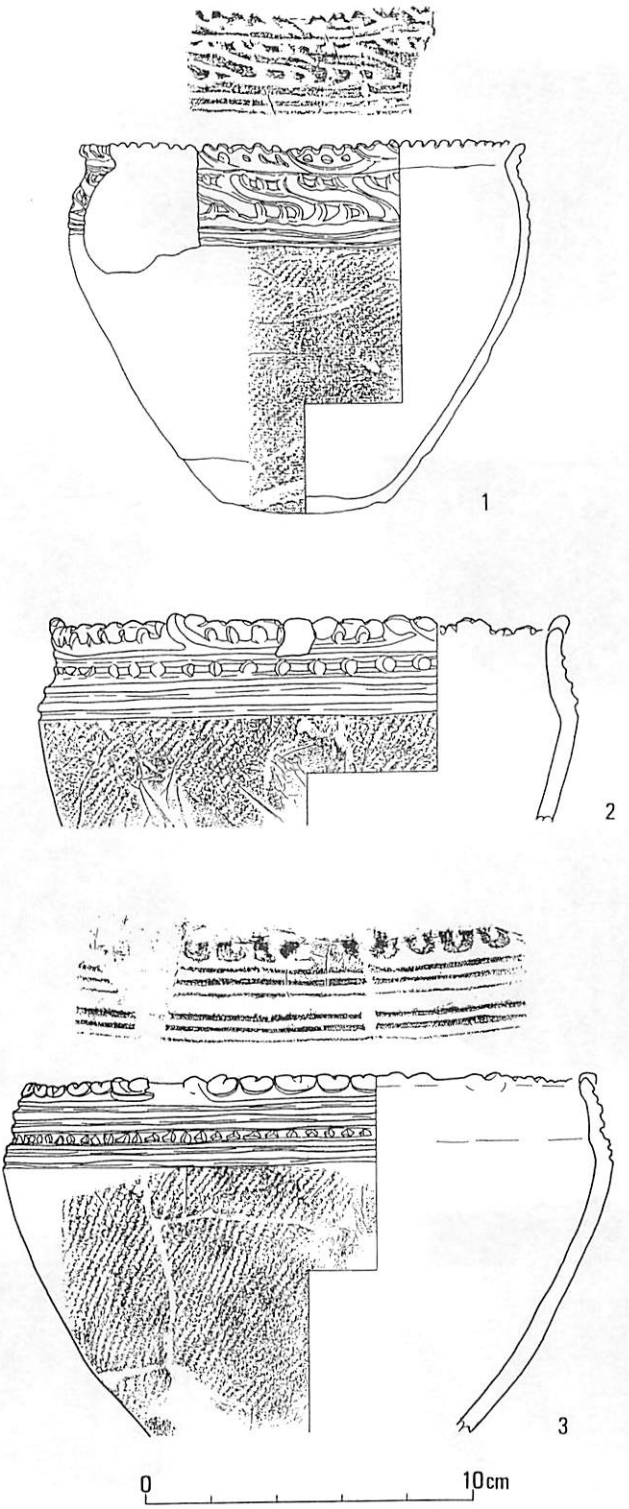
土器　鉢Ⅰ類－2



土器実測図　鉢Ⅰ類－2



土器　鉢Ⅰ類－2



土器実測図　鉢Ⅰ類－2

図版第五四

1

2

3

10

9

4

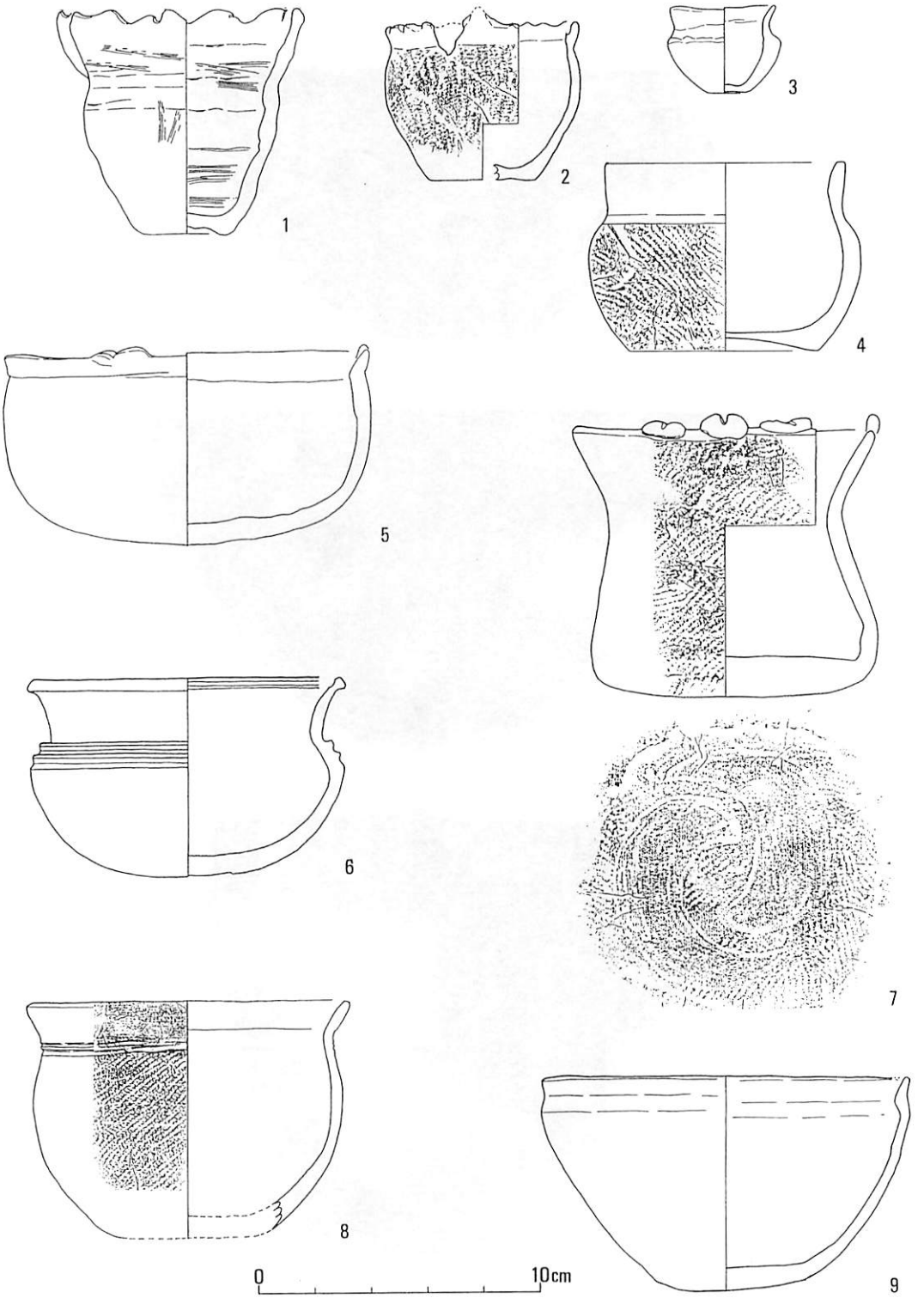
6

7

8

5

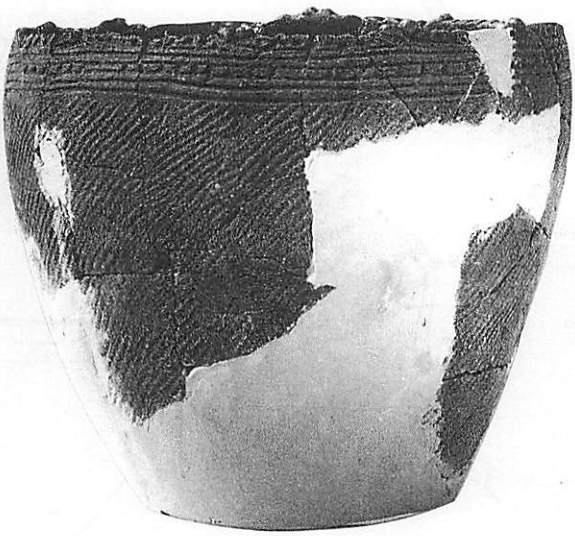
土器　鉢Ⅰ類－4



土器実測図　鉢Ⅰ類－4

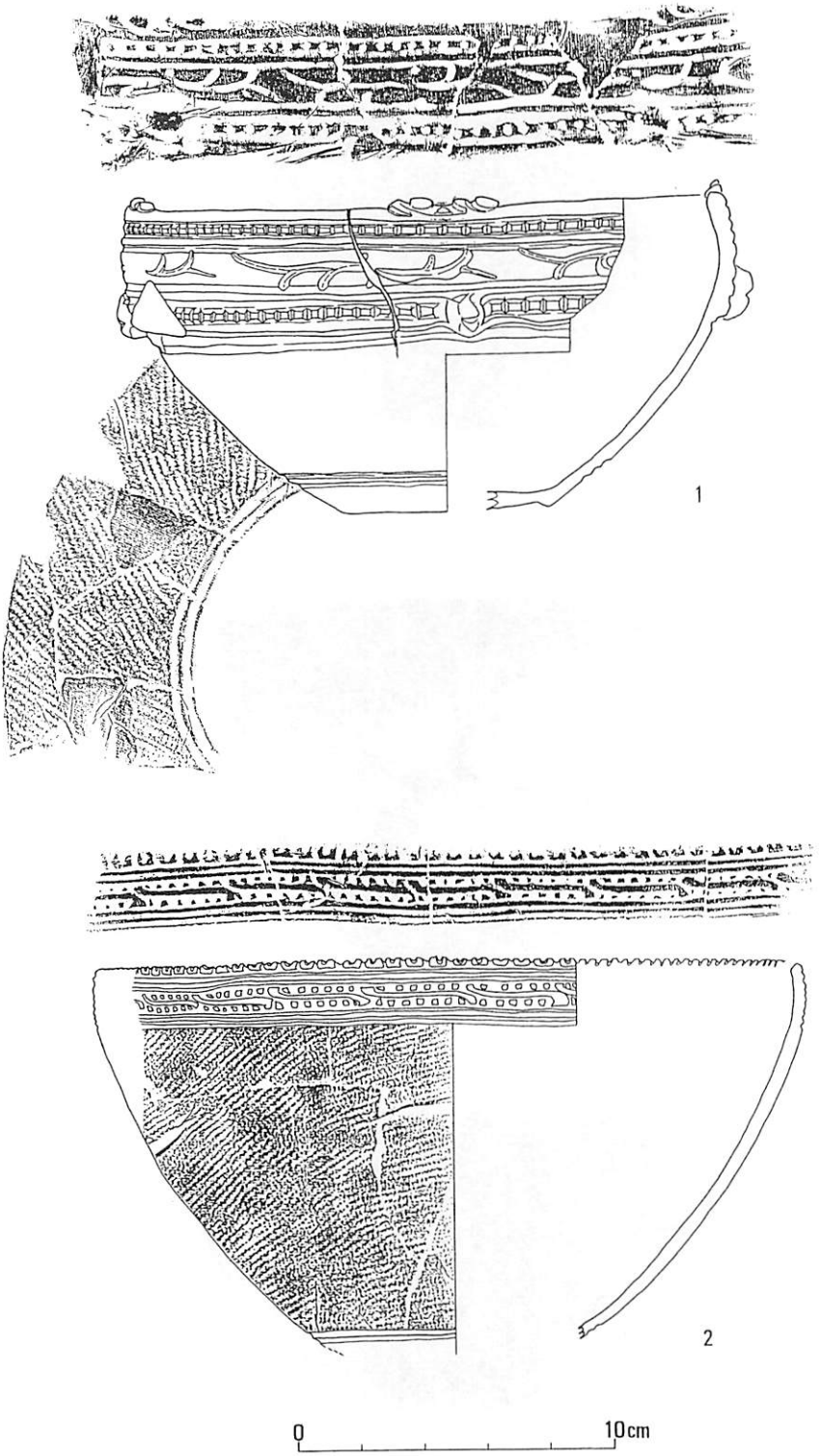
1

2



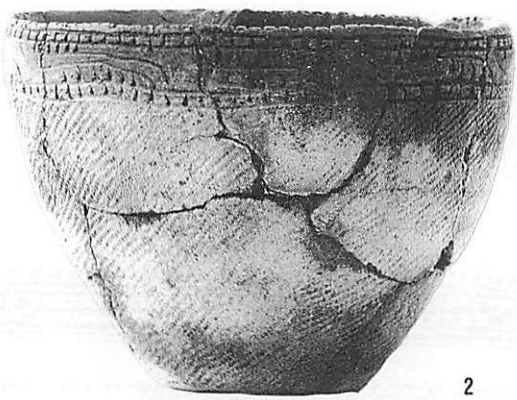
3

土器　鉢Ⅱ類－1



土器実測図　鉢Ⅱ類－1

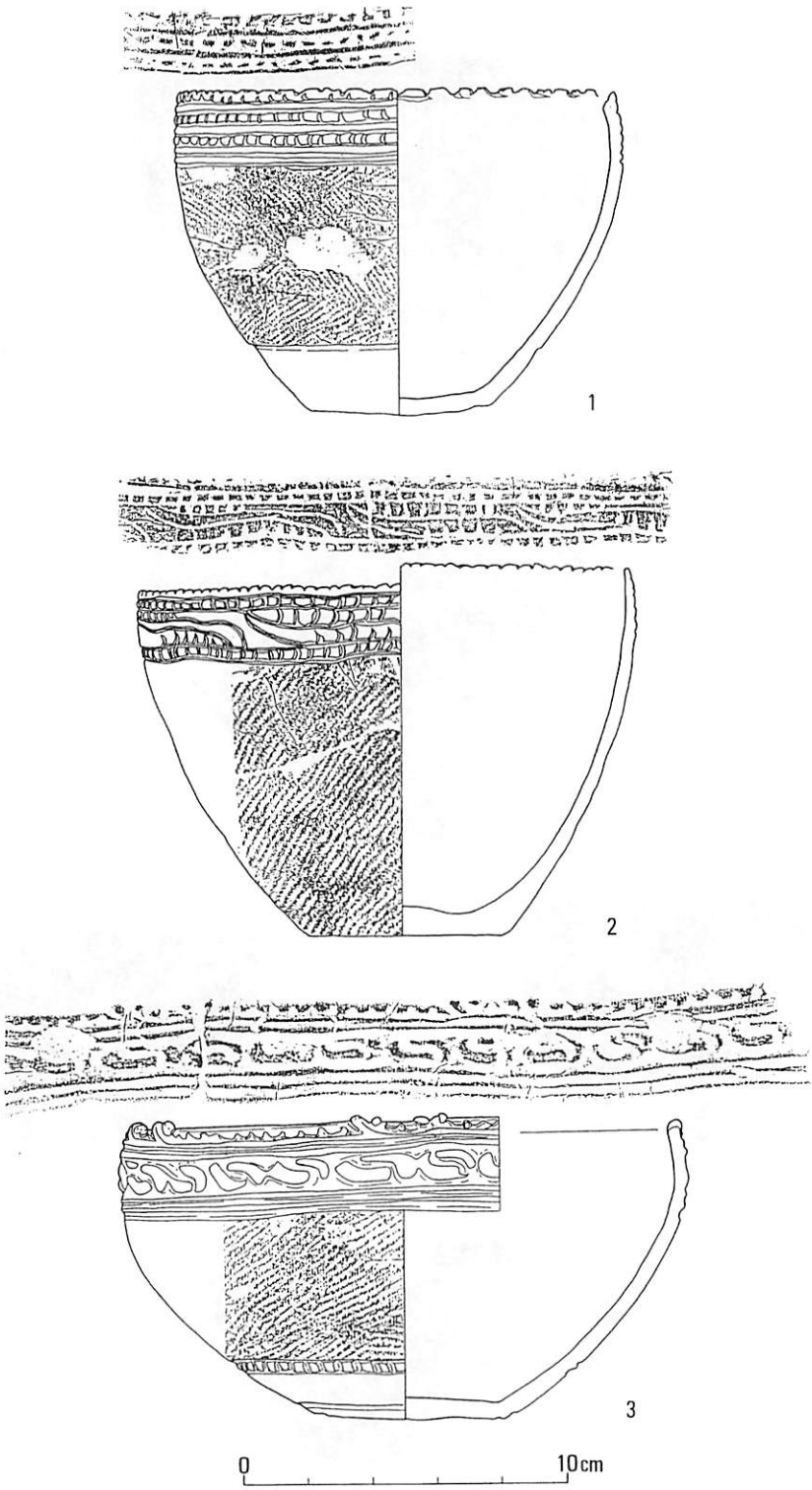
1



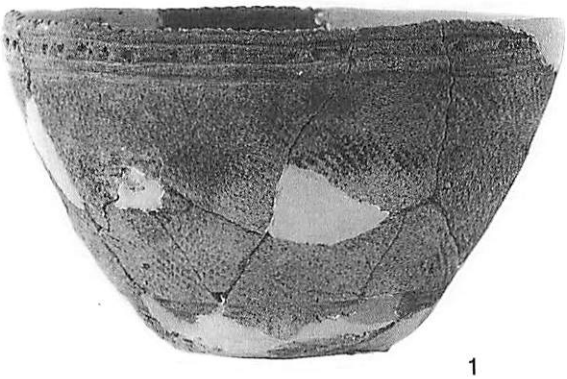
2

3

土器　鉢Ⅱ類－1



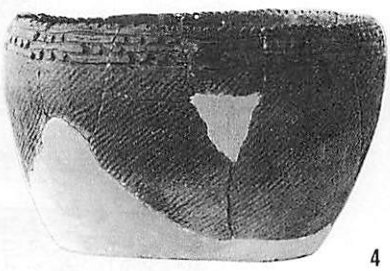
土器実測図　鉢Ⅱ類－1



1

2

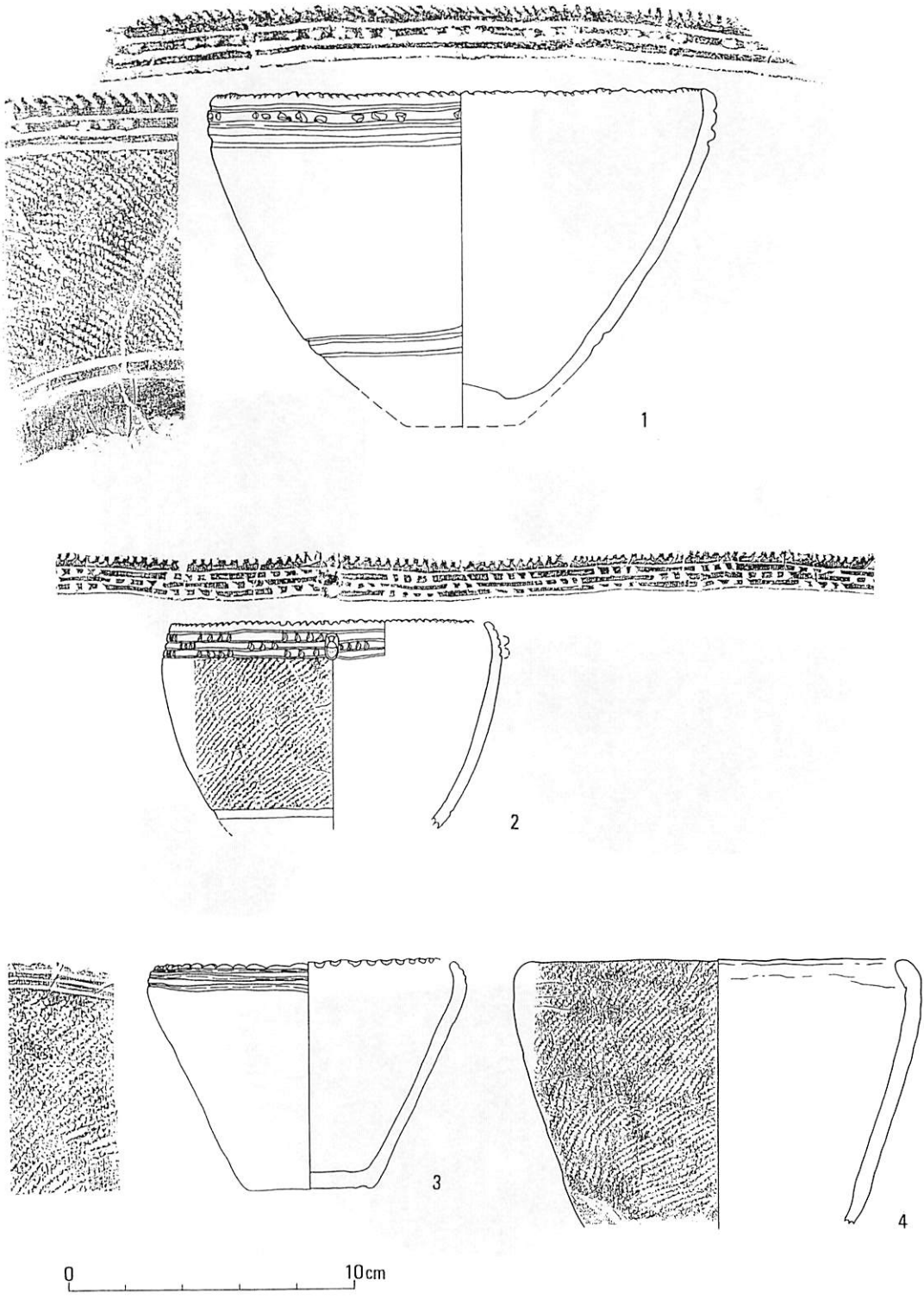
3



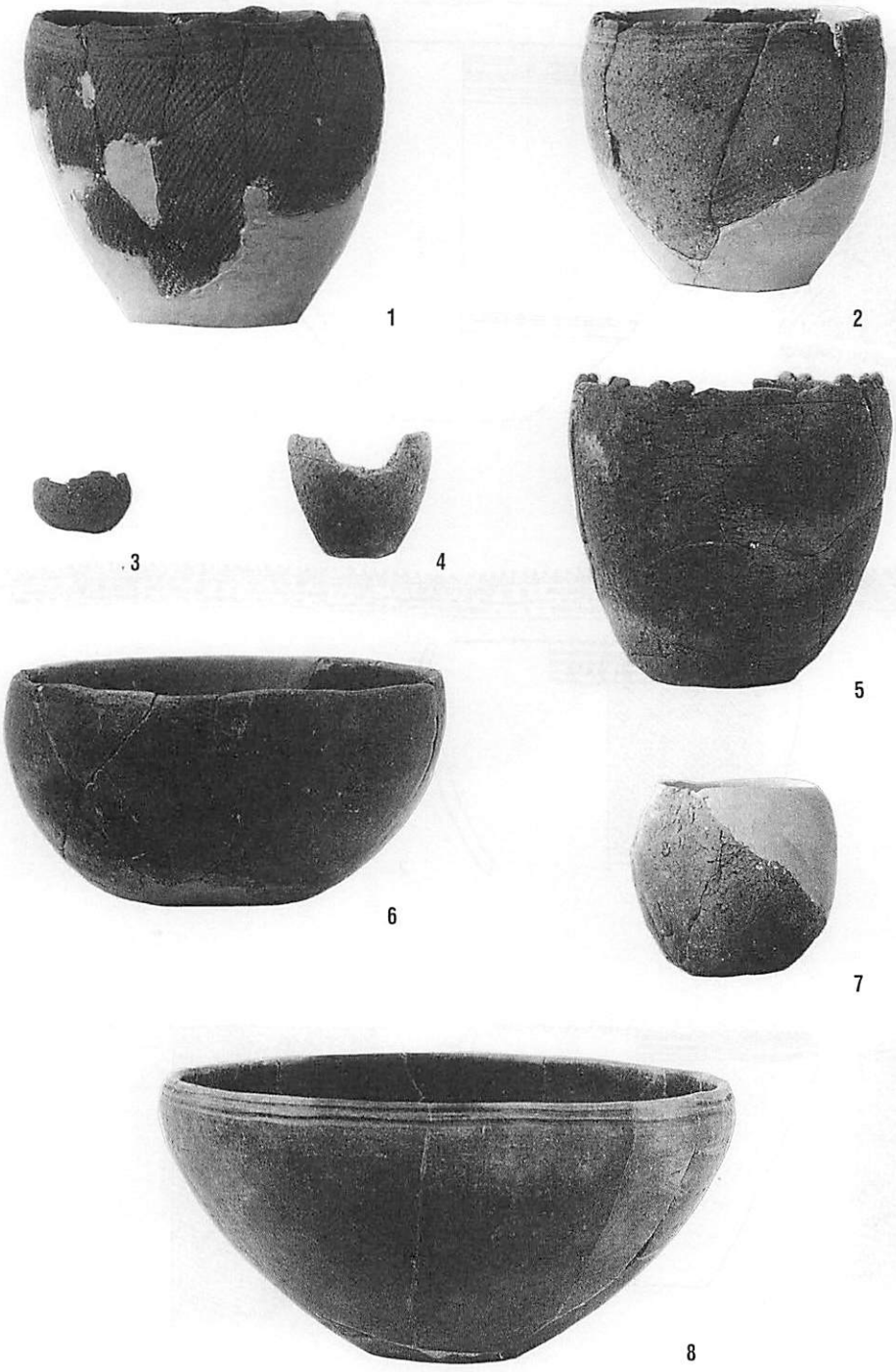
4

5

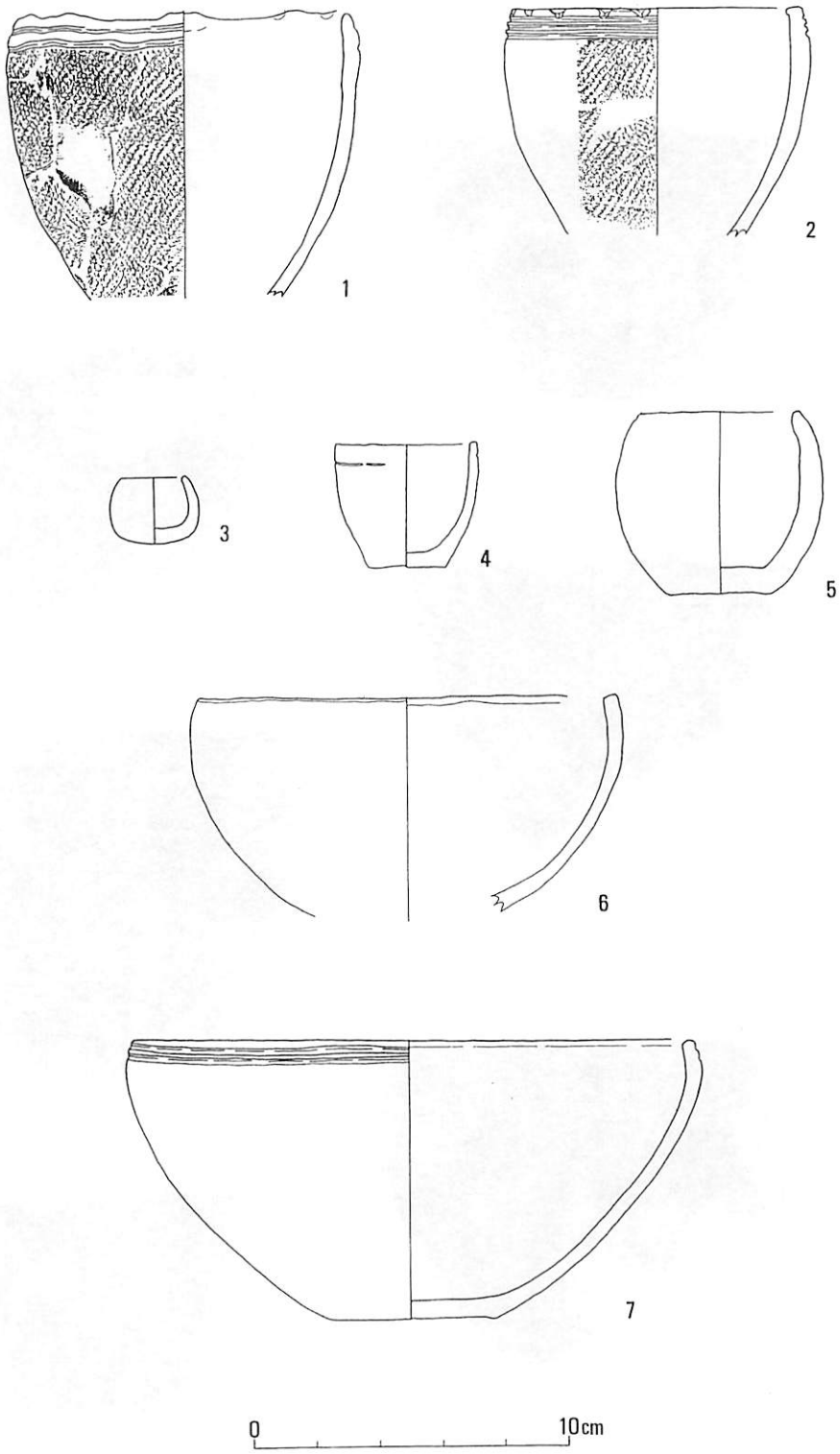
土器　鉢Ⅱ類－1



土器実測図　鉢Ⅱ類－1



土器　鉢Ⅱ類－1



土器実測図　鉢Ⅱ類－1

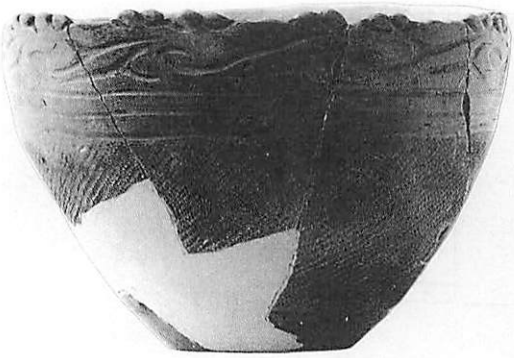
1

2

3

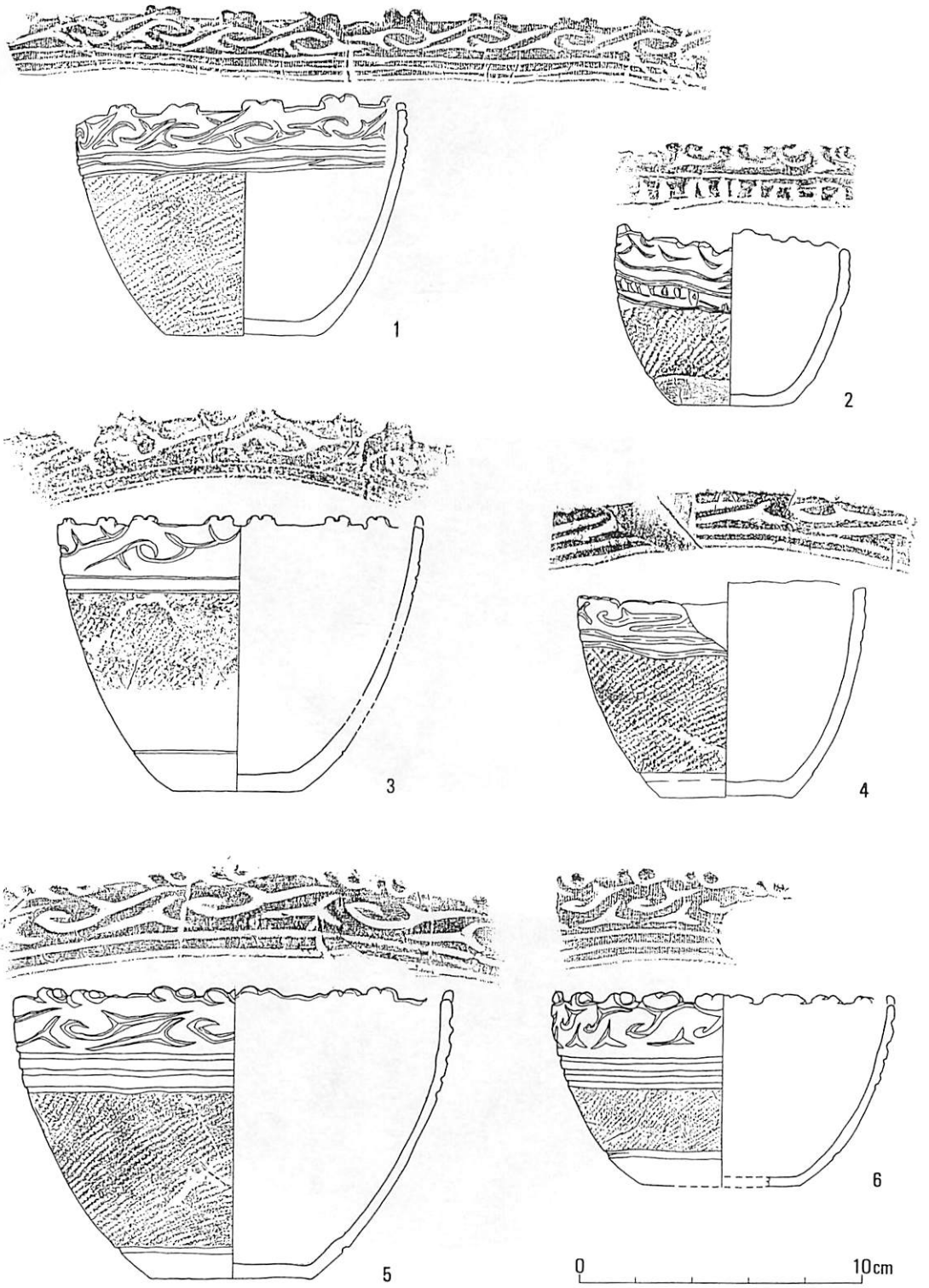
4

5


6

7

土器　鉢Ⅱ類－2



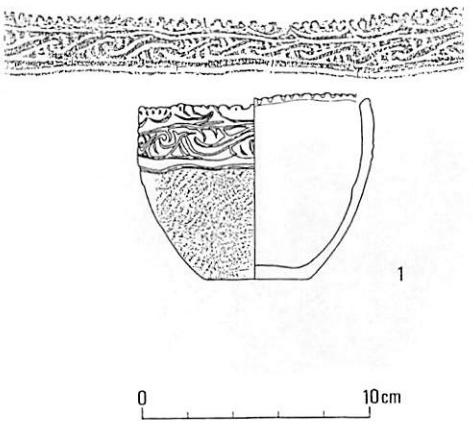
土器実測図　鉢Ⅱ類－2

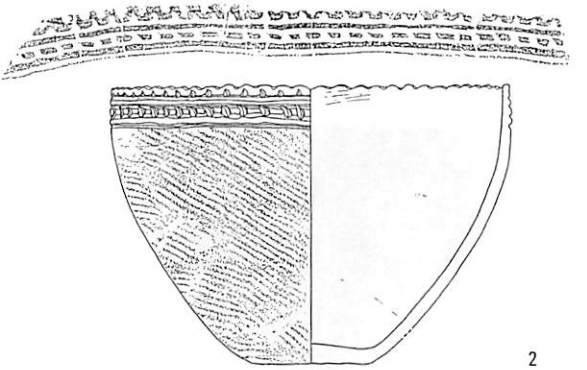
1

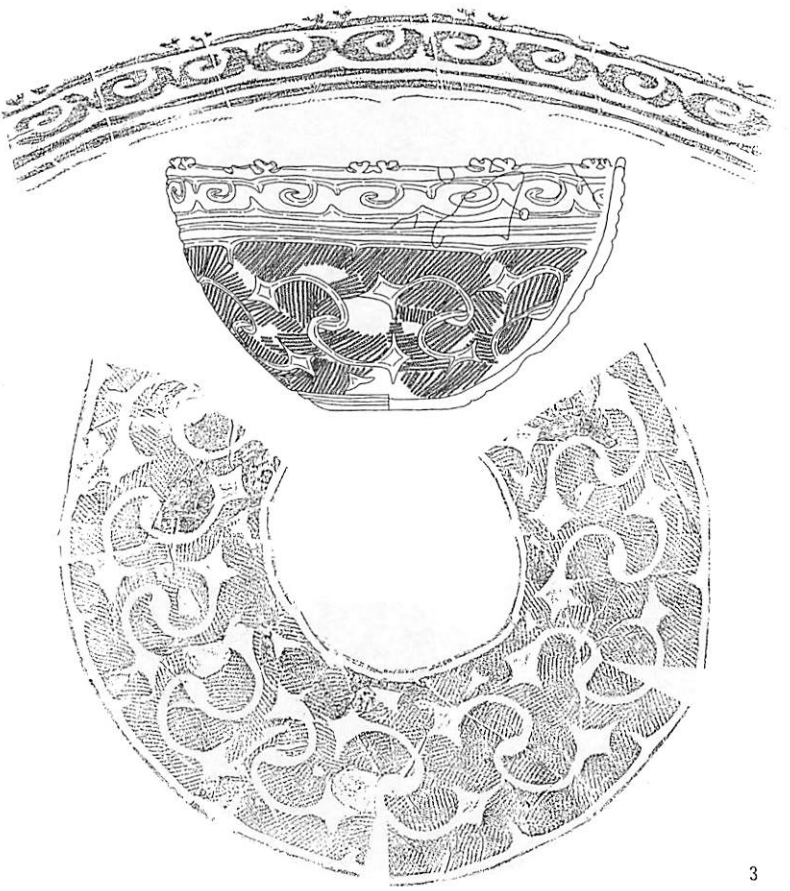
2

3

土器　鉢Ⅱ類－2







土器実測図　鉢Ⅱ類－2

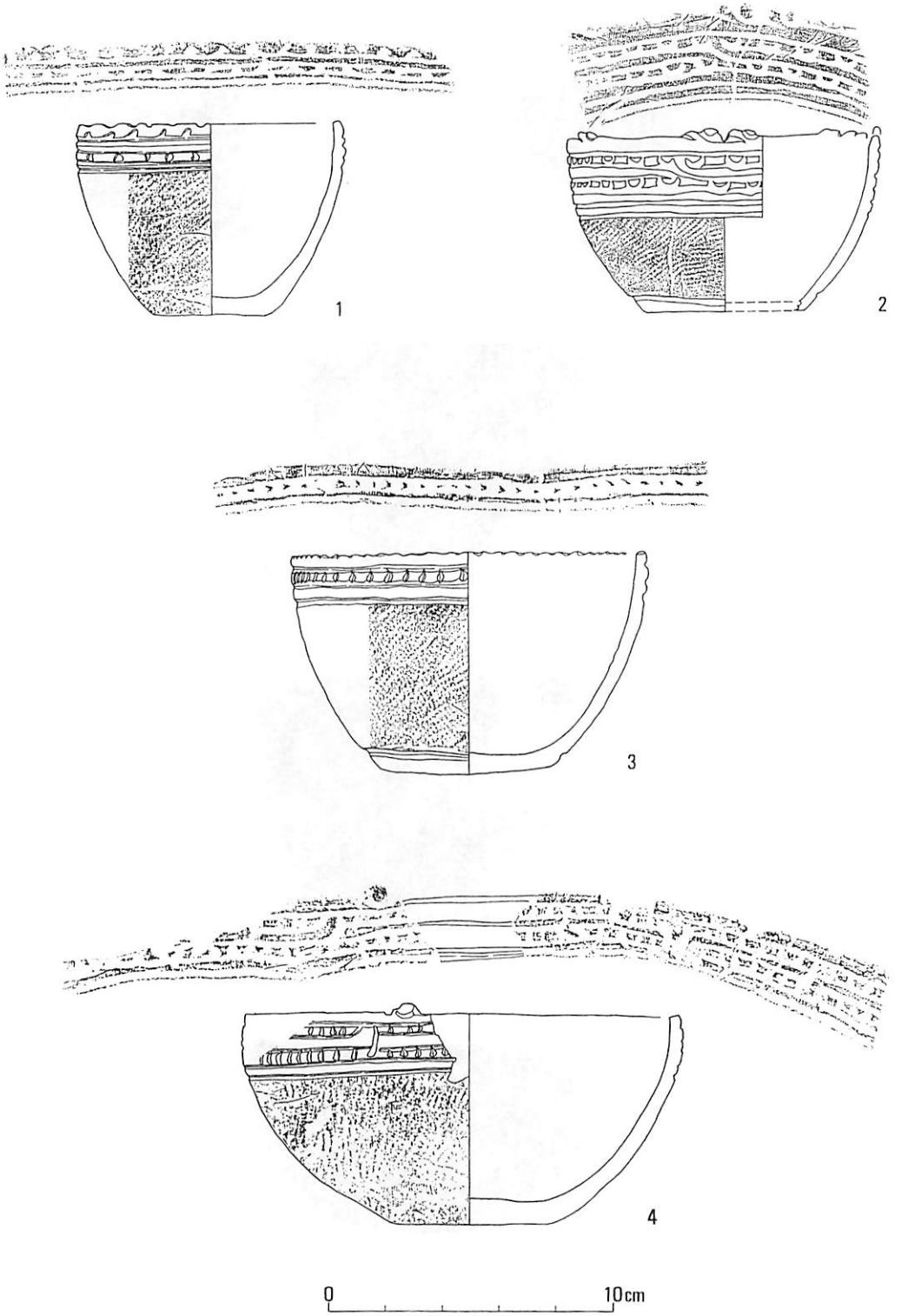
1

2

3

4

土器　鉢Ⅱ類－2



土器実測図　鉢Ⅱ類－2

1

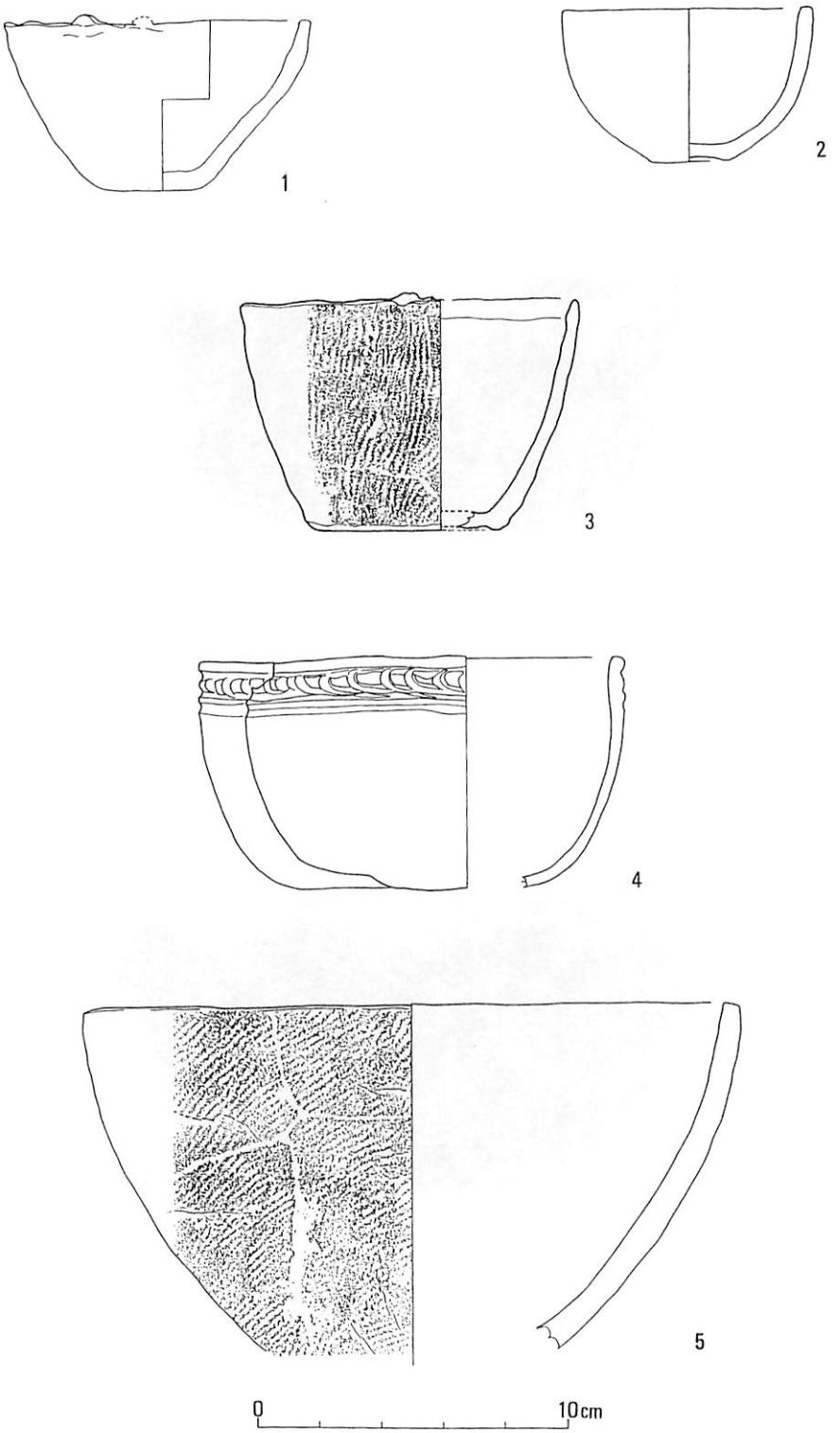
2

3

4

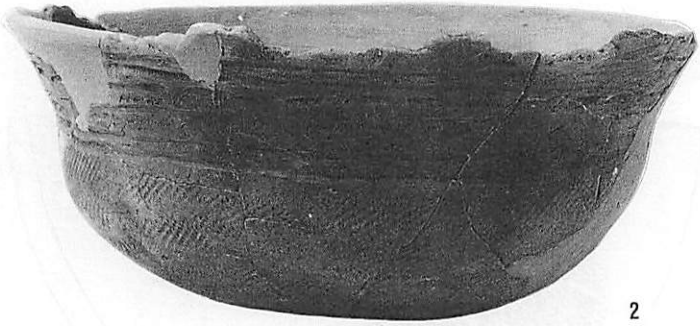
5

土器　鉢Ⅱ類－3



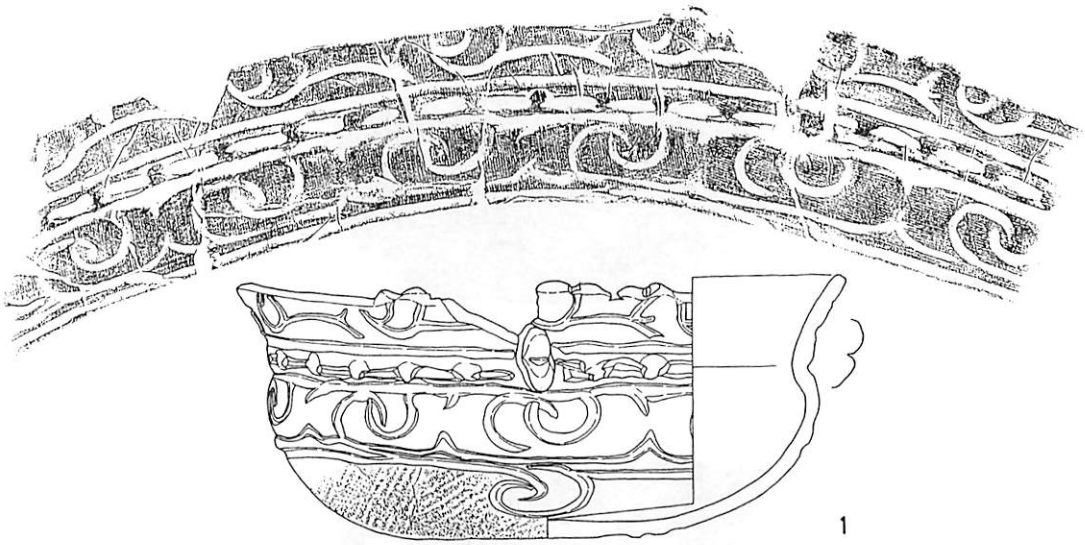
土器実測図　鉢Ⅱ類－3

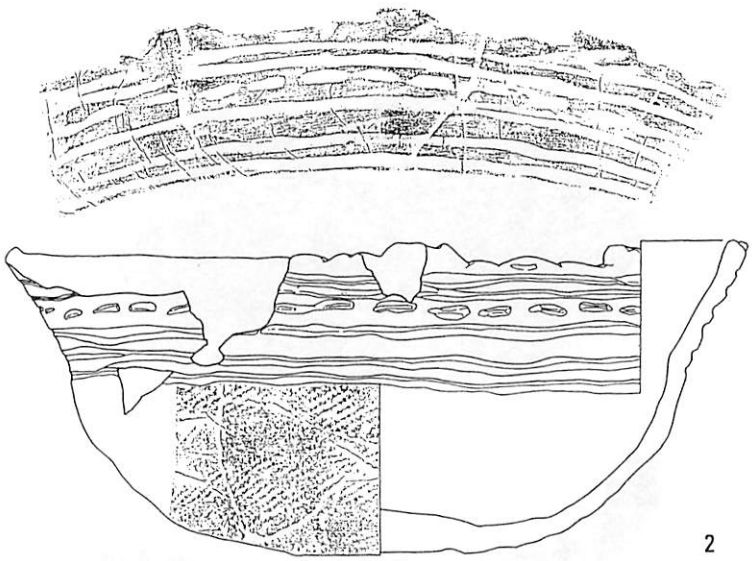
1



2

土器　浅鉢Ⅰ類－1





0 10cm

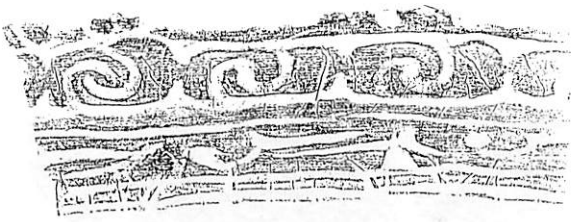
土器実測図　浅鉢Ⅰ類－1

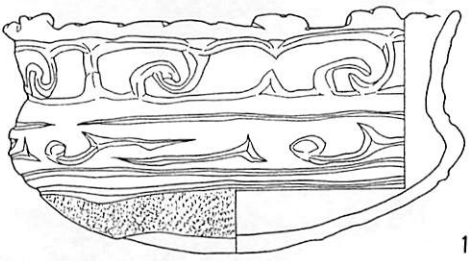
1

2

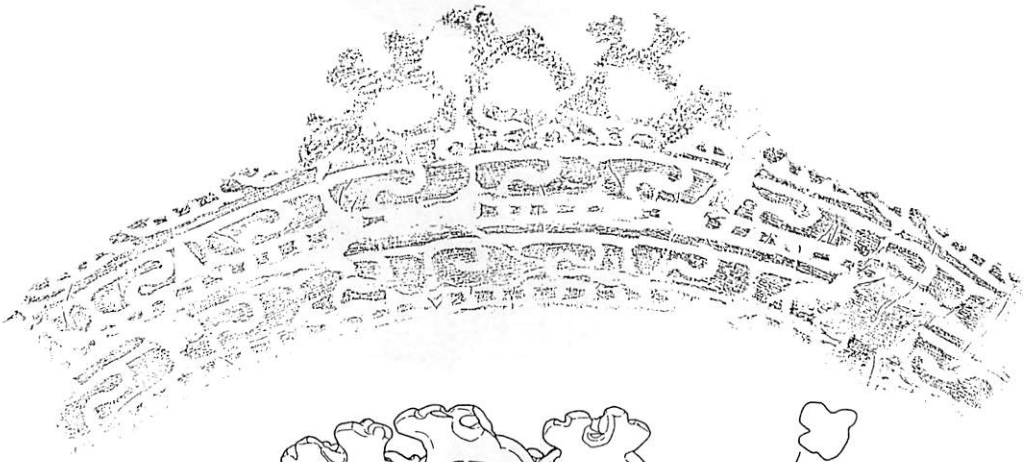
3

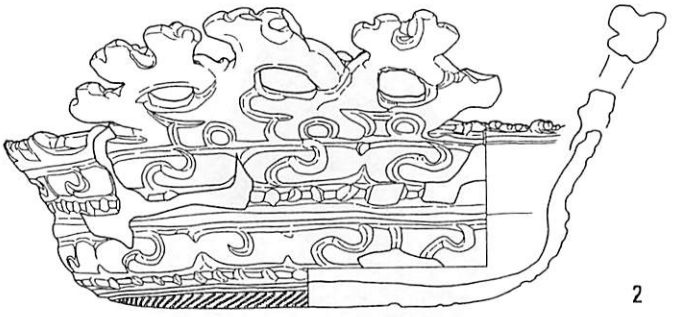
土器　浅鉢Ⅰ類－1





1

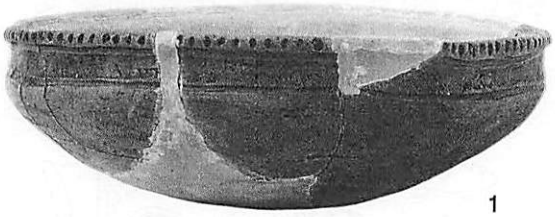




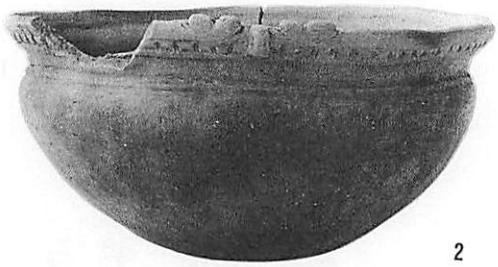
2

0 10cm

土器実測図　浅鉢Ⅰ類－1



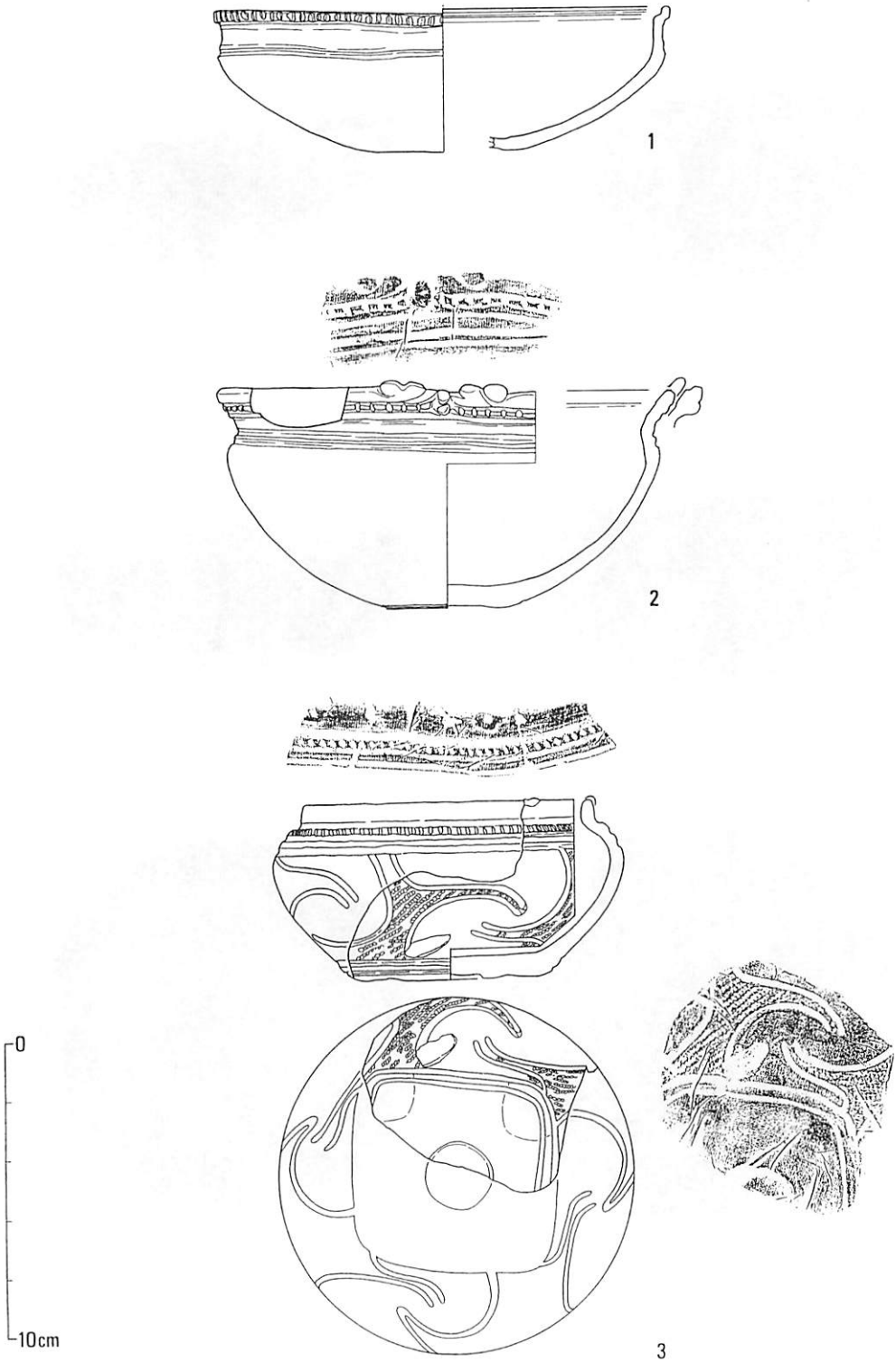
1



2

3

土器　浅鉢Ⅰ類－1

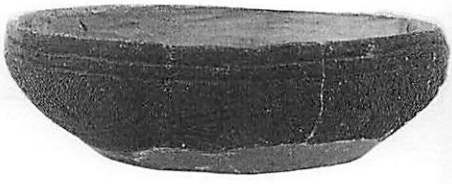


土器実測図　浅鉢Ⅰ類－1

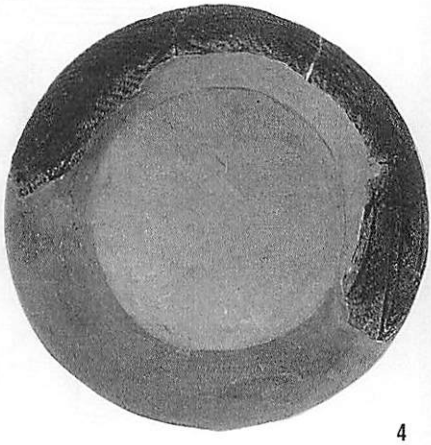
図版第七八

1

2

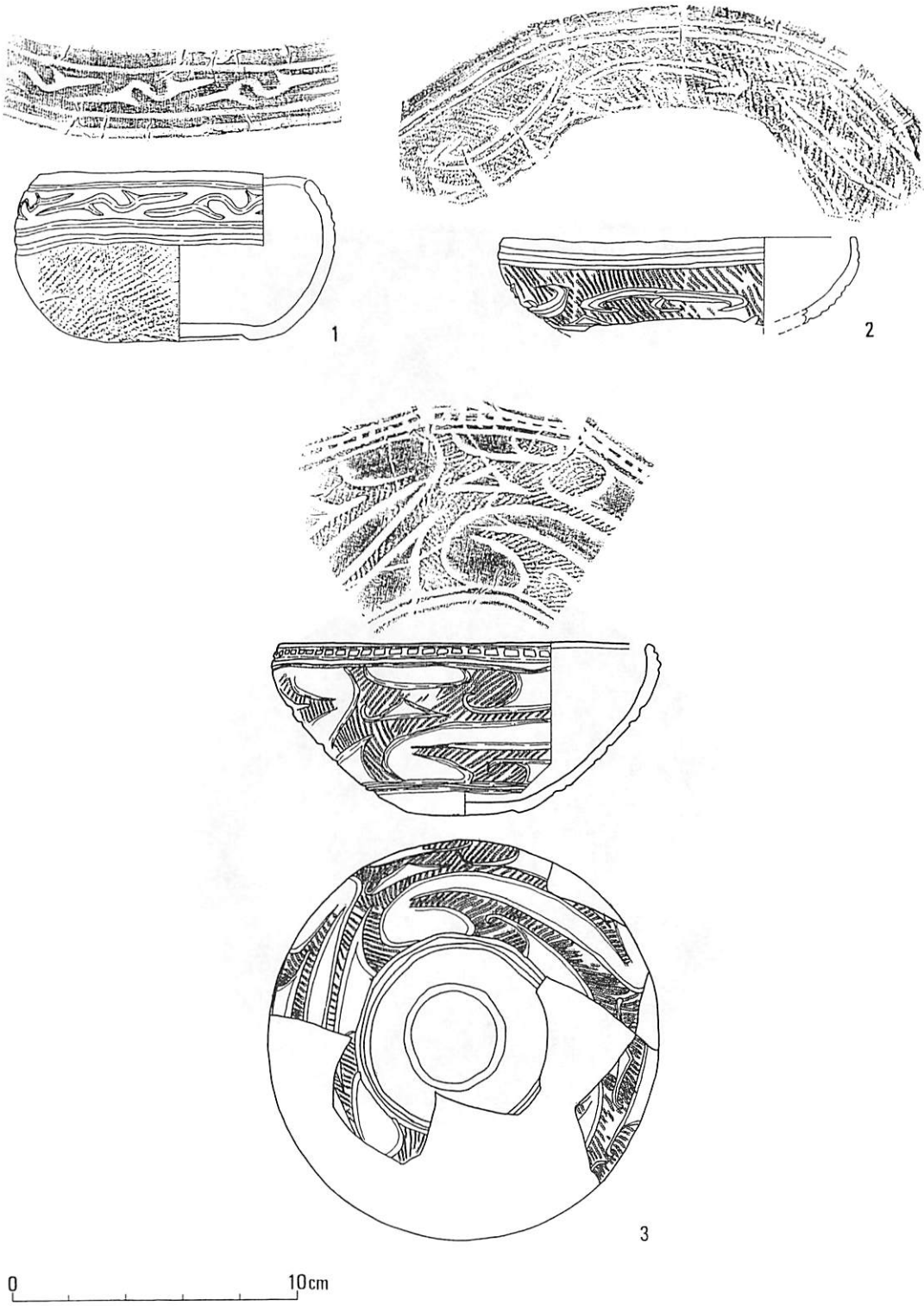


3



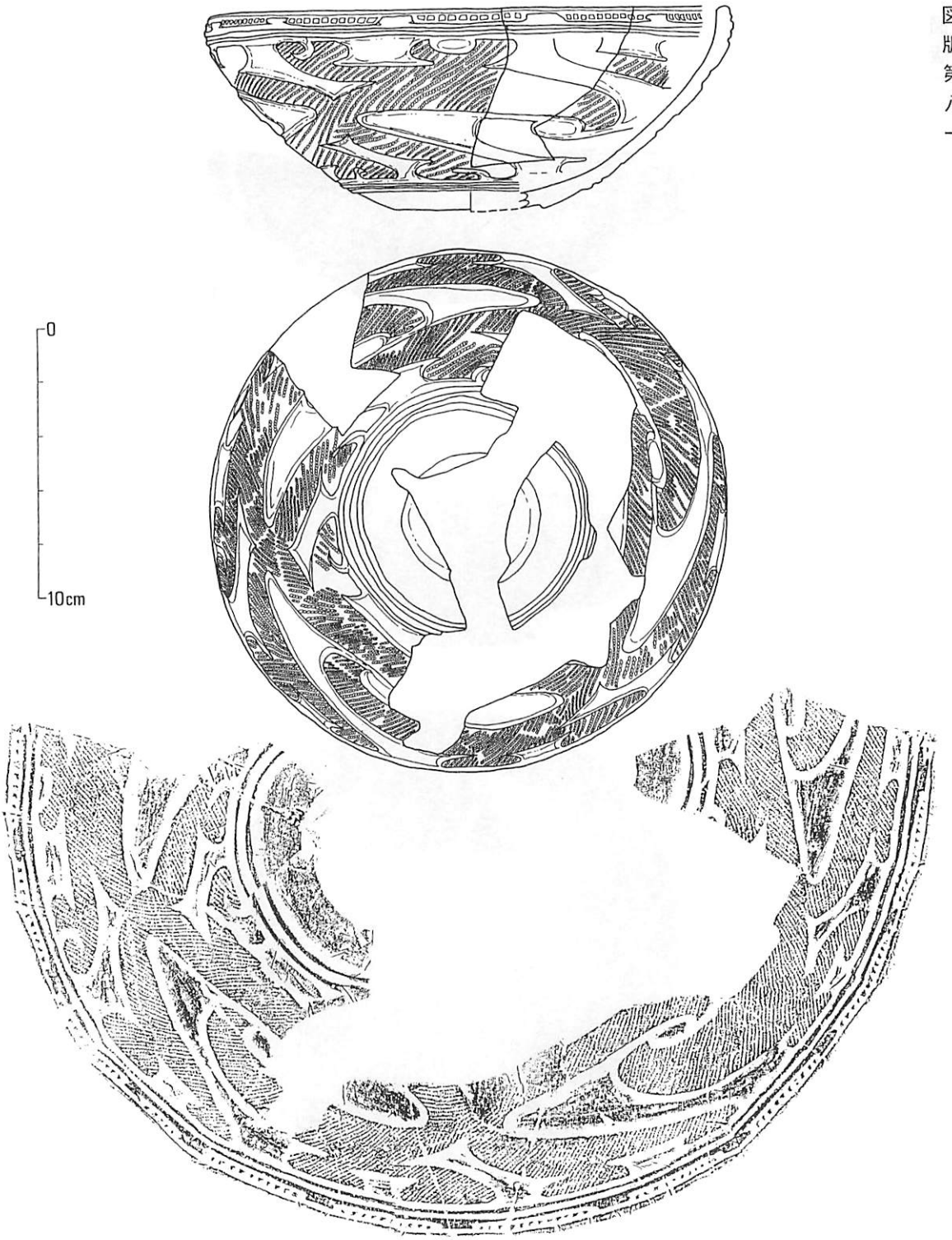
4

土器　浅鉢Ⅱ類－1



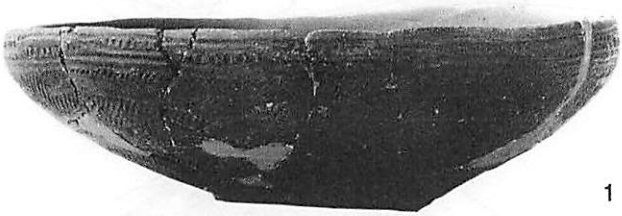
土器実測図　浅鉢Ⅱ類－1

土器　浅鉢　Ⅱ類－1

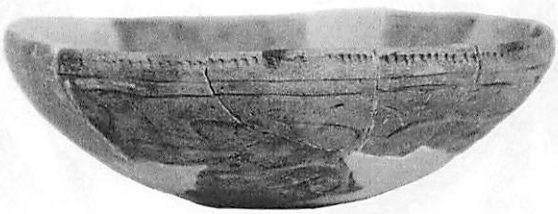


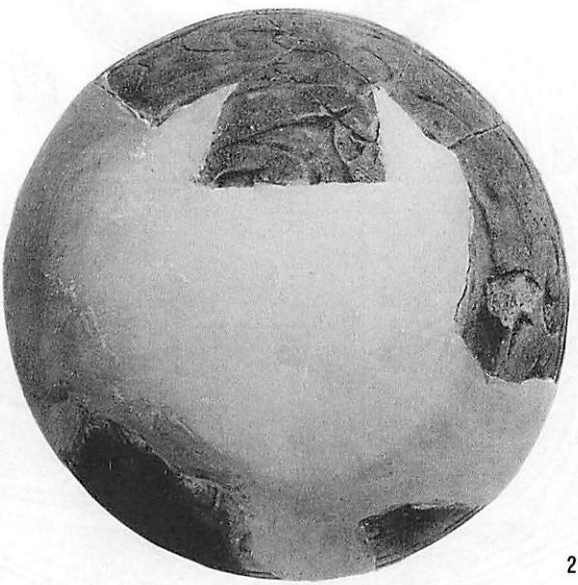
土器実測図　浅鉢Ⅱ類－1

図版第八二



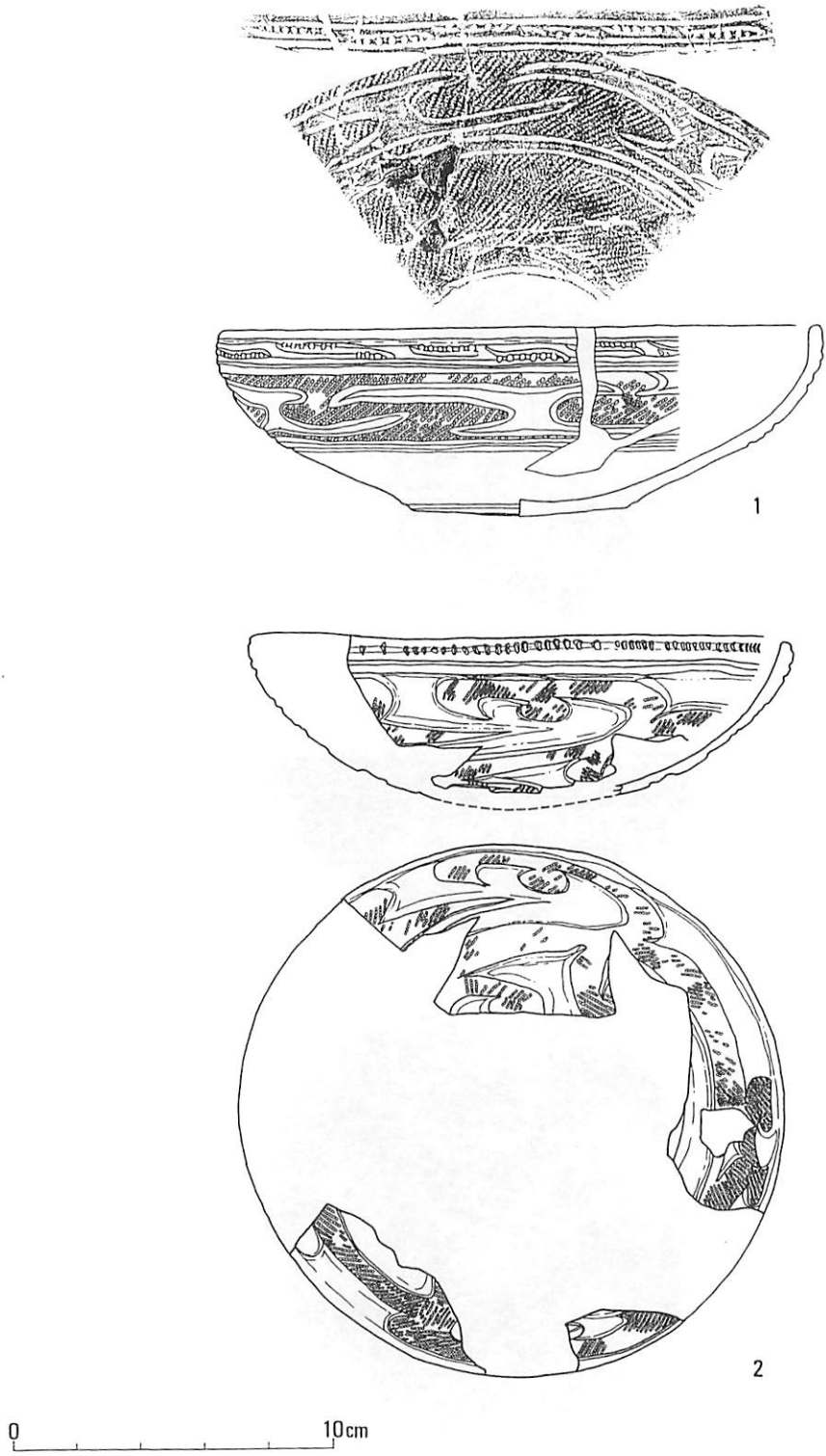
1





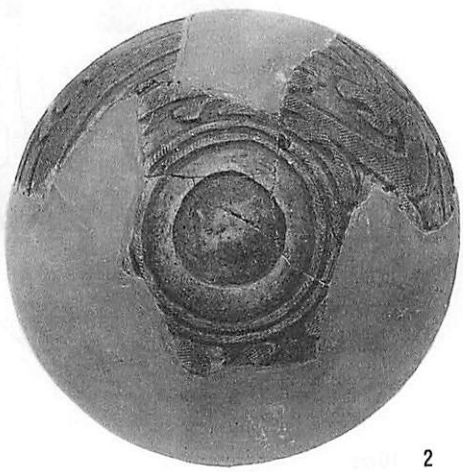
2

土器　浅鉢Ⅱ類－1



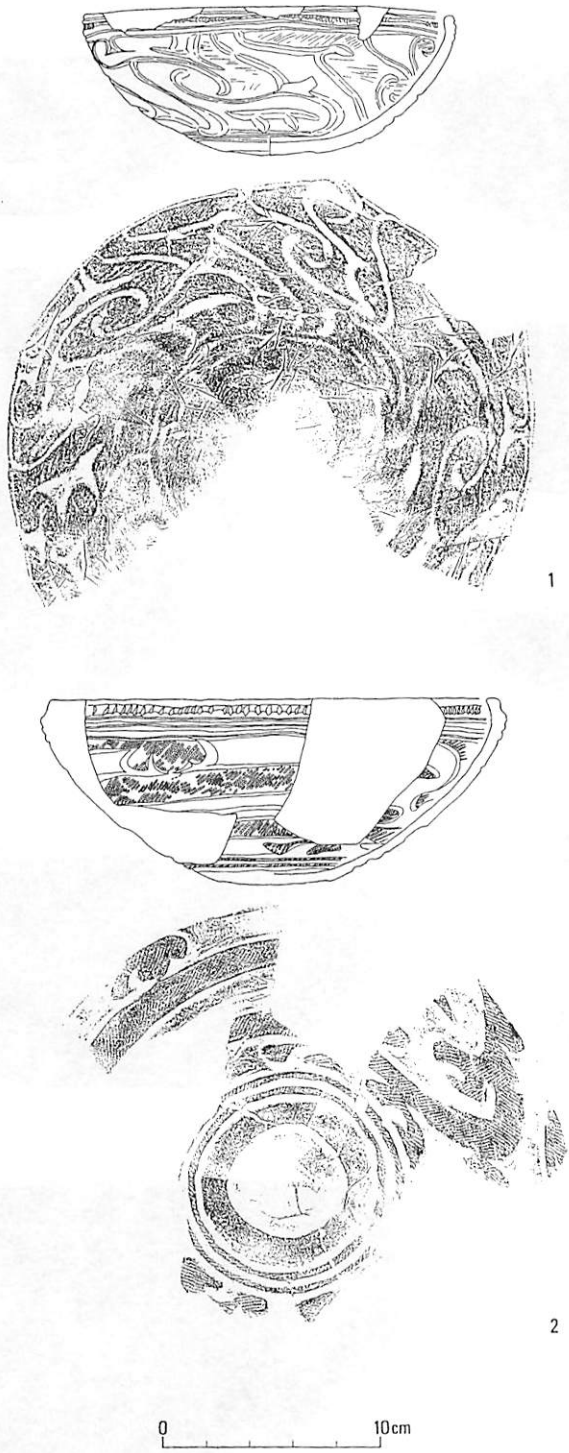
土器実測図　浅鉢Ⅱ類－1

1

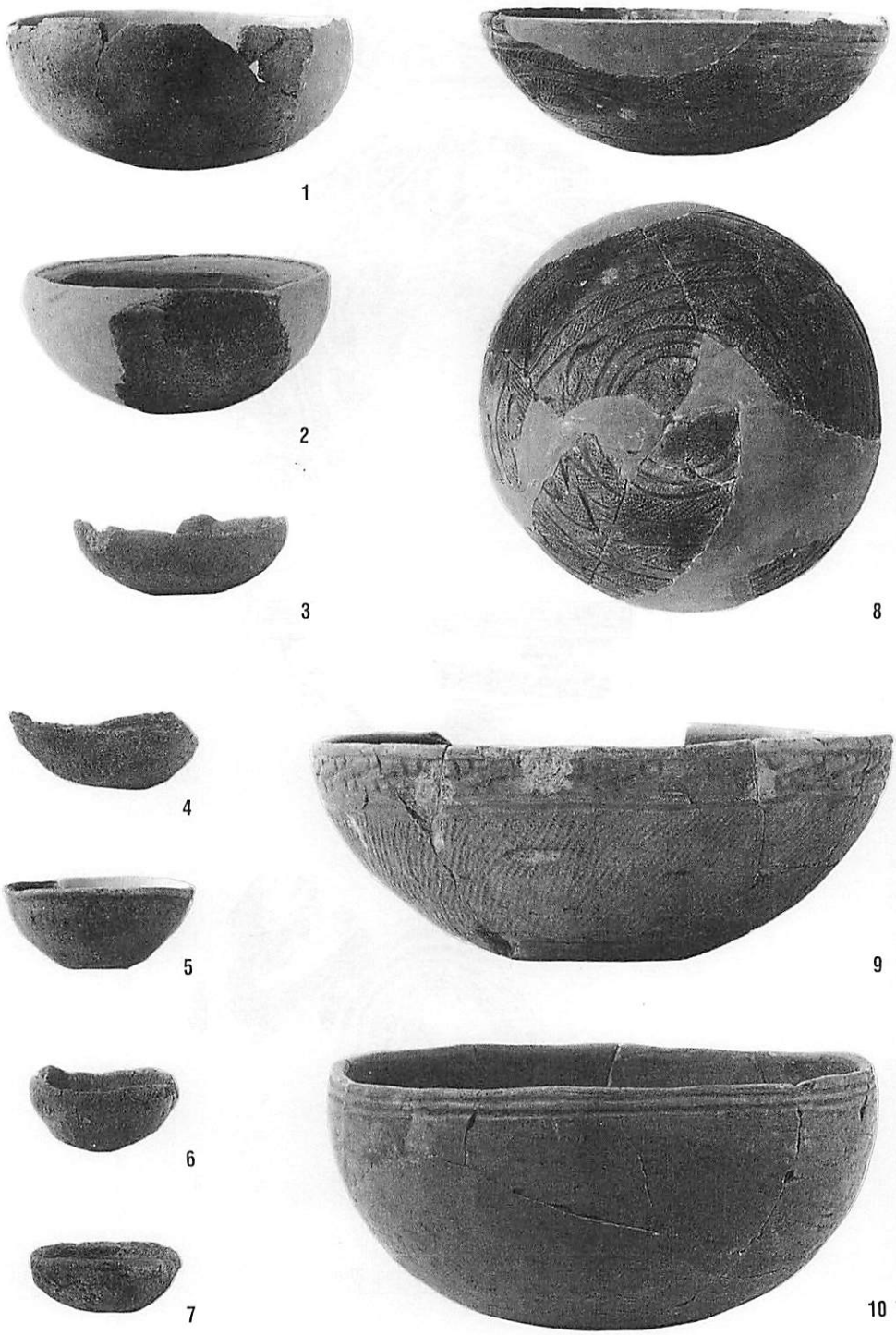


2

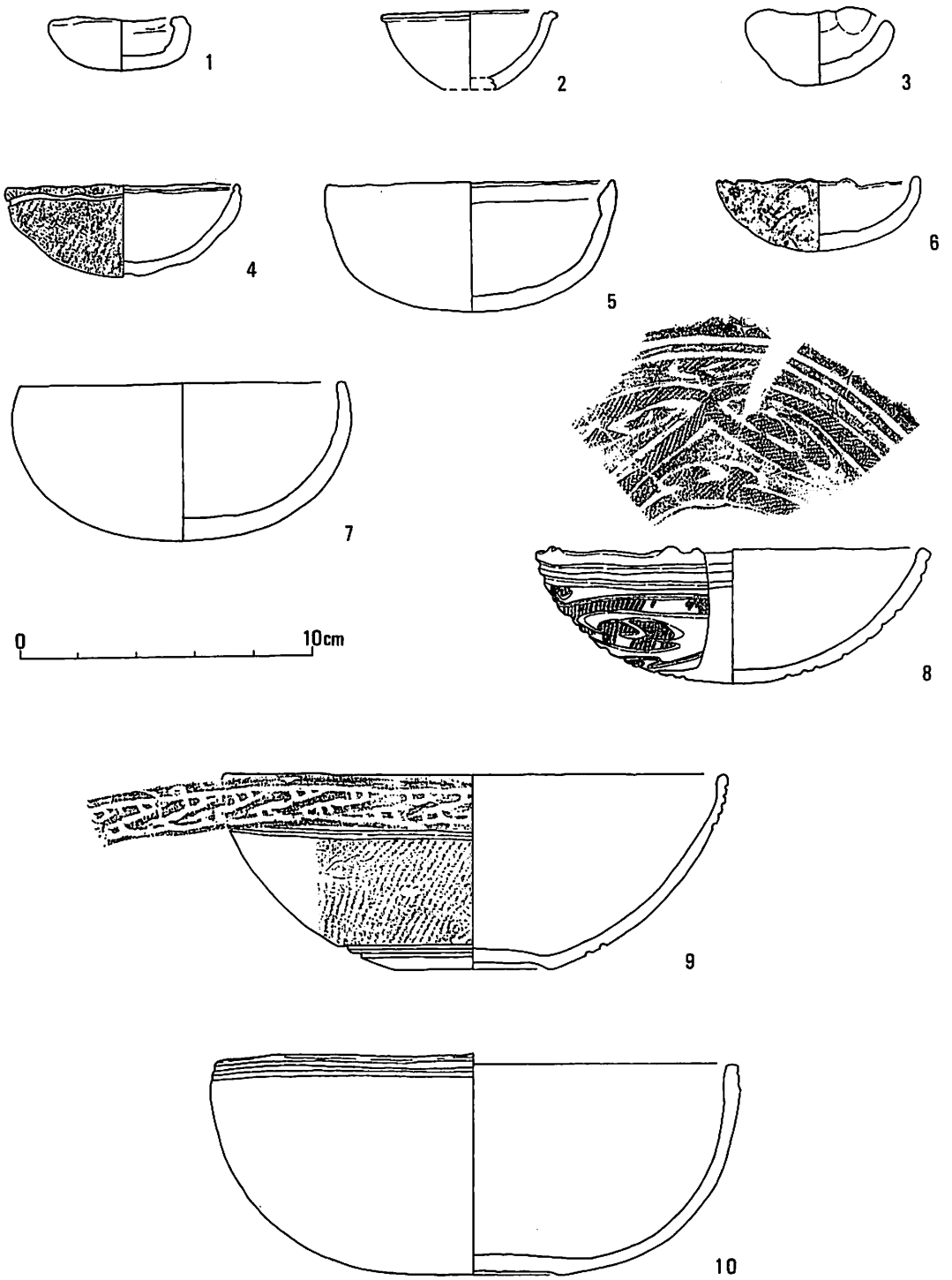
土器　浅鉢Ⅱ類－1



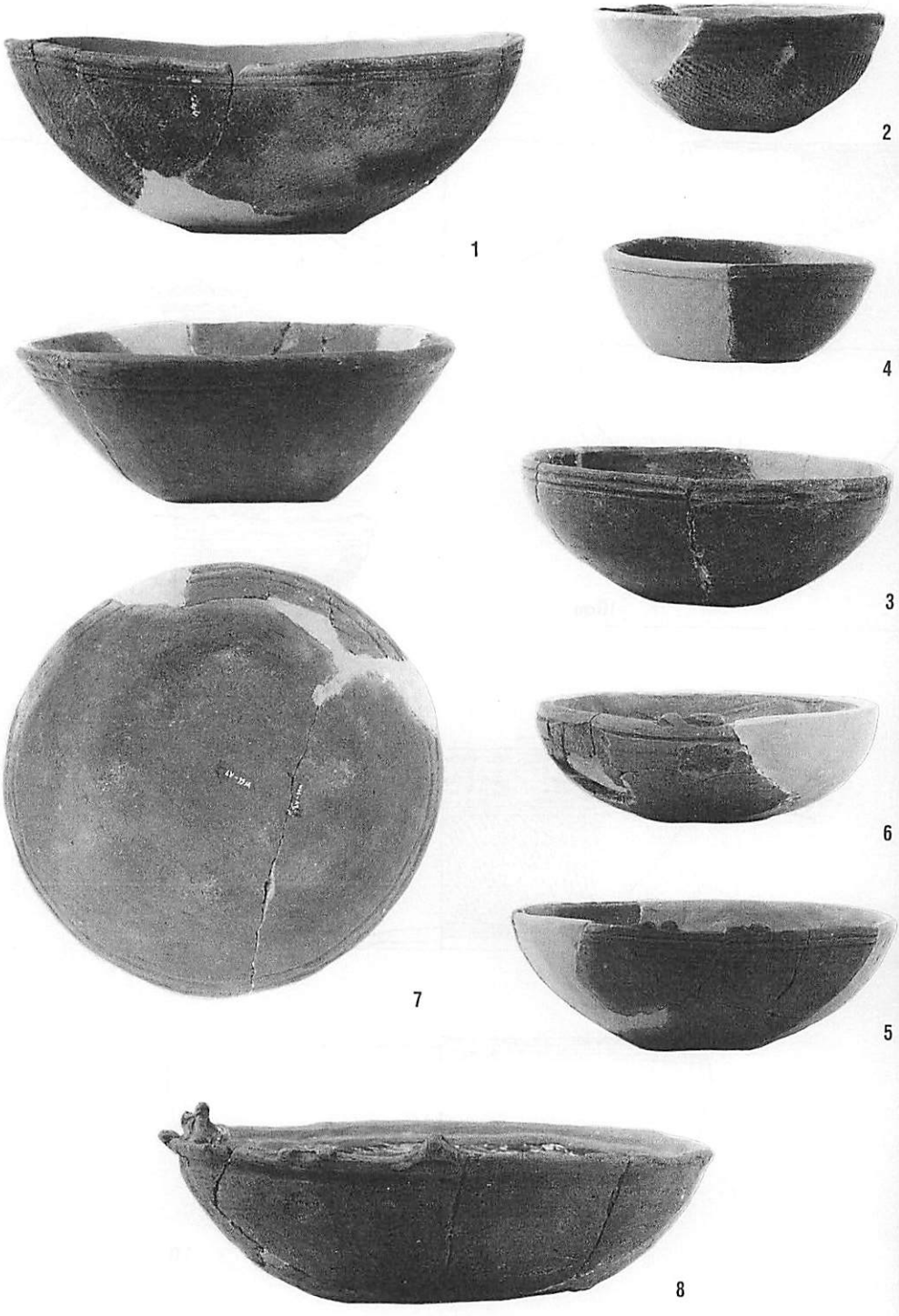
土器実測図　浅鉢Ⅱ類－1



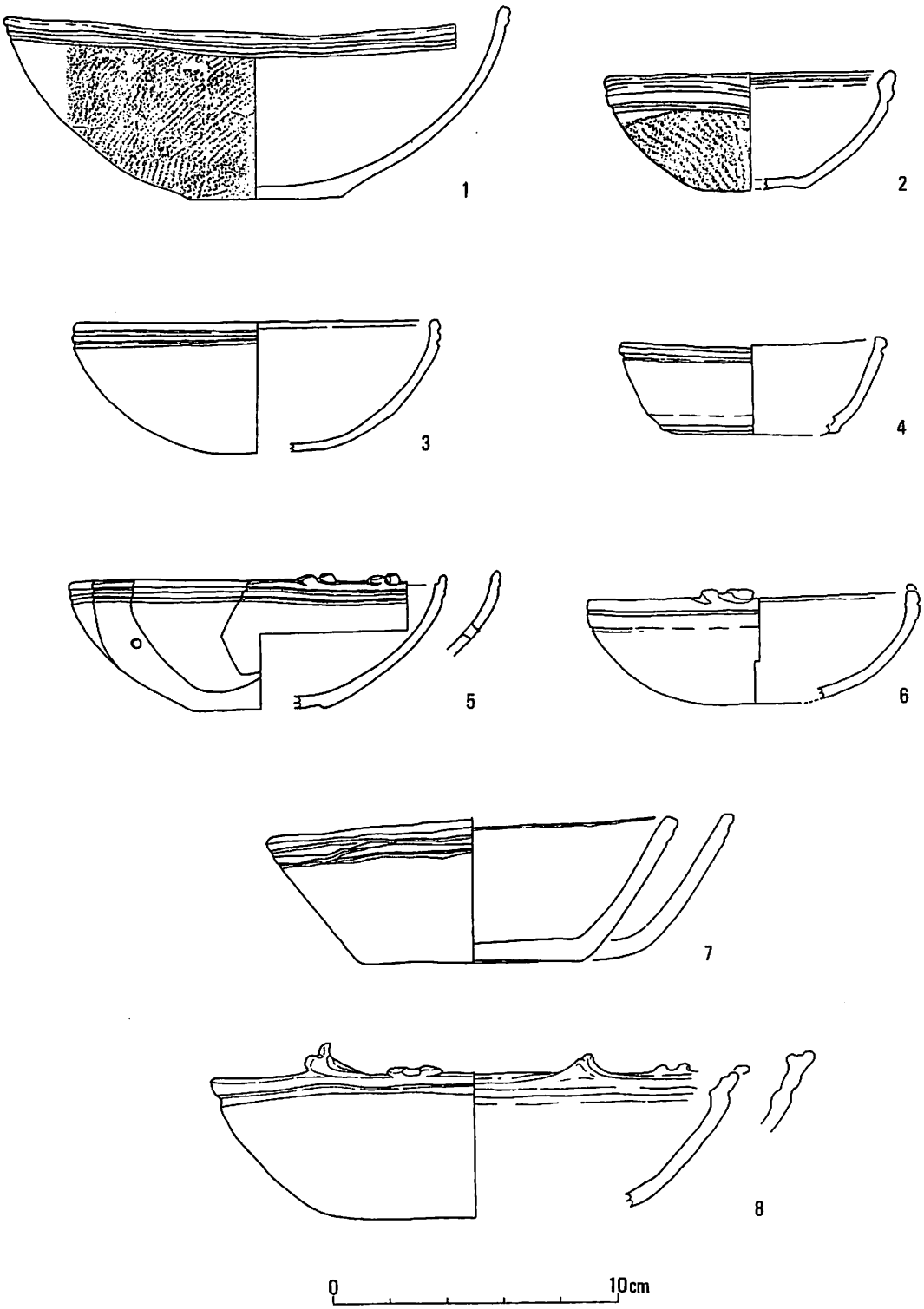
土器　浅鉢Ⅱ類－2



土器実測図　浅鉢Ⅱ類－2



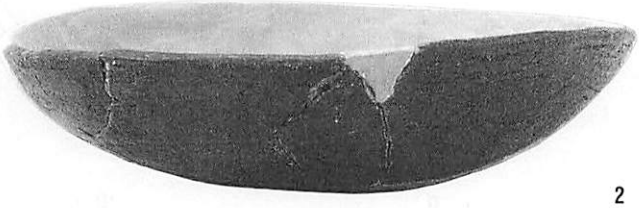
土器　浅鉢Ⅱ類－1



土器実測図　浅鉢Ⅱ類－1

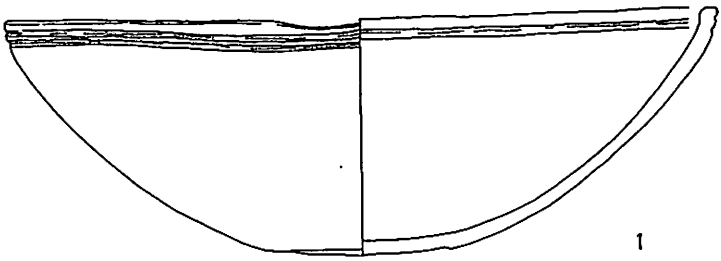
3

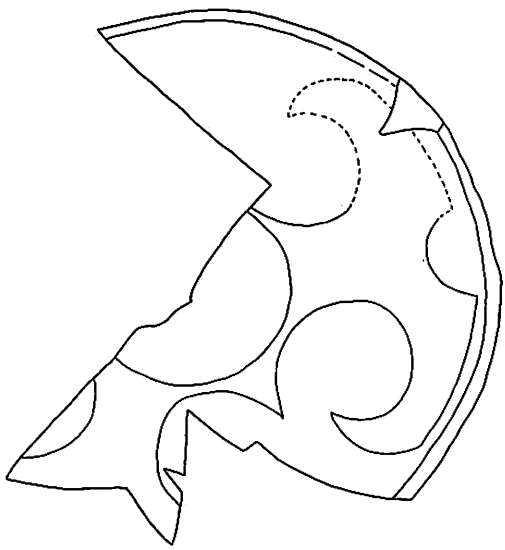
1

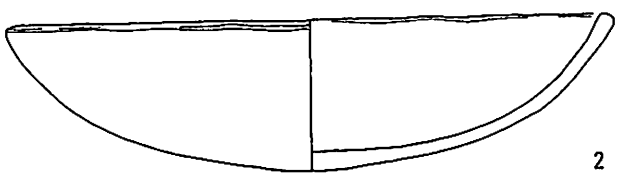


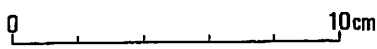
2

土器　浅鉢Ⅱ類－1，2



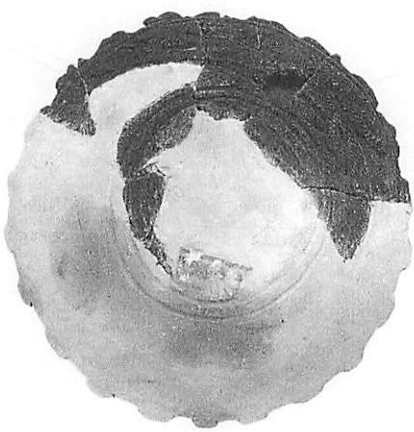






土器実測図　浅鉢Ⅱ類－1，2

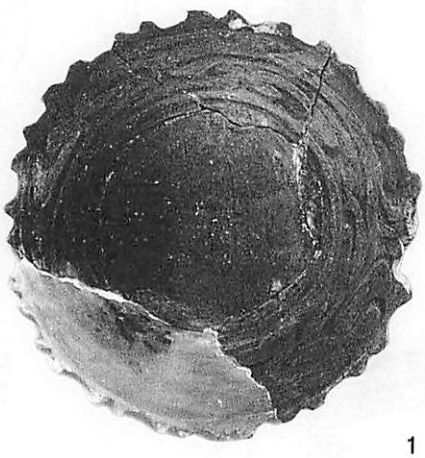
1



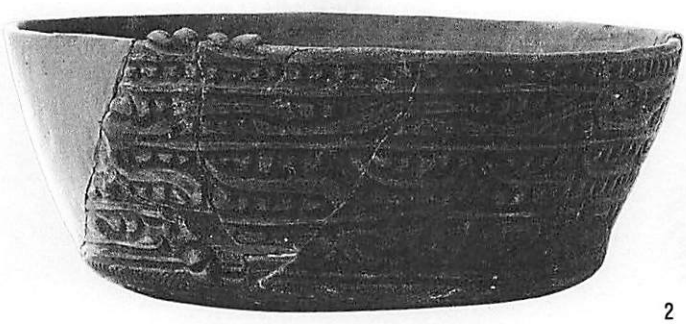
2

土器　浅鉢Ⅱ類－2

土器実測図　浅鉢Ⅱ類－2

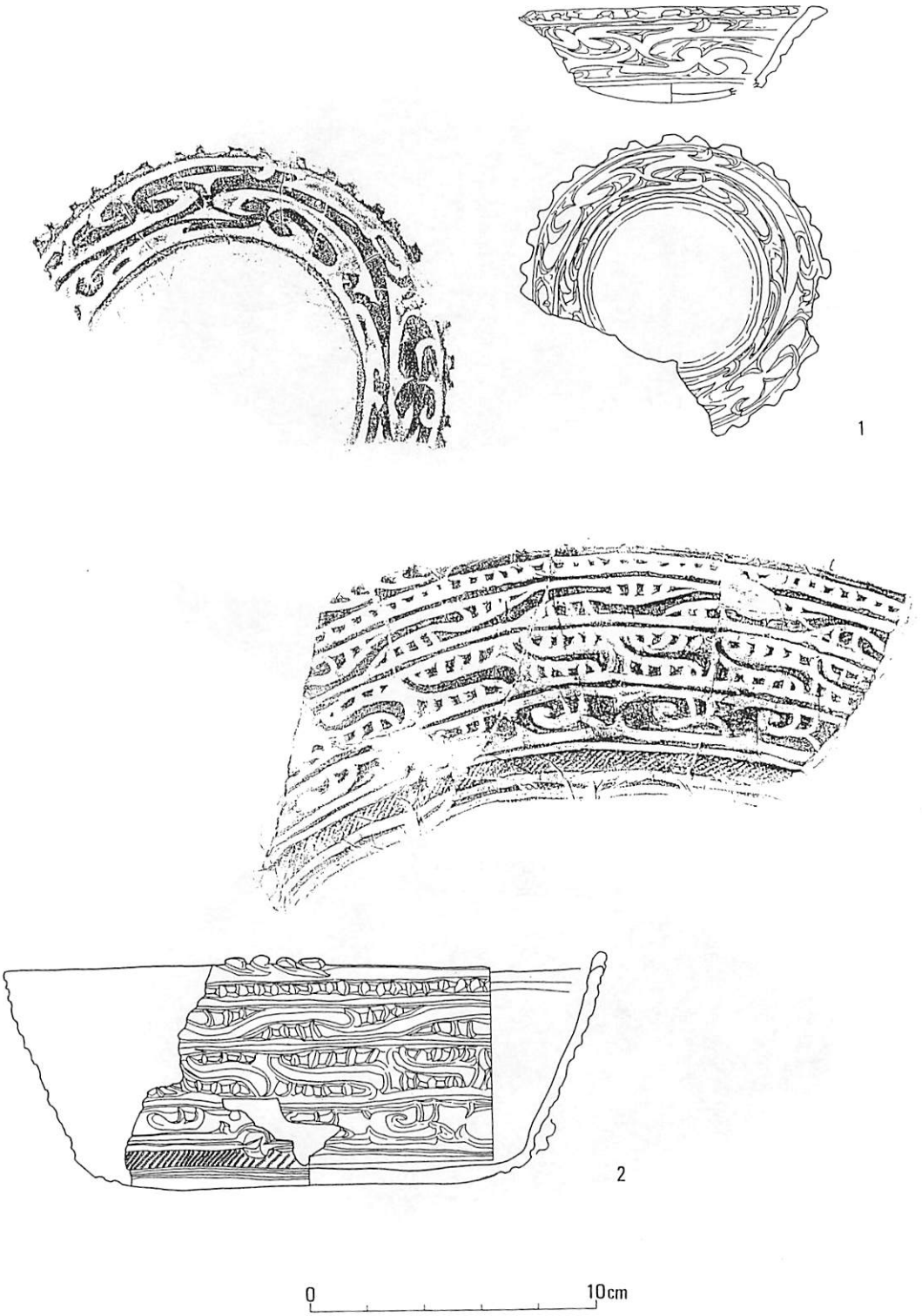


1

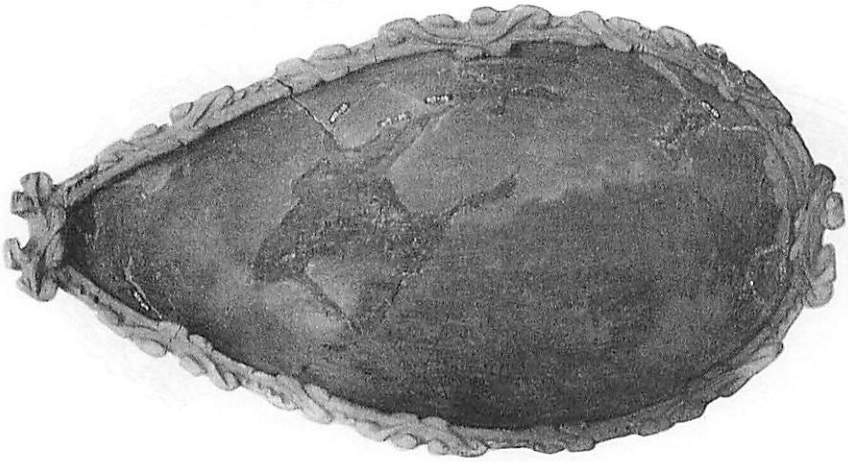


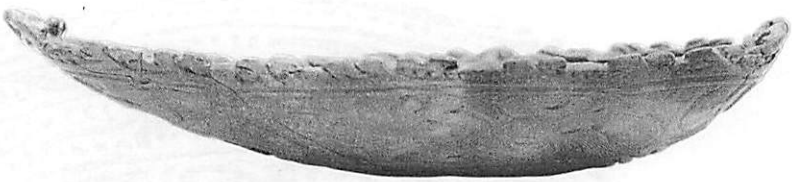
2

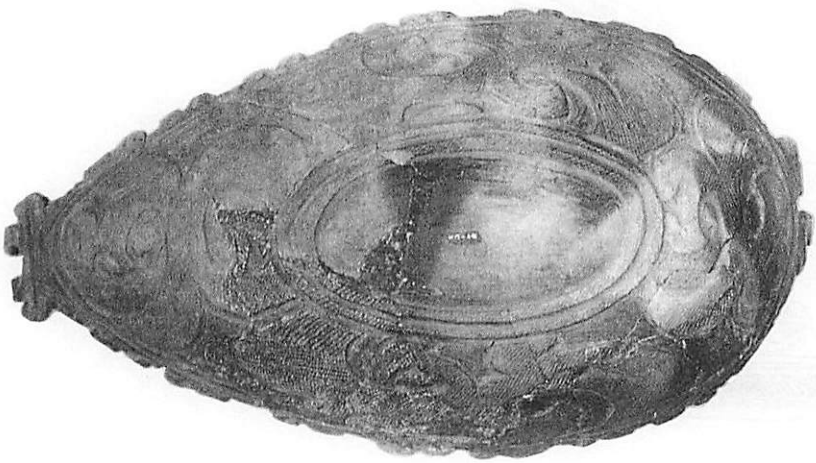
土器　浅鉢Ⅱ類－2



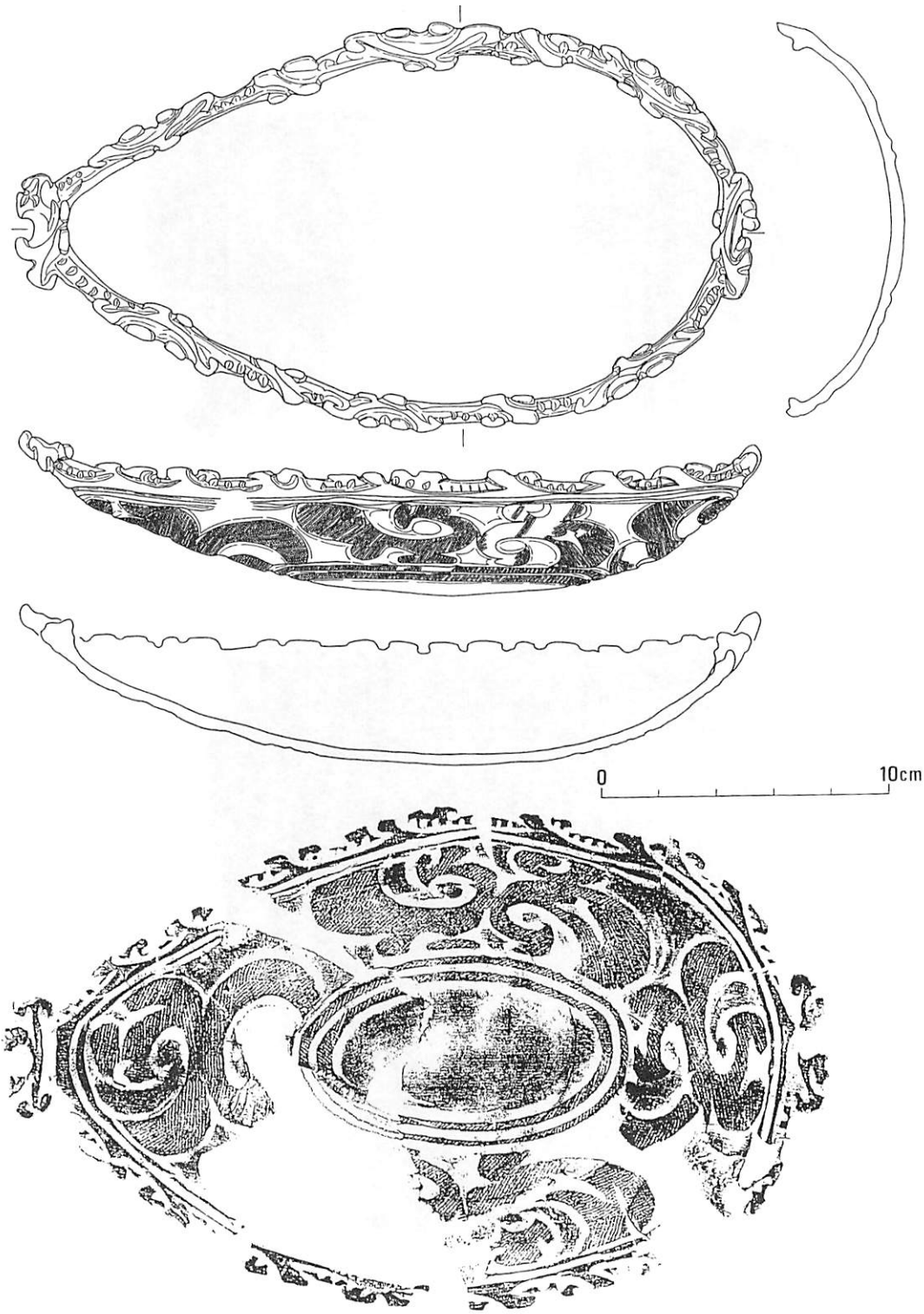
土器実測図　浅鉢Ⅱ類－2



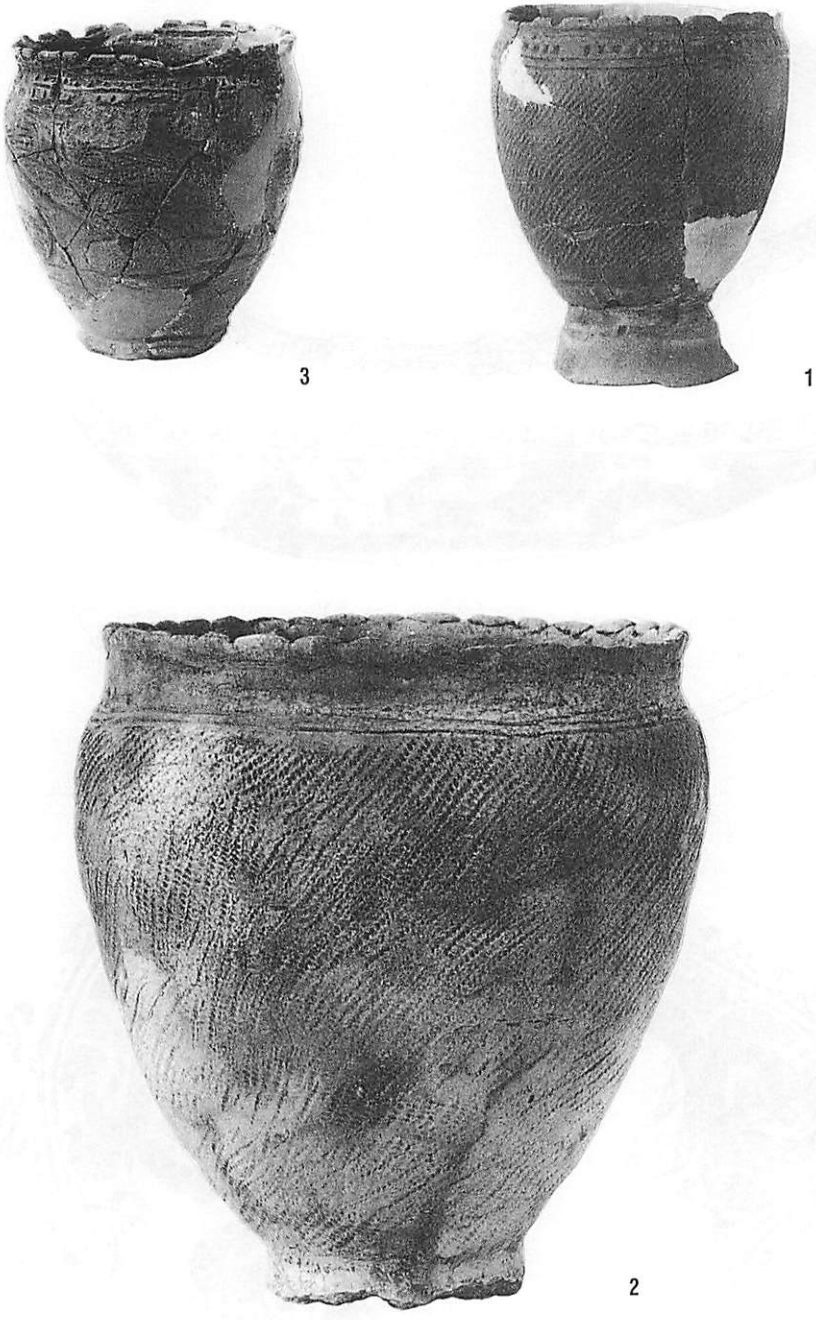




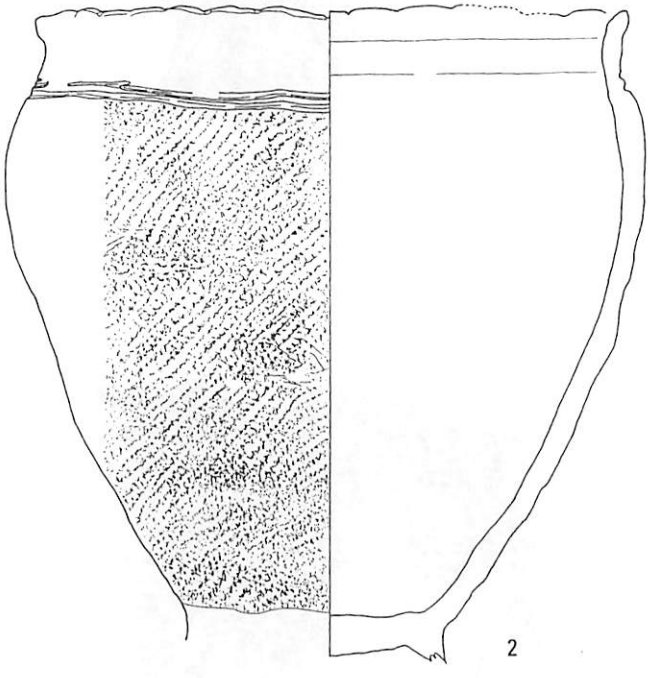
土器　浅鉢Ⅱ類　異形



土器実測図　浅鉢Ⅱ類　異形



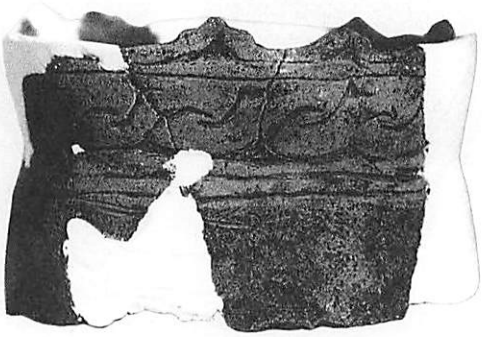
土器　台付深鉢Ⅰ類－1



0　10cm

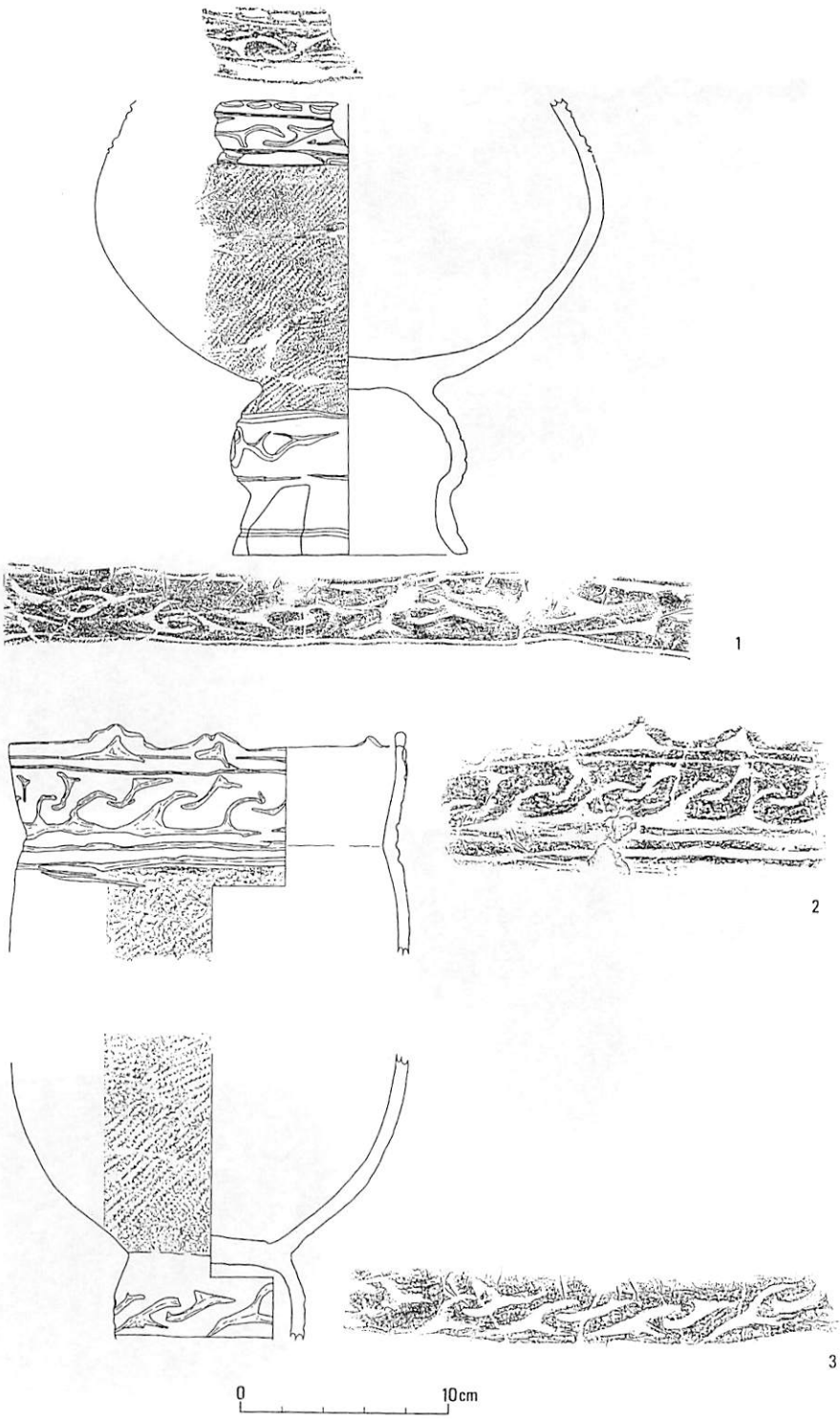
土器実測図　台付深鉢Ⅰ類－1

1



2

土器　台付鉢Ⅰ類－1



土器実測図　台付鉢Ⅰ類－1

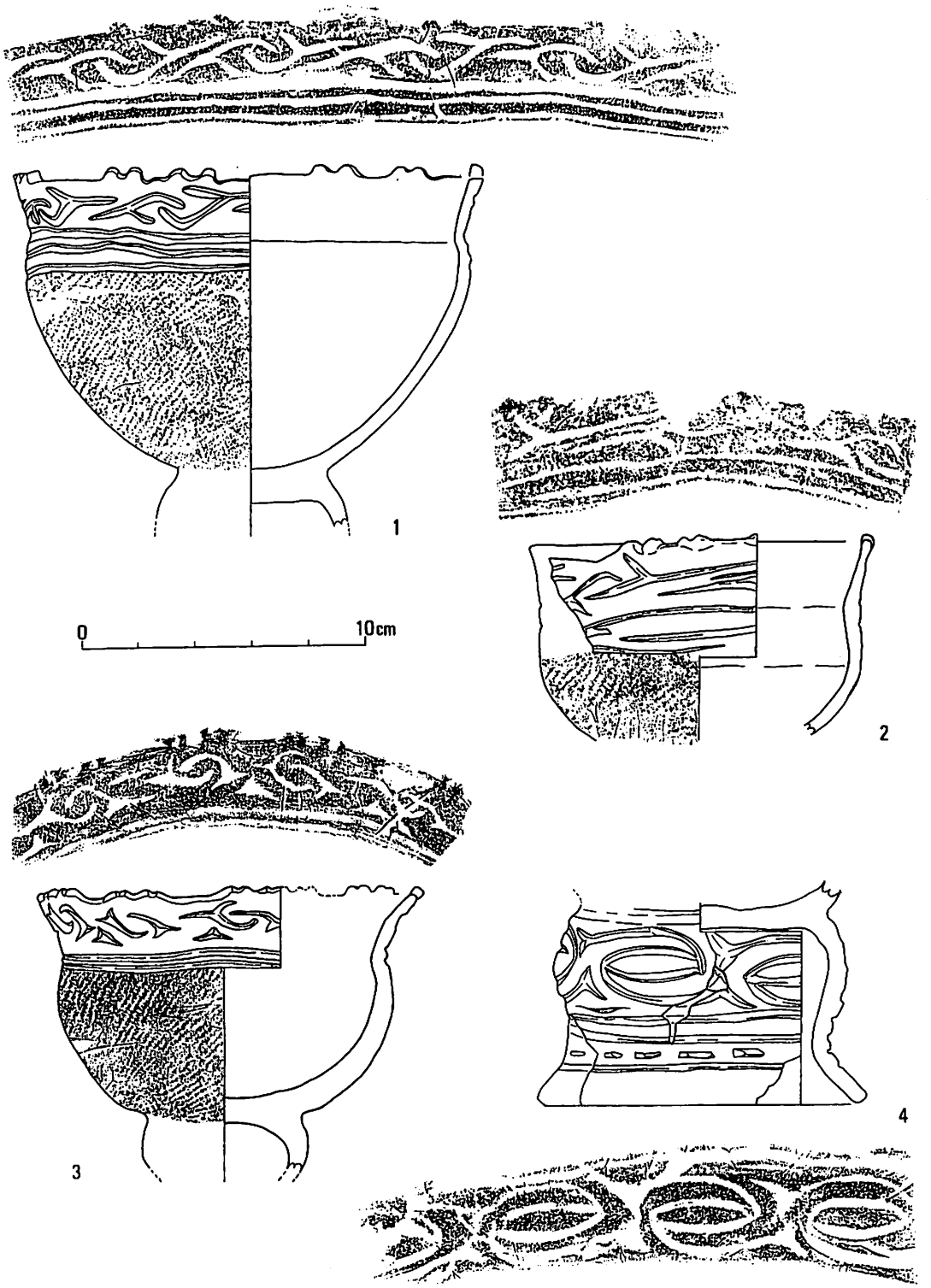
1

2

3

4

土器　台付鉢Ⅰ類－1



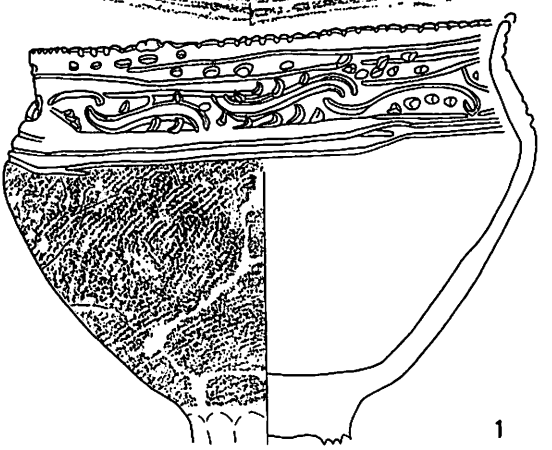
土器実測図　台付鉢Ⅰ類－1

1

2

3

土器　台付鉢Ⅰ類－1



1

2

0 10cm

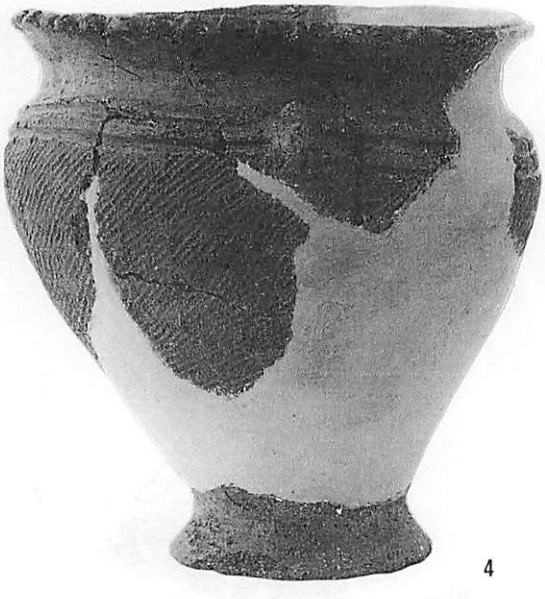
土器実測図　台付鉢Ⅰ類－1

1

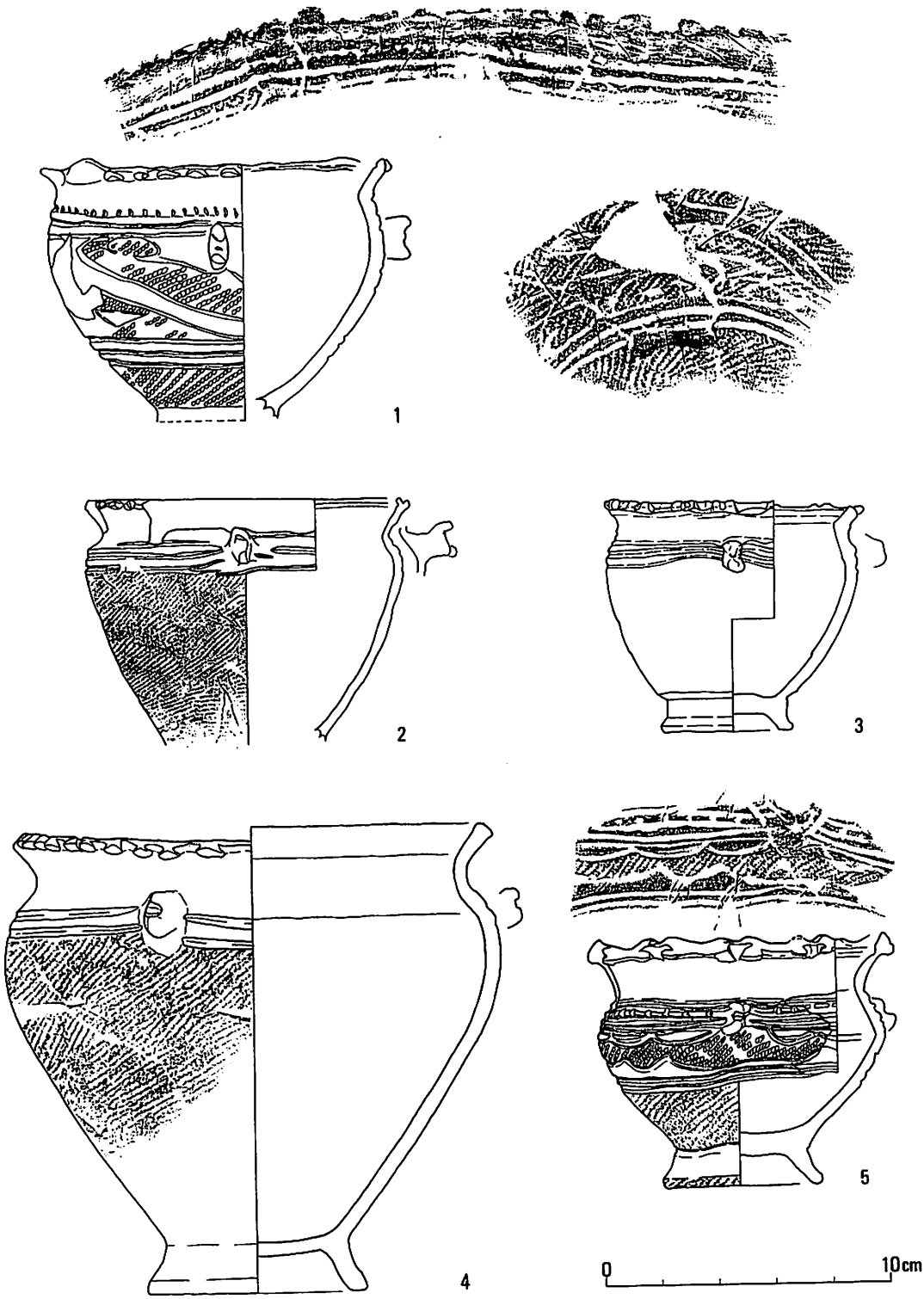
3

2

5


4

土器　台付鉢Ⅰ類－1

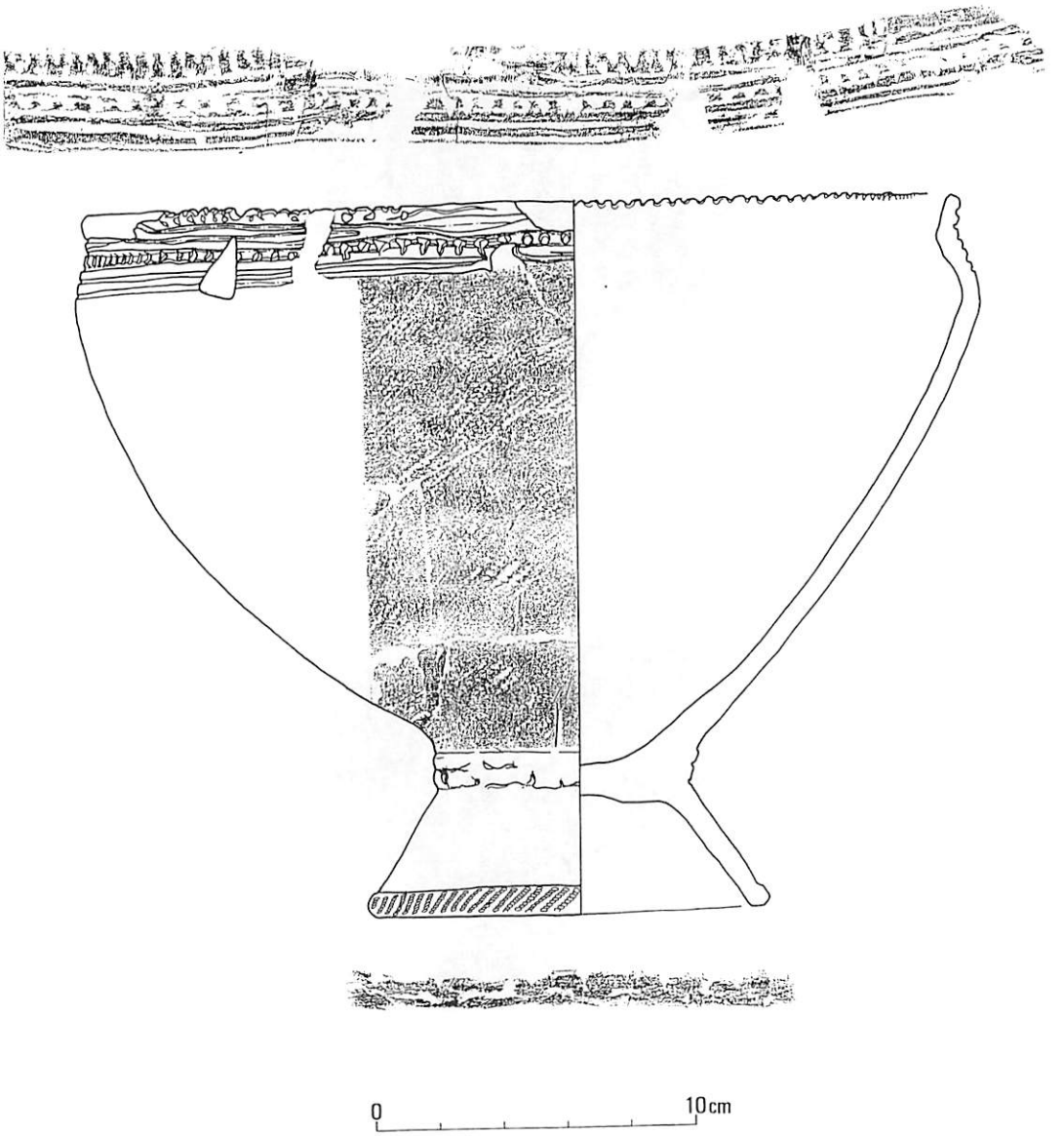


土器実測図　台付鉢Ⅰ類－1

1

2

土器　台付鉢Ⅰ類－2



土器実測図　台付鉢Ⅰ類－2

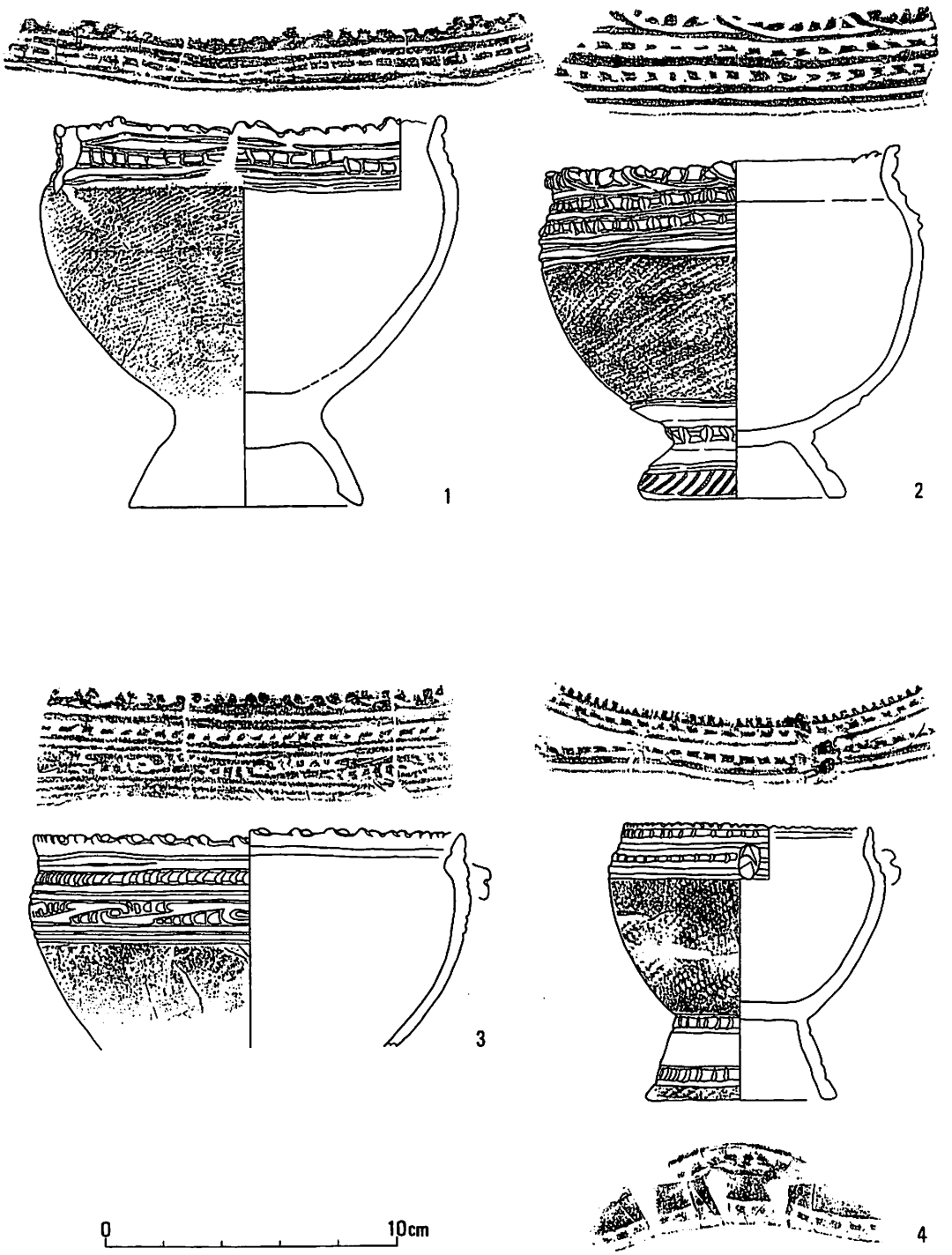
1

2

3

4

土器　台付鉢Ⅰ類－2



土器実測図　台付鉢Ⅰ類－2

1

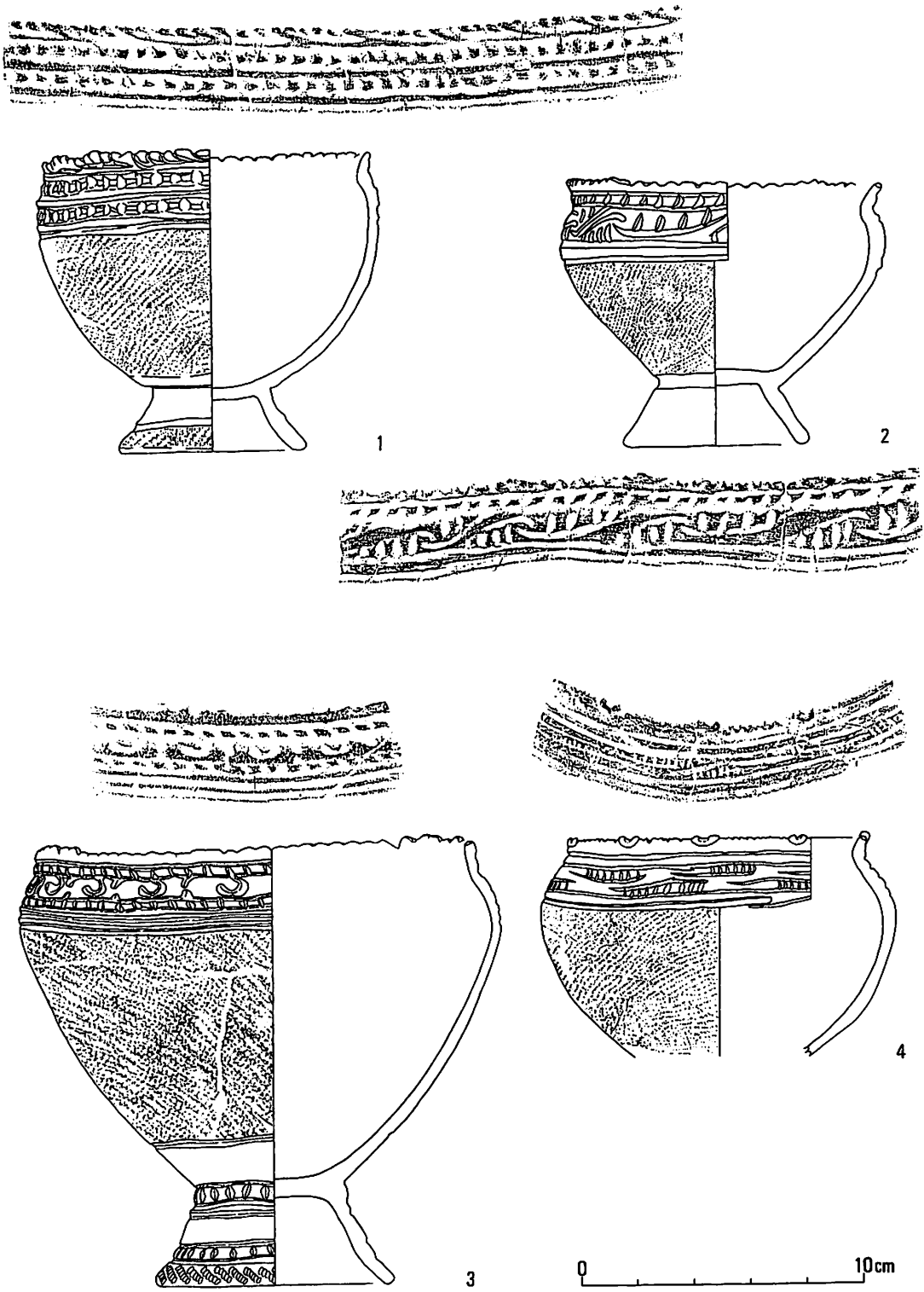
2

5

4

3

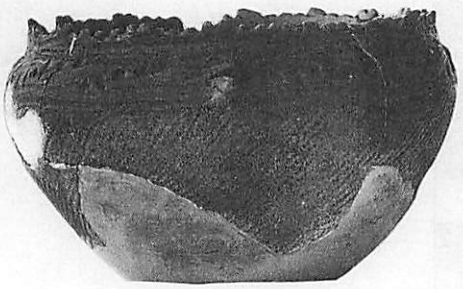
土器　台付鉢Ⅰ類－2



土器実測図　台付鉢Ⅰ類－2

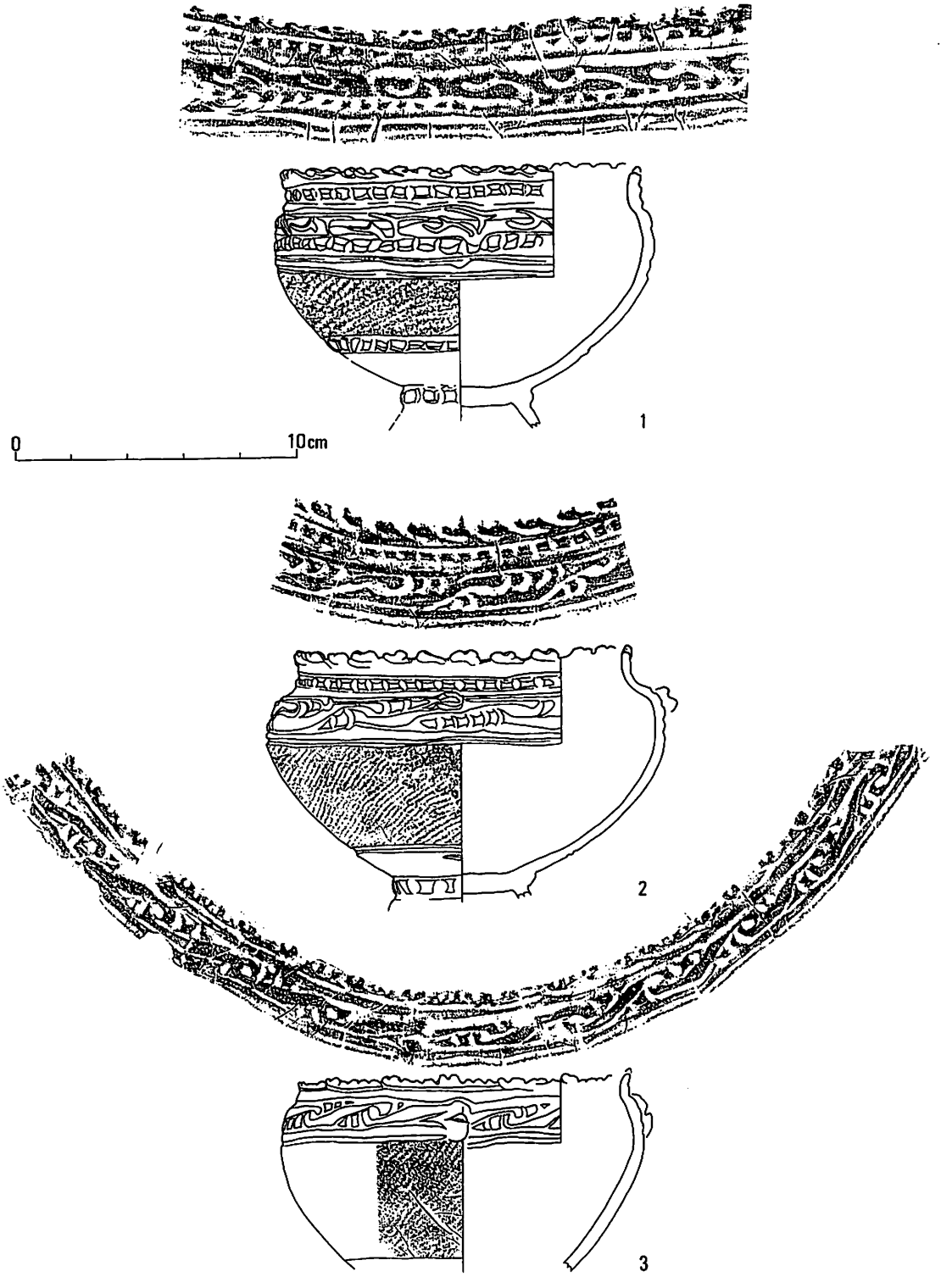
1

2



3

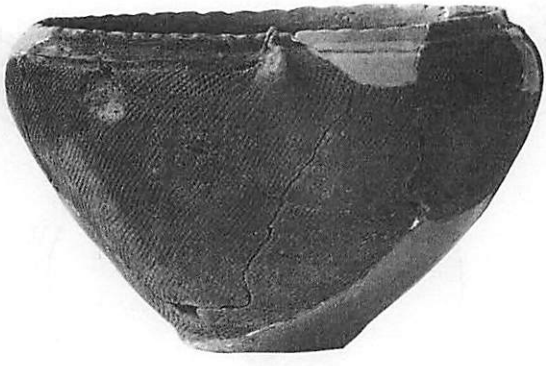
土器　台付鉢Ⅰ類－2



土器実測図　台付鉢Ⅰ類－2

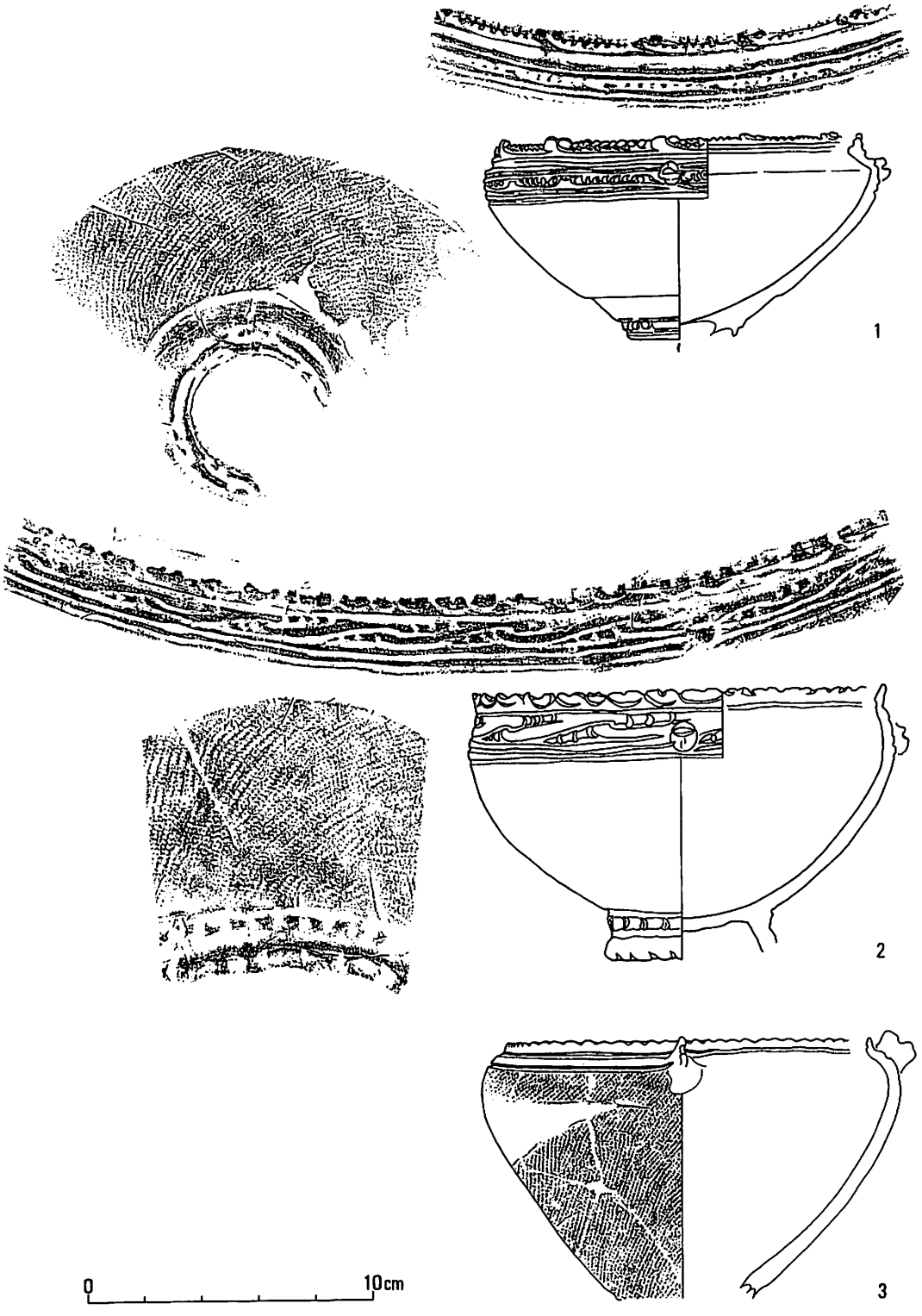
1

2



3

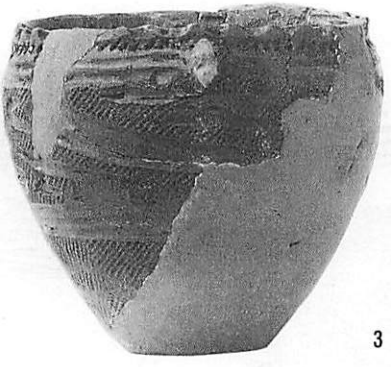
土器　台付鉢Ⅰ類－2



土器実測図　台付鉢Ⅰ類－2

1

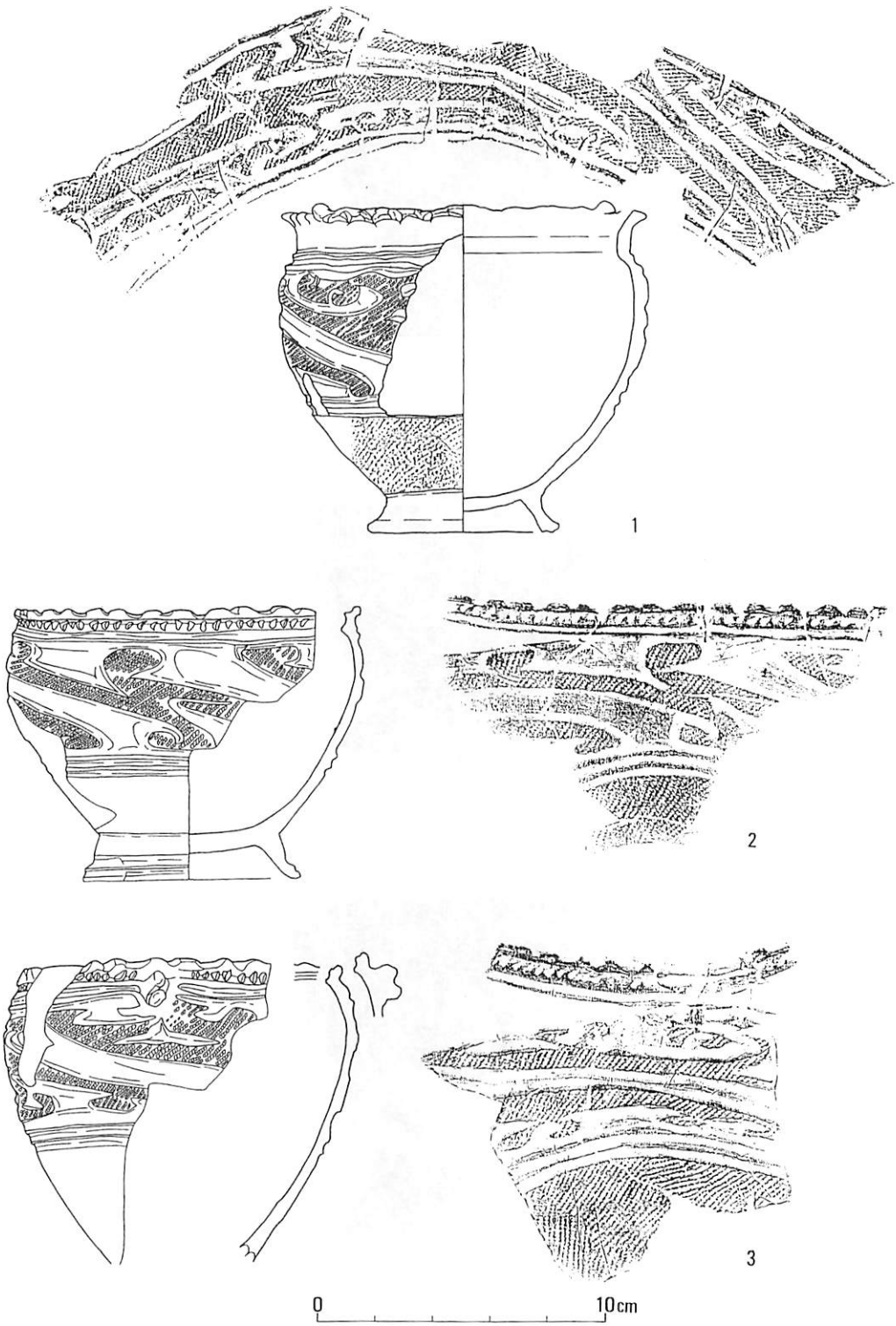
2



3

4

土器　台付鉢Ⅰ類－2



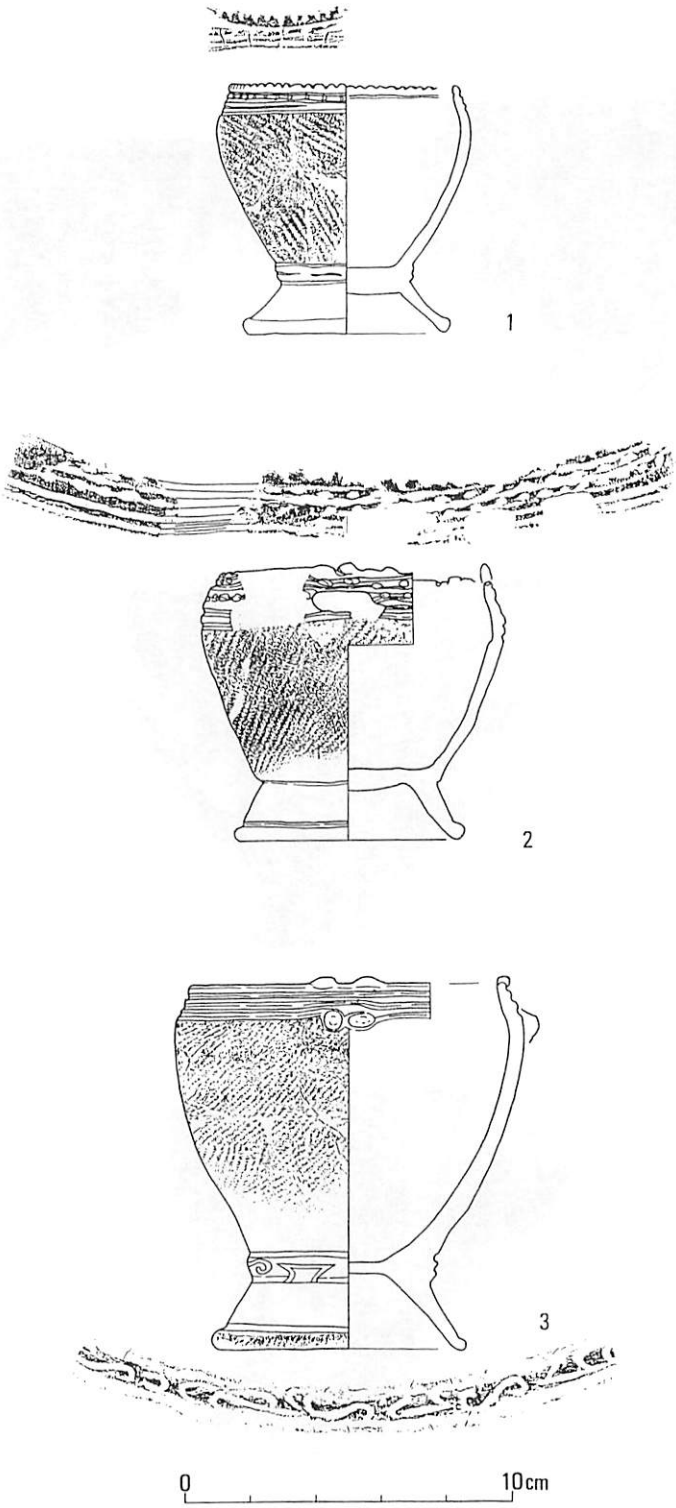
土器実測図　台付鉢Ⅰ類－2

1

2

3

土器　台付鉢Ⅱ類－1



土器実測図　台付鉢Ⅱ類－1

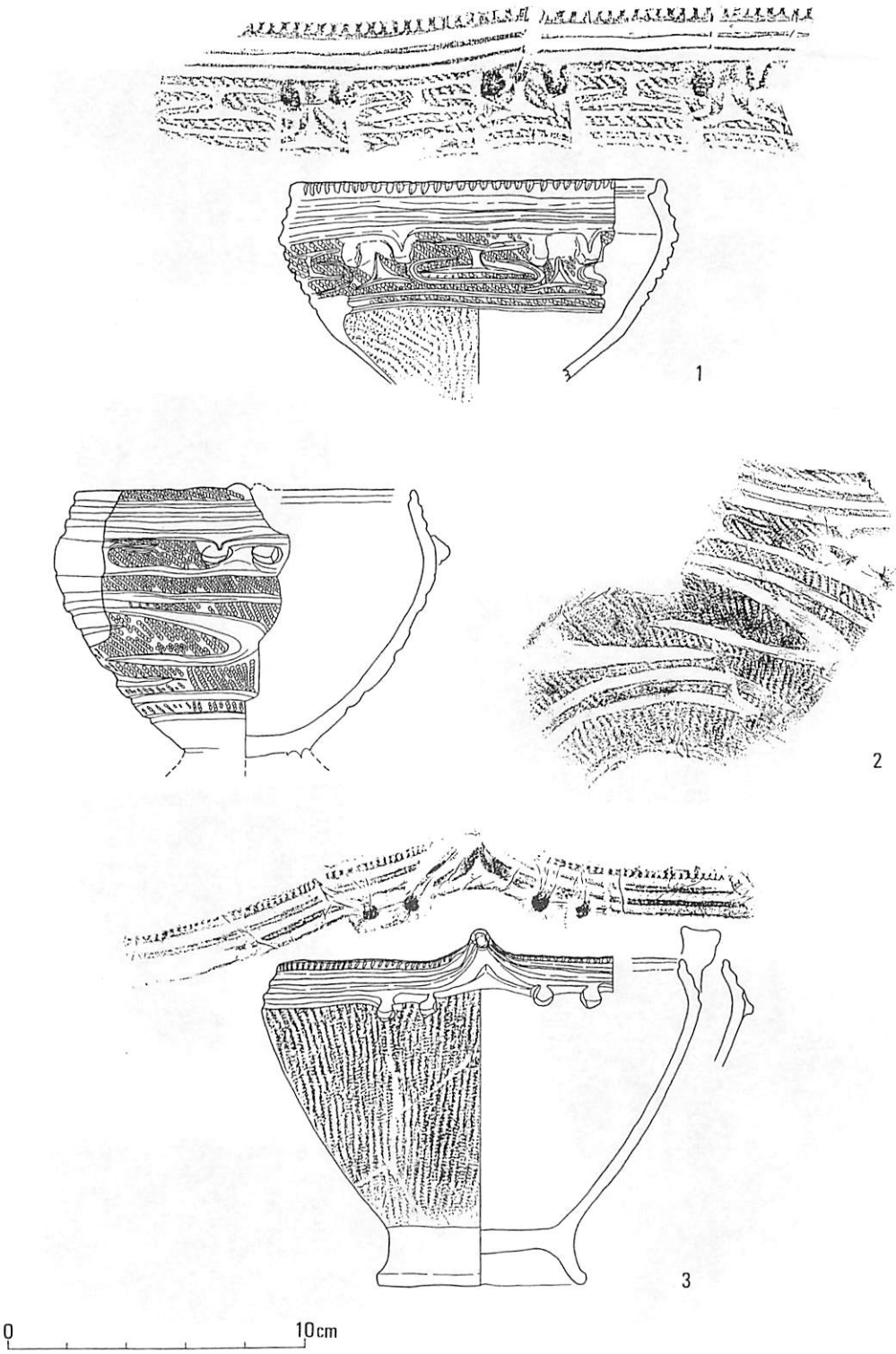
2

1

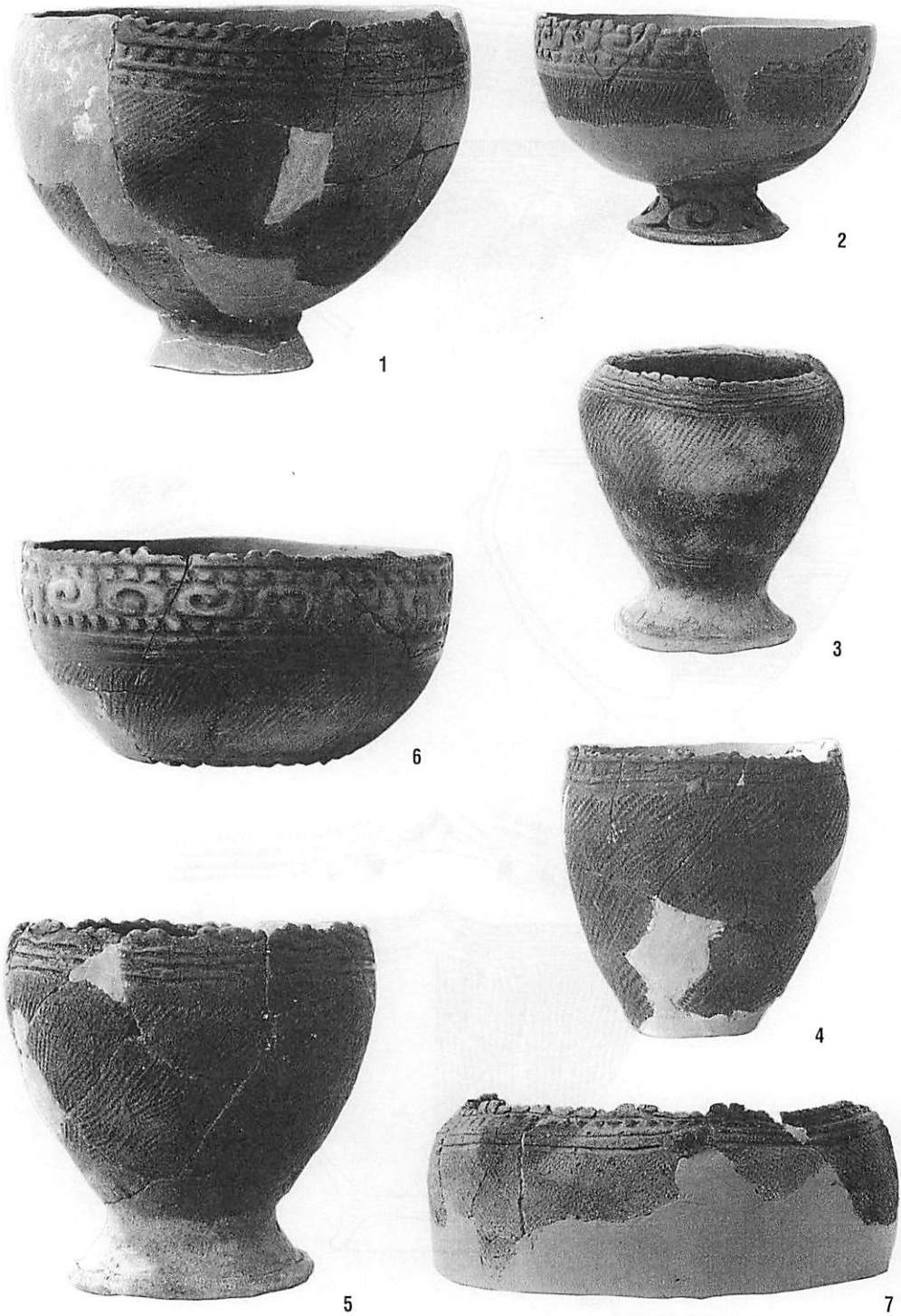
3

4

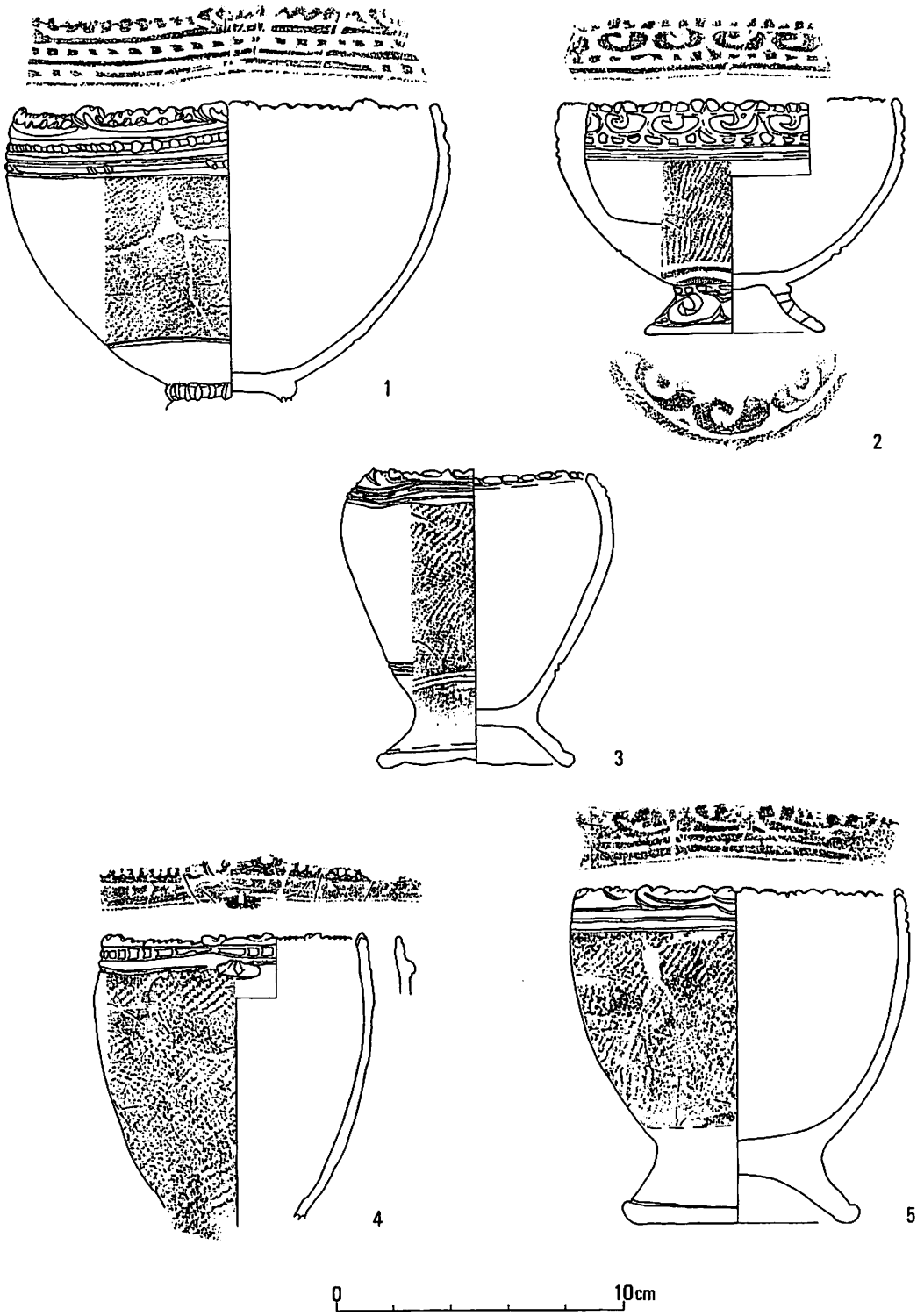
土器　台付鉢Ⅱ類－1



土器実測図　台付鉢Ⅱ類－1



土器　台付鉢Ⅱ類－1



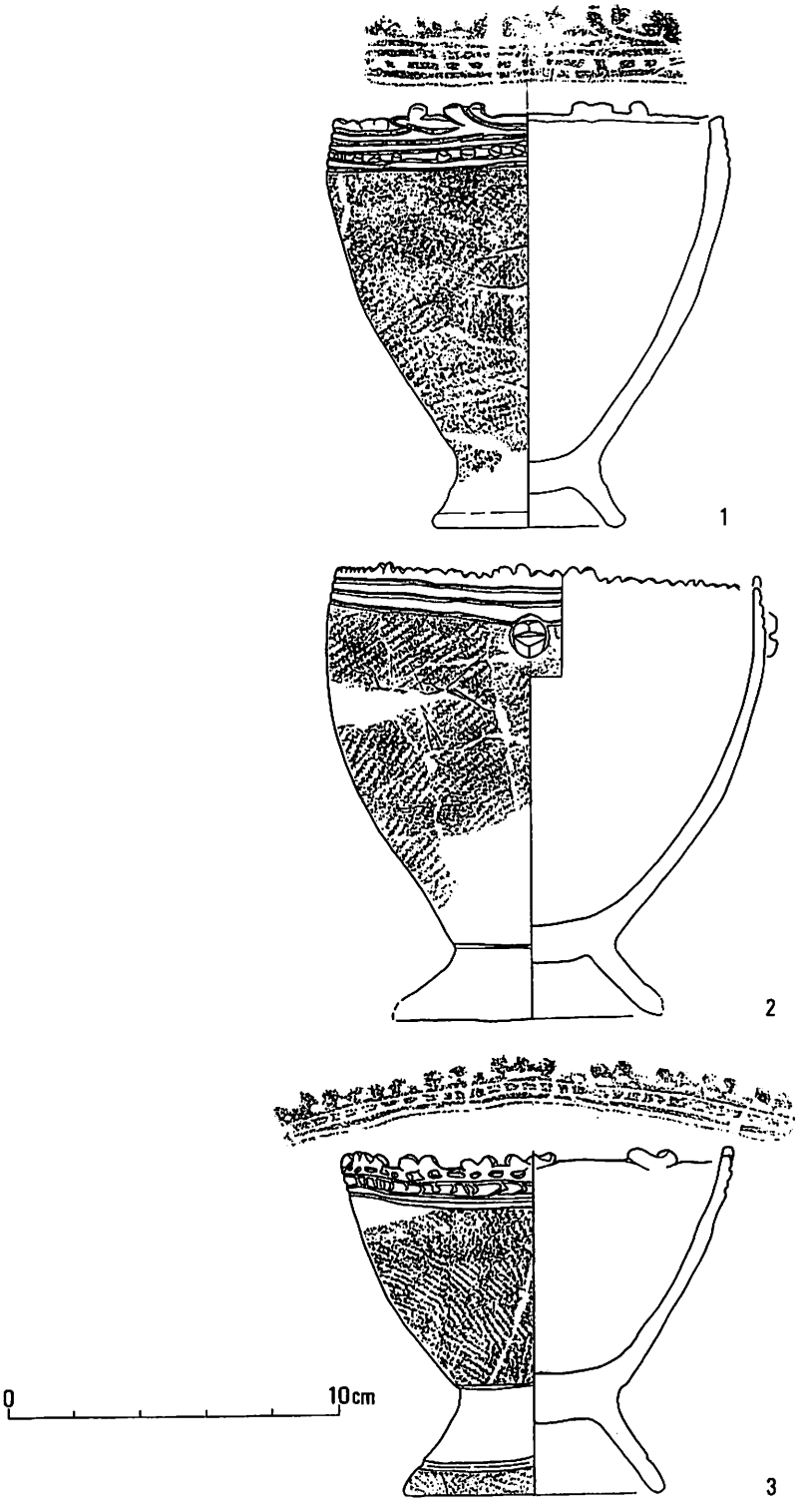
土器実測図　台付鉢Ⅱ類－1

1

2

3

土器　台付鉢Ⅱ類－２，３



土器実測図　台付鉢Ⅱ類－2，3

1

3

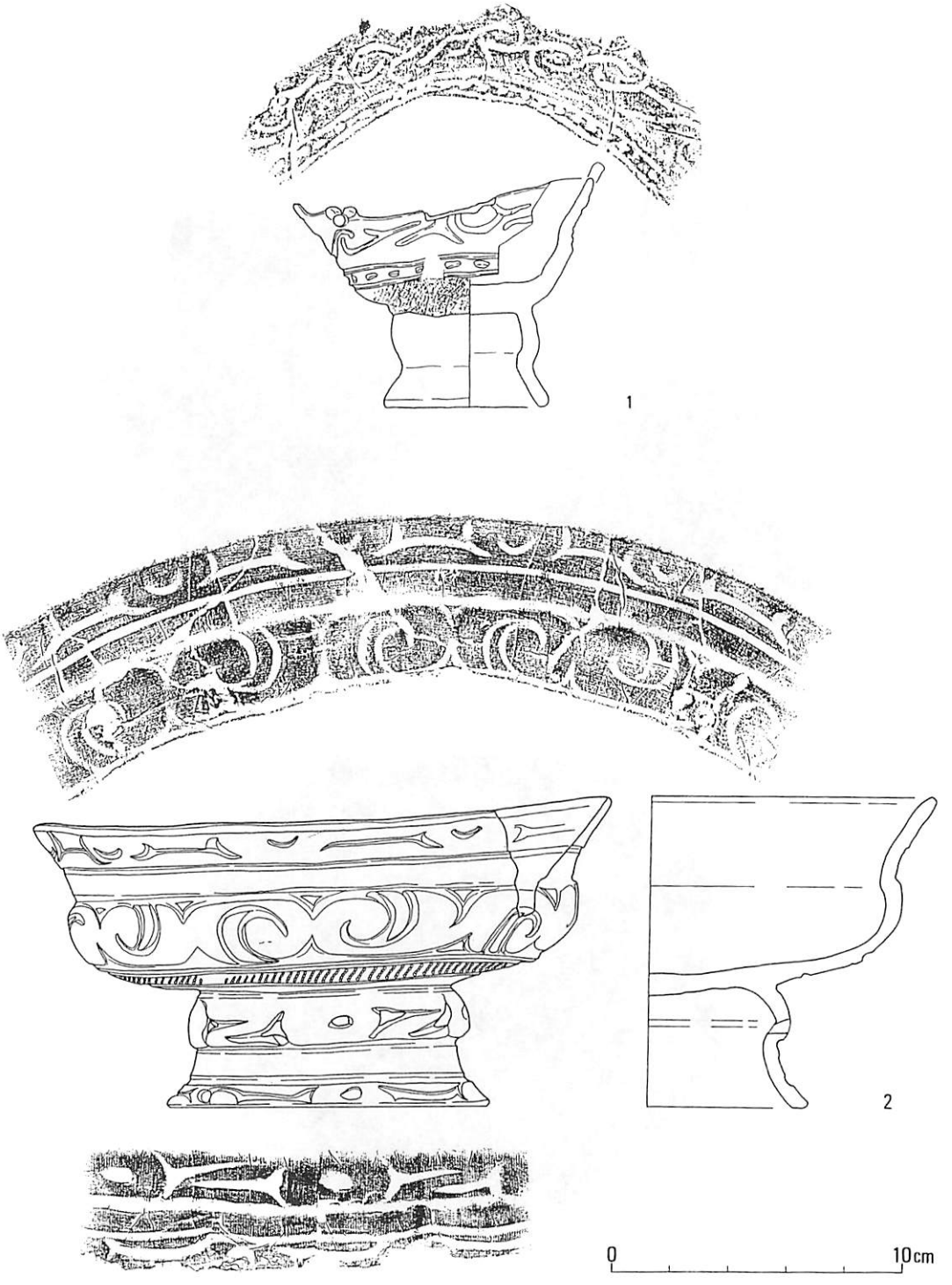
4

5

6

2

土器　台付浅鉢Ⅰ類－1



土器実測図　台付浅鉢Ⅰ類－1

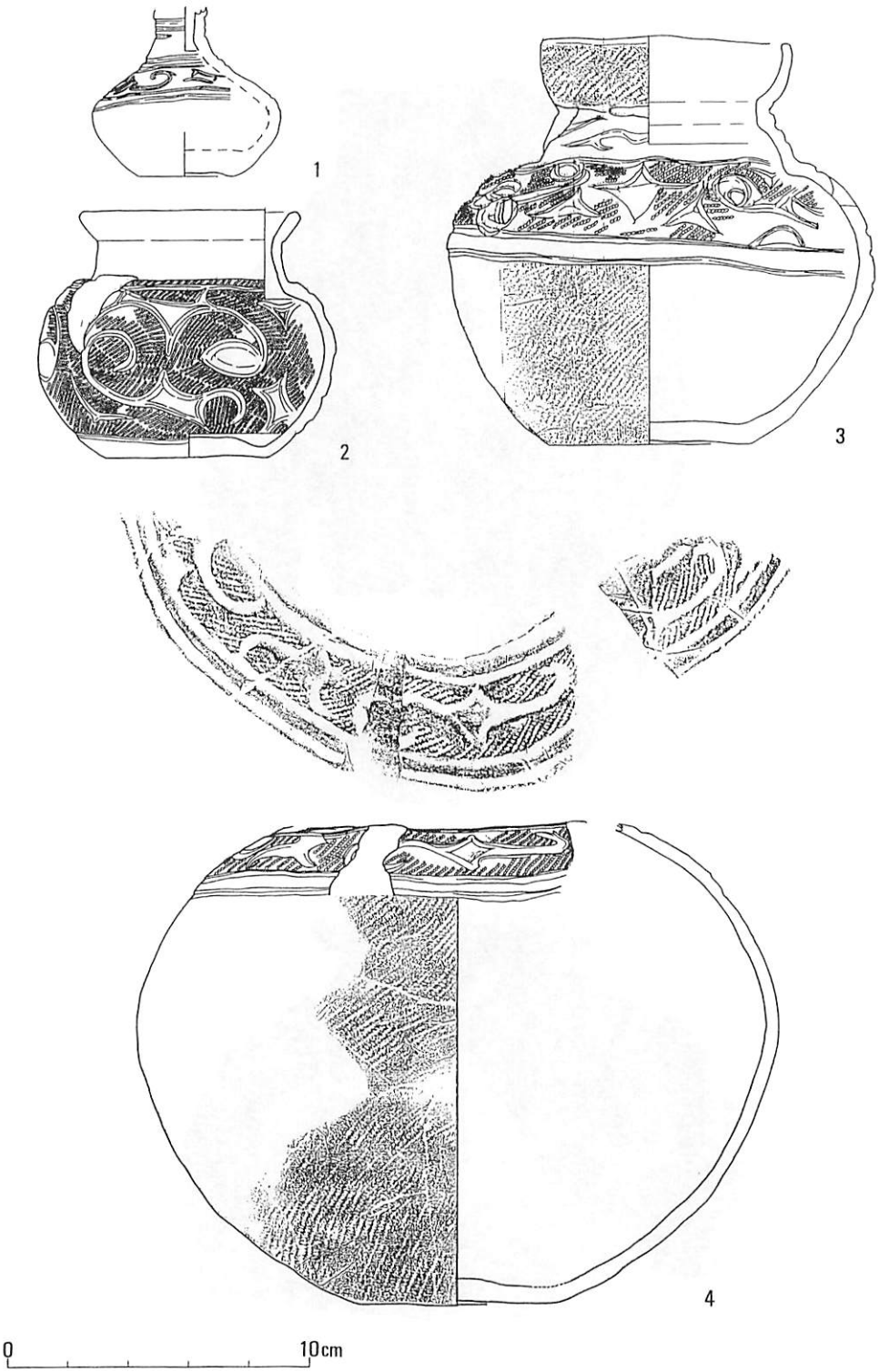
1

2

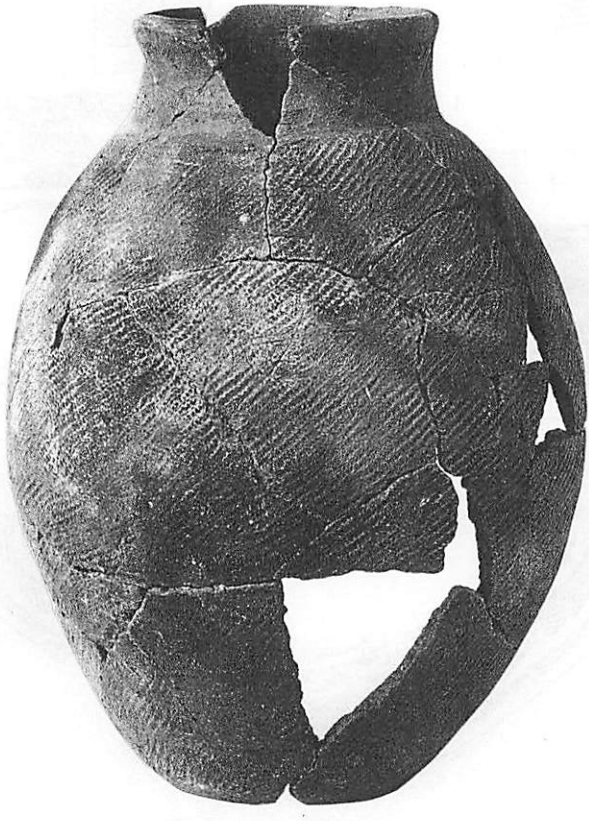
3

4

土器　壺ＩＡ類



土器実測図　壺ＩＡ類



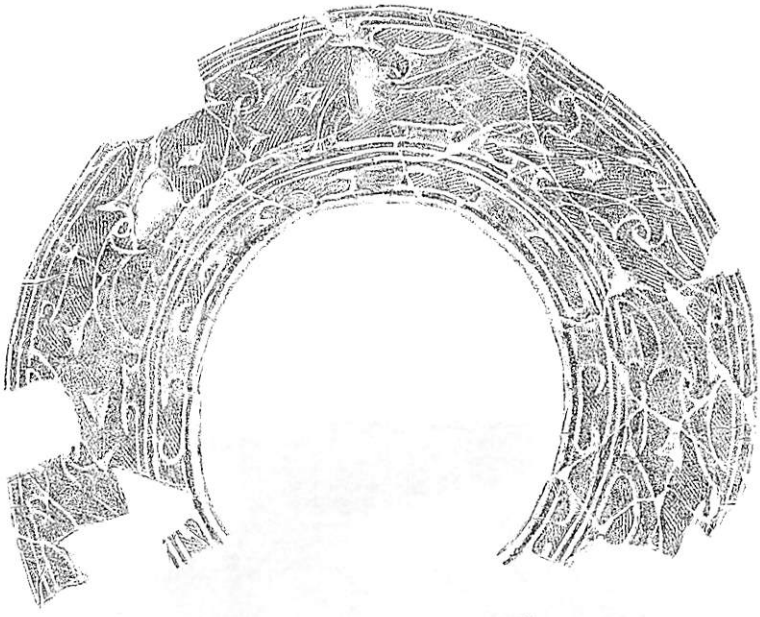
1

2

土器　壺ＩＡ類

土器実測図　壺ＩＡ類

土器　壺ＩＡ類

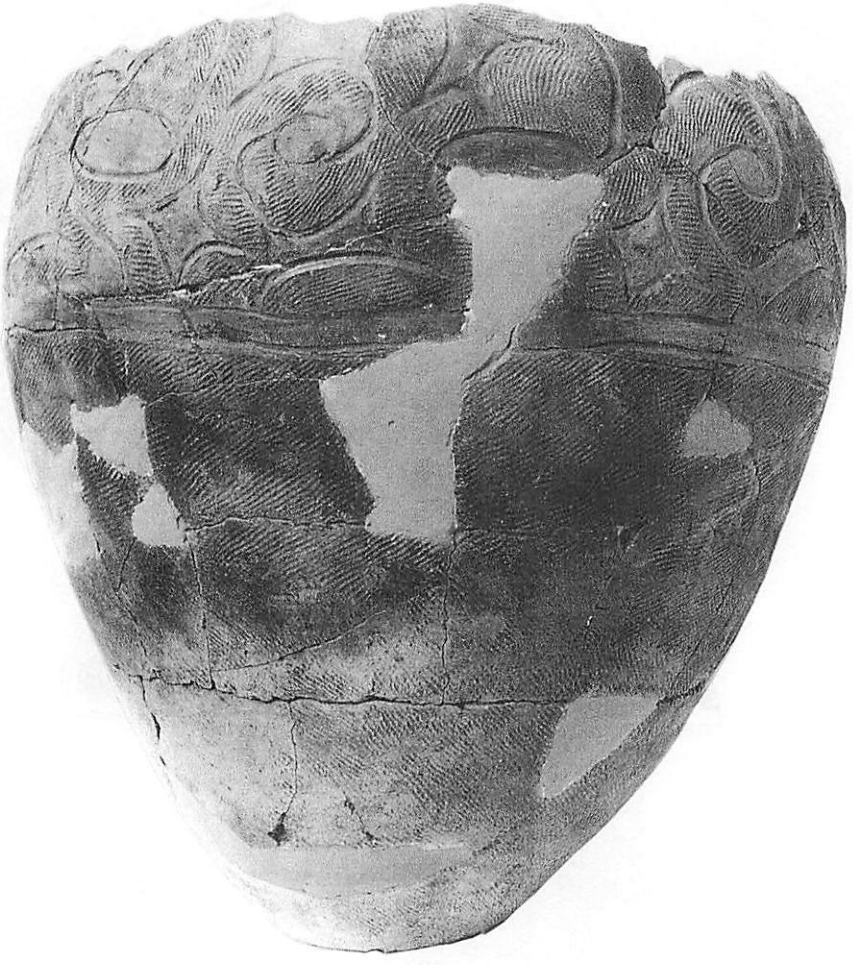


0　10cm

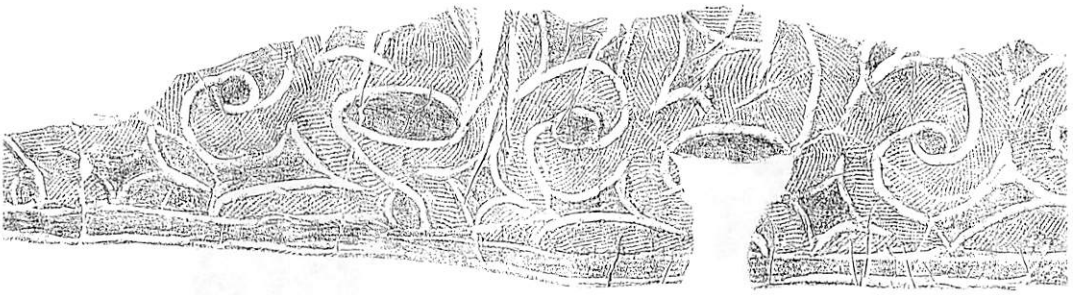
土器実測図　壺ＩＡ類

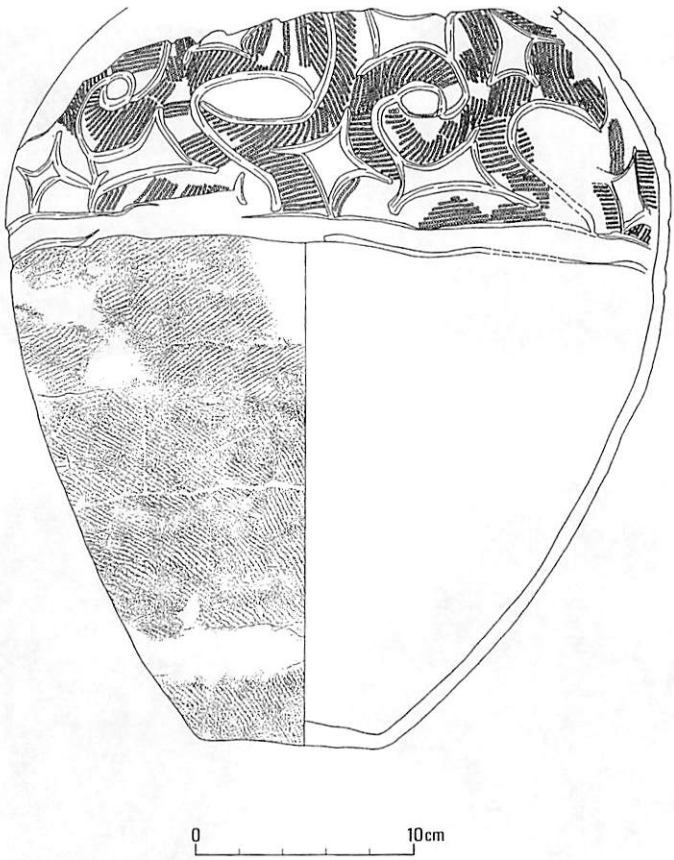
土器　壺ＩＡ類

土器実測図　壺ＩＡ類



土器　壺ＩＡ類





土器実測図　壺ＩＡ類

1

2

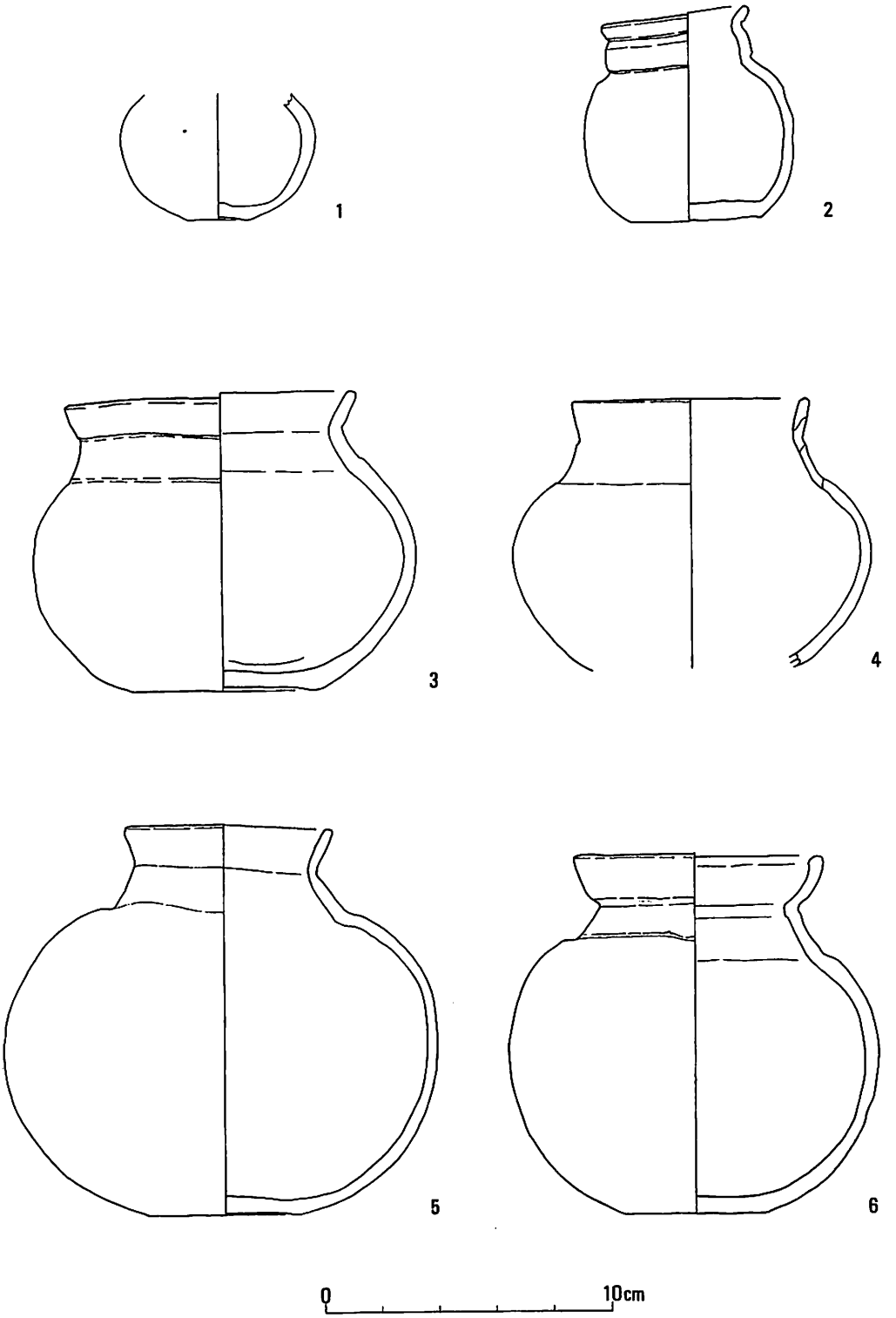
3

4

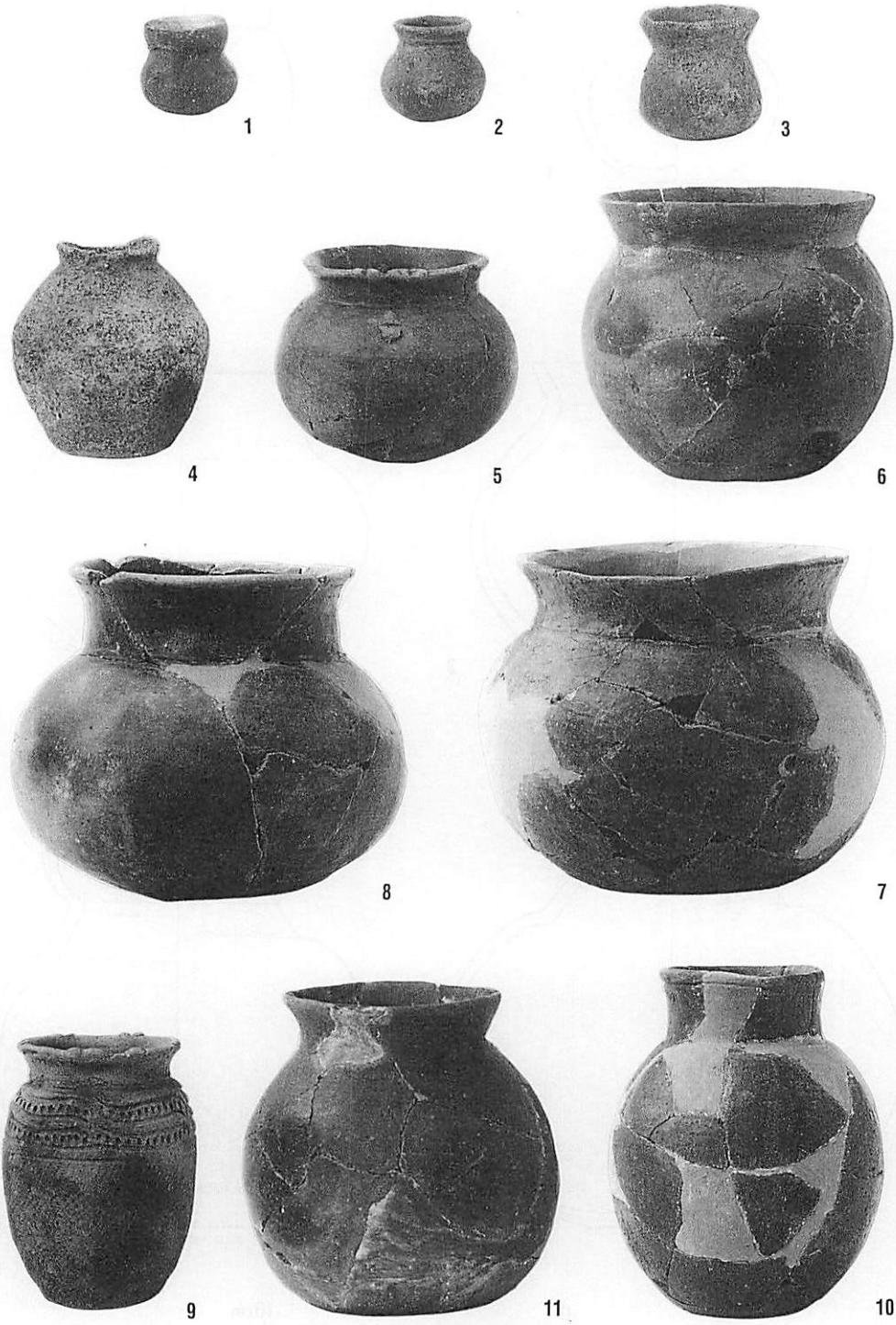
5

6

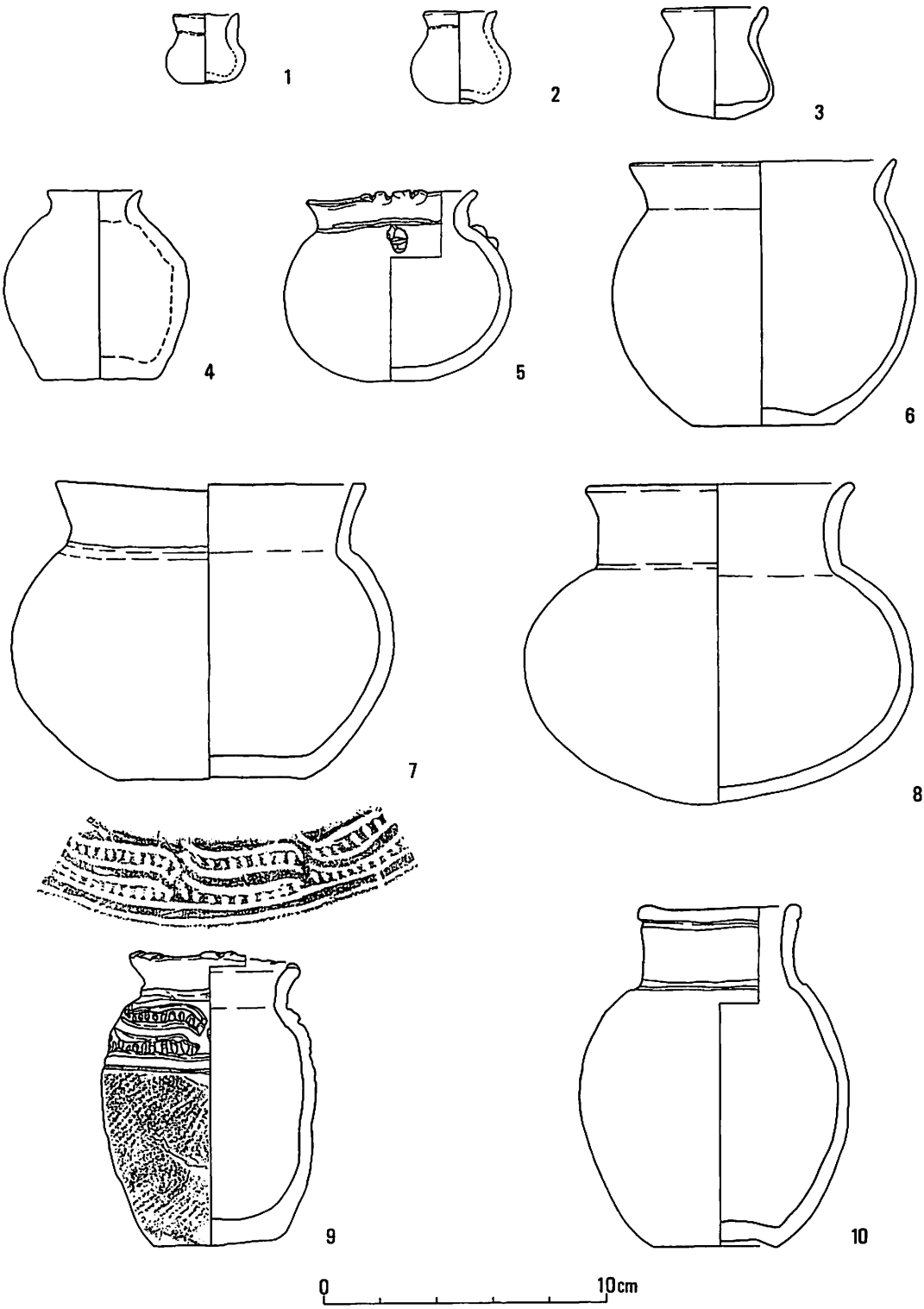
土器　壺ＩＡ類



土器実測図　壺ＩＡ類



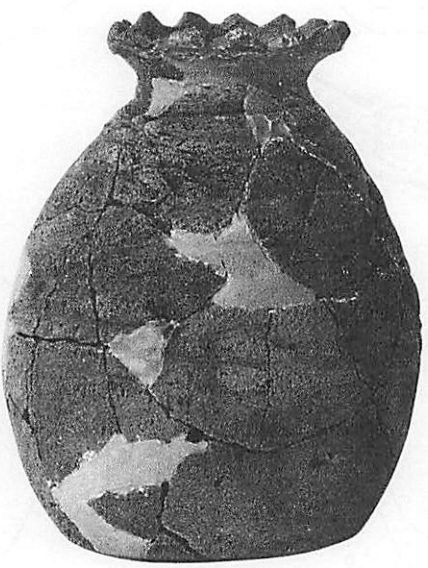
土器　壺ⅠB類，ⅡA・B類



土器実測図　壺ⅠB類，ⅡA・B類

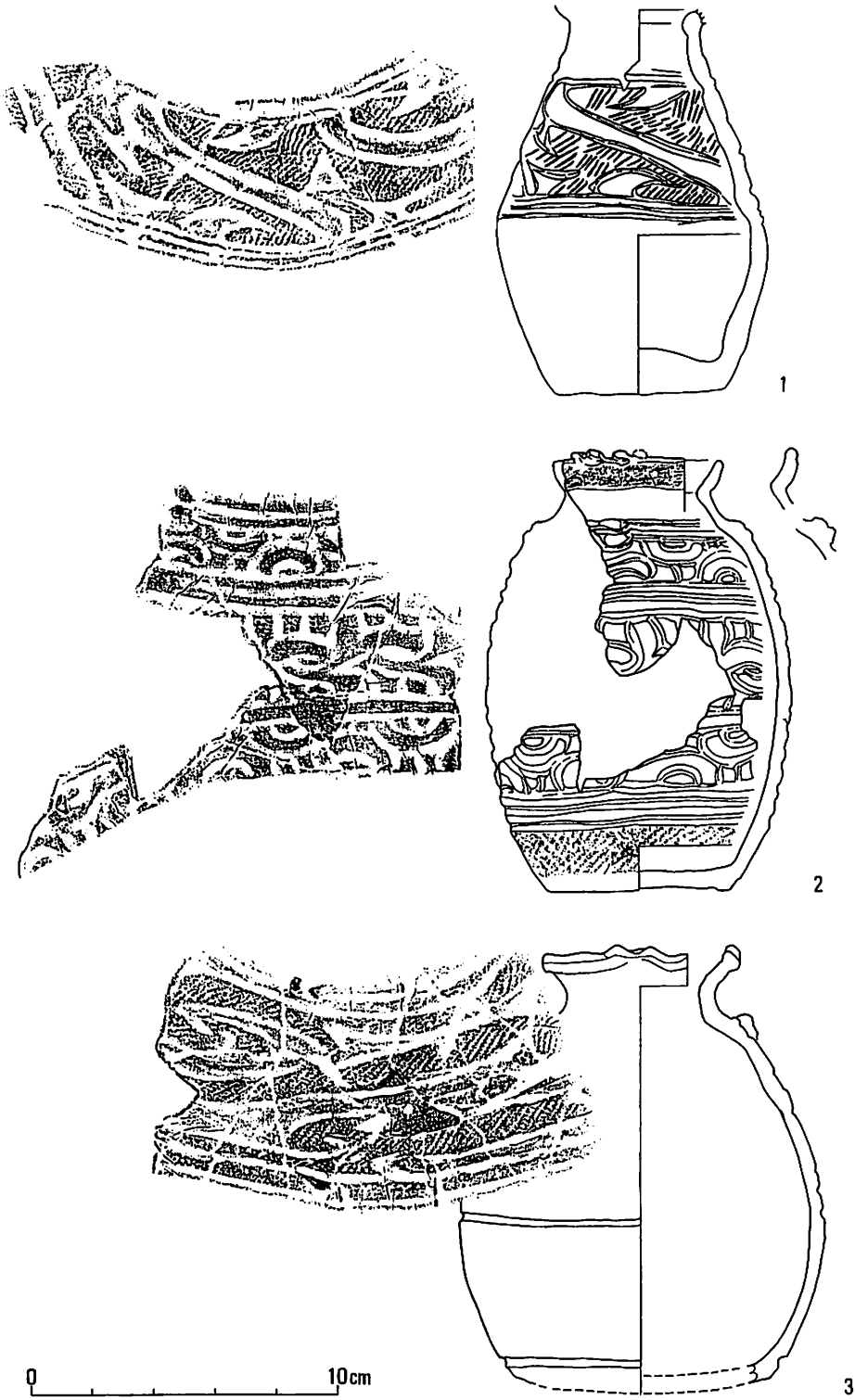
1

2



3

土器　壺ⅡA類



土器実測図　壺ⅡA類

1

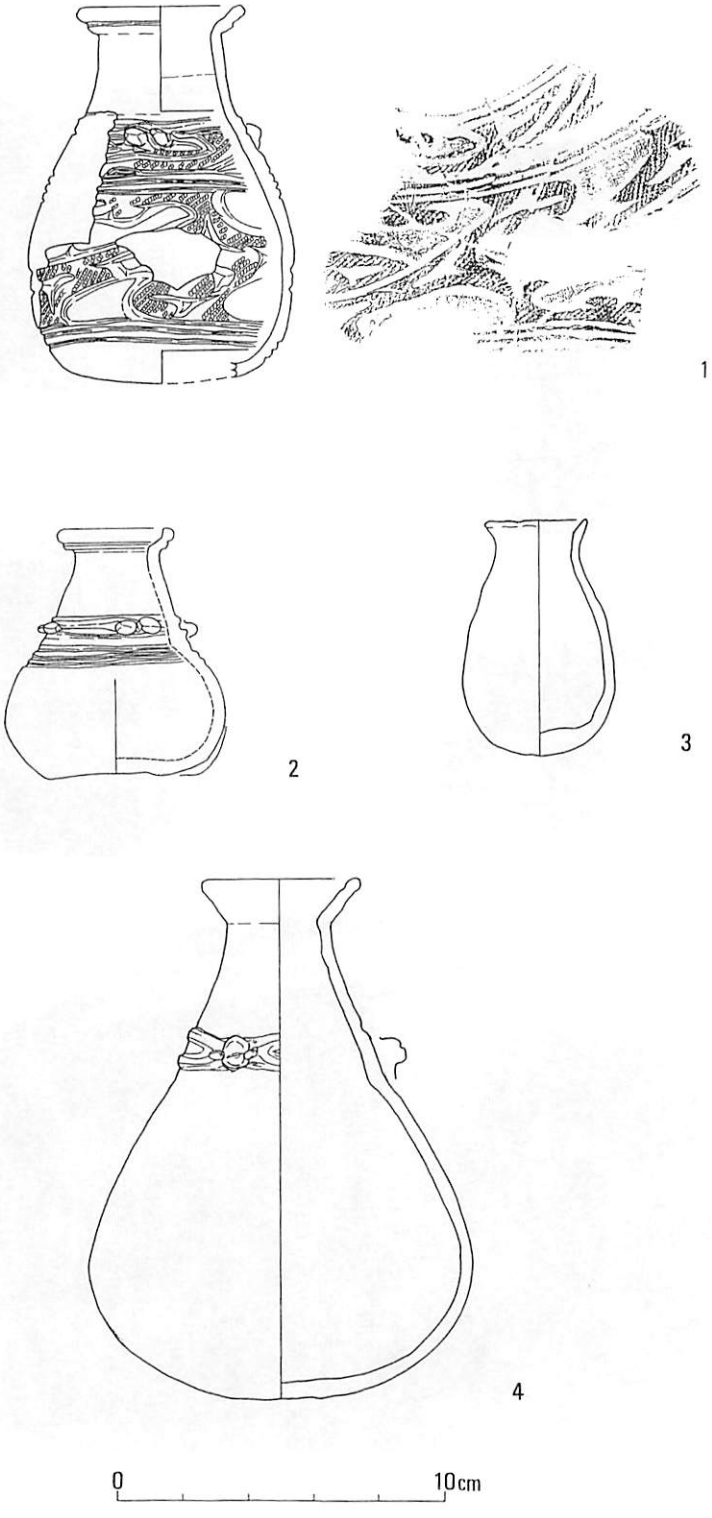
5

2

3

4

土器　壺ⅡA・B類，ⅢB類



土器実測図　壺ⅡA・B類，ⅢB類

1

4

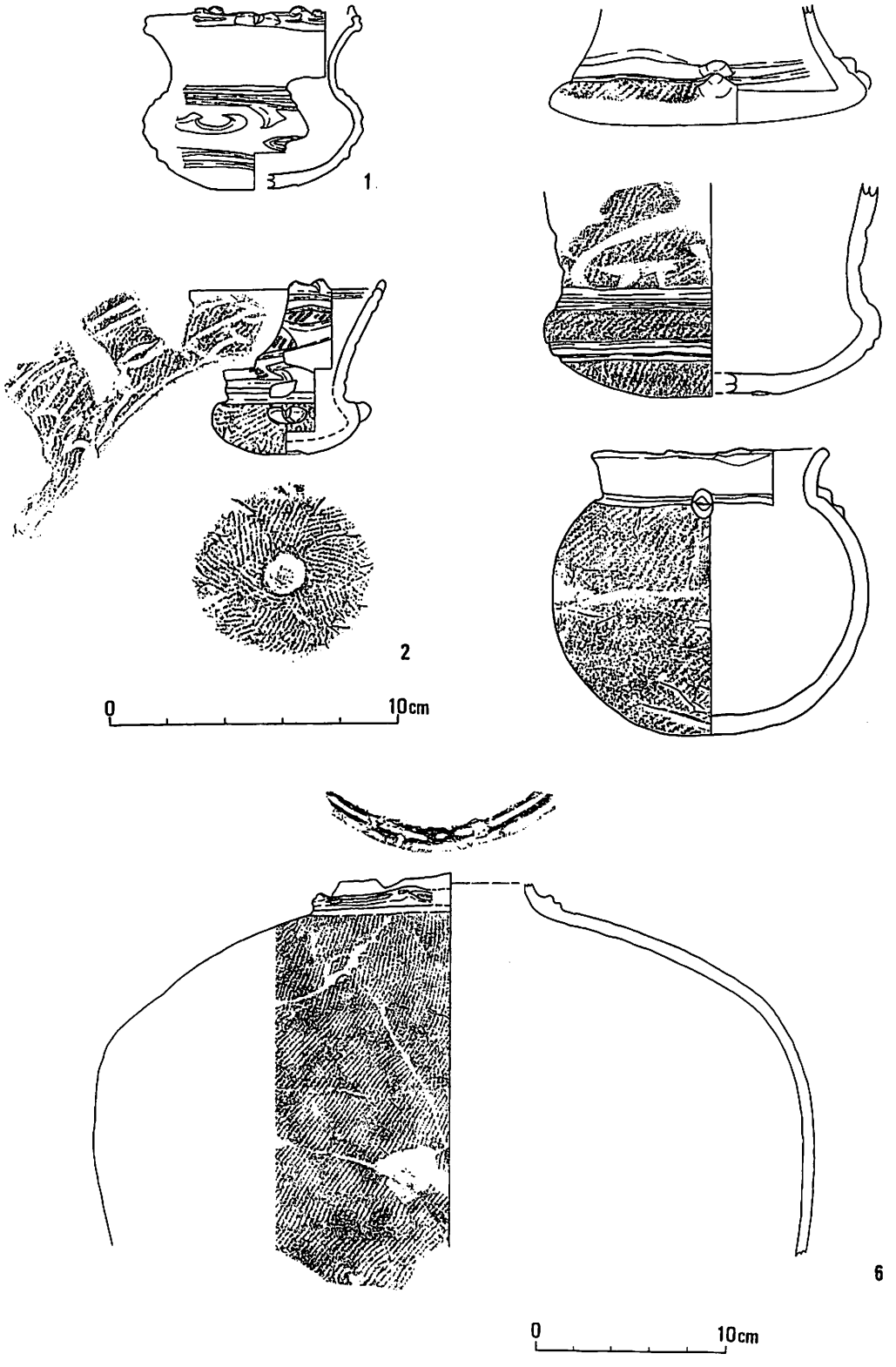
2

5

3

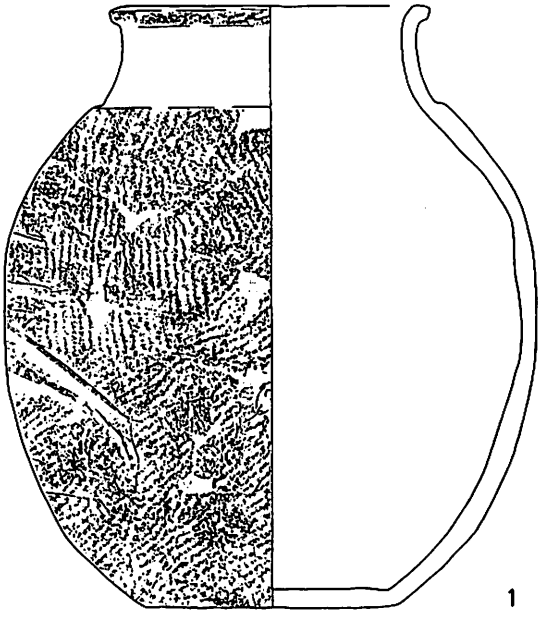
6

土器　壺Ⅳ・Ⅴ類



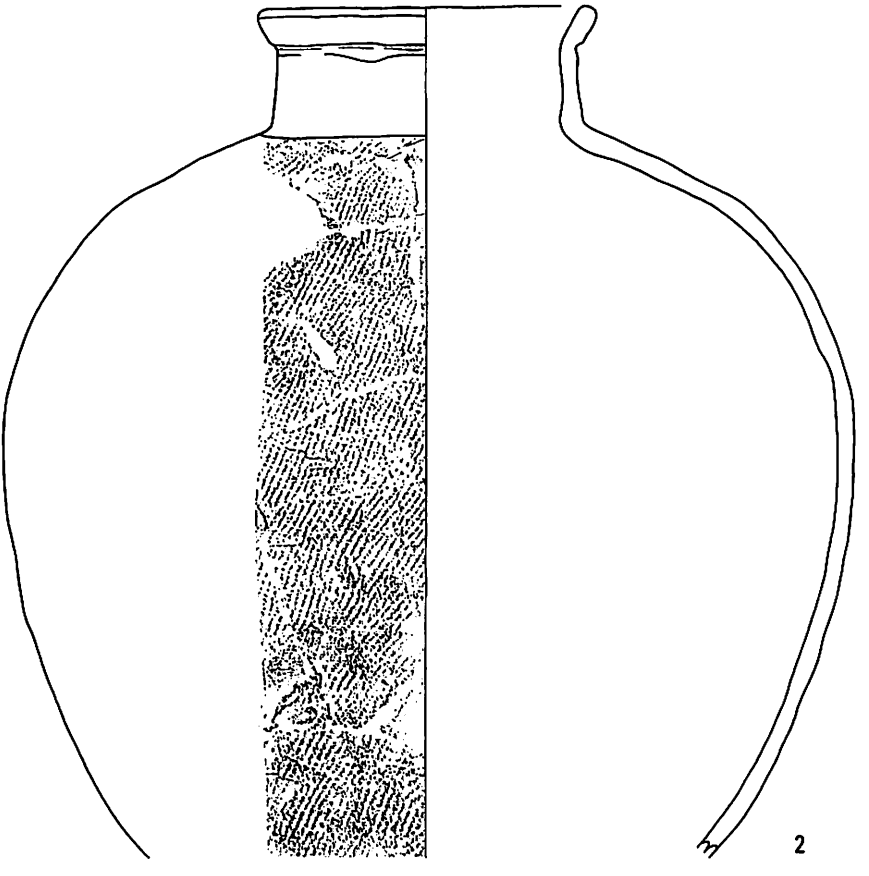
土器実測図　壺Ⅳ・Ⅴ類

土器　壺ⅥA類



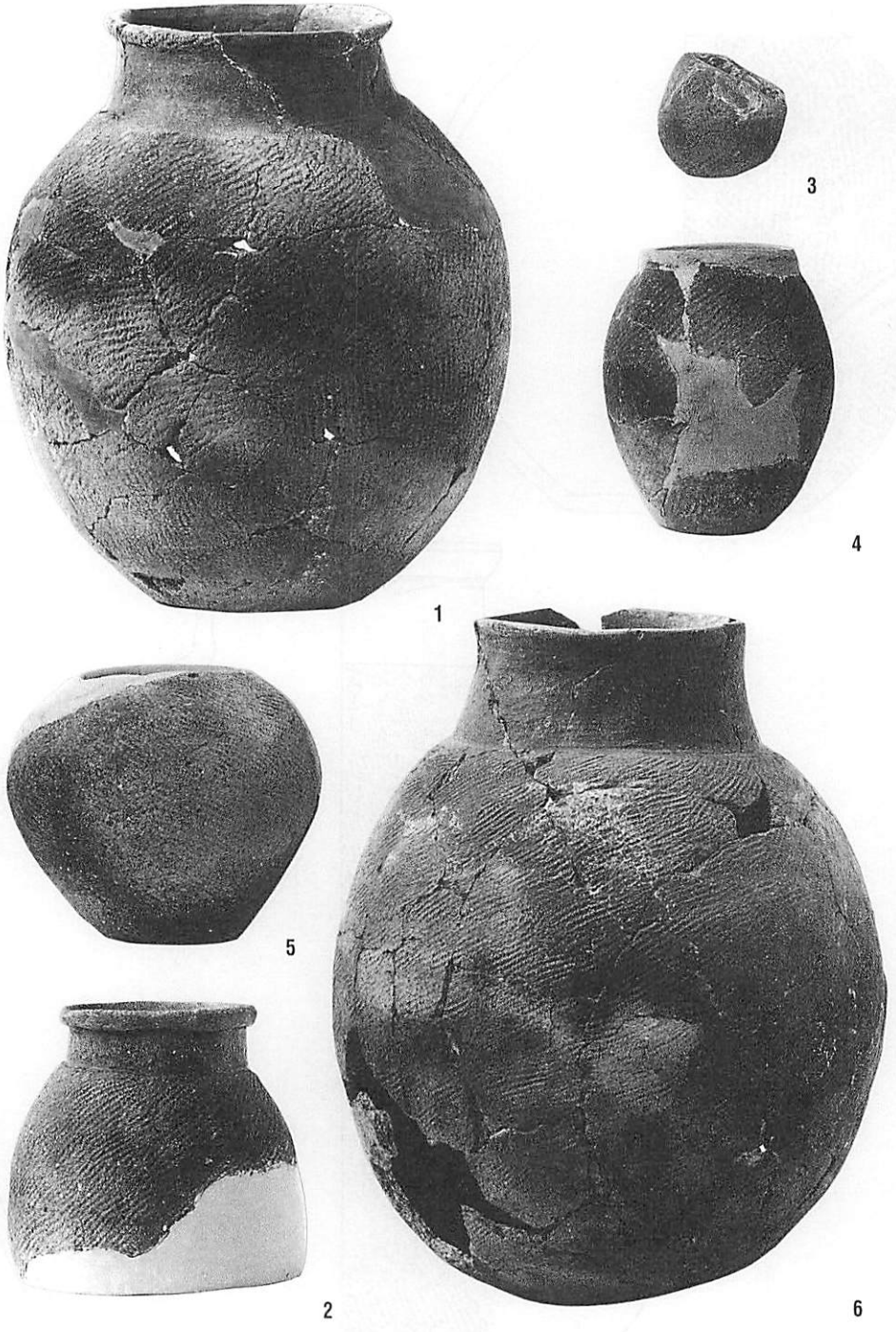
1

0 10cm

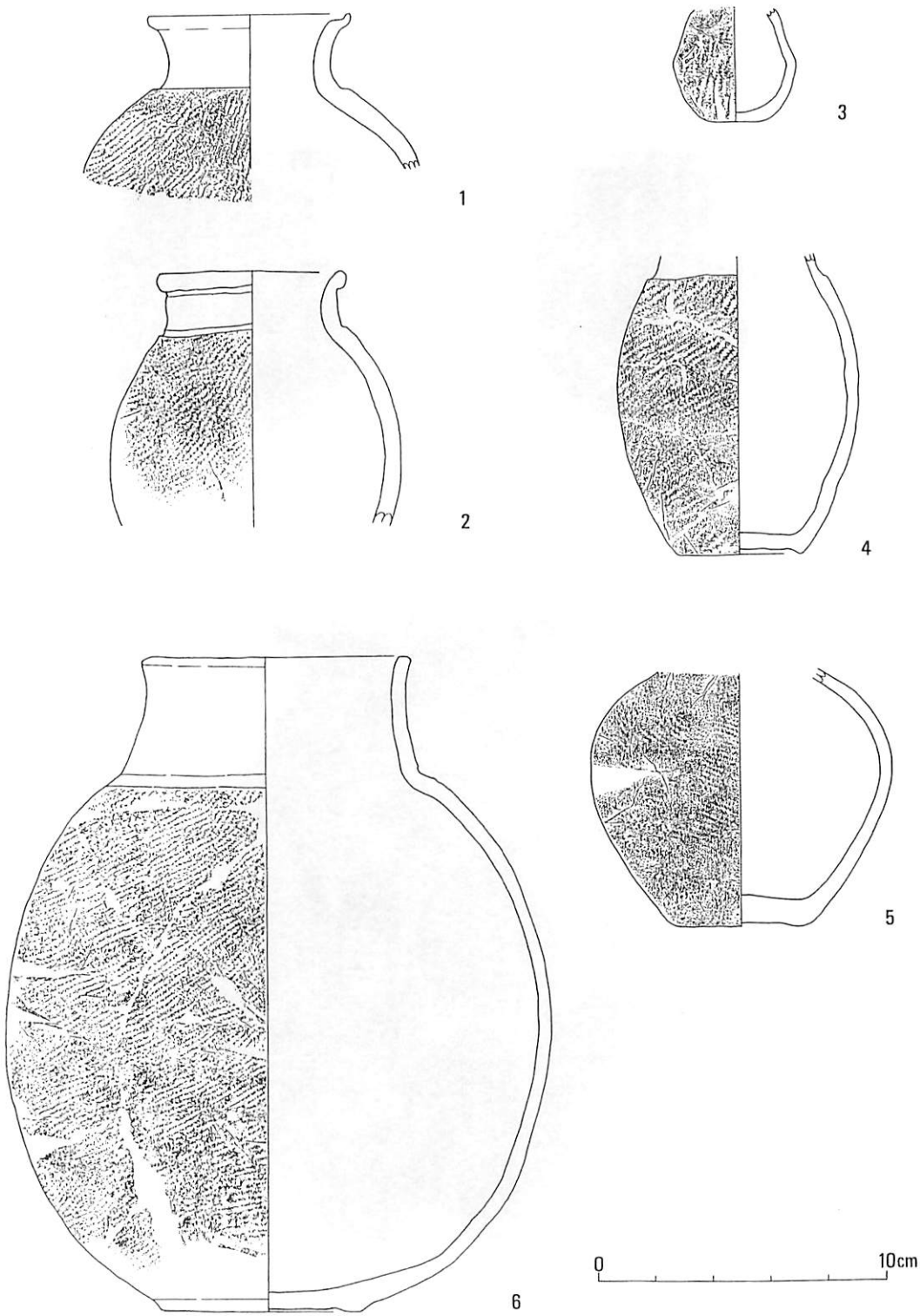


2

土器実測図　壺ⅥA類



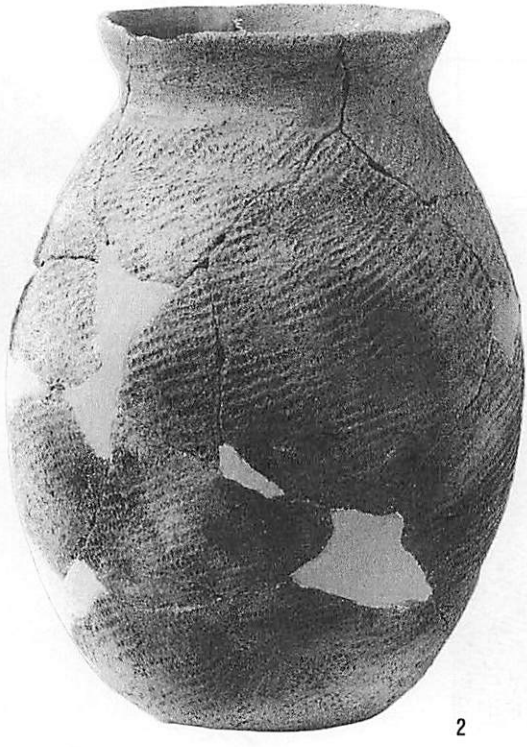
土器　壺ⅥA・B類



土器実測図　壺ⅥA・B類

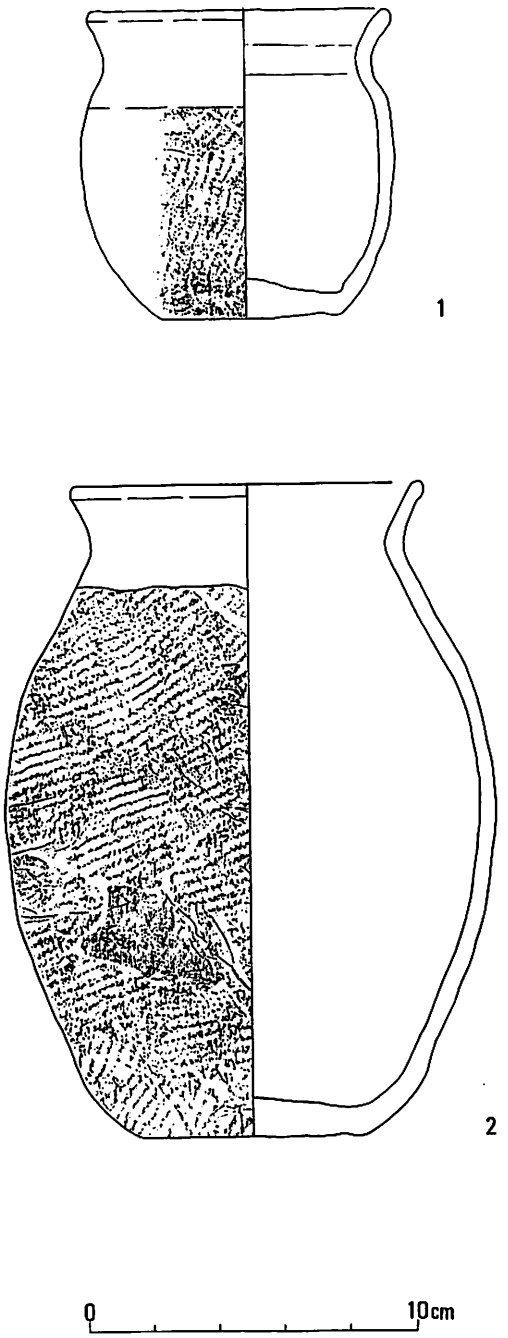
3

1



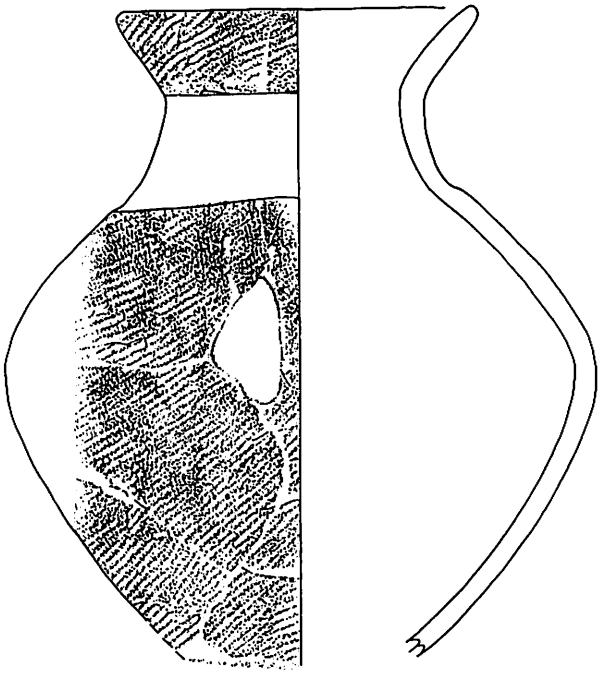
2

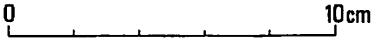
土器　壺ⅥB類



土器実測図　壺ⅥB類

土器　壺Ⅶ類





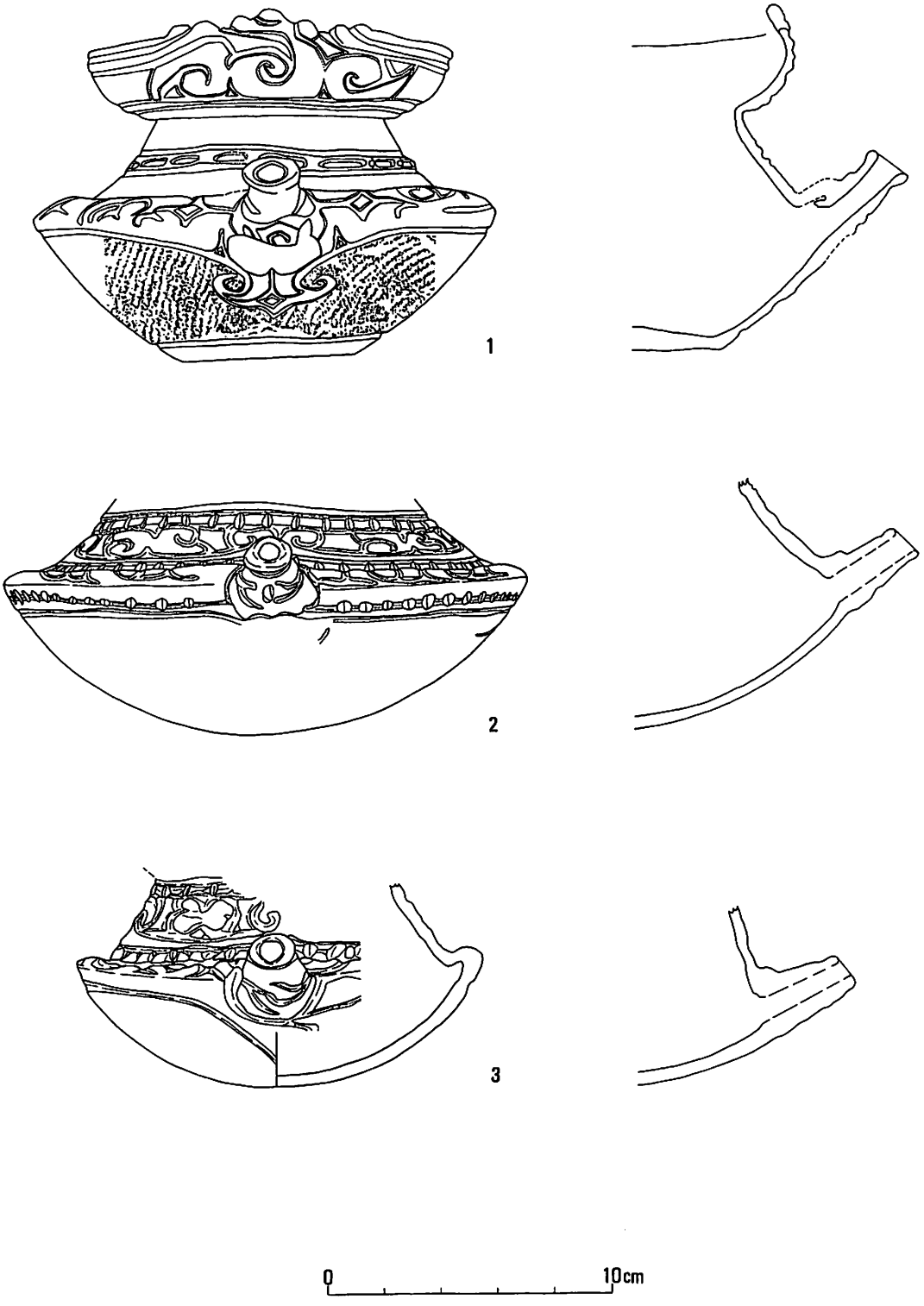
土器実測図　壺Ⅶ類

1

2

3

土器　注口土器　Ⅰ－2類



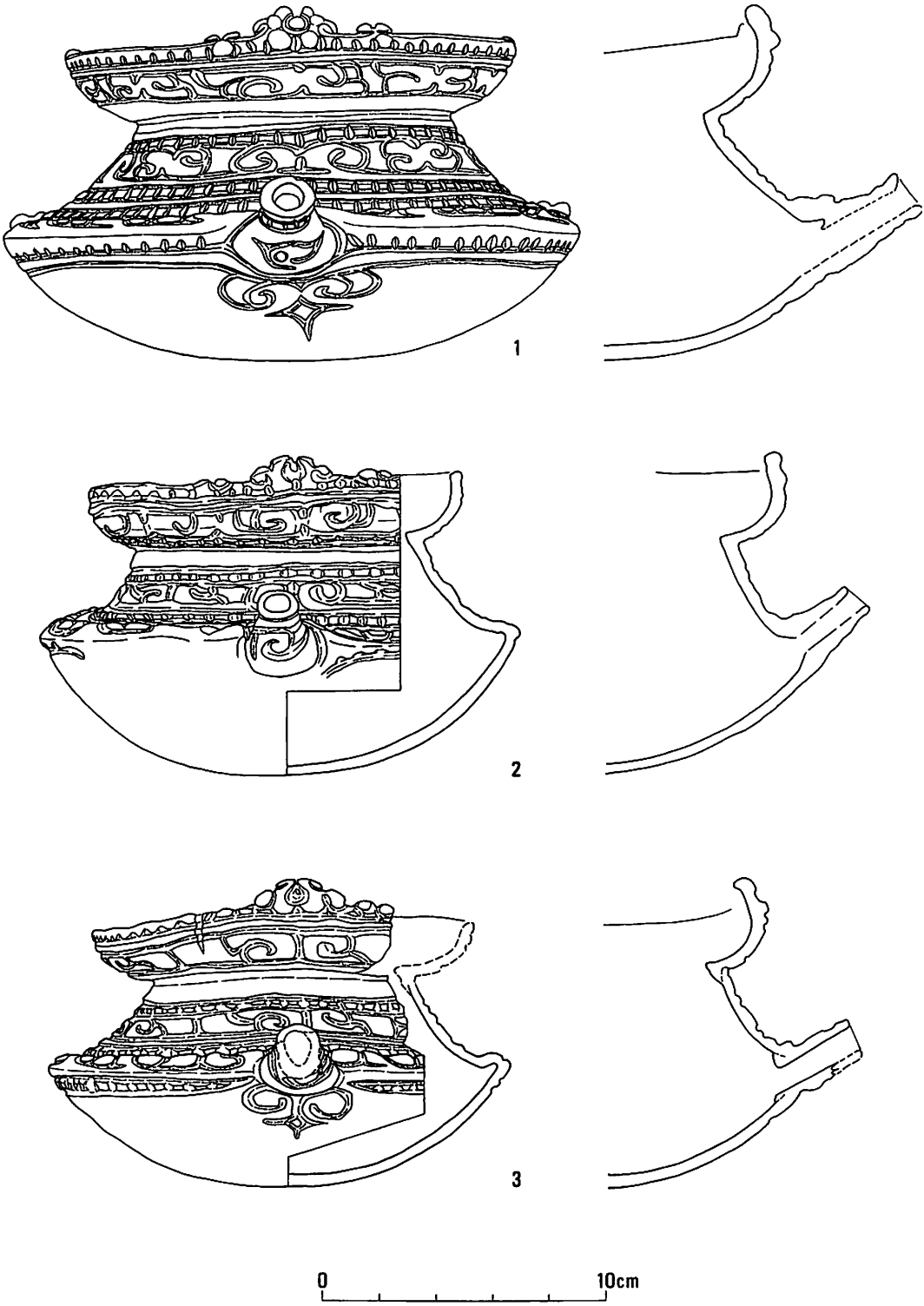
土器実測図　注口土器　1－2類

1

2

3

土器　注口土器　Ⅰ－2類



土器実測図　注口土器　Ⅰ－2類

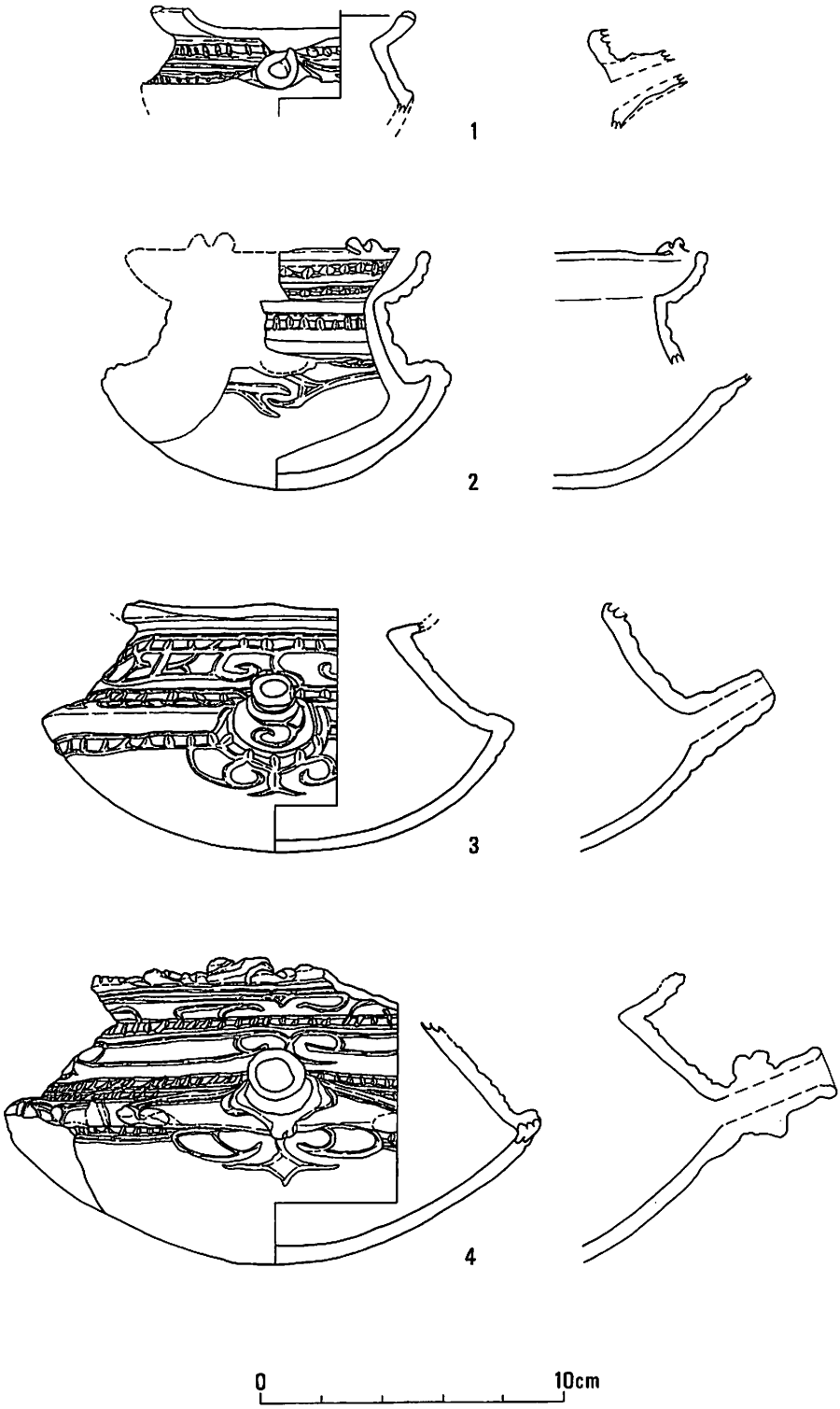
1

2

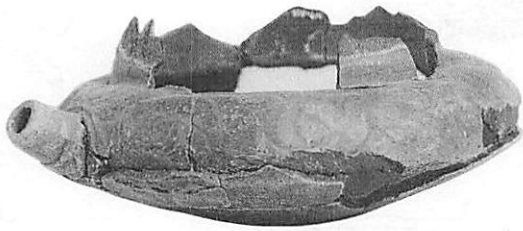
3

4

土器　注口土器　Ⅰ－2類



土器実測図　注口土器　Ⅰ－2類



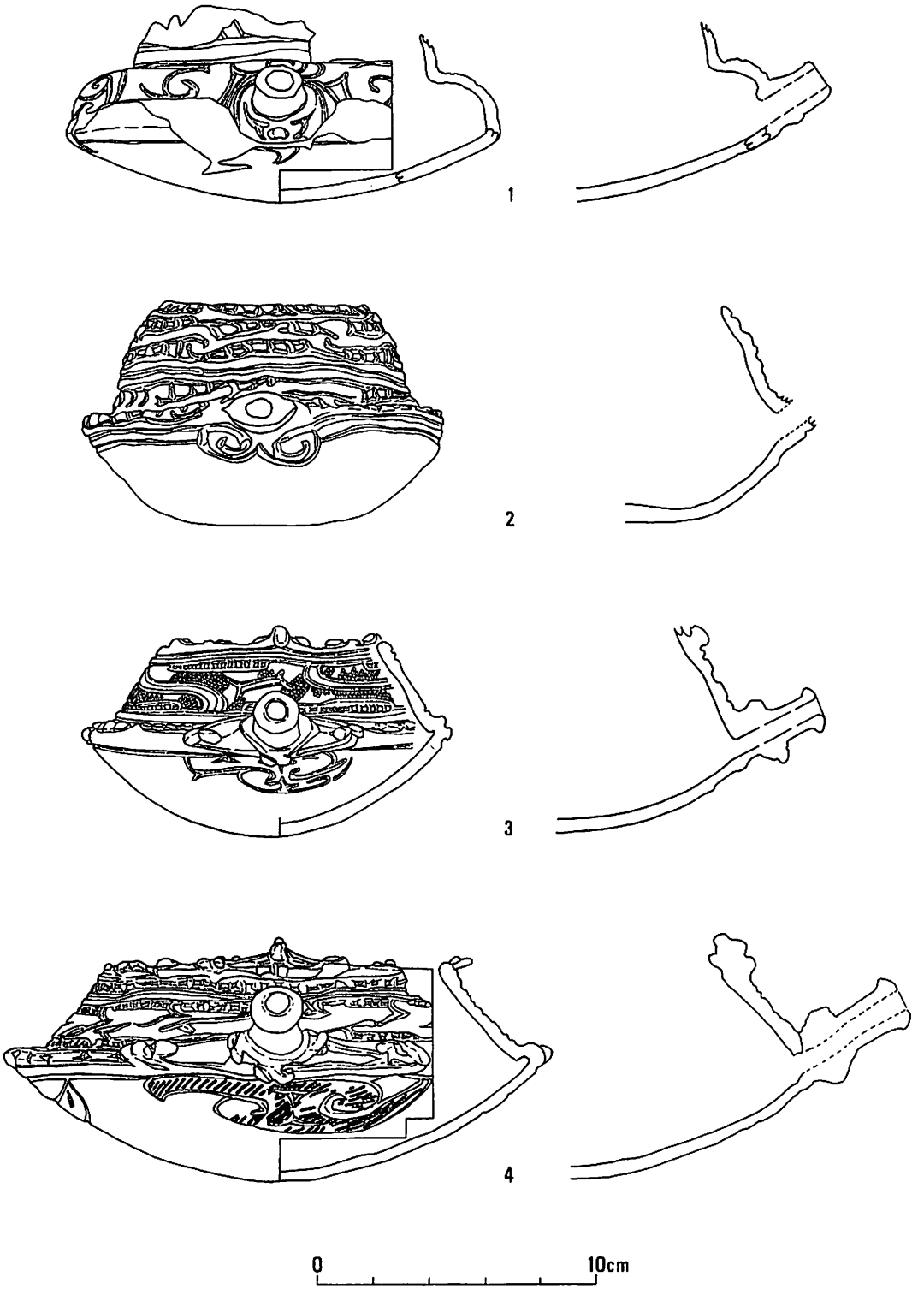
1

2

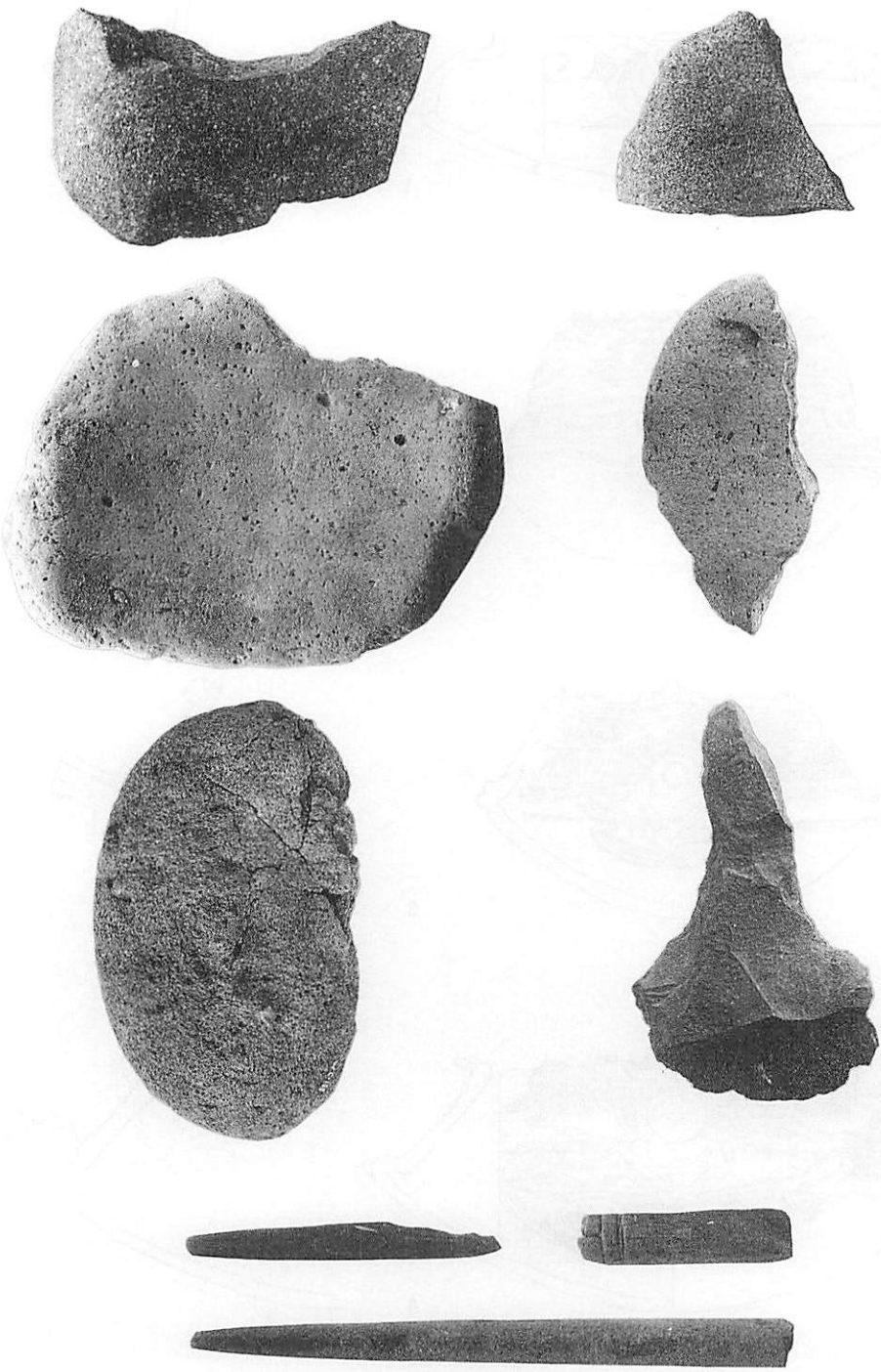
3

4

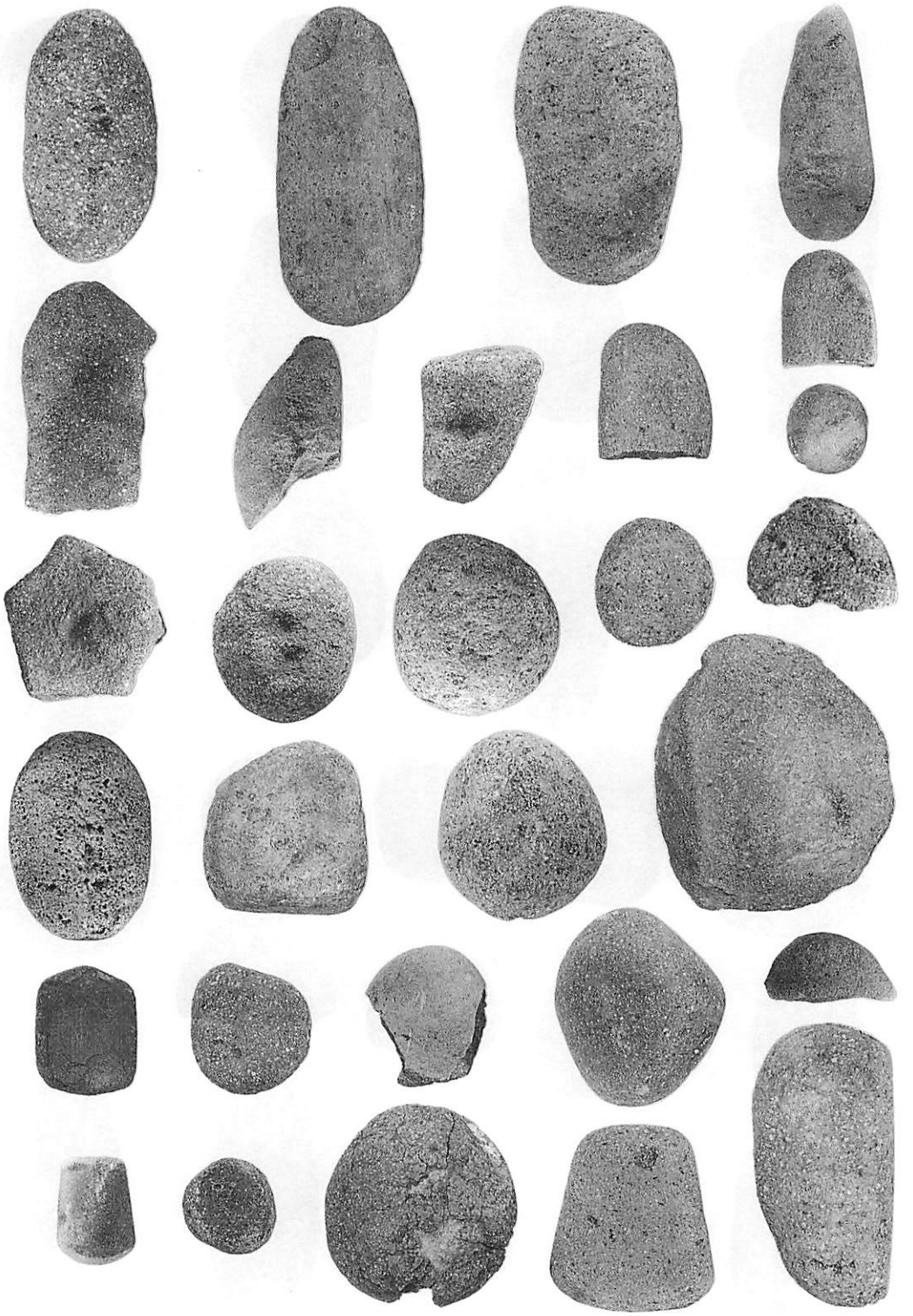
土器　注口土器　Ⅰ－3類，Ⅱ－2類



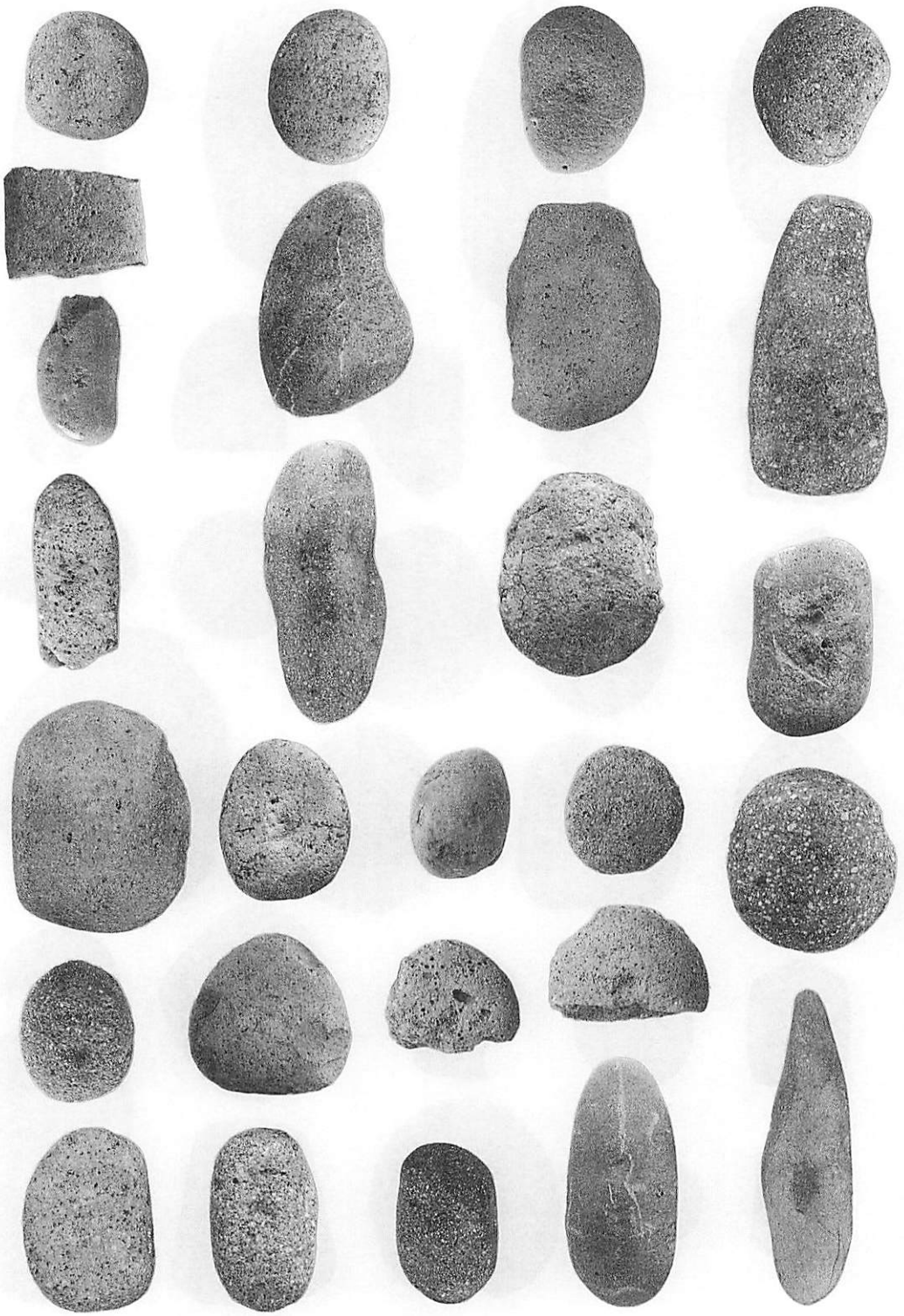
土器実測図　注口土器　Ⅰ－3類，Ⅱ－2類



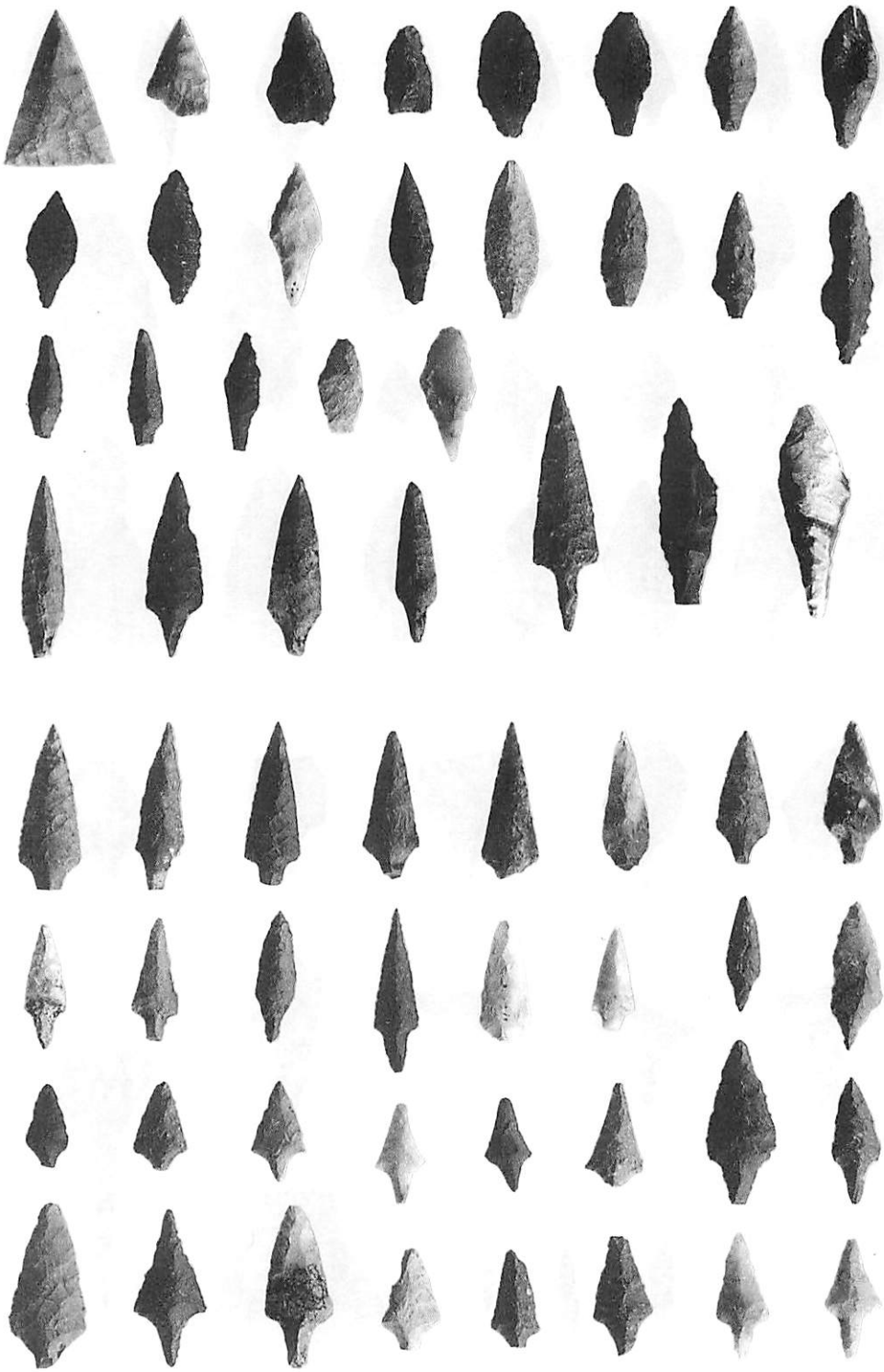
石皿・雨だれ石・打製石斧・石剣



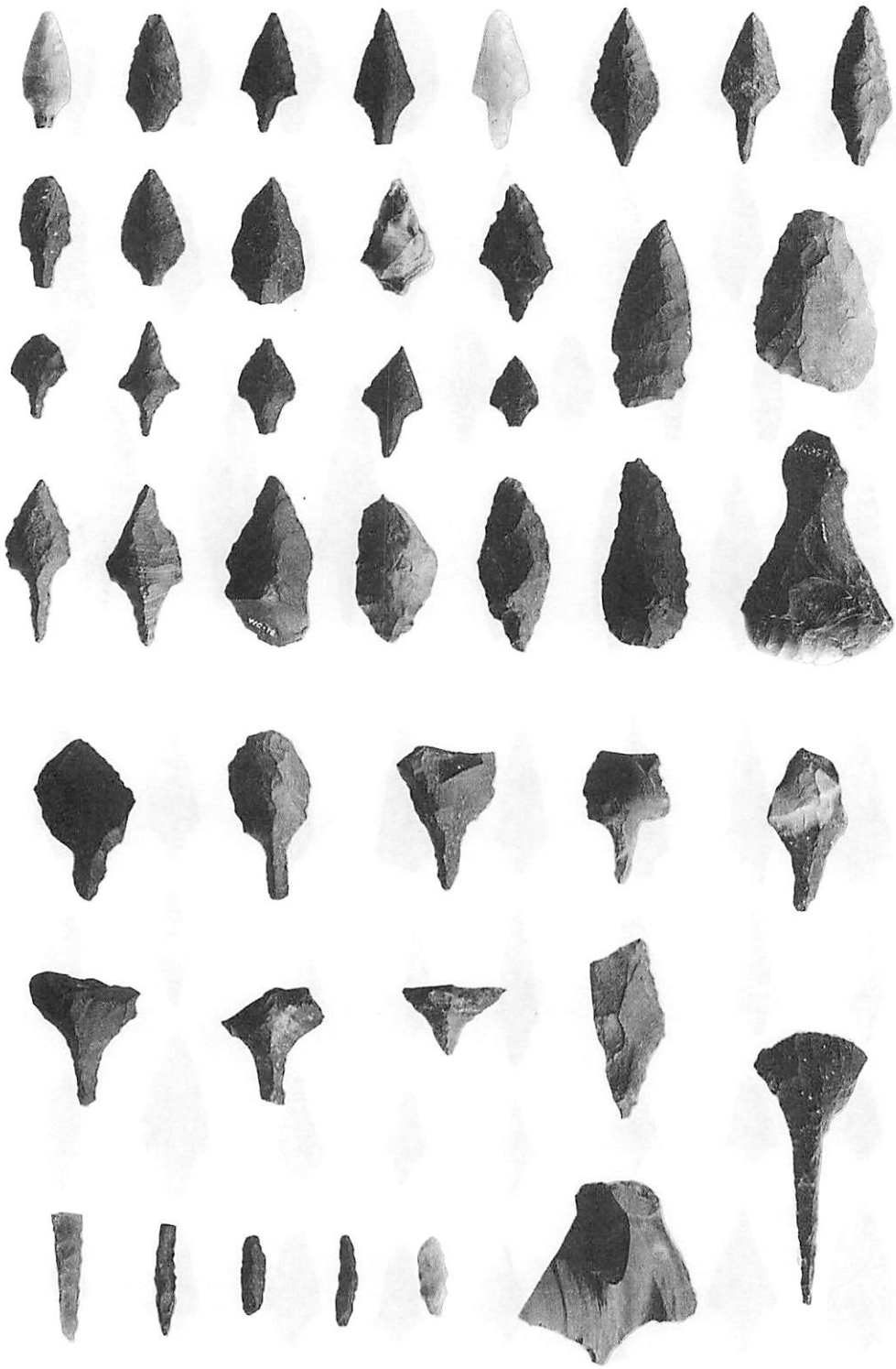
敲石



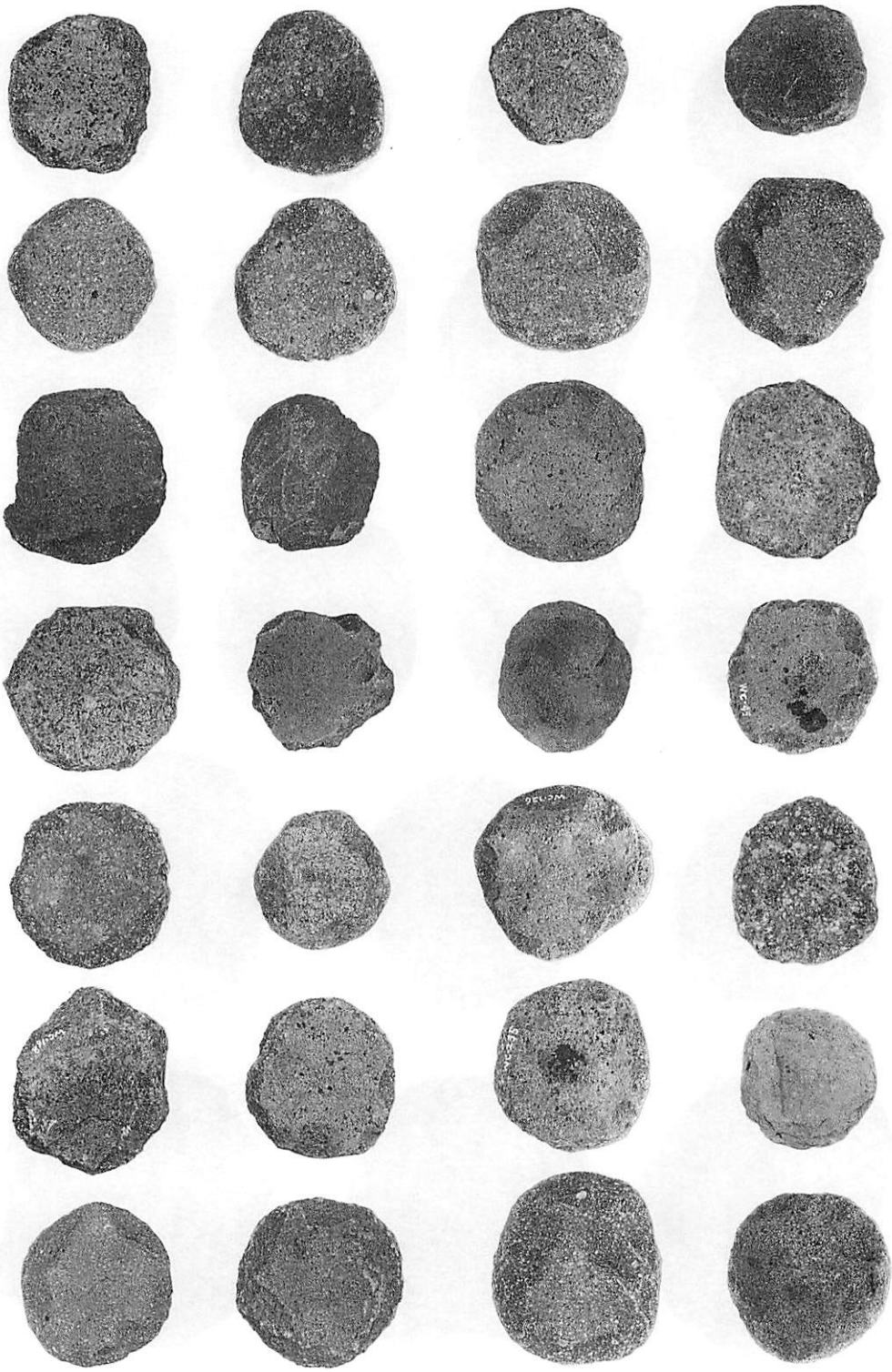
敲石・磨石



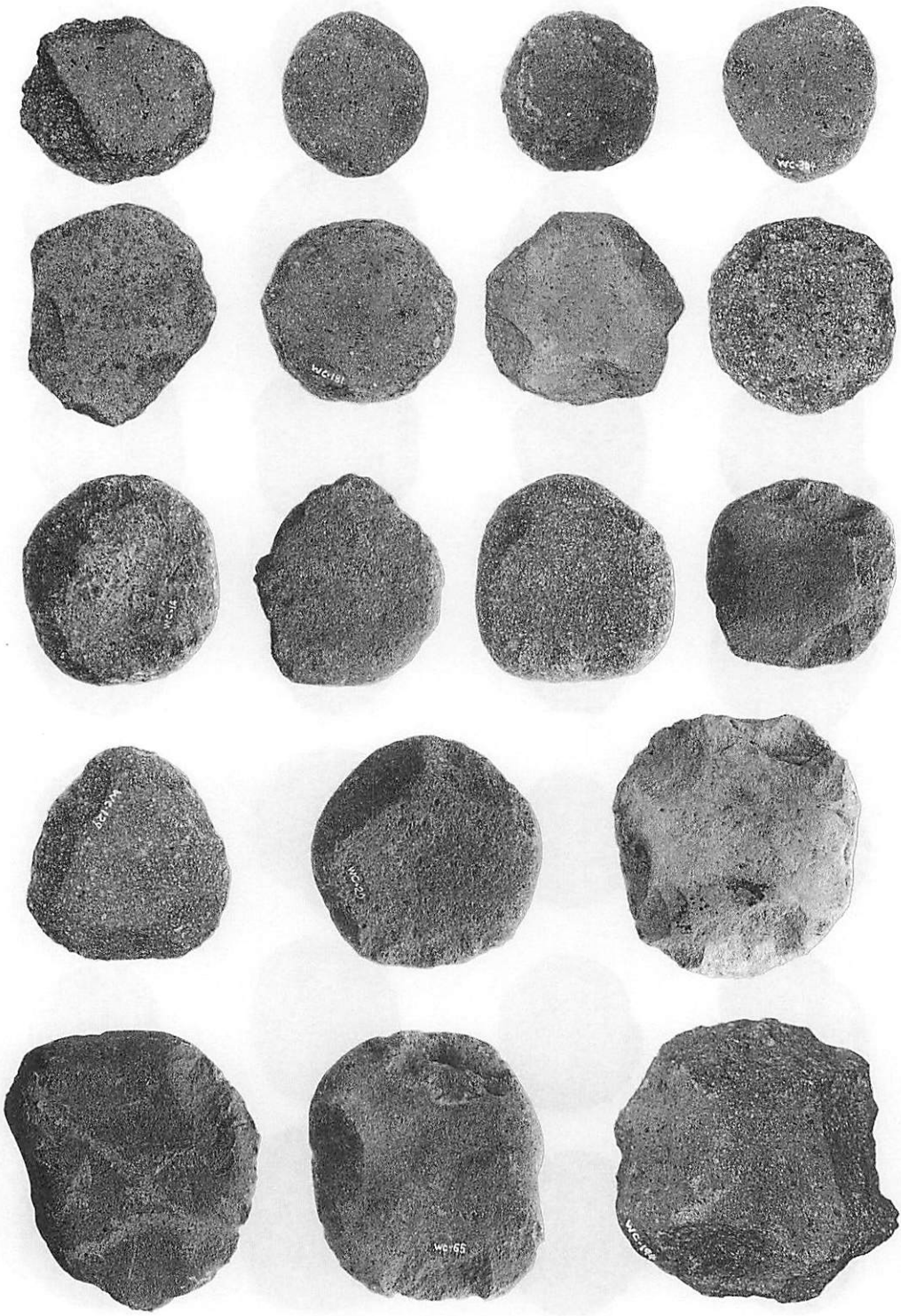
石鏃



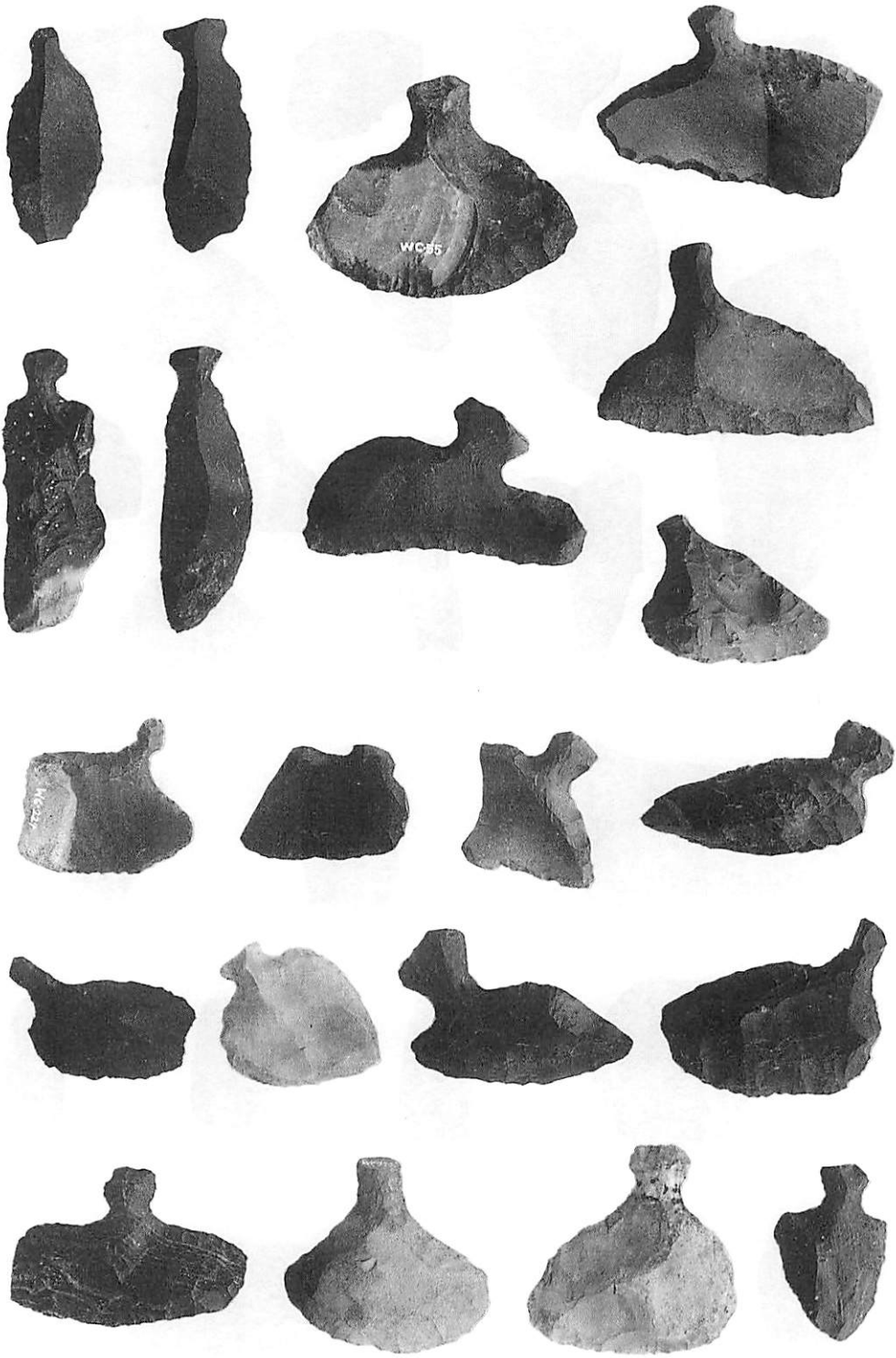
石鏃・石槍様石器・石錐



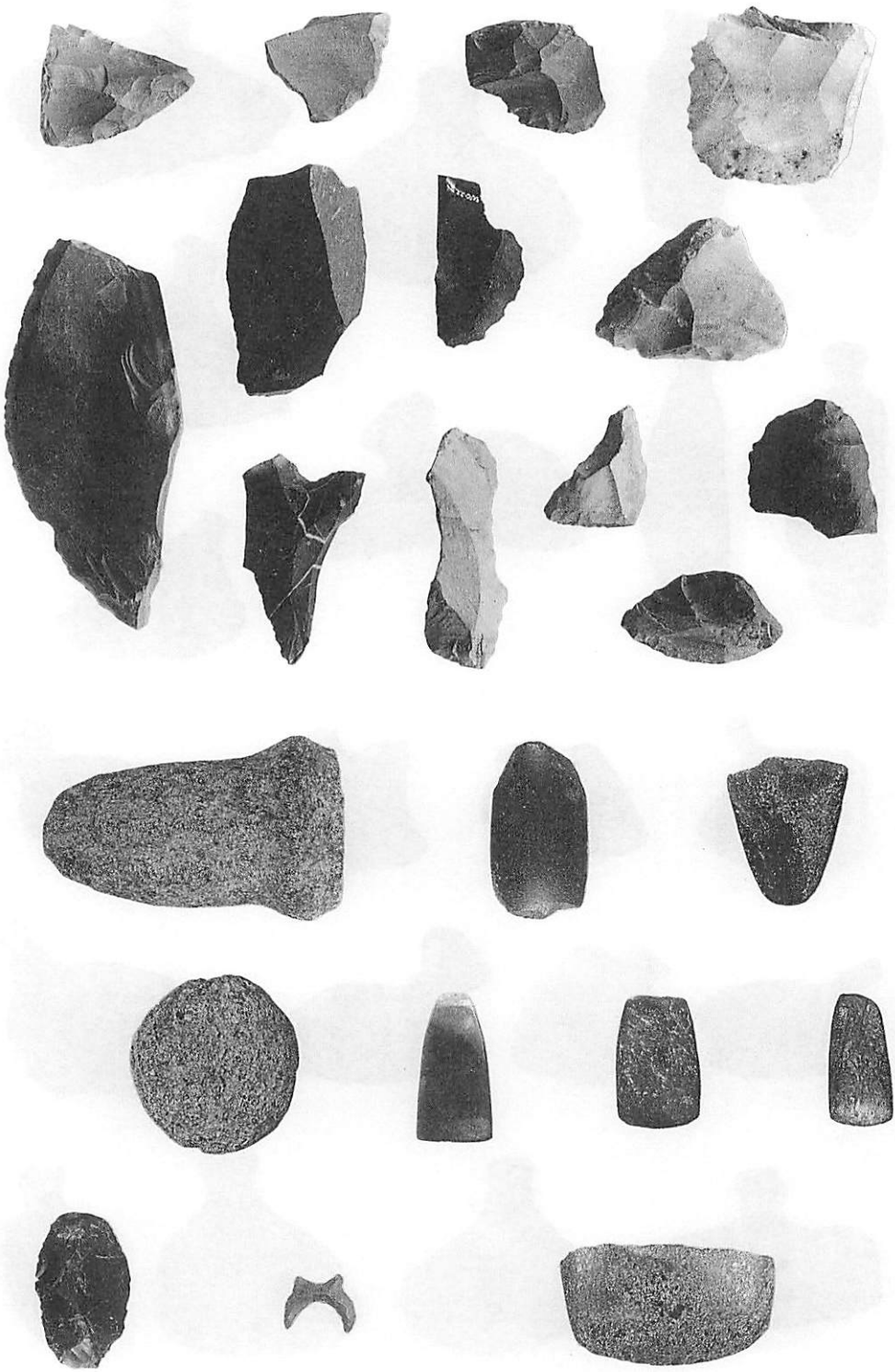
石製円盤・1



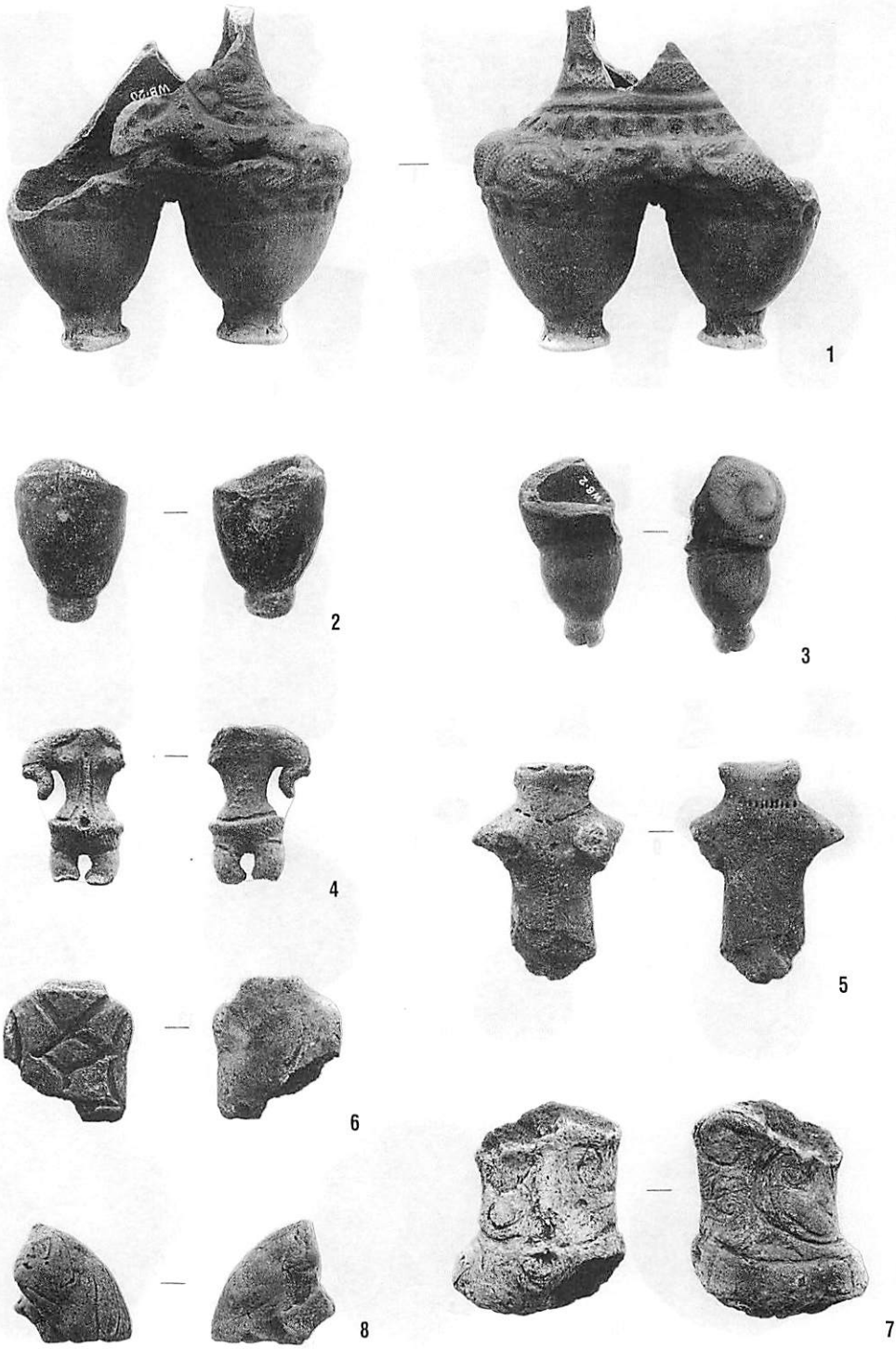
石製円盤・2



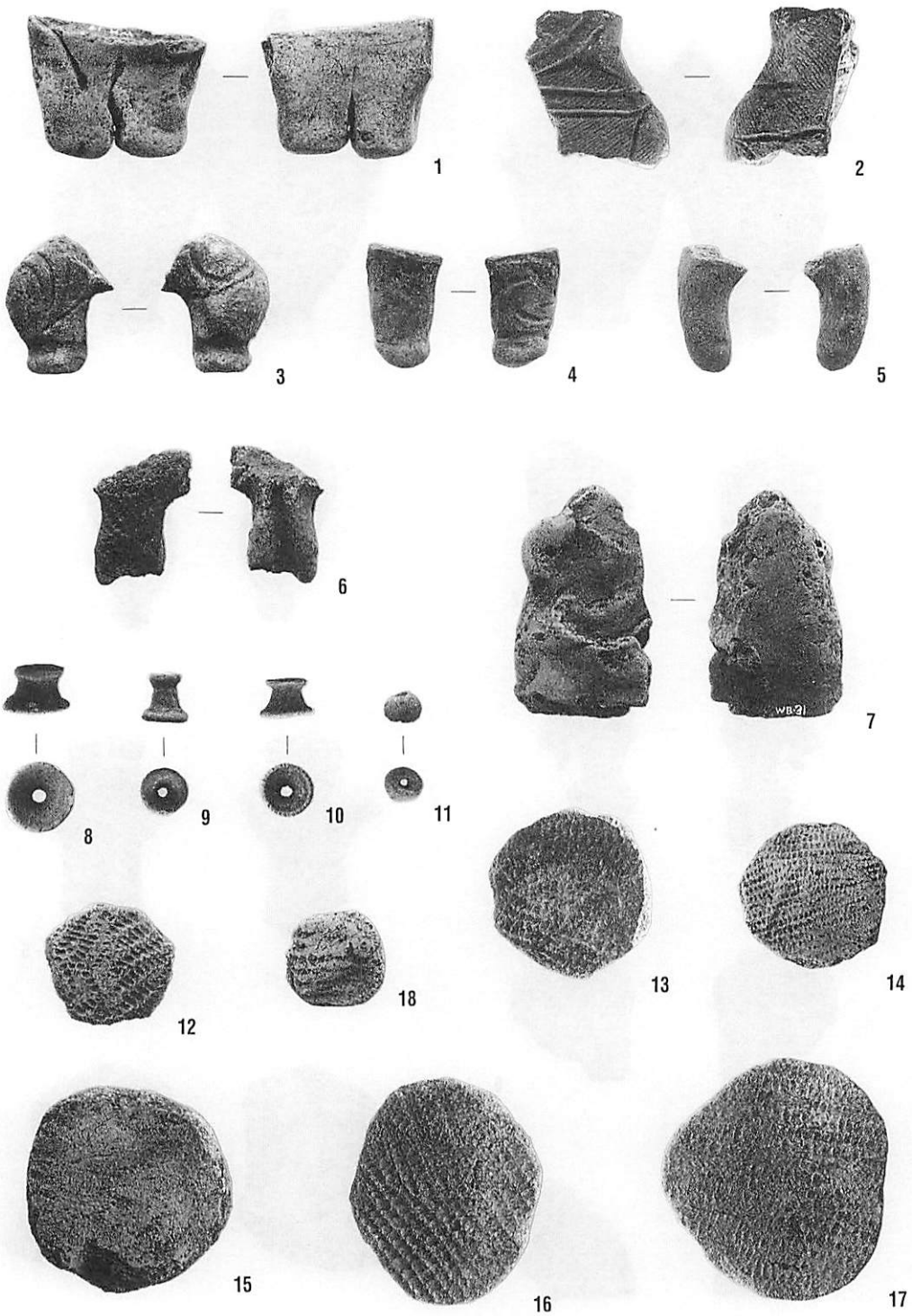
石匙



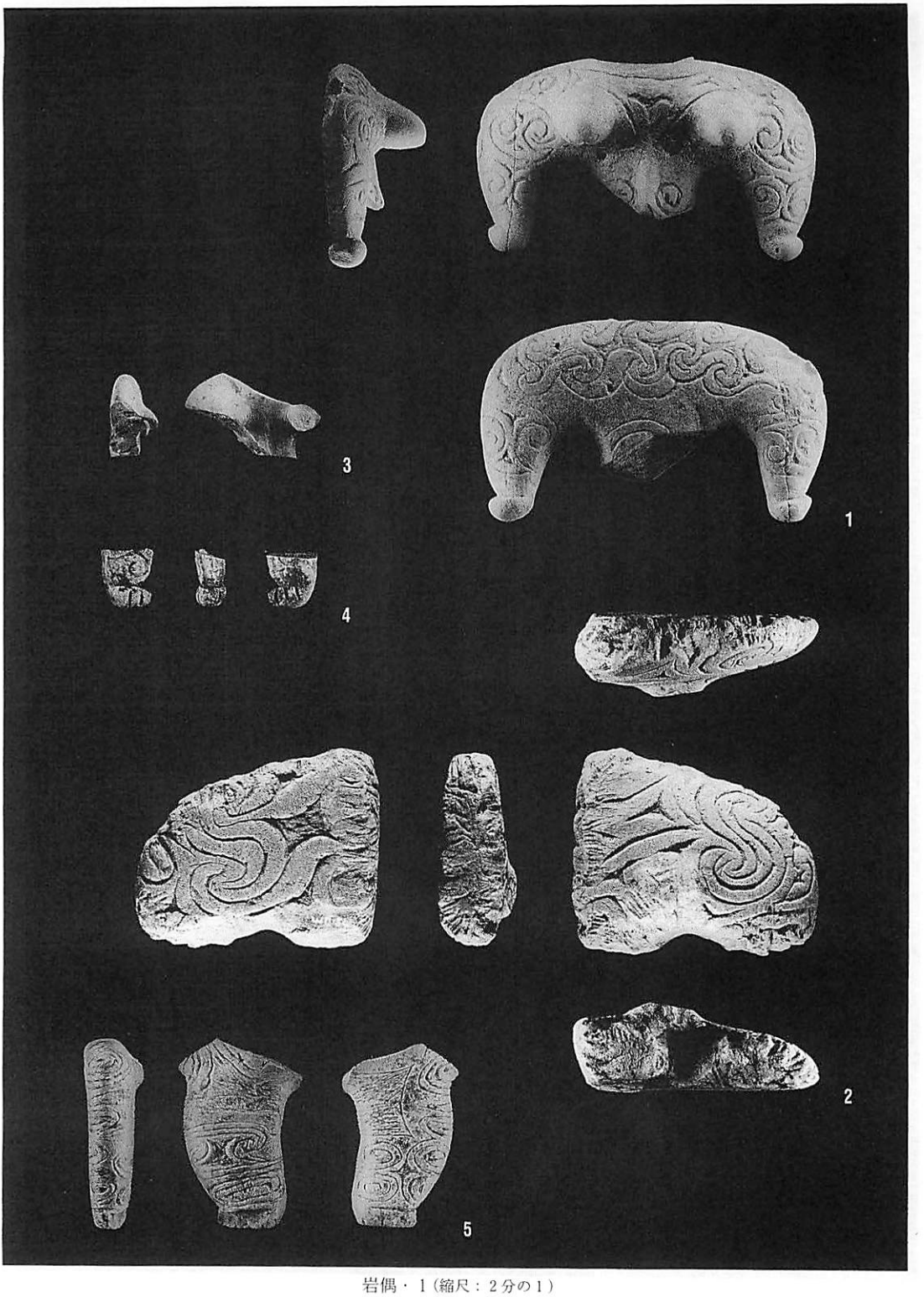
削器・磨製石斧・礫石錘・異形石器・独鈷石



土偶(縮尺：1～3は2分の1，4～7は3分の2)

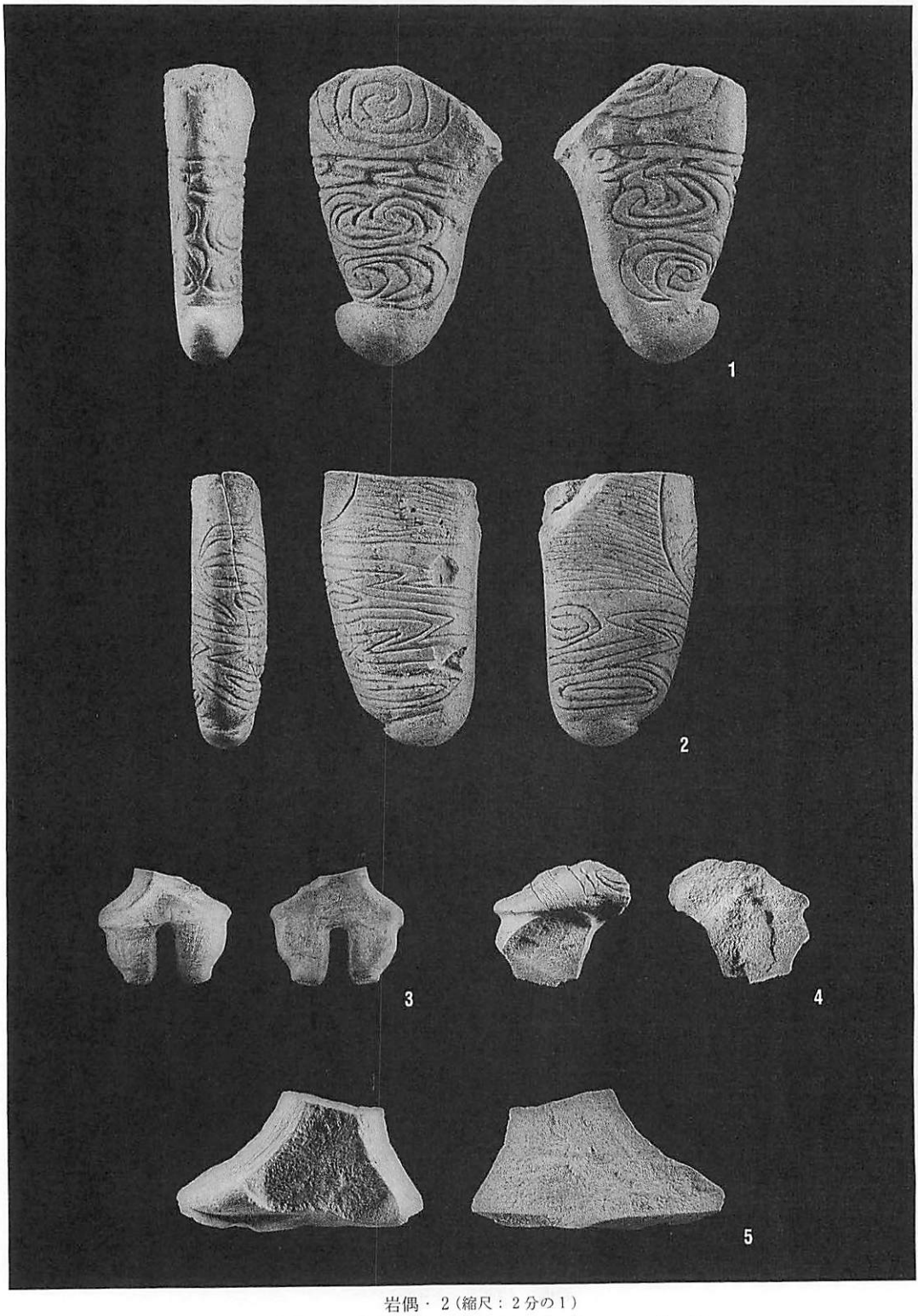


土偶・土製耳栓・土製円盤(縮尺：3分の2)
1～7：土偶，8～11：土製耳栓，12～17：土製円盤.



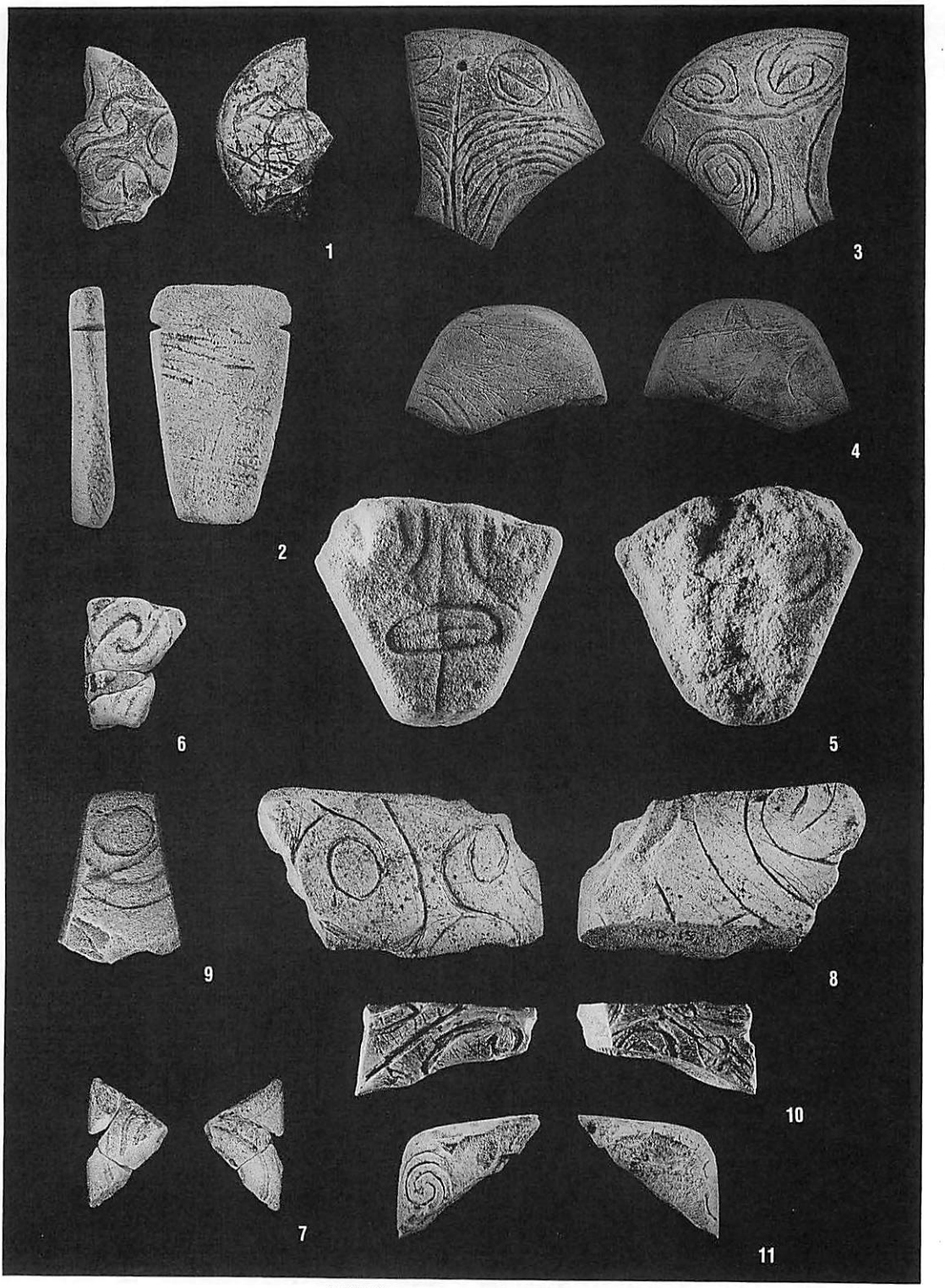
岩偶・1（縮尺：2分の1）

1：第3例，2：第4例，3：第7例，4：第11例，5：第12例.

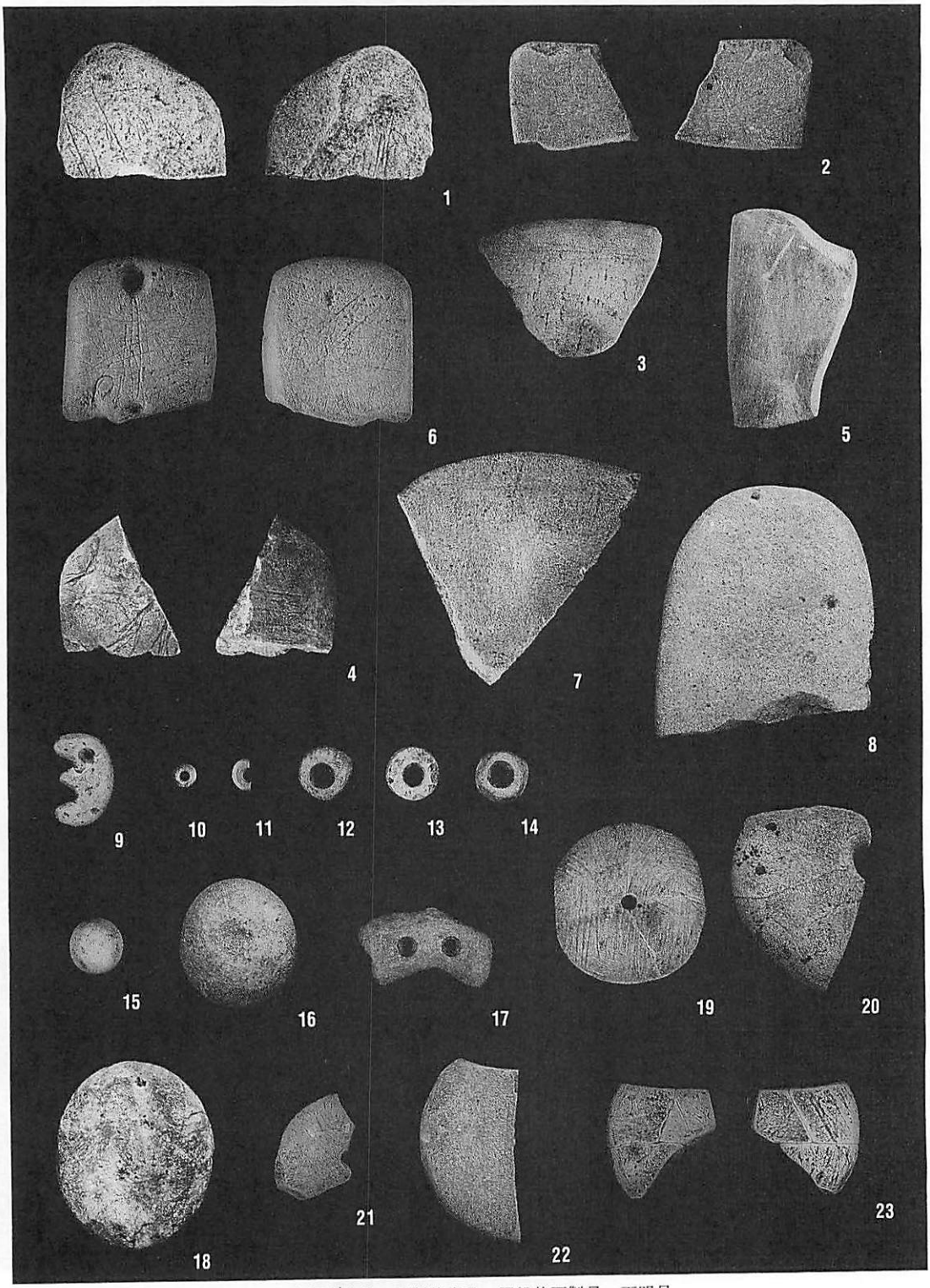


岩偶・2（縮尺：2分の1）

1：第5例，2：第6例，3：第8例，4：第9例，5：第10例.

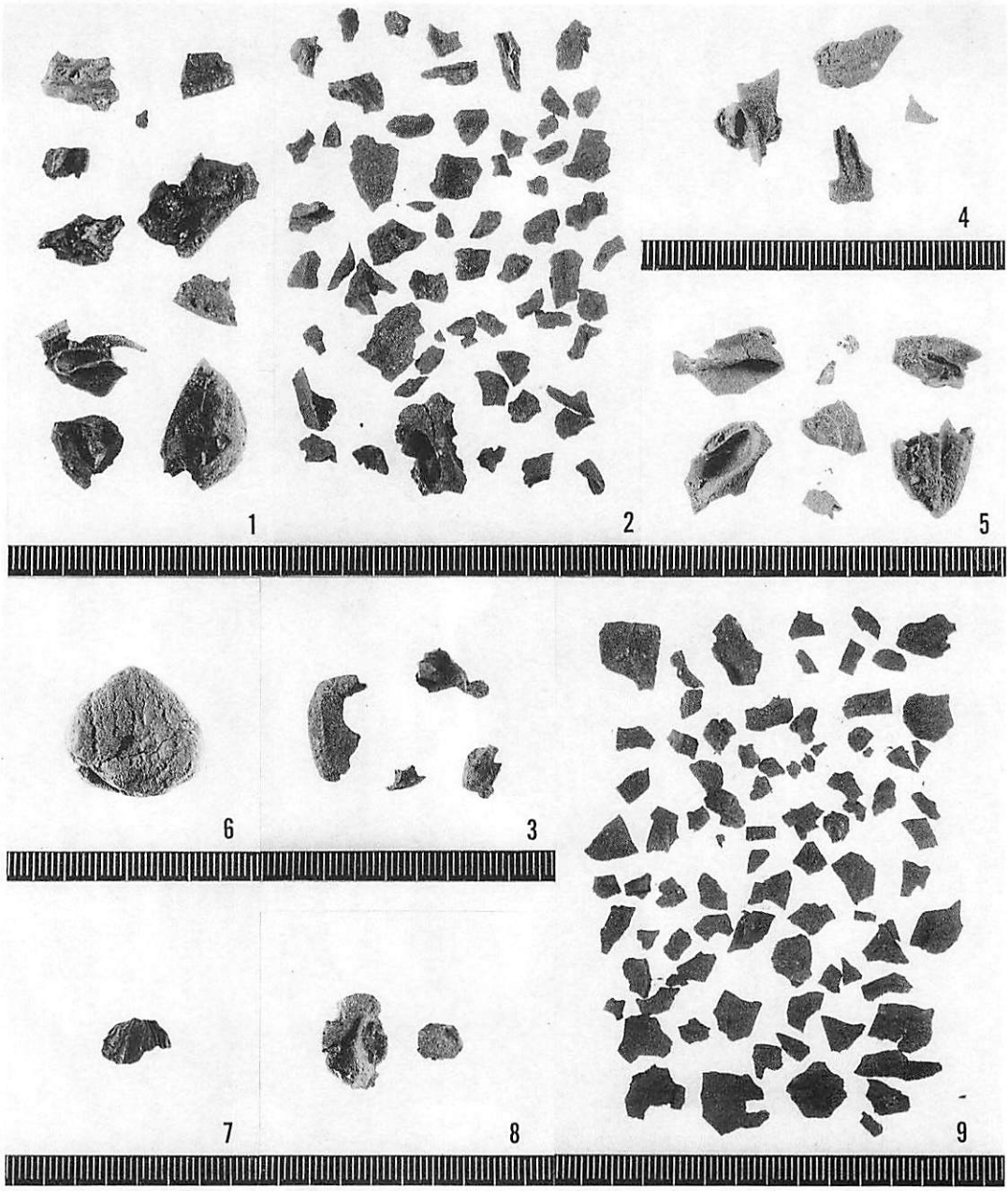


岩版(縮尺：3分の2．番号は本文参照)



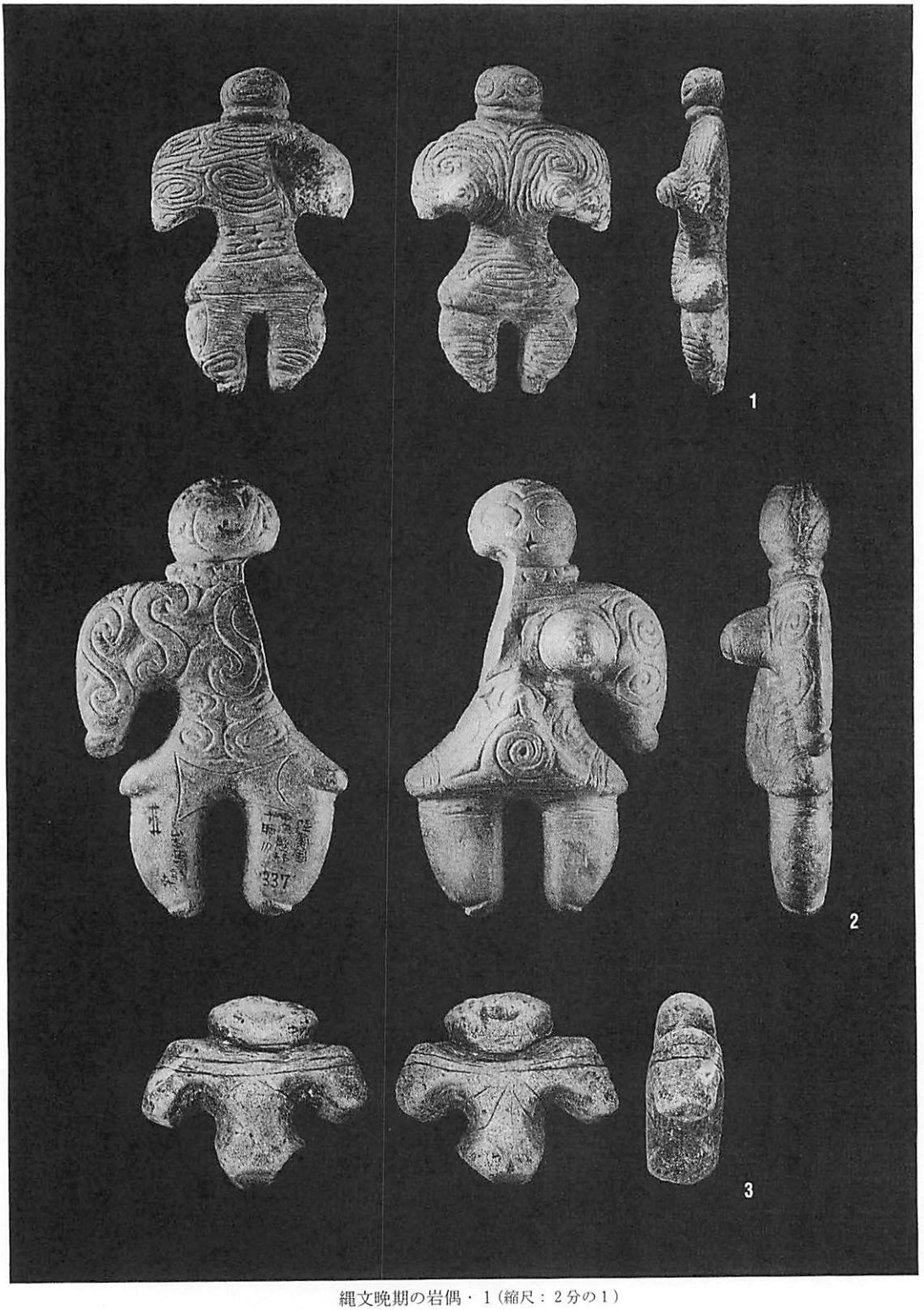
岩版未成品・石製装身具・円盤状石製品・不明品

1～8：岩版未成品，9～14：石製装身具，19～23：円盤状石製品，15～17：不明品．



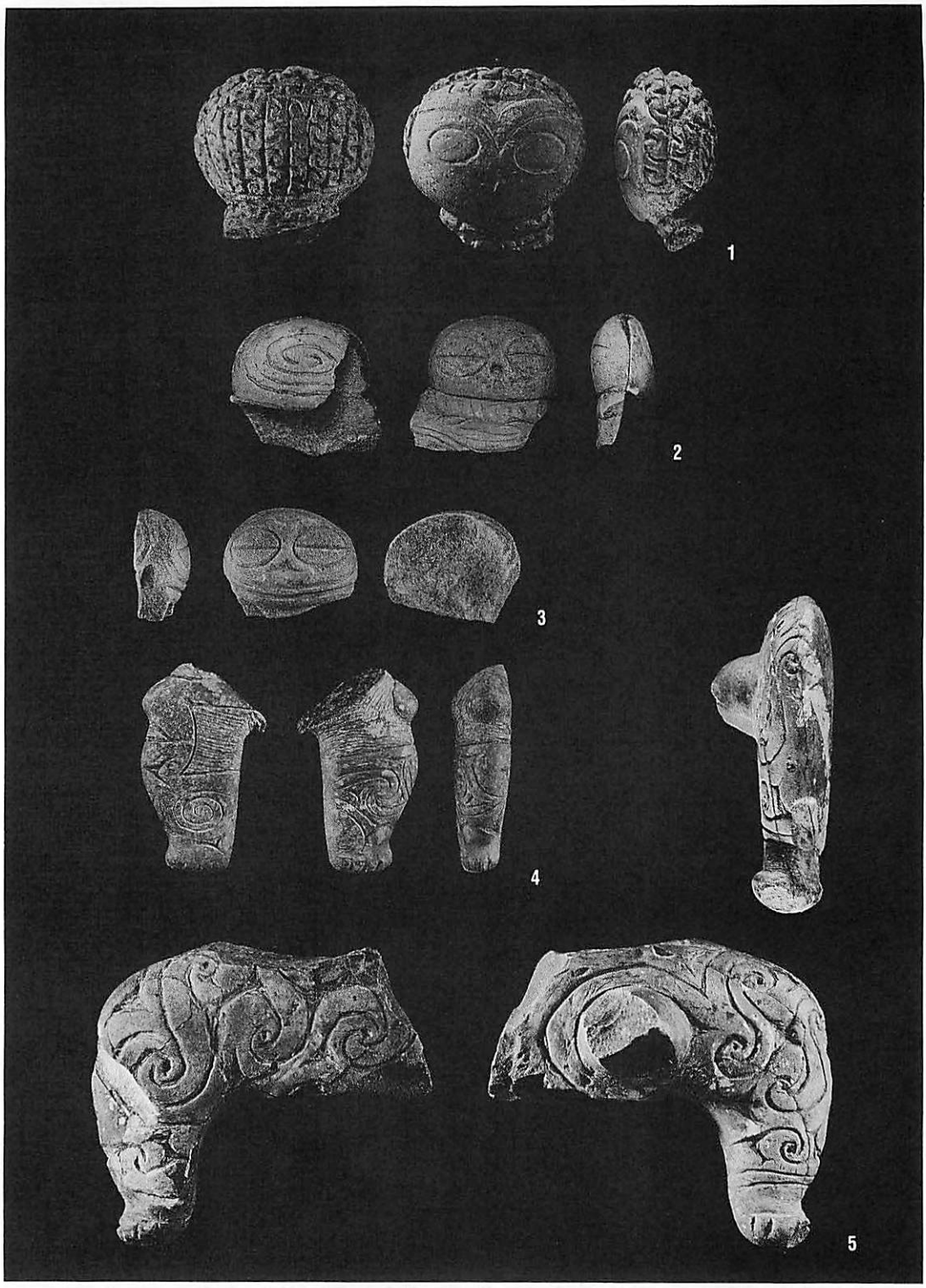
植物遺体(縮尺：実大)

1～5：オニグルミ核，6・7：クリ子葉，8：トチ子葉，9：同種皮.



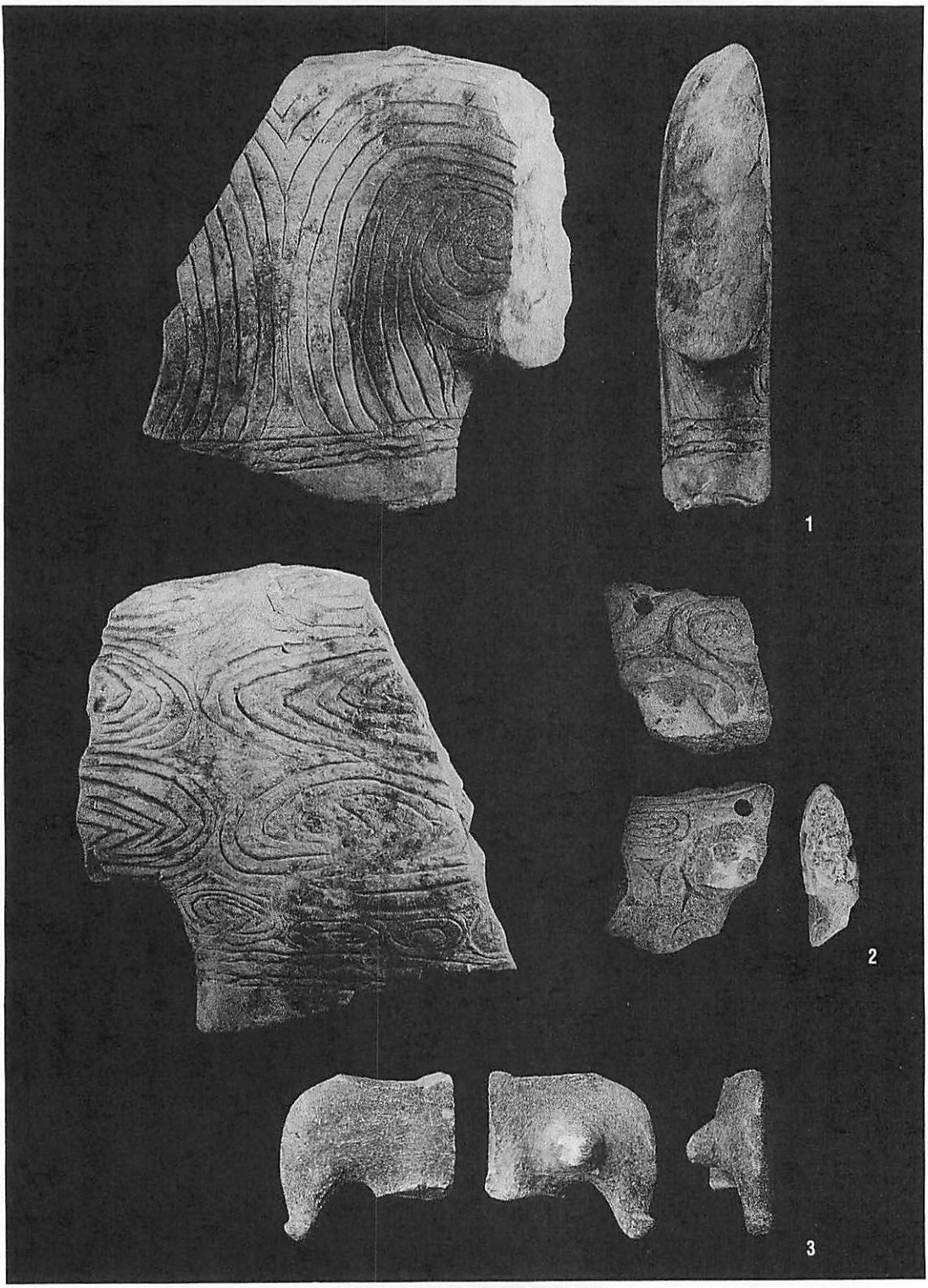
縄文晩期の岩偶・1（縮尺：2分の1）

1：青森県観音林遺跡，2：同十腰内遺跡，3：同新城岡町遺跡.



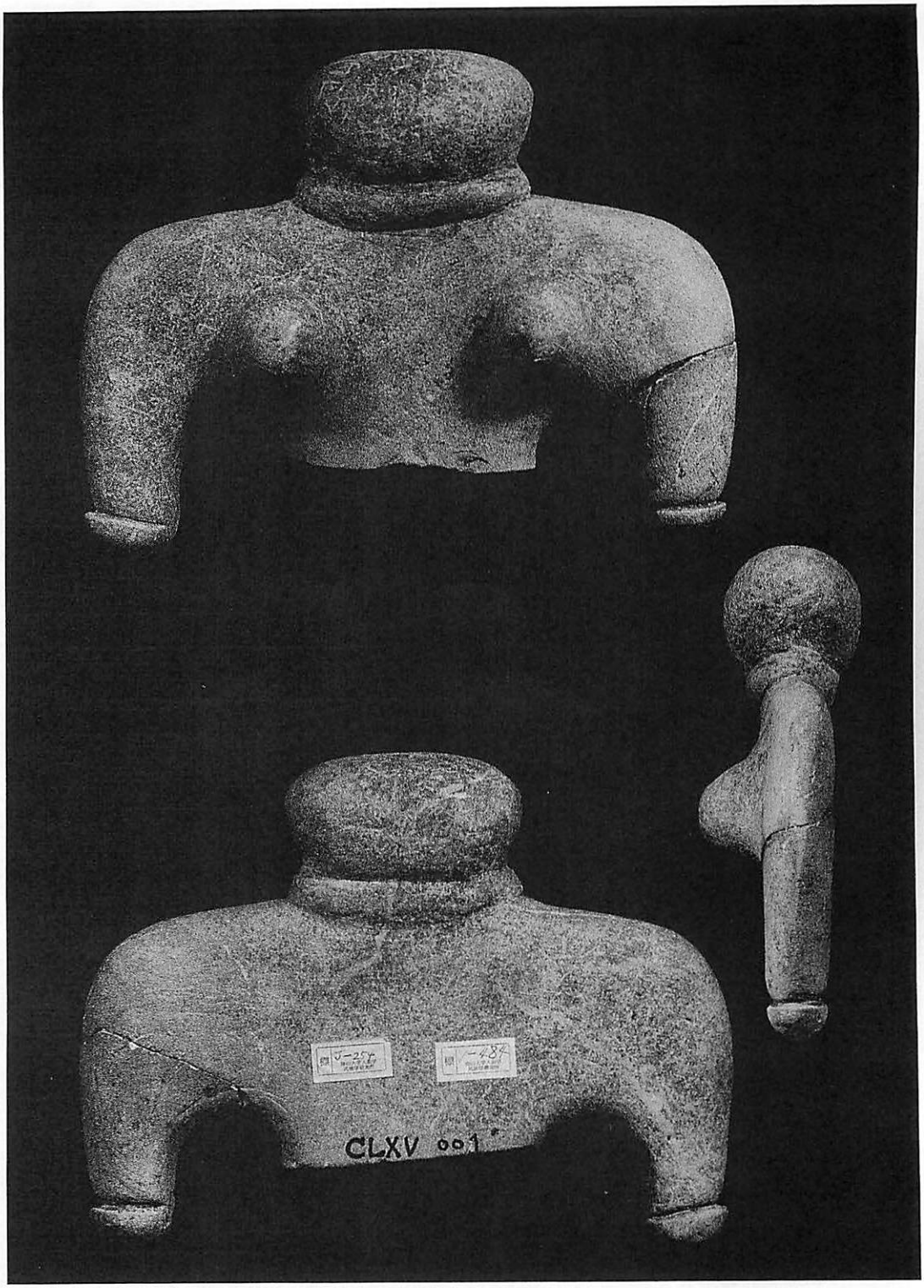
縄文晩期の岩偶・2（縮尺：2分の1）

1：青森県道地遺跡，2：同明戸遺跡，3：同是川遺跡第1例，4：同第2例，5：同虚久蔵遺跡.

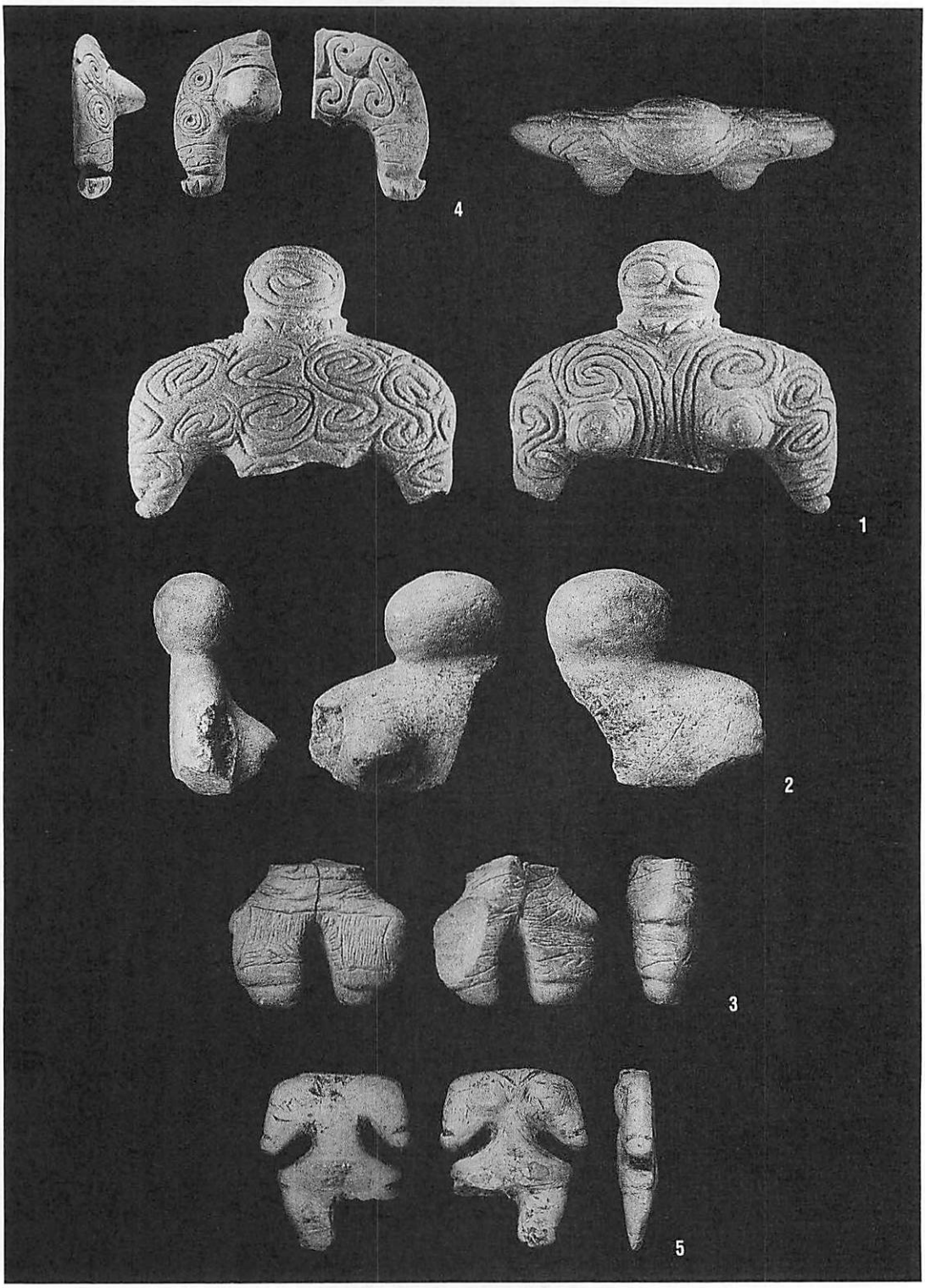


縄文晩期の岩偶・3（縮尺：2分の1）

1：青森県是川遺跡第3例，2：同八幡遺跡，3：同鳥沢遺跡第5例.

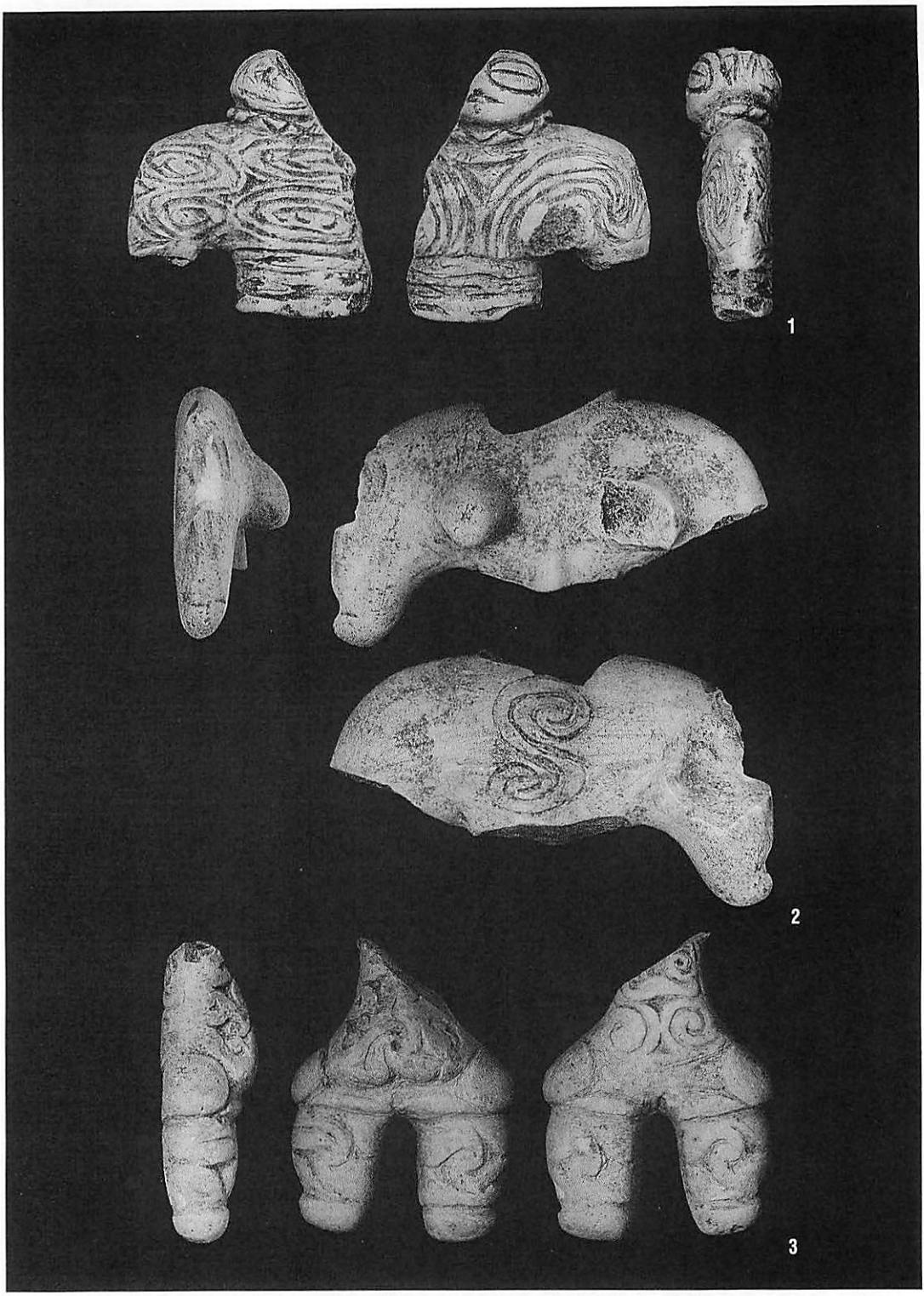


縄文晩期の岩偶・4（縮尺：2分の1）
青森県鰺沢遺跡第2例.



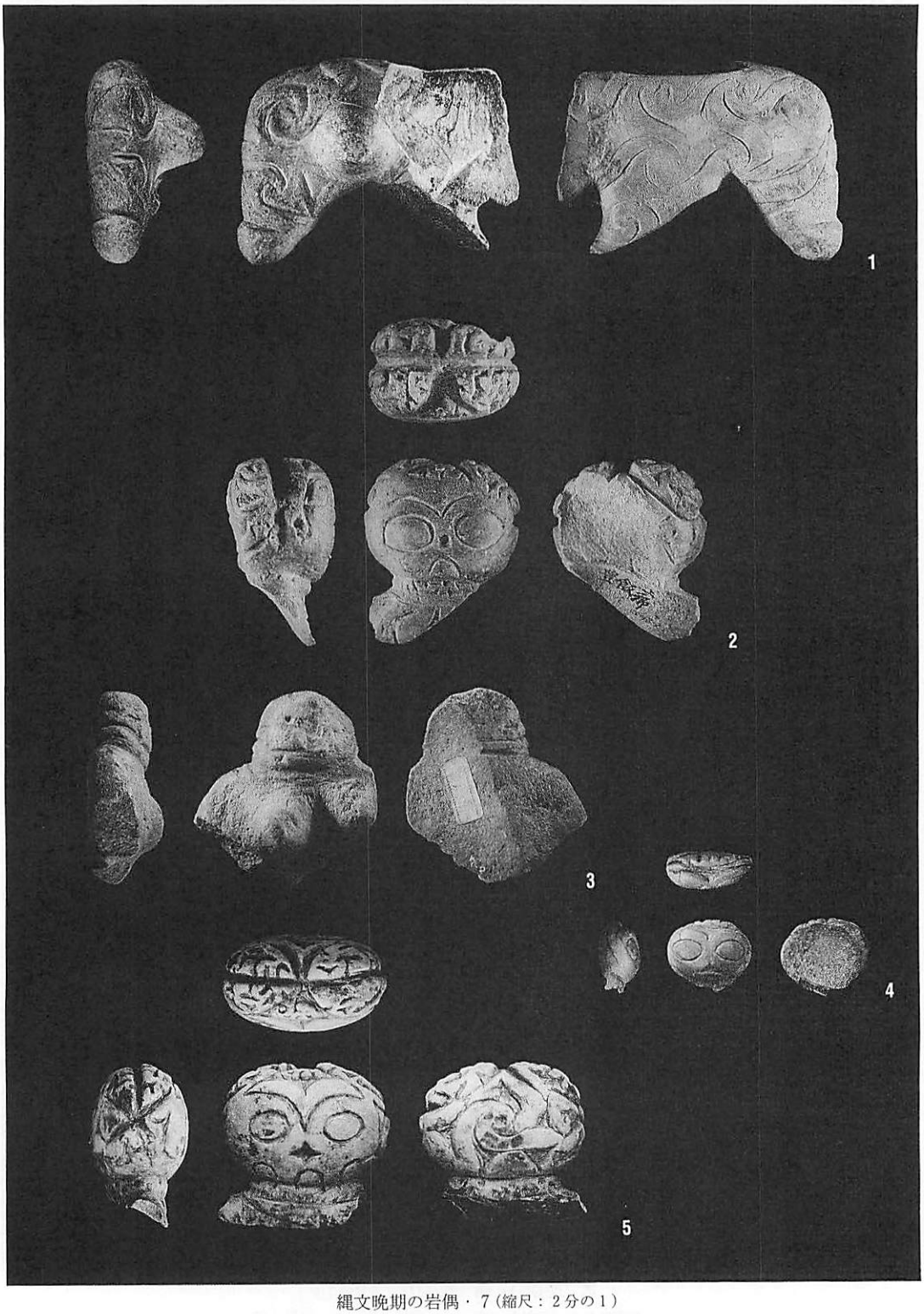
縄文晩期の岩偶・5（縮尺：2分の1）

1：青森県鱒沢遺跡第1例，2：同第3例，3：同第4例，4：同杉沢遺跡，5：同野面平遺跡第1例.



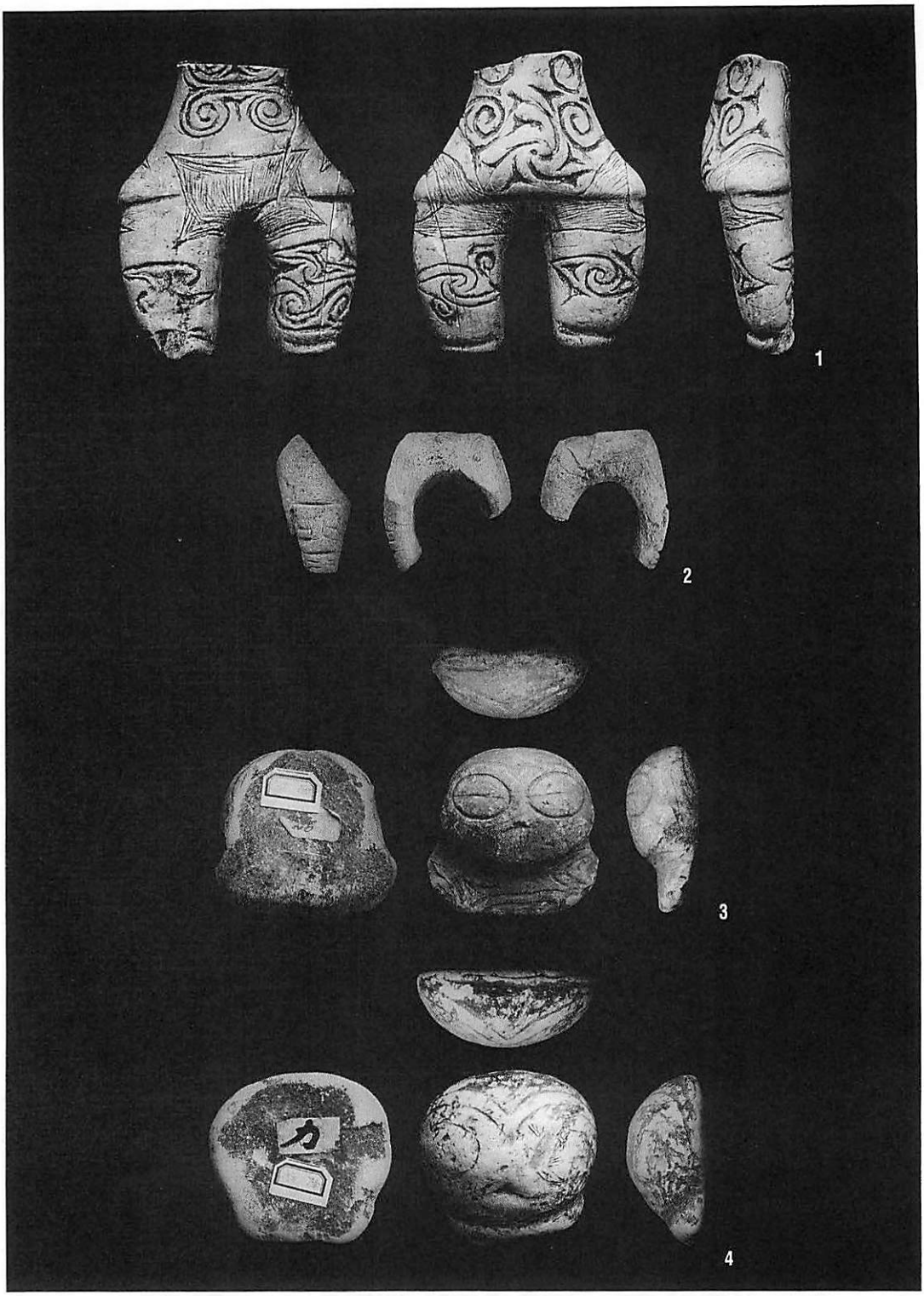
縄文晩期の岩偶・6（縮尺：2分の1）

1：青森県野面平遺跡第2例，2：同第3例，3：同第4例.



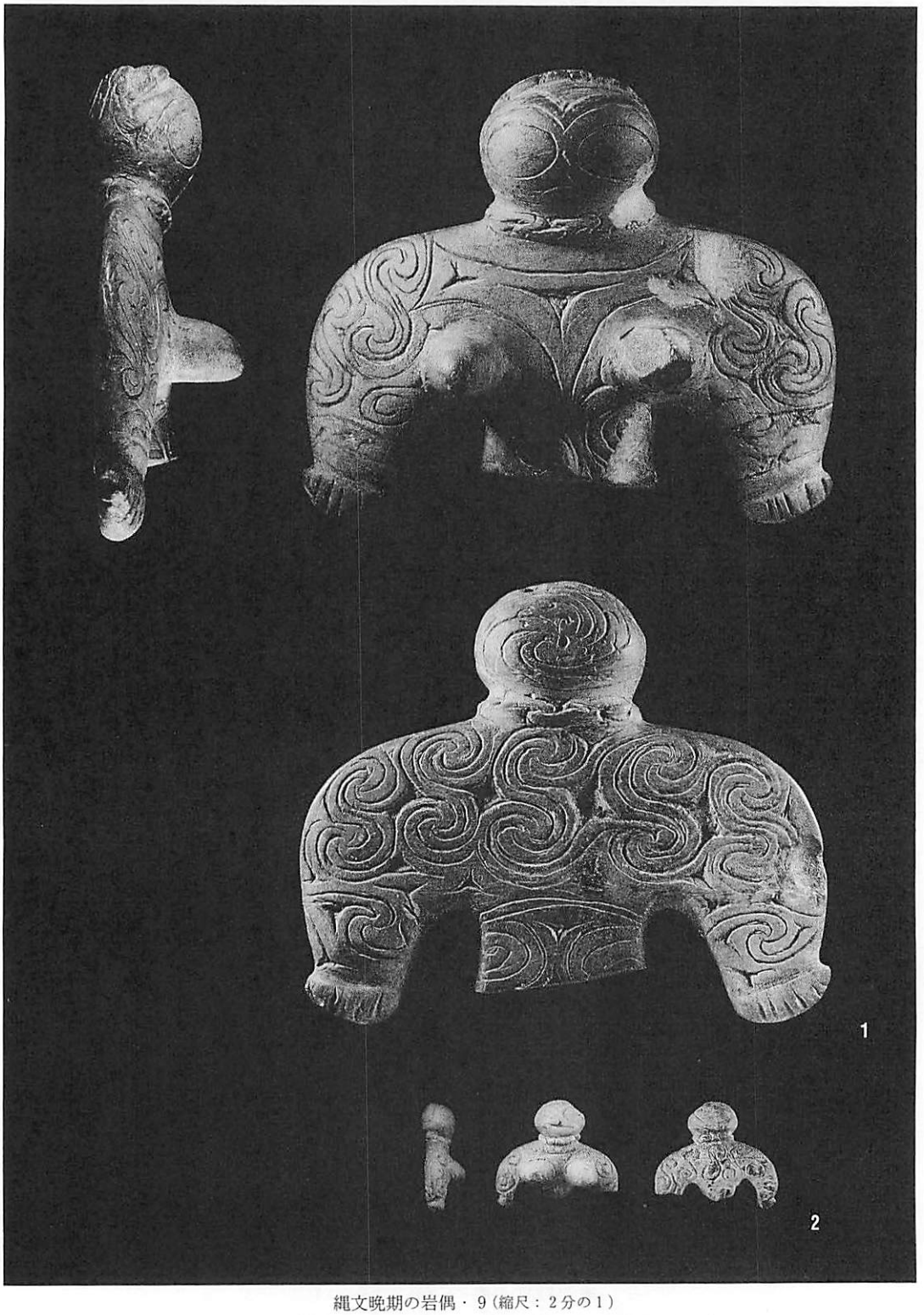
縄文晩期の岩偶・7（縮尺：2分の1）

1：青森県飯豊遺跡第1例，2：同第2例，3：同道前遺跡，4：岩手県雨滝遺跡，5：同蒔前台遺跡.

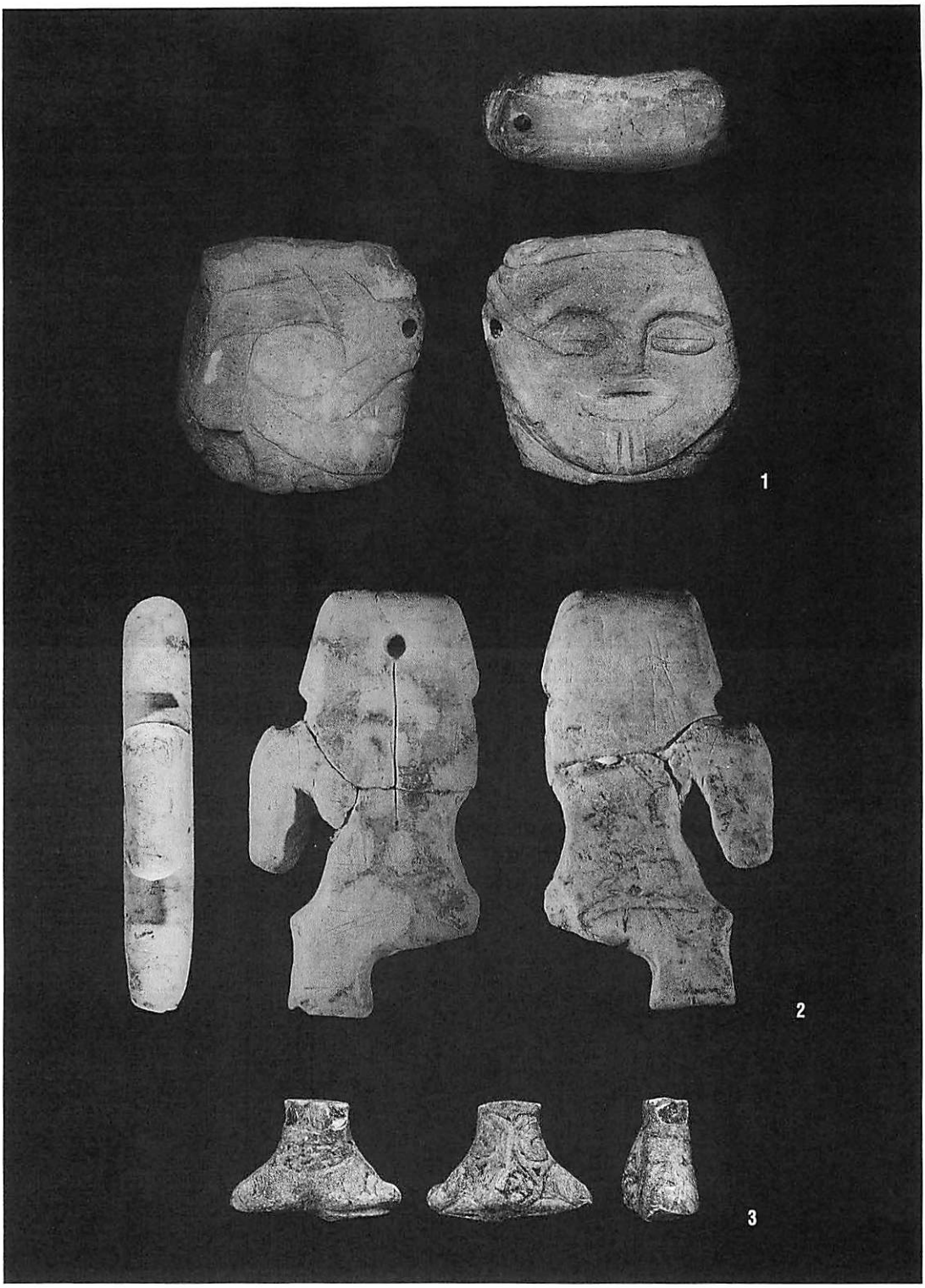


縄文晩期の岩偶・8（縮尺：2分の1）

1：岩手県金沢屋敷遺跡，2：同萪内遺跡，3：秋田県尾去沢遺跡第1例，4：同第2例．



縄文晩期の岩偶・9（縮尺：2分の1）
1：岩手県粟綿遺跡，2：不明第2例.



縄文晩期の岩偶・10(縮尺：2分の1)

1：秋田県藤株遺跡，2：宮城県根岸遺跡，3：不明第3例.

角田文衛先生を囲み記念撮影

〔後列左より〕

梅咲　直照，加藤　裕教，中村　良幸，桐野　克則，坪多　正裕，長谷川　豊，宮内　克己，鈴木　忠司．

〔中列左より〕

上羽　明美，淀川　協子．

〔前列左より〕

佐藤　　洋，西井　芳子(平安博物館秘書室長)，(故)高梨仁三郎(㈶高梨学術奨励基金理事長 東京コカ・コーラボトリング㈱社長)，角田　文衛(平安博物館館長兼教授)，渡辺　　誠，弘田　善子．